



PUBLIC (公開)

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム
ドキュメントバージョン: 4.3 Support Package 4 – 2023-12-07

Business Intelligence プラットフォーム CMC ヘルプ

目次

1	セントラル管理コンソール.....	15
1.1	セントラル管理コンソールについて.....	15
1.2	CMC へのログオン.....	15
1.3	CMC での移動.....	16
1.4	CMC の基本設定の設定.....	17
2	システム設定ウィザード.....	18
2.1	システム設定ウィザードの概要.....	18
2.2	使用する製品の指定.....	18
2.3	デプロイメントテンプレートの選択.....	20
2.4	データフォルダの場所の指定.....	22
2.5	変更の確認.....	23
2.6	ログファイルおよび応答ファイル.....	23
	応答ファイルの使用.....	24
3	ユーザとグループの管理.....	28
3.1	Enterprise および通常のアカウントの管理.....	28
	ユーザアカウントを作成する.....	28
	ユーザアカウントを変更する.....	29
	ユーザアカウントを削除する.....	30
	新規グループを作成する.....	30
	グループのプロパティを変更する.....	31
	グループメンバーを表示する.....	31
	サブグループを追加する.....	31
	グループメンバーシップを指定する.....	32
	ユーザまたはユーザグループを一括して追加する.....	32
	グループを削除する.....	33
	Guest アカウントを有効にする.....	33
	ユーザグループに [カスタマイズ] タブを追加する.....	34
	グループへのユーザの追加.....	34
	パスワード設定を変更する.....	36
	信用できる認証の有効化.....	37
	ユーザおよびグループへのアクセスの許可.....	39
	ユーザの受信ボックスへのアクセスの制御.....	39
	CMC でのユーザグループの BI ラウンチパッド基本設定の設定.....	39
	CMC でのユーザグループの Fiorified BI ラウンチパッドの基本設定.....	41
3.2	エイリアスの管理.....	43

	ユーザを作成しサードパーティエイリアスを追加する.....	43
	既存のユーザの新しいエイリアスを作成する.....	44
	別のユーザのエイリアスを割り当てる.....	44
	エイリアスを削除する.....	45
	エイリアスを無効化する.....	46
4	アクセス権の設定.....	47
4.1	CMC でのオブジェクトのセキュリティ設定の管理.....	47
	オブジェクトの主体のセキュリティを表示する.....	47
	オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てる.....	48
	オブジェクトの主体のセキュリティを変更する.....	48
	BI プラットフォームの最上位フォルダにアクセス権を設定する.....	49
	主体のセキュリティ設定の確認.....	49
4.2	アクセスレベルの使用.....	52
	表示およびオンデマンド表示アクセスレベルの選択.....	54
	既存のアクセスレベルをコピーする.....	55
	新しいアクセスレベルを作成する.....	55
	アクセスレベルの名前を変更する.....	56
	アクセスレベルを削除する.....	56
	アクセスレベルの権限を変更する.....	56
	アクセスレベルとオブジェクト間の関係のトレース.....	57
	サイト間でのアクセスレベルの管理.....	58
4.3	継承の破棄.....	59
	継承を無効にする.....	60
5	認証.....	61
5.1	概要.....	61
	BI プラットフォームの認証オプション.....	61
5.2	Enterprise 認証.....	61
	Enterprise 認証.....	61
	Enterprise 認証の設定.....	62
5.3	LDAP 認証.....	64
	LDAP 認証.....	64
	LDAP サーバまたは相互認証の SSL 設定.....	68
	SiteMinder での LDAP プラグインの設定.....	72
	LDAP グループのマッピング.....	73
5.4	Windows AD 認証.....	75
	Windows AD 認証.....	75
	Windows AD セキュリティプラグイン.....	76
	Windows AD 認証を設定する.....	77
	Windows AD グループをマップする.....	80
5.5	SAP 認証.....	82

	SAP 認証	82
	SAP 権限認証システムへの接続	83
	SAP 認証オプションの設定	84
	SAP ロールのインポート	88
	Secure Network Communication との統合のためのワークフロー	91
5.6	Oracle EBS 認証	93
	Oracle EBS 認証	93
	Oracle EBS 認証の有効化	93
	BI プラットフォームへの Oracle E-Business Suite ロールのマップ	94
	Oracle EBS ロールとユーザの更新	97
5.7	JD Edwards Enterprise One 認証	99
	JD Edwards EnterpriseOne 認証	99
	JD Edwards EnterpriseOne 認証の有効化	99
	BI プラットフォームへの JD Edwards EnterpriseOne ロールのマップ	100
5.8	PeopleSoft Enterprise 認証	104
	PeopleSoft Enterprise 認証	104
	PeopleSoft Enterprise 認証の有効化	105
	BI プラットフォームへの PeopleSoft ロールのマップ	106
5.9	Siebel 認証	110
	Siebel 認証	110
	Siebel 認証の有効化	111
	BI プラットフォームへのマッピング	112
5.10	X.509 認証	116
	BI ラウンチパッドの X.509 認証	116
	Web サービスの X.509 認証	124
	CMC の X.509 認証	127
5.11	OpenID 接続認証	129
	OpenID 接続認証の有効化	129
6	ユーザ属性の管理	131
6.1	システムユーザの属性の管理	131
6.2	複数の認証オプションに対するユーザ属性の優先順位付け	132
6.3	新しいユーザ属性を追加する	132
6.4	カスタマイズされたユーザ属性を編集する	133
7	マルチテナント	135
7.1	CMC でのテナントの管理	135
	テナントプロパティを設定する	135
	テナントのユーザグループにアクセス権を割り当てる	137
	テナントのユーザグループの管理	138
	テナントを削除する	139
8	ライセンスの管理	141

8.1	ライセンスキーの管理.....	141
	ライセンス情報を表示する.....	141
	ライセンスキーを追加する.....	141
	現在のアカウントの利用状況を表示する.....	142
9	サーバの管理.....	143
9.1	CMC の[サーバ]管理エリアの使用.....	143
9.2	サーバのステータスを表示する.....	146
9.3	CMC でサーバを起動、停止、または再起動する.....	146
9.4	サーバを自動的に起動する.....	146
9.5	CMC でサーバを有効/無効にする.....	147
9.6	サーバの追加.....	147
9.7	サーバをクローンする.....	148
9.8	サーバの削除.....	148
9.9	カスタムインターネットヘッダの追加.....	148
9.10	非排他的サーバグループを登録する.....	149
9.11	サーバグループにサブグループを追加する.....	150
9.12	サーバグループを他のサーバグループのメンバーにする.....	150
9.13	サーバグループのアクセス権の管理の理解.....	151
9.14	サーバのグループメンバーシップを変更する.....	156
9.15	サーバのプロパティを変更する.....	157
9.16	設定テンプレートを設定する.....	157
9.17	設定テンプレートをサーバに適用する.....	158
9.18	システムデフォルトを復元する.....	158
9.19	サーバメトリクスを表示する.....	159
9.20	システムメトリクスを表示する.....	159
9.21	Job Server で出力先を有効/無効にする.....	159
9.22	サーバブレースホルダを表示する.....	160
9.23	ノードのブレースホルダを表示および編集する.....	160
9.24	Job Server の出力先プロパティを設定する.....	161
	受信ボックスの出力先のプロパティ.....	161
	電子メールの出力先のプロパティ.....	162
	FTP の出力先のプロパティ.....	164
	SFTP の出力先のプロパティ.....	164
	ファイルシステムの出力先プロパティ.....	165
9.25	本稼働システムの Adaptive Processing Server の設定.....	166
10	Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) の管理.....	167
10.1	Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS).....	167
10.2	デプロイメントへの WACS の追加または削除.....	167
	WACS のインストール.....	167
	新しい Web アプリケーションコンテナサーバの追加.....	168

	Web アプリケーションコンテナサーバのクローン	169
	デプロイメントからの WACS の削除	170
10.3	WACS に対するサービスの追加または削除	170
	WACS に Web アプリケーションまたは Web サービスを追加する	170
	WACS から Web アプリケーションまたは Web サービスを削除する	171
10.4	AD Kerberos 用の WACS を設定する	171
10.5	WACS AD Kerberos シングルサインオンを設定する	172
10.6	HTTPS/SSL を設定する	172
10.7	WACS と IT 環境	174
	WACS とリバースプロキシの併用	174
	マルチホームマシンに WACS を設定する	175
10.8	トラブルシューティング	176
	サーバメトリクスを表示する	176
	WACS の状態を表示する	176
	ポート競合の解決	176
	同時要求の数を変更する	177
	ユーザによる HTTP 経由の WACS へのアクセスを禁止する	178
11	アプリケーションの管理	179
11.1	概要	179
11.2	一般設定	180
	アプリケーションに対するユーザアクセス権の設定	180
	CMC の Web アプリケーショントレースログレベルを設定する	180
11.3	アプリケーション設定	181
	CMC タブアクセスの管理	181
	BI ラUNCHパッド設定の管理	188
	Web Intelligence の設定の管理	190
	Crystal Reports の設定の管理	192
	セントラル管理コンソールの設定の管理	192
	BI Commentary アプリケーション設定の管理	196
	ごみ箱設定の管理	199
	アラート設定の管理	200
	ウィジェット設定の管理	202
	SAP BusinessObjects Mobile 設定の管理	203
	SAP BusinessObjects Mobile でのプッシュ通知サービスの管理	206
	プラットフォーム検索設定の管理	207
	BEx Web 統合の設定	214
	SAP HANA シングルサインオンの設定	219
	SAP Lumira の設定の管理	224
	コラボレーション設定の管理	224
	ディスカッション設定の管理	228
	認可サーバの設定	231

	情報分類設定	234
12	データソースと接続の管理	236
12.1	接続の管理	236
	ユニバース接続を削除する	236
12.2	ユニバースの管理	237
	ユニバースを削除する	237
13	ホットバックアップの管理	239
13.1	ホットバックアップ	239
	ホットバックアップを有効にする	240
14	フォルダ	241
14.1	フォルダ	241
	フォルダの作成	241
	フォルダの削除	241
	フォルダのコピーまたは移動	242
	フォルダレベルでのレポートインスタンスの制限	242
	受信ボックスでのドキュメントの制限	243
15	カテゴリ	244
15.1	カテゴリの使用	244
	カテゴリの作成	244
	カテゴリの削除	244
	カテゴリの移動	244
	カテゴリへのオブジェクトの追加	245
	カテゴリからのオブジェクトの除去または削除	245
	ユーザの個人用カテゴリの表示	246
	カテゴリへの複数のオブジェクトの追加	246
16	オブジェクトの管理	247
16.1	デフォルト設定	247
16.2	CMC におけるオブジェクトの追加	249
16.3	オブジェクトをコピーする	249
16.4	オブジェクトを移動する	250
16.5	オブジェクトショートカットを作成する	250
16.6	オブジェクトを削除する	251
16.7	1つまたは複数のオブジェクトを検索する	251
16.8	オブジェクトまたはインスタンスを出力先に送信する	252
16.9	オブジェクトのプロパティを変更する	253
16.10	オブジェクトの関係をチェックする	253
16.11	新しいハイパーリンクを作成する	253
17	レポート	255

17.1	レポートの最新表示オプションの選択.	255
17.2	Crystal レポートのレポート表示オプションの選択.	255
17.3	オブジェクトの処理用デフォルトサーバの選択.	255
17.4	Crystal レポートでのデータベース設定の変更.	256
17.5	Crystal レポートのデフォルトパラメータ値を変更する.	257
17.6	Web Intelligence ドキュメントのプロンプトの更新.	257
17.7	フィルタの使用.	258
17.8	Crystal レポートのプリンタの選択.	258
17.9	Crystal レポートおよび PDF オブジェクトのページレイアウトオプションの選択.	259
17.10	レポートへの処理拡張機能の割り当て.	260
17.11	Crystal レポートの最初のページのサムネイル画像の表示.	260
17.12	BI リポジトリへのレポートの追加およびハイパーリンクの追加.	261
17.13	Web Intelligence ドキュメントのユニバースの表示.	261
17.14	Crystal レポートでのアラート表示.	261
18	プログラムオブジェクト.	262
18.1	コマンドライン引数の指定.	262
18.2	プログラムオブジェクトの作業ディレクトリの設定.	262
18.3	プログラムオブジェクトのデフォルトの作業ディレクトリの変更.	262
18.4	外部ファイルまたは補助ファイルへのパスの指定.	263
18.5	File Repository Server への外部ファイルまたは補助ファイルのアップロード.	263
18.6	環境変数の追加.	264
18.7	Java プログラムの必須パラメータの指定.	264
18.8	Java プログラムが他のファイルにアクセスできるようにする設定.	265
18.9	プログラムオブジェクトのユーザアカウントの指定.	265
19	オブジェクトパッケージ.	266
19.1	新しいオブジェクトパッケージを作成する.	266
19.2	新しいオブジェクトをオブジェクトパッケージに追加する.	266
19.3	オブジェクトパッケージのコンポーネントエラーオプションを設定する.	266
20	スケジュール.	268
20.1	オブジェクトのスケジュール.	268
	定期スケジュールパターン.	269
	定期的なスケジュールパターンの実行オプション.	269
20.2	デフォルトの Enterprise の場所へのオブジェクトのスケジュール.	271
20.3	ファイルの場所に対するオブジェクトのスケジュール.	271
20.4	FTP サーバへのオブジェクトのスケジュール.	272
20.5	SFTP サーバへのオブジェクトのスケジュール.	273
20.6	電子メールに対するオブジェクトのスケジュール.	274
	SMTP over SSL のセットアップ.	275
20.7	ユーザの BI 受信ボックスに対するオブジェクトのスケジュール.	275

20.8	Job Server の出力先の有効化または無効化	276
20.9	イベントの発生に基づくオブジェクトのスケジュール	276
20.10	イベントを発生させるオブジェクトのスケジュール	277
20.11	インスタンスに対する成功または失敗の通知の設定	278
20.12	アラート通知の設定	278
20.13	出力ファイル形式の選択	279
20.14	Web Intelligence ドキュメントのキャッシュ形式の選択	279
20.15	個々のユーザに対するレポートオブジェクトのスケジュール	280
20.16	スケジュール済みオブジェクトでのサーバまたはサーバグループの選択	280
20.17	オブジェクトのインスタンスの管理	281
20.18	インスタンスマネージャ	282
20.19	インスタンスの表示	282
20.20	インスタンスの一時停止	283
20.21	一時停止インスタンスの再開	283
20.22	インスタンスの削除	283
20.23	インスタンスに対する制限の設定	283
20.24	複数オブジェクトの即時実行	284
20.25	レポートインスタンスの言語を選択する	284
21	カレンダー	286
21.1	カレンダーの作成	286
21.2	カレンダーへの日付の追加	286
21.3	カレンダーの削除	287
22	イベント	288
22.1	イベントについて	288
	ユーザ通知	289
22.2	イベントとスケジュール	292
	ファイルベースのイベントの作成	294
	スケジュールベースのイベントの作成	294
	カスタムイベントの作成	295
	カスタムイベントの呼び出し	295
23	アラート	296
23.1	CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索	296
23.2	イベントのアラートの有効化	296
23.3	アラートの購読	297
23.4	アラートの購読解除	298
23.5	他のユーザのアラートの購読	298
23.6	他のユーザのアラートの購読の解除	299
23.7	アラートからのユーザの除外	299
23.8	アラートソースのアラート設定の管理	299

24	プロフィール.....	301
24.1	プロフィールの作成.....	301
24.2	プロフィールへのグローバルプロフィールターゲットの指定.....	301
24.3	ユーザまたはグループにプロフィール値を指定する.....	301
24.4	プロフィール値としての変数の使用.....	302
25	BI 管理スタジオ.....	304
25.1	管理コックピット.....	305
	管理コックピット.....	305
	BI のサーバ.....	306
	ドキュメントインスタンスに関する BI.....	307
	BI のユーザとセッション.....	308
	BI におけるコンテンツの使用.....	308
	BI のアプリケーション.....	309
25.2	モニタリング.....	309
	ダッシュボード.....	310
	グラフ.....	312
	プローブ.....	313
	監視.....	325
	メトリクス.....	331
	アラート.....	333
	モニタリングデータのレポートの生成.....	335
25.3	Visual Difference.....	335
	Visual Difference を使用してオブジェクトまたはファイルを比較する.....	335
	バージョン管理システムを使用してオブジェクトまたはファイルを比較する.....	337
	比較をスケジュールする.....	337
26	監査.....	339
26.1	概要.....	339
26.2	CMC 監査ページ.....	345
	監査ステータス.....	345
	監査イベントの設定.....	347
	監査データストア設定.....	351
27	プラットフォーム検索.....	353
27.1	プラットフォーム検索.....	353
	CMC でのアプリケーションプロパティの設定.....	353
	インデックス処理失敗一覧.....	360
	ユーザセキュリティ権限の設定.....	360
	オブジェクトのスケジュール.....	363
28	フェデレーションの使用.....	365
28.1	フェデレーション.....	365

28.2	フェデレーションの用語	366
28.3	セキュリティアクセス権の管理	367
	レプリケート元サイトで必要な権限	368
	レプリケート先サイトで必要な権限	369
	フェデレーション固有の権限	369
	オブジェクトに対するセキュリティの複製	371
	アクセスレベルを使用したセキュリティの複製	371
28.4	レプリケーションの種類とモードのオプション	372
	一方向レプリケーション	372
	双方向レプリケーション	372
	[レプリケート元から最新表示]または[レプリケート先から最新表示]	373
28.5	サードパーティユーザとグループの複製	374
28.6	ユニバースおよびユニバース接続の複製	375
28.7	リモート接続の管理	376
	リモート接続の作成	377
	リモート接続の変更	378
28.8	レプリケーションジョブの管理	379
	レプリケーションジョブの作成	379
	レプリケーションジョブをスケジュールする	381
	レプリケーションジョブの変更	381
	レプリケーションジョブ後のログの表示	382
28.9	オブジェクトのクリーンアップの管理	383
	オブジェクトのクリーンアップ方法	383
28.10	競合の検出と解決の管理	384
	一方向レプリケーションの競合の解決	384
	双方向レプリケーションの競合の解決	386
28.11	フェデレーションでの Web サービスの使用	389
	セッション変数	389
	ファイルのキャッシュ	390
	カスタムデプロイメント	390
28.12	リモートスケジュールおよびローカルで実行したインスタンス	391
	リモートスケジュール	391
	ローカルで実行したインスタンス	393
	インスタンス共有	393
28.13	複製したコンテンツのインポートと昇格	394
	複製したコンテンツのインポート	394
	複製したコンテンツのインポートとレプリケーションの継続	395
	テスト環境からのコンテンツの昇格	396
	レプリケート先サイトの再指定	396
28.14	ベストプラクティス	397
	現在のリリースの制限	400

	エラーメッセージのトラブルシューティング.....	401
29	レプリケーション一覧の管理.....	406
29.1	レプリケーション一覧の管理.....	406
	レプリケーション一覧の作成.....	407
	レプリケーション一覧の変更.....	408
30	パブリケーション.....	410
30.1	デザインタスク.....	410
	CMC でのパブリケーションの作成.....	410
	編集用のパブリケーションを開く.....	410
	パブリケーションでの一般プロパティの定義.....	411
	ソースドキュメントの追加.....	411
	Enterprise 受信者の選択.....	412
	動的受信者の選択.....	413
	パブリケーションの出力先の選択.....	414
	定期的なパターンの選択.....	415
	パブリケーションソースドキュメントのパーソナライズされたプレースホルダの選択.....	418
	電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダの選択.....	418
	電子メールへの動的ソースドキュメントのコンテンツの埋め込み.....	419
	CMC におけるパブリケーション拡張の追加.....	420
	CMC におけるパブリケーションジョブに対する電子メール通知の有効化.....	420
	CMC におけるパブリケーションジョブに対する監査通知の有効化.....	421
	パブリケーションを起動するイベントの選択.....	422
	パブリケーションでのサーバグループの選択.....	422
	CMC におけるプロファイルの解決方法の選択.....	423
	CMC におけるレポートバースト方法の選択.....	423
30.2	Crystal レポートのデザインタスク.....	423
	パラメータ値を使用した Crystal レポートのパーソナライズ.....	423
	フィールドのフィルタリングによる Crystal レポートのパーソナライズ.....	424
	Crystal レポートのパブリケーション形式の選択.....	425
	(オプション) パブリケーションの Crystal レポートでの印刷オプションの選択.....	432
	(オプション) パブリケーションでの Crystal Reports レポートの受信者配信ルールの選択.....	433
	(オプション) パブリケーションのグローバル配信ルールの選択.....	433
	(オプション) Crystal レポートからの結合 PDF ファイルの書式設定.....	433
	Crystal Reports レポートのデータベースログオン情報の設定.....	435
30.3	Web Intelligence ドキュメントのデザインタスク.....	436
	Web Intelligence ドキュメントのパブリケーション形式の選択.....	436
	グローバルプロファイルターゲットを使用する Web Intelligence ドキュメントのパーソナライゼーション.....	436
	フィールドのフィルタリングによる Web Intelligence ドキュメントのパーソナライズ.....	437
	オブジェクトに対するパラメータ (プロンプト) 値の編集.....	438

30.4	デザイン後タスク	438
	パブリケーションのテスト	438
	パブリケーションの実行のスケジュール	439
	パブリケーションからの購読または購読解除	441
	パブリケーションインスタンスからの購読または購読解除	441
	パブリケーションインスタンスの再配布	441
	失敗したパブリケーションの再試行	442
31	アクセス権に関する付録	443
31.1	付録 - 権限について	443
31.2	全般の権限	443
	出力先権限	447
31.3	特定のオブジェクトの種類のアクセス権	448
	フォルダのアクセス権	448
	カテゴリ	448
	Crystal レポート	448
	Web Intelligence ドキュメント	449
	ユーザとグループ	450
	アクセスレベル	451
	ユニバース (.unv) のアクセス権	452
	ユニバース (.unx) のアクセス権	453
	ユニバースオブジェクトのアクセスレベル	455
	接続のアクセス権	456
	アプリケーション	457
32	サーバのプロパティに関する付録	465
32.1	サーバのプロパティに関する付録について	465
	共通サーバのプロパティ	465
	コアサービスのプロパティ	467
	接続サービスのプロパティ	478
	Crystal Reports サービスのプロパティ	482
	Analysis サービスのプロパティ	490
	データフェデレーションサービスのプロパティ	491
	Web Intelligence サービスのプロパティ	491
33	サーバのメトリクスに関する付録	499
33.1	サーバのメトリクスに関する付録について	499
	一般的なサーバのメトリクス	499
	Central Management Server のメトリクス	501
	Connection Server のメトリクス	504
	Event Server のメトリクス	504
	File Repository Server のメトリクス	505

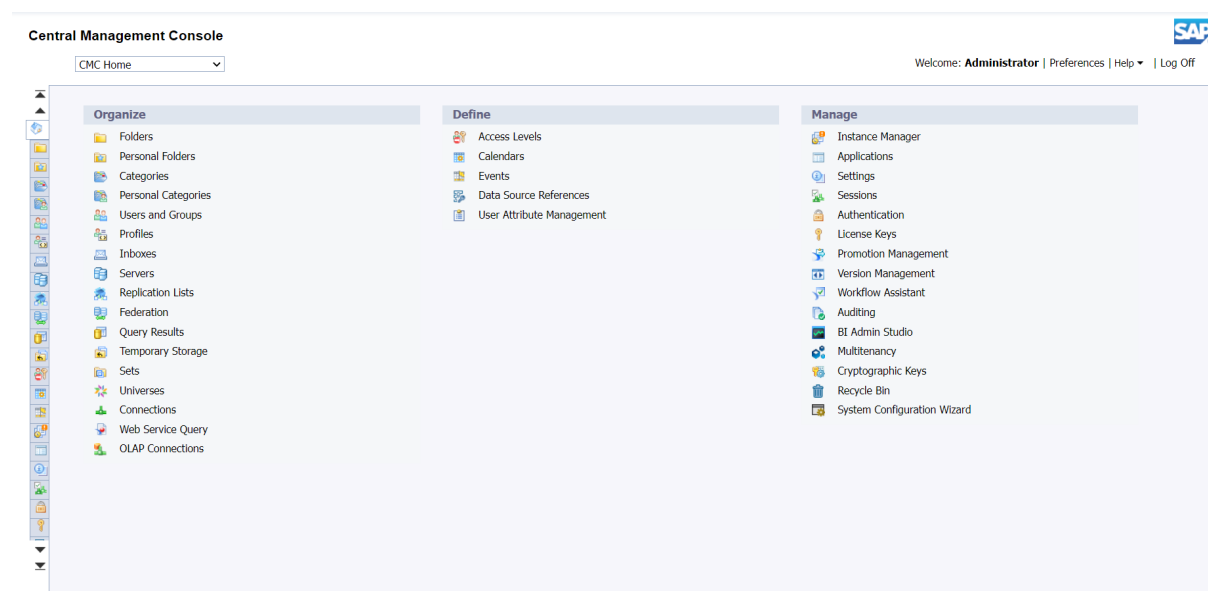
	Adaptive Processing Server のメトリクス	505
	Web アプリケーションコンテナサーバのメトリクス	509
	Adaptive Job Server のメトリクス	510
	Crystal Reports Server のメトリクス	511
	Web Intelligence サーバのメトリクス	513
34	サーバブレースホルダ	515
34.1	サーバとノードブレースホルダ	515
35	暗号キーの管理	524
35.1	CMC での暗号化キーの管理	524
	暗号化キーのステータス	524
	暗号化キーに関連付けられているオブジェクトを表示する	525
35.2	新しい暗号化キーを作成する	526
35.3	システムから暗号化キーを削除する	526
35.4	暗号化キーを無効化する	527
35.5	暗号化キーを改ざんありにする	527
36	プロモーション管理	529
36.1	プロモーション管理	529
	プロモーションマネジメントへようこそ	529
	プロモーションマネジメントツールを使用する前に	531
	プロモーションマネジメントツールの使用	541
	プロモーションマネジメントツールを使用するリポジトリのフルコンテンツの昇格	561
	システム全体の昇格ステップ	563
	コマンドラインオプションの使用	567
	拡張移送/修正システムの使用	592
	プロモーション管理ウィザードの使用	602
36.2	バージョン管理	615
	異なるバージョンの BI リソースを管理する	615
	バージョン管理システムとして Apache Subversion を使用する	617
	同じジョブの異なるバージョンを比較する	617
	Subversion コンテンツをアップグレードする	618

1 セントラル管理コンソール

1.1 セントラル管理コンソールについて

セントラル管理コンソール (CMC) は Web ベースのツールで、ユーザ管理、コンテンツ管理、サーバ管理など日常的な大部分の管理タスクを実行するのに使用できます。

Business Intelligence (BI) プラットフォームの有効な認証情報を持つすべてのユーザが、CMC にログインして基本設定を実行できます。Administrators グループに属していないユーザは、タスクのアクセス権を持っていないと管理タスクを実行できません。



CMC にアクセスする方法は 2 つあります。ブラウザからアクセスするか、または Windows で **プログラム > SAP Business Intelligence > SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 > SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** を選択します。

1.2 CMC へのログイン

ユーザは、セントラル管理コンソール (CMC) の 1 つのセッションのみにログインできます (別のブラウザのタブまたはウィンドウで、複数の CMC セッションを実行することはできません)。

1. ブラウザで、CMC の URL を入力します。

デフォルト URL は、<http://<WebServer>:8080/BOE/CMC/> です。ただし、デプロイメントによっては、カスタム URL が設定されている場合があります。

<WebServer>には Web サーバマシンの名前を指定します。Web サーバ上のデフォルトの仮想ディレクトリを変更した場合は、その URL を入力します。必要に応じて、デフォルトのポート番号を、インストール時に指定した番号に変更します。

2. システムボックスに Central Management Server (CMS) の名前を入力します。
3. 組織の管理者が初めて CMC にアクセスする場合は、ユーザ名として **Administrator** と入力し、インストール中に作成したデフォルトのパスワードを入力します。
初回後は、ユーザ名とパスワードを入力します。

LDAP 認証を使用している場合は、Administrator グループにマップされたアカウントを使用してログオンできます。

4. [認証の種類] の一覧で、[Enterprise] を選択します。

Windows AD、LDAP、およびその他の認証方法がリストに表示されます。ただし、これらを使用するには、サードパーティのユーザアカウントとグループが BI プラットフォームにマップされている必要があります。

5. [ログオン] をクリックします。

CMC が起動し、CMC ホームウィンドウが表示されます。

① 注記

ユーザがブラウザを閉じると、ユーザセッションがリリースされます。

今後は、Windows で ► スタート ► すべてのプログラム ► SAP Business Intelligence ► SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 ► SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール の順に選択して、CMC を起動します。CMC が Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) にホストされている場合は、► スタート ► すべてのプログラム ► SAP Business Intelligence ► SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 ► SAP BusinessObjects BI プラットフォーム WACS セントラル管理コンソール の順に選択します。

1.3 CMC での移動

次の 2 種類の方法でセントラル管理コンソール (CMC) を移動できます。

- ウィンドウの左側にあるアイコンをクリックするか、[整理]、[定義]、または [管理] のリンクをクリックします。
- ウィンドウの左上隅にある [CMC ホーム] リストのオプションを選択します。

選択した移動先に多くの子オブジェクトがある場合、ツリービューにすべての子オブジェクトが表示されない可能性があります。このような場合は、ページ区切りのオブジェクトリストを使用して、子オブジェクトを見つけることができます。

1.4 CMC の基本設定の設定

セントラル管理コンソール (CMC) の[基本設定](#)エリアでは、BI プラットフォームの管理ビューをカスタマイズできます。CMC の基本設定セットは、CMC および BI ラUNCHパッド両方でのオブジェクトの動作に影響します。

CMC の基本設定は、デフォルトでは、プラットフォームおよびラUNCHパッドに適用されます。ただし、ユーザは BI ラUNCHパッドで個人用の基本設定を実行できます。この個人用の基本設定は、BI プラットフォームが新しいソフトウェアバージョンまたはパッチを使用して更新されるまで、CMC の基本設定を上書きします。プラットフォームのあらゆる更新は、すべての基本設定を、CMC のデフォルト設定にリセットします。

ユーザが、BI プラットフォームで 2 つ以上のユーザグループに属している場合、BI ラUNCHパッドには、1 つのグループ用に設定された基本設定のみが表示されます。

1. CMC にログインして、CMC ウィンドウの右上隅の[基本設定](#)をクリックします。
2. [基本設定](#)ダイアログボックスで、必要に応じて基本設定オプションを設定し、[保存して閉じる](#)をクリックします。

2 システム設定ウィザード

2.1 システム設定ウィザードの概要

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームのインストール後、デプロイメントテンプレートの選択や、組織で使用する SAP BusinessObjects 製品を選択などの必要なインストール後設定を実行します。この設定を行い、可能な限り短時間で BI プラットフォームを稼働させるには、[システム設定ウィザード]を実行します。

ウィザードを使用する利点は次のとおりです。

- ウィザードによって、必要な設定ステップの説明およびガイドが提供されます。
- ウィザードを使用すると、システムが間違っ設定される可能性が軽減されます。
- ウィザードによって自動的に設定が実行されるため、システム設定を迅速化できます。

デフォルトで、ウィザードはユーザがセントラル管理コンソール (CMC) にログインすると自動的に実行されるように設定されていますが、CMC の [管理] エリアからウィザードを開始することもできます。いつでもウィザードを再実行して設定を調整したり、CMC の [サーバ] 管理ページを使用して、ウィザードで行った設定を含む任意の設定を微調整することができます。

① 注記

セキュリティ強化のため、ウィザードにアクセスできるのは Administrators グループのメンバーのみです。

① 注記

ウィザードが自動的に実行されないようにするには、“Administrator” ユーザはウィザードの最初のページにある [CMC の起動時にこのウィザードを表示しない] チェックボックスを選択します。

① 注記

アドオンをインストールしたり、BI プラットフォームデプロイメントにノードを追加したりする予定がある場合は、システム設定ウィザードを実行する前にこれらの手順を実行することをお勧めします。

2.2 使用する製品の指定

組織で使用する製品を指定することで BI プラットフォームサーバの設定を簡単にしたり、組織で使わない製品用のサーバを停止することでリソースの割り当てを最適化することができます。これを行うには、[製品] ページで製品を選択します。組織で使用する製品を指定すると、ウィザードはすべてのサーバおよびそれらの製品の実行に必要な依存サーバを開始し、BI プラットフォームを起動するとそれらのサーバおよび依存サーバも自動的に起動するように設定します。また、使わない製品を選択解除することにより、BI プラットフォームの起動にかかる時間およびリソース使用量が改善されます。

たとえば、Crystal Reports 製品を選択すると、BI プラットフォームはすべての Crystal Reports サーバと該当する依存サーバを起動します。

各製品で自動的に起動されるサーバの一覧については、製品名の横にある [?] アイコンをクリックしてください。

ウィザードでは、以下のようにして製品のサーバが設定されます。

- 製品を選択すると、ウィザードの完了時にその製品に属するすべてのサーバとその製品が機能するために必要なその他のサーバ (依存サーバ) が起動します。また、製品を選択すると、その製品のサーバが BI プラットフォームと一緒に自動的に起動するように設定されます。サーバが複数の製品のサービスをホストしている場合、サーバは、それらの製品のいずれかが選択されると起動します。選択していない製品のサービスが起動する場合がありますが、これはそのサービスも、選択されている製品のサービスをホストしているサーバにホストされているためです。
- 製品の選択を解除すると、その製品が使用するサーバが停止します。ただし、そのサーバが現在も選択されている製品のサービス、またはコアサービスカテゴリに属するサービスをホストしている場合を除きます。停止された製品サーバは、BI プラットフォームと一緒に自動起動されないように設定されます。サーバが選択されている製品と選択解除された製品の両方のサービスをホストしている場合、そのサーバは起動したままになります。
- 製品を選択解除したときにその製品に属さないサーバが停止することがありますが、これは選択解除された製品にのみ使用されている依存サービスがあるためです。これらの依存サーバが不要になるため、これによりリソースが解放されます。
- 製品を選択または選択解除するたびに、BI プラットフォームのコアサービスカテゴリに属するサービス (WACS がホストするサービスを除く) をホストするすべてのサーバが自動的に起動します。WACS は現在の状態を維持します。
- 製品を選択解除しても、その製品のファイルがアンインストールまたは削除されるわけではありません。

[製品] ページを開くたびに、このページの製品状態に現在のシステム状態が表示されます。

製品のすべてのサーバが起動している場合は、その製品のチェックボックスが選択されます。製品のすべてのサーバが停止している場合は、チェックボックスがクリアされます。製品の一部のサーバのみが実行されており、他のサーバがその他の状態 (停止など) である場合、[製品] ページには [既存の設定を維持する] チェックボックスが表示され、システムがウィザードを使用せずに設定されたことを示します。ウィザードを使用して設定を変更する場合は、チェックボックスをクリアできます。

① 注記

[製品] ページには、クラスタにインストールされているすべての製品が表示されます。たとえば、マシン A に製品 P1 および P2 がインストールされ、マシン B に製品 P2 および P3 がインストールされている場合、[製品] ページには P1、P2、および P3 が表示されます。インストールされていない製品は、[製品] ページに表示されません。

① 注記

デプロイメントの単純化のため、このページの設定はクラスタ全体に適用されるようになっており、各ノードで設定を繰り返す必要はありません。

① 注記

設定が以前に CMC で変更されている場合は、設定がウィザードを使用せずに変更されていることを示すメッセージがウィザードに表示されます。既存の設定を保持するか、現在の設定を上書きするかを選択できます。

① 注記

ウィザードで行った変更は、[確認] ページの [適用] をクリックするまで適用されません。

変更の操作が終了したら、[次へ] をクリックしてウィザードの次のページに進みます。左側にあるナビゲーションパネルを使用して、すでに使用した任意のページに直接ジャンプすることもできます。

2.3 デプロイメントテンプレートの選択

BI プラットフォームのデフォルトインストールでは、制限されたシステムハードウェア上のデモ環境に適した小規模なデプロイメントが設定されます。ご使用のハードウェアおよび用途 (テストシステムまたは本稼働システムの準備など) に適合するように、[容量] ページから定義済みデプロイメントテンプレートのいずれかを選択してください。これらのテンプレートは、BI プラットフォームシステムを迅速に稼働させ、最初のデプロイメント時間を短縮することを目的としています。

適切なデプロイメントテンプレートを選択することは、初期設定に役立ち、良いスタート地点にはなりますが、これによってシステムのサイズ設定とチューニングを実行する必要がなくなるわけではありません。最適なパフォーマンスを実現するため、サイズ設定に関するガイド (<http://www.sap.com/bisizing>) を参照して、システムのサイズ設定を行ってください。

適切なデプロイメントテンプレートの選択が重要な理由は以下のとおりです。

- システムの要求処理能力は、ユーザが選択するデプロイメントテンプレートに影響されます。デプロイメントの規模が大きいほど処理能力が向上し、より多くの要求または複雑な要求を処理できます。しかし、デプロイメントの規模が大きくなるほどより多くのシステムリソースが必要になります。
- 大規模なデプロイメントを選択しても、パフォーマンスが向上する保証はありません (特に、十分なハードウェアリソースがない場合)。
- 選択するデプロイメントテンプレートは、ビジネスのニーズおよび使用可能なハードウェアリソースに見合ったものである必要があります。ビジネスニーズに対して小さすぎたり、使用可能なハードウェアリソースに対して大きすぎるデプロイメントテンプレートを選択すると、システムの容量およびパフォーマンスが低下する可能性があります。
- 大規模なデプロイメントテンプレートではより効果的なパーティション分割を行うことができるため、1つの製品で発生した障害が他の製品に影響する可能性が少なくなります。リソース (RAM) の使用量とパフォーマンスのバランスが取れたテンプレートを選択してください。たとえば、大量の RAM が使用可能である場合は、RAM で可能な最大のデプロイメントテンプレートを選択することをお勧めします。これにより、システムを効果的にパーティション分割できます。

スライダを使用してデプロイメントテンプレートを選択するか、ドロップダウンリストから RAM の容量を選択できます。設定を変更する際には、[Adaptive Processing Servers の数] インジケータが変化し、選択しようとしている設定によってシステムがどのように設定されるかを確認できます。

① 注記

選択するデプロイメントテンプレートは Adaptive Processing Servers (APS) にのみ影響します。CMS または Adaptive Job Servers などのその他のサーバは影響を受けません。

① 注記

[RAM 必須] は、BI プラットフォームサーバで最低限必要な RAM 容量です。たとえば、RAM が 16 GB のマシンにおいてオペレーティングシステムで 1 GB、データベースサーバで 1 GB、および BI プラットフォームサー

バで 10 GB の RAM を使用している場合、必要な RAM は 12 GB や 16 GB ではなく 10 GB になります。[RAM 必須] の数値は、一般的な値を示したものにすぎません。システムの負荷が大きいときには、より多くの RAM が必要な場合があります。最適なシステムパフォーマンスを実現するには、常にシステムのサイズ設定を行う必要があります。

① 注記

システム状態が定義済みのデプロイメントテンプレートのいずれかに一致している場合、[容量] ページを開くたびに、ページ上にデプロイメントテンプレートに現在のシステム状態が表示されます。たとえば、CMC を使用して手動で追加の Adaptive Processing Server を作成している場合、現在のシステム状態はデプロイメントテンプレートのいずれにも一致しません。そのため、[容量] ページには、システムがウィザードを使用せずに設定されたことを示す [既存の設定を維持する] チェックボックスが表示されます。複数ノードデプロイメントでは、一部のノードの APS 数がデプロイメントテンプレートと一致しない場合や、ノードごとに APS 数が異なる場合にも [既存の設定を維持する] チェックボックスが表示されます。ウィザードを使用して設定を変更する場合は、チェックボックスをクリアできます。

① 注記

デプロイメントの単純化のため、選択した APS 設定は各ノードに適用されるようになっており (ノードに APS がインストールされている場合)、ノード数が増えるほどクラスターの容量が大きくなります。

① 注記

アドオン (たとえば、Data Services または Analysis Application Design Service (AADS)) は、ウィザードでは管理されません。アドオンで作成されたサービスは、ウィザードによって異なる APS に移動されることはありません。

例

- メインの BI プラットフォームインストールから他のサービスをホストする APS によって AADS がホストされている場合、ウィザードを実行して、デプロイメントテンプレートサイズを XS から M に変更すると、ウィザードは、新しい APS を 7 個作成し、最初の APS に残る AADS サービス以外のすべてのサービスを 7 個の APS に移動します。
- Data Services のアドオンによって、専用の APS が作成されます。ウィザードでは、この専用 APS を変更されません。また、システム内の APS 数のレポート時に、この APS がカウントされることもありません。

DeploymentTemplates.pdf ファイル

ウィザードによるデプロイメントテンプレートの設定に関する詳しい説明については、[容量] ページで [デプロイメントテンプレート] リンクをクリックして、DeploymentTemplates.pdf ファイルを開きます。

DeploymentTemplates.pdf ファイルにはデプロイメントテンプレートの詳細な説明が記載されています。テンプレートでは、サポートされるユーザ数は指定しません。これは、サポート可能なユーザ数は負荷によって異なるためです。サポートが必要なユーザ数、およびそれに伴う RAM 容量、CPU 要件などを決定するためにはシステムのサイズ設定を行う必要があります。

2.4 データフォルダの場所の指定

[[フォルダ](#)] ページを使用して、BI プラットフォームのデータおよびログファイルを保存する場所を指定します。フォルダの場所を指定するか、現在の場所を受け入れることができます。

BI プラットフォームデプロイメントに複数のノードがある場合は、フォルダの場所を定義するのに次の 2 つのオプションを使用できます。

- すべてのノードについて同じフォルダの場所を設定する場合は、[[すべてのノードのフォルダの場所は同じです](#)] オプションを選択します。
- クラスタ内のすべてのサーバが同じように設定されていない場合は、インストールパスまたはファイルディレクトリ構造が異なる可能性があります。[[ノードでフォルダの場所が異なります](#)] オプションを選択すると、ノードごとに固有のフォルダの場所を設定できます。

ウィザードで [[フォルダ](#)] ページを開くたびに、以下のフォルダ名が表示されます。

- すべてのノードのフォルダの値が同一（つまり、クラスタのすべてのサーバのログフォルダや、クラスタのすべてのサーバのデータフォルダなどが同一）である場合は、[[すべてのノードのフォルダの場所は同じです](#)] オプションが選択され、現在のフォルダ名が表示されます。
- 各ノード内の特定のタイプ（ログ、データ、監査、入力ファイルストア、出力ファイルストア）のすべてのフォルダが同一であるがノード間で異なる場合は、[[ノードでフォルダの場所が異なります](#)] オプションが選択され、現在のフォルダ名が表示されます。
- 各ノード内の特定のタイプのすべてのフォルダが同一ではなく、ノード間でも異なる場合は、[[ノードでフォルダの場所が異なります](#)] オプションが選択され、フォルダ名は空白になります。

フォルダの場所を変更する場合は、ウィザードによってシステムが新しいフォルダを使用するように設定されます。ウィザードでは、監査データフォルダを除き、元のフォルダのコンテンツを新しいフォルダにコピーまたは移動しません。新しいフォルダに正しいコンテンツがまだ含まれていない場合、または元のフォルダにあるデータを移行する必要がある場合は、それらのデータを新しいフォルダに移動またはコピーしてください。

入力ファイルストア、出力ファイルストア、およびデータフォルダについては、新しいフォルダの場所が空である場合は、元のフォルダの場所からファイルを手動でコピーするか、バックアップからファイルを復元する必要があります。ログフォルダの場合は、元のフォルダの場所に存在するログファイルが新しいフォルダに必要な場合にのみファイルをコピーします。

→ ヒント

新しいフォルダにファイルをコピーまたは復元する場合は、ノードを再起動する前に行ってください。

シナリオ例:

- フォルダの場所を変更する際に元のフォルダにレポートが含まれている場合は、それらのレポートを新しいフォルダにコピーしてノードを再起動しないと BI プラットフォームで使用することはできません。
- 元のフォルダのレポートが壊れているか変更されており、これを以前の良好なバックアップの状態に戻す必要がある場合は、元のフォルダからコンテンツをコピーせずに、バックアップからレポートを取得してそれらを新しいフォルダに配置します。
- データファイルが当初ドライブ文字 X のディスク上にあり、これをオペレーティングシステムのドライブ文字 Y に変更する場合は、データファイルをコピーまたは移動する必要はありません。BI プラットフォームでフォルダの場所を変更するだけで済みます。

フォルダの場所の一部を手動で変更してノード上のサーバ間で異なるフォルダを使用するようにしている場合、[[フォルダ](#)] ページには [[既存の設定を維持する](#)] チェックボックスが表示され、システムがウィザードを使用せず

に設定されたことを示します。たとえば、同じノードの2つの File Repository Server が異なるログフォルダパスを使用するように設定することができます。ウィザードを使用して現在の設定を変更する場合は、チェックボックスをクリアできます。

各フォルダに格納されるファイルの種類の詳細については、[\[?\]](#) アイコンをクリックしてください。

① 注記

以下のいずれかのフォルダの場所を変更する場合は、ウィザードの完了後、変更内容を有効化するためにすべてのノードを手動で再起動する必要があります。

- 入力ファイルストア
- 出力ファイルストア
- ログフォルダ
- データフォルダ

2.5 変更の確認

設定の選択の終了後、BI プラットフォームシステムに変更が適用される前に、それらの設定が確認用に [\[確認\]](#) ページに表示されます。設定のカテゴリごとに、[\[詳細\]](#) をクリックして、適用される設定および変更の詳細説明または一覧を確認できます。

設定を変更する場合は、ウィザードの左側にあるナビゲーションメニューから個別のページに直接アクセスできます。

選択内容はログファイルに保存され、[\[完了\]](#) ページからダウンロードできます。

また、応答ファイルも生成され保存されます。応答ファイルはシステム設定を自動化するのに役立ちます。[\[ダウンロード\]](#) ボタンをクリックして、応答ファイルを表示したり、ローカルディスクにダウンロードしたりすることができます。

[\[適用\]](#) をクリックすると、設定が BI プラットフォームデプロイメントに適用されます。ウィザードが完了すると、[\[完了\]](#) ページが開き、手動で実行する必要がある次のステップが表示されます。

関連情報

[ログファイルおよび応答ファイル \[23 ページ\]](#)

2.6 ログファイルおよび応答ファイル

[\[完了\]](#) ページでは変更のステータスを確認したり、セッションのログおよび応答ファイルをダウンロードして表示することができます。

ログファイルおよび応答ファイルはシステム設定ウィザードフォルダに自動的に保存され、CMC からアクセスすることができます。ファイル名にはタイムスタンプが `year_month_day_hour_minute_second` の形式で付けられます。ログファイルは `.log` 拡張子を使用し、応答ファイルは `.ini` 拡張子を使用します。

[[ダウンロード](#)] ボタンをクリックして、ログおよび応答ファイルを表示したり、それらのファイルをローカルディスクにダウンロードしたりすることもできます。

ログファイルには、以下の内容が含まれます。

- この設定セッションで行ったすべての変更の記録
- 応答ファイルが保存されている場所
- 実行する必要がある次のステップを説明するリスト

関連情報

[応答ファイルの使用 \[24 ページ\]](#)

2.6.1 応答ファイルの使用

ウィザードを完了するたびに、ウィザードのページに表示されたすべての質問の回答 (応答) を含む応答ファイルが保存されます。応答ファイルを使用して、BI プラットフォームデプロイメントの他のクラスタの設定をウィザードを繰り返し実行せずに行うことができます。また、システムを同じ設定状態に設定するために後日に使用することもできます。応答ファイルを使用することで、デプロイメントを自動化し、ユーザによる操作エラーを避けることができます。

応答ファイルを使用するには、応答ファイルをパラメータとして取るスクリプトを実行します。最初に、使用する応答ファイルを見つけ、ディスクに保存します。応答ファイルはシステム設定ウィザードフォルダに自動的に保存され、CMC からアクセスすることができます。ファイル名には `year_month_day_hour_minute_second` の形式のタイムスタンプと拡張子 `.ini` が付けられます。CMC から、応答ファイルを表示してディスクに表示するか、メニューコマンド **整理 > 送信 > ファイルの場所** を使用します。

[[確認](#)] ページまたは [[完了](#)] ページから応答ファイルを現在のウィザードセッション用にダウンロードして、ディスクに保存することもできます。

応答ファイルを使用する前にその設定を変更する場合は、テキストエディタで応答ファイルを編集できます。詳細については、以下に示す応答ファイルのサンプルを参照してください。

スクリプトの実行

適切な応答ファイルを準備できたら、そのファイルを、ウィザードを実行するスクリプトのコマンドラインパラメータとして使用します。

- Windows の場合は、バッチファイル `scw.bat` を実行します。
- Unix の場合は、スクリプトファイル `scw.sh` を実行します。

バッチファイルおよびスクリプトファイルは、その他のサーバ管理スクリプトの保存場所と同じフォルダにあります。

- Windows の場合: <installdir>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%scripts
- Unix の場合: <installdir>/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x64/scripts

バッチファイルおよびスクリプトファイルは、以下のコマンドラインパラメータを取ります。

- -help: コマンドラインのヘルプを表示します。
- -r: 応答ファイルのパスおよび名前を指定します。
- -cms: ログインする Central Management Server (CMS) を指定します。このパラメータを省略すると、CMS はデフォルトでローカルマシンおよびデフォルトポート (6400) になります。例: machine_name:6500
- -username: BI プラットフォームに対する管理権限を付与するアカウントを指定します。このパラメータを省略すると、デフォルトの Administrator アカウントが使用されます。
- -password: アカウントのパスワードを指定します。指定しない場合、空のパスワードが使用されます。-password パラメータを使用するには、-username パラメータも使用する必要があります。

例

Windows の場合: SCW.bat -r c:%folder%filename.ini -cms cmsname:6400 -username "administrator" -password samplepassword

Unix の場合: ./scw.sh -r /home/folder/filename.ini -cms cmsname:6400 -username "administrator" -password samplepassword

サンプル応答ファイル

```
# *****
# ***** Products *****
# *****
# Keep the existing configuration for products.
# Valid values = true or false.
# "true": the existing product configuration will be preserved.
# "false": the product configuration will be modified according to the
"Products." settings below.
Products.KeepExistingConfiguration = true
# The "Products." settings below will be ignored if
Products.KeepExistingConfiguration = true.
# Auto-start the servers for these products.
# Valid values = true or false.
# "true": the product's servers and their dependencies are auto-started with BI
platform.
# "false": the product's servers are not auto-started with BI platform.
# Crystal Reports
Products.crystalreports = true
# Analysis edition for OLAP
Products.olap = true
# Web Intelligence
Products.webintelligence = false
# Dashboards (Xcelsius)
Products.dashboards = false
```

```

# Data Federator
Products.datafederator = true
# Lifecycle Manager
Products.LCM = true
# *****
# ***** Deployment Template *****
# *****
# Keep the existing configuration for the deployment template.
# Valid values = true or false.
# "true": the existing deployment template configuration will be preserved and
the Capacity.DeploymentTemplate setting below will be ignored.
# "false": the deployment template configuration will be modified according to
the Capacity.DeploymentTemplate setting below.
Capacity.KeepExistingConfiguration = true
# Specify the deployment template for all nodes.
# Valid values = xs, s, m, l, xl.
Capacity.DeploymentTemplate = xs
# *****
# ***** Folders *****
# *****
# Keep the existing configuration for folder locations.
# Valid values = true or false.
# "true": the existing folder configuration will be preserved.
# "false": the folder configuration will be modified according to the "Folders."
settings below.
Folders.KeepExistingConfiguration = true
# The "Folders." settings below will be ignored if
Folders.KeepExistingConfiguration = true.
# ----- All nodes use the same folders -----
# Use this section when you have one node, or when all nodes have the same
folder locations. Otherwise, comment it out.
Folders.InputFileStore = <Path>
Folders.OutputFileStore = <Path>
Folders.Log = <Path>
Folders.Data = <Path>
Folders.Auditing = <Path>
# ----- Nodes use different folders -----
# Use this section when nodes have different folder locations. Otherwise,
comment it out.
# ----- NodeOne -----
# Folders.NodeOne.InputFileStore = <Path>
# Folders.NodeOne.OutputFileStore = <Path>
# Folders.NodeOne.Log = <Path>
# Folders.NodeOne.Data = <Path>
# Folders.NodeOne.Auditing = <Path>
# ----- NodeTwo -----
# Folders.NodeTwo.InputFileStore = <Path>
# Folders.NodeTwo.OutputFileStore = <Path>
# Folders.NodeTwo.Log = <Path>
# Folders.NodeTwo.Data = <Path>
# Folders.NodeTwo.Auditing = <Path>

```

応答ファイルのすべての設定項目を指定する必要があります。以下の場合を除き、どの設定項目も空にすることはできません。

- 複数ノードのデプロイメントを使用している場合は、1つ以上のノードのフォルダ設定を省略して、それらのノードのフォルダを変更しないようにすることができます。ただし、応答ファイルで指定したノードについては、すべてのフォルダの場所を指定する必要があります。
- KeepExistingConfiguration パラメータを true に設定している場合は、そのページの残りの設定項目を省略できます。たとえば、Products.KeepExistingConfiguration = true の場合、応答ファイルの残りの [製品] 設定項目を省略できます。

応答ファイルに、ターゲットクラスタにインストールされている製品とは異なる製品が含まれている場合があります。このような場合は、以下のように動作します。

- 応答ファイルに、ターゲットクラスタにインストールされている製品の定義が含まれていない場合は、操作が失敗します。
- ターゲットクラスタに存在しない製品の定義が応答ファイルに含まれている場合は、ログファイルに警告メッセージが追加され、その他の製品は適切に設定されます。

① 注記

応答ファイルを使用してクラスタを設定した後、ログファイルの「次のステップ」セクションに記述されている追加のステップを手動で実行する必要があります。

① 注記

セキュリティ強化のため、必要なのは (Windows AD、LDAP、SAP ではなく) Enterprise 認証サポートのみです。

① 注記

ノードの再起動を次にスケジュールされた再起動まで延期する場合は、スケジュールされたシステムダウンタイムの直前にスクリプトを実行します。

3 ユーザとグループの管理

3.1 Enterprise および通常のアカунトの管理

Enterprise 認証は BI プラットフォームのデフォルトの認証方法で、最初にシステムをインストールすると自動的に有効になります。ユーザとグループを追加して管理する場合、そのユーザとグループの情報は BI プラットフォームのデータベース内に保持されます。

① 注記

BI プラットフォームの Web セッション中に、BI プラットフォーム以外のページに移動したり Web ブラウザを閉じたりしてログオフしても、Enterprise セッションからはログオフされず、ライセンスは保持されます。Enterprise セッションは、約 24 時間後にタイムアウトします。ユーザの Enterprise セッションを終了し、ライセンスを解放して他のユーザが使用できるようにするには、BI プラットフォームからログアウトする必要があります。

3.1.1 ユーザアカウントを作成する

新しいユーザを作成する場合、ユーザのプロパティを指定し、そのユーザのグループ (複数可) を選択します。

1. CMC の [\[ユーザとグループ\]](#) 管理エリアを表示します。
2. [管理](#) > [新規](#) > [新しいユーザ](#) の順にクリックします。
[\[新しいユーザ\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
3. Enterprise ユーザを作成するには、次の手順を実行します。
 - a. [\[認証の種類\]](#) の一覧で、[\[Enterprise\]](#) を選択します。
 - b. アカунト名、フルネーム、電子メールおよび説明を入力します。

→ ヒント

説明のエリアは、ユーザまたはアカウントに関する補足情報を含める場合に使用します。

- c. Enterprise 認証に対して定義されたパスワード基準に準拠するパスワード情報と設定を指定します。
4. 異なる認証の種類を使用してログオするユーザを作成するには、[\[認証の種類\]](#) 一覧から適切なオプションを選択して、アカウント名を入力します。
 5. 次の操作のいずれかを実行して、BI プラットフォーム使用権許諾契約に基づいてユーザアカウントを指定します。
 - このユーザが、同時にアクセスすることが許されるユーザ数を規定する使用権許諾契約に属する場合は、[\[同時接続ユーザ\]](#) を選択します。
 - このユーザが、各ライセンスを特定のユーザに関連付ける使用権許諾に属する場合は、[\[登録ユーザ\]](#) を選択します。登録ユーザライセンスは、接続している他のユーザの数に関係なく、BI プラットフォームへのアクセスを必要とする場合に便利です。

① 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログオンセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが 11 番目の同時ログオンセッションにログインしようとする、該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの 1 つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログオンセッションの数に制限はありません。

6. [\[作成して閉じる\]](#) をクリックします。

ユーザはシステムに追加され、自動的に Everyone グループに追加されます。ユーザに対し、受信ボックスが Enterprise のエイリアスを使用して自動的に作成されます。

これで、グループへのユーザの追加、またはユーザのアクセス権の指定ができます。

3.1.2 ユーザアカウントを変更する

次の手順に従って、ユーザのプロパティまたはグループメンバーシップを変更します。

① 注記

変更の対象となるユーザがログオン中の場合、ユーザはその変更の影響を受けます。

1. CMC の[\[ユーザとグループ\]](#)管理エリアを表示します。
2. プロパティを変更するユーザを選択します。
3. [管理 > プロパティ](#) をクリックします。
ユーザの[\[プロパティ\]](#)ダイアログボックスが開きます。
4. ユーザのプロパティを変更します。

最初にアカウントを作成したときに利用できたすべてのオプションの他に、[\[アカウントを無効にする\]](#)チェックボックスをオンにしてアカウントを無効にすることができます。

① 注記

ユーザアカウントに対する変更は、そのユーザが次回ログオンしたときに表示されます。

5. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

関連情報

[既存のユーザの新しいエイリアスを作成する \[44 ページ\]](#)

3.1.3 ユーザアカウントを削除する

次の手順に従って、ユーザのアカウントを削除します。ユーザがログオンしていた場合、そのアカウントが削除されるとエラーメッセージを受け取ります。ユーザアカウントを削除すると、そのユーザのお気に入りフォルダ、個人用カテゴリ、および受信ボックスも削除されます。

将来、アカウントが再び必要になると思われる場合は、アカウントを削除する代わりに、選択したユーザの **[プロパティ]** ダイアログボックスで **[アカウントを無効にする]** チェックボックスをオンにします。

① 注記

ユーザアカウントを削除しても、必ずしもユーザが BI プラットフォームに再度ログオンできなくなるわけではありません。ユーザアカウントがサードパーティのシステムに存在し、そのアカウントが BI プラットフォームにマップされるサードパーティのグループに所属する場合、ユーザは依然としてログオンできます。

1. CMC の **[ユーザとグループ]** 管理エリアを表示します。
2. 削除するユーザを選択します。
3. **管理 > 削除** をクリックします。

削除の確認ダイアログボックスが表示され、選択したユーザが1つ以上のプロジェクトの所有者であるかどうか通知されます。

4. **[OK]** を選択します。
ユーザアカウントが削除されます。

関連情報

[ユーザアカウントを変更する \[29 ページ\]](#)

[エイリアスを無効化する \[46 ページ\]](#)

3.1.4 新規グループを作成する

1. CMC の **[ユーザとグループ]** 管理エリアを表示します。
2. **管理 > 新規 > 新規グループ** の順にクリックします。
[新規ユーザグループの作成] ダイアログボックスが開きます。
3. グループ名と説明を入力します。
4. **[OK]** をクリックします。

新しいグループを作成したら、そこにユーザやサブグループを追加したり、その新しいグループがサブグループになるようなグループメンバーシップを設定できます。サブグループで組織に追加のレベルを作成できるため、オブジェクトアクセス権を設定して BI プラットフォームコンテンツへのユーザのアクセスを制御するのに便利です。

3.1.5 グループのプロパティを変更する

設定を変更することによって、グループのプロパティを変更できます。

① 注記

グループに所属するユーザが次にログオンしたときに、この変更が有効になります。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアで、グループを選択します。
2. **管理** > **プロパティ** をクリックします。
[プロパティ]ダイアログボックスが表示されます。
3. グループのプロパティを変更します。
ナビゲーション一覧からリンクをクリックして、さまざまなダイアログボックスを表示し、それぞれのプロパティを変更できます。
 - グループのタイトルや説明を変更する場合は、[プロパティ]をクリックします。
 - グループに対して主体が持っているアクセス権を変更する場合は、[ユーザセキュリティ]をクリックします。
 - グループメンバーのプロパティ値を変更する場合は、[プロファイル値]をクリックします。
 - グループを別のグループにサブグループとして追加する場合は、[所属するグループ]をクリックします。
4. [保存]をクリックします。

3.1.6 グループメンバーを表示する

次の手順で、指定したグループに所属するユーザを表示できます。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアを表示します。
2. ツリー パネルの[グループ階層]を展開します。
3. ツリー パネルでグループを選択します。

① 注記

グループ内に多数のユーザがいる場合、またはグループがサードパーティディレクトリにマップされている場合、リストが表示されるのにしばらく時間がかかることがあります。

グループに所属するユーザのリストが表示されます。

3.1.7 サブグループを追加する

あるグループを別のグループに追加できます。このようにすると、追加したグループはサブグループになります。

① 注記

サブグループを追加することは、グループのメンバーシップを指定することに似ています。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアで、他のグループにサブグループとして追加するグループを選択します。
2. **▶ アクション ▶ グループを結合 ▶**をクリックします。
[グループを結合]ダイアログボックスが表示されます。
3. 最初のグループを追加するグループを[利用可能なグループ]一覧から[送信先グループ]一覧に移動します。
4. [OK]をクリックします。

関連情報

[グループメンバーシップを指定する \[32 ページ\]](#)

3.1.8 グループメンバーシップを指定する

あるグループを別のグループのメンバーにすることができます。メンバーになったグループは、サブグループと呼ばれます。サブグループの追加先のグループは親グループです。サブグループは親グループのアクセス権を継承します。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアで、他のグループに追加するグループを選択します。
2. **▶ アクション ▶ 所属するグループ ▶**をクリックします。
[所属するグループ]ダイアログボックスが表示されます。
3. [グループを結合]をクリックします。
[グループを結合]ダイアログボックスが表示されます。
4. 最初のグループを追加するグループを[利用可能なグループ]一覧から[送信先グループ]一覧に移動します。
親グループに関連付けられたすべてのアクセス権は、作成した新しいグループによって継承されます。
5. [OK]をクリックします。
[所属するグループ]ダイアログボックスに戻ると、親グループの一覧に親グループが表示されます。

3.1.9 ユーザまたはユーザグループを一括して追加する

複数のユーザまたはユーザグループを一括して CMC に追加するのに、CSV (カンマ区切り値) ファイルを使用できます。適切な形式の CSV ファイルでは、次の例のように、カンマ区切りデータが順に並びます。

```
Add,MyGroup,MyUser1,MyFullName,Password1,My1@example.com,ProfileName,ProfileValue
```

一括追加処理には、以下の条件が適用されます。

- CSV ファイルにエラーが含まれる行が存在する場合、その行はインポート処理対象から除外されます。
- インポート後の最初の段階では、ユーザアカウントは無効になっています。
- 新しいユーザを作成する際には空のパスワードを使用できます。ただし、その後既存のユーザに対して更新を行うには、有効な Enterprise 認証パスワードを使用する必要があります。
- アカウントにデータベース認証を追加すると、そのユーザのプロファイルでデータベース認証が有効になります。

① 注記

デフォルトの管理者グループの一部であるユーザのみが、一括でユーザを追加することができます。この機能は、委任管理ではサポートされません。

1. CMC の **[ユーザとグループ]** 管理エリアで、**管理** > **インポート** > **ユーザ/グループ/データベース認証** を選択します。
[ユーザ/グループ/データベース認証のインポート] ダイアログボックスが表示されます。
2. **[参照]** をクリックして CSV ファイルを選択し、**[確認]** をクリックします。
ファイルが処理されます。ファイルのデータ形式が適切な場合に、**[インポート]** ボタンがアクティブになります。データの形式が適切ではない場合、エラーに関する情報が表示されるので、CMC がファイルをインポートできるか検証できるように、そのエラーを解決する必要があります。
3. **[インポート]** をクリックします。

CMC に、ユーザまたはユーザグループがインポートされます。

追加したユーザまたはユーザグループを確認するには、**[ユーザとグループ]** 管理エリアで **管理** > **インポート** > **履歴** を選択します。

3.1.10 グループを削除する

グループが必要でなくなった場合には、グループを削除できます。デフォルトグループである Administrators および Everyone は削除できません。

① 注記

削除されたグループに所属するユーザが次にログオンしたときに、この変更が有効になります。

① 注記

削除されたグループに所属するユーザは、そのグループから継承したすべてのアクセス権を失います。

Windows AD Users グループなどのサードパーティの認証グループを削除するには、CMC の **[認証]** 管理エリアを使用します。

1. CMC の **[ユーザとグループ]** 管理エリアを表示します。
2. 削除するグループを選択します。
3. **管理** > **削除** をクリックします。
削除を確認するダイアログボックスが表示されます。
4. **[OK]** をクリックします。
グループが削除されます。

3.1.11 Guest アカウントを有効にする

Guest アカウントはデフォルトで無効になっており、このアカウントでは BI プラットフォームにログオンできません。このデフォルト設定によって、BI プラットフォームの匿名シングルサインオン機能も無効になります。し

たがって、ユーザは有効なユーザ名とパスワードを指定しないと BI ラウンチパッドにアクセスできなくなります。

ユーザが BI ラウンチパッドにアクセスするために自分のアカウントを必要としないようにするには、Guest アカウントを有効にしてください。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアを表示します。
2. ナビゲーションパネルで[ユーザー一覧]をクリックします。
3. [Guest]を選択します。
4. ► 管理 ► プロパティ をクリックします。
[プロパティ]ダイアログボックスが表示されます。
5. [アカウントを無効にする]チェックボックスをオフにします。
6. [保存して閉じる]をクリックします。

3.1.12 ユーザグループに [カスタマイズ] タブを追加する

ユーザグループを変更するには、“オブジェクトを編集する”権限が必要です。

特定のユーザグループのアプリケーション (Web Intelligence や BI ラウンチパッドなど) の CMC に [カスタマイズ] タブを追加できます。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアを表示します。
2. ナビゲーションパネルの [グループリスト] をクリックして、ユーザグループを右クリックし、[カスタマイズ] を選択します。
3. [カスタマイズ] ダイアログボックスのナビゲーションパネルの [カスタマイズ] で、タブを追加するアプリケーションをクリックします。
4. [保存して閉じる]をクリックします。

3.1.13 グループへのユーザの追加

ユーザグループを使用すると、管理者は BI ラウンチパッドのタスクを複数のユーザにまとめて実行できます。たとえば、特定のユーザグループに対して基本設定をカスタマイズしたり、パブリケーションをスケジュールすることができます。

次の方法でユーザをグループに追加できます。

- グループを選択し、► アクション ► グループにメンバーを追加 をクリックします。
- ユーザを選択し、► アクション ► 所属するグループ をクリックします。
- ユーザを選択し、► アクション ► グループを結合 をクリックします。

1 人のユーザを複数のユーザグループに追加できます。ただし、ユーザが 2 つ以上のユーザグループに属している場合、BI ラウンチパッドには、1 つのグループ用の基本設定のみが表示されます。

関連情報

[グループメンバーシップを指定する \[32 ページ\]](#)

3.1.13.1 1つまたは複数のユーザグループへの1人のユーザの追加

1人のユーザを複数のユーザグループに追加できます。ただし、BI ラウンチパッドで表示されるのは、1つのユーザグループの基本設定のみです。

1. CMC の[ユーザとグループ](#)管理エリアで、グループに追加するユーザを選択します。
2. **▶ アクション ▶ グループを結合** をクリックします。

① 注記

システムのすべての BI プラットフォームユーザは Everyone グループに属します。

3. [グループを結合](#)ダイアログボックスで、ユーザの追加先となるグループを、[利用可能なグループ](#)一覧から[送信先グループ](#)一覧に移動します。

→ ヒント

複数のグループを選択するには、**[Shift] + [クリック]** または **[Ctrl] + [クリック]** を使用します。

4. **OK** をクリックします。

3.1.13.2 1つのユーザグループへの1人または複数のユーザの追加

複数のユーザを1つのユーザグループに追加できます。

ユーザグループに設定された基本設定は、そのグループのすべてのユーザに適用されます。BI ラウンチパッドには、1つのユーザグループの基本設定が一度に表示されます。

1. CMC の[ユーザとグループ](#)管理エリアで、ユーザグループを選択します。
2. **▶ アクション ▶ グループにメンバーを追加** を選択します。
3. [追加](#)ダイアログボックスで、[ユーザー](#)一覧をクリックします。
[[利用可能なユーザ/グループ](#)]一覧が最新表示されて、システム内のすべてのユーザアカウントが表示されます。
4. [利用可能なユーザ/グループ](#)一覧から[選択されたユーザ/グループ](#)一覧に、グループに追加する1人または複数のユーザを移動します。

→ ヒント

複数のユーザを選択するには、**[Shift] + [クリック]** または **[Ctrl] + [クリック]** を使用します。特定のユーザを検索するには、ユーザ名を[検索](#)ボックスに入力します。

→ ヒント

システム内のユーザ数が多い場合は、[前へ](#)および[次へ](#)ボタンをクリックして、ユーザの一覧内を移動します。

5. [OK](#) をクリックします。

3.1.14 パスワード設定を変更する

CMC を使用して、特定ユーザまたはシステムのすべてのユーザのパスワード設定を変更できます。次に示すさまざまな制限は、Enterprise アカウントのみに適用されます。つまり、これらの制限は外部ユーザデータベース (LDAP または Windows AD) にマップしたアカウントには適用されません。ただし、通常は外部システムでも、同じような制限を外部アカウントに設定することができます。

3.1.14.1 ユーザのパスワード設定を変更する

1. CMC の [\[ユーザとグループ\]](#) 管理エリアを表示します。
2. パスワード設定を変更するユーザを選択します。
3. [管理](#) > [プロパティ](#) をクリックします。
[\[プロパティ\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
4. 変更するパスワード設定に関連するチェックボックスをオンまたはオフにします。

選択可能なオプションは、次のとおりです。

- [パスワードを無期限にする](#)
 - [ユーザは次回ログオン時にパスワード変更が必要](#)
 - [ユーザはパスワードを変更できない](#)
5. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

① 注記

ユーザのパスワードを変更するとき、そのユーザは既存のすべてのセッションからログアウトされ、再度ログインするためにホームページに移動されます。

3.1.14.2 一般的なパスワード設定を変更する

① 注記

アクティブでないユーザアカウントは、自動では無効化されません。

1. CMC の [認証](#) 管理エリアを表示します。
2. [\[Enterprise\]](#) をダブルクリックします。

[Enterprise] ダイアログボックスが表示されます。

3. 使用する各パスワード設定のチェックボックスをオンにして、必要であれば値を指定します。

次の表は、各設定に対する最小値および最大値を示します。

パスワード設定

パスワード設定	デフォルト	最小値	推奨される最大値
少なくとも N 文字以上のパスワードを要求する	8 文字	6 文字	255 文字
N 文字を超えることはできません	255 文字	13 文字	255 文字
N 日ごとにパスワードの変更を要求する	30 日	2 日	100 日
最近使用した N 個のパスワードの再使用を禁止する	3 個	1 個	100 個
N 分経過するまでパスワードの変更を禁止する	0 分	0 分	100 分
ログオンに N 回失敗した後はアカウントを無効にする	10 回	1 回	100 回
ログオン失敗回数を N 分後にリセットする	5 分	1 分後	100 分
N 分後に再びアカウントを有効にする	5 分	0 分	100 分

① 注記

下位バージョンの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを上位バージョンにアップグレードするか、何らかの種類の拡張インストールを実行しようとする場合は、[ログオンに N 回失敗した後はアカウントを無効にする] をデフォルト値に設定する必要があります。

① 注記

上記のルールは、Enterprise ユーザにのみ適用され、その他すべてのサードパーティ認証タイプには適用されません。

4. [更新] をクリックします。

3.1.15 信用できる認証の有効化

① 注記

信用できる認証は BI ラウンチパッドのみでサポートされています。CMC では使用できません。

一度システムにログオンしたら、そのセッションの間に何回もパスワードを入力する必要がない方が好まれます。信用できる認証では、BI プラットフォーム認証ソリューションをサードパーティの認証ソリューションと統合するためのシングルサインオンを提供します。CMS と信用を確立したアプリケーションでは、信用できる認証を使用してユーザがパスワードを指定せずにログオンできます。

信用できる認証を有効にするには、サーバとクライアントの両方を設定する必要があります。

3.1.15.1 信用できる認証を使用するサーバを設定する

1. CMC の [\[認証\]](#) 管理エリアを表示します。
2. [\[Enterprise\]](#) をダブルクリックします。
[\[Enterprise\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
3. [\[信用できる認証を有効にする\]](#) をクリックします。
4. ユーザの共有シークレットを作成します。

① 注記

共有シークレットは、信用できる認証のパスワードを作成するためにクライアントと CMS によって使用されます。このパスワードは信用を確立するために使用されます。

5. 信用できる認証リクエストのタイムアウト値を入力します。

① 注記

タイムアウト値は、CMS がクライアントアプリケーションからの `IEnterpriseSession.logon()` 呼び出しを待機する時間を決定します。

6. [\[更新\]](#) をクリックします。

3.1.15.2 信用できる認証を使用するようにクライアントを設定する

1. クライアントマシンに有効な設定ファイルを作成します。

設定ファイルには以下の条件が適用されます。

- ファイルの名前は、`TrustedPrincipal.conf` にする必要があります。
- ファイルは、`businessobjects_root/win32_x86/` に配置する必要があります。
- ファイルは、`SharedSecret<=>secretPassword` を含む必要があります。ここで、`<secretPassword>` は信用できる認証のパスワードです。

2. セッションマネージャを使用して、信頼できる主体を作成し、CMS にログオンします。

```
ISessionMgr sessionMgr = CrystalEnterprise.getSessionMgr();
ITrustedPrincipal trustedPrincipal =
sessionMgr.createTrustedPrincipal("userName", "cmsName");
IEnterpriseSession enterpriseSession = sessionMgr.logon(trustedPrincipal);
```

3.1.16 ユーザおよびグループへのアクセスの許可

ユーザおよびグループへの管理アクセスを他のユーザやグループに許可することができます。管理者権限には、オブジェクトの表示、編集、削除と、オブジェクトインスタンスの表示、削除、一時停止が含まれます。たとえば、トラブルシューティングやシステムメンテナンスの場合、IT 部署にオブジェクトの編集や削除を許可することができます。

関連情報

[オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てる \[48 ページ\]](#)

3.1.17 ユーザの受信ボックスへのアクセスの制御

ユーザを追加すると、そのユーザ用の受信ボックスが自動的に作成されます。受信ボックスには、ユーザと同じ名前が付けられます。デフォルトでは、そのユーザと管理者だけがユーザの受信ボックスへのアクセス権を持ちます。

関連情報

[CMC でのオブジェクトのセキュリティ設定の管理 \[47 ページ\]](#)

3.1.18 CMC でのユーザグループの BI ラウンチパッド基本設定の設定

管理者は、CMC でユーザグループ用にデフォルトの BI ラウンチパッド基本設定を設定します。

管理者は、CMC で次の BI ラウンチパッド基本設定のデフォルト値を指定できます。

- [ホーム](#) タブ
- ドキュメントを保存する場所
- フォルダ
- カテゴリ
- 1 ページあたりのオブジェクト数
- [\[ドキュメント\]](#) タブに表示される列
- BI ラウンチパッドでドキュメントをタブと新しいウィンドウのどちらに表示するか

ユーザグループ用に管理者が設定した基本設定は、そのグループのすべてのユーザに適用されます。ユーザが 2 つ以上のユーザグループに属している場合、BI ラウンチパッドには、1 つのグループ用に設定された基本設定のみが表示されます。

ユーザは独自の BI ラUNCHパッド基本設定を設定することができ、この基本設定値はデフォルト値より優先されます (ユーザはいつでもデフォルトの基本設定に戻すことができます)。ただし、管理者が CMC でデフォルトの BI ラUNCHパッド基本設定を変更すると、このデフォルト値がユーザが定義した値より優先されます。

3.1.18.1 1つのユーザグループの BI ラUNCHパッド基本設定の設定

CMC で設定された BI ラUNCHパッド基本設定は、1つのユーザグループのすべてのユーザに対するデフォルトの基本設定です。

① 注記

ユーザが2つ以上のユーザグループに属している場合、BI ラUNCHパッドには、1つのグループ用に設定されたデフォルトの基本設定のみが表示されます。

適切なアクセス権を持っている場合、ユーザは、独自の BI ラUNCHパッド基本設定を定義できます。ユーザが基本設定を変更できないようにするには、基本設定を設定する権限をユーザに付与しないでください。

1. CMC の **ユーザとグループ** 管理エリアを表示します。
2. **グループリスト** で、BI ラUNCHパッド基本設定を設定するユーザグループを選択します。
3. **アクション** > **BI ラUNCHパッドの基本設定** を選択します。
BI ラUNCHパッドの基本設定 ダイアログボックスが表示されます。
4. **基本設定が定義されていません** チェックボックスをオフにします。
5. **ホームタブ** または **ドキュメントタブ** のいずれかを選択して、BI ラUNCHパッドのデフォルトの開始ページを選択します。
6. **ホームタブ** を選択した場合は、以下のいずれかの操作を実行して、タブのホームページを選択します。
 - デフォルトの BI ラUNCHパッドの **ホームタブ** を表示するには、**デフォルトのホームタブ** を選択します。
 - **ホームタブ** として特定の Web サイトを表示するには、**ホームタブの選択** を選択し、**ホームタブの参照** をクリックして、BI リポジトリのオブジェクトを選択し、**開く** をクリックします。
7. **ドキュメントタブ** を選択した場合は、以下のいずれかの操作を実行します。
 - **マイドキュメント** を選択してドキュメントドロワを表示し、表示するデフォルトのノードを選択します。
 - **お気に入り**
 - **個人用カテゴリ**
 - **マイ受信ボックス**
 - **フォルダ** を選択してフォルダドロワを表示し、表示するデフォルトのフォルダを選択します。
 - すべてのパブリックフォルダを選択するには、**パブリックフォルダ** を選択します。
 - 特定のフォルダを選択するには、**パブリックフォルダの選択** を選択して **フォルダの参照** をクリックし、フォルダを選択して **開く** をクリックします。
 - **カテゴリ** を選択してカテゴリドロワを表示し、表示するデフォルトのカテゴリを選択します。
 - すべてのパブリックカテゴリを選択するには、**会社用カテゴリ** を選択します。
 - 特定のカテゴリを選択するには、**会社用カテゴリの選択** を選択して **カテゴリの参照** をクリックし、カテゴリを選択して **開く** をクリックします。
8. **ドキュメントタブで表示する列を選択** で、各列のチェックボックスを選択し、**リストパネル** に各オブジェクトを表示します。

- 種類
 - 最終実行日時
 - インスタンス
 - 説明
 - 作成者
 - 作成日
 - 場所 (カテゴリ)
 - 受信日 (受信ボックス)
 - 差出人 (受信ボックス)
9. **ドキュメントの表示場所の設定**で、以下のいずれかの操作を実行して、ユーザによるドキュメントの表示方法を選択します。
 - **BI ランチパッドポータルでタブとして表示する**を選択し、BI ランチパッドの個別のタブにドキュメントを表示します。
 - **複数の全画面表示ブラウザウィンドウで、ウィンドウごとに1つずつドキュメントを表示する**を選択して、個別のブラウザウィンドウにドキュメントを表示します。
 10. **ページあたりの最大アイテム数の設定**ボックスに、ユーザがオブジェクトの一覧を表示するとき、BI ランチパッドの1ページに表示するオブジェクトの最大数を入力します。
 11. **保存して閉じる**をクリックします。

3.1.19 CMC でのユーザグループの Fiorified BI ランチパッドの基本設定

管理者は、CMC でユーザグループにデフォルトの Fiorified BI ランチパッドの基本設定を行います。

ユーザグループ用に管理者が設定した基本設定は、そのグループのすべてのユーザに適用されます。ユーザが2つ以上のユーザグループに属している場合、Fiorified BI ランチパッドには、1つのグループ用に設定された基本設定のみが表示されます。

ユーザは Fiorified BI ランチパッドで独自の基本設定を設定可能であり、その基本設定はデフォルト値より優先されます(いつでもデフォルトの基本設定に戻すこともできます)。Fiorified Business Intelligence ランチパッドユーザガイドのページ基本設定セクションを参照してください。

ただし、管理者が CMC で Fiorified BI ランチパッドのデフォルトの基本設定を変更すると、そのデフォルト値がユーザ定義の値よりも優先されます。

3.1.19.1 ユーザグループの Fiori 対応 BI ランチパッド基本設定の設定

1. CMC の **[ユーザとグループ管理]** エリアに移動します。
2. **[グループリスト]** で、Fiori 対応 BI ランチパッド基本設定を設定するユーザグループを選択します。
3. **[Fiori BI ランチパッド基本設定]** を右クリックして選択します。
4. **[基本設定が定義されていません]** チェックボックスをオフにします。

5. [\[ホーム\]](#) タブをカスタマイズするには、以下のいずれかの操作を実行して、タブで希望のホームページを選択します。

ホームページタブのオプション	アクション
デフォルトの Fiori BI ラウンチパッドホームタブの表示	[デフォルトのホームタブ] を選択します。
特定のホームタブの表示	<p>[ホームタブの選択] を選択して、次のようにします。</p> <ol style="list-style-type: none"> [ランディングページ] フィールドで、次のランディングページを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> マイホーム スケジュール 受信ボックス フォルダ リサイクルビン [ドキュメントの表示形式] フィールドで、[タイルビュー (デフォルト)] または [一覧ビュー] を選択します。 [ランディングフィルタ] フィールドで、以下のランディングフィルタを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> すべて表示 マイドキュメント すべてのカテゴリ お気に入り 最近の表示 最近の実行 <p>[マイフォルダ]、[パブリックフォルダ]、[個人用カテゴリ]、および [会社用カテゴリ] からオブジェクトを選択して、デフォルトのランディングページとして表示することができます。</p>
特定のレポートをホームページとして表示	[レポートの選択] を選択してから、 [ドキュメントの参照] をクリックして、 [マイフォルダ] または [パブリックフォルダ] からドキュメントを選択します。
カテゴリをホームページとして表示	[カテゴリの選択] を選択してから、 [カテゴリの参照] をクリックして、 [個人用カテゴリ] または [会社用カテゴリ] からカテゴリを選択します。

6. [\[ドキュメントタブで表示する列を選択\]](#) フィールドで、以下の列の基本設定を選択します。

- [タイプ](#)
- [最終実行日時](#)
- [インスタンス](#)
- [説明](#)
- [作成者](#)
- [最終更新日時](#)
- [作成日](#)
- [場所 \(カテゴリ\)](#)

- お気に入り (ホームページ)
- ステータス (スケジュール)
- インスタンスの日時 (スケジュール)
- フォルダパス

① 注記

[タイプ]、[説明]、[最終更新日時]、[お気に入り (ホームページ)]、[ステータス (スケジュール)]、および [インスタンスの日時 (スケジュール)] の列は、デフォルトで選択されています。表示する列の選択は変更することができます。

7. [保存して閉じる] を選択します。

管理者によって定義された基本設定がインターフェースに反映されるように、ユーザは Fiori 対応 BI ラウンチパッドにログオンして、**設定 > アカウント基本設定 > ページ基本設定** を選択して、[管理者が指定した設定を使用] を有効化する必要があります。

3.2 エイリアスの管理

1 人のユーザが BI プラットフォームに複数のアカウントを持っている場合、[エイリアスの割り当て] 機能を使ってそれらをリンクできます。これは、ユーザが Enterprise および Enterprise アカウントにマップされているサードパーティアカウントを持っている場合に便利です。

エイリアスをユーザに割り当てると、ユーザはサードパーティのユーザ名とパスワード、または Enterprise ユーザ名とパスワードのいずれかを使用してログオンできます。したがって、エイリアス機能によってユーザは複数の認証タイプでログオンできます。

CMC では、ユーザの[プロパティ]ダイアログボックスの最下部にエイリアス情報が表示されます。ユーザは、Enterprise エイリアス、LDAP エイリアス、Windows AD エイリアスをさまざまな組み合わせで持つことができます。

3.2.1 ユーザを作成しサードパーティエイリアスを追加する

ユーザを作成し、Enterprise 以外の認証タイプを選択すると、システムは BI プラットフォームに新しいユーザを作成し、そのユーザに対してサードパーティのエイリアスを作成します。

① 注記

システムがサードパーティのエイリアスを作成するには、以下の条件が満たされていなければなりません。

- CMC で認証ツールが有効になっている必要があります。
- アカウント名の形式がその認証タイプで求められる形式に合っている必要があります。
- サードパーティの認証ツールにユーザアカウントが存在する必要があります。また、そのユーザアカウントは、すでに BI プラットフォームにマップされているグループに属している必要があります。

1. CMC の**ユーザとグループ**管理エリアを表示します。

2. **管理** > **新規** > **新しいユーザ** の順にクリックします。
[新しいユーザ] ダイアログボックスが表示されます。
3. ユーザに対する認証タイプ（たとえば Windows AD）を選択します。
4. ユーザのサードパーティアカウント名（たとえば **bsmith**）を入力します。
5. ユーザの接続タイプを選択します。
6. [作成して閉じる] をクリックします。

ユーザが BI プラットフォームに追加され、選択した認証タイプ用のエイリアス（たとえば secWindowsAD:ENTERPRISE:bsmith）が割り当てられます。必要に応じて、ユーザにエイリアスを追加、割り当て、および再割り当てできます。

3.2.2 既存のユーザの新しいエイリアスを作成する

既存の BI プラットフォームユーザにエイリアスを作成できます。エイリアスは Enterprise エイリアス、またはサードパーティの認証ツール用のエイリアスにすることもできます。

① 注記

システムがサードパーティのエイリアスを作成するには、以下の条件が満たされていなければなりません。

- CMC で認証ツールが有効になっている必要があります。
- アカウント名の形式がその認証タイプで求められる形式に合っている必要があります。
- サードパーティの認証ツールにユーザアカウントが存在する必要があります。また、そのユーザアカウントは、BI プラットフォームにマップされているグループに属している必要があります。

1. CMC の **ユーザとグループ** 管理エリアを表示します。
2. エイリアスの追加先のユーザを選択します。
3. **管理** > **プロパティ** をクリックします。
[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
4. [新しいエイリアス] をクリックします。
5. 認証の種類を選択します。
6. ユーザのアカウント名を入力します。
7. **更新** をクリックします。

ユーザのエイリアスが作成されます。CMC でユーザを表示すると、ユーザにすでに割り当てられているエイリアスと、ここで作成されたエイリアスの、少なくとも 2 つのエイリアスが表示されます。

8. [保存して閉じる] をクリックして [プロパティ] ダイアログボックスを閉じます。

3.2.3 別のユーザのエイリアスを割り当てる

あるエイリアスをユーザに割り当てるとき、別のユーザのサードパーティのエイリアスを、現在表示しているユーザに移動します。Enterprise エイリアスは、割り当てまたは再割り当てできません。

① 注記

ユーザがエイリアスを1つだけ持っていて、その唯一のエイリアスを別のユーザに割り当てる場合、システムはそのユーザアカウント、およびそのアカウントのお気に入りフォルダ、個人用カテゴリ、および受信ボックスを削除します。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアを表示します。
2. エイリアスを割り当てるユーザを選択します。
3. **管理 > プロパティ** をクリックします。
[プロパティ]ダイアログボックスが表示されます。
4. **エイリアスの割り当て** をクリックします。
5. 割り当てるエイリアスを持っているユーザアカウントを入力し、**検索開始** をクリックします。
6. **利用可能なエイリアス** 一覧から割り当てるエイリアスを[<Username> に追加されるエイリアス]一覧に移動します。

ここで、<Username> は、エイリアスを割り当てるユーザの名前を表します。

→ ヒント

複数のエイリアスを選択するには、**Shift** + **クリック** または **Ctrl** + **クリック** を使用します。

7. **OK** をクリックします。

3.2.4 エイリアスを削除する

エイリアスを削除すると、そのエイリアスはシステムから削除されます。ユーザがエイリアスを1つだけ持っていて、そのエイリアスを削除する場合、システムはそのユーザアカウント、およびそのアカウントのお気に入りフォルダ、個人用カテゴリ、および受信ボックスを自動的に削除します。

① 注記

ユーザのエイリアスを削除しても、必ずしもユーザがBI プラットフォームに再度ログオンできなくなるわけではありません。ユーザアカウントがサードパーティシステムにまだ存在し、そのアカウントがBI プラットフォームにマップされるグループに所属する場合、ユーザは依然としてBI プラットフォームにログオンできます。システムが新しいユーザを作成するか、既存のユーザにエイリアスを割り当てるかは、CMC の**認証** 管理エリアの認証ツールで選択した更新オプションに依存します。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアを表示します。
2. 削除するエイリアスを持つユーザを選択します。
3. **管理 > プロパティ** をクリックします。
[プロパティ]ダイアログボックスが表示されます。
4. 削除するエイリアスの横にある**エイリアスの削除** ボタンをクリックします。
5. 確認を求めるメッセージが表示されたら、**OK** をクリックします。
エイリアスは削除されます。
6. **保存して閉じる** をクリックして**プロパティ** ダイアログボックスを閉じます。

3.2.5 エイリアスを無効化する

認証方法に関連付けられているユーザのエイリアスを無効にすることで、ユーザが特定の認証手順を使用して BI プラットフォームにログオンしないようにできます。ユーザが BI プラットフォームに完全にアクセスできないようにするには、そのユーザのすべてのエイリアスを無効にします。

① 注記

ユーザをシステムから削除しても、必ずしもそのユーザが BI プラットフォームに再度ログオンできなくなるわけではありません。ユーザアカウントがサードパーティシステムにまだ存在し、そのアカウントが BI プラットフォームにマップされるグループに所属する場合、ユーザは依然として BI プラットフォームにログオンできます。ユーザが BI プラットフォームにログオンするために自分のエイリアスを使用できないようにするには、エイリアスを無効にするのが最もよい方法です。

1. CMC の[ユーザとグループ]管理エリアを表示します。
2. 無効にするエイリアスを持つユーザを選択します。
3. **管理 > プロパティ** をクリックします。
[プロパティ]ダイアログボックスが表示されます。
4. 無効にするエイリアスの[有効]チェックボックスをオフにします。

無効にする各エイリアスに対して、この手順を繰り返します。
5. **[保存して閉じる]** をクリックします。
そのユーザは、ここで無効にした種類の認証を使用してログオンできなくなります。

関連情報

[エイリアスを削除する \[45 ページ\]](#)

4 アクセス権の設定

4.1 CMC でのオブジェクトのセキュリティ設定の管理

[管理]メニューのセキュリティオプションを使用して、CMC で多くのオブジェクトのセキュリティ設定を管理できます。これらのオプションを使用すると、オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てたり、主体が持っているアクセス権を表示したり、主体がオブジェクトに対して持っているアクセス権を変更できます。

セキュリティ管理の詳細は、セキュリティのニーズ、およびアクセス権を設定しているオブジェクトの種類によって変わります。ただし、一般的には次に示すタスクのワークフローに非常に似ています。

- オブジェクトに対する主体のアクセス権を表示する。
- オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当て、それらの主体が持つアクセス権およびアクセスレベルを指定する。
- BI プラットフォームの最上位フォルダにアクセス権を設定する。

4.1.1 オブジェクトの主体のセキュリティを表示する

通常、オブジェクトの主体のアクセス権を表示するには、次のワークフローに従います。

1. セキュリティ設定を表示するオブジェクトを選択します。
2. **管理 > ユーザセキュリティ** をクリックします。
[ユーザセキュリティ] ダイアログボックスが開き、オブジェクトのアクセスコントロールリストが表示されます。
3. アクセスコントロールリストから主体を選択し、**[セキュリティの表示]** をクリックします。

権限エクスプローラが開き、オブジェクトの主体に対する実効アクセス権のリストが表示されます。また、**権限エクスプローラ**では、次のことも実行できます。

- アクセス権を表示する別の主体を検索する。
- 表示されるアクセス権を次の基準に従ってフィルタする。
 - 割り当てられた権限
 - 付与された権限
 - 割り当てられていない権限
 - アクセスレベルから
 - オブジェクトタイプ
 - 権限の名前
- 次の基準に従って、表示されるアクセス権の一覧を昇順または降順に並べ替えます。
 - コレクション
 - タイプ
 - 権限名

権限のステータス (許可、拒否、指定なし)

また、[ソース] 列内のリンクのいずれかをクリックして、継承された権限のソースを表示できます。

4.1.2 オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てる

アクセスコントロールリストでは、オブジェクトでアクセス権が許可または拒否されるユーザを指定します。通常、アクセスコントロールリストに主体を割り当て、主体がオブジェクトに対して持つアクセス権を指定するには、次のワークフローに従います。

1. 主体を追加するオブジェクトを選択します。
2. **管理 > ユーザセキュリティ** をクリックします。
[ユーザセキュリティ] ダイアログボックスが開き、アクセスコントロールリストが表示されます。
3. [主体の追加] をクリックします。
[主体の追加] ダイアログボックスが表示されます。
4. [利用可能なユーザ/グループ] 一覧から主体として追加するユーザおよびグループを選択し、[選択されたユーザ/グループ] 一覧に移動します。
5. [セキュリティを追加して割り当てる] をクリックします。
6. 主体に許可するアクセスレベルを選択します。
7. フォルダまたはグループの継承を有効にするかどうかを選択します。

必要に応じて、詳細レベルでアクセス権を変更し、アクセスレベルの特定のアクセス権を上書きすることもできます。

関連情報

[オブジェクトの主体のセキュリティを変更する \[48 ページ\]](#)

4.1.3 オブジェクトの主体のセキュリティを変更する

通常は、アクセスレベルを使用して主体にアクセス権を割り当てることをお勧めします。ただし、アクセスレベルの特定の詳細権限の上書きが必要になる場合があります。詳細なアクセス権を使用すると、主体がすでに持っているアクセスレベルの上で、主体のアクセス権をカスタマイズできます。通常、オブジェクトの主体に詳細なアクセス権を割り当てる場合は、次のワークフローに従います。

1. オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てます。
2. 主体が追加されている場合は、**管理 > ユーザセキュリティ** の順に選択して、オブジェクトのアクセスコントロールリストを表示します。
3. アクセスコントロールリストから主体を選択し、[セキュリティの割り当て] をクリックします。
[セキュリティの割り当て] ダイアログボックスが表示されます。
4. [詳細] タブをクリックします。

5. [\[権限の追加/削除\]](#)をクリックします。
6. 主体のアクセス権を変更します。
使用可能なすべての権限は、権限付録に要約されています。

関連情報

[オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てる \[48 ページ\]](#)

4.1.4 BI プラットフォームの最上位フォルダにアクセス権を設定する

通常、BI プラットフォームの最上位フォルダにアクセス権を設定するには、次のワークフローに従います。

① 注記

このリリースでは、主体は、コンテナフォルダ内を移動したり、サブオブジェクトを表示するために、そのフォルダへの[表示](#)アクセス権が必要になります。つまり、フォルダ内に含まれているオブジェクトを表示するためには、主体に最上位レベルのフォルダへの[表示](#)アクセス権が必要です。[表示](#)アクセス権を1つの主体に限定する場合は、1つの主体に1つのフォルダに対する[表示](#)アクセス権を許可し、そのフォルダにのみ適用するアクセス権の範囲を設定します。

1. アクセス権を設定する最上位レベルのフォルダを含む CMC エリアに移動します。
2. [管理](#) > [最上位セキュリティ](#) > [すべての<オブジェクト>](#) をクリックします。
ここで、[<オブジェクト>](#) は、最上位フォルダの内容を表します。確認を求めるメッセージが表示されたら、[\[OK\]](#)をクリックします。
[\[ユーザセキュリティ\]](#)ダイアログボックスが開き、最上位フォルダのアクセスコントロールリストが表示されます。
3. 最上位フォルダのアクセスコントロールリストに主体を割り当てます。
4. 必要に応じて、主体に詳細なアクセス権を割り当てます。

関連情報

[オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てる \[48 ページ\]](#)

[オブジェクトの主体のセキュリティを変更する \[48 ページ\]](#)

4.1.5 主体のセキュリティ設定の確認

主体がアクセスを許可または拒否されているオブジェクトを確認する必要がある場合があります。これを確認するには、セキュリティクエリを使用できます。セキュリティクエリを使用して、主体が特定のアクセス権を持つ

ているオブジェクトを確認したり、ユーザのアクセス権を管理できます。各セキュリティクエリで、次の情報を指定します。

- クエリ主体
セキュリティクエリの実行対象となるユーザまたはグループを指定します。セキュリティクエリごとに1つの主体を指定できます。
- クエリ権限
セキュリティクエリの実行対象となる1つまたは複数の権限、これらの権限のステータス、およびこれらの権限を設定するオブジェクトの種類を指定します。たとえば、主体が最新表示できるすべてのレポート、または主体がエクスポートできないすべてのレポートに対して1つのセキュリティクエリを実行できます。
- クエリコンテキスト
セキュリティクエリで検索する CMC 領域を指定します。各領域について、セキュリティクエリにサブオブジェクトを含めるかどうか選択できます。セキュリティクエリには最大4つの領域を含めることができます。

セキュリティクエリを実行すると、ツリー パネルの[セキュリティクエリ]エリアの下にある[クエリの結果]に結果が表示されます。セキュリティクエリを調整する場合は、最初のクエリの結果内で2つ目のクエリを実行できます。

セキュリティクエリを使用すると、プリンシパルが特定の権限を持っているオブジェクトを確認でき、それらの権限を変更する場合にこれらのオブジェクトの場所も示されるので便利です。営業員が営業マネージャに昇格する例を考えてみます。営業マネージャには、Crystal レポートに対するスケジュール権限が必要ですが、以前は表示権限しか持っていませんでした。これらのレポートはそれぞれ別の場所にあります。この場合、管理者は、すべてのフォルダに含まれている Crystal レポートを表示するための営業マネージャの権限についてセキュリティクエリを実行し、クエリにサブオブジェクトを含めます。セキュリティクエリの実行後、管理者は、[クエリの結果]エリアで営業マネージャが表示権限を持っているすべての Crystal レポートを参照できます。詳細パネルには各 Crystal レポートの場所が表示されるので、管理者は各レポートを閲覧し、そのレポートに対する営業マネージャの権限を変更できます。

4.1.5.1 セキュリティクエリを実行する

1. [ユーザとグループ]エリアの詳細パネルで、セキュリティクエリを実行するユーザまたはグループを選択します。
2. ► 管理 ► ツール ► セキュリティクエリの作成 ► をクリックします。

セキュリティクエリーの作成: Nina

クエリー主体

このクエリーは、次のプリンシパルのオブジェクトを検索します：

Nina

クエリー権限

このクエリーは上記の主体が次の権限のすべてを持つオブジェクトを検索します：

☐ 権限別にクエリーを実行しない

コレクション	種類	権限名		
全般	全般	オブジェクトをフォルダに追加する	✓	<input type="button" value="x"/>
全般	全般	ユーザーが所有するフォルダにオブジェクトを追加する	✓	<input type="button" value="x"/>

クエリー コンテキスト

このクエリーは、CMC の次のセクションにあるオブジェクトのみを検索します：

☒ フォルダ
 (すべて) ☒ クエリー サブオブジェクト

☐ フォルダ

(すべて) ☐ クエリー サブオブジェクト

[セキュリティクエリーの作成]ダイアログボックスが表示されます。

3. [クエリー主体]エリアの主体が正しいことを確認します。

別の主体からセキュリティクエリーを実行する場合は、[参照]をクリックして別の主体を選択します。[クエリー主体の参照]ダイアログボックスで、[ユーザー一覧]または[グループ一覧]を展開し、主体を探すか、名前で主体を検索します。完了したら、[OK]をクリックし、[セキュリティクエリーの作成]ダイアログボックスに戻ります。

4. [クエリー権限]エリアで、クエリーを実行する権限と各権限のステータスを指定します。

- オブジェクトに対して主体が持っている特定の権限についてクエリーを実行するには、[参照]をクリックして、セキュリティクエリーを実行する各権限のステータスを設定し、[OK]をクリックします。

→ ヒント

権限の横にある削除ボタンをクリックしてクエリーから特定の権限を削除したり、ヘッダ行の削除ボタンをクリックしてクエリーからすべての権限を削除することができます。

- 一般的なセキュリティクエリーを実行する場合は、[権限別にクエリーを実行しない]チェックボックスをオンにします。
これを実行すると、BI プラットフォームでは、オブジェクトに対して主体が持っている権限に関係なく、アクセスコントロールリスト内の主体を持つすべてのオブジェクトの一般的なセキュリティクエリーが実行されます。
5. [クエリーコンテキスト]エリアで、クエリーを実行する CMC エリアを指定します。
 - a. 一覧の横にあるチェックボックスをオンにします。
 - b. 一覧で、クエリーを実行する CMC エリアを選択します。
エリア内のより特定した場所でクエリーを実行する場合([フォルダ]の下にある特定のフォルダなど)、[参照]をクリックし、[クエリーコンテキストの参照]ダイアログボックスを開きます。詳細ウィンドウで、クエリーを実行するフォルダを選択し、[OK]をクリックします。[セキュリティクエリー]ダイアログボックスに戻ると、指定したフォルダが一覧の下のボックスに表示されます。

- c. [\[クエリサブオブジェクト\]](#)を選択します。
- d. クエリを実行する CMC エリアごとに上記の手順を繰り返します。

④ 注記

最大 4 つのエリアでクエリを実行できます。

6. [\[OK\]](#)をクリックします。
セキュリティクエリが実行されて、[\[クエリの結果\]](#)エリアが表示されます。
7. クエリ結果を表示するには、[ツリー](#) パネルで、[\[セキュリティクエリ\]](#)を展開し、クエリ結果をクリックします。

→ ヒント

クエリ結果が、主体の名前に従って一覧表示されます。

クエリ結果は、[詳細](#)パネルに表示されます。

[\[クエリの結果\]](#)エリアでは、ユーザがログオフするまで単一のユーザセッションからのセキュリティクエリ結果がすべて保持されます。クエリを新しい指定で実行する場合は、[▶ アクション ▶ クエリの編集](#) をクリックします。クエリを選択し、[▶ アクション ▶ クエリの再実行](#) をクリックして、まったく同じクエリを再実行することもできます。セキュリティクエリ結果を維持する場合は、[▶ アクション ▶ エクスポート](#) をクリックして、セキュリティクエリ結果を CSV ファイルにエクスポートします。

4.2 アクセスレベルの使用

アクセスレベルを使用して、次のことを実行できます。

- 既存のアクセスレベルをコピーし、コピーに変更を加えて、名前を変更し、新しいアクセスレベルとして保存する。
- アクセスレベルを作成、名前変更、削除する。
- アクセスレベルの権限を変更する。
- アクセスレベルと、システム内の他のオブジェクトとの関係をトレースする。
- サイト間でアクセスレベルを複製および管理する。
- BI プラットフォームで定義されているアクセスレベルの 1 つを使用して、多くの主体にすばやく、均一に権限を設定する。

次の表に、定義済みの各アクセスレベルに含まれる権限の概要を示します。

定義済みのアクセスレベル

アクセスレベル	説明	関連するアクセス権
表示	フォルダレベルで設定された場合、主体はそのフォルダ、その中のオブジェクト、および各オブジェクトから生成されたインスタンスを表示できます。オブジェクトレベルで設定された場合、主体はそのオブジェクトとその履歴、およびそのオブジェクトから生成されたインスタンスを表示できます。	<ul style="list-style-type: none"> オブジェクトを表示する ドキュメントのインスタンスを表示する
スケジュール	主体は、オブジェクトが指定されたデータソースに対して1回または定期的に行うようにスケジュールすることで、インスタンスを生成できます。主体は、各自が所有するインスタンスのスケジュールを表示、削除、および一時停止できます。また、別の形式や出力先へのスケジュール、パラメータとデータベースログオン情報の設定、ジョブを処理するサーバの選択、フォルダへのコンテンツの追加、オブジェクトやフォルダのコピーもできます。	<p>[表示]アクセスレベルのアクセス権と以下の権限が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントの実行をスケジュールする ジョブを処理するサーバグループを定義する オブジェクトを別のフォルダにコピーする 別の出力先へスケジュールする レポートのデータを出力する レポートのデータをエクスポートする ユーザが所有するオブジェクトを編集する ユーザが所有するインスタンスを削除する ユーザが所有するドキュメントのインスタンスを一時停止して再開する
オンデマンド表示	主体はオンデマンドでデータソースのデータを最新表示できます。	<p>[スケジュール]アクセスレベルのアクセス権と以下の権限が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> レポートのデータを最新表示する
フルコントロール	主体は、オブジェクトに対して完全な管理権限を持ちます。	<p>次のようなすべてのアクセス権を利用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> オブジェクトをフォルダに追加する オブジェクトを編集する オブジェクトに対するユーザの権限を変更する オブジェクトを削除する インスタンスを削除する

次の表に、アクセスレベルで特定のタスクを実行するために必要な権限の概要を示します。

アクセスレベルのタスク	必要な権限
アクセスレベルを作成する	最上位の アクセスレベル フォルダへの追加権限
アクセスレベル内の詳細権限を表示する	アクセスレベルに対する 表示 権限

アクセスレベルのタスク	必要な権限
オブジェクトの主体にアクセスレベルを割り当てる	<p>アクセスレベルに対する表示権限</p> <p>アクセスレベルに対するセキュリティの割り当てにアクセスレベルを使用する権限</p> <p>オブジェクトに対するアクセス権の変更、またはオブジェクトと主体に対するアクセス権の安全な変更権限</p> <div> <p>① 注記</p> <p>アクセス権の安全な変更権限を持ち、アクセスレベルを主体に割り当てるユーザには、そのアクセスレベルと同じアクセスレベルが割り当てられている必要があります。</p> </div>
アクセスレベルを変更する	アクセスレベルに対する表示および編集権限
アクセスレベルを削除する	アクセスレベルに対する表示および削除権限
アクセスレベルのクローンを作成する	<p>アクセスレベルに対する表示権限</p> <p>アクセスレベルに対するコピー権限</p> <p>最上位のアクセスレベル フォルダへの追加権限</p>

4.2.1 表示およびオンデマンド表示アクセスレベルの選択

Web でレポートする場合、ライブデータと保存データのどちらを使用するかは、最も重要な決定事項の1つです。ただし、どちらの場合でも BI プラットフォームは最初のページをすばやく表示できるため、残りのデータの処理中にレポートを参照できます。ここでは、この選択を行う場合に参考にできる、2つの定義済みアクセスレベルの違いを説明します。

オンデマンド表示アクセスレベル

オンデマンドレポートでは、ユーザがデータベースサーバから直接ライブデータにリアルタイムでアクセスできます。ライブデータを使用すると、ユーザは常に変化するデータを基に最新の情報を取得できます。たとえば、大規模な配送センタのマネージャが継続的に出荷される製品の在庫状況を確認する必要がある場合、ライブレポートティングを使用すると必要な情報が得られます。

ただし、すべてのレポートでライブデータが使用できるようにする前に、すべてのユーザが常にデータベースサーバに接続できるようにするかどうかを検討します。データが繰り返し変更されない場合、または絶えず変更されない場合は、データベースへのこれらの要求はネットワークトラフィックを増加させ、サーバのリソースを消費するだけです。このような場合、ユーザがデータベースサーバに接続することなく常に最新のデータ(レポートインスタンス)を表示できるよう、レポートに定期的な実行スケジュールを設定することができます。

ユーザには、データベースに対してレポートを最新表示する[オンデマンド表示]アクセス権が必要です。

表示アクセスレベル

ネットワークトラフィックの量とデータベースサーバのヒット数を減らすために、レポートを指定時刻に実行するようにスケジュールできます。レポートが実行されるとき、ユーザは必要に応じてレポートインスタンスを表示できます。データベースへのヒットがさらに発生することはありません。

レポートインスタンスは、継続して更新されることのないデータを使用する場合に便利です。ユーザがレポートインスタンス内を移動して、列またはチャートの詳細にドリルダウンすると、データベースサーバに直接アクセスする代わりに保存データにアクセスします。つまり、保存データを持つレポートは、ネットワーク上のデータ転送を最小化するだけでなく、データベースサーバの負荷も軽減します。

たとえば、販売データベースが1日に1回更新される場合、同様のスケジュールでレポートを実行できます。これにより、販売担当者は、レポートを開くたびにデータベースにアクセスすることなく、最新の販売データを得ることができます。

ユーザには、レポートインスタンスを表示する[表示]アクセス権のみが必要です。

4.2.2 既存のアクセスレベルをコピーする

これは、既存のアクセスレベルと若干異なるアクセスレベルが必要な場合のアクセスレベルの最良の作成方法です。

1. [アクセスレベル]エリアを表示します。
2. 詳細パネルで、アクセスレベルを選択します。

→ ヒント

アクセスレベルに必要な内容と同じアクセス権を含むアクセスレベルを選択します。

3. ▶ 整理 ▶ コピー をクリックします。
選択したアクセスレベルのコピーが詳細パネルに表示されます。

4.2.3 新しいアクセスレベルを作成する

これは、既存のアクセスレベルと大幅に異なるアクセスレベルが必要な場合のアクセスレベルの最良の作成方法です。

1. [アクセスレベル]エリアを表示します。
2. ▶ 管理 ▶ 新規 ▶ アクセスレベルの作成 の順にクリックします。
[アクセスレベルの新規作成]ダイアログボックスが開きます。
3. 新しいアクセスレベルのタイトルと説明を入力し、[OK]をクリックします。
[アクセスレベル]エリアに戻り、新しいアクセスレベルが詳細パネルに表示されます。

4.2.4 アクセスレベルの名前を変更する

1. [\[アクセスレベル\]](#)エリアの[詳細](#)パネルで、名前を変更するアクセスレベルを変更します。
2. [管理](#) [プロパティ](#) をクリックします。
[\[プロパティ\]](#)ダイアログボックスが表示されます。
3. [\[タイトル\]](#)フィールドに、アクセスレベルの新しい名前を入力し、[\[保存して閉じる\]](#)をクリックします。
[\[アクセスレベル\]](#)エリアに戻ります。

4.2.5 アクセスレベルを削除する

1. [\[アクセスレベル\]](#)エリアの[詳細](#)パネルで、削除するアクセスレベルを選択します。
2. [管理](#) [アクセスレベルの削除](#) をクリックします。

① 注記

事前定義されたアクセスレベルは削除できません。

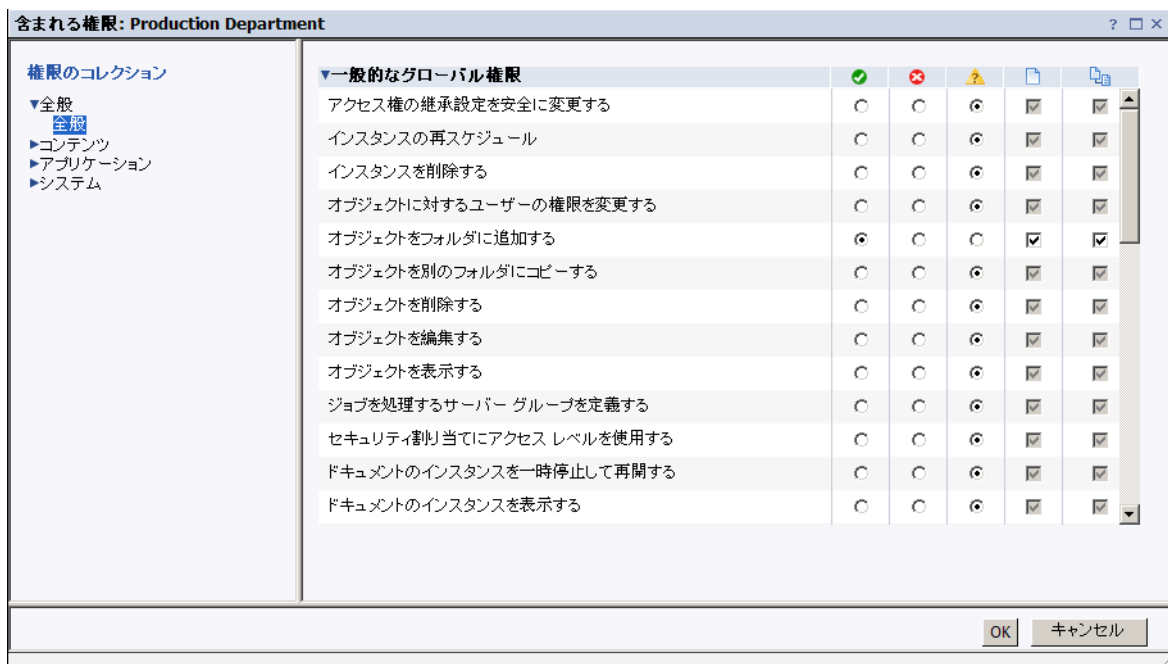
このアクセスレベルの影響を受けるオブジェクトに関する情報を示すダイアログボックスが表示されます。
アクセスレベルを削除しない場合は、[\[キャンセル\]](#)をクリックしてダイアログボックスを終了します。

3. [\[削除\]](#)をクリックします。
アクセスレベルは削除され、[\[アクセスレベル\]](#)エリアに戻ります。

4.2.6 アクセスレベルの権限を変更する

アクセスレベルの権限を設定するには、種類に関係なくすべてのオブジェクトに適用される一般的なグローバル権限を最初に設定し、特定のオブジェクトの種類に基づいて一般的な設定より優先されるようにしたい場合は該当の権限を指定します。

1. [\[アクセスレベル\]](#) エリアの [\[詳細\]](#) パネルで、権限を変更するアクセスレベルを選択します。
2. [アクション](#) [含まれる権限](#) をクリックします。
[\[含まれる権限\]](#)ダイアログボックスが開き、実効アクセス権の一覧が表示されます。
3. [\[権限の追加/削除\]](#)をクリックします。



[含まれる権限]ダイアログボックスが表示されて、ナビゲーションリストにアクセスレベルの権限コレクションが表示されます。デフォルトでは、[一般的なグローバル権限]セクションが展開されています。

4. 一般的なグローバル権限を設定します。

各権限は、[許可]、[拒否]、[指定なし] のステータスを持つことができます。権限を、該当のオブジェクトにのみ適用するか、サブオブジェクトにのみ適用するか、あるいはその両方に適用するか選択することもできます。

5. アクセスレベルの種類別権限を設定するには、ナビゲーションリストで、該当の権限コレクションをクリックし、権限を設定するオブジェクトの種類に適用されるサブコレクションをクリックします。

6. 完了したら、[OK]をクリックします。

実効アクセス権の一覧に戻ります。

4.2.7 アクセスレベルとオブジェクト間の関係のトレース

アクセスレベルを変更または削除する前に、アクセスレベルに加える変更が CMC のオブジェクトに悪影響を及ぼさないか確認することが重要です。これを確認するには、アクセスレベルで関係クエリを実行します。

関係クエリは、1つの便利な場所でアクセスレベルによって影響を受けるすべてのオブジェクトを確認できるので、権限管理に役に立ちます。会社が組織の編成を行い、2つの部署、部署 A と部署 B を部署 C に統合する例を考えてみます。管理者は、部署 A と部署 B は存在しなくなるので、それらのアクセスレベルを削除することにしました。管理者は、両方のアクセスレベルに対して関係クエリを実行してから、それらを削除します。管理者は、[クエリの結果]領域で、アクセスレベルを削除した場合に影響を受けるオブジェクトを確認できます。オブジェクトの権限を変更してからアクセスレベルを削除する場合、管理者は詳細パネルで CMC 内のオブジェクトの場所も確認できます。

① 注記

影響を受けるオブジェクトの一覧を表示するには、それらのオブジェクトに対する表示権限が必要です。

① 注記

アクセスレベルの関係クエリ結果には、アクセスレベルが明示的に割り当てられているオブジェクトのみ示されます。オブジェクトが継承設定によりアクセスレベルを使用している場合、そのオブジェクトはクエリ結果に表示されません。

4.2.8 サイト間でのアクセスレベルの管理

アクセスレベルは、レプリケート元サイトからレプリケート先サイトに複製できるオブジェクトの1つです。レプリケーションオブジェクトのアクセスコントロールリストに表示された場合は、そのアクセスレベルの複製を選択できます。たとえば、ある主体にはある Crystal レポートに対するアクセスレベル A が付与され、その Crystal レポートが別のサイトに複製された場合、アクセスレベル A も複製されます。

① 注記

レプリケート先サイトに同じ名前のアクセスレベルが存在する場合は、そのアクセスレベルの複製は失敗します。レプリケート元サイトまたはレプリケート先サイトの管理者は、複製前にそのアクセスレベルの名前を変更する必要があります。

サイト間でアクセスレベルを複製したら、ここに挙げた管理上の留意点に注意してください。

レプリケート元サイトでの複製されたアクセスレベルの修正

複製されたアクセスレベルがレプリケート元サイトで修正されると、レプリケート先サイトのそのアクセスレベルは、次にスケジュールによって複製が実行されたときに更新されます。双方向レプリケーションシナリオで、レプリケート先サイトで複製されたアクセスレベルを修正した場合、レプリケート元サイトのアクセスレベルも変更されます。

① 注記

1つのサイトでアクセスレベルを変更しても、他のサイトのオブジェクトには影響しないことを確認してください。変更する前に、複製されたアクセスレベルについて関係クエリを実行するように、サイト管理者に連絡してください。

レプリケート先サイトでの複製されたアクセスレベルの修正

① 注記

これは、一方向レプリケーションのみに適用されます。

レプリケート先サイトで複製されたアクセスレベルに対して変更しても、レプリケート元サイトには反映されません。たとえば、レプリケート先サイトの管理者は、レプリケート元サイトで拒否されている場合でも、複製されたアクセスレベルで Crystal レポートのスケジュールの権限を付与することができます。結果的に、アクセスレ

ベル名と複製されたオブジェクト名は同じままでも、ある主体がオブジェクトに対して持つその実効アクセス権はレプリケート先サイトごとに異なることがあります。

複製されたアクセスレベルがレプリケート元サイトとレプリケート先サイトで異なる場合、スケジュールによってレプリケーションジョブが次に実行されたときにその実効アクセス権の相違が検出されます。レプリケート元サイトのアクセスレベルがレプリケート先サイトのアクセスレベルより優先されるようにしたり、レプリケート先サイトのアクセスレベルが変更されないようにすることができます。しかし、レプリケート元サイトのアクセスレベルがレプリケート先サイトのアクセスレベルより優先されるようにしない場合、そのアクセスレベルを使用するレプリケーションを待機しているすべてのオブジェクトは複製されません。

レプリケート先サイトでユーザが複製されたアクセスレベルを修正しないように制限するには、そのレプリケート先サイトのユーザをアクセスレベルに主体として追加して、そのユーザに[表示]の権限のみを付与します。これによって、レプリケート先サイトのユーザはそのアクセスレベルを表示できますが、その権限の設定を修正したり他のユーザに割り当てることができなくなります。

関連情報

[フェデレーション \[365 ページ\]](#)

[アクセスレベルとオブジェクト間の関係のトレース \[57 ページ\]](#)

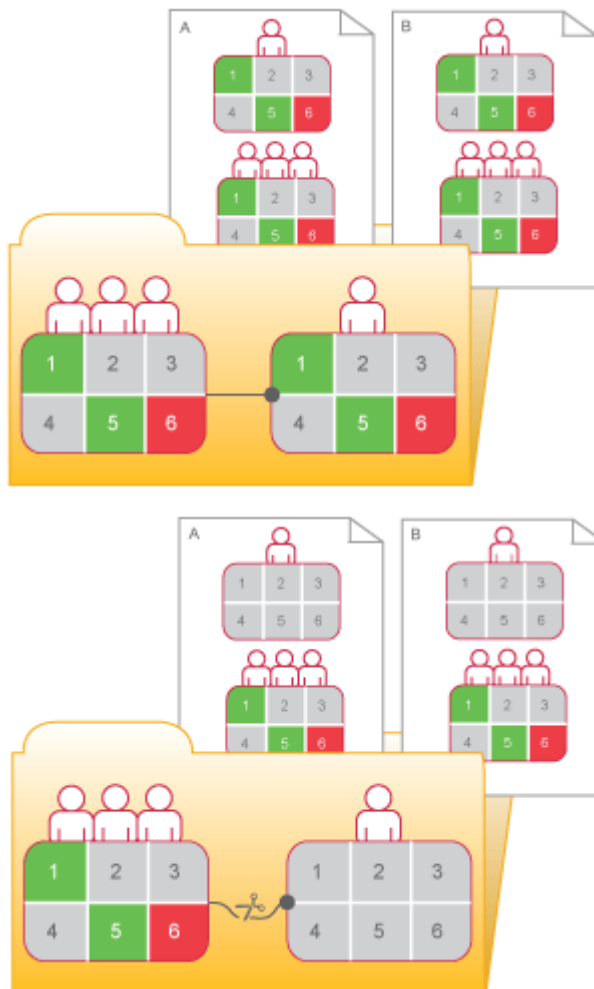
4.3 継承の破棄

継承を使用すると、オブジェクトごとにアクセス権を設定しなくても、セキュリティ設定を管理できます。ただし、場合によっては、アクセス権を継承しないようにする必要があります。たとえば、各オブジェクトの権限をカスタマイズする場合があります。オブジェクトのアクセスコントロールリストのプリンシパルに対して継承を無効にできます。これを行う場合は、グループ継承とフォルダ継承、あるいはその両方を無効にするか選択することができます。

① 注記

継承が破棄されると、すべてのアクセス権について継承が破棄されます。一部のアクセス権についてだけ継承を破棄して他のアクセス権は継承するということではできません。

“継承の破棄”の図では、グループとフォルダの継承が最初は有効です。赤いユーザが継承したアクセス権では、1と5は許可、2、3、4は指定なし、6は明示的に拒否されています。これらのアクセス権はグループに対してフォルダレベルで設定されます。したがって、赤いユーザとそのグループの他のすべてのメンバーは、フォルダのオブジェクト A と B に対してこれらのアクセス権を持っています。フォルダレベルでの継承が破棄されると、赤いユーザがこのフォルダのオブジェクトに対して持つアクセス権の組み合わせは、管理者が赤いユーザに新しいアクセス権を割り当てない限り、クリアされます。



継承の破棄

4.3.1 継承を無効にする

この手順では、オブジェクトのアクセスコントロールリストの主体に対して、グループ継承またはフォルダ継承（あるいはその両方）を無効にできます。

1. 継承を無効にするオブジェクトを選択します。
2. **管理** > **ユーザセキュリティ** をクリックします。
[ユーザセキュリティ]ダイアログボックスが表示されます。
3. 継承を無効にする主体を選択し、**セキュリティの割り当て** をクリックします。
[セキュリティの割り当て]ダイアログボックスが表示されます。
4. 継承を設定します。
 - グループ継承(主体がグループメンバーシップから継承するアクセス権)を無効にする場合は、**[親グループからの継承]**チェックボックスをオフにします。
 - フォルダ継承(オブジェクトがフォルダから継承するアクセス権)を無効にする場合は、**[親フォルダからの継承]**チェックボックスをオフにします。
5. **[OK]** をクリックします。

5 認証

5.1 概要

5.1.1 BI プラットフォームの認証オプション

認証とは、システムにアクセスしようとするユーザの身元情報を確認するプロセスです。権限管理とは、そのユーザが指定のオブジェクトに対して要求したアクションを実行するための十分なアクセス権を持っているかどうかを確認するプロセスです。

セキュリティプラグインにより、BI プラットフォームがユーザを認証する方法を拡張およびカスタマイズできます。セキュリティプラグインを使用すると、ユーザアカウントとグループをサードパーティシステムから BI プラットフォームにマップできるので、アカウントの作成および管理が簡単になります。サードパーティのユーザアカウントまたはグループを既存の BI プラットフォームユーザアカウントまたはグループにマップしたり、外部システム内のマップされた各エントリに対応する新しい Enterprise ユーザアカウントまたはグループを作成したりすることができます。

最新リリースでは、次の認証方法がサポートされています。

- Enterprise
- LDAP
- Windows AD
- SAP
- Oracle EBS
- Siebel
- JD Edwards
- PeopleSoft

BI プラットフォームは使用環境に合わせてカスタマイズできるので、認証やプロセスは、システムによって異なる場合があります。

5.2 Enterprise 認証

5.2.1 Enterprise 認証

Enterprise 認証とは、BI プラットフォームのデフォルトの認証方法で、最初にシステムをインストールしたときに自動的に有効になり、無効にできません。ユーザとグループを追加して管理する場合、そのユーザとグループの情報は BI プラットフォームのデータベース内に保持されます。BI プラットフォーム専用のアカウントとグループを作成する場合、またはサードパーティのディレクトリサーバにユーザとグループの階層をまだ設定していない場合は、デフォルトの Enterprise 認証を使用します。

関連情報

[Enterprise 認証の設定 \[62 ページ\]](#)

[Enterprise 設定を変更する \[63 ページ\]](#)

[一般的なパスワード設定を変更する \[63 ページ\]](#)

5.2.2 Enterprise 認証の設定

設定	オプション	説明
パスワード制限	大文字と小文字を含むパスワードを要求する	このオプションによって、少なくとも1つの大文字と1つの小文字がパスワードに含まれるようになります。
		① 注記 デフォルトでは、このオプションはオンになっています。管理者は、必要に応じて、このオプションをオフにできます。
	数値を含むパスワードを要求する	このオプションによって、少なくとも1つの数字がパスワードに含まれるようになります。
	特殊文字を含むパスワードを要求する	このオプションによって、少なくとも1つの特殊文字がパスワードに含まれるようになります。
	少なくとも N 文字を含む必要があります。 N の値	このオプションによって、パスワードは少なくとも N 文字の長さになります。
	N 文字を超えることはできません。 N の値:	このオプションにより、パスワードは N 文字を超えないようにします。
	以下の文字列の使用を禁止する	このオプションにより、パスワードに制限された一連の文字列が含まれないように強制できます。このデフォルト値は以下のとおりです。Password 12345678 administrator
ユーザ制限	N 日ごとにパスワードの変更を要求する	パスワードが障害にならないように、定期的な更新を強制できます。
	最近使用した N 個のパスワードの再使用を禁止する	パスワードが定期的に繰り返して使用されないように強制できます。
	N 分経過するまでパスワードの変更を禁止する	新しいパスワードをシステムに入力した直後に変更できないように強制できます。
	非アクティブ状態が N 日間を経過した場合にパスワードの変更を要求する	このオプションにより、非アクティブな日数が N 日間を経過した後にパスワードを変更するように強制できます。

設定	オプション	説明
	N 日経過後に初期パスワードの変更を要求する	このオプションにより、N 日間を経過した後に初期パスワードを変更するように強制できます。
ログオン制限	ログオンに N 回失敗した後はアカウントを無効にする	アカウントが無効にならずに、ユーザがシステムへのログオンを試行できる回数を指定できます。
	ログオン失敗回数を N 分後にリセットする	ログオン試行カウンタをリセットする時間間隔を指定できます。
	N 分後に再びアカウントを有効にする	N 回のログオン試行失敗後にアカウントを一時停止にさせる時間を指定できます。
データソース認証情報をログオン時に同期	ログオン時に、ユーザのログオン情報をデータソースログオン情報として有効化、更新する	ユーザがログオンした後にデータソース認証情報を有効にすることができます。
信用できる認証	信用できる認証を有効にする	信用できる認証設定用の設定を提供します。
OpenID 接続認証	OpenID 接続認証有効	OpenID 接続認証を有効にするには、 [OpenID 接続認証有効] チェックボックスをオンにします。OpenID 接続による認証では、BI プラットフォームで内部 Enterprise セッションが作成されます。

5.2.2.1 Enterprise 設定を変更する

1. CMC の [\[認証\]](#) 管理エリアを表示します。
2. [\[Enterprise\]](#) をダブルクリックします。
[\[Enterprise\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
3. 設定を変更します。

→ ヒント

すべての設定をデフォルトの値に戻すには、[\[リセット\]](#) をクリックします。

4. [\[更新\]](#) をクリックして、変更内容を保存します。

5.2.2.2 一般的なパスワード設定を変更する

① 注記

延長期間に使用されないアカウントが自動的に無効になることはありません。管理者が無効なアカウントを手動で削除する必要があります。

1. CMC の [認証] 管理エリアを表示します。
2. [Enterprise] をダブルクリックします。
[Enterprise] ダイアログボックスが表示されます。
3. 使用する各パスワード設定のチェックボックスをオンにして、必要であれば値を指定します。

次の表は、設定可能なパスワード関連の各設定の最小値と最大値を示します。

パスワード設定	デフォルト	最小値	推奨される最大値
以下の文字列の使用を禁止する	password 12345678 administrator	1 文字	25550 文字
少なくとも N 文字以上のパスワードを要求する	8 文字	6 文字	255 文字
N 文字を超えることはできません	255 文字	13 文字	255 文字
N 日ごとにパスワードの変更を要求する	30 日	2 日	100 日
最近使用した N 個のパスワードの再使用を禁止する	3 個	1 個	100 個
N 分経過するまでパスワードの変更を禁止する	0 分	0 分	100 分
非アクティブ状態が N 日間を経過した場合にパスワードの変更を要求する	20 日	2 日	365 日
N 日経過後に初期パスワードの変更を要求する	7 日	2 日	15 日
ログオンに N 回失敗した後はアカウントを無効にする	10 回	1 回	100 回
ログオン失敗回数を N 分後にリセットする	5 分	1 分後	100 分
N 分後に再びアカウントを有効にする	5 分	0 分	100 分

4. [更新] をクリックします。

5.3 LDAP 認証

5.3.1 LDAP 認証

BI プラットフォームでは、ユーザアカウントおよびグループアカウントの LDAP 認証をサポートしています。ユーザが LDAP ユーザ名とパスワードを使ってシステムにログオンできるようにするには、LDAP ユーザアカウント

を BI プラットフォームにマップする必要があります。LDAP アカウントをマップする場合、新しいアカウントを作成するか、既存の Enterprise アカウントにリンクできます。

LDAP 認証を設定して有効にする前に、LDAP ディレクトリが設定されていることを確認してください。詳細については、LDAP のマニュアルを参照してください。

管理者の以下のタスクに役立つよう、LDAP 設定ウィザードが提供されています。

- LDAP ホストの設定
- SSL 用の LDAP サーバの準備 (必要な場合)
- SiteMinder での LDAP プラグインの設定 (必要な場合)

SAP 認証アプリケーションを使用すると、BI プラットフォームへのユーザの認証方法を設定できます。

① 注記

AD に対して LDAP を設定すると、ユーザをマッピングすることができますが、シングルサインオンまたはデータベースへのシングルサインオンを設定できなくなります。ただし、SiteMinder や信用できる認証のような LDAP シングルサインオン方法も使用できます。

関連情報

[LDAP ホストを設定する \[65 ページ\]](#)

[LDAP グループのマッピング \[73 ページ\]](#)

[LDAP サーバまたは相互認証の SSL 設定 \[68 ページ\]](#)

[SiteMinder での LDAP プラグインの設定 \[72 ページ\]](#)

5.3.1.1 LDAP ホストを設定する

LDAP ホストを設定する前に、LDAP サーバをインストールして実行中にしておくことをお勧めします。

1. ナビゲーション一覧から、[\[認証\]](#) を選択し、CMC の [\[認証\]](#) 管理エリアに移動します。
2. [\[LDAP\]](#) をダブルクリックします。
3. 初めて LDAP 認証を設定する場合、[\[LDAP 設定ウィザードの起動\]](#) をクリックします。
4. [\[LDAP ホストの追加 \(ホスト名:ポート\)\]](#) フィールドに LDAP ホストの名前とポート番号 (たとえば、"myserver:123") を入力し、[\[追加\]](#) をクリックし、[\[次へ\]](#) をクリックします。

→ ヒント

フェールオーバーに使用するホストを追加する場合は、この手順を繰り返して、同じサーバタイプの LDAP ホストを複数追加します。ホストを削除するには、ホスト名を強調表示して [\[削除\]](#) をクリックします。

5. [\[LDAP サーバの種類\]](#) 一覧からサーバのタイプを選択します。

① 注記

LDAP を AD にマッピングしている場合は、サーバの種類として [\[Microsoft Active Directory Application Server\]](#) を選択します。

6. LDAP サーバ属性マッピングまたは LDAP デフォルト検索属性を表示または変更する場合は、[\[属性マッピングの表示\]](#) をクリックします。

デフォルトでは、サポートされている各サーバタイプのサーバ属性マッピングおよび検索属性は設定済みです。

7. [\[次へ\]](#) をクリックします。
8. [\[ベース LDAP 識別名\]](#) フィールドに、LDAP サーバの識別名 (たとえば、o=SomeBase) を入力し、[\[次へ\]](#) をクリックします。
9. [\[LDAP サーバ管理認証情報\]](#) エリアに、ディレクトリへの読み取りアクセス権を持つユーザアカウントの識別名とパスワードを入力します。

管理者認証情報は不要です。

LDAP サーバで匿名バインドを許可する場合は、このエリアを空白のままにします。BI プラットフォームサーバとクライアントは、匿名ログオンを介してプライマリホストにバインドされます。

10. LDAP ホストに紹介を設定している場合は、[\[LDAP 紹介の認証情報\]](#) エリアに認証情報を入力し、[\[紹介のホップ最大数\]](#) フィールドに紹介ホップの数を入力します。

[\[LDAP 紹介の認証情報\]](#) エリアは、次のすべての条件に該当する場合に設定する必要があります。

- プライマリホストが、指定された基準でエントリのクエリを処理する別のディレクトリサーバに紹介されるように設定されている。
- 紹介されるホストは、匿名バインドを許可しないように設定されている。
- 紹介されるホストからのグループが、BI プラットフォームにマップされる。

① 注記

グループは複数のホストからマップできますが、設定できる紹介認証情報は 1 組のみです。したがって、紹介ホストが複数ある場合は、各ホストのユーザアカウントを作成するときに同じ識別名とパスワードを使用しなければなりません。

① 注記

[\[紹介のホップ最大数\]](#) を 0 に設定すると、紹介は行われません。

11. [\[次へ\]](#) をクリックします。
12. 使用する Secure Sockets Layer (SSL) 認証の種類を選択します。

- [Basic \(SSL なし\)](#)
- [サーバ認証](#)
- [相互認証](#)

サーバ認証および相互認証の詳細と前提条件については、後の節で説明します。いずれかの種類の SSL を使用して LDAP 認証を正常に設定するために、この手順を先に進める前に、このドキュメント内の LDAP サーバまたは相互認証の SSL 設定を読んでください。

13. [\[次へ\]](#) をクリックして、LDAP シングルサインオン認証の方法を選択します。
- [Basic \(SSL なし\)](#)
 - [SiteMinder](#)

14. [\[次へ\]](#) をクリックして、BI プラットフォームアカウントへのエイリアスとユーザのマッピング方法を選択します。
- a. [\[新しいエイリアスのオプション\]](#) エリアを使用して、Enterprise アカウントに新しいエイリアスをマップする方法を指定します。
- [追加した各 LDAP エイリアスを同一名のアカウントに割り当てる](#)
このオプションは、複数のユーザが同じ名前の Enterprise アカウントを持っている場合、つまり LDAP エイリアスが既存のユーザに割り当てられる (自動エイリアス作成がオンである) 場合に使用します。既存の Enterprise アカウントを持っていないユーザや Enterprise と LDAP で同じアカウント名を使用していないユーザは、新しいユーザとして追加されます。
 - [追加するすべての LDAP エイリアスに新しいアカウントを作成する](#)
このオプションは、ユーザごとに新しいアカウントを作成する場合に使用します。
- b. [\[エイリアス更新オプション\]](#) エリアで、Enterprise アカウントのエイリアスの更新を管理する方法を選択します。
- [エイリアスの更新時に新しいエイリアスを作成する](#)
このオプションを使用すると、BI プラットフォームにマップされたすべての LDAP ユーザに対して、新しいエイリアスを自動的に作成します。新しい LDAP アカウントが BI プラットフォームアカウントを持たないユーザに対して作成されます。または [追加するすべての LDAP エイリアスに新しいアカウントを作成する](#) を選択している場合は、新しい LDAP アカウントがすべてのユーザに対して作成されます。
 - [ユーザのログオン時にのみ新しいエイリアスを作成する](#)
マッピングしている LDAP ディレクトリに多くのユーザが含まれており、その一部のユーザだけが BI プラットフォームを使用する場合に、このオプションを使用します。プログラムは、すべてのユーザに対してエイリアスや Enterprise アカウントを自動で作成するわけではありません。代わりに、BI プラットフォームにログオンするユーザだけにエイリアスを (必要な場合は、アカウントも) 作成します。
- c. [\[新しいユーザのオプション\]](#) エリアで、新しいユーザを作成する方法を指定します。
- [新しいユーザを登録ユーザとして作成する](#)
登録ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。登録ユーザライセンスは特定のユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムにアクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。このオプションを使用して作成したユーザアカウントに使用できる登録ユーザライセンスを持っている必要があります。

④ 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログオンセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが 11 番目の同時ログオンセッションにログインしようとする、該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの 1 つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログオンセッションの数に制限はありません。

- [新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する](#)
同時接続ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少ないユーザ数の同時接続ライセンスで多数のユーザをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザがプラットフォームにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。

15. ユーザ属性マッピングを設定する場合、または、電子メールアドレスを LDAP サーバからインポートする予定がある場合は、この手順を実行します。[属性バインディングオプション] エリアで、LDAP プラグインの属性バインディングの優先順位を指定します。
- a. [フルネーム、電子メールアドレス、およびその他の属性のインポート] ボックスをクリックします。
LDAP アカウントで使用するフルネームと説明がインポートされ、ユーザオブジェクトとともにシステムに格納されます。
 - b. [別の属性バインディングに関連する LDAP 属性バインディングの優先順位を設定する] のオプションを指定します。

④ 注記

オプションが [1] に設定されている場合は、LDAP およびその他のプラグイン (Windows AD および SAP) が有効なシナリオでは、LDAP 属性が優先されます。オプションが「3」に設定されている場合は、その他の有効化プラグインの属性が優先されます。

16. [完了] をクリックします。

関連情報


[LDAP サーバまたは相互認証の SSL 設定 \[68 ページ\]](#)

[SiteMinder での LDAP プラグインの設定 \[72 ページ\]](#)

5.3.2 LDAP サーバまたは相互認証の SSL 設定

この節には、LDAP に対する SSL に基づくサーバまたは相互認証に関する詳細な情報が含まれます。SSL に基づく認証の設定には、事前ステップが必要です。ここでは、CMC での LDAP サーバ認証および相互認証の設定について、詳細な情報を説明します。ここで説明する内容は、LDAP ホストが設定済みであり、SSL 認証用に以下のいずれかを選択していることを前提にしています。

その他の情報、または LDAP ホストサーバ設定の情報については、LDAP ベンダーのドキュメントを参照してください。

Windows システムの場合、デフォルトの SSL 通信は TLS 1.2 を介して行われます。Linux システムについては、SAP ノート [2623529](#)  を参照してください。

関連情報

[LDAP ホストを設定する \[65 ページ\]](#)

5.3.2.1 LDAP サーバまたは相互認証を設定する

リソース	このタスクを開始する前に実行する操作
CA 証明書	<p>この操作は、SSL を用いる、サーバ認証および相互認証の両方で必要です。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 認証機関 (CA) を取得し、CA 証明書を生成します。2. LDAP サーバにその証明書を追加します。 <p>詳細については、LDAP ベンダーのマニュアルを参照してください。</p>
サーバ証明書	<p>この操作は、SSL を用いる、サーバ認証および相互認証の両方で必要です。</p> <ol style="list-style-type: none">1. サーバ証明書を要求し、生成します。2. その証明書を承認し、その後 LDAP サーバに追加します。
cert7.db または cert8.db、key3.db	<p>これらのファイルは、SSL を用いる、サーバ認証および相互認証の両方で必要です。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 要件に応じて、cert7.db または cert8.db ファイルを生成する certutil アプリケーションを https://developer.mozilla.org/en-US/docs/NSS/tools からダウンロードします。2. CA 証明書を certutil アプリケーションと同じディレクトリにコピーします。3. 次のコマンドを使用して、cert7.db または cert8.db ファイルと、key3.db および secmod.db ファイルを生成します。 <pre>certutil -N -d .</pre> <ol style="list-style-type: none">4. 次のコマンドを使用して、cert7.db または cert8.db ファイルに CA 証明書を追加します。 <pre>certutil -A -n <CA_alias_name> -t CT -d . -I cacert.cer</pre> <ol style="list-style-type: none">5. BI プラットフォームをホストするコンピュータのディレクトリに、これら 3 つのファイルを保存します。
cacerts	<p>このファイルは、BI ラUNCHパッドのような Java アプリケーションの SSL を用いる相互認証に必要です。</p> <ol style="list-style-type: none">1. Java bin ディレクトリの keytool ファイルを探します。2. 次のコマンドを使用して、cacerts ファイルを作成します。 <pre>keytool -import -v -alias <CA_alias_name> -file <CA_certificate_name> -trustcacerts -keystore</pre> <ol style="list-style-type: none">3. cert7.db または cert8.db ファイル、および key3.db ファイルと同じディレクトリに cacerts ファイルを保存します。

クライアント証明書

1. cert7.db または cert8.db ファイル、および .keystore ファイルのそれぞれに対してクライアント要求を作成します。
 - LDAP プラグインを設定するには、certutil アプリケーションを使用してクライアント証明書要求を生成します。
 - 次のコマンドを使用して、クライアント証明書要求を生成します。

```
certutil -R -s "<client_dn>" -a  
-o <certificate_request_name>  
-d .
```

<client_dn> には、"CN=<client_name>、
OU=<org unit>、O=<Companyname>、
L=<city>、ST=<province>、および
C=<country>" のような情報が含まれます。

2. CA を使用して、この証明書要求を認証します。次のコマンドを使用して証明書を取得し、cert7.db または cert8.db ファイルにその証明書を挿入します。

```
certutil -A -n <client_name> -t  
Pu -d . -I  
<client_certificate_name>
```

3. SSL を用いた Java 認証を容易に行うには、次の操作を実行します。
 - Java bin ディレクトリにある keytool ユーティリティを使用して、クライアント証明書要求を生成します。
 - 次のコマンドを使用して、キーペアを生成します。

```
keytool -genkey  
-keystore .keystore
```

4. クライアントに関する情報を指定した後で、次のコマンドを使用して、クライアント証明書要求を生成します。

```
keytool -certreq -file  
<certificate_request_name>  
-keystore .keystore
```

5. クライアント証明書要求が CA に承認された後で、次のコマンドを使用して、CA 証明書を .keystore ファイルに追加します。

```
keytool -import -v -alias  
<CA_alias_name> -file  
<ca_certificate_name>  
-trustcacerts -keystore .keystore
```

6. CA からクライアント証明書要求を取得し、次のコマンドを使用して、それを .keystore ファイルに追加します。

```
keytool -import -v -file  
<client_certificate_name>  
-trustcacerts -keystore .keystore
```

7. BI プラットフォームをホストするコンピュータの cert7.db または cert8.db ファイル、および cacerts ファイルと同じディレクトリに .keystore ファイルを保存します。

1. 使用する SSL セキュリティのレベルを選択します。

初めて LDAP 設定ウィザードを使用して LDAP 認証を設定する場合、[SSL 認証の種類](#) リストから [相互認証](#) を選択し、[次へ](#) をクリックします。または、LDAP 認証設定を再度行う場合、CMC の [\[認証\]](#) エリアに移動し、[\[LDAP\]](#) をダブルクリックします。[LDAP サーバの設定の概要](#) ページが表示されます。[SSL タイプ](#) の値をクリックし、[SSL 認証の種類](#) リストから [相互認証](#) を選択します。

- [サーバの証明書を常時許可する](#)

これはセキュリティが最も低いオプションです。LDAP ホストとの SSL 接続を確立して LDAP ユーザとグループを認証する前に、BI プラットフォームは、LDAP ホストからセキュリティ証明書を受信する必要があります。BI プラットフォームは、受信する証明書を検証しません。

- [信頼できる認証機関からのサーバの証明書のみ許可する](#)

これはセキュリティが中程度のオプションです。LDAP ホストとの SSL 接続を確立して LDAP ユーザとグループを認証する前に、BI プラットフォームは、LDAP ホストから送信されたセキュリティ証明書を受け取り、それを検証する必要があります。証明書を検証するために、BI プラットフォームは証明書データベースを検索して、その証明書を発行した CA を確認する必要があります。

- [信頼できる認証機関からのサーバの証明書であり、証明書の CN 属性とサーバの DNS ホスト名が一致する場合のみ許可する](#)

これはセキュリティが最も高いオプションです。LDAP ホストとの SSL 接続を確立して LDAP ユーザとグループを認証する前に、BI プラットフォームは、LDAP ホストから送信されたセキュリティ証明書を受け取り、それを検証する必要があります。証明書を検証するために、BI プラットフォームは証明書データベースを検索して、その証明書を発行した CA を確認し、サーバ証明書の CN 属性が、ウィザードの最初の手順で [\[LDAP ホストの追加\]](#) ボックスに入力した LDAP ホスト名と完全に一致することを確認する必要があります (LDAP ホスト名に [「ABALONE.rd.crystald.net:389」](#) と入力した場合)。証明書で [CN =ABALONE:389](#) として使用されている場合は、機能しません。

サーバセキュリティ証明書のホスト名は、プライマリ LDAP のホスト名です。このオプションを選択した場合は、フェールオーバー LDAP ホストを使用できません。

① 注記

Java アプリケーションは、最初と最後の設定を無視し、信頼できる CA からのサーバ証明書のみを受け入れます。

2. [\[SSL ホスト\]](#) ボックスに各コンピュータのホスト名を入力し、[\[追加\]](#) をクリックします。

次に、BI プラットフォーム SDK を使用する BI プラットフォームデプロイメントの各コンピュータのホスト名を追加する必要があります。これには、Central Management Server を実行中のコンピュータ、および Web アプリケーションサーバを実行中のコンピュータが含まれます。

3. 一覧に追加した各 SSL ホストに SSL 設定を指定します。

- a. SSL 一覧から [\[デフォルト\]](#) を選択します。
- b. [\[デフォルト値を使用\]](#) チェックボックスをオフにします。
- c. [\[証明書とキーデータベースファイルのパス\]](#) ボックスおよび [\[キーデータベースのパスワード\]](#) ボックスに値を入力します。
- d. 相互認証の設定を指定している場合は、[\[認証データベースでのクライアント認証用ニックネーム\]](#) ボックスに値を入力します。

① 注記

デフォルト設定は、任意のホストの [\[デフォルト値を使用\]](#) チェックボックスがオンになっている設定、または SSL ホストの一覧に名前を追加しないすべてのコンピュータに対して使用されます。

4. 一覧にない各ホストのデフォルト設定を指定して、[\[次へ\]](#) をクリックします。
別のホストの設定を指定するには、ホスト名を左側のリストで選択し、右側のボックスに値を入力します。

① 注記

デフォルト設定は、任意のホストの [\[デフォルト値を使用\]](#) チェックボックスがオンになっている設定、または SSL ホストの一覧に名前を追加しないすべてのコンピュータに対して使用されます。

5. LDAP シングルサインオン認証の方法として [\[Basic \(SSL なし\)\]](#) または [\[SiteMinder\]](#) を選択します。
6. 新しい LDAP ユーザおよびエイリアスの作成方法を選択します。
7. [完了](#) をクリックします。

関連情報

[SiteMinder での LDAP プラグインの設定 \[72 ページ\]](#)

5.3.3 SiteMinder での LDAP プラグインの設定

ここでは、LDAP と SiteMinder を併用するように CMC を設定する方法を説明します。SiteMinder はサードパーティ製のユーザアクセスおよび認証ツールであり、LDAP セキュリティプラグインとともに使用して BI プラットフォームへのシングルサインオンを作成できます。

BI プラットフォームで SiteMinder と LDAP を使用するには、次の 2 つの箇所で設定を変更する必要があります。

- CMC を介した LDAP プラグイン
- BOE.war ファイルのプロパティ

① 注記

SiteMinder 管理者が 4.x エージェントに対するサポートを有効にしていることを確認してください。これは、ご使用の SiteMinder のサポートされているバージョンにかかわらず、実行する必要があります。SiteMinder の詳細とインストール方法については、SiteMinder のマニュアルを参照してください。

関連情報

[LDAP ホストを設定する \[65 ページ\]](#)

5.3.3.1 SiteMinder を使用したシングルサインオン用に LDAP に設定する

1. 次のいずれかの方法を使用して、[\[SiteMinder 設定を入力してください\]](#)画面を開きます。
 - LDAP 設定ウィザードの[\[LDAP シングルサインオン認証の方法を選択してください\]](#)画面で SiteMinder を選択します。
 - LDAP を設定済みで SSO を追加している場合に使用できる LDAP 認証画面で[\[シングルサインオンの種類\]](#)を選択します。
2. [\[ポリシーサーバホスト\]](#)ボックスに各ポリシーサーバ名を入力し、[\[追加\]](#)をクリックします。
3. それぞれのポリシーサーバホストについて、[\[アカウントポート\]](#)、[\[認証ポート\]](#)、および[\[承認ポート\]](#)の番号を指定します。
4. [\[エージェント名\]](#)に名前、[\[共有シークレット\]](#)に共有シークレットを入力します。共有シークレットを [\[共有シークレットの確認\]](#) ボックスに再度入力します。
5. [\[次へ\]](#)をクリックします。
6. LDAP オプションの設定に進みます。

5.3.4 LDAP グループのマッピング

LDAP 設定ウィザードを使用して LDAP ホストを設定すると、LDAP グループを Enterprise グループにマップできるようになります。

LDAP グループをマップすると、[\[認証\]](#) 管理領域で LDAP オプションをクリックして、そのグループを表示できます。LDAP 認証が設定されていれば、BI プラットフォームにマップされた LDAP グループが[\[マップされた LDAP メンバーグループ\]](#) エリアに表示されます。

① 注記

また、Windows AD グループをマップして、LDAP セキュリティプラグインを介して BI プラットフォームで認証することもできます。

① 注記

AD に対して LDAP を設定している場合、この手順によって AD グループがマッピングされます。

5.3.4.1 BI プラットフォームを使用して LDAP グループをマップする

1. CMC の [\[認証\]](#) 管理エリアに移動します。
2. [\[LDAP\]](#) をダブルクリックします。

LDAP 認証が設定されていると、LDAP サマリページが表示されます。

3. [\[マップされた LDAP メンバーグループ\]](#) エリアの [\[LDAP グループの追加 \(cn または dn ごと\)\]](#) フィールドに LDAP グループを (共通名または識別名で) 指定して、[\[追加\]](#) をクリックします。

複数の LDAP グループを追加するには、この手順を繰り返します。グループを削除するには、LDAP グループを強調表示して [\[削除\]](#) をクリックします。

4. [\[新しいエイリアスのオプション\]](#) エリアを使用して、Enterprise アカウントに LDAP エイリアスをマップする方法を指定するためのオプションを選択します。
 - [追加した各 LDAP エイリアスを同一名のアカウントに割り当てる](#)
このオプションは、複数のユーザが同じ名前でも既存の Enterprise アカウントを持っている場合、つまり LDAP エイリアスが既存のユーザに割り当てられる (自動エイリアス作成がオンである) 場合に使用します。既存の Enterprise アカウントを持っていないユーザや Enterprise と LDAP で同じアカウント名を使用していないユーザは、新しい LDAP ユーザとして追加されます。
 - [追加するすべての LDAP エイリアスに新しいアカウントを作成する](#)
このオプションは、ユーザごとに新しいアカウントを作成する場合に使用します。
5. [\[エイリアス更新オプション\]](#) エリアで、すべての新しいユーザに対して LDAP エイリアスを自動的に作成するかどうかを指定するためのオプションを選択します。
 - [エイリアスの更新時に新しいエイリアスを作成する](#)
このオプションを使用すると、BI プラットフォームにマップされたすべての LDAP ユーザに対して、新しいエイリアスを自動的に作成します。新しい LDAP アカウントが BI プラットフォームアカウントを持たないユーザに対して作成されます。または [\[追加するすべての LDAP エイリアスに新しいアカウントを作成する\]](#) を選択し、[\[更新\]](#) をクリックしている場合は、新しい LDAP アカウントがすべてのユーザに対して作成されます。
 - [ユーザのログオン時にのみ新しいエイリアスを作成する](#)
マッピングしている LDAP ディレクトリに多くのユーザが含まれており、その一部のユーザだけが BI プラットフォームを使用する場合に、このオプションを使用します。プログラムは、すべてのユーザに対してエイリアスや Enterprise アカウントを自動で作成するわけではありません。代わりに、BI プラットフォームにログオンするユーザだけにエイリアスを (必要な場合は、アカウントも) 作成します。
6. BI プラットフォームのライセンスがユーザロールに基づいている場合は、[\[新しいユーザのオプション\]](#) エリアで、LDAP アカウントにマップするために作成された新しい Enterprise アカウントのプロパティを指定するオプションを選択します。
 - [新しいユーザを登録ユーザとして作成する](#)
登録ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。登録ユーザライセンスは特定のユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムにアクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。このオプションを使用して作成したユーザアカウントに使用できる登録ユーザライセンスを持っている必要があります。

④ 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログオンセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが 11 番目の同時ログオンセッションにログインしようとする、

該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの1つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログオンセッションの数に制限はありません。

- **新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する**

同時接続ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少ないユーザ数の同時接続ライセンスで多数のユーザをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザがシステムにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。

7. **[更新]** をクリックします。

5.3.4.2 BI プラットフォームを使用して LDAP グループをマップ解除する

1. CMC の**[認証]**管理エリアを表示します。
2. **[LDAP]**をダブルクリックします。

LDAP 認証が設定されていると、LDAP サマリページが表示されます。
3. **[マップされた LDAP メンバグループ]**エリアで、削除する LDAP グループを選択します。
4. **[削除]**をクリックし、**[更新]**をクリックします。

このグループのユーザは BI プラットフォームにアクセスできません。

① 注記

ユーザが Enterprise アカウントに対するエイリアスを持つ場合のみ、この例外となります。アクセスを制限するには、ユーザの Enterprise アカウントを無効にするか、または削除します。

すべてのグループの LDAP 認証を拒否するには、**[LDAP 認証を有効にする]** チェックボックスをオフにしてから、**[更新]** をクリックします。

5.4 Windows AD 認証

5.4.1 Windows AD 認証

BI プラットフォームでは、ユーザアカウントおよびグループアカウントの Windows AD 認証をサポートしています。ユーザが Windows AD ユーザ名とパスワードを使ってシステムにログオンできるようにするには、Windows AD ユーザアカウントを BI プラットフォームにマップする必要があります。

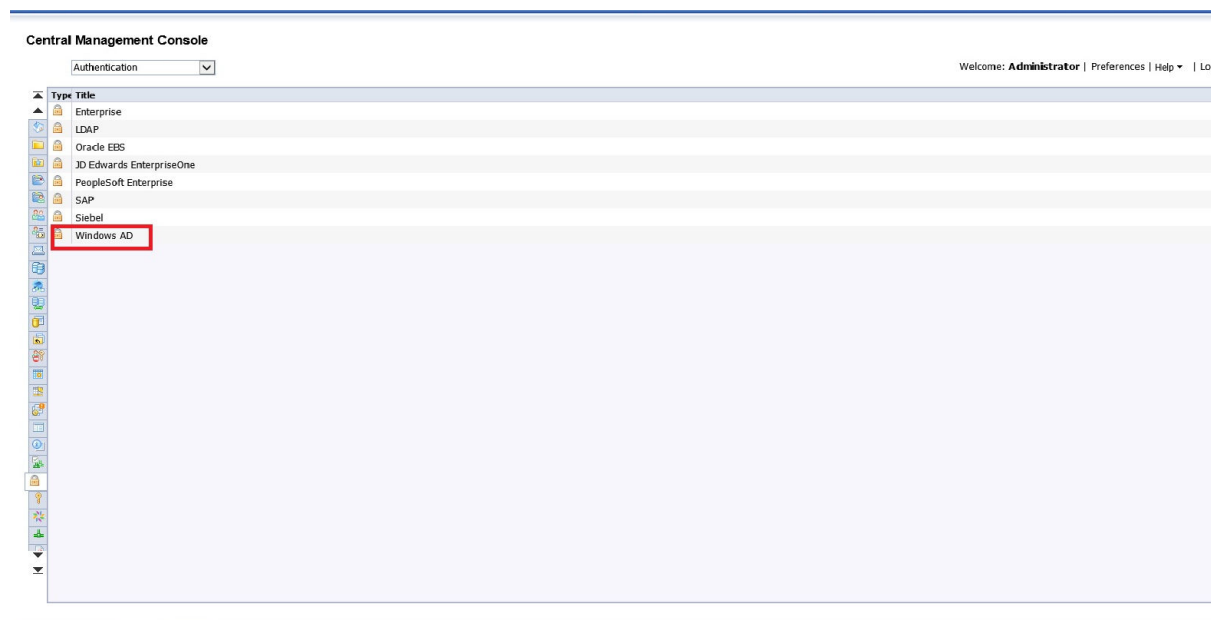
基本の Windows AD 認証ワークフロー

BI プラットフォームで AD 認証を設定する場合は、次のワークフローに従う必要があります。

1. Windows AD セキュリティプラグインを有効にし、ユーザおよびグループをマップします。
2. 認証方法を選択します。
 - Windows AD と Kerberos の併用
 - Windows AD と NTLM の併用
3. BI プラットフォームアプリケーションへのシングルサインオンを設定します。このオプションの手順は、次の方法によって実行できます。
 - Windows AD と Kerberos の併用
 - Windows AD と NTLM の併用
 - Windows AD と SiteMinder の併用

5.4.2 Windows AD セキュリティプラグイン

Windows AD セキュリティプラグインを使用すると、AD 2008 のユーザデータベースから BI プラットフォームにユーザアカウントとグループをマップできます。また、すべてのログオンリクエストを検証し、AD 認証を指定することができます。ユーザは、AD ユーザデータベースに照会されて認証を受け、マップされた AD グループのメンバーシップが検証されると、アクティブなセッションを Central Management Server (CMS) から許可されます。プラグインを使用して、インポートされた AD グループの更新を設定できます。



Windows AD セキュリティプラグインでは、次の設定もできます。

- Kerberos での Windows AD 認証
- NTLM での Windows AD 認証
- シングルサインオンに対応する SiteMinder での Windows AD 認証

AD セキュリティプラグインは、ネイティブモードまたは混在モードで動作する AD 2008 ドメインに対応しています。

AD ユーザとグループをマップすると、これらのユーザとグループは [\[Windows AD\]](#) 認証オプションを使用して BI プラットフォームクライアントツールにアクセスできるようになります。

- Windows AD 認証は CMS が Windows で実行されている場合に機能します。データベースへの SSO を使用するには、Windows 上でレポーティングサーバも実行されている必要があります。それ以外の場合は、他のすべてのサーバとサービスを、BI プラットフォームでサポートされるすべてのプラットフォームで実行できます。

① 注記

設定は、SUSE Linux Enterprise 11 でのみ行われ、テストされています。

- BI プラットフォーム対応の Windows AD プラグインは、複数のフォレスト内のドメインをサポートします。

5.4.3 Windows AD 認証を設定する

使用するプロトコル (Kerberos または NTLM) に関係なく、次の手順を実行して AD ユーザを認証できるようにする必要があります。これらの手順には、Windows AD ユーザとグループをマップする手順と、更新をスケジュールする手順が含まれています。以下の手順には、SiteMinder を使用して Windows AD を設定する手順は含まれていません。

1. CMC の [\[認証\]](#) 管理エリアを表示します。
2. [\[Windows AD\]](#) をダブルクリックします。
3. [\[Windows Active Directory\(AD\)を有効にする\]](#) ボックスがオンになっていることを確認します。
4. [\[Windows AD 設定の概要\]](#) エリアで、[\[AD 管理名\]](#) の横にあるリンクをクリックします。

① 注記

Windows AD プラグインを設定する前は、このリンクは 2 つの二重引用符で表示されます。設定が保存されると、リンクには AD 管理名が表示されます。

5. 有効なドメインユーザアカウントの名前とパスワードを入力します。BI プラットフォームでは、このアカウントを使用して AD の情報をクエリします。

管理認証情報では、以下の形式の 1 つを使用できます。

- NT 名(ドメイン名¥ユーザ名)
- UPN(user@DNS_domain_name)

BI プラットフォームでは、AD のコンテンツを変更、追加、または削除しません。情報を読み取るだけなので、適切な権限のみ必要です。

① 注記

AD 認証は、AD ディレクトリの読み取りに使用された AD アカウントが無効になった場合には維持されません(たとえば、アカウントのパスワードが変更または期限切れになった場合やアカウントが無効になった場合)。

6. [\[デフォルトの AD ドメイン\]](#) フィールドに入力します。

① 注記

- デフォルトのドメインにあるグループは、ドメイン名のプレフィックスを指定しなくてもマップすることができます。
- デフォルトの AD ドメイン名を入力すると、デフォルトドメインのユーザが AD 認証で BI プラットフォームにログインする際に、AD ドメイン名を指定する必要がなくなります。

7. [マップされた AD メンバークラップ] エリアで、[AD グループの追加(ドメイン¥グループ)] フィールドに AD ドメイン¥グループを入力します。

グループは以下の形式の 1 つを利用してマップできます。

- NT 名とも呼ばれるセキュリティアカウントマネージャのアカウント名(SAM)(ドメイン名¥グループ名)
- DN(cn=GroupName,, dc=DomainName, dc=com)

① 注記

ローカルの AD グループをマップする場合、“¥サーバ名¥グループ名”という形式で入力する必要があります。Windows AD は、ローカルユーザーをサポートしません。これは、マップされたローカルグループに所属するローカルユーザは、BI プラットフォームにマップされないことを意味します。このため、ローカルユーザはシステムにアクセスできません。

8. [追加] をクリックします。

グループが一覧に追加されます。

9. [認証のオプション] の下から次のいずれかを選択します。

- NTLM 認証を使用する
- Kerberos 認証を使用する

Kerberos を選択した場合は、データベースへのシングルサインオンを設定するときに、セキュリティコンテキストをキャッシュするよう選択する必要があります。Kerberos 認証設定には、CMC の範囲外のリソースが必要です。Kerberos を使用した Windows AD 認証の設定の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence Platform* 管理者ガイドを参照してください。

① 注記

Kerberos と Windows AD 認証に対して BI プラットフォームを設定するには、サービスアカウントが必要です。新しいドメインアカウントを作成することも、既存のドメインアカウントを使用することもできます。サービスアカウントは、BI プラットフォームサーバの実行に使用されます。[サービスプリンシパル名] フィールドに、サービスアカウントのアカウントとドメイン、またはサービスアカウントへの SPN マッピングを入力します。次の形式を使用します。ここで、**svcacct** は、以前に作成したサービスアカウント名または SPN で、**DNS.COM** は大文字での完全修飾ドメイン名です。

10. Windows AD ユーザとグループに対してシングルサインオンを設定する場合は、[選択した認証モードでのシングルサインオン (SSO) を有効にする] を選択します。
11. ログイン時に Windows AD ユーザのデータソース認証情報を有効化し、更新するために、[認証情報の同期] エリアで、このオプションを選択します。このことにより、ユーザの現在のログイン認証情報を使用してデータソースが同期化されます。
12. [AD エイリアスのオプション] エリアで、BI プラットフォームでの新しいエイリアスの追加および更新方法を指定します。
 - a. [新しいエイリアスのオプション] を使用して、Enterprise アカウントに新しいエイリアスをマップする方法を指定できます。次のいずれか 1 つを選択します。

- **同じ名前の既存のユーザアカウントに新しいADエイリアスをそれぞれ割り当てる**
このオプションは、複数のユーザが同じ名前で既存の Enterprise アカウントを持っている場合、つまり AD エイリアスが既存のユーザに割り当てられる(自動エイリアス作成がオンである)場合に使用します。既存の Enterprise アカウントを持っていないユーザや Enterprise と AD で同じアカウント名を使用していないユーザは、新しいユーザとして追加されます。
 - **新しいADエイリアスごとに新しいユーザアカウントを作成する**
このオプションは、ユーザごとに新しいアカウントを作成する場合に使用します。
- b. **[エイリアス更新オプション]**で、Enterprise アカウントのエイリアスの更新を管理する方法を選択します。次のいずれか1つを選択します。
- **エイリアスの更新時に新しいエイリアスを作成する**
このオプションを使用すると、BI プラットフォームにマップされたすべての AD ユーザに対して、新しいエイリアスを自動的に作成します。新しい AD アカウントが BI プラットフォームアカウントを持たないユーザに対して作成されます。または **[新しいADエイリアスごとに新しいユーザアカウントを作成する]** オプションを選択し、**[更新]** をクリックしている場合は、新しい AD アカウントがすべてのユーザに対して作成されます。
 - **ユーザのログオン時にのみ新しいエイリアスを作成する**
マッピングしている AD ディレクトリに多くのユーザが含まれており、その一部のユーザだけが BI プラットフォームを使用する場合に、このオプションを使用します。プログラムは、すべてのユーザに対してエイリアスや Enterprise アカウントを自動で作成するわけではありません。代わりに、BI プラットフォームにログオンするユーザだけにエイリアスを (必要な場合は、アカウントも) 作成します。
- c. **[新しいユーザのオプション]**で、次のいずれか1つを選択して新しいユーザの作成方法を指定します。
- **新しいユーザを登録ユーザとして作成する**
登録ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。登録ユーザライセンスは特定のユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムにアクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。このオプションを使用して作成したユーザアカウントに使用できる登録ユーザライセンスを持っている必要があります。
 - **新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する**
同時接続ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少ないユーザ数の同時接続ライセンスで多数のユーザをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザがシステムにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。
13. AD エイリアスの更新のスケジュール方法を設定するには、**[AD エイリアスの更新をスケジュール]**をクリックします。
- a. **[スケジュール]** ダイアログボックスで、**[オブジェクトの実行]** ドロップダウンリストから繰り返しを選択します。
 - b. 必要に応じて、その他のスケジュールオプションやパラメータをすべて設定します。
 - c. **[スケジュール]** をクリックします。
エイリアスの更新が行われると、グループチャートも更新されます。
14. **[属性バインディングオプション]** エリアで、次のオプション設定を選択します。
- **フルネームと電子メールアドレスのインポート**
このオプションを選択すると、AD ユーザアカウントのフルネームと説明が、BI プラットフォームにユーザオブジェクトとともにインポートされて保存されます。
 - **AD 属性バインディングの優先順位はLDAP 属性バインディングよりも上に設定する**

このオプションを選択すると、AD 属性は、Windows AD と LDAP の両方が有効なシナリオで優先されます。

15. [\[AD グループオプション\]](#) エリアで、AD グループチャートの更新を設定できます。

- a. [\[AD グループ更新をスケジュールする\]](#) をクリックします。
[\[スケジュール\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
- b. [\[オブジェクトの実行\]](#) ドロップダウンリストから繰り返しを選択します。
- c. 必要に応じて、その他のスケジュールオプションやパラメータをすべて設定します。
- d. [\[スケジュール\]](#) をクリックします。

更新がスケジュールされ、指定したスケジュールに従って実行されます。AD グループアカウントに対して次にスケジュールされている更新は、[\[AD グループチャートのオプション\]](#) で確認できます。

16. [\[オンデマンド AD の更新\]](#) エリアの設定を使用して、更新内容を指定します。次のいずれかのオプションを選択できます。

- [AD グループを今すぐ更新する](#)
このオプションは、グループチャートを更新する場合に選択します。更新は、[\[更新\]](#) をクリックしないと実行されません。

① 注記

このオプションは、スケジュールされているグループチャートの更新すべてに影響します。次にスケジュールされているグループチャートの更新が [\[AD グループチャートのオプション\]](#) にリストされます。

- [AD グループとエイリアスを今すぐ更新する](#)
このオプションは、グループチャートおよびユーザーエイリアスを更新する場合に選択します。更新は、[\[更新\]](#) をクリックしないと実行されません。

① 注記

このオプションは、スケジュールされているグループチャートまたは更新すべてに影響します。次にスケジュールされている更新は、[\[AD グループチャートのオプション\]](#) および [\[AD エイリアスのオプション\]](#) にリストされます。

- [AD グループとエイリアスを今すぐ更新しない](#)
[\[更新\]](#) をクリックしても、グループもユーザーエイリアスも更新されません。

① 注記

このオプションは、スケジュールされているグループまたはエイリアスの更新すべてに影響します。次にスケジュールされている更新は、[\[AD グループオプション\]](#) および [\[AD エイリアスのオプション\]](#) にリストされます。

17. [\[更新\]](#) をクリックします。

18. [\[OK\]](#) をクリックします。

5.4.4 Windows AD グループをマップする

グループをインポートする前に、Windows AD 認証を有効化する必要があります。

Windows AD 認証アプリケーションは、認証の設定と Windows AD グループのマップの両方に使用します。以下の手順を使用して、Windows AD グループをマップします。

1. CMC の [認証] 管理エリアを表示します。
2. [Windows AD] をダブルクリックします。
3. [Windows Active Directory(AD)を有効にする]ボックスがオンになっていることを確認します。
4. [Windows AD 設定の概要] エリアで、[AD 管理名] の横にあるリンクをクリックします。
5. 有効なドメインユーザアカウントの名前とパスワードを入力します。BI プラットフォームでは、このアカウントを使用して AD の情報をクエリします。

管理認証情報では、以下の形式の 1 つを使用できます。

- NT 名 (DomainName¥UserName)
- UPN (user@DNS_domain_name)

BI プラットフォームでは、AD のコンテンツを変更、追加、または削除しません。情報を読み取るだけであるので、適切な権限のみ必要です。

④ 注記

AD 認証は、AD ディレクトリの読み取りに使用された AD アカウントが無効になった場合には維持されません(たとえば、アカウントのパスワードが変更または期限切れになった場合やアカウントが無効になった場合)。

6. [デフォルトの AD ドメイン]フィールドに入力します。

④ 注記

- デフォルトのドメインにあるグループは、ドメイン名のプレフィックスを指定しなくてもマップすることができます。
- デフォルトの AD ドメイン名を入力すると、デフォルトドメインのユーザが AD 認証で BI プラットフォームにログオンする際に、AD ドメイン名を指定する必要がなくなります。

7. [マップされた AD メンバーグループ] エリアで、[AD グループの追加 (ドメイン¥グループ)] フィールドに AD ドメイン¥グループを入力します。

グループは以下の形式の 1 つを利用してマップできます。

- NT 名とも呼ばれるセキュリティアカウントマネージャのアカウント名 (SAM)
(DomainName¥GroupName)
- DN(cn=GroupName,, dc=DomainName, dc=com)

④ 注記

ローカルの AD グループをマップする場合、“¥サーバ名¥グループ名”という形式で入力する必要があります。Windows AD は、ローカルユーザーをサポートしません。これは、マップされたローカルグループに所属するローカルユーザは、BI プラットフォームにマップされないことを意味します。このため、ローカルユーザはシステムにアクセスできません。

8. [追加] をクリックします。
9. [マップされた AD メンバーグループ] エリアで、[AD グループの検索 (ドメイン¥グループ)] フィールドに AD ドメイン¥グループを入力します。

これにより、一覧で目的のグループが検索されます。また、[表示] を選択して、AD グループの完全な一覧を個別のダイアログボックスで表示することもできます。

10. [更新] をクリックします。

11. [\[OK\]](#) をクリックします。

5.5 SAP 認証

5.5.1 SAP 認証

SAP 認証によって、SAP ユーザは自分の SAP ユーザ名とパスワードを使用して、BI プラットフォームにログインすることができます。これらのパスワードは、BI プラットフォームに保存する必要はありません。また、SAP 認証では、ユーザのロールに関する情報を SAP 内に保持し、このロール情報を BI プラットフォーム内で使用して、管理タスクの実行権限やコンテンツへのアクセス権限を割り当てることもできます。

SAP 認証アプリケーションを使用すると、BI プラットフォームへのユーザの認証方法の設定および SAP システムからのロールのインポートと更新を行うことができます。

このアプリケーションは、以下の表で説明するように 4 つのタブに分かれています。

タブ	説明
権限認証システム	BI プラットフォームと統合される SAP システムを識別するための設定があります。
ロールのインポート	BI プラットフォームにインポートするロールを識別するための設定があります。
SNC 設定	目的の SAP システムと BI プラットフォーム間でセキュアネットワークコミュニケーション (SNC) を設定するための設定があります。
オプション	SAP 認証を有効化するための設定があります。このタブには以下の設定もあります。 <ul style="list-style-type: none">• 接続オプション• BI プラットフォームへのユーザのインポート方法• SAP シングルサインオン (SSO) サービスをセットアップするキーファイルのインポート
ユーザの更新	インポートされた SAP ロールの更新のスケジュールと実行に関する設定があります。

関連情報

[SAP 権限認証システムへの接続 \[83 ページ\]](#)

[SAP 認証オプションの設定 \[84 ページ\]](#)

[SAP ロールのインポート \[88 ページ\]](#)

[SAP ロールとユーザの更新 \[90 ページ\]](#)

[セントラル管理コンソールで SNC を設定する \[92 ページ\]](#)

5.5.2 SAP 権限認証システムへの接続

BI プラットフォームにロールをインポートするか BW コンテンツを公開する前に、統合する SAP 権限認証システムに関する情報を提供する必要があります。BI プラットフォームは、ロールメンバーシップを特定したり SAP ユーザを認証したりするときに、この情報を使用してターゲットの SAP システムに接続します。

5.5.2.1 SAP 権限認証システムを追加する

1. CMC の [\[認証\]](#) 管理エリアを表示します。
2. [\[SAP\]](#) リンクをダブルクリックします。

権限認証システムの設定が表示されます。

→ ヒント

権限認証システムが [\[論理システム名\]](#) リストにすでに表示されている場合は、[\[新規\]](#) をクリックします。

3. [\[システム\]](#) フィールドに、SAP システムの 3 文字のシステム ID (SID) を入力します。
4. [\[クライアント\]](#) フィールドに、BI プラットフォームがログオンする際に使用する必要のあるクライアント番号を入力します。
システム情報とクライアント情報が結合され、[\[論理システム名\]](#) リストにエントリが追加されます。
5. [\[無効\]](#) チェックボックスがオフになっていることを確認します。

① 注記

[\[無効\]](#) チェックボックスを使用して、特定の SAP システムが一時的に使用不可になっていることを BI プラットフォームに示します。

6. BI プラットフォームが必ずメッセージサーバを介してログオンするように負荷分散を設定している場合は、[\[メッセージサーバ\]](#) フィールドと [\[ログオングループ\]](#) フィールドに適切な値を入力します。

① 注記

特にデプロイメントが 1 つのマシンに限定されていない場合は、負荷分散を有効にするために、BI プラットフォームマシン上の Services ファイルに適切なエントリを作成しておく必要があります。つまり、CMS のホストとなっているマシン、Web アプリケーションサーバ、および認証アカウントと認証設定を管理しているすべてのマシンのアカウントを作成しておく必要があります。

7. 負荷分散を設定しなかった場合、または SAP システムに BI プラットフォームを直接ログオンさせる場合、[\[アプリケーションサーバ\]](#) フィールドと [\[システム番号\]](#) フィールドに適切な値を入力します。
8. [\[ユーザ名\]](#) フィールド、[\[パスワード\]](#) フィールド、および [\[言語\]](#) フィールドには、BI プラットフォームが SAP にログオンする際に使用する SAP アカウントのユーザ名、パスワード、および言語コードをそれぞれ入力します。

① 注記

これらのログオン情報は、BI プラットフォームに対して作成したユーザアカウントに一致する必要があります。

9. [\[更新\]](#) をクリックします。

複数の権限認証システムを追加する場合、[オプション] タブをクリックし、BI プラットフォームがデフォルトで使用するシステム、すなわち、SAP 認証情報を使用してログオンしようとしているユーザが、特定の SAP システムを指定していない場合にユーザ認証のためにアクセスするシステムを指定します。

5.5.2.2 権限認証システムが正しく追加されているかどうかを確認する

1. [ロールのインポート] タブをクリックします。
2. [論理システム名] リストから該当する権限認証システムの名前を選択します。

権限認証システムが正しく追加されている場合は、[利用可能なロール] リストに、インポートできるロールのリストが表示されます。

→ ヒント

[論理システム名] リストにロールが表示されない場合は、そのページのエラーメッセージを確認してください。このエラーメッセージには、問題を修正するために必要な情報が示される場合があります。

5.5.3 SAP 認証オプションの設定

SAP 認証には、BI プラットフォームと SAP システムを統合する場合に指定可能な、数多くのオプションがあります。オプションには、次のようなものがあります。

- SAP 認証を有効化または無効化する
- 接続設定を指定する
- インポートされたユーザを BI プラットフォームライセンスモデルにリンクする
- SAP システムへのシングルサインオンの設定

5.5.3.1 SAP 認証オプションを設定する

1. CMC の [認証] 管理エリアに移動します。
2. [SAP] リンクをダブルクリックし、[オプション] タブをクリックします。
3. 必要に応じて、以下の設定を確認および変更します。

設定	説明
SAP 認証を有効にする	SAP 認証を無効にするには、このチェックボックスの選択を解除します。

① 注記

特定の SAP システムの SAP 認証を無効にする場合は、[権限認証システム] タブでそのシステムの [無効] チェックボックスをオンにします。

コンテンツフォルダルート

BI プラットフォームが CMC および BI ラUNCHパッドで BW フォルダ構造の複製を開始する場所を指定します。

デフォルトでは /SAP/2.0 に設定されていますが、別のフォルダに変更できます。値を変更する場合は、CMC およびコンテンツ管理ワークベンチの両方で変更する必要があります。

デフォルトシステム

SAP 認証を使用してログオンしようとしているユーザが、特定の SAP システムを指定していない場合にユーザ認証のためにアクセスする BI プラットフォームの SAP 権限認証システムを選択します。

① 注記

デフォルトシステムを選択した場合、そのシステムのユーザは、Live Office や Universe Designer などのクライアントツールから SAP 認証を使用して接続するときにシステム ID またはクライアントを入力する必要がありません。たとえば、デフォルトシステムとして SYS~100 が設定されている場合に、SAP 認証が選択されていると、SYS~100/user1 は user1 としてログオンできます。

権限認証システムへのアクセス試行の最大失敗数

BI プラットフォームが認証要求を実行するために SAP システムへのアクセスを再試行する回数を入力します。

値に「-1」を設定すると、プラットフォームは、権限認証システムへのアクセスを何度でも試行できるようになります。値に「0」を設定すると、BI プラットフォームは、権限認証システムに1度だけアクセスを試行します。

① 注記

この設定を [権限認証システムを無効な状態で維持 [秒数]] と使用して、一時的に使用不可になっている SAP 権限認証システムを BI プラットフォームにどのように処理させるかを設定します。2つのオプションを基に、使用不可になっている SAP システムとの通信を停止/再開するタイミングが決定されます。

権限認証システムを無効な状態で維持 [秒数]

SAP システムに対するユーザ認証を再開するまでの BI プラットフォームの待機時間を秒数で入力します。

たとえば、[権限認証システムの最大失敗アクセス数] に「3」を入力すると、BI プラットフォームでは、任意の SAP

設定	説明
	システムに対するユーザ認証の試行失敗が最大 3 回まで許可されます。4 回目の試行失敗で、システムに対するユーザ認証の試行が指定されている時間だけ停止されます。
システムあたりの最大同時接続数	<p>SAP システムに対して同時に開いたままにしておくことのできる接続の最大数を指定します。</p> <p>たとえば、「2」を入力すると、BI プラットフォームは SAP に対して 2 つの接続を開いたままにします。</p>
1 接続あたりの使用数	<p>接続ごとの SAP システムへの最大オペレーション数を指定します。</p> <p>たとえば、[システムあたりの最大同時接続数] が「2」に設定されており、[1 接続あたりの使用数] が「3」に設定されている場合、1 接続に 3 つのログオンがあると、BI プラットフォーム] はその接続を閉じてから再開します。</p>
同時接続ユーザと登録ユーザ	<p>同時接続ユーザライセンスまたは登録ユーザライセンスのどちらかを使用するように新規のユーザアカウントを設定します。</p> <p>同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少数の同時接続ライセンスで大規模なユーザベースをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザがシステムにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。</p> <p>登録ユーザライセンスはユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムにアクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。</p>

① 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログオンセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが 11 番目の同時ログオンセッションにログインしようとする、該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの 1 つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログオンセッションの数に制限はありません。

① 注記

ここで選択するオプションは、BI プラットフォームにインストールされたユーザライセンスの数や種類を変更するものではありません。お使いのシステムで適切なライセンスを利用できることが必要です。

フルネーム、電子メールアドレス、およびその他の属性のインポート

SAP 認証プラグインの優先度レベルを指定します。

SAP アカウントで使用するフルネームと説明がインポートされ、ユーザオブジェクトとともに BI プラットフォームに格納されます。

別の属性バインディングに関連する SAP 属性バインディングの優先順位を設定する

SAP ユーザ属性 (フルネームと電子メールアドレス) をバインドする優先順位を指定します。

オプションが 1 に設定されている場合は、SAP およびその他のプラグイン (Windows AD および LDAP) が有効なシナリオでは、SAP 属性が優先されます。オプションが 3 に設定されている場合は、その他の有効化プラグインの属性が優先されます。バインディングは、異なる値に設定する必要があります。複数の認証プラグインを同じバインディング値に設定すると、予期しない結果が発生します。

以下のオプションを設定して、SAP シングルサインオンサービスを設定します。

設定	説明
システム ID	SAP シングルサインオンサービスを実行したときに、BI プラットフォームが SAP システムに提供するシステム ID です。
参照	クリックして、SAP シングルサインオンを有効化するために生成された keystore ファイルをアップロードします。ファイルへの完全パスを手動で入力することもできます。
キーストアパスワード	keystore ファイルへのアクセスに必要なパスワードを入力します。
秘密鍵パスワード	keystore ファイルに対応する証明書へのアクセスに必要なパスワードを入力します。証明書は、SAP システムに保存されています。
秘密鍵エイリアス	keystore ファイルへのアクセスに必要なエイリアスを入力します。

4. [更新](#)をクリックします。

5.5.3.2 コンテンツルートフォルダを変更する

1. CMC の[\[認証\]](#)管理エリアを表示します。

2. [SAP]リンクをダブルクリックします。
3. [オプション]をクリックし、[コンテンツフォルダルート]フィールドにフォルダ名を入力します。
このフィールドに入力するフォルダ名は、BI プラットフォームが BW フォルダ構造の複製を開始するフォルダの名前です。
4. [更新]をクリックします。
5. BW コンテンツ管理ワークベンチで、[Enterprise システム]を展開します。
6. [利用可能なシステム]を展開し、BI プラットフォームが接続しているシステムをダブルクリックします。
7. [レアウト] タブをクリックし、BI プラットフォームでルート SAP フォルダとして使用するフォルダ (/SAP/2.0/ など) を [コンテンツベースフォルダ] に入力します。

5.5.4 SAP ロールのインポート

SAP のロールを BI プラットフォームにインポートすることで、ロールメンバーが通常の SAP ログオン情報を使用して BI プラットフォームにログオンできるようになります。また、シングルサインオンを有効にすると、SAP ユーザは SAP GUI または SAP Enterprise Portal 内からレポートにアクセスする際に自動的に BI プラットフォームにログオンできるようになります。

① 注記

SSO を使用可能にするためには、通常、多くの要求事項があります。たとえば、SSO に対応したドライバやアプリケーションの使用や、サーバと Web サーバが同じドメインにあることの確認などがそれに含まれます。

BI プラットフォームはインポートされたロールごとにグループを生成します。各グループは命名規則「<SystemID~ClientNumber@NameOfRole>」に従って命名されます。CMC の [ユーザとグループ] 管理エリアに新しいグループが表示されます。また、これらのグループを使用して、BI プラットフォーム内でオブジェクトセキュリティを定義できます。

公開用に BI プラットフォームを設定する場合、およびロールを BI プラットフォームにインポートする場合、次の 3 つの主要ユーザカテゴリについて考えます。

- **BI プラットフォーム管理者**
Enterprise 管理者は、SAP からコンテンツを公開できるよう、システムを設定します。BI プラットフォームで、適切なロールをインポートし、必要なフォルダを作成して、これらのロールやフォルダへの権限の割り当てを行います。
- **コンテンツ公開者**
コンテンツ公開者は、コンテンツをロールに公開する権限を持つユーザです。このユーザカテゴリの目的は、レポートを公開する権限を持つユーザを通常のロールメンバーと区別することです。
- **ロールメンバー**
ロールメンバーは、“コンテンツに関連した”ロールに属しているユーザです。つまり、これらのユーザは、レポートが公開されるロールに属しています。メンバーになっているロールに公開されたすべてのレポートに対する、[表示](#)、[オンデマンドでの表示](#)、[スケジュール](#)の権限を持ちます。ただし、通常のロールメンバーは、新しいコンテンツや、コンテンツの更新バージョンを公開することはできません。

最初に公開する前に、コンテンツ公開者ロールとコンテンツ保持ロールのすべてを BI プラットフォームにインポートしておく必要があります。

① 注記

各ロールでの作業は、それぞれ固有にしておくことをお勧めします。たとえば、管理者ロールからの公開が可能でも、公開はコンテンツ公開者ロールからのみ行うようにします。ただし、コンテンツ公開者ロールは、

コンテンツを公開できるユーザを定義することだけが目的です。そのため、コンテンツ公開者ロールにはコンテンツを含めないようにして、コンテンツ公開者から、通常のロールメンバーがアクセスできる、コンテンツを保持するロールに公開するようにします。

5.5.4.1 SAP ロールをインポートする

1. CMC の[[認証](#)]管理エリアを表示します。
2. [[SAP](#)]リンクをダブルクリックします。
3. [[オプション](#)] タブで、使用権許諾契約に応じて、[[同時接続ユーザ](#)] または [[登録ユーザ](#)] を選択します。
このオプションは、BI プラットフォームにインストールされたユーザライセンスの数や種類を変更するものではありません。お使いのシステムで適切なライセンスを利用できることが必要です。
4. [[更新](#)]をクリックします。
5. [[ロールのインポート](#)] タブで、[[論理システム名](#)] リストから、該当する権限認証システムを選択します。
6. [[利用可能なロール](#)] エリアで、インポート対象のロールを選択し、[[追加](#)] をクリックします。
7. [[更新](#)]をクリックします。

5.5.4.2 ロールとユーザが正しくインポートされているか確認する

このタスクを開始する前に、BI プラットフォームにマップしたロールの1つに属している SAP ユーザのユーザ名およびパスワードをメモしておいてください。

1. Java BI ラUNCHパッドの場合は、<http://<webserver>:<portnumber>/BOE/BI> にアクセスします。
[<webserver>](#) を Web サーバの名称に、[<portnumber>](#) を BI プラットフォームのポート番号に置き換えます。入力する Web サーバ、ポート番号および URL を管理者に確認する必要がある場合があります。
2. [[認証の種類](#)] リストで、[[SAP](#)] を選択します。

① 注記

BI ラUNCHパッドでは、[[認証の種類](#)] 一覧はデフォルトで非表示になっています。一覧が非表示の場合、システム管理者に BIlaunchpad.properties ファイル内の [[認証の種類](#)] 一覧を有効にするように依頼し、アプリケーションサーバを再起動します。

3. ログオンする SAP システムとシステムクライアントを入力します。
4. マップしたユーザのユーザ名とパスワードを入力します。
5. [[ログオン](#)] をクリックします。

選択したユーザとして BI ラUNCHパッドにログオンされます。

5.5.4.3 SAP ロールとユーザの更新

SAP 認証を有効化した後、BI プラットフォームにインポート済みのマップされたロールに対する定期的な更新をスケジュールし、実行する必要があります。このことにより、SAP ロールの情報を、BI プラットフォームに正確に反映できます。

SAP ロールの更新を実行し、スケジュールするためのオプションは 2 つあります。

- **ロールのみを更新:** このオプションを使用すると、BI プラットフォームにインポート済みの現在マップされているロール間のリンクのみを更新します。頻繁に更新を実行する予定があり、システムリソースの使用状況に懸念がある場合に、このオプションを使用することをお勧めします。SAP ロールを更新するだけでは、新しいユーザアカウントは作成されません。
- **ロールとエイリアスを更新:** このオプションを使用すると、ロール間のリンクを更新するだけでなく、SAP システムのロールに追加されたユーザエイリアス用の新しいユーザアカウントを BI プラットフォームに作成します。

① 注記

SAP 認証を有効化しているときに、更新時にユーザエイリアスを自動で作成するよう指定していない場合は、新しいエイリアスに対してアカウントは作成されません。

5.5.4.3.1 SAP ロールの更新をスケジュールする

BI プラットフォームにロールをマップしたら、ロールの更新方法を指定する必要があります。

1. **[ユーザの更新]** タブをクリックします。
2. **[ロールのみを更新]** セクションまたは **[ロールとエイリアスを更新]** エリアで **[スケジュール]** をクリックします。

→ ヒント

すぐに更新を実行する場合は、**[今すぐ更新]** をクリックします。

→ ヒント

頻繁に更新をするためシステムリソースに懸念がある場合は、**[ロールのみを更新]** オプションを使用します。ロールとエイリアスの両方を更新するには、より多くの時間がかかります。

[繰り返し] ダイアログボックスが表示されます。

3. **[オブジェクトの実行]** リストからオプションを選択し、必要なスケジュール情報を表示されたフィールドにすべて入力します。

更新をスケジュールする場合、次の表に示した定期スケジュールパターンの中から選択することができます。

定期スケジュールパターン	説明
時間単位	更新は毎時間実行されます。開始時間、開始日、終了日を指定します。

定期スケジュールパターン	説明
日単位	更新は、毎日または <n> 日おきに実行されます (<n> はユーザが指定した日数)。開始時間、開始日、終了日を指定できます。
週単位	更新は、毎週、1 週間に 1 回または 1 週間に数回実行されます。実行日、開始時間、開始日、終了日を指定できます。
月単位	更新は毎月または数カ月ごとに実行されます。開始時間、開始日、終了日を指定できます。
N 日	更新は毎月指定された日付に実行されます。実行する日にち、時間、開始および終了日を指定することができます。
第 1 月曜日	更新は毎月第 1 月曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
月末日	オブジェクトは毎月末日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
第 N 週の X 日	更新は毎月特定の週の特定の曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
カレンダー	更新は、すでに作成されているカレンダーで指定した日付に実行されます。

4. [スケジュール] をクリックします。
 今回のスケジュールされたロールの更新の日付が、[ユーザの更新] タブに表示されます。

→ ヒント

今回のスケジュールされた更新をキャンセルするには、[ロールのみを更新] エリアまたは [ロールとエリアスを更新] エリアで [スケジュールされた更新のキャンセル] をクリックします。

5.5.5 Secure Network Communication との統合のためのワークフロー

BI プラットフォームは SAP コンポーネント間の認証やデータの暗号化のための Secure Network Communication (SNC) を実装する環境をサポートします。SAP 暗号ライブラリ (または SNC インタフェースを使用するその他の外部セキュリティ製品) を導入した場合、セキュリティ保護された環境内で BI プラットフォームを効果的に統合するために、一部の追加の設定を行う必要があります。

BI プラットフォームを設定して Secure Network Communication を使用するには、次のタスクを完了する必要があります。

1. 適切なユーザアカウントで起動/実行できるよう、BI プラットフォームサーバを設定します。
2. BI プラットフォームシステムを信頼するよう SAP システムを設定します。
3. セントラル管理コンソール内の SNC リンクで SNC を設定します。
4. SAP ロールとユーザを BI プラットフォームにインポートします。

関連情報

5.5.5.1 セントラル管理コンソールで SNC を設定する

SNC を設定する前に、BI プラットフォームに新しい権限認証システムを追加し、SNC ライブラリファイルが指定のディレクトリにあることを確認して、このファイルを指す環境変数 `<RFC_LIB>` を作成する必要があります。

1. [SAP 認証] ページの [SNC 設定] タブをクリックします。
2. [論理システム名] リストから該当する権限認証システムを選択します。
3. [基本設定] の [セキュアネットワークコミュニケーション (SNC) の有効化] を選択します。
4. .unx ユニバースまたは OLAP BICS 接続を使用するように SAP 認証を設定しており、STS を使用する予定の場合は、[セキュリティで保護されていない RFC 接続の禁止] チェックボックスを選択します。
5. [デフォルトを使用する] オプションを選択してライブラリへのデフォルトのパスを使用するか、[カスタムパスを定義] オプションを選択して別の場所を選択します。
Web アプリケーションサーバと CMS は同じ OS タイプ上にあり、暗号ライブラリへのパスが同じである必要があります。
6. [保護品質] で保護のレベルを選択します。
たとえば、[認証] を選択します。

① 注記

保護のレベルはカスタマイズ可能であるため、組織のニーズと SNC ライブラリの機能に合うように設定できます。

7. [相互認証の設定] に SAP システムの SNC 名を入力します。
SNC 名の形式は SNC ライブラリに依存します。SAP 暗号ライブラリを使用している場合、識別名は LDAP の命名規則に従い、接頭辞として `p:` を付けることが推奨されます。
8. BI プラットフォームサーバの実行時に使用する認証情報の SNC 名が [Enterprise システムの SNC 名] ボックスに表示されていることを確認します。
9. [更新] をクリックします。

関連情報

SAP 権限認証システムへの接続 [83 ページ]

5.6 Oracle EBS 認証

5.6.1 Oracle EBS 認証

Oracle EBS 認証によって、ユーザは自分の EBS ユーザ名とパスワードを使用して、BI プラットフォームにログインすることができます。これらのパスワードは、システムに保存する必要はありません。

Oracle EBS 認証アプリケーションを使用すると、BI プラットフォームへのユーザの認証方法の設定と EBS システムからのロールのインポートを行うことができます。

このアプリケーションは、以下の表で説明するように 4 つのタブに分かれています。

タブ	説明
オプション	Oracle EBS 認証を有効化する設定と、新しいエイリアス、エイリアスの更新、および新しいユーザの処理方法を定義するオプションがあります。
システム	BI プラットフォームがアクセスする Oracle EBS システムのユーザとサービスの設定があります。
職責	ロールを BI プラットフォームにインポートするための設定があります。
ユーザの更新	インポートされた Oracle EBS ロールの更新のスケジュールと実行に関する設定があります。

関連情報

[Oracle E-Business Suite 認証を有効化する \[93 ページ\]](#)

[Oracle E-Business Suite ロールをマップする \[95 ページ\]](#)

[Oracle EBS ロールの更新をスケジュールする \[98 ページ\]](#)

5.6.2 Oracle EBS 認証の有効化

BI プラットフォームで Oracle EBS 情報を使用できるようにするには、Oracle EBS システムの認証方法に関する情報が BI プラットフォームに必要です。

5.6.2.1 Oracle E-Business Suite 認証を有効化する

手順を実行する前に、以下の手順に従って、Oracle DLL および JAR ファイルを BI プラットフォーム にデプロイする必要があります。

1. Oracle データベースクライアントアプリケーションから `ojdbc11.dll` をダウンロードします。

2. ファイルを以下の場所にコピーします。
 - Windows: <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64
 - UNIX: <INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/platform
 3. Oracle データベースクライアントアプリケーションから ojdbc5.jar をダウンロードします。
 4. ファイルを以下の場所にコピーします。
 - Windows: <INSTALLDIR>%Tomcat%lib
 - UNIX: <INSTALLDIR>/sap_bobj/tomcat/lib
 1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
 2. [管理]領域で[[認証](#)]をクリックします。
 3. [[Oracle EBS](#)]をクリックします。
[[Oracle EBS](#)]ページが表示されます。[[オプション](#)]、[[システム](#)]、[[職責](#)]、および[[ユーザの更新](#)]の4つのタブがあります。
 4. [[オプション](#)]タブでは、[[Oracle EBS 認証を有効にする](#)]チェックボックスを選択します。
 5. BI プラットフォームのデプロイメントに応じて、[[新しいエイリアス](#)]、[[更新オプション](#)]、および[[新しいユーザのオプション](#)]を適切に変更します。[[更新](#)]をクリックして変更を保存してから、[[システム](#)]タブに移動します。
 6. [[システム](#)]タブをクリックします。
 7. [[Oracle EBS システムユーザ](#)]エリアで、BI プラットフォームが Oracle E-Business Suite データベースにログオンするために使用する、データベースのユーザ名とパスワードを入力します。
 8. [[Oracle EBS サービス](#)]領域で、Oracle EBS 環境で使用するサービス名を入力して、[[追加](#)]をクリックします。
 9. [[更新](#)]をクリックして、変更内容を保存します。
- ここで、Oracle EBS ロールをシステムにマップする必要があります。

関連情報

[Oracle E-Business Suite ロールをマップする \[95 ページ\]](#)

5.6.3 BI プラットフォームへの Oracle E-Business Suite ロールのマップ

BI プラットフォームでは、マップするそれぞれの Oracle E-Business Suite (EBS) ロールのグループが自動的に作成されます。また、マップされた Oracle E-Business Suite のロールのメンバーを表すエイリアスも作成されます。

作成されたエイリアスごとにユーザアカウントを1つ作成できます。ただし、複数のシステムを実行し、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている場合は、BI プラットフォームでアカウントを作成する前に、同じ名前の1つのエイリアスに各ユーザを割り当てることができます。

これを行うことで、システムで同じユーザに対して作成されるアカウントの数を減らすことができます。

たとえば、EBS のテスト環境と実稼動環境を実行しており、30 人のユーザが両方のシステムへのアクセス権を持っている場合は、これらのユーザに対してアカウントが 30 個だけ作成されます。各ユーザを同じ名前の1つのエ

イリアスに割り当てない場合は、BI プラットフォーム内の 30 人のユーザに対して 60 個のアカウントが作成されます。

ただし、複数のシステムを実行し、ユーザ名が重なる場合は、作成されるエイリアスごとに新しいメンバーアカウントを作成する必要があります。

たとえば、Russell Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は "raquino")でテスト環境を実行しており、Raoul Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は "raquino")で実稼動環境を実行している場合は、各ユーザのエイリアスに対して個別のアカウントを作成する必要があります。作成しない場合、これらの 2 人のユーザは同じ BI プラットフォームアカウントに追加されます。この 2 人のユーザは、独自の Oracle EBS 認証情報を使用してシステムにログインでき、両方の EBS 環境からデータにアクセスできます。

5.6.3.1 Oracle E-Business Suite ロールをマップする

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログインします。
2. [管理]領域で[認証]をクリックします。
3. [Oracle EBS]をクリックします。
[Oracle EBS]ページに[オプション]タブが表示されます。
4. [新しいエイリアスのオプション]エリアで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **追加した各 Oracle EBS エイリアスを同一名のアカウントに割り当てる**
このオプションは、複数の Oracle E-Business Suite システムを実行し、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている(および各ユーザがシステムごとに異なるユーザ名を持っている)場合に選択します。
 - **追加するすべての Oracle EBS エイリアスに新しいアカウントを作成する**
このオプションは、Oracle E-Business Suite システムを 1 つだけ実行している場合、またはユーザの多くがシステムのいずれか 1 つのアカウントを持っている場合、あるいは、2 つ以上のシステムで異なるユーザに対して同じユーザ名が使用されている場合に選択します。
5. [更新オプション]エリアで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **エイリアスの更新時に新しいエイリアスを作成する**
このオプションは、BI プラットフォームにマップされるすべてのユーザに新しいエイリアスを作成する場合に選択します。新しいアカウントが BI プラットフォームアカウントを持たないユーザに対して追加されます。または[追加するすべての Oracle EBS エイリアスに新しいアカウントを作成する]オプションを選択した場合は、新しいアカウントがすべてのユーザに対して追加されます。
 - **ユーザのログイン時にのみ新しいエイリアスを作成する**
このオプションは、マップするロールに多くのユーザが含まれているが、その一部のユーザのみが BI プラットフォームを使用する場合に選択します。BI プラットフォームは、ユーザに対してエイリアスやアカウントを自動で作成しません。代わりに、BI プラットフォームに初めてログインしたユーザに対してのみエイリアス(必要な場合は、アカウントも)を作成します。これはデフォルトのオプションです。
6. [新しいユーザのオプション]で、新しいユーザを作成する方法を指定し、[更新]をクリックします。

次のいずれかのオプションを選択します。

- **新しいユーザを登録ユーザとして作成する**
登録ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。登録ユーザライセンスは特定のユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムにアクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。このオプションを使用して作成したユーザアカウントに使用できる登録ユーザライセンスを持っている必要があります。

① 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログオンセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが 11 番目の同時ログオンセッションにログインしようとする、該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの 1 つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログオンセッションの数に制限はありません。

- **新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する**

同時接続ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少ないユーザ数の同時接続ライセンスで多数のユーザをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザがプラットフォームにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。

選択したロールが BI プラットフォームにグループとして表示されます。

7. [職責] タブをクリックします。
8. [現在の Oracle EBS サービス] で、マップするロールを含む Oracle EBS サービスを選択します。
9. [マップされた Oracle EBS ロール] で、Oracle EBS ユーザに対してフィルタを指定できます。
 - a. [アプリケーション] リストから、新しいロールで使用するアプリケーションを選択します。
 - b. [職責] リストで、ユーザが実行できる Oracle アプリケーション、機能、レポート、同時プログラムを選択します。
 - c. [セキュリティグループ] のセキュリティグループで、新しいロールが割り当てられるセキュリティグループを選択します。
 - d. [現在のロール] の下にある[追加] ボタンと [削除] ボタンを使用して、ロールに対するセキュリティグループの割り当てを変更します。
10. [更新] をクリックします。

これらのロールが BI プラットフォームにマップされます。

BI プラットフォームにロールをマップしたら、これらのロールの更新方法を指定する必要があります。

5.6.3.2 マップされたロールへのユーザの追加

すでに BI プラットフォームにマップされているロールにユーザを追加する場合は、そのロールを再マップして、ユーザを BI プラットフォームに追加する必要があります。ロールを再マップする場合は、ユーザを登録ユーザまたは同時接続ユーザとしてマップするオプションは、ロールに追加した新しいユーザにのみ影響します。

たとえば、最初に [“新しいユーザを指定ユーザとして作成する”] オプションを選択して、ロールを BI プラットフォームにマップします。後から同じロールにユーザを追加して、[“新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する”] オプションを選択してロールを再マップします。

この場合、ロールの新しいユーザだけが同時接続ユーザとして BI プラットフォームにマップされ、すでにマップされているユーザは登録ユーザのままになります。最初に同時接続ユーザとしてユーザをマップし、その後に変更を変更して新しいユーザを登録ユーザとして再マップした場合も同じです。

5.6.3.3 ロールのマップ解除

特定のユーザグループを BI プラットフォームにログオンさせないようにするには、ユーザグループが属しているロールのマップを解除します。

5.6.3.3.1 ロールをマップ解除する

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
2. [管理]領域で[認証]をクリックします。
3. ロールをマップ解除する ERP システムの名前をダブルクリックします。
ERP システムのページに [オプション] タブが表示されます。
4. [職責] タブをクリックします。
5. [現在の Oracle EBS サービス] を選択します。
6. [現在のロール] の下でロールを選択し、[削除] ボタンをクリックします。
7. [更新] をクリックします。

ロールのメンバーは、他のアカウントまたはエイリアスを持っていない限り、BI プラットフォームにアクセスできなくなります。

① 注記

特定のユーザをログオンさせないようにするために、BI プラットフォームにマップする前に、個々のアカウントを削除するか、ロールからユーザを削除することもできます。

5.6.4 Oracle EBS ロールとユーザの更新

Oracle EBS 認証を有効化した後、BI プラットフォームにインポート済みのマップされたロールに対する定期的な更新をスケジュールし、実行する必要があります。このことにより、更新された Oracle EBS ロールの情報を、BI プラットフォームに正確に反映できます。

Oracle EBS ロールの更新を実行し、スケジュールするためのオプションは 2 つあります。

- **ロールのみを更新:** このオプションを使用すると、BI プラットフォームにインポート済みの現在マップされているロール間のリンクのみを更新します。頻繁に更新を実行する予定があり、システムリソースの使用状況に懸念がある場合に、このオプションを使用することをお勧めします。Oracle EBS ロールを更新するだけでは、新しいユーザアカウントは作成されません。
- **ロールとエイリアスを更新:** このオプションを使用すると、ロール間のリンクを更新するだけでなく、Oracle EBS システムのロールに追加されたユーザエイリアス用の新しいユーザアカウントを BI プラットフォームに作成します。

① 注記

Oracle EBS 認証を有効化しているときに、更新時にユーザエイリアスを自動で作成するよう指定していない場合は、新しいエイリアスに対してアカウントは作成されません。

5.6.4.1 Oracle EBS ロールの更新をスケジュールする

BI プラットフォームにロールをマップしたら、これらのロールの更新方法を指定する必要があります。

1. [\[ユーザの更新\]](#) タブをクリックします。
2. [\[ロールのみを更新\]](#) セクションまたは [\[ロールとエイリアスを更新\]](#) セクションのいずれかで、[\[スケジュール\]](#) をクリックします。

→ ヒント

すぐに更新を実行する場合は、[\[今すぐ更新\]](#) をクリックします。

→ ヒント

頻繁に更新をするためシステムリソースに懸念がある場合は、[\[ロールのみを更新\]](#) オプションを使用します。ロールとエイリアスの両方を更新するには、より多くの時間がかかります。

[\[繰り返し\]](#) ダイアログボックスが表示されます。

3. [\[オブジェクトの実行\]](#) ブルダウンリストからオプションを選択し、必要なスケジュール情報を表示されたフィールドにすべて入力します。

更新をスケジュールする場合、次の表に示した定期スケジュールパターンの中から選択することができます。

定期スケジュールパターン	説明
時間単位	更新は毎時間実行されます。開始時間、開始および終了日を指定します。
日単位	更新は毎日または指定した日数ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
週単位	更新は毎週実行されます。1 週間に 1 回または数回実行することができます。実行する曜日、時間、開始および終了日を指定することができます。
月単位	更新は毎月または数カ月ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
N 日	更新は毎月指定された日付に実行されます。実行する日にち、時間、開始および終了日を指定することができます。
第 1 月曜日	更新は毎月第 1 月曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
月末日	オブジェクトは毎月末日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
第 N 週の X 日	更新は毎月特定の週の特定の曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
カレンダー	更新は、すでに作成されているカレンダーで指定した日付に実行されます。

4. スケジュール情報の入力を終了したら、[\[スケジュール\]](#) をクリックします。
今回のスケジュールされたロールの更新の日付が、[\[ユーザの更新\]](#) タブに表示されます。

① 注記

[\[ロールのみを更新\]](#) セクションまたは [\[ロールとエイリアスを更新\]](#) セクションのいずれかで、[\[スケジュールされた更新のキャンセル\]](#) をクリックすると、いつでも次のスケジュールされた更新をキャンセルできます。

5.7 JD Edwards Enterprise One 認証

5.7.1 JD Edwards EnterpriseOne 認証

JD Edwards EnterpriseOne 認証によって、ユーザは自分の JD Edwards ユーザ名とパスワードを使用して、BI プラットフォームにログオンすることができます。これらのパスワードは、BI プラットフォームに保存する必要はありません。

JD Edwards EnterpriseOne 認証アプリケーションを使用すると、BI プラットフォームへのユーザの認証方法の設定と JD Edwards システムからのロールのインポートを行うことができます。

このアプリケーションは、以下の表で説明するように 4 つのタブに分かれています。

タブ	説明
オプション	JD Edwards EnterpriseOne 認証を有効化する設定と、新しいエイリアス、エイリアスの更新、および新しいユーザの処理方法を定義するオプションがあります。
システム	BI プラットフォームがアクセスする JD Edwards EnterpriseOne システムのユーザとサービスの設定があります。
職責	ロールを BI プラットフォームにインポートするための設定があります。
ユーザの更新	インポートされた JD Edwards EnterpriseOne ロールの更新のスケジュールと実行に関する設定があります。

関連情報

[JD Edwards EnterpriseOne 認証の有効化 \[99 ページ\]](#)

[BI プラットフォームへの JD Edwards EnterpriseOne ロールのマップ \[100 ページ\]](#)

[ユーザの更新のスケジュール \[103 ページ\]](#)

5.7.2 JD Edwards EnterpriseOne 認証の有効化

BI プラットフォームで JD Edwards EnterpriseOne 情報を使用できるようにするには、JD Edwards EnterpriseOne システムへの認証方法に関する情報がプラットフォームに必要です。

5.7.2.1 BI プラットフォームで JD Edwards EnterpriseOne 認証を有効化する

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログインします。
2. [管理]領域で[認証]をクリックします。
3. [JD Edwards EnterpriseOne] をダブルクリックします。
[JD Edwards EnterpriseOne] ページが表示されます。
4. [オプション] タブで [JD Edwards EnterpriseOne 認証の有効化] チェックボックスをオンにします。
5. BI プラットフォームのデプロイメントに応じて、[新しいエイリアス]、[更新オプション]、および [新しいユーザのオプション] を適切に変更します。更新をクリックして変更を保存してから、システムタブに移動します。
6. [Servers] タブをクリックします。
7. jdeutil.jar、kernel.jar、および log4j.jar を JD Edwards のインストールから以下の場所にコピーします (Windows の場合): <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%lib%jdedwards%default%jdedwards% and <INSTALLDIR>%Tomcat%lib%。
8. Tomcat および Server Intelligence Agent を再起動します。
9. [JD Edwards EnterpriseOne システムユーザ] エリアで、JD Edwards EnterpriseOne データベースにログインするための BI プラットフォームのデータベースユーザ名とパスワードを入力します。
10. [JD Edwards EnterpriseOne ドメイン] 領域で、JD Edwards EnterpriseOne 環境に接続するのに使用する名前、ホスト、ポートを入力します。
11. 環境の名前を入力し、[追加] をクリックします。
12. [更新] をクリックして、変更内容を保存します。

5.7.3 BI プラットフォームへの JD Edwards EnterpriseOne ロールのマップ

BI プラットフォームでは、JD Edwards EnterpriseOne ロールをマップするごとに 1 つのグループが自動的に作成されます。同様に、マップされた JD Edwards EnterpriseOne ロールのメンバーを表すエイリアスが作成されます。

作成されたエイリアスごとにユーザアカウントを 1 つ作成できます。

ただし、複数のシステムを実行し、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている場合は、BI プラットフォームでアカウントを作成する前に、同じ名前の 1 つのエイリアスに各ユーザを割り当てることができます。

これを行うことで、BI プラットフォームで同じユーザに対して作成されるアカウントの数を減らすことができます。

たとえば、JD Edwards EnterpriseOne のテスト環境と実稼動環境を実行しており、30 人のユーザが両方のシステムへのアクセス権を持っている場合は、これらのユーザに対してアカウントが 30 個だけ作成されます。各ユーザを同じ名前の 1 つのエイリアスに割り当てない場合は、BI プラットフォーム内の 30 人のユーザに対して 60 個のアカウントが作成されます。

ただし、複数のシステムを実行し、ユーザ名が重なる場合は、作成されるエイリアスごとに新しいメンバーアカウントを作成する必要があります。

たとえば、Russell Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は "raquino")でテスト環境を実行しており、Raoul Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は "raquino")で実稼動環境を実行している場合は、各ユーザのエイリアスに対して

個別のアカウントを作成する必要があります。作成しない場合、これらの2人のユーザは同じBIプラットフォームアカウントに追加され、それぞれのJD Edwards EnterpriseOne 認証情報を使ってBIプラットフォームにログインできません。

5.7.3.1 JD Edwards EnterpriseOne ロールをマップする

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログインします。
2. [管理] 領域で [認証] をクリックします。
3. [JD Edwards EnterpriseOne] をダブルクリックします。
4. [新しいエイリアスのオプション] エリアで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **追加した各エイリアスを同一名のアカウントに割り当てる**
このオプションは、複数の JD Edwards EnterpriseOne Enterprise システムを実行しており、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている (各ユーザがシステムごとに異なるユーザ名を持っている) 場合に選択します。
 - **追加するすべてのエイリアスに新しいアカウントを作成する**
このオプションは、1つの JD Edwards EnterpriseOne システムしか実行していない場合、大部分のユーザがいずれか1つのシステムのアカウントしか持っていない場合、または2つ以上のシステムで異なるユーザに対して同じユーザ名が使用されている場合に選択します。
5. [更新オプション] エリアで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **新しいエイリアスを追加して新しいユーザを作成する**
このオプションは、BI プラットフォームにマップされるすべてのユーザに新しいエイリアスを作成する場合に選択します。新しいアカウントがBI プラットフォームアカウントを持たないユーザに対して追加されます。または [追加するすべてのエイリアスに新しいアカウントを作成する] オプションを選択している場合は、新しいアカウントがすべてのユーザに対して追加されます。
 - **新しいエイリアスの追加および新しいユーザの作成を行わない**
このオプションは、マップするロールに多くのユーザが含まれているが、その一部のユーザのみがBI プラットフォームを使用する場合に選択します。システムは、ユーザに対してエイリアスやアカウントを自動で作成しません。代わりに、BI プラットフォームに初めてログインしたユーザに対してのみエイリアス (必要な場合は、アカウントも) を作成します。これはデフォルトのオプションです。
6. [新しいユーザのオプション] エリアで、新しいユーザを作成する方法を指定します。

次のいずれかのオプションを選択します。

- **新しいユーザを登録ユーザとして作成する**
登録ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。登録ユーザライセンスは特定のユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムにアクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。このオプションを使用して作成したユーザアカウントに使用できる登録ユーザライセンスを持っている必要があります。

④ 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログインセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが11番目の同時ログインセッションにログインしようとする、該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの1つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログインセッションの数に制限はありません。

- **新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する**

同時接続ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少ないユーザ数の同時接続ライセンスで多数のユーザをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザが BI プラットフォームにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。

選択したロールが BI プラットフォームにグループとして表示されます。

7. **[ロール]** タブをクリックします。
8. **[ドメイン一覧]** で、マップするロールを含む JD Edwards サーバを選択します。
9. **[利用可能なロール]** で、BI プラットフォームにマップするロールを選択して **[<]** をクリックします。
10. **[更新]** をクリックします。
これらのロールが BI プラットフォームにマップされます。

5.7.3.2 再マップの考慮事項

すでに BI プラットフォームにマップされているロールにユーザを追加する場合は、そのロールを再マップして、ユーザを BI プラットフォームに追加する必要があります。ロールを再マップする場合は、ユーザを登録ユーザまたは同時接続ユーザとしてマップするオプションは、ロールに追加した新しいユーザにのみ影響します。

たとえば最初に、**[新しいユーザを指定ユーザとして作成する]** オプションを選択して、ロールを BI プラットフォームにマップします。後から同じロールにユーザを追加して、**[新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する]** オプションを選択してロールを再マップします。

この場合、ロールの新しいユーザだけが同時接続ユーザとして BI プラットフォームにマップされ、すでにマップされているユーザは登録ユーザのままになります。最初に同時接続ユーザとしてユーザをマップし、その後に変更して新しいユーザを登録ユーザとして再マップした場合も同じです。

5.7.3.3 ロールのマップ解除

ユーザを BI プラットフォームにログオンさせないようにするには、そのユーザが属しているロールのマップを解除します。

5.7.3.3.1 ロールをマップ解除する

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
2. **[管理]** エリアで、**[認証]** をクリックします。
3. **[JD Edwards EnterpriseOne]** のタブをクリックします。
4. **[ロール]** 領域で、削除するロールを選択し、**[<]** をクリックします。
5. **[更新]** をクリックします。

ロールのメンバーは、他のアカウントまたはエイリアスを持っていない限り、BI プラットフォームにアクセスできなくなります。

① 注記

特定のユーザをログオンさせないようにするために、BI プラットフォームにマップする前に、個々のアカウントを削除するか、ロールからユーザを削除することもできます。

5.7.3.4 ユーザの更新のスケジュール

ERP システムのユーザデータへの変更が BI プラットフォームユーザデータに確実に反映されるよう、定期的なユーザの更新をスケジュールできます。この更新は、セントラル管理コンソール (CMC) で設定したマッピング設定に従って、ERP ユーザと BI プラットフォームユーザを自動的に同期します。

インポートされたロールの更新を実行し、スケジュールするためのオプションは 2 つあります。

- **ロールのみを更新:** このオプションを使用すると、BI プラットフォームにインポート済みの現在マップされているロール間のリンクのみを更新します。頻繁に更新を実行する予定があり、システムリソースの使用状況に懸念がある場合は、このオプションを使用します。ロールを更新するだけでは、新しいユーザアカウントは作成されません。
- **ロールとエイリアスを更新:** このオプションを使用すると、ロール間のリンクを更新するだけでなく、ERP システムに追加された新しいユーザエイリアス用の新しいユーザアカウントを BI プラットフォームに作成します。

① 注記

認証を有効化しているときに、更新時にユーザエイリアスを自動で作成するよう指定していない場合は、新しいエイリアスに対してアカウントは作成されません。

5.7.3.4.1 ユーザの更新をスケジュールする

BI プラットフォームにロールをマップしたら、これらのロールの更新方法を指定する必要があります。

1. **[ユーザの更新]** タブをクリックします。
2. **[ロールのみを更新]** セクションまたは **[ロールとエイリアスを更新]** セクションのいずれかで、**[スケジュール]** をクリックします。

→ ヒント

すぐに更新を実行する場合は、**[今すぐ更新]** をクリックします。

→ ヒント

頻繁に更新をするためシステムリソースに懸念がある場合は、**[ロールのみを更新]** オプションを使用します。ロールとエイリアスの両方を更新するには、より多くの時間がかかります。

[繰り返し] ダイアログボックスが表示されます。

3. **[オブジェクトの実行]** リストからオプションを選択し、必要なスケジュール情報をすべて入力します。

更新をスケジュールする場合、次の表に示した定期スケジュールパターンの中から選択することができます。

定期スケジュールパターン	説明
時間単位	更新は毎時間実行されます。開始時間、開始および終了日を指定します。
日単位	更新は毎日または指定した日数ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
週単位	更新は毎週実行されます。1週間に1回または数回実行することができます。実行する曜日、時間、開始および終了日を指定することができます。
月単位	更新は毎月または数カ月ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
N 日	更新は毎月指定された日付に実行されます。実行する日にち、時間、開始および終了日を指定することができます。
第 1 月曜日	更新は毎月第 1 月曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
月末日	オブジェクトは毎月末日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
第 N 週の X 日	更新は毎月特定の週の特定の曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
カレンダー	更新は、すでに作成されているカレンダーで指定した日付に実行されます。

4. スケジュール情報の入力を終了したら、[スケジュール] をクリックします。
 今回のスケジュールされたロールの更新の日付が、[ユーザの更新] タブに表示されます。

① 注記

[ロールのみを更新] セクションまたは [ロールとエイリアスを更新] セクションのいずれかで、[スケジュールされた更新のキャンセル] をクリックすると、いつでも次のスケジュールされた更新をキャンセルできます。

5.8 PeopleSoft Enterprise 認証

5.8.1 PeopleSoft Enterprise 認証

PeopleSoft Enterprise 認証によって、ユーザは自分の PeopleSoft ユーザ名とパスワードを使用して、BI プラットフォームにログオンすることができます。これらのパスワードは、BI プラットフォームに保存する必要はありません。

PeopleSoft Enterprise 認証アプリケーションを使用すると、BI プラットフォームへのユーザの認証方法の設定と PeopleSoft システムからのロールのインポートを行うことができます。

このアプリケーションは、以下の表で説明するように 4 つのタブに分かれています。

タブ	説明
オプション	PeopleSoft Enterprise 認証を有効化する設定と、新しいエイリアス、エイリアスの更新、および新しいユーザの処理方法を定義するオプションがあります。
システム	BI プラットフォームがアクセスする PeopleSoft Enterprise システムのユーザとサービスの設定があります。
職責	ロールを BI プラットフォームにインポートするための設定があります。
ユーザの更新	インポートされた PeopleSoft Enterprise ロールの更新のスケジュールと実行に関する設定があります。

関連情報

[PeopleSoft Enterprise 認証の有効化 \[105 ページ\]](#)

[BI プラットフォームへの PeopleSoft ロールのマップ \[106 ページ\]](#)

[ユーザの更新のスケジュール \[103 ページ\]](#)

5.8.2 PeopleSoft Enterprise 認証の有効化

BI プラットフォームで PeopleSoft Enterprise 情報を使用できるようにするには、PeopleSoft Enterprise システムへの認証方法に関する情報が BI プラットフォームに必要です。

5.8.2.1 BI プラットフォームで PeopleSoft Enterprise 認証を有効化する

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
2. [管理]領域で[認証]をクリックします。
3. [\[PeopleSoft Enterprise\]](#) をダブルクリックします。
[PeopleSoft Enterprise] ページが表示されます。[オプション]、[ドメイン]、[ロール]、[ユーザの更新] の 4 つのタブがあります。
4. [オプション] タブで、[\[PeopleSoft Enterprise 認証の有効化\]](#) チェックボックスをオンにします。
5. BI プラットフォームのデプロイメントに応じて、[\[新しいエイリアス\]](#)、[\[更新オプション\]](#)、および [\[新しいユーザのオプション\]](#) を適切に変更します。
[更新] をクリックして変更を保存してから、[ドメイン] タブに移動します。
6. [ドメイン] タブをクリックします。
7. [\[PeopleSoft Enterprise システムユーザ\]](#) エリアで、BI プラットフォームが PeopleSoft Enterprise データベースにログオンする際に使用する、データベースのユーザ名とパスワードを入力します。
8. [\[PeopleSoft Enterprise ドメイン\]](#) 領域で、PeopleSoft Enterprise 環境に接続するのに使用するドメイン名と QAS アドレスを入力して、[\[追加\]](#) をクリックします。

① 注記

複数の PeopleSoft ドメインがある場合は、アクセス対象となる追加のドメインに対してこのステップを繰り返します。最初に入力するドメインがデフォルトドメインになります。

9. [更新]をクリックして、変更内容を保存します。

5.8.3 BI プラットフォームへの PeopleSoft ロールのマップ

BI プラットフォームでは、PeopleSoft ロールをマップするごとに1つのグループが自動的に作成されます。同様に、SAP BusinessObjects Enterprise は、マップされた PeopleSoft ロールのメンバーを表すエイリアスを作成します。

作成されたエイリアスごとにユーザアカウントを1つ作成できます。

ただし、複数のシステムを実行し、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている場合は、BI プラットフォームでアカウントを作成する前に、同じ名前の1つのエイリアスに各ユーザを割り当てることができます。

これを行うことで、BI プラットフォームで同じユーザに対して作成されるアカウントの数を減らすことができます。

たとえば、PeopleSoft HR 8.3 と PeopleSoft Financials 8.4 を実行しているときに、30 人のユーザが両方のシステムへのアクセス権を持っている場合、それらのユーザに対して 30 個のアカウントだけが作成されます。各ユーザを同じ名前の1つのエイリアスに割り当てない場合は、BI プラットフォーム内の 30 人のユーザに対して 60 個のアカウントが作成されます。

ただし、複数のシステムを実行し、ユーザ名が重なる場合は、作成されるエイリアスごとに新しいメンバーアカウントを作成する必要があります。

たとえば、Russell Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は "raquino")を使用して PeopleSoft HR 8.3 を実行し、Raoul Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は "raquino")を使用して PeopleSoft Financial 8.4 を実行している場合は、各ユーザのエイリアスに対して個別のアカウントを作成する必要があります。作成しない場合、これらの2人のユーザは同じ BI プラットフォームアカウントに追加されます。この2人のユーザは、独自の PeopleSoft 認証情報を使用して BI プラットフォームにログオンでき、両方の PeopleSoft システムからデータにアクセスできます。

5.8.3.1 PeopleSoft ロールを BI プラットフォームにマップする

BI プラットフォーム JVM (Java 仮想マシン) に PeopleSoft サーバへの証明書がない場合、以下で説明する主なステップの前に、これらの追加の手順を実行する必要があります。

1. PeopleSoft サーバから .cer ファイルを取得します。
2. .cer ファイルを `<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%sapjvm%jre%lib%security` にコピーします。
3. security ディレクトリから、以下のコマンドを実行します。"`<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%sapjvm%bin%keytool.exe`" `-import -file <peoplesoftserver>.cer -keystore cacerts -alias <peoplesoftserver>`
4. Web アプリケーションサーバを再起動します。

主なステップは、以下のとおりです。

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログインします。
2. [認証] をクリックします。
3. [PeopleSoft Enterprise] をダブルクリックします。
4. [ロール] タブの [PeopleSoft Enterprise ドメイン] エリアで、BI プラットフォームにマップするロールに関連付けられたドメインを選択します。
5. 次のいずれかのオプションを使用して、マップするロールを選択します。
 - [PeopleSoft Enterprise ロール] エリアのロールの検索ボックスに、BI プラットフォームにマップする検索対象のロールを入力し、[>] をクリックします。
 - [利用可能なロール] 一覧で、BI プラットフォームにマップするロールを選択し、[>] をクリックします。

① 注記

特定のユーザまたはロールを検索している場合は、ワイルドカード % を使用できます。たとえば、"A" で始まるすべてのロールを検索する場合は、「A%」と入力します。検索では大文字と小文字も区別されません。

① 注記

ロールを別のドメインからマップする場合は、利用可能なドメインの一覧から、別のドメインのロールと一致する新しいドメインを選択する必要があります。

6. [ユーザの更新] タブに移動し、[更新] ボタンをクリックするか、更新をスケジュールします。
7. [オプション] タブで、[新しいユーザのオプション] エリアに移動し、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **追加した各エイリアスを同一名のアカウントに割り当てる**
このオプションは、複数の PeopleSoft Enterprise システムを実行し、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている（および各ユーザがシステムごとに異なるユーザ名を持っている）場合に選択します。
 - **追加するすべてのエイリアスに新しいアカウントを作成する**
このオプションは、PeopleSoft Enterprise システムを1つだけ実行している場合、またはユーザの多くがシステムのいずれか1つにアカウントを持っている場合、あるいは、2つ以上のシステムで異なるユーザに対して同じユーザ名が使用されている場合に選択します。
8. [エイリアス更新オプション] エリアで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **エイリアスの更新時に新しいエイリアスを作成する**
このオプションは、BI プラットフォームにマップされるすべてのユーザに新しいエイリアスを作成する場合に選択します。新しいアカウントが BI プラットフォームアカウントを持たないユーザに対して追加されます。または [追加するすべてのエイリアスに新しいアカウントを作成する] オプションを選択した場合は、新しいアカウントがすべてのユーザに対して追加されます。
 - **ユーザのログイン時にのみ新しいエイリアスを作成する**
このオプションは、マップするロールに多くのユーザが含まれているが、その一部のユーザのみが BI プラットフォームを使用する場合に選択します。BI プラットフォームは、ユーザに対してエイリアスやアカウントを自動で作成しません。代わりに、BI プラットフォームに初めてログインしたユーザに対してのみエイリアス（必要な場合は、アカウントも）を作成します。これはデフォルトのオプションです。
9. [新しいユーザのオプション] エリアで、新しいユーザを作成する方法を指定します。

次のいずれかのオプションを選択します。

- **新しいユーザを登録ユーザとして作成する**
登録ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。登録ユーザライセンスは特定のユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムに

アクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。このオプションを使用して作成したユーザアカウントに使用できる登録ユーザライセンスを持っている必要があります。

④ 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログオンセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが 11 番目の同時ログオンセッションにログインしようとする、該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの 1 つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログオンセッションの数に制限はありません。

- **新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する**

同時接続ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少ないユーザ数の同時接続ライセンスで多数のユーザをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザが BI プラットフォームにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。

選択したロールが BI プラットフォームにグループとして表示されます。

5.8.3.2 再マップの考慮事項

すでに BI プラットフォームにマップされているロールにユーザを追加する場合は、そのロールを再マップして、ユーザを BI プラットフォームに追加する必要があります。ロールを再マップする場合は、ユーザを登録ユーザまたは同時接続ユーザとしてマップするオプションは、ロールに追加した新しいユーザにのみ影響します。

たとえば最初に、[新しいユーザを指定ユーザとして作成する] オプションを選択して、ロールを BI プラットフォームにマップします。後から同じロールにユーザを追加して、[新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する] オプションを選択してロールを再マップします。

この場合、ロールの新しいユーザだけが同時接続ユーザとして BI プラットフォームにマップされ、すでにマップされているユーザは登録ユーザのままになります。最初に同時接続ユーザとしてユーザをマップし、その後に変更して新しいユーザを登録ユーザとして再マップした場合も同じです。

5.8.3.3 ロールをマップ解除する

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
2. [認証]をクリックします。
3. [PeopleSoft Enterprise]をクリックします。
4. [ロール]をクリックします。
5. 削除するロールを選択して、[<]をクリックします。
6. [更新]をクリックします。

ロールのメンバーは、他のアカウントまたはエイリアスを持っていない限り、BI プラットフォームにアクセスできなくなります。

① 注記

特定のユーザをログオンさせないようにするために、BI プラットフォームにマップする前に、個々のアカウントを削除するか、ロールからユーザを削除することもできます。

5.8.3.4 ユーザの更新のスケジュール

ERP システムのユーザデータへの変更が BI プラットフォームユーザデータに確実に反映されるよう、定期的なユーザの更新をスケジュールできます。この更新は、セントラル管理コンソール (CMC) で設定したマッピング設定に従って、ERP ユーザと BI プラットフォームユーザを自動的に同期します。

インポートされたロールの更新を実行し、スケジュールするためのオプションは 2 つあります。

- **ロールのみを更新:** このオプションを使用すると、BI プラットフォームにインポート済みの現在マップされているロール間のリンクのみを更新します。頻繁に更新を実行する予定があり、システムリソースの使用状況に懸念がある場合は、このオプションを使用します。ロールを更新するだけでは、新しいユーザアカウントは作成されません。
- **ロールとエイリアスを更新:** このオプションを使用すると、ロール間のリンクを更新するだけでなく、ERP システムに追加された新しいユーザエイリアス用の新しいユーザアカウントを BI プラットフォームに作成します。

① 注記

認証を有効化しているときに、更新時にユーザエイリアスを自動で作成するよう指定していない場合は、新しいエイリアスに対してアカウントは作成されません。

5.8.3.4.1 ユーザの更新をスケジュールする

BI プラットフォームにロールをマップしたら、これらのロールの更新方法を指定する必要があります。

1. **[ユーザの更新]** タブをクリックします。
2. **[ロールのみを更新]** セクションまたは **[ロールとエイリアスを更新]** セクションのいずれかで、**[スケジュール]** をクリックします。

→ ヒント

すぐに更新を実行する場合は、**[今すぐ更新]** をクリックします。

→ ヒント

頻繁に更新をするためシステムリソースに懸念がある場合は、**[ロールのみを更新]** オプションを使用します。ロールとエイリアスの両方を更新するには、より多くの時間がかかります。

[繰り返し] ダイアログボックスが表示されます。

3. **[オブジェクトの実行]** リストからオプションを選択し、必要なスケジュール情報をすべて入力します。

更新をスケジュールする場合、次の表に示した定期スケジュールパターンの中から選択することができます。

定期スケジュールパターン	説明
時間単位	更新は毎時間実行されます。開始時間、開始および終了日を指定します。
日単位	更新は毎日または指定した日数ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
週単位	更新は毎週実行されます。1週間に1回または数回実行することができます。実行する曜日、時間、開始および終了日を指定することができます。
月単位	更新は毎月または数カ月ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
N 日	更新は毎月指定された日付に実行されます。実行する日にち、時間、開始および終了日を指定することができます。
第 1 月曜日	更新は毎月第 1 月曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
月末日	オブジェクトは毎月末日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
第 N 週の X 日	更新は毎月特定の週の特定の曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
カレンダー	更新は、すでに作成されているカレンダーで指定した日付に実行されます。

4. スケジュール情報の入力を終了したら、[スケジュール] をクリックします。
 今回のスケジュールされたロールの更新の日付が、[ユーザの更新] タブに表示されます。

① 注記

[ロールのみを更新] セクションまたは [ロールとエイリアスを更新] セクションのいずれかで、[スケジュールされた更新のキャンセル] をクリックすると、いつでも次のスケジュールされた更新をキャンセルできます。

5.9 Siebel 認証

5.9.1 Siebel 認証

Siebel 認証によって、ユーザは自分の Siebel ユーザ名とパスワードを使用して、BI プラットフォームにログインすることができます。これらのパスワードは、BI プラットフォームに保存する必要はありません。

Siebel 認証アプリケーションを使用すると、BI プラットフォームへのユーザの認証方法の設定と Siebel システムからのロールのインポートを行うことができます。

このアプリケーションは、以下の表で説明するように 4 つのタブに分かれています。

タブ	説明
オプション	Siebel 認証を有効化する設定と、新しいエイリアス、エイリアスの更新、および新しいユーザの処理方法を定義するオプションがあります。

タブ	説明
システム	BI プラットフォームがアクセスする Siebel システムのユーザとサービスの設定があります。
職責	ロールを BI プラットフォームにインポートするための設定があります。
ユーザの更新	インポートされた Siebel ロールの更新のスケジュールと実行に関する設定があります。

関連情報

[Siebel 認証の有効化 \[111 ページ\]](#)

[BI プラットフォームへのマッピング \[112 ページ\]](#)

[ユーザの更新のスケジュール \[103 ページ\]](#)

5.9.2 Siebel 認証の有効化

BI プラットフォームで Siebel 情報を使用できるようにするには、Siebel システムの認証方法に関する情報が BI プラットフォームに必要です。

5.9.2.1 BI プラットフォームで Siebel 認証を有効化する

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
2. [管理]領域で[[認証](#)]をクリックします。
3. [[Siebel](#)]をダブルクリックします。
[[Siebel](#)] ページが表示されます。[[オプション](#)]、[[システム](#)]、[[職責](#)]、および [[ユーザの更新](#)] の 4 つのタブがあります。
4. [[オプション](#)] タブで、[[Siebel 認証を有効にする](#)] チェックボックスをオンにします。
5. BI プラットフォームのデプロイメントに応じて、[[新しいエイリアス](#)]、[[更新オプション](#)]、および [[新しいユーザのオプション](#)] を適切に変更します。[[更新](#)] をクリックして変更を保存してから、[[システム](#)] タブに移動します。
6. [[ドメイン](#)] タブをクリックします。
7. [[ドメイン名](#)] フィールドに、接続先の Siebel システムのドメイン名を入力します。
8. [[接続](#)] で、そのドメインの接続文字列を入力します。
9. [[ユーザ名](#)] エリアで、Siebel データベースへのログオンに使用する BI プラットフォームのデータベースのユーザ名とパスワードを入力します。
10. [[パスワード](#)] エリアで、選択したユーザのパスワードを入力します。
11. [[追加](#)] をクリックして、[[現在のドメイン](#)] リストにシステムの情報を入力します。
12. [[更新](#)] をクリックして、変更内容を保存します。

5.9.3 BI プラットフォームへのマッピング

BI プラットフォームでは、Siebel ロールをマップするごとに1つのグループが自動的に作成されます。同様に、SAP BusinessObjects Enterprise は、マップされた Siebel ロールのメンバーを表すエイリアスを作成します。

作成されたエイリアスごとにユーザアカウントを1つ作成できます。

ただし、複数のシステムを実行し、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている場合は、BI プラットフォームでアカウントを作成する前に、同じ名前の1つのエイリアスに各ユーザを割り当てることができます。

これを行うことで、このプログラムで同じユーザに対して作成されるアカウントの数を減らすことができます。

たとえば、Siebel eBusiness のテスト環境と実稼動環境を実行しており、30 人のユーザが両方のシステムへのアクセス権を持っている場合は、これらのユーザに対してアカウントが30個だけ作成されます。各ユーザを同じ名前の1つのエイリアスに割り当てない場合は、BI プラットフォーム内の30人のユーザに対して60個のアカウントが作成されます。

ただし、複数のシステムを実行し、ユーザ名が重なる場合は、作成されるエイリアスごとに新しいメンバーアカウントを作成する必要があります。

たとえば、Russell Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は"raquino")でテスト環境を実行しており、Raoul Aquino のユーザアカウント(ユーザ名は"raquino")で実稼動環境を実行している場合は、各ユーザのエイリアスに対して個別のアカウントを作成する必要があります。作成しない場合、これらの2人のユーザは同じアカウントに追加され、それぞれの Siebel eBusiness 認証情報を使って BI プラットフォームにログオンできません。

5.9.3.1 Siebel eBusiness ロールを BI プラットフォームにマップする

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
2. [\[認証\]](#) をクリックします。
3. [\[Siebel\]](#) をダブルクリックします。
4. [\[Siebel 認証の有効化\]](#) チェックボックスを選択します。
5. [\[新しいエイリアスのオプション\]](#) エリアで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - [追加した各エイリアスを同一名のアカウントに割り当てる](#)
このオプションは、複数の Siebel eBusiness システムを実行し、ユーザが複数のシステムのアカウントを持っている(および各ユーザがシステムごとに異なるユーザ名を持っている)場合に選択します。
 - [追加するすべてのエイリアスに新しいアカウントを作成する](#)
このオプションは、Siebel eBusiness システムを1つだけ実行している場合、またはユーザの多くがシステムのいずれか1つのアカウントを持っている場合、あるいは、2つ以上のシステムで異なるユーザに対して同じユーザ名が使用されている場合に選択します。
6. [\[エイリアス更新オプション\]](#) エリアで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - [エイリアスの更新時に新しいエイリアスを作成する](#)
このオプションは、BI プラットフォームにマップされるすべてのユーザに新しいエイリアスを作成する場合に選択します。新しいアカウントが BI プラットフォームアカウントを持たないユーザに対して追加されます。または [\[追加するすべてのエイリアスに新しいアカウントを作成する\]](#) オプションを選択している場合は、新しいアカウントがすべてのユーザに対して追加されます。
 - [ユーザのログオン時にのみ新しいエイリアスを作成する](#)

このオプションは、マップするロールに多くのユーザが含まれているが、その一部のユーザのみが BI プラットフォームを使用する場合に選択します。プログラムは、ユーザに対してエイリアスやアカウントを自動で作成しません。代わりに、BI プラットフォームに初めてログインしたユーザに対してのみエイリアス (必要な場合は、アカウントも) を作成します。これはデフォルトのオプションです。

7. **[新しいユーザのオプション]** エリアで、新しいユーザを作成する方法を指定します。

BI プラットフォームのライセンスがユーザロールに基づいている場合は、次のいずれかのオプションを選択します。

次のいずれかのオプションを選択します。

- **新しいユーザを登録ユーザとして作成する**

登録ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。登録ユーザライセンスは特定のユーザに関連付けられており、ユーザはそのユーザ名およびパスワードに基づいてシステムにアクセスすることができます。このため、登録ユーザは、システムに接続している他のユーザの数に関係なく接続できます。このオプションを使用して作成したユーザアカウントに使用できる登録ユーザライセンスを持っている必要があります。

① 注記

登録ユーザライセンスを使用して作成された登録ユーザの同時ログオンセッション数は、10 に制限されています。このような登録ユーザが 11 番目の同時ログオンセッションにログインしようとする、該当するエラーメッセージが表示されます。ログインするには、既存のセッションの 1 つをリリースする必要があります。

ただし、プロセッサライセンスおよびパブリックドキュメントライセンスを使用して作成された登録ユーザに対しては、同時ログオンセッションの数に制限はありません。

- **新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する**

同時接続ユーザのライセンスを使用するように、新しいユーザアカウントを設定します。同時接続ライセンスでは BI プラットフォームに同時接続できるユーザ数が指定されます。この種類のライセンスは、少ないユーザ数の同時接続ライセンスで多数のユーザをサポートできるため、柔軟性に優れています。たとえば、ユーザが BI プラットフォームにアクセスする頻度と時間の長さによって、100 ユーザ同時接続ライセンスで 250、500、または 700 のユーザをサポートできます。

8. **[ロール]** タブをクリックします。

9. ロールをマップする Siebel サーバに対応するドメインを選択します。

10. **[利用可能なロール]** で、マップするロールを選択して **[>]** をクリックします。

① 注記

ロールが多数ある場合は、**[検索ロールの開始]** フィールドを使用して、検索を絞り込みます。ロールの最初の文字とそれに続くワイルドカード (%) を入力し、**[検索]** をクリックします。

① 注記

検索機能が動作するためには、Siebel プラグインの jar ファイルが Tomcat の lib ディレクトリ `<INSTALLDIR>%tomcat%\webapps\BOE\WEB-INF\lib` および `<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%\java\lib\siebel\default\siebel` にデプロイされている必要があります。次に、Tomcat サーバおよび Server Intelligence Agent を再起動します。

11. **[更新]** をクリックします。

これらのロールが BI プラットフォームにマップされます。

5.9.3.2 再マップの考慮事項

BI プラットフォームと Siebel の間でグループとユーザを同期させるには、[[ユーザ同期の強制](#)]を設定します。

① 注記

[[ユーザ同期の強制](#)]を選択するために、[[新しいエイリアスを追加して新しいユーザを作成する](#)]を最初を選択する必要があります。

ロールを再マップする場合は、ユーザを登録ユーザまたは同時接続ユーザとしてマップするオプションは、ロールに追加した新しいユーザにのみ影響します。

たとえば最初に、[新しいユーザを指定ユーザとして作成する]オプションを選択して、ロールを BI プラットフォームにマップします。後から同じロールにユーザを追加して、[新しいユーザを同時接続ユーザとして作成する]オプションを選択してロールを再マップします。

この場合、ロールの新しいユーザだけが同時接続ユーザとして BI プラットフォームにマップされ、すでにマップされているユーザは登録ユーザのままになります。最初に同時接続ユーザとしてユーザをマップし、その後に設定を変更して新しいユーザを登録ユーザとして再マップした場合も同じです。

5.9.3.3 ロールのマップ解除

ユーザを BI プラットフォームにログオンさせないようにするには、そのユーザが属しているロールのマップを解除します。

5.9.3.3.1 ロールをマップ解除する

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログオンします。
2. [[管理](#)]エリアで、[[認証](#)]をクリックします。
3. [[Siebel](#)]をダブルクリックします。
4. [[ドメイン](#)]タブで、マップを解除するロールに対応する Siebel ドメインを選択します。
5. [[ロール](#)]タブで、削除するロールを選択し、[<]をクリックします。
6. [[更新](#)]をクリックします。

職責のメンバーは、他のアカウントまたはエイリアスを持っていない限り、BI プラットフォームにアクセスできなくなります。

① 注記

特定のユーザをログオンさせないようにするために、BI プラットフォームにマップする前に、個々のアカウントを削除するか、ロールからユーザを削除することもできます。

5.9.3.4 ユーザの更新のスケジュール

ERP システムのユーザデータへの変更が BI プラットフォームユーザデータに確実に反映されるよう、定期的なユーザの更新をスケジュールできます。この更新は、セントラル管理コンソール (CMC) で設定したマッピング設定に従って、ERP ユーザと BI プラットフォームユーザを自動的に同期します。

インポートされたロールの更新を実行し、スケジュールするためのオプションは 2 つあります。

- **ロールのみを更新:** このオプションを使用すると、BI プラットフォームにインポート済みの現在マップされているロール間のリンクのみを更新します。頻繁に更新を実行する予定があり、システムリソースの使用状況に懸念がある場合は、このオプションを使用します。ロールを更新するだけでは、新しいユーザアカウントは作成されません。
- **ロールとエイリアスを更新:** このオプションを使用すると、ロール間のリンクを更新するだけでなく、ERP システムに追加された新しいユーザエイリアス用の新しいユーザアカウントを BI プラットフォームに作成します。

① 注記

認証を有効化しているときに、更新時にユーザエイリアスを自動で作成するよう指定していない場合は、新しいエイリアスに対してアカウントは作成されません。

5.9.3.4.1 ユーザの更新をスケジュールする

BI プラットフォームにロールをマップしたら、これらのロールの更新方法を指定する必要があります。

1. **[ユーザの更新]** タブをクリックします。
2. **[ロールのみを更新]** セクションまたは **[ロールとエイリアスを更新]** セクションのいずれかで、**[スケジュール]** をクリックします。

→ ヒント

すぐに更新を実行する場合は、**[今すぐ更新]** をクリックします。

→ ヒント

頻繁に更新をするためシステムリソースに懸念がある場合は、**[ロールのみを更新]** オプションを使用します。ロールとエイリアスの両方を更新するには、より多くの時間がかかります。

[繰り返し] ダイアログボックスが表示されます。

3. **[オブジェクトの実行]** リストからオプションを選択し、必要なスケジュール情報をすべて入力します。
更新をスケジュールする場合、次の表に示した定期スケジュールパターンの中から選択することができます。

定期スケジュールパターン	説明
時間単位	更新は毎時間実行されます。開始時間、開始および終了日を指定します。
日単位	更新は毎日または指定した日数ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。

定期スケジュールパターン	説明
週単位	更新は毎週実行されます。1週間に1回または数回実行することができます。実行する曜日、時間、開始および終了日を指定することができます。
月単位	更新は毎月または数カ月ごとに実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
N 日	更新は毎月指定された日付に実行されます。実行する日にち、時間、開始および終了日を指定することができます。
第 1 月曜日	更新は毎月第 1 月曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
月末日	オブジェクトは毎月末日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
第 N 週の X 日	更新は毎月特定の週の特定の曜日に実行されます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。
カレンダー	更新は、すでに作成されているカレンダーで指定した日付に実行されます。

4. スケジュール情報の入力を終了したら、[スケジュール] をクリックします。
 今回のスケジュールされたロールの更新の日付が、[ユーザの更新] タブに表示されます。

④ 注記

[ロールのみを更新] セクションまたは [ロールとエイリアスを更新] セクションのいずれかで、[スケジュールされた更新のキャンセル] をクリックすると、いつでも次のスケジュールされた更新をキャンセルできます。

5.10 X.509 認証

5.10.1 BI ラウンチパッドの X.509 認証

5.10.1.1 証明書およびキーストアの作成および設定

④ 注記

X.509 認証によるシングルサインオンを達成するためには、BI プラットフォームにユーザが存在している必要があります。

④ 注記

OpenSSL ツールキットをダウンロードしてインストールし、以下に示す手順を実行します。

④ 注記

CA 証明書を作成して自己署名する必要がある場合には、以下に示すすべての手順に従ってください。

① 注記

信頼できる CA がある場合は、証明書およびキーストアの作成および設定について、[信頼できる CA の使用 \[118 ページ\]](#)を参照してください。

1. 次のコマンドを実行して、認証機関 (CA) キー (ca.key) ファイルおよび証明書要求 (ca.csr) ファイルを作成します。Openssl.exe req -newkey rsa:2048 -nodes -out c:\¥ssl¥ca.csr -keyout c:\¥ssl¥ca.key
2. 次のコマンドを実行して、署名付き証明書 (ca.pem) を作成します。Openssl.exe x509 -req -trustout -signkey c:\¥ssl¥ca.key -days 365 -in c:\¥ssl¥ca.csr -out c:\¥ssl¥ca.pem
3. サーバキーペア、証明書、およびキーストアを作成します。
 - a. 次のコードを実行して、CA のシリアル番号を保持するためのファイルを作成します。Echo 02 >c:\¥ssl¥ca.srl
 - b. C:\¥Program Files¥Java¥jre7¥bin に移動し、keytool.exe を使用してサーバキーストア、証明書、および秘密鍵を作成します。

① 注記

Java keytool.exe の場所で、'jre7' は Java のバージョンによって異なる場合があります。

```
Keytool.exe -genkey -alias server -keyalg RSA -keysize 2048 -keystore c:\¥ssl¥serverkeystore.jks -storetype JKS
Keytool.exe -certreq -keyalg RSA -alias server -file c:\¥ssl¥server.csr -keystore c:\¥ssl¥serverkeystore.jks
```

→ 注意

証明書の生成時に、指示に従ってサーバマシンのホスト名を入力します。これを入力しないと、接続時にクライアントに証明書エラーが発生します。

- c. キーストアパスワードを入力します。

→ 注意

テキストエディタで要求のファイル server.csr を編集し、"New Begin Certificate Request" を "Begin Certificate Request" に、"New End Certificate Request" を "End Certificate Request" に変更する必要があります。

4. 次のコマンドを実行して、署名付き証明書 (server.crt) を作成します。Openssl.exe x509 -CA c:\¥ssl¥ca.pem -cakey c:\¥ssl¥ca.key -CAserial c:\¥ssl¥ca.srl -req -in c:\¥ssl¥server.csr -out c:\¥ssl¥server.crt -days 365
5. 認証機関およびサーバ証明書をサーバキーストアにインポートします。

```
Keytool.exe -import -alias ca -keystore c:\¥ssl¥serverkeystore.jks -trustcacerts -file c:\¥ssl¥ca.pem
Keytool.exe -import -alias server -keystore c:\¥ssl¥serverkeystore.jks -trustcacerts -file c:\¥ssl¥server.crt
```

6. 次のコマンドを実行して、クライアント証明書 client.req および client.key を作成します。 Openssl.exe -newkey rsa:2048 -nodes -out c:\¥ssl¥client.req -keyout c:\¥ssl¥client.key -config c:\¥ssl¥sslc.cnf

① 注記

ssl.cnf ファイルを <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win32_x86 から C:%SSL にコピーし、次のパラメータを変更します。

Dir=c:/ssl # あらゆるものの場所

Certificate= \$dir/ca.pem # CA 証明書

Private_key= \$dir/ca.key # 秘密鍵

RANDFILE= \$dir/.rand # 秘密乱数ファイル

7. 次のコマンドを実行して、クライアント証明書に署名します。Openssl.exe x509 -CA c:%SSL%ca.pem -CAkey c:%SSL%ca.key -CAserial c:%SSL%ca.srl -req -in c:%SSL%client.req -out c:%SSL%client.pem -days 365
8. 次に示すコマンドを使用して CA およびクライアント証明書を信頼キーストアにインポートします。このコマンドは、trustkeystore.jks を作成します。

```
Keytool.exe -import -alias ca -keystore c:%SSL%trustkeystore.jks -  
trustcacerts -file c:%SSL%ca.pem  
Keytool.exe -import -alias client -keystore c:%SSL%trustkeystore.jks -  
trustcacerts -file c:%SSL%client.pem
```

9. クライアント秘密鍵 PKCS12 形式でクライアント証明書をエクスポートします。Openssl.exe pkcs12 -export -clcerts -in c:%SSL%client.pem -inkey c:%SSL%client.key -out c:%SSL%client.p12 -name "client certificate"。このコマンドは、client.p12 ファイルを作成します。
10. 次のコマンドを実行して、CA 証明書をエクスポートし、ca.crt を作成します。Openssl.exe x509 -in c:%SSL%ca.pem -inform PEM -out c:%SSL%ca.crt -outform DER
11. クライアントマシンに .p12 および ca.crt ファイルをコピーして、クライアントおよび CA 証明書をインストールします。

① 注記

Mozilla Firefox に証明書をインストールするには、**ツール > オプション > 詳細** に移動し、[証明書] タブの [証明書を表示] を選択して、client.p12 ファイルを [あなたの証明書] タブに、ca.crt ファイルを [認証局証明書] タブにインポートします。

5.10.1.1.1 信頼できる CA の使用

1. サーバキーペア、証明書、およびキーストアを作成します。
 - a. 次のコードを実行して、CA のシリアル番号を保存するファイルを作成します。Echo 02
>c:%SSL%ca.srl
 - b. C:%Program Files%Java%jre7%bin に移動し、keytool.exe を使用してサーバキーストア、証明書、および秘密鍵を作成します。

① 注記

keytool.exe の場所で、'jre7' は Java のバージョンによって異なる場合があります。

```
Keytool.exe -genkey -alias server -keyalg RSA -keysize 2048 -keystore  
c:\¥ssl¥serverkeystore.jks -storetype JKS  
Keytool.exe -certreq -keyalg RSA -alias server -file c:\¥ssl¥server.csr -  
keystore c:\¥ssl¥serverkeystore.jks
```

→ 注意

証明書の生成時に、指示に従ってサーバマシンのホスト名を入力します。これを入力しないと、接続時にクライアントに証明書エラーが発生します。

- c. キーストアパスワードを入力します。

→ 注意

テキストエディタで要求のファイル server.csr を編集し、"New Begin Certificate Request" を "Begin Certificate Request" に、"New End Certificate Request" を "End Certificate Request" に変更する必要があります。

2. 次のコマンドを実行して、署名付き証明書 (server.crt) を作成します。Openssl.exe x509 -CA c:\¥ssl¥ca.pem -cakey c:\¥ssl¥ca.key -CAserial c:\¥ssl¥ca.srl -req -in c:\¥ssl¥server.csr -out c:\¥ssl¥server.crt -days 365

3. サーバ証明書をサーバキーストアにインポートします。

```
Keytool.exe -import -alias server -keystore c:\¥ssl¥serverkeystore.jks -  
trustcacerts -file c:\¥ssl¥server.crt
```

4. 次のコマンドを実行して、クライアント証明書 client.req および client.key を作成します。 Openssl.exe -newkey rsa:2048 -nodes -out c:\¥ssl¥client.req -keyout c:\¥ssl¥client.key -config c:\¥ssl¥sslc.cnf

① 注記

sslc.cnf ファイルを <INSTALLDIR>\¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥win32_x86 から C:\¥SSL にコピーし、次のパラメータを変更します。

Dir=c:/ssl # あらゆるものの場所

Certificate= \$dir/ca.pem # CA 証明書

Private_key= \$dir/ca.key # 秘密鍵

RANDFILE= \$dir/.rand # 秘密乱数ファイル

5. 次のコマンドを実行して、クライアント証明書に署名します。Openssl.exe x509 -CA c:\¥ssl¥ca.pem -CAkey c:\¥ssl¥ca.key -CAserial c:\¥ssl¥ca.srl -req -in c:\¥ssl¥client.req -out c:\¥ssl¥client.pem -days 365
6. 次に示すコマンドでクライアント証明書を信頼キーストアにインポートします。このコマンドは、trustkeystore.jks を作成します。

```
Keytool.exe -import -alias client -keystore c:\¥ssl¥trustkeystore.jks -  
trustcacerts -file c:\¥ssl¥client.pem
```

7. クライアント秘密鍵 PKCS12 形式でクライアント証明書をエクスポートします。Openssl.exe pkcs12 -export -clcerts -in c:\¥ssl¥client.pem -inkey c:\¥ssl¥client.key -out c:\¥ssl¥client.p12 -name "client certificate"。このコマンドは、client.p12 ファイルを作成します。
8. .p12 ファイルをクライアントマシンにコピーしてインストールします。

① 注記

Mozilla Firefox に証明書をインストールするには、**ツール > オプション > 詳細** に移動し、[証明書] タブの [証明書を表示] を選択して、client.p12 ファイルを [あなたの証明書] タブに、ca.crt ファイルを [認証局証明書] タブにインポートします。

5.10.1.2 Tomcat SSL サーバの設定

5.10.1.2.1 一方向 SSL 設定

1. <INSTALLDIR>\¥tomcat¥conf¥server.xml に移動します。
2. xml タグを編集します。<Connector port="8443" protocol="org.apache.coyote.http11.Http11NioProtocol" maxThreads="200" SSLEnabled="true" scheme="https" secure="true"> <SSLHostConfig protocols="TLSv1.2"><Certificate certificateKeystoreFile="C:/SSL/myserver.keystore" certificateKeystorePassword="mypassword" /></SSLHostConfig></Connector>

① 注記

上記の xml タグで使用されているキーストアファイルのパスワード (Password1) および場所 (C:\¥ssl¥serverkeystore.jks) は単なる例です。任意のパスワードと場所を使用できます。

3. ファイルを保存し、Tomcat サーバを再起動します。

5.10.1.2.2 双方向 SSL 設定

次に示す手順に従って、クライアント認証を要求するように Tomcat サーバを設定します。

1. <INSTALLDIR>\¥tomcat¥conf¥server.xml に移動します。
2. 次に示す xml タグで server.xml を編集します。<Connector port="8443" protocol="org.apache.coyote.http11.Http11NioProtocol" maxThreads="200" SSLEnabled="true" scheme="https" secure="true"> <SSLHostConfig protocols="TLSv1.2"><Certificate certificateKeystoreFile="C:/SSL/myserver.keystore" certificateKeystorePassword="mypassword" /></SSLHostConfig></Connector>

① 注記

上記の xml タグで使用されているサーバキーストアおよび信頼キーストアファイルのパスワード (Password1) および場所 (C:¥ssl¥serverkeystore.jks または C:¥ssl¥trustkeystore.jks) は単なる例です。任意のパスワードと場所を使用できます。

3. ファイルを保存し、Tomcat サーバを再起動します。

① 注記

Internet Explorer では、**インターネット オプション** > **セキュリティ** > **ローカル イントラネット** > **レベルのカスタマイズ** > **その他** に移動して、オプション [既存のクライアント証明書が1つしか存在しない場合の証明書の選択] を無効にしてください。

5.10.1.3 BI 起動パッドの設定

5.10.1.3.1 共有シークレットキーの作成

共有シークレットキーは、クライアントと CMS 間の信頼関係を確立するために使用します。クライアントの前にサーバで [信用できる認証] を設定する必要があります。

1. CMC にログインします。
2. [認証] に移動し、[Enterprise] を選択します。
3. [信用できる認証] を有効にします。
4. [新規共有シークレット] を選択します。

① 注記

共有シークレットキーが生成され、ダウンロードメッセージが表示されます。

5. [共有シークレットのダウンロード] を選択します。
6. ダウンロードダイアログボックスで [保存] を選択し、以下のいずれかのディレクトリを選択します。
 - <INSTALLDIR>¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥win64_x64¥
 - <INSTALLDIR>¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥win32_x86¥

5.10.1.3.2 TrustedPrincipal.conf ファイルを介した共有シークレットキーの受け渡し

1. <INSTALLDIR>¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥warfiles¥webapps¥BOE¥WEBINF¥config¥custom¥directory に新しいテキストファイルを作成します。
2. 新しいファイルで、以下に示すテキストを追加します。

```
sso.enabled=true
```

```
trusted.auth.user.retrieval=WEB_SESSION
trusted.auth.user.param=MyUser
trusted.auth.shared.secret=MySecret
```

3. ファイルを保存し、'global.properties' というファイル名にします。

5.10.1.3.3 custom.jsp ファイルの編集

① 注記

custom.jsp ファイルを編集する前に、ユーザをマシン名とともに CMC に作成します。

1. ジャンプ
 - a. 従来の BI ラウンチパッドの場合は `com.businessobjects.webpath.InfoView.jar` の `<INSTALLDIR>` `SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0 > warfiles > webapps > BOE > WEB-INF > eclipse > plugins > webpath.InfoView > web > custom.jsp` に移動します。
 - b. Fiorified BI ラウンチパッドの場合は `com.businessobjects.webpath.fioriBI.jar` の `<INSTALLDIR>` `SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0 > warfiles > webapps > BOE > WEB-INF > eclipse > plugins > webpath.fioriBI > web > custom.jsp` に移動します。
2. custom.jsp ファイルを編集します。

```
<?DOCTYPE HTML PUBLIC "-//W3C//DTD HTML 4.01 Transitional//EN" "http://
www.w3.org/TR/html4/loose.dtd">
<%@ page language="java" contentType="text/html; charset=utf-8" %>
<% //custom Java code
request.getSession().setAttribute("MySecret", "<Shared_Secret_Key>")
request.getSession().setAttribute("MyUser", "John Doe");
%>
<html>
<head>
<title>Custom Entry Point</title>
</head>
<body>
<script type="text/javascript" src="noCacheCustomResources/myScript.js">
</script>
<a href="javascript:goToLogonPage()">Click this to go to the logon page of BI
launch pad </a>
</body>
</html>
```

① 注記

<Shared_Secret_Key> を `TrustedPrincipal.conf` ファイルで使用する新しいキーに置き換える必要があります。共有シークレットキーを作成する方法については、[共有シークレットキーの作成 \[121 ページ\]](#) を参照してください。

5.10.1.3.4 myScript.js ファイルの作成

1. **<INSTALLDIR>** > *SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0* > *warfiles* > *webapps* > *BOE* > *WEB-INF* > *eclipse* > *plugins* > *webpath.InfoView* > *web* > *noCacheCustomResources* に移動し、myScript.js を作成します。
2. 以下を、myScript.js に追加します。

```
function goToLogonPage()
{
    window.location = "logon.jsp";
}
```

3. Tomcat サーバを再起動します。

5.10.1.3.5 BOE の内部およびカスタムのプロパティファイルの設定

1. **<INSTALLDIR>** > *Tomcat* > *webapps* > *BOE* > *WEB-INF* > *internal* に移動します。
2. bilaunchpad.properties ファイルを開き、以下のプロパティを変更します。

```
redirection.iframe.1.incoming.url=property.ref.app.url.name
redirection.iframe.1.application=InfoView
redirection.iframe.1.bundle.path=/InfoView
redirection.iframe.1.redirectto.url=/custom.jsp
redirection.iframe.2.incoming.url=property.ref.app.url.name
redirection.iframe.2.incoming.url.suffix=/index.html
redirection.iframe.2.application=InfoView
redirection.iframe.2.bundle.path=/InfoView
redirection.iframe.2.redirectto.url=/custom.jsp
redirection.iframe.9.incoming.url=/InfoView/index.html
redirection.iframe.9.application=InfoView
redirection.iframe.9.bundle.path=/InfoView
redirection.iframe.9.redirectto.url=/custom.jsp
```

3. Tomcat サーバを再起動します。

5.10.1.3.6 BOE Web.xml ファイルの設定

1. **<INSTALLDIR>**¥tomcat¥webapps¥BOE¥WEB-INF に移動します。
2. この場所にある web.xml ファイルを、以下に示すコードを使用して編集します。

```
<init-param>
<param-name>extendedFrameworkExports</param-name>
<param-
value>com.businessobjects.servletbridge.listener,com.businessobjects.servletbr
idge.customconfig,com.businessobjects.servletbridge.external,com.businessobjec
ts.servletbridge.session,com.businessobjects.resource,oracle.jdbc.pool,com.sie
bel.data,com.jdedwards.system.xml,org.ietf.jgss,com.sap.security.api</param-
value>
</init-param>
```

3. 以下に示す手順に従って、web.xml ファイルにパラメータを追加します。

- a. <INSTALLDIR>%tomcat%\webapps\BOE\WEB-INF\ eclipse\plugins\webpath.BIPCoreWeb\web\WEB-INF に移動します。
- b. 以下に示すパラメータを追加します。

```
<init-param>
<param-name>trusted.auth.shared.secret</param-name>
<param-value>New_Shared_Secret_Key</param-value>
</init-param>
```

- c. <<INSTALLDIR>%tomcat%\work\Catalina\localhost\BOE\ eclipse\plugins\webpath.BIPCoreWeb\web\WEB-INF に移動して手順を繰り返します。

→ ヒント

信頼できる認証を正しく設定したことを確認するには、URL [https://\[cmsname\]:8443/BOE/BI/logon.jsp](https://[cmsname]:8443/BOE/BI/logon.jsp) を使用して BI ラウンチパッドアプリケーションにアクセスします。[cmsname] は、CMS をホストしているマシンの名前です。

5.10.2 Web サービスの X.509 認証

5.10.2.1 SOAP Web サービス向け

5.10.2.1.1 Tomcat での SSL の設定

Web サービスを使用する場合、SAP Business Intelligence プラットフォームを設定する前に、Tomcat で SSL を設定する必要があります。

① 注記

X.509 認証によるシングルサインオンを達成するためには、BI プラットフォームにユーザが存在している必要があります。

1. <INSTALLDIR>%tomcat%\conf に移動します。
2. server.xml を XML エディタで開き、xml タグを次のように編集します。

```
<Connector port="8443" protocol="org.apache.coyote.http11.Http11NioProtocol"
maxThreads="200" SSLEnabled="true" scheme="https" secure="true"> <SSLHostConfig
protocols="TLSv1.2"><Certificate certificateKeystoreFile="C:/SSL/
myserver.keystore" certificateKeystorePassword="mypassword"/></SSLHostConfig></
Connector>
```

3. ファイルを保存します。

① 注記

上記のパスワードとファイルの場所は単なる例です。任意のパスワードと場所を追加できます。

① 注記

キーストアファイルの作成の詳細については、[証明書およびキーストアの作成および設定 \[116 ページ\]](#) を参照してください。

5.10.2.1.2 axis2.xml ファイルの設定

① 注記

Linux または Unix では、以下の手順を実行する前に、OS BI インストールユーザが `<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%warfiles%webapps%dswsbobje` に対して再帰的な 755 権限を持っていることを確認してください。この権限は、`chmod -R 755` コマンドを使用して付与できます。

1. `<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%warfiles%webapps%dswsbobje%WEB-INF%conf` に移動します。
2. 任意の XML エディタで `axis2.xml` ファイルを開きます。
3. セキュリティ保護された接続を許可する新しいポート番号で `xml` タグを更新します。

```
<transportReceiver name="http"
class="org.apache.axis2.transport.http.AxisServletListener">
<parameter name="port">8080</parameter>
</transportReceiver>
<transportReceiver name="https"
class="org.apache.axis2.transport.http.AxisServletListener">
<parameter name="port">8443</parameter>
</transportReceiver>
```

① 注記

デフォルト設定では、AxisServlet は http でのみ要求を受信すると想定しています。https を許可するには、`name = "https"` として AxisServletListener を設定し、両方のレシーバでポートパラメータを指定する必要があります。また、`xml` タグを更新して、複数のポート番号を追加または削除できます。

4. `axis2.xml` を保存します。
5. Tomcat サーバを再起動します。
6. 任意のブラウザを起動し、`https://<IP address>:<https port>/dswsbobje/services/listServices` に移動して、セキュア接続を検証します。リンクに移動すると、`trustedLoginWithX509` が [セッション] タブに表示されません。

5.10.2.1.3 共有シークレットの値の生成

1. セントラル管理コンソールを起動します。
2. [認証](#) > [Enterprise](#) に移動します。
3. [信頼できる認証](#)で、[信頼できる認証](#)のボックスが有効になっていることを確認します。

4. [\[新規共有シークレット\]](#)を選択します。これにより、共有シークレットキーが生成されます。
5. [\[共有シークレットのダウンロード\]](#)を選択し、[\[更新\]](#)を選択します。
6. ダウンロードしたファイル TrustedPrincipal.conf を、Windows では <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%container%bin にコピーします。

① 注記

共有シークレットの値を表示するには、任意の XML エディタで TrustedPrincipal.conf を開きます。

5.10.2.1.4 web.xml ファイルの設定

1. <INSTALLDIR>%tomcat%webapps%dswebobj%WEB-INF に移動します。
2. web.xml を XML エディタで開き、xml タグを CMS ホストマシン名とともに以下のように更新します。

```
<context-param>
  <param-name>cms.default</param-name>
  <param-value>EnterHostMachineName</param-value>
</context-param>
```

3. 以下に示す xml タグを共有シークレットの値とともに追加します。共有シークレットの値を生成する方法については、[共有シークレットの値の生成 \[125 ページ\]](#) を参照してください。

```
<context-param>
  <param-name>trusted.auth.shared.secret</param-name>
  <param-value>shared secret value</param-value>
</context-param>
```

4. web.xml ファイルを保存します。

① 注記

BI 4.2 SP04 より低いバージョンからアップグレードしている場合、axis2.xml ファイルで行った設定内容は破棄されます。

5.10.2.2 RESTful Web サービス向け

① 注記

X.509 認証によるシングルサインオンを実現するためには、BI プラットフォームにユーザが存在している必要があります。

Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドのトピック「HTTPS/SSL の設定」をチェックして、RESTful Web サービスの信頼された認証を確立します。

X.509 証明書を使用して信頼された認証を確立するには、共有秘密鍵を生成する必要があります。詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「共有シークレットの値の生成」を参照してください。

また、REST SDK エンドポイントの詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム *RESTful Web* サービス開発者ガイドの [API リファレンス](#) > [認証](#) > [/v1//logon/trustedx509](#) を参照してください。

5.10.3 CMC の X.509 認証

5.10.3.1 Custom.jsp ファイルの編集 (CMC 向け)

① 注記

custom.jsp ファイルを編集する前に、ユーザをマシン名とともに CMC に作成します。マシンにユーザが存在する場合、以下の手順を直接開始できます。

1. com.businessobjects.webpath.InfoView.jar で
<INSTALLDIR>%tomcat%webapps%BOE%WEB-INF%eclipse%plugins%webpath.CmcApp%web%custom.jsp に移動します。
2. custom.jsp ファイルを編集します。

```
<?DOCTYPE HTML PUBLIC "-//W3C//DTD HTML 4.01 Transitional//EN" "http://
www.w3.org/TR/html4/loose.dtd">
<%@ page language="java" contentType="text/html; charset=utf-8" %>
<% //custom Java code request.getSession().setAttribute("MySecret","Shared
Secret Key")
request.getSession().setAttribute("MyUser", "John Doe");
%>
<html>
<head>
<title>Custom Entry Point</title>
</head>
<body>
<script type="text/javascript"src="noCacheCustomResources/myScript.js">
</script>
<a href="javascript:goToLogonPage()">Click this to go to the logon page of BI
launch pad </a>
</body>
</html>
```

① 注記

このコードの共有シークレット値を新しいキーに置き換え、ユーザを CMC に作成されたマシン名に置き換える必要があります。

5.10.3.2 myScript.js ファイルの作成 (CMC 向け)

1. <INSTALLDIR>%tomcat%webapps%BOE%WEB-INF%eclipse%plugins%webpath.CmcApp%web%noCacheCustomResources and create myScript.js に移動します。

2. 以下を myScript.js に追加します。

```
function goToLogonPage()  
{  
    window.location = "logon.jsp";  
}
```

3. Tomcat サーバを再起動します。

5.10.3.3 BOE の内部およびカスタムのプロパティファイルの設定 (CMC 向け)

1. <INSTALLDIR>%tomcat%webapps%BOE%WEB-INF%internal%CmcApp.properties に移動します。
2. CmcApp.properties ファイルを開き、以下のパラメータを追加します。

```
sso.supported.types=vintela, trustedIIS, trustedHeader, trustedParameter,  
trustedCookie, trustedSession, trustedUserPrincipal, trustedVintela,  
trustedX509, sapSSO, sitemindera
```

3. Tomcat サーバを再起動します。

5.10.3.4 BOE Web.xml ファイルの設定 (CMC 向け)

1. <INSTALLDIR>%tomcat%webapps%BOE%WEB-INF に移動します。
2. この場所にある web.xml ファイルを、以下に示すコードを使用して編集します。

```
<init-param>  
<param-name>extendedFrameworkExports</param-name>  
<param-  
value>com.businessobjects.servletbridge.listener,com.businessobjects.servletbr  
idge.customconfig,com.businessobjects.servletbridge.external,com.businessobjec  
ts.servletbridge.session,com.businessobjects.resource,oracle.jdbc.pool,com.sie  
bel.data,com.jdedwards.system.xml,org.ietf.jgss,com.sap.security.api</param-  
value>  
</init-param>
```

3. 以下に示す手順に従って、web.xml ファイルにパラメータを追加します。
 - a. <INSTALLDIR>%tomcat%webapps%BOE%WEB-INF%eclipse%plugins%webpath.CmcApp%web%WEB-INF%web.xml に移動します。
 - b. 以下に示すパラメータを追加します。

```
<init-param>  
<param-name>trusted.auth.shared.secret</param-name>  
<param-value>Shared_Secret_Key</param-value>  
</init-param>
```

- c. <INSTALLDIR>%tomcat%work%Catalina%localhost%BOE%eclipse%plugins%webpath.CmcApp%web%WEB-INF%web.xml に移動して手順を繰り返します。

① 注記

信頼できる認証を正しく設定したことを確認するには、URL `https://[cmsname]:8443/BOE/BI/logon.jsp` を使用して BI ラUNCHパッドアプリケーションにアクセスします。[cmsname] は、CMS をホストしているマシンの名前です。

5.11 OpenID 接続認証

OpenID 接続認証を有効化できます。

OpenID 接続認証は、認証サーバ (OAuth) に基づいて機能します。クラウドドライブのサポートと同様に、OpenID 接続認証も認証サーバ設定に依存します。認証サーバ設定の詳細については、[認可サーバの設定 \[231 ページ\]](#)を参照してください。

OpenID 接続認証は、Enterprise 認証に基づいて開発されています。

SAML 認証の場合と同様に、Enterprise ユーザ (secEnterprise) として事前に BI プラットフォームにユーザをインポートする必要があります。

① 注記

ユーザのインポート時には、ユーザの電子メール ID も含まれていることを確認する必要があります。

SAML 認証とは異なり、OpenID 接続認証には以下が適用されます。

- すべての設定は、アプリケーションサーバレイヤではなく、BI プラットフォームバックエンドで行う必要があります。
- 信頼できる認証には依存しません。

OpenID 接続認証は、BI ラUNCHパッドおよび OpenDocument でのみサポートされています。

5.11.1 OpenID 接続認証の有効化

OpenID 接続認証は、BI ラUNCHパッドおよび OpenDocument でのみサポートされています。

OpenID 接続認証の詳細については、[Enterprise 認証の設定 \[62 ページ\]](#)を参照してください。バックエンドの Enterprise 認証プラグインで OpenID 接続認証を有効にした後、サポートされるアプリケーションの同じアプリケーション層 (BI ラUNCHパッドの場合は `FioriBI.properties` ファイル、OpenDocument アプリケーションの場合は `WEB-INF/config/custom` の下の `OpenDocument.properties` ファイルなど) を有効にする必要があります。

Web SSO 認証ワークフローを有効化するには、`logon.webssoauthentication.framework` を `OpenId` に設定します。

`openid.restful.url` を、ランドスケープの RESTful Web サービス URL に設定します (`https://<server>:8443/biprws` など)。

BI ラUNCHパッドには、`.../BO/BI` URL を使用して OpenID でログインできます。ただし、OpenID 接続認証を使用して BI ラUNCHパッドにログインすると、プレースホルダのコンテキストパス「WEBSSO」が URL に追加さ

れます。これは、ログアウト後も URL のパスに残ります。同じウィンドウから同じ URL を使用して再ログインする場合は、ブラウザの URL から「WEBSSO」を削除する必要があります。

6 ユーザ属性の管理

6.1 システムユーザの属性の管理

BI プラットフォームの管理者は、セントラル管理コンソール (CMC) の [ユーザ属性管理] エリアでユーザ属性を定義し、システムユーザに対して追加します。次のユーザディレクトリの属性を管理および拡張できます。

- Enterprise
- SAP
- LDAP
- Windows AD

ユーザが SAP、LDAP、Windows AD などの外部ディレクトリからインポートされている場合、そのユーザアカウントでは一般的に次の属性を使用できます。

- フルネーム
- 電子メールアドレス

属性名

システムに追加したすべてのユーザ属性に次のプロパティが含まれている必要があります。

- [名前](#)
- [内部名](#)

“名前”プロパティは、属性のわかりやすい識別子であり、ユニバースのセマンティックレイヤを扱うときにフィルタをクエリするために使用されます。詳細については、ユニバースデザインツールのマニュアルを参照してください。“内部名”は、BI プラットフォーム SDK を扱う開発者によって使用されます。このプロパティは、自動的に生成された名前です。

属性名は 256 文字以下にする必要があります。また、使用できるのは英数字とアンダースコアのみになります。

→ ヒント

名前属性に無効な文字を指定すると、BI プラットフォームで内部名が生成されません。内部名はシステムに追加すると変更できなくなるため、英数字とアンダースコアを含む適切な属性名を慎重に選択することをお勧めします。

マップされたユーザ属性を拡張するための前提条件

システムにユーザ属性を追加する前に、ユーザをマップおよびインポートするように外部ユーザディレクトリのすべての関連する認証プラグインを設定する必要があります。また、外部ディレクトリ、特にターゲット属性に使用する名前のスキーマに精通している必要があります。

① 注記

SAP 認証プラグインの場合、BAPIADDR3 構造に含まれる属性のみを指定できます。

新しいユーザ属性をマップするように BI プラットフォームが設定されると、次にスケジュールされている更新後に値が入力されます。CMC の [\[ユーザとグループ\]](#) 管理エリアにすべてのユーザ属性が表示されます。

6.2 複数の認証オプションに対するユーザ属性の優先順位付け

SAP、LDAP、および AD の認証プラグインを設定する場合、プラグインごとに他の 2 つのプラグインに対する優先順位レベルを指定できます。たとえば、LDAP 認証エリアでは、[\[別の属性バインディングに関連する LDAP 属性バインディングの優先順位を設定する\]](#) オプションを使用して、SAP および AD に対する LDAP の優先順位を指定します。デフォルトでは、Enterprise 属性値が外部ディレクトリの値よりも優先されます。属性バインディングの優先順位は、特定の属性ではなく認証プラグインレベルで設定されます。

関連情報

[LDAP ホストを設定する \[65 ページ\]](#)

[SAP ロールをインポートする \[89 ページ\]](#)

6.3 新しいユーザ属性を追加する

新しいユーザ属性を BI プラットフォームに追加するには、ユーザアカウントをマップする外部ディレクトリの認証プラグインを設定する必要があります。これは、SAP、LDAP、および Windows AD に適用されます。具体的には、必要なすべてのプラグインの [\[フルネーム、電子メールアドレス、およびその他の属性のインポート\]](#) オプションをオンにする必要があります。

① 注記

Enterprise ユーザアカウントの属性を拡張する前に準備タスクを実行する必要はありません。

→ ヒント

複数のプラグインで同じ属性を拡張する場合、組織の要件に基づいて適切な属性バインディングの優先順位レベルを設定することをお勧めします。

1. CMC の [\[ユーザ属性管理\]](#) 管理エリアに移動します。
2. [\[新規カスタムマップ属性を追加します\]](#) アイコンをクリックします。
[\[属性の追加\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
3. [\[名前\]](#) フィールドで新しい属性の名前を指定します。
BI プラットフォームでは、新しい属性のフレンドリ名として入力された名前が使用されます。
フレンドリ名を入力すると、SI_[\[Friendlyname\]](#) の形式に従って [\[内部名\]](#) フィールドが自動的に設定されます。システム管理者が属性の "フレンドリ" 名を指定すると、BI プラットフォームによって自動的に "内部" 名が生成されます。
4. 必要な場合は、文字、数字またはアンダースコアを使用して [\[内部名\]](#) フィールドを変更します。

→ ヒント

[\[内部名\]](#) フィールドの値は、この段階でのみ変更できます。新しい属性を保存したら、この値は編集できなくなります。

新しい属性が Enterprise アカウント用の属性である場合、手順 8 に進みます。

5. リストから [\[新しいソースの追加先\]](#) の適切なオプションを選択して [\[追加\]](#) アイコンをクリックします。次のオプションがあります。

- [SAP](#)
- [LDAP](#)
- [AD](#)

指定した属性ソースに対応するテーブル行が作成されます。

6. [\[属性ソース名\]](#) 列で、ソースディレクトリの属性名を指定します。
BI プラットフォームには、入力した属性名が外部ディレクトリに存在しているかどうかを自動的に検証するメカニズムは備わっていません。入力した名前が正しく有効であることを確認してください。
7. 新しい属性のソースを追加する必要がある場合、手順 5～6 を繰り返します。
8. [\[OK\]](#) をクリックし、新しい属性を保存して BI プラットフォームに送信します。
CMC の [\[ユーザ属性管理\]](#) 管理エリアに新しい属性の名前、内部名、ソース、および属性ソース名が表示されます。

対象となる各ユーザアカウントの新しい属性とそれに対応する値が、次にスケジュールされている最新表示で [\[ユーザとグループ\]](#) 管理エリアに表示されます。

新しい属性に複数のソースを使用している場合、認証プラグインごとに正しい属性バインディングの優先順位が指定されていることを確認します。

6.4 カスタマイズされたユーザ属性を編集する

BI プラットフォームで作成されたユーザ属性を編集するには、次の手順に従います。以下を編集できます。

- BI プラットフォームの属性名

① 注記

これは、属性に使用される内部名ではありません。属性を作成して BI プラットフォームに追加したら、内部名は編集できなくなります。内部名を削除するには、管理者が関連する属性を削除する必要があります。

- 属性ソース名
- 属性の追加ソース

1. CMC の [\[ユーザ属性管理\]](#) 管理エリアに移動します。
2. 編集する属性を選択します。
3. [\[選択した属性を編集します\]](#) アイコンをクリックします。
[\[編集\]](#) ダイアログ ボックスが表示されます。
4. 属性の名前やソース情報を変更します。
5. [\[OK\]](#) をクリックし、変更を保存して BI プラットフォームに送信します。
変更した値が CMC の [\[ユーザ属性管理\]](#) 管理エリアに表示されます。

次にスケジュールされている最新表示の後に [\[ユーザとグループ\]](#) 管理エリアに変更した属性名と値が表示されます。

7 マルチテナント

7.1 CMC でのテナントの管理

tenant_template_def.properties ファイルでテナントを設定し、マルチテナント管理ツールを実行してテナントを作成したら、セントラル管理コンソール (CMC) でテナントを管理できます。

テナントを管理するには、CMC の [\[マルチテナント\]](#) 管理エリアを表示します。次のタスクを実行できます。

- 最大同時接続ユーザなどのテナントプロパティを設定する
- テナントのユーザとグループの関連付けを表示する
- テナントのユーザグループを追加または削除する
- テナントを削除する

tenant_template_def.properties ファイルの詳細については、『“Tenant definition configuration file reference”』を参照してください。

1. [テナントプロパティを設定する \[135 ページ\]](#)
2. [テナントのユーザグループにアクセス権を割り当てる \[137 ページ\]](#)
3. [テナントを削除する \[139 ページ\]](#)

7.1.1 テナントプロパティを設定する

セントラル管理コンソール (CMC) では、テナントプロパティファイルを変更することなく、次のプロパティを設定できます。

- テナント名
- 説明
- キーワード
- 同時接続ユーザ


CMC では、次の読み取り専用テナントプロパティを編集することはできません。

- ID
- CUID
- Date created
- 前回変更日時

ファイルの各プロパティの詳細については、『“Tenant definition configuration file reference”』を参照してください。

→ ヒント



テナントを選択して、ツールバーの  をクリックすれば、[プロパティ] ダイアログボックスに直接移動できます。

親トピック: [CMC でのテナントの管理 \[135 ページ\]](#)

次のタスク: [テナントのユーザグループにアクセス権を割り当てる \[137 ページ\]](#)

7.1.1.1 テナントの名前を変更する

1. セントラル管理コンソール (CMC) で、[マルチテナント] エリアを選択します。
2. テナントをダブルクリックします。
テナントの [プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
3. [テナント名] ボックスに、テナントの新しい名前を入力します。
4. [保存して閉じる] をクリックします。
入力したテナントの名前が表示されます。

7.1.1.2 テナントの説明を変更する

1. セントラル管理コンソール (CMC) で、[マルチテナント] エリアを選択します。
2. テナントをダブルクリックします。
テナントの [プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
3. [説明] ボックスにテナントの説明を入力します。
4. [保存して閉じる] をクリックします。
入力したテナントの説明が表示されます。

7.1.1.3 テナントのキーワードを変更する

1. セントラル管理コンソール (CMC) で、[マルチテナント] エリアを選択します。
2. テナントをダブルクリックします。
テナントの [プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
3. [キーワード] ボックスにテナントのキーワードを入力します。
4. [保存して閉じる] をクリックします。
入力したテナントのキーワードが表示されます。

7.1.1.4 テナントの同時接続ユーザ数を変更する

1. セントラル管理コンソール (CMC) で、[\[マルチテナント\]](#) エリアを選択します。
2. テナントをダブルクリックします。
テナントの [\[プロパティ\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
3. [\[同時接続ユーザ\]](#) で、CMC にログオンできるこのテナントの最大同時接続ユーザ数を選択します。
 - CMC にログオンできるこのテナントの最大ユーザ数を入力するには、[\[値\]](#) を選択して数値を入力します。
最大数を超えると、メッセージが表示されて、ユーザはログオンできなくなります。
 - このテナントの同時接続ユーザ数を制限しない場合は、[\[無制限\]](#) を選択します。
4. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。
定義した値は、[\[マルチテナント\]](#) ホームページの [\[同時接続ユーザ\]](#) 列に表示されます。

7.1.2 テナントのユーザグループにアクセス権を割り当てる

セントラル管理コンソール (CMC) では、プロパティファイルを変更することなく、テナントのユーザグループのアクセス権を設定できます。

→ ヒント

テナントを選択して、ツールバーの



をクリックすれば、[\[ユーザセキュリティ\]](#) ダイアログボックスに直接移動できます。

1. CMC で、[\[マルチテナント\]](#) エリアを選択します。
2. テナントを右クリックし、[\[ユーザセキュリティ\]](#) を選択します。
3. [\[ユーザセキュリティ\]](#) ダイアログボックスで、[\[主体の追加\]](#) をクリックします。
4. [\[主体の追加\]](#) ダイアログボックスで、アクセス権を設定するテナントのユーザグループを [\[利用可能なユーザまたはグループ\]](#) リストから [\[選択されたユーザまたはグループ\]](#) リストに移動させます。
5. [\[セキュリティを追加して割り当てる\]](#) をクリックします。
6. [\[セキュリティの割り当て\]](#) ダイアログボックスで、テナントのユーザグループに付与するアクセス権レベルを選択します。
7. フォルダ継承を有効化するには、[\[親フォルダからの継承\]](#) チェックボックスをオンにします。
グループ継承を無効化するには、チェックボックスをオフにします。
8. グループ継承を有効化するには、[\[親グループからの継承\]](#) チェックボックスをオンにします。
グループ継承を無効化するには、チェックボックスをオフにします。
9. [\[OK\]](#) をクリックしてから [\[閉じる\]](#) をクリックします。

選択したアクセス権がユーザグループに割り当てられます。

タスクの概要: [CMC でのテナントの管理 \[135 ページ\]](#)

前のトピック: [テナントプロパティを設定する \[135 ページ\]](#)

次のタスク: [テナントを削除する \[139 ページ\]](#)

7.1.2.1 テナントからアクセス権を削除する

セントラル管理コンソール (CMC) では、プロパティファイルを変更することなく、テナントのユーザグループからアクセス権を削除できます。

1. CMC で、[\[マルチテナント\]](#) エリアを選択します。
2. テナントを右クリックし、[\[ユーザセキュリティ\]](#) を選択します。
3. [\[ユーザセキュリティ\]](#) ダイアログボックスで、[\[主体の追加\]](#) をクリックします。
4. [\[主体の追加\]](#) ダイアログボックスで、アクセス権を削除するテナントのユーザグループを [\[利用可能なユーザまたはグループ\]](#) リストから [\[選択されたユーザまたはグループ\]](#) リストに移動させます。
5. [\[セキュリティを追加して割り当てる\]](#) をクリックします。
6. [\[セキュリティの割り当て\]](#) ダイアログボックスで、[\[アクセス権の削除\]](#) をクリックします。
7. [\[OK\]](#) をクリックしてから [\[閉じる\]](#) をクリックします。


テナントのユーザグループからすべてのアクセス権が削除されます。

7.1.3 テナントのユーザグループの管理

7.1.3.1 テナントのユーザとグループの関連付けを表示する

セントラル管理コンソール (CMC) では、プロパティファイルを変更することなく、テナントのユーザとユーザグループの関連付けを表示できます。

→ ヒント

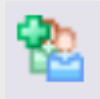
テナントを選択して、ツールバーの  をクリックすれば、[\[ユーザグループ\]](#) ダイアログボックスに直接移動できます。

1. CMC で、[\[マルチテナント\]](#) エリアを選択します。
2. ユーザとグループの関連付けを表示するテナントをダブルクリックします。
3. [\[プロパティ\]](#) ダイアログボックスのナビゲーション一覧で、[\[ユーザグループ\]](#) をクリックします。
[\[ユーザグループ\]](#) ダイアログボックスが表示され、このテナントに関連付けられているグループが一覧表示されます。

7.1.3.2 ユーザグループをテナントに追加する

セントラル管理コンソール (CMC) では、プロパティファイルを変更することなく、ユーザグループをテナントに追加できます。

→ ヒント



テナントを選択して、ツールバーの をクリックすれば、[テナントにグループを追加] ダイアログボックスに直接移動できます。

1. CMC で、[マルチテナント] エリアを選択します。
2. ユーザグループを追加するテナントを右クリックし、▶ **テナントにグループを追加** を選択します。
3. [テナントにグループを追加] ダイアログボックスで、追加するユーザグループを [利用可能なグループ] リストから [選択されたグループ] リストに移動させます。
4. [OK] をクリックします。

ユーザグループがテナントに追加されます。

7.1.3.3 テナントからユーザグループを削除する

セントラル管理コンソール (CMC) では、プロパティファイルを変更することなく、ユーザグループをテナントから削除できます。

1. CMC で、[マルチテナント] エリアを選択します。
2. ユーザグループを削除するテナントをダブルクリックします。
3. テナントの [プロパティ] ダイアログボックスのナビゲーション一覧で、[ユーザグループ] をクリックします。
4. [ユーザグループ] ダイアログボックスで、削除するユーザグループを選択して [削除] をクリックします。

ユーザグループがテナントから削除されます。

7.1.4 テナントを削除する

セントラル管理コンソール (CMC) では、BI リポジトリからテナントおよびすべてのオブジェクトを削除できます。

① 注記

共有されているオブジェクト、または修正権限が許可されていないオブジェクトは削除できません。

→ ヒント

テナントを選択して、ツールバーの



をクリックすれば、[\[削除\]](#) ダイアログボックスに直接移動できます。

1. CMC で、[\[マルチテナント\]](#) エリアを選択します。
2. テナントを右クリックし、[\[削除\]](#) を選択します。
3. [\[削除\]](#) ダイアログボックスで、削除するテナントを [\[利用可能\]](#) リストから [\[除外する\]](#) リストに移動させ、[\[OK\]](#) をクリックします。
4. 表示される確認ダイアログボックスで、もう一度 [\[OK\]](#) をクリックします。

テナントが Central Management Server (CMS) リポジトリから削除されます。

タスクの概要: [CMC でのテナントの管理 \[135 ページ\]](#)

前のタスク: [テナントのユーザグループにアクセス権を割り当てる \[137 ページ\]](#)

8 ライセンスの管理

8.1 ライセンスキーの管理

この節では、BI プラットフォームデプロイメントのライセンスキーを管理する方法について説明します。

関連情報

[ライセンス情報を表示する \[141 ページ\]](#)

[ライセンスキーを追加する \[141 ページ\]](#)

[現在のアカウントの利用状況を表示する \[142 ページ\]](#)

8.1.1 ライセンス情報を表示する

CMC の [\[ライセンスキー\]](#) 管理エリアでは、各キーに関連付けられた同時接続ライセンス、指定ライセンス、およびプロセッサライセンスの数を識別します。

1. CMC の [\[ライセンスキー\]](#) 管理エリアを表示します。
2. ライセンスキーを選択します。

キーに関連付けられた詳細情報が [\[ライセンスキー情報\]](#) エリアに表示されます。ライセンスキーの追加購入については、SAP 営業担当者にお問い合わせください。

関連情報

[ライセンスキーを追加する \[141 ページ\]](#)

[現在のアカウントの利用状況を表示する \[142 ページ\]](#)

8.1.2 ライセンスキーを追加する

製品の評価版からアップグレードする場合、評価版キーを削除してから、新しいライセンスキーまたは製品アクティベーションコードを追加してください。新しいライセンスキーを追加した後、すべてのサーバを再度有効化する必要があります。

① 注記

BI プラットフォームのライセンスを組織で実装する方法が変更された結果、新しいライセンスキーを受け取った場合は、整合性を維持するために、以前のライセンスキーをシステムからすべて削除する必要があります。

① 注記

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 サポートパッケージ 2 より前のバージョンから、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 サポートパッケージ 2 以降のバージョンにアップデートすると、既存のライセンスは失効したライセンスとして機能します。SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 の新しいライセンスキーを生成する必要があります。

1. CMC の[[ライセンスキー](#)]管理エリアを表示します。
2. [[キーの追加](#)]フィールドにキーを入力します。
3. [[追加](#)]をクリックします。

キーが一覧に追加されます。

関連情報

[ライセンス情報を表示する \[141 ページ\]](#)

[現在のアカウントの利用状況を表示する \[142 ページ\]](#)

8.1.3 現在のアカウントの利用状況を表示する

1. CMC の[[設定](#)]管理エリアを表示します。
2. [[グローバルシステムメトリクスの表示](#)]をクリックします。

このセクションには、現在のライセンス使用状況がその他のジョブメトリクスと共に表示されます。

関連情報

[ライセンスキーを追加する \[141 ページ\]](#)

[ライセンス情報を表示する \[141 ページ\]](#)

9 サーバの管理

9.1 CMC の[サーバ]管理エリアの使用

CMC のサーバ管理エリアは、サーバ管理タスクの主要なツールです。この管理エリアには、デプロイメント内のすべてのサーバが一覧表示されます。多くの管理タスクと設定タスクの場合、一覧内のサーバを選択し、[管理]メニューまたは[アクション]メニューからコマンドを選択する必要があります。

ナビゲーションツリーについて

[サーバ]管理エリアの左側にあるナビゲーションツリーではさまざまな方法で[サーバの一覧]を表示できます。ナビゲーションツリーで項目を選択し、[詳細]ウィンドウに表示される情報を変更します。

ナビゲーションツリーのオプション	説明
サーバの一覧	デプロイメント内のすべてのサーバの一覧が表示されます。
サーバグループの一覧	詳細ウィンドウに使用可能なすべてのサーバグループを全レベル表示します。サーバグループの設定またはセキュリティを設定する場合にこのオプションを選択します。
サーバグループ	サーバグループと各サーバグループ内のサーバを一覧表示します。サーバグループを選択すると、そのグループに含まれるサーバとサーバグループが詳細ウィンドウに階層表示で示されます。
ノード	デプロイメント内のノードの一覧を表示します。ノードは、CCM で設定されます。ノードをクリックして選択し、ノードにあるサーバを表示または管理できます。

サービスカテゴリ

デプロイメント内にあるサービスの種類の一覧を示します。サービスカテゴリは、コア BI プラットフォームサービスと、特定の SAP Business Objects コンポーネントに関連付けられているサービスに分類されます。次のサービスカテゴリがあります。

- [接続サービス](#)
- [コアサービス](#)
- [Crystal Reports サービス](#)
- [データフェデレーションサービス](#)
- [プロモーション管理サービス](#)
- [Analysis サービス](#)
- [Web Intelligence サービス](#)

ナビゲーションリストでサービスカテゴリを選択し、カテゴリ内のサーバを表示または管理します。

① 注記

サーバは、複数のサービスカテゴリに属するサービスをホストすることがあります。このため、1つのサーバが複数のサービスカテゴリに表示されることがあります。

サーバステータス

サーバは、その現在のステータスに従って表示されます。これは、実行中のサーバと停止しているサーバを確認するのに役立つツールです。たとえば、システムのパフォーマンスが低下している場合は、[\[サーバステータス\]](#)一覧を使用して、異常な状態のサーバがないかすぐに確認できます。サーバの状態は次のとおりです。

- [停止](#)
- [開始中](#)
- [初期化中](#)
- [実行中](#)
- [停止中](#)
- [実行中、エラーあり](#)
- [失敗](#)
- [リソースの待機中です](#)

詳細ウィンドウについて

ナビゲーションツリーで選択したオプションに応じて、[サーバ]管理エリアの右側にある[\[詳細\]](#)ウィンドウには、サーバ、サーバグループ、状態、カテゴリ、またはノードの一覧が表示されます。次の表で、[\[詳細\]](#)ウィンドウに示されるサーバ情報について説明します。

① 注記

ノード、サーバグループ、カテゴリ、および状態については、[\[詳細\]](#)ウィンドウに名前と説明が通常表示されます。

詳細ウィンドウの列	説明
サーバ名または名前	サーバの名前を表示します。
状態	<p>サーバの現在の状態を表示します。ナビゲーションツリーの[サーバステータス]一覧を使用して、サーバの状態と並べ替えることができます。サーバの状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 停止 • 開始中 • 初期化中 • 実行中 • 停止中 • 実行中、エラーあり • 失敗 • リソースの待機中です
有効	サーバが有効かどうかを表示します。
要再起動	サーバに[古い]とマークが付いている場合は、再起動が必要です。たとえば、サーバの[プロパティ]画面で特定のサーバ設定を変更した場合、変更を反映するには、サーバを再起動する必要があります。
種類	サーバの種類を表示します。
ホスト名	サーバのホスト名を表示します。
サーバの状態	<p>サーバの健全性全般を表示します。</p> <p>サーバの状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 緑色 (正常) • 黄色 (注意) • 赤色 (危険) <p>サーバのヘルスステータスは、サーバの監視のステータスに直接依存します。たとえば、Central Management Server のヘルスステータスは <NODENAME>.CentralManagementServer Watch のステータスによって決まります。</p> <p>監視の詳細へは CMC の [モニタリング] ページからアクセスできます。[監視リスト] タブで、監視を選択して [編集] をクリックします。監視の注意ルールおよび危険ルールが表示され、それぞれ黄色のヘルスステータスと赤色のヘルスステータスにマップされています。</p>
<i>PID</i>	サーバの固有プロセス ID 番号を表示します。
説明	サーバの説明を表示します。この説明はサーバの[プロパティ]ページで変更できます。
変更した日付	サーバが最後に変更された日付、またはサーバの状態が変更された日付を表示します。この列は、最近変更されたサーバのステータスを確認する場合に役に立ちます。

9.2 サーバのステータスを表示する

1. CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアを表示します。

[\[詳細\]](#) ペインに、デプロイメントでのサービスカテゴリが表示されます。

2. ナビゲーションツリーに特定のサーバグループ、ノードまたはサービスカテゴリのサーバ一覧を表示するには、サーバグループ、ノード、カテゴリをクリックします。

[\[詳細\]](#) ペインに、デプロイメント内のサーバ一覧が表示されます。[\[状態\]](#) 列には、一覧内の各サーバのステータスが表示されます。

3. 現在特定のステータスになっているすべてのサーバの一覧を表示する場合は、ナビゲーションツリーで[\[サーバステータス\]](#)オプションを展開し、必要なステータスを選択します。

選択されたステータスのサーバの一覧が詳細ウィンドウに表示されます。

① 注記

この機能は、特に、正しく起動していない、または予期せずに停止したサーバの一覧をすばやく参照する必要がある場合に役に立ちます。

9.3 CMC でサーバを起動、停止、または再起動する

1. CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアを表示します。

[\[詳細\]](#) ペインに、デプロイメントでのサービスカテゴリが表示されます。

2. 特定のサーバグループ、ノード、またはサービスカテゴリに含まれるサーバの一覧を表示するには、ナビゲーションペインでグループ、ノード、またはカテゴリを選択します。

[\[詳細\]](#) ペインに、サーバの一覧が表示されます。

3. 現在特定のステータスになっているすべてのサーバの一覧を表示する場合は、ナビゲーションツリーで[\[サーバステータス\]](#)オプションを展開し、必要なステータスを選択します。

選択されたステータスのサーバの一覧が [\[詳細\]](#) ペインに表示されます。

① 注記

この機能は、特に、正しく起動していない、または予期せずに停止したサーバの一覧をすばやく参照する必要がある場合に役に立ちます。

4. ステータスを変更するサーバを右クリックして、実行する必要があるアクションに応じて、[\[サーバの起動\]](#)、[\[サーバの再起動\]](#)、[\[サーバの停止\]](#) または [\[強制終了\]](#) をクリックします。

9.4 サーバを自動的に起動する

デフォルトでは、Server Intelligence Agent が起動すると、デプロイメント内のサーバが自動的に起動します。このタスクでは、自動起動オプションの設定方法を説明します。

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. 自動起動するサーバをダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。
3. [共通設定] の下で、[Server Intelligence Agent の起動時にこのサーバを自動的に起動します] チェックボックスをオンにし、[保存] または [保存して閉じる] をクリックします。

① 注記

クラスタの各 CMS の [Server Intelligence Agent の起動時にこのサーバを自動的に起動します] チェックボックスがオフの場合、CCM を使用してシステムを再起動する必要があります。CCM を使用して SIA を停止した後、SIA を右クリックして、[プロパティ] を選択します。[スタートアップ] タブで、[プロパティ] をクリックして、CMS の [サーバプロパティ] ページを開きます。[自動開始] を選択し [OK] をクリックして [サーバプロパティ] ページを閉じ、再度 [OK] をクリックします。SIA を再起動します。[自動開始] オプションは、クラスタの各 CMS の [Server Intelligence Agent の起動時にこのサーバを自動的に起動します] チェックボックスがオフの場合のみ利用できます。

9.5 CMC でサーバを有効/無効にする

1. CMC の [サーバ] 管理エリアを表示します。
2. ステータスを変更するサーバを右クリックして、実行する必要があるアクションに応じて、[サーバの有効化] または [サーバの無効化] をクリックします。

9.6 サーバの追加

1つのマシン上で同一の BI プラットフォームサーバの複数のインスタンスを実行できます。サーバを追加するには、次の操作を行います。

1. CMC の [サーバ] 管理エリアを表示します。
2. [管理] メニューの ► 新規 ► 新しいサーバ をクリックします。
[新規サーバ名] ダイアログボックスが開きます。
3. [サービスカテゴリ] を選択します。
4. [サービスの選択] 一覧からサービスのタイプを選択し、[次へ] をクリックします。
5. 追加のサービスをサーバに追加するには、[利用可能な追加のサービス] 一覧でサービスを選択し、[>] をクリックします。

① 注記

すべてのタイプのサーバで追加のサービスを利用できるわけではありません。

6. 必要なサービスを追加した後に、[次へ] をクリックします。
7. BI プラットフォームアーキテクチャが複数のノードで構成されている場合は、[ノード] 一覧から新しいサーバを追加するノードを選択します。

8. **[サーバ名]**ボックスにサーバの名前を入力します。

システムの各サーバには、一意の名前が必要です。デフォルトの命名規則は `<NODENAME>.<servertype>` です (同じホストマシン上に同じタイプのサーバが複数ある場合は、名前に数字が付け加えられます)。

9. サーバの説明を含める場合は、**[説明]**ボックスに説明を入力します。
10. 新しい Central Management Server を追加する場合は、**[ネームサーバポート]**フィールドでポート番号を指定します。
11. **[作成]** をクリックします。
新しいサーバが、CMC の**[サーバ]**エリアのサーバの一覧に表示されますが、開始されていなくて、有効にもなっていません。
12. 新しいサーバに BI プラットフォームリクエストへの応答を開始させるには、CMC を使用してサーバを開始して有効にします。

9.7 サーバをクローンする

1. クローンされたサーバを追加するマシンで、CMC の **[サーバ]** 管理エリアを表示します。
2. クローンするサーバを右クリックし、**[クローンサーバ]** を選択します。
[クローンサーバ] ダイアログボックスが開きます。
3. **[新しいサーバ名]** フィールドに、サーバの名前を入力します (またはデフォルト名を使用します)。
4. Central Management Server をクローンする場合は、**[ネームサーバポート]** フィールドでポート番号を指定します。
5. **[ノードに複製]** リストでクローンサーバを追加するノードを選択し、**[OK]** をクリックします。
CMC の **[サーバ]** 管理エリアに、新しいサーバが表示されます。

9.8 サーバの削除

1. CMC の**[サーバ]**管理エリアを表示します。
2. 削除するサーバを停止します。
3. サーバを右クリックし、**[削除]**を選択します。
4. 確認を求めるメッセージが表示されたら、**[OK]**をクリックします。

9.9 カスタムインターネットヘッダの追加

電子メールメッセージのインターネットヘッダは、メッセージの作成者、メッセージが通過した電子メールサーバ、およびメッセージの作成に使用されたツールまたはソフトウェアに関する情報で構成されます。SAP BusinessObjects BI プラットフォームから、スケジュールされる電子メールにカスタムインターネットヘッダを追加できるようになりました。以下の手順に従って、カスタムヘッダを追加します。

1. [CMC] にログインします。
2. [サーバ]、[サーバの一覧] の順に移動します。
3. [Adaptive Job Server] のコンテキストメニューを開き、[出力先] を選択します。
4. [出力先] ウィザードで、[電子メール] を選択し、以下のように各フィールドに必要な詳細を追加します。

5. [カスタムヘッダを有効にする] をオンにし、以下のように空白フィールドにインターネットヘッダを追加し

ます。

6. [保存して終了] を選択します。

スケジュール済みのドキュメントが添付された電子メールに、インターネットヘッダが含まれるようになりました。

① 注記

- スケジュール時に、[デフォルト設定を使用] を選択して、スケジュールされた電子メールにカスタムインターネットヘッダを追加します。
- すべての電子メールにカスタムヘッダが追加されるように、すべての [Adaptive Job Server] を設定する必要があります。

9.10 非排他的サーバグループを登録する

非排他的サーバグループには、その他の非排他的サーバグループや一般的なサーバプールの一部であるサーバやサーバグループを含めることができます。

1. CMC の [サーバ] 管理エリアを表示します。
2. ► 管理 ► 新規 ► サーバグループの作成 ► の順にクリックします。
[サーバグループの作成] ダイアログボックスが表示されます。
3. [名前] フィールドに、新しいサーバグループの名前を入力します。

4. サーバグループに追加情報を含める場合、[説明] フィールドに入力します。
5. [OK] をクリックします。
6. [サーバ]管理エリアで、ナビゲーションツリーの[サーバグループ]をクリックして新しいサーバグループを選択します。
7. [アクション] メニューの[メンバーの追加]を選択します。
8. このグループに追加するサーバを選択してから、[>] をクリックします。

→ ヒント

複数のサーバを選択するには、`CTRL` + `[]` キーを押しながらクリックします。

① 注記

一覧表示されたサーバには、その他の排他的サーバグループの一部ではないサーバのみが含まれます。

9. [OK] をクリックします。

[サーバ] 管理エリアに戻ります。このタブには、グループに追加したすべてのサーバが表示されます。これで、ステータスの変更、サーバメトリクスの表示、グループ内にあるサーバのプロパティの変更ができるようになります。

9.11 サーバグループにサブグループを追加する

1. CMC の[サーバ] 管理エリアを表示します。
2. ナビゲーションツリーの[サーバグループ]をクリックし、サブグループを追加するサーバグループを選択します。

このグループは親グループとなります。

3. [アクション] メニューの[メンバーの追加]を選択します。
4. ナビゲーションツリーの[サーバグループ]をクリックし、このグループに追加するサーバグループを選択し、[>] をクリックします。

→ ヒント

複数のサーバグループを選択するには、Ctrl キーを押しながらクリックします。 `[]` + `[]`

5. [OK] をクリックします。

[サーバ] 管理エリアに戻ります。このタブには、親グループに追加したすべてのサーバグループが表示されます。

9.12 サーバグループを他のサーバグループのメンバーにする

1. CMC の[サーバ] 管理エリアを表示します。

2. 他のグループに追加するグループをクリックします。

① 注記

root レベルの排他的サーバグループの場合、すべての排他的サーバグループが [\[利用可能なサーバグループ\]](#) に一覧表示されます。排他的サーバグループの親サーバグループは1つのみであるため、1つの排他的サーバグループのみを選択して [\[サーバグループのメンバー\]](#) に移動することができます。

子の排他的サーバグループの親は1つのみであるため、子レベルの排他的サーバグループの場合は [\[利用可能なサーバグループ\]](#) にサーバグループは表示されません。

3. [\[アクション\]](#) メニューの [\[サーバグループに追加\]](#) を選択します。
4. [\[利用可能なサーバグループ\]](#) リストで、グループに追加する他のグループを選択し、[\[>\]](#) をクリックします。

→ ヒント

複数のサーバグループを選択するには、Ctrl キーを押しながらクリックします。 ☐ + ☐

5. [\[OK\]](#) をクリックします。

9.13 サーバグループのアクセス権の管理の理解

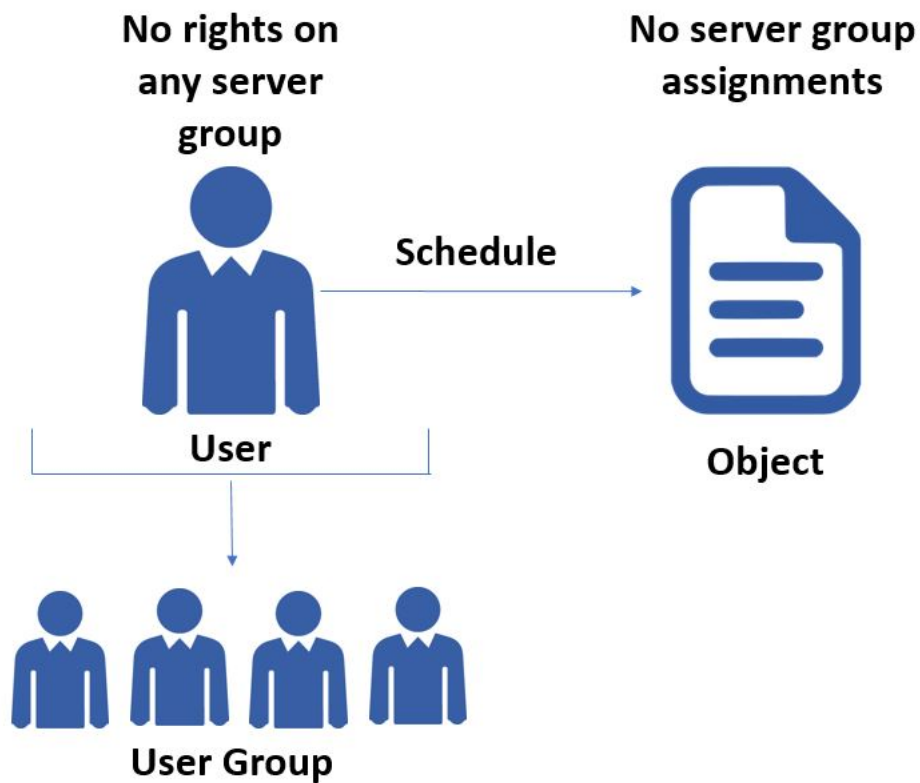
サーバグループのアクセス権をユーザレベルまたはユーザグループレベルで有効にすることができます。つまり、ユーザごとまたはユーザグループごとにサーバグループへのアクセスを制御することができます。

① 注記

- 以下に示すシナリオでは、サーバグループのアクセス権の管理を説明するためのプロセスとしてスケジュールを使用しています。同様に、表示およびキャッシュに関するサーバグループの権限の管理について理解することができます。
- サーバグループまたはサーバグループの組み合わせでサーバが使用可能になっている場合、オブジェクトを正常にスケジュールすることができます。使用可能なサーバがない場合、スケジュールは失敗します。

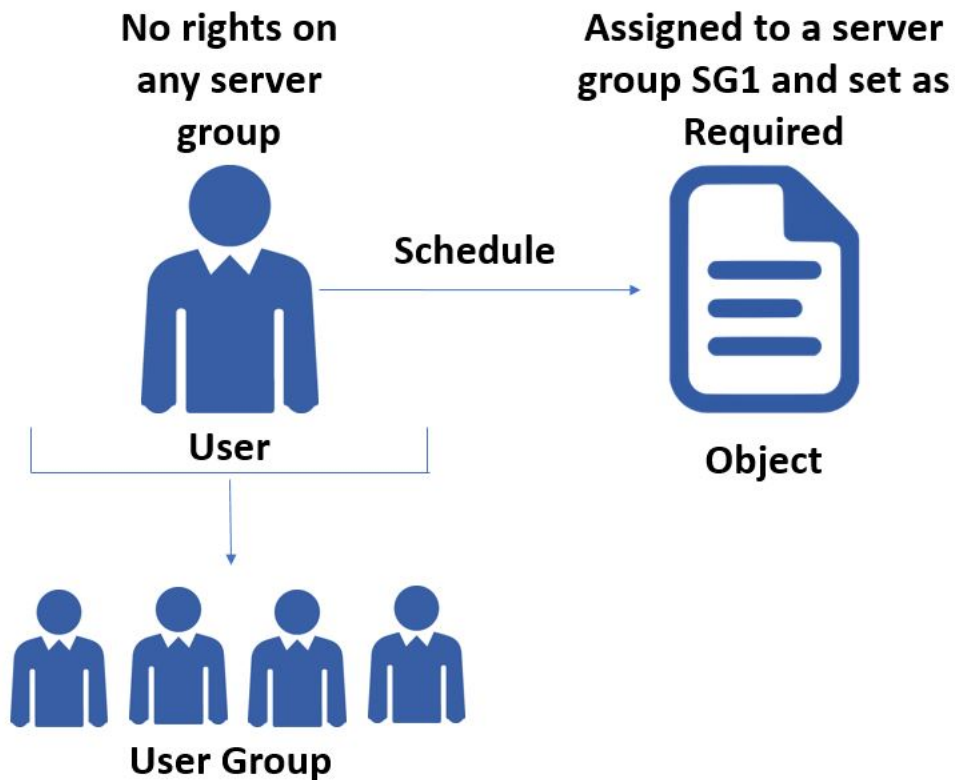
シナリオ 1:

ユーザが Business Intelligence プラットフォームのユーザグループのメンバーであるという理想的なシナリオについて考えてみます。ユーザおよびそれに関連するユーザグループには、いずれのサーバグループの権限もありません。ユーザはいずれのサーバグループにも割り当てられていないオブジェクトをスケジュールすることを考えています。



シナリオ 2:

上記のシナリオを、オブジェクトにサーバグループを割り当てることで変更すると、オブジェクトのスケジュールは失敗します。



ユーザがオブジェクトをスケジュールすると、オブジェクトに対するサーバグループの割り当てがプラットフォームによってチェックされます。サーバグループがオブジェクトに割り当てられている場合、ユーザにそのサーバグループに対する表示権限があるかどうかプラットフォームによってチェックされます。

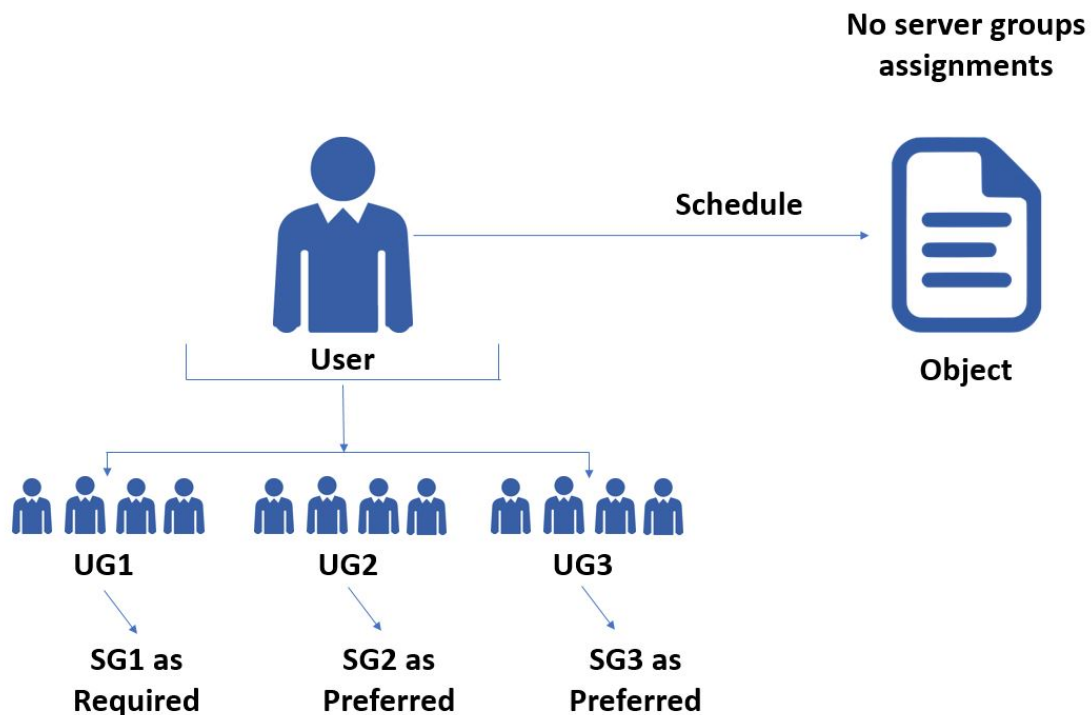
2つ目のシナリオの場合、ユーザもそのユーザに関連するユーザグループも SG1 に対する権限を持っていません。そのため、スケジューリングジョブは失敗します。このシナリオでユーザが正常にオブジェクトをスケジュールできるようにするには、ユーザまたは関連するユーザグループが SG1 に対する表示権限を持っていることを確実にします。

シナリオ 3:

① 注記

シナリオ 3 および 4 では、ユーザがその関連するユーザグループから権限を継承することを前提としています。

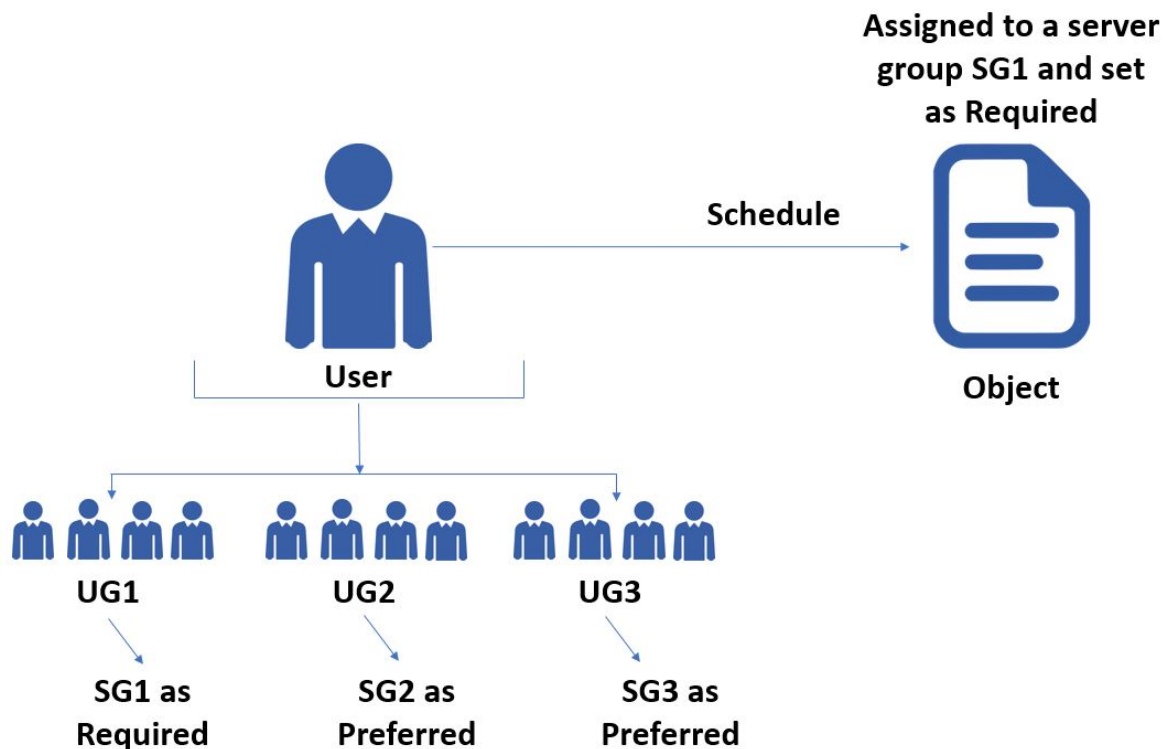
ユーザは UG1、UG2、および UG3 の 3 つのユーザグループのメンバーであり、各ユーザグループは SG1、SG2、および SG3 のサーバグループにそれぞれ割り当て済みです。SG1 は必須サーバグループとして設定されていますが、SG2 および SG3 は優先サーバグループとして設定されています。サーバグループを必須または優先として設定する方法の詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドのサーバグループへのユーザグループのマッピングを参照してください。



ユーザが複数のユーザグループに関連付けられ、個々のユーザグループがそれぞれ異なるサーバグループにマップされている場合、プラットフォームによって使用可能なサーバグループが計算されます。上記のシナリオの場合、オブジェクトにはサーバグループが割り当てられておらず、オブジェクトのスケジュールに使用可能なサーバグループが SG1、SG2、および SG3 の組み合わせであるため、スケジューリングジョブは成功します。

シナリオ 4:

シナリオ 3 に加えて、オブジェクトを SG1 に割り当て、SG1 を必須として設定してあります。サーバグループを必須または優先として設定する方法の詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドのサーバグループへのユーザグループのマッピングを参照してください。



サーバグループがオブジェクトに割り当てられている場合、ユーザにそのサーバグループに対する表示権限が付与されているかどうかプラットフォームによってチェックされます。このシナリオでは、使用可能なサーバグループはプラットフォームによって計算されません。これは、オブジェクトレベルのサーバグループ割り当てが最も優先順位が高いためです。シナリオ 4 の場合、UG1 に SG1 に対する表示権限があり、ユーザはこれらの権限を UG1 から継承するため、オブジェクトは正常にスケジュールされます。

→ 注意

- オブジェクトをスケジュールする前に、ユーザに関連付けられたすべてのユーザグループに対するサーバグループ割り当てを確認し、使用可能なサーバグループを計算します。
- オブジェクトに割り当てられたサーバグループが、ユーザが使用可能なサーバグループに含まれている場合、スケジューリングジョブは成功します。

以下の表を参照してください。

① 注記

SG1 および SG2 がユーザグループ UG1 および UG2 にそれぞれ割り当てられているとします。

サーバグループの組み合わせ		
アクセスレベル	(SG1 + SG2)	共通プールのサーバの検索
ユーザはすべてのサーバグループに対し て権限を持っています	必須 + 必須	False

サーバグループの組み合わせ		
アクセスレベル	(SG1 + SG2)	共通プールのサーバの検索
ユーザはすべてのサーバグループに対し て権限を持っています	必須 + 優先	False
ユーザはすべてのサーバグループに対し て権限を持っています	優先 + 優先	True
ユーザはどのサーバグループに対しても 権限を持っていません	必須 + 必須	False
ユーザはどのサーバグループに対しても 権限を持っていません	必須 + 優先	False
ユーザはどのサーバグループに対しても 権限を持っていません	優先 + 優先	True
ユーザはいくつかのサーバグループに対 して権限を持っています	必須 (いいえ) + 必須 (はい)	False
ユーザはいくつかのサーバグループに対 して権限を持っています	必須 (いいえ) + 優先 (はい)	False
ユーザはいくつかのサーバグループに対 して権限を持っています	必須 (はい) + 優先 (いいえ)	False
ユーザはいくつかのサーバグループに対 して権限を持っています	優先 (いいえ) + 優先 (はい)	True

9.14 サーバのグループメンバーシップを変更する

- CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアを表示します。
- メンバーシップ情報を変更するサーバを右クリックして、[\[既存のサーバグループ\]](#) を選択します。
詳細パネルの [\[利用可能なサーバグループ\]](#) リストに、サーバを追加できるグループが表示されます。[\[サーバグループのメンバー\]](#) リストに、現在そのサーバが所属するサーバグループのリストが表示されます。

① 注記

root レベルのサーバグループの場合、すべての排他的サーバグループが [\[利用可能なサーバグループ\]](#) に一覧表示されます。排他的サーバグループの親サーバグループは1つのみであるため、1つの排他的サーバグループのみを選択して [\[サーバグループのメンバー\]](#) に移動することができます。[\[利用可能なサーバグループ\]](#) から排他的サーバグループを選択して [\[サーバグループのメンバー\]](#) に移動した後、排他的サーバグループは root サーバグループからマップ先の新しいサーバグループに移動されます。

子レベルのサーバグループの場合、既存の親サーバグループは [\[サーバグループのメンバー\]](#) に表示され、その他の排他的サーバグループは [\[利用可能なサーバグループ\]](#) に一覧表示されます。子サーバグループのマッピングを1つの排他的親サーバグループから別のサーバグループに変更できます。

3. そのサーバが所属するグループを変更するには、この2つのリストの間で矢印キーを使用してサーバグループを移動し、[OK]をクリックします。

① 注記

[サーバグループから削除] オプションは、子レベルの排他的サーバグループにのみ表示されます。子レベルの排他的サーバグループが親サーバグループから削除されると、排他性を保持したままルートレベルに移動されます。

ユーザセキュリティ権限が特定のサーバグループの CMC の管理者によって付与されている場合は、サーバグループが BI ラウンチパッドに表示されます。

9.15 サーバのプロパティを変更する

1. CMC の [サーバ] 管理エリアを表示します。
2. 設定を変更するサーバをダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。
3. 必要な変更を行い、[保存] または [保存して閉じる] をクリックします。

① 注記

すぐに実行されない変更もあります。設定をすぐに変更できない場合、[プロパティ] ダイアログボックスには現在の設定(赤のテキスト)および目的の設定の両方が表示されます。[サーバ] 管理エリアに戻ると、サーバには "要再起動" とマークが付けられます。サーバを再起動すると、サーバは [プロパティ] ダイアログボックスの目的の設定を使用し、"要再起動" フラグはサーバから削除されます。

9.16 設定テンプレートを設定する

サービスのタイプごとに1つの設定テンプレートを設定できます。サービスに複数の設定テンプレートを設定することはできません。サーバの [プロパティ] ページを使用して、サーバでホストされるサービスタイプの設定テンプレートで使用される設定を指定できます。

1. CMC の [サーバ] 管理エリアを表示します。
2. 設定テンプレートを設定するサービスをホストしているサーバをダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。
3. テンプレートで使用するサービス設定を設定し、[設定テンプレートの設定] チェックボックスをオンにし、
[保存] または [保存して閉じる] をクリックします。

選択したサービスタイプの設定テンプレートは、現在のサーバの設定に従って定義されます。同じサービスをホストしている同じタイプの他のサーバは、そのプロパティで [設定テンプレートの使用] オプションを有効にしている場合、設定テンプレートに合わせて自動的にすぐに再設定されます。

① 注記

設定テンプレートの設定を明示的に定義していない場合は、サービスのデフォルト設定が使用されます。

関連情報

[設定テンプレートをサーバに適用する \[158 ページ\]](#)

9.17 設定テンプレートをサーバに適用する

設定テンプレートを適用する前に、テンプレートを適用するサーバのタイプに対して設定テンプレートの設定を定義しているか確認してください。設定テンプレートの設定を明示的に定義していない場合は、サービスのデフォルト設定が使用されます。

① 注記

[設定テンプレートの使用] 設定を有効にしていないサーバは、設定テンプレートの変更しても更新されません。

1. CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアを表示します。
2. 設定テンプレートを適用するサービスをホストしているサーバをダブルクリックします。
[\[プロパティ\]](#) 画面が表示されます。
3. [\[設定テンプレートの使用\]](#) チェックボックスをオンにし、[\[保存\]](#) または [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

② 注記

新しい設定を有効にするためにサーバを再起動する必要がある場合は、サーバリストに "要再起動" とマーク付きで表示されます。

適切な設定テンプレートが現在のサーバに適用されます。適用後に設定テンプレートに変更を加えると、設定テンプレートを使用するすべてのサーバの設定が変更されます。

[\[設定テンプレートの使用\]](#) をオフにしても、サーバ設定は、設定テンプレートが適用された時点の値に復元されません。使用停止後に設定テンプレートに加えられた変更は、設定テンプレートを使用しているサーバの設定に影響しません。

関連情報

[設定テンプレートを設定する \[157 ページ\]](#)

9.18 システムデフォルトを復元する

サーバを誤って設定した場合やパフォーマンスに問題がある場合など、サーバの設定を最初にインストールした設定に戻す必要がある場合があります。

1. CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアを表示します。

2. システムデフォルトを復元するサービスをホストしているサーバをダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。
3. [システムデフォルトの復元] チェックボックスをオンにし、[保存] または [保存して閉じる] をクリックします。
特定のサービスタイプのデフォルト設定が復元されます。

9.19 サーバメトリクスを表示する

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. メトリクスを表示するサーバを右クリックし、[メトリクス] を選択します。

[メトリクス] タブに、サーバのメトリクスの一覧が表示されます。

関連情報

[サーバのプロパティを変更する \[157 ページ\]](#)

[サーバのメトリクスに関する付録について \[499 ページ\]](#)

9.20 システムメトリクスを表示する

1. CMC の[設定]管理エリアを表示します。
2. 矢印をクリックし、[プロパティ]、[グローバルシステムメトリクスの表示]、[クラスタ]、または[ホットバックアップ] 領域を展開して設定を表示します。

9.21 Job Server で出力先を有効/無効にする

Adaptive Job Server でデフォルト以外の出力先に出カインスタンスを保存するには、Job Server でデフォルト以外の出力先を有効にし、設定する必要があります。

① 注記

すべての Job Server では、デフォルトでマネージド (受信トレイ) 出力先が有効化され設定されています。これにより、BI プラットフォームシステムでは、[送信] 機能を使用してユーザにレポートを配信できます。必要な場合には、サーバに出力先を追加して設定できます。

1. CMC の [サーバ] 管理エリアを表示します。
2. 出力先を有効または無効にする Job Server を選択します。

3. [管理] メニューの [プロパティ] を選択します。
4. [プロパティ] ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[出力先] をクリックします。
5. 出力先を有効にするには、[出力先] 一覧で出力先を選択し、[追加] をクリックします。
6. 出力先を無効にするには、[出力先] 一覧で出力先を選択し、[削除] をクリックします。
7. [保存] または [保存して閉じる] をクリックします。

関連情報

[Job Server の出力先プロパティを設定する \[161 ページ\]](#)

9.22 サーバプレースホルダを表示する

CMC の [サーバ] 管理エリアで、サーバを右クリックして [プレースホルダ] を選択します。
[プレースホルダ] ダイアログに、選択したサーバと同じクラスタ内のすべてのサーバのプレースホルダの一覧が表示されます。プレースホルダの値を変更するには、ノードのプレースホルダを変更します。

関連情報

[サーバとノードプレースホルダ \[515 ページ\]](#)

9.23 ノードのプレースホルダを表示および編集する

1. セントラル管理コンソールの [サーバ] 管理エリアで、プレースホルダを変更するノードを右クリックし、[プレースホルダ] を選択します。
2. プレースホルダの設定を編集するには、適切な変更を行い、[保存] をクリックして続行します。

⚠ 警告

編集用以外のプレースホルダは、いかなる手段でも変更しないでください。システム管理者は、(ノード管理を目的とする) 管理者グループの適切な担当者のみがノードに対する編集権限を持っていることを確認する必要があります。管理者グループの他のメンバーを含むすべてのユーザは、適切なセキュリティ権限を適用することで、ノードオブジェクトの表示/管理を制限する必要があります。プレースホルダ値のいずれかが誤って破損し、CMS が起動しない場合は、SAP ノート [3269127](#) を参照してください。

📌 注記

BI ランドスケープへの悪意のある干渉を回避するためにプレースホルダの変更を制限する方法については、以下の SAP Knowledge Base Article [3278916](#) を参照してください。

関連情報

[サーバとノードブレースホルダ \[515 ページ\]](#)

9.24 Job Server の出力先プロパティを設定する

1. CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアを表示します。
2. 設定を変更する Job Server を選択します。
3. [\[管理\]](#) メニューの [\[プロパティ\]](#) を選択します。
4. [\[プロパティ\]](#) ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[\[出力先\]](#) をクリックします。
5. 一覧から出力先を選択し、[\[追加\]](#) をクリックします。
6. 出力先のプロパティを設定します。
7. [\[保存\]](#) または [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。
8. 出力先が有効になっていることを確認します。

関連情報

[Job Server で出力先を有効/無効にする \[159 ページ\]](#)

[受信ボックスの出力先のプロパティ \[161 ページ\]](#)

[ファイルシステムの出力先プロパティ \[165 ページ\]](#)

[FTP の出力先のプロパティ \[164 ページ\]](#)

[電子メールの出力先のプロパティ \[162 ページ\]](#)

9.24.1 受信ボックスの出力先のプロパティ

受信ボックスの出力先では、BI プラットフォームシステム上のユーザの受信ボックスにオブジェクトまたはインスタンスが保存されます。ユーザを追加すると、ユーザの受信ボックスが自動的に作成されます。

① 注記

Destination Job Server では、デフォルトでマネージド（受信ボックス）の出力先がすべての Job Server で有効化され、設定されています。これにより、BI プラットフォームシステムでは、[\[送信\]](#) 機能を使用してユーザにレポートを配信できます。必要な場合には、Adaptive Job Server に出力先を追加して設定できます。

送信先一覧

Job Server によって生成または処理されているインスタンスを受信するユーザまたはユーザグループを指定します。

ターゲット名

インスタンスにデフォルトの自動生成された名前を使用するか、特定の名前を指定します。[ブレースホルダの追加] 一覧で変数をクリックして、変数を特定の名前に追加できます。

ドキュメントの送信オプション

必要なオプションを選択します。

- [ショートカット](#)
指定した出力先にショートカットが送信されます。
- [コピー](#)
オブジェクトインスタンスのコピーが出力先に送信されます。

9.24.2 電子メールの出力先のプロパティ

電子メールの出力先には、次の設定を使用できます。

ドメイン名

SMTP サーバの完全修飾ドメインを入力します。

ホスト

SMTP サーバの名前を入力します。

ポート

SMTP サーバが受信待機するポート番号を入力します。標準 SMTP ポート番号は 25 です。

認証

電子メールを送信するために Job Server を認証する必要がある場合は、[書式なし] または [ログイン] のどちらかの認証方法を選択します。

ユーザ名

Job Server に、SMTP サーバを使用して電子メールと添付ファイルを送信する権限を持つユーザ名を指定します。

パスワード

Job Server に SMTP サーバのパスワードを指定します。

差出人

返信先の電子メールアドレスを指定します。このデフォルト値は、オブジェクトをスケジュールするときに変更できます。

宛先、CC、件名、およびメッセージ

レポートをスケジュールしたユーザのデフォルト値をこの SMTP の出力先に設定します。

① 注記

これらのデフォルト値は、オブジェクトをスケジュールするときに変更できます。

返信先

宛先として電子メールの特定のユーザに対して [返信先] オプションを使用できるようになりました。これは、CMC と BI ラウンチパッドの両方でのスケジュールに適用できます。

プレースホルダの追加

[[プレースホルダの追加](#)] 一覧を使用して、プレースホルダ変数をメッセージ本文に追加できます。たとえば、レポートのタイトルや作成者、または電子メール受信者がレポートを表示する際に使用するビューアの URL を追加できます。

添付ファイルの追加

レポートまたはプログラムインスタンスのコピーを電子メールに添付する場合は、このチェックボックスをオンにします。添付ファイルを追加する場合、次の命名規則の中から選択できます。

- **自動生成される名前**
BI プラットフォームでファイル名をランダムに生成するには、このオプションを選択します。
- **指定の名前**
ファイル名を入力するには、このオプションを選択します。ファイル名に変数を追加することもできます。変数を追加するには、[[プレースホルダの追加](#)] 一覧から変数プロパティのプレースホルダを選択します。
- **ファイル拡張子を追加する**
指定したファイル名に拡張子 .%EXT% を追加します。これは [プレースホルダの追加] 一覧からファイル拡張子を選択するのと同様です。ファイル名に拡張子を追加することにより、Windows はそのファイルを開くプログラムを判断できるようになります。

9.24.2.1 SMTP over SSL のセットアップ

SMTP over SSL をセットアップするには、サーバとクライアントのシステムに同じ証明書があることが必要です。

SMTP over SSL をセットアップするには、次の手順に従います。

1. Windows プラットフォームで、<install_dir>%SAP BusinessObjects%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64 にアクセスします。また、BI プラットフォームに接続されているクライアントの場合は、<install_dir>%SAP BusinessObjects%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win32_x86 にアクセスします。

① 注記

サポートされているその他すべてのプラットフォームの、それぞれのフォルダに移動します。

2. 証明書に "certificate.crt" と名前を付けます。

たとえば、SMTP サーバへの接続中に、サーバは証明書の詳細を送信します。証明書の詳細を未使用のテキストファイルにコピーして、"certificate.crt" に名前を変更する必要があります。これは、Windows プラットフォームでは win64_x64 フォルダに、クライアントの場合は win32_x86 フォルダに置く必要があります。

これで、SMTP over SSL がセットアップされました。

① 注記

ユーザが [[SSL を有効にする](#)] チェックボックスにチェックを入れている場合、セキュリティ保護されたチャネルが有効になります。これにより、セキュリティ保護された SMTP over SSL 送信が可能になります。

9.24.3 FTP の出力先のプロパティ

FTP の出力先には、次の設定を使用できます。

ホスト

FTP ホストの情報を入力します。

ポート

FTP のポート番号を入力します。標準の FTP ポートは 21 です。

ユーザ名

レポートを FTP サーバにアップロードするアクセス権を持つユーザを指定します。

パスワード

ユーザのパスワードを入力します。

アカウント

必要に応じて、FTP アカウント情報を入力します。

アカウントは標準の FTP プロトコルの一部ですが、実装されている場合はまれです。FTP サーバが要求する場合のみ、適切なアカウントを指定します。

ディレクトリ

オブジェクトを保存する FTP ディレクトリを入力します。相対パスは、FTP サーバ上のルートディレクトリからの相対パスと解釈されます。

自動生成される名前

BI プラットフォームでファイル名をランダムに生成するには、このオプションを選択します。

指定の名前

ファイル名を入力するにはこのオプションを選択します。ファイル名には変数を追加することもできます。変数を追加するには、一覧から変数プロパティのプレースホルダを選択します。

ファイル拡張子を追加する

指定したファイル名に拡張子 .%EXT% を追加します。これは [\[プレースホルダの追加\]](#) 一覧からファイル拡張子を選択するのと同様です。ファイル名に拡張子を追加することにより、Windows はそのファイルを開くプログラムを判断できるようになります。

9.24.4 SFTP の出力先のプロパティ

SFTP の出力先には、次の設定を使用できます。

ホスト

SFTP ホストの情報を入力します。

ポート

SFTP のポート番号 (標準の SFTP ポートは 22) を入力します。

ユーザ名

レポートを SFTP サーバにアップロードするアクセス権を持つユーザを指定します。

パスワード

ユーザのパスワードを入力します。

アカウント

必要に応じて、SFTP アカウント情報を入力します。

アカウントは標準の SFTP プロトコルの一部ですが、実装されている場合はまれです。SFTP サーバが要求する場合のみ、適切なアカウントを指定します。

ディレクトリ

オブジェクトを保存する SFTP ディレクトリを入力します。相対パスは、SFTP サーバ上のルートディレクトリからの相対パスと解釈されます。

自動生成される名前

BI プラットフォームでファイル名をランダムに生成するには、このオプションを選択します。

指定の名前

ファイル名を入力するにはこのオプションを選択します。ファイル名には変数を追加することもできます。変数を追加するには、一覧から変数プロパティのプレースホルダを選択します。

フィンガープリント

SFTP サーバのホストキーのフィンガープリントを入力します。

ファイル拡張子を追加する

指定したファイル名に拡張子 .%EXT% を追加します。これは [プレースホルダの追加] 一覧からファイル拡張子を選択するのと同様です。ファイル名に拡張子を追加することにより、Windows はそのファイルを開くプログラムを判断できるようになります。

9.24.5 ファイルシステムの出力先プロパティ

ファイルシステムの出力先は、BI プラットフォームシステムの外にあるアンマネージド ディスクの出力先です。

ディレクトリ

ディレクトリへの絶対パスを入力します。Adaptive Job Server マシンのローカルドライブ上のディレクトリ、または UNC パスを使用して指定できる他のマシン上のディレクトリを指定できます。

自動生成される名前

BI プラットフォームでファイル名をランダムに生成するには、このオプションを選択します。

指定の名前

ファイル名を入力するにはこのオプションを選択します。ファイル名には変数を追加することもできます。変数を追加するには、一覧から変数プロパティのプレースホルダを選択します。

ファイル拡張子を追加する

指定したファイル名に拡張子 .%EXT% を追加します。これは [プレースホルダの追加] 一覧からファイル拡張子を選択するのと同様です。ファイル名に拡張子を追加することにより、Windows はそのファイルを開くプログラムを判断できるようになります。

ユーザ名

出力先ディレクトリにファイルを書き込む権限を持つユーザを指定します。

パスワード

ユーザのパスワードを入力します。

この例では、出力先ディレクトリは Adaptive Job Server マシンが UNC パスを使用してアクセスできるネットワークドライブ上にあります。各ファイル名はランダムに生成され、リモートディレクトリにファイルを書き込む権限を Adaptive Job Server に付与するために、ユーザ名とパスワードが指定されます。

9.25 本稼働システムの Adaptive Processing Server の設定

ホストシステムごとに1つの Automated Process Server (APS) がインストールプログラムによりインストールされます。インストールした機能に応じて、この APS はモニタリングサービス、プロモーションマネジメントサービス、多次元分析サービス (MDAS)、公開サービスなど、多くのサービスを提供することができます。

本稼働システムまたはテストシステムでは、追加の APS を作成し、ビジネス要件に合わせて APS を設定するのが最適です。

追加の APS の作成方法には、以下の2種類があります。

- システム設定ウィザードを実行する。
ウィザードは、事前に定義されたデプロイメントテンプレートに従った APS の設定を含む、ユーザの BI プラットフォームシステムの基本設定に役立ちます。ウィザードを使用すると、適切に APS 設定を開始できます。ただし、この場合でもシステムのサイズ設定を実行する必要があります。
ウィザードは、セントラル管理コンソール (CMC) から使用できます。ウィザードの詳細については、[システム設定ウィザードの概要 \[18 ページ\]](#)を参照してください。デフォルトのデプロイメントテンプレートに関する詳細については、ウィザード内および <http://help.sap.com/bobip41> で参照できる *SAP BusinessObjects BI* プラットフォームデプロイメントテンプレートのドキュメントを参照してください。
- CMC を使用して、追加 APS の作成と設定を手動で実行する。詳細については、[サーバの追加 \[147 ページ\]](#)を参照してください。

→ 注意

ウィザードでのデプロイメントテンプレートの選択、または手動での追加 APS の作成で、システムのサイズ設定が置き換わることはありません。<http://www.sap.com/bisizing> を参照して、サイズ設定が実行されていることを確認してください。

10 Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) の管理

10.1 Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS)

Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) は、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションをホストするためのプラットフォームです。たとえば、セントラル管理コンソール (CMC) を WACS でホストできます。

WACS を使用すると、以前はアプリケーションサーバの設定や Web アプリケーションのデプロイに必要だったいくつかのワークフローが不要になり、簡略化された一貫性のある管理インタフェースが提供されるため、システム管理が容易になります。

Web アプリケーションは WACS に自動的にデプロイされます。WACS では、BI プラットフォームや外部 Web アプリケーションの手動デプロイメントまたは WDeploy デプロイメントはサポートされません。

10.2 デプロイメントへの WACS の追加または削除

デプロイメントに WACS を追加すると、次のような利点が得られます。

- 誤って設定したサーバから迅速に復旧できます。
- サーバの可用性が向上します。
- 負荷分散がより適切に行われます。
- 全体のパフォーマンスが向上します。

デプロイメントに WACS を追加するには、次の 3 つの方法があります。

- WACS をマシンにインストールします。
- 新しい WACS を作成します。
- WACS をクローンします。

① 注記

多くのリソースが消費されるため、WACS は同じマシンで同時に 1 つのみ実行することをお勧めします。ただし、WACS を誤って設定した場合に容易に復旧できるように、同じマシンに複数の WACS をデプロイし、その中の 1 つだけを実行することもできます。

10.2.1 WACS のインストール

WACS を別々のマシンにインストールすると、デプロイメントのパフォーマンスが向上し、負荷分散がより適切に行われ、サーバの可用性も向上します。別々のマシンにインストールされた複数の WACS がデプロイメントに

含まれている場合は、特定のマシンでハードウェアやソフトウェアの障害が発生しても、他の WACS が CMC サービスを引き継ぐため、Web アプリケーションや Web サービスが利用できなくなることはありません。

Web アプリケーションコンテナサーバをインストールするには、BI プラットフォームインストールプログラムを使用します。WACS のインストールには次の 2 つの方法があります。

- フルインストールの場合、[Java Web アプリケーションサーバの選択画面](#)で [Web アプリケーションコンテナサーバをインストールし、Web アプリケーションを自動でデプロイします](#)を選択します。
新規インストールで Java アプリケーションサーバを選択した場合、WACS はインストールされません。
- カスタムまたは拡張インストールでは、[サーバー > Platform Services](#) を選択し、[Web アプリケーションコンテナサーバ](#)を選択して、[機能の選択画面](#)で WACS をインストールするよう選択できます。

WACS をインストールすると、インストール プログラムによって自動的に

`<NODE>.WebApplicationContainerServer` という名前のサーバが作成されます。`<NODE>` はノード名です。BI プラットフォーム Web アプリケーションおよび Web サービスがサーバにデプロイされます。CMC をデプロイまたは設定するのに手動による手順は必要ありません。これでシステムを使用できるようになりました。

WACS をインストールするときに、WACS の HTTP ポート番号の入力を求められます。使用されていないポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 6405 です。ユーザにファイアウォールの外部から WACS に接続することを許可する場合は、サーバの HTTP ポートがファイアウォールで開いていることを確認する必要があります。

① 注記

WACS がホストする Web アプリケーションは、WACS のインストール時、または更新やホットフィックスを WACS や WACS がホストする Web アプリケーションに適用すると自動的にデプロイされます。Web アプリケーションのデプロイには数分かかります。Web アプリケーションのデプロイメントが完了するまで、WACS は“初期化中”状態になります。Web アプリケーションが完全にデプロイされるまで、WACS でホストされている Web アプリケーションにアクセスすることはできません。初期デプロイメントが完了するまで、サーバを停止しないでください。セントラル設定マネージャ(CCM)を通じて、WACS のサーバ状態を表示できます。

この遅延は、WACS のインストール後初めて WACS を起動するとき、または WACS に更新を適用したときのみ発生します。この遅延は、以降の WACS の再起動では発生しません。

Web アプリケーションは、WACS サーバに手動でデプロイすることはできません。WDeploy を使用して Web アプリケーションを WACS にデプロイすることはできません。

10.2.2 新しい Web アプリケーションコンテナサーバの追加

① 注記

多くのリソースが消費されるため、WACS は同じマシンで同時に 1 つのみ実行することをお勧めします。ただし、WACS を誤って設定した場合に容易に復旧できるように、同じマシンに複数の WACS をデプロイし、その中の 1 つだけを実行することもできます。

1. CMC の[\[サーバー\]](#)管理エリアを表示します。
2. [管理 > 新規 > 新しいサーバ](#)を選択します。
[\[新規サーバ名\]](#)画面が表示されます。
3. [\[サービスカテゴリ\]](#)リストから[\[コアサービス\]](#)を選択します。

4. **[サービスの選択]** リストから、WACS でホストするサービスを選択し、**[次へ]** をクリックします。
 - WACS で CMC、BI ラウンチパッド、OpenDocument のような Web アプリケーションをホストするには、**[BOE Web アプリケーションサービス]** を選択します。
 - Live Office または Query as a Web Service (QaaWS) などの Web サービスを WACS でホストするには、**[Web サービス SDK および QaaWS サービス]** を選択します。
 - ビジネスプロセス BI Web サービスを WACS でホストするには、**[ビジネスプロセス BI Web サービス]** を選択します。
5. 次の **[新規サーバ名]** 画面で、WACS でホストする追加のサービスを選択し、**[次へ]** をクリックします。
6. 次の **[サーバの作成]** 画面で、サーバを追加するノードを選択し、サーバ名、およびサーバの説明を入力して **[作成]** をクリックします。

① 注記

[ノード] リストには、WACS がインストールされているノードだけが表示されます。

7. **[サーバ]** 画面で、新しい WACS をダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。
8. システムの再起動時に WACS が自動的に起動しないようにするには、**[共通設定]** 枠の **[Server Intelligence Agent の起動時にこのサーバを自動的に起動します]** チェックボックスをオフになっていることを確認します。
9. **[保存して閉じる]** をクリックします。

新しい WACS が作成されます。サーバにはデフォルトの設定とプロパティが適用されます。

10.2.3 Web アプリケーションコンテナサーバのクローン

デプロイメントに新しい WACS を追加する代わりに、同じマシンまたは別のマシンに WACS をクローンすることもできます。新しい WACS を追加するとデフォルト設定でサーバが作成されますが、WACS をクローンすると、クローン元の WACS の設定が新しい WACS に適用されます。

サーバは、すでに WACS がインストールされているマシンにのみクローンできます。

① 注記

多くのリソースが消費されるため、WACS は同じマシンで同時に 1 つのみ実行することをお勧めします。ただし、WACS を誤って設定した場合に容易に復旧できるように、同じマシンに複数の WACS をデプロイし、その中の 1 つだけを実行することもできます。

1. CMC の **[サーバ]** 管理エリアを表示します。
2. クローンする WACS を選択し、右クリックして **[クローンサーバ]** を選択します。
[クローンサーバ] 画面にデプロイメントのノードのリストが表示されます。これらのノードに WACS をクローンできます。**[ノードに複製]** リストには、WACS がインストールされているノードだけが表示されます。
3. **[クローンサーバ]** 画面で、新しいサーバ名を入力し、サーバをクローンするノードを選択して **[OK]** をクリックします。

新しい WACS が作成されます。新しいサーバには、そのクローン元のサーバと同じサービスが含まれます。新しいサーバとそのサーバがホストするサービスの設定は、サーバ名を除いてクローン元のサーバと同じです。

① 注記

WACS を同じマシンにクローンした場合は、クローンに使用した WACS とポートが競合することがあります。その場合は、新しくクローンした WACS インスタンスのポート番号を変更する必要があります。

関連情報

[HTTP ポートの競合を解決する \[177 ページ\]](#)

10.2.4 デプロイメントからの WACS の削除

サーバで現在 CMC サービスが実行されていない場合にのみ WACS を削除できます。デプロイメントから WACS を削除する場合は、別の WACS または Java アプリケーションサーバから CMC にログオンする必要があります。現在 CMC サービスを実行している WACS は削除できません。

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. 削除するサーバを右クリックし、[サーバの停止]をクリックして、サーバを停止します。
3. サーバを右クリックし、[削除]を選択します。
4. 確認を求めるメッセージが表示されたら、[OK]をクリックします。

10.3 WACS に対するサービスの追加または削除

10.3.1 WACS に Web アプリケーションまたは Web サービスを追加する

BI プラットフォーム Web アプリケーションまたは Web サービスを WACS に追加するには、WACS を停止する必要があります。したがって、サービスを停止し、他の WACS へ追加している間は、BOE Web アプリケーションサービスを提供する、デプロイメントの WACS でホストされている追加の CMC が最低 1 つ必要になります。

WACS にサービスを追加すると、サーバの再起動時にサービスが自動的に WACS にデプロイされます。

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. サービスを追加する WACS をダブルクリックし、サーバのプロパティを表示して、追加するサービスがまだ存在しないことを確認します。
3. [キャンセル]をクリックして、[サーバ]画面に戻ります。
4. サーバを右クリックし、[サーバの停止]をクリックして、サーバを停止します。

現在 CMC サービスを実行している WACS を停止しようとする、警告メッセージが表示されます。デプロイメントの他の WACS で少なくとも 1 つの別の BOE Web アプリケーションサービスが実行されていない場合は、次に進まないでください。別の CMC が実行されている場合は、[OK]をクリックし、WACS にログオンして、この手順を最初からやり直します。

5. サーバを右クリックし、[サービスの選択] を選択します。
[サービスの選択]画面が表示されます。
 6. サーバに追加するサービスを選択し、[>]をクリックしてサービスをサーバに追加し、[OK]をクリックします。
 7. サーバを右クリックし、[サーバの起動]をクリックして、WACS を起動します。
- サービスが WACS に追加されます。サービスのデフォルトの設定とプロパティが適用されます。

10.3.2 WACS から Web アプリケーションまたは Web サービスを削除する

WACS から Web アプリケーションまたは Web サービスを削除する場合は、別の WACS または Java アプリケーションサーバから CMC にログインする必要があります。現在 CMC サービスを実行している WACS は停止できません。

WACS から最後の CMC サービスを削除することはできません。したがって、WACS から Web サービスを削除する場合は、サーバが最低1つのサービスをホストとしていることを確認する必要があります。

WACS から最後のサービスを削除する場合は、WACS 自身を削除します。

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. Web サービスを削除する WACS をダブルクリックし、サーバのプロパティを表示して、削除する Web サービスがまだ存在することを確認します。
3. [キャンセル] をクリックして、[サーバ] 画面に戻ります。
4. サーバを右クリックし、[サーバの停止]をクリックして、WACS を停止します。
現在 CMC サービスを実行している WACS を停止しようとする、警告メッセージが表示されます。デプロイメントの他の WACS で少なくとも1つの別の BOE Web アプリケーションサービスが実行されていない場合は、次に進まないでください。別の CMC が実行されている場合は、[OK]をクリックし、WACS にログインして、この手順を最初からやり直します。
5. WACS を右クリックし、[サービスの選択] を選択します。
[サービスの選択]画面が表示されます。
6. 削除するサービスを選択し、[<] をクリックしてから、[OK] をクリックします。
7. サーバを右クリックし、[サーバの起動]をクリックして、WACS を起動します。

サービスが WACS から削除されます。

10.4 AD Kerberos 用の WACS を設定する

WACS に AD Kerberos 認証を設定するには、最初に、AD をサポートするようにマシンを設定する必要があります。次の手順を実行する必要があります。

- Windows AD セキュリティプラグインの有効化
- ユーザとグループのマッピング
- サービスアカウントの設定

- 制限された委任の設定
- WACS に対する Windows AD プラグインでの Kerberos 認証の有効化
- 設定ファイルの作成

これらのタスクの実行方法の詳細については、BI プラットフォーム管理者ガイドの“Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) の管理”の章を参照してください。

WACS をホストしているマシンで AD Kerberos 認証が使用されるように設定したら、セントラル管理コンソール (CMC) でこれらの手順を実行する必要があります。

1. CMC の [サーバ](#) 管理エリアを表示します。
2. AD を設定する WACS をダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。
3. [Krb5.ini ファイルの場所] フィールドで、krb5.ini 設定ファイルへのパスを指定します。
4. [bscLogin.conf ファイルの場所] フィールドで、bscLogin.conf 設定ファイルへのパスを指定します。
5. [保存して閉じる](#) をクリックします。
6. WACS を再起動します。

10.5 WACS AD Kerberos シングルサインオンを設定する

AD Kerberos シングルサインオンを、WACS でホストされている BI ラウンチパッドまたは Web サービス SDK および QaaWS に設定する場合は、AD Kerberos 認証および AD Kerberos シングルサインオンをホストしているマシンが設定されていることを確認してください。詳細については、BI プラットフォーム管理者ガイドの“Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) の管理”の章を参照してください。

WACS をホストしているマシンで AD Kerberos 認証とシングルサインオンが使用されるように設定したら、セントラル管理コンソール (CMC) でこれらの手順を実行する必要があります。

1. CMC の [サーバ](#) 管理エリアを表示します。
2. 設定する WACS をダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。
3. [[Kerberos Active Directory シングルサインオンの有効化](#)] にチェックを入れます。
4. デフォルト AD ドメイン、サービスプリンシパル名、Keytab ファイルプロパティに値を設定し、[保存して閉じる](#) をクリックします。
5. WACS を再起動します。

10.6 HTTPS/SSL を設定する

WACS の HTTPS/SSL を設定する前に、PKCS12 ファイルまたは JKS キーストアが作成され、そのファイルが WACS をホストしているマシンにコピーまたは移動されていることを確認する必要があります。

1. CMC の [[サーバ](#)] 管理エリアに移動します。
2. HTTPS を有効にする WACS をダブルクリックします。
[プロパティ] 画面が表示されます。

3. [\[HTTPS 設定\]](#) セクションの [\[HTTPS の有効化\]](#) チェックボックスをオンにします。
4. [\[ホスト名または IP アドレスに連結\]](#) フィールドで、証明書の発行先で WACS をバインドする IP アドレスを指定します。
HTTPS サービスは、指定した IP アドレスを介して提供されます。
5. [\[HTTPS ポート\]](#) フィールドで、WACS が HTTPS サービスの提供に使用するポート番号を指定します。このポートが空いていることを確認する必要があります。ユーザにファイアウォールの外部から WACS に接続することを許可する場合は、このポートがファイアウォールで開いていることも確認する必要があります。
6. リバースプロキシを使用した SSL を設定する場合は、[\[プロキシホスト名\]](#)と[\[プロキシポート\]](#)の各フィールドでプロキシサーバのホスト名とポートを指定します。
7. [\[プロトコル\]](#) リストでプロトコルを選択します。選択可能なオプションは、次のとおりです。
 - [SSL](#)
SSL は Secure Sockets Layer の略で、ネットワークトラフィックを暗号化するためのプロトコルです。
 - [TLS](#)
TLS は Transport Layer Security の略で、新しい拡張プロトコルです。SSL と TLS の違いはわずかですが、TLS の方が強力な暗号化アルゴリズムを採用しています。
8. [\[証明書ストアタイプ\]](#) フィールドで、証明書のファイルタイプを指定します。選択可能なオプションは、次のとおりです。
 - [PKCS12](#)
Microsoft ツールの方が使いやすい場合に選択します。
 - [JKS](#)
Java ツールの方が使いやすい場合に選択します。
9. [\[証明書ストアファイルの場所\]](#) フィールドで、証明書ファイルストアまたは Java キーストアファイルをコピーまたは移動したパスを指定します。
10. [\[秘密鍵のアクセスパスワード\]](#) フィールドで、パスワードを指定します。
PKCS12 証明書ストアと JKS キーストアの秘密鍵は、不正アクセスを防ぐためにパスワードで保護されています。WACS が秘密鍵にアクセスできるように、秘密鍵にアクセスするためのパスワードを指定する必要があります。
11. 1 つの証明書が格納されているか、または使用する証明書が先頭にリストされている証明書ファイルストアまたはキーストアを使用することをお勧めします。ただし、複数の証明書が格納されているか、または証明書が先頭にリストされていない証明書ファイルストアまたはキーストアを使用する場合は、[\[証明書エイリアス\]](#) フィールドで証明書のエイリアスを指定する必要があります。
12. WACS で特定のクライアントからの HTTPS 要求のみ受け付ける場合は、クライアント認証を有効にします。
クライアント認証はユーザを認証するものではありません。WACS が特定のクライアントに対してのみ HTTPS 要求を処理するようにします。
 - a. [\[クライアント認証を有効にする\]](#) チェックボックスをオンにします。
 - b. [\[証明書信頼一覧ファイルの場所\]](#) で、信頼一覧ファイルが格納されている PKCS12 ファイルまたは JKS キーストアの場所を指定します。

④ 注記

証明書信頼リストのタイプは、証明書ストアのタイプと同じにする必要があります。

① 注記

X.509 証明書を使用した信頼できる認証の確立の詳細については、[RESTful Web サービス向け \[126 ページ\]](#) を参照してください。

① 注記

以下のコマンドを実行することにより、ABAP システムの証明書を BI プラットフォームにインポートできます。keytool -import -trustcacerts -alias <Alias_Name> -file <CA_certificate_path> -keystore <trust_keystore_path> 。このコマンドを理解するには、次の表を参照してください。

コマンド	説明
-alias	エイリアス名
-file	ABAP システムの証明書のファイルパス
-keystore	信頼できるキーストアのファイルパス

- c. [\[証明書信頼リストの秘密鍵のアクセスパスワード\]](#) フィールドに、証明書信頼リストファイルの秘密鍵へのアクセスを保護するパスワードを入力します。

① 注記

クライアント認証を有効にしてもブラウザまたは Web サービスコンシューマが認証されない場合は、HTTPS 接続が拒否されています。

13. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。
14. [\[メトリクス\]](#) 画面に移動して、[\[実行中の WACS コネクタの一覧\]](#) に HTTPS コネクタが表示されていることを確認します。HTTPS が表示されない場合は、HTTPS コネクタが正しく設定されているかどうかを確認します。

10.7 WACS と IT 環境

このセクションでは、複雑な環境で WACS を設定する方法について説明します。

10.7.1 WACS とリバースプロキシの併用

フォワードプロキシサーバまたはリバースプロキシサーバを含むデプロイメントで WACS を使用できます。WACS 自体をプロキシサーバとして使用することはできません。

10.7.1.1 リバースプロキシを使用した HTTP をサポートするように WACS を設定する

リバースプロキシを含むデプロイメントで WACS を使用するには、ファイアウォール内 (たとえば、セキュリティで保護されたネットワーク上) の通信に HTTP ポートを使用し、ファイアウォールの外部 (たとえば、インターネット) からの通信にプロキシ経由の HTTP ポートを使用するように WACS を設定します。

1. CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアに移動します。
2. 設定する WACS をダブルクリックします。
[\[プロパティ\]](#) 画面が表示されます。
3. [\[プロキシ経由の HTTP の設定\]](#) セクションで、次の操作を行います。
 - a. [\[プロキシ経由の HTTP を有効にする\]](#) チェックボックスをオンにします。
 - b. プロキシ経由の通信に使用する WACS の HTTP ポートを指定します。
 - c. プロキシサーバのホスト名とポートを指定します。
4. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

10.7.1.2 リバースプロキシを使用した HTTPS をサポートするように WACS を設定する

HTTPS トラフィックを復号化し、復号化したトラフィックをアプリケーションサーバに転送するようにロードバランサとリバースプロキシサーバを設定できます。この場合、WACS を、HTTP またはプロキシ経由の HTTP を使用するように設定できます。

ロードバランサまたはリバースプロキシが HTTPS トラフィックを転送する場合に、リバースプロキシを使用した HTTPS を設定するには、2 つの WACS を作成します。1 つの WACS はリバースプロキシ経由の外部トラフィックの HTTPS 用、もう 1 つは内部ネットワーク上のクライアントとの HTTPS 経由の通信用に設定します。

10.7.2 マルチホームマシンに WACS を設定する

マルチホームマシンは、複数のネットワークアドレスを持つマシンです。デフォルトでは、Web アプリケーションコンテナサーバインスタンスは HTTP ポートをすべての IP アドレスにバインドします。WACS を特定のネットワークインタフェースカード (NIC) にバインドする場合、たとえば WACS の HTTP ポートをある NIC にバインドし、要求ポートを別の NIC にバインドする場合は、次の操作を行います。

1. CMC の [\[サーバ\]](#) 管理エリアを表示します。
2. 設定する WACS をダブルクリックします。
[\[プロパティ\]](#) 画面が表示されます。
3. [\[Web アプリケーションコンテナサービス\]](#) ペインの [\[プロキシ経由の HTTP の設定\]](#) セクションで、[\[すべての IP アドレスに連結\]](#) チェックボックスをオフにし、WACS をバインドする IP アドレスを入力します。
4. [\[HTTP 設定\]](#) セクションで、[\[すべての IP アドレスに連結\]](#) チェックボックスをオフにし、WACS をバインドする IP アドレスまたはホスト名を入力します。
5. [\[共通設定\]](#) の [\[自動割り当て\]](#) の選択を解除し、WACS とデプロイメントのその他の BI プラットフォームサーバ間の通信に使用するホスト名または NIC の IP アドレスを入力します。

6. [\[保存して閉じる\]](#)をクリックします。
7. WACS を再起動します。

10.8 トラブルシューティング

10.8.1 サーバメトリクスを表示する

セントラル管理コンソール (CMC) から WACS のサーバメトリクスを表示できます。

1. CMC の[\[サーバ\]](#)管理エリアを表示します。
2. WACS を右クリックし、[\[メトリクス\]](#)をクリックします。

関連情報

[Web アプリケーションコンテナサーバのメトリクス \[509 ページ\]](#)

10.8.2 WACS の状態を表示する

WACS の状態を表示するには、CMC の[\[サーバ\]](#)領域を表示します。[\[サーバの一覧\]](#)には、各サーバの状態を示す[\[状態\]](#)列が含まれています。

WACS には“実行中、エラーあり”というサーバ状態があります。この状態は、WACS が以下のエラー状態が1つ以上ある状態で実行されていることを意味します。

- HTTP、プロキシ経由の HTTP、または HTTPS コネクタが間違って設定されている
- トレースログサービスなどの WACS で実行されているサービスが適切に実行されていない
- Web アプリケーションの WACS へのデプロイに失敗した

WACS の [\[プロパティ\]](#) ページを参照して、どのサービスで障害が発生しているか確認してください。

10.8.3 ポート競合の解決

特定のポートから CMC にアクセスしようとしてもページが表示されない場合は、WACS 用に指定した HTTP、プロキシ経由の HTTP、または HTTPS のポートを別のアプリケーションが使用していないかどうかを確認してください。

WACS にポート競合があるかどうかを判断する方法は2とおりあります。デプロイメントに複数の WACS がある場合は、CMC にログオンし、[\[実行中の WACS コネクタの一覧\]](#)と[\[WACS コネクタがスタートアップ時に失敗しました\]メトリクス](#)を確認します。HTTP、プロキシ経由の HTTP、または HTTP コネクタが[\[実行中の WACS コネクタの一覧\]](#)に表示されない場合は、ポート競合のためにこれらのコネクタを起動できません。

デプロイメントに1つの WACS のみ存在する場合、またはどの WACS からでも CMC にアクセスできない場合は、netstat などのユーティリティを使用して、別のアプリケーションが WACS ポートを使用していないかどうかを確認します。

10.8.3.1 HTTP ポートの競合を解決する

1. セントラル設定マネージャ(CCM)を起動し、[サーバの管理]アイコンをクリックします。
2. ログオン認証情報を指定します。
3. [サーバの管理]画面で、WACS を停止します。
4. [Web Tier 設定]アイコンをクリックします。

① 注記

[Web Tier 設定]アイコンは、停止している WACS を選択した場合にのみ有効になります。

[Web Tier 設定]画面が表示されます。

5. [HTTP ポート]フィールドで、Web アプリケーションコンテナサーバで使用する、空いている HTTP ポートを指定し、[OK]をクリックします。
6. [サーバの管理]画面で、WACS を起動します。

10.8.3.2 プロキシ経由の HTTP ポートまたは HTTPS ポートの競合を解決する

プロキシ経由の HTTP ポートまたは HTTPS ポートから WACS にアクセスできないが、HTTP ポートからセントラル管理コンソール(CMC)に接続できる場合は、CMC からポート番号を変更します。

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. 設定する WACS を停止するには、サーバを右クリックし、[サーバの停止]をクリックします。
3. 設定する WACS をダブルクリックします。
[プロパティ]画面が表示されます。
4. [プロキシ経由の HTTP の設定]セクションで、新しい HTTP ポートを指定します。
5. HTTPS ポートを変更するには、[HTTPS 設定]セクションの[HTTPS ポート]フィールドに新しい値を入力します。
6. [保存して閉じる]をクリックします。
7. WACS を起動するには、サーバを右クリックし、[サーバの起動]をクリックします。

10.8.4 同時要求の数を変更する

WACS が処理するように設定されている同時 HTTP 要求のデフォルト数は 150 です。この値は、ほとんどのデプロイメントシナリオで使用できます。WACS のパフォーマンスを向上させるために、同時 HTTP 要求の最大数を増やすことができます。同時要求の数を増やすとパフォーマンスは向上しますが、増やしすぎるとパフォーマンス

スが低下する可能性があります。理想的な設定は、ハードウェア、ソフトウェア、および IT 要件によって決まります。

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. 設定する WACS を停止するには、サーバを右クリックし、[サーバの停止]をクリックします。
3. 設定する WACS をダブルクリックします。
[プロパティ]画面が表示されます。
4. [同時接続の設定 (コネクタ別)]の[最大同時接続要求]フィールドに同時要求の必要数を入力し、[保存して閉じる]をクリックします。
5. WACS を起動するには、サーバを右クリックし、[サーバの起動]をクリックします。

10.8.5 ユーザによる HTTP 経由の WACS へのアクセスを禁止する

ユーザに HTTP または HTTPS 経由の WACS への接続をローカルマシンからのみ許可することが必要になる場合があります。たとえば、HTTP ポートを閉じることはできないが、WACS と同じマシンに存在するクライアントからの HTTP 要求のみ受け付けるように WACS を設定する場合などです。このように、WACS と同じマシンからブラウザを使用して WACS の保守または設定を行い、他のユーザにサーバへのアクセスを禁止することができます。

1. CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
2. 変更する WACS をダブルクリックします。
[プロパティ]画面が表示されます。
3. [Web アプリケーションコンテナサービス]セクションで、[すべての IP アドレスに連結]チェックボックスをオフにします。
4. [ホスト名または IP アドレスに連結] フィールドに「127.0.0.1」と入力し、[保存して閉じる]をクリックします。
5. WACS を起動するには、サーバを右クリックし、[サーバの起動]をクリックします。
このように設定した WACS は、ローカルマシンからの接続のみ受け付けます。

11 アプリケーションの管理

11.1 概要

CMC の [\[アプリケーション\]](#) 管理エリアでは、プログラムを作成せずに、CMC や BI ラウンチパッドのような Web アプリケーションの外観や機能を変更できます。各ユーザ、グループ、および管理者に関連付けられたアクセス権を変更することで、ユーザ、グループ、および管理者のアプリケーションへのアクセス権を変更することもできます。

ここでは、さまざまな設定の管理方法についてのコンテキスト情報、手順および指示を説明します。次のアプリケーションには、CMC を介して変更可能な設定があります。

- [アラートアプリケーション](#)
- [Analysis edition for OLAP](#)
- [Analysis Office Runtime](#)
- [認可サーバの設定](#)
- [BEx Web アプリケーション](#)
- [BI 管理者のコックピット](#)
- [BI ラウンチパッド](#)
- [BI ワークスペース](#)
- [セントラル管理コンソール](#)
- [コラボレーション](#)
- [BI コメンタリアプリケーション](#)
- [Crystal Reports 設定](#)
- [HANA 認証](#)
- [インフォメーションデザインツール](#)
- [Information Steward アプリケーション](#)
- [BI 管理スタジオ](#)
- [マルチテナント管理ツール](#)
- [OpenDocument](#)
- [プラットフォーム検索アプリケーション](#)
- [プロモーション管理](#)
- [リサイクルビンアプリケーション](#)
- [RESTful Web サービス](#)
- [SAP BusinessObjects Mobile](#)
- [SAP Analytics Cloud](#)
- [トランスレーションマネジメントツール](#)
- [ユニバースデザインツール](#)
- [バージョン管理](#)
- [バージョン管理](#)

- [Visual Difference](#)
- [Web Intelligence](#)
- [Web サービス](#)
- [ワークフローアシスタント](#)

11.2 一般設定

11.2.1 アプリケーションに対するユーザアクセス権の設定

権限を使用すると、アプリケーションの特定の機能に対するユーザアクセス権を制御することができます。CMCの[[アプリケーション](#)]エリアを使用すると、アプリケーションのアクセスコントロールリストに主体を割り当てたり、主体が持っている権限を表示したり、主体がアプリケーションに対して持っている権限を変更できます。権限管理の詳細については、[SAP BI プラットフォーム管理者ガイド](#)を参照してください。

11.2.2 CMC の Web アプリケーショントレースログレベルを設定する

他の Web アプリケーションをトレースするには、対応する `BO_trace.ini` ファイルを手動で設定してください。

1. CMC の [[アプリケーション](#)] エリアでアプリケーションを右クリックして、[[トレースログ設定](#)] を選択します。

① 注記

トレースログ設定があるアプリケーションは、Fiorified BI ラウンチパッド、CMC、OpenDocument、プロモーション管理、バージョン管理、Visual Difference、および Web サービスです。

[[トレースログを設定](#)] ダイアログボックスが表示されます。

2. [[ログレベル](#)] リストから設定を選択します。
3. [[保存して閉じる](#)] をクリックします。
4. Web アプリケーションサーバを再起動します。

新しいトレースログレベルは、Web アプリケーションに次回ログオンしたときに有効になります。

関連情報

[トレースログレベル \[181 ページ\]](#)

11.2.2.1 トレースログレベル

BI プラットフォーム のコンポーネントでは、次のトレースログレベルを利用できます。

レベル	説明
未指定	このトレースログレベルは他の方法 (通常は .ini ファイル) で指定します。
なし	トレースは発生しません。
低	このトレースログフィルタでは、警告とステータスメッセージを無視しながら、エラーメッセージをログできます。コンポーネントのスタートアップ、シャットダウン、リクエストの開始、リクエストの終了の各メッセージについては、重要ステータスメッセージがログされます。このレベルは、デバッグ目的の場合はお勧めしません。
中	このトレースログフィルタは、エラー、警告、ほとんどのステータスメッセージを含むよう設定されます。あまり重要ではない、または非常に詳細なメッセージはフィルタで除外されます。このレベルは、デバッグ目的には詳細度が足りません。
高	メッセージはフィルタリングされません。このレベルは、デバッグ目的の場合にお勧めします。

⚠ 警告

このトレースログレベルは、CPU 使用率を上げストレージ容量を消費するため、システムリソースに大きな影響を与えます。

11.3 アプリケーション設定

11.3.1 CMC タブアクセスの管理

11.3.1.1 委任管理および CMC タブへのアクセス

通常、BI プラットフォームシステム管理者は、大量のドキュメント、フォルダ、ユーザ、サーバ、およびその他のオブジェクトを管理します。しかし、大規模な企業の場合は、1 人の管理者のリソースを超える場合があります。優先順位の高いタスクのみに集中したいシステム管理者は、委任管理者を作成して、タスク管理のサブセットを委任管理者に割り当てることができます (部署またはテナントコンテンツの管理など)。システム管理者とは異なり、委任管理者は制限されたタスクセットを実行し、システム内のオブジェクトに対する少数の権限を持っています。

セントラル管理コンソールのデフォルト設定では、ユーザはすべての利用可能な CMC タブにアクセスできます。システム管理者は、主体 (ユーザまたはユーザグループ) に対して表示するタブを制御するために、CMC タブへのアクセスを管理できます。委任管理者のユーザ経験およびワークフローを向上するために、システム管理者は、委任管理者が使用しない見込みの CMC タブを非表示にすることもできます。

⚠ 警告

CMC タブのアクセス管理は、CMC ユーザインタフェースの外観のみに影響します。CMC タブを非表示にしてもセキュリティは保障されません。タブ内のオブジェクトの設定または変更のセキュリティ権限を設定していないためです。ユーザが、許可されていないオブジェクトで許可されていない操作を実行できないようにするには (たとえば、セントラル設定マネージャまたは BI プラットフォーム SDK に基づくサードパーティ製ソフトウェアによるサーバの管理など)、適切なセキュリティ権限をオブジェクト (サーバオブジェクトなど) に設定する必要があります。

関連情報

[他のユーザに対して CMC タブアクセスを管理する \[183 ページ\]](#)

[他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを設定する権限を管理する \[185 ページ\]](#)

11.3.1.2 CMC タブアクセスの操作

11.3.1.2.1 他のユーザに対する CMC タブアクセスの管理

システム管理者は、常にすべての CMC タブにアクセスできます。以下のガイドラインを使用して、主体がアクセスできる CMC タブを管理します。

- 管理プロセスを簡素化して、メンテナンスおよびトラブルシューティングの必要性を減らすために、管理者がユーザレベルではなくユーザグループレベルで、CMC タブへのアクセスを管理することをお勧めします。
- 最上位フォルダを持つ CMC タブの場合、管理者はタブへのアクセスを許可し、タブの最上位フォルダで、[\[表示\]](#) 権限を許可する必要があります。以下の CMC タブは最上位フォルダをサポートしています。
 - [アクセスレベル](#)
 - [カレンダー](#)
 - [カテゴリ](#)
 - [\(ユニバース\) 接続](#)
 - [暗号化キー](#)
 - [イベント](#)
 - [フェデレーション](#)
 - [フォルダ](#)
 - [受信ボックス](#)
 - [OLAP 接続](#)
 - [個人用カテゴリ](#)
 - [個人用フォルダ](#)
 - [プロファイル](#)
 - [レプリケーション一覧](#)
 - [サーバとグループ](#)
 - [一時記憶領域](#)

- ユニバース
 - ユーザとグループ
 - Web サービスクエリ
- システムセキュリティ向上のため、Administrators グループのメンバーのみが以下の CMC タブにアクセスできます。システム管理者などの Administrators グループのメンバーは、CMC タブのアクセス権限に関係なく、すべての CMC タブにアクセスできます。CMC タブのアクセス権限は、委任管理者、すなわち Administrators グループ以外のメンバーに対する CMC タブへのアクセスを制御するように設計されています。
- 監査
 - 認証
 - 暗号化キー
 - ライセンスキー
 - モニタリング
 - セッション
 - 設定
 - ユーザ属性管理

⚠ 警告

CMC タブのアクセス管理は、CMC ユーザインタフェースの外観のみに影響します。CMC タブを非表示にしてもセキュリティは保障されません。タブ内のオブジェクトの設定または変更のセキュリティ権限を設定していないためです。ユーザが、許可されていないオブジェクトで許可されていない操作を実行できないようにするには（たとえば、セントラル設定マネージャまたは BI プラットフォーム SDK に基づくサードパーティ製ソフトウェアによるサーバの管理など）、適切なセキュリティ権限をオブジェクト（サーバオブジェクトなど）に設定する必要があります。

11.3.1.2.1.1 他のユーザに対して CMC タブアクセスを管理する

1. CMC にログオンします。
2. [ユーザとグループ] タブで主体を右クリックし、[CMC タブ設定] を選択します。

① 注記

CMC タブへのアクセスが制限されていない場合、以下のメッセージが表示されます。警告：CMC タブへのアクセスは現在無制限です。CMC へのアクセスを制限するには、[アプリケーション] タブをクリックして [CMC] を選択し、CMC タブへのアクセスが制限されるように設定します。これらの設定は、CMC タブへのアクセスが制限された後に有効になります。CMC タブへのアクセスをここで設定できます。ただし、設定は CMC タブへのアクセスが制限されるまで有効になりません。

[CMC タブへのアクセスの設定] ダイアログボックスに、テーブルが表示されます。

- ☐ または ☐ は主体がアクセス可能な CMC タブを示します。
 - [継承] は、そのタブへのアクセスが親ユーザグループから継承されたことを示します。
 - [明示] は、そのタブへのアクセスが主体レベルで明示的に指定されていることを示します。
3. CMC タブへのアクセス権限を確認します。アクセス権限を変更するには、ツールバーのボタンを使用します。

- [許可] をクリックして、タブへのアクセスを明示的に許可します。
- [拒否] をクリックして、タブへのアクセスを明示的に拒否します。
- [継承] をクリックして、継承されたアクセス権限を使用します。

① 注記

ボタンをクリックすると、主体にただちに変更が適用されます。

4. 終了したら、[閉じる] をクリックします。

新しく有効になったタブへのアクセスが、テーブルの [許可] 列に表示されます。

関連情報

[CMC タブへのアクセスを制限する \[187 ページ\]](#)

11.3.1.2.1.2 CMC タブへのアクセスの継承

CMC タブへのアクセス権限および、他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを設定する権限は両方とも、他の BI プラットフォームのセキュリティ権限と同じ方法で適用および継承されます。主体が明示的に指定されたタブへのアクセス許可を持っていない場合、主体がメンバーとなっているユーザグループのタブへのアクセス権限を継承します。

ユーザが2つのユーザグループのメンバーである場合、タブへのアクセスはその他すべての BI プラットフォームの権限の計算と同じ方法で計算されます。たとえば、CMC タブへのアクセスがグループの1つで許可されており、他のグループで拒否されている場合、主体は CMC タブにアクセスすることはできません。

① 注記

- ユーザグループの CMC タブへのアクセス権限を変更すると、CMC タブへのアクセスが [継承] に設定されている場合、そのユーザグループから権限を継承するすべてのユーザまたはユーザグループに対して、同じタブへのアクセス権限が変更されます。
- ユーザレベルでのタブへのアクセス設定は、常にユーザグループから継承されるタブへのアクセスより優先されます。

11.3.1.2.1.3 委任管理者ユーザグループ

委任管理者ユーザグループを作成して、CMC タブの管理を簡単にすることができます。個別の CMC タブへのアクセス設定を防止するために、既存のユーザまたはユーザグループを委任管理者ユーザグループのメンバーにすることができます。以下は、推奨される設定ですが、特定のビジネスニーズに応じて変更できます。

① 注記

権限が [継承] に設定されている場合、複数のグループ内のメンバーシップが権限の追加となります。

委任管理者ユーザグループ	推奨される権限
システム管理者	すべてのタブへのアクセスを許可します。
ユーザ管理者	[アクセスレベル]、[フォルダ]、[受信ボックス]、[個人用フォルダ]、[個人用カテゴリ]、[クエリ結果]、[セッション]、および[ユーザとグループ]へのアクセスを許可します。その他のすべてのタブを[継承]に設定します。
コンテンツ管理者	[カレンダー]、[カテゴリ]、[イベント]、[フォルダ]、[インスタンスマネージャ]、[個人用カテゴリ]、[個人用フォルダ]、[プロファイル]、[クエリ結果]、および[ユニバース]へのアクセスを許可します。その他のすべてのタブを[継承]に設定します。
サーバ管理者	[サーバ] および [アプリケーション] へのアクセスを許可します。その他のすべてのタブを[継承]に設定します。

11.3.1.2.1.4 他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを設定する権限を管理する

大規模な企業の環境では、システム管理者が CMC タブへのアクセス管理を委任管理者に委任する必要がある場合があります。また、複数テナントのシステムでは、その他のユーザおよびユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを管理する責任がある委任管理者が各テナントにいます。

1. CMC にログインします。
2. [ユーザとグループ] タブで主体を右クリックし、[CMC タブ設定] を選択します。
[CMC タブの設定] ダイアログボックスに、[他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを設定する権限] が主体に対して表示されます。

① 注記

この権限が許可されている場合、主体が[アクセス権を安全に変更する] 権限を持っているユーザに対して、主体は CMC タブ (主体がアクセス権を持っているタブのみ) へのアクセスを管理できます。また、主体が[アクセス権を安全に変更する] 権限を持っているユーザに、[他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを設定する権限] を許可することにより、主体は他のユーザに CMC タブへのアクセス管理を委任することができます。

- □ または □ は、主体が他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを設定する権限があるかどうかを示します。
 - [継承] は、権限が親ユーザグループから継承されたことを示します。
 - [明示] は、権限が主体レベルで明示的に指定されていることを示します。
3. 他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを設定する権限を確認します。権限を変更するために、リストから以下の設定のいずれかを選択することができます。
 - [許可] をクリックして、他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを管理する権限を明示的に許可します。
 - [拒否] をクリックして、他のユーザまたはユーザグループに対して CMC タブへのアクセスを管理する権限を明示的に拒否します。
 - [継承] をクリックして、他のユーザまたはユーザグループに対して 管理された CMC タブへのアクセス権限を継承します。

① 注記

リストから設定を選択すると、主体の権限がすぐに変更されます。

4. 終了したら、[閉じる]をクリックします。

新しく有効な許可が表示されます。

関連情報

[委任管理および CMC タブへのアクセス \[181 ページ\]](#)

[CMC タブへのアクセスの継承 \[184 ページ\]](#)

11.3.1.2.1.5 ユーザまたはユーザグループに【カスタマイズ】タブを追加する

ユーザまたはユーザグループに【カスタマイズ】タブを追加する前に、CMC タブアクセスを["制限付き"]に設定しておく必要があります。

1. CMC で、[ユーザとグループ] 管理エリアを表示します。
2. ユーザまたはユーザグループを右クリックし、[CMC タブ設定]を選択します。

[CMC タブの設定] ダイアログボックスが表示され、各 CMC タブのタイトルと、ユーザグループの場合は権限レベルが一覧表示されます。

以下の警告メッセージが、ダイアログボックスの最上部に赤で表示されている場合、【カスタマイズ】タブを追加する前に、CMC タブへのアクセスが制限されるように設定する必要があります。

警告: CMC タブへのアクセスは現在無制限です。CMC へのアクセスを制限するには、[アプリケーション] タブをクリックして [CMC] を選択し、CMC タブへのアクセスが制限されるように設定します。これらの設定は、CMC タブへのアクセスが制限された後に有効になります。

3. (必要な場合) CMC タブへのアクセスが制限されるように設定するには、次の手順を実行します。
 - a. CMC の[アプリケーション] 管理エリアで、[セントラル管理コンソール]を右クリックし [CMC タブアクセスの設定]を選択します。
 - b. [CMC タブアクセス] で、[制限付き] オプションを選択し、[保存して閉じる]をクリックします。
4. ユーザグループの [CMC タブの設定] ダイアログボックスで、各 CMC タブに対して、一覧から [許可]、[拒否]、または [継承] を選択します。

タブに対する権限を変更するたびに、[CMC タブの設定] ダイアログボックスによりユーザグループの権限が更新されるため、その他のユーザまたはユーザグループのタブアクセスを設定できるようになります。
5. [閉じる]をクリックします。

11.3.1.2.2 CMC タブへのアクセスを制限する

まず、主体の CMC タブへのアクセスを設定してから、CMC タブへのアクセスを制限することをお勧めします。これを設定する前にタブへのアクセスを制限すると、管理者がユーザにアクセスを許可しないと、すべての CMC タブにアクセスできなくなります。

以前のバージョンの BI プラットフォーム との競合を確認するために、BI プラットフォームがインストールされた後で CMC タブへのアクセスは最初に [制限なし] に設定され、CMC にアクセスできるすべてのユーザがすべての使用可能なタブにアクセスできます。アクセス権限のないタブにユーザがアクセスするのを防止するために、システム管理者が CMC タブへのアクセスを制限できます。

緊急の場合、または CMC タブへのアクセス設定問題の解決のために、CMC タブへのアクセス制限を削除できます (たとえば、委任管理者が重要な CMC タブにアクセスできない場合)。

1. CMC にログインします。
2. [アプリケーション] タブで、[セントラル管理コンソール] を右クリックして [CMC タブアクセスの設定] を選択します。
[CMC タブアクセス] ダイアログボックスが表示されます。
3. CMC タブへのアクセスルールを設定します。
 - ユーザが権限を持つタブへのアクセスを制限するには、[制限付き] を選択します。
 - ユーザがすべてのタブにアクセスできるようにするには、[制限なし] を選択します。
4. 作業が完了したら、[保存して閉じる] をクリックします。

CMC タブへのアクセスがシステムに適用されます。

関連情報

[CMC タブへのアクセス問題を解決する \[187 ページ\]](#)

11.3.1.2.3 CMC タブへのアクセス問題を解決する

許可されていないアクセスを回避したり、CMC タブへのユーザの制限されたアクセスの問題を解決したりするために、ユーザの CMC タブへのアクセス権限の問題を解決できます。

1. 管理者として CMC にログインします。

① 注記

問題を解決するタブへのアクセス権限があること、ユーザの [アクセス権を安全に変更する] 権限があることを確認します。

2. [ユーザとグループ] タブで主体を右クリックし、[CMC タブ設定] を選択します。
[CMC タブの設定] ウィンドウが表示されます。
3. 有効な CMC タブへのアクセスを確認します。利用可能なタブへのアクセスを明示的に許可または拒否できます。
CMC タブへのアクセスは継承されているが、有効なタブへのアクセスがユーザのニーズに合っていない場合は、以下のとおりです。

- a. 選択した主体がメンバーとなっているすべてのユーザグループのリストを収集します。
- b. ユーザがタブへのアクセスを継承するすべてのグループに対して、手順1～3を繰り返します。
- c. 必要に応じて、主体レベルまたはグループレベルでCMCタブへのアクセスを修正します。

① 注記

グループレベルでこのタスクを実行すると、ユーザのCMCタブへのアクセスが[継承]に設定されている限り、このユーザグループのメンバーであるすべてのユーザに対するCMCタブへのアクセスおよび、このグループから継承されたユーザグループのメンバーであるすべてのユーザに影響があります。

4. 終了したら、[閉じる]をクリックします。

関連情報

[他のユーザに対してCMCタブアクセスを管理する \[183 ページ\]](#)

[CMCタブへのアクセスの継承 \[184 ページ\]](#)

11.3.2 BI ラウンチパッド設定の管理

ここでは、Fiori 対応 BI ラウンチパッドの以下の設定を管理する詳細な手順について説明します。

- BI ラウンチパッドの表示設定を変更します。
- BI ラウンチパッドへのログオン用に RESTful URL の詳細をセントラル管理コンソールで設定します。
- Fiori 対応 BI ラウンチパッドで [認証] タブおよび CMS の表示を設定します。
- BI ラウンチパッドで [管理者に連絡] オプションの電子メールリンクを設定します。

11.3.2.1 BI ラウンチパッドの表示設定を変更する

1. CMC の [アプリケーション] エリアに移動し、[BI ラウンチパッド] をダブルクリックします。
[BI ラウンチパッドのプロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
2. スケジュールのフィルタを有効化するには、[スケジュール] ページに [フィルタ] タブを表示する] チェックボックスを選択します。
この設定によって、ユーザが Crystal レポートをスケジュールするときに、レコード選択式やグループ選択式を入力できるかどうかを制御できます。
3. [保存して閉じる](#) をクリックします。

11.3.2.2 Fiori 対応 BI ラウンチパッドへのログオン用の RESTful URL の詳細の CMC での設定

インストールするか BI 4.2 SP4 にアップグレードした後、Fiori 対応 BI ラウンチパッドにユーザがログオンできるように、RESTful Web サービス URL を設定する必要があります。

RESTful Web サービス URL の詳細を CMC で設定するには、以下の手順を実行します。

1. 管理者として CMC にログオンします。
2. **管理** > **アプリケーション** > **RESTful Web サービス** > **プロパティ** に移動します。
3. WACS URL (WACS サーバがデプロイされている場所のホスト名または完全修飾名) を入力します。

11.3.2.3 Fiori 対応 BI ラウンチパッドでの [認証] タブおよび CMS の表示の設定

Fiori 対応 BI ラウンチパッドで [認証] タブおよび CMS の表示を設定するには、以下の操作を実行します。

1. <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI4.0%warfiles%webapps%BOE%WEB-INF%config%custom% に移動します。

BI プラットフォームにインストールされた Tomcat を使用する場合は、次の場所にもアクセスできます。

C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%Tomcat%webapps%BOE%WEB-INF%config%custom

2. メモ帳を使用して新しいファイルを作成し、次の名前でファイルを保存します。FioriBI.properties。
3. BI ラウンチパッドログオン画面に認証オプションを含めるには、次を追加します。
authentication.visible=true。

<authentication> をデフォルトの認証タイプである "secEnterprise, secLDAP, secWinAD, secSAPR3" と置き換えます。

4. デフォルトの認証タイプを変更するには、次を追加します。
authentication.default=<authentication>。
5. BI ラウンチパッドのログオン画面に CMS 名のプロンプトを表示するには、次を追加します。
cms.visible=true。
6. ファイルを保存して閉じます。
7. Web アプリケーションサーバを再起動します。

11.3.2.4 Fiori 対応 BI ラウンチパッドでの [管理者に問い合わせる] オプションの電子メールリンクの設定

Fiori 対応 BI ラウンチパッドで [管理者に問い合わせる] オプションの電子メールリンクを設定するには、以下の操作を実行します。

1. <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI4.0%warfiles%webapps%BOE%WEB-INF%config%custom% に移動します。

BI プラットフォームに Tomcat バージョンがインストールされている場合は、次の場所にもアクセスできます。C:\Program Files (x86)\SAP

BusinessObjects\Tomcat\webapps\BOE\WEBINF\config\custom

2. メモ帳を使用して新しいファイルを作成し、次の名前でファイルを保存します。FioriBI.properties。
3. ファイル内でプロパティ admin.user.email=administrator@bilp.com を変更し、管理者の電子メール ID を含めます。

11.3.3 Web Intelligence の設定の管理

Web Intelligence ドキュメントでユーザがアクセスできる機能を制御するには、Web Intelligence アプリケーションのプロパティを設定します。

11.3.3.1 Web Intelligence の表示設定を変更する

1. CMC の [アプリケーション] エリアに移動し、[Web Intelligence] を選択します。
2. **管理 > プロパティ** をクリックします。
[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
3. 次の表示オプションをすべて定義します。

オプション	説明
変更データ表示オプション > デイメンションと詳細	このエリアのオプションを使用して、レポート内での追加されたデータの表示方法を定義します。フォントスタイル、テキスト色、および背景色を変更します。セルのプレビューに変更が自動的に表示されます。完了したら [OK] をクリックします。
変更データ表示オプション > 変動値 (数値メジャー)	このエリアのオプションを使用して、ページ見出しの表示を変更および書式設定します。フォントスタイル、テキスト色、および背景色を変更します。セルのプレビューに変更が自動的に表示されます。完了したら [OK] をクリックします。
埋め込みイメージのプロパティ	埋め込みイメージの最大サイズを入力します。
地理マップのサポート	Web Intelligence での地理マップのサポートを有効または無効にします。
クイック表示モードのプロパティ	最大垂直レコード、最大水平レコード、ページの最小幅、ページの最小の高さ、右の余白値、および下の余白値を入力します。
自動保存設定	ドキュメントを自動保存する間隔を設定します。この間隔は、ドキュメントが手動または自動で保存されることにリセットされます。また、ドキュメントを手動で閉じると、自動保存されたドキュメントも削除されます。
自動更新	Web Intelligence ドキュメントプロパティの [自動最新表示] を選択すると、Web Intelligence ドキュメントの自動最新表示が有効になります。 詳細については、SAP BusinessObjects Web Intelligence ユーザガイドを参照してください。
自動結合	Web Intelligence ドキュメントプロパティの [ディメンションの自動結合] を選択すると、ディメンションの自動結合が有効になります。

オプション	説明
	詳細については、 <i>SAP BusinessObjects Web Intelligence ユーザガイド</i> を参照してください。
起動時の自動ドキュメント最新表示セキュリティ権限設定	Web Intelligence ドキュメントプロパティで [起動時に最新表示] を有効にせず、Web Intelligence のドキュメントを開く際に自動でドキュメントを最新表示するには、このオプションをクリアします。このオプションを選択すると、セキュリティ権限 [ドキュメント - 起動時の自動最新表示を無効にする] が選択されます。
Smart View	<p>このオプションは、ユーザが Web Intelligence でドキュメントを開く際に、表示するドキュメントバージョンを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 最新のインスタンスを表示 オブジェクトの最新のインスタンスが開きます。たとえば、ドキュメントが毎時最新表示するようにスケジュールされていて、5 時間前にドキュメントを最終保存して閉じた場合、最新のインスタンスが開きます。 オブジェクトの表示 スケジュールされた最新表示が実行されているかにかかわらず、ドキュメントが前回保存時と同じ状態で開きます。
JavaScript	<p>ここでの選択は、Web Intelligence ドキュメントの [コンテンツを HTML として表示] または [コンテンツをハイパーリンクとして表示] が指定されているセルのレンダリングを定義します。</p> <ul style="list-style-type: none"> JavaScript を無効にし、ハイパーリンクと Web Intelligence で使用される HTML エlement のみを有効にする このデフォルトのオプションでは、ハイパーリンクおよび Web Intelligence の機能に必要な限定された HTML 要素のセットが有効になります。JavaScript およびその他の HTML 要素はドキュメントから削除されます。 [許可される HTML 要素] ページで定義された HTML 要素のみを有効にする このオプションでは、[権限のある HTML 要素] ページで指定した HTML 要素および属性のみが有効になります。 JavaScript、HTML 要素、およびハイパーリンクを有効にする このオプションでは、すべての JavaScript、HTML 要素、およびハイパーリンクが有効になります。 <p>オプションを変更した場合は常に、Web Intelligence での変更を確認するために、アプリケーションからログオフしてからログオンし直してください。</p>

⚠ 警告

- Web Intelligence では、式的能力によって、ドキュメントセル内の埋め込み JavaScript/HTML コードが有効化されます。
このコードは、セントラル管理コンソールで有効化または無効化できます。ただし、JavaScript、HTML、およびハイパーリンクを承認することで、クロスサイトスクリプティングにさらされるリスクを認識することになります。クロスサイトスクリプティングによって、攻撃者が Web サイトを変更したり、他のシステムでコードを実行したりできるようになります。この脆弱性は、スクリプトの実行時にインターネットブラウザなどの製品に影響します。クロスサイトスクリプティング攻撃の大部分は、ターゲットシステムでの安全でないプログラミングに起因します。
- コードは、[BI 管理スタジオ](#) > [アプリケーション](#) > [HTML 要素](#) で HTML タグと属性を承認することで微調整できます。

ただし、SAP はこのコードの互換性と、考えられる副次的な影響について責任を負いません。たとえば、ブラウザ更新、JavaScript バージョンサポート、または Web ページでコードを動的に埋め込む方法により、コードによっては一部の調整が必要になることがあります。このコードには、新しいコンテキストで実行するために調整が必要になる場合があります。

新しいドキュメントのコンテンツ配置

これらのオプションを使用して、新しいドキュメントのコンテンツを右から左、左から右に配置する必要があるのか、またはユーザの優先表示ロケールと製品ロケールに依存する必要があるのかを定義します。

フィーチャトグル

このテキストフィールドを使用してトグルを入力し、プレビュー機能を有効にします。これらのトグルを SAP ノートで使用して、デフォルトの動作を変更することもできます。このトグルのリストは、JSON 形式一覧として入力する必要があります。

4. [保存して閉じる] をクリックします。

① 注記

デフォルトの表示変数に戻す場合は、[リセット] をクリックします。

11.3.4 Crystal Reports の設定の管理

- Crystal Reports アプリケーションのプロパティを設定することにより、ユーザが Crystal Reports ドキュメントにアクセスできる機能を制御することができます。
- CMC で [アプリケーション] に移動します。
- [Crystal Reports 設定] を選択します。
- [プロパティの管理] をクリックします。
[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
- [その他の設定] をクリックします。
- 次の表示オプションをすべて定義します。
 - **スマートビュー**: デフォルトでは、最新のインスタンス (利用可能な場合) またはレポート自体が表示されます。
 - **地理マップのサポート**: Crystal Reports での地理マップのサポートを有効または無効にします。

11.3.5 セントラル管理コンソールの設定の管理

BI プラットフォームの CMC の [アプリケーション] エリアで、**管理** > **プロパティ** を選択してセントラル管理コンソールの表示オプションを変更できます。

セントラル管理コンソールでは、次のような制御ができます。

- 処理拡張機能
- 処理の設定
- プログラムオブジェクト権限

11.3.5.1 認証およびプログラムオブジェクト

ユーザが実行できるプログラムオブジェクトの種類を制御し、プログラムオブジェクトの実行に必要な認証情報を設定することができます。

プログラムオブジェクトをリポジトリへ追加することに関してはセキュリティ上の危険があることに注意してください。プログラムオブジェクトの実行に使用するアカウントに付与されたファイル権限のレベルによって、ファイルに対してプログラムがどのような変更を行えるかを指定します。

有効または可能にするプログラムオブジェクトの指定

最も初歩的なレベルのセキュリティとして、使用できるプログラムオブジェクトの種類を設定することができます。

すべてのプラットフォームでの認証

CMC の [\[フォルダ\]](#) 管理エリアでは、プログラムの実行に使用するアカウントの認証情報を指定します。この機能により、プログラムに特定のユーザアカウントを設定し、そのアカウントでプログラムオブジェクトを実行できる適切なアクセス権をユーザアカウントに割り当てることができます。

また、情報プラットフォームサービスにプログラムオブジェクトを追加するユーザは、固有の認証情報をプログラムオブジェクトに割り当てて、プログラムからシステムにアクセスさせることができます。このように、プログラムはユーザアカウントによって実行され、プログラムのアクセス権はユーザのアクセス権に制限されます。プログラムオブジェクトにユーザアカウントを指定しない場合、プログラムはデフォルトにシステムアカウントで実行されます。このような場合、プログラムのアクセス権は通常ローカルマシンだけにあり、ネットワークに対してはありません。

① 注記

デフォルトでは、プログラムオブジェクトをスケジュールしたときに、認証情報が指定されていないと、ジョブが失敗します。デフォルトの認証情報を提供するには、[\[アプリケーション\]](#)管理エリアの[\[CMC\]](#)を選択します。[\[アクション\]](#)メニューの[\[プログラムオブジェクト権限\]](#)をクリックします。[\[次のオペレーティングシステム認証情報を使用してスケジュールを設定する\]](#)をクリックして、デフォルトのユーザ名とパスワードを指定します。

Java プログラムの認証

情報プラットフォームサービスでは、あらゆるプログラムオブジェクトのセキュリティを設定することができます。Java プログラムの場合は、情報プラットフォームサービスは Java Policy File を主に使用します。このファイルには、安全でないコードの Java デフォルトに対応したデフォルトの設定です。特殊な要件に合わせるために、Java Policy Tool (Java Development Kit に同梱) を使用して Java Policy File を変更することができます。

Java Policy Tool にはコードベースの 2 つのエントリがあります。最初のエントリは、SAP BusinessObjects Enterprise Java SDK にポイントされており、プログラムオブジェクトにすべての SAP BusinessObjects Enterprise JAR ファイルへのフルアクセス権を付与しています。2 つ目のコードベースのエントリは、すべてのローカルファイルに適用されます。安全でないコードの Java デフォルトと同じ安全でないコードのセキュリティ設定を使用します。

① 注記

Java Policy の設定は、同じマシンで実行されているすべての Program Job Server で共通です。

① 注記

デフォルトでは、Java Policy File は情報プラットフォームサービスインストールのルートディレクトリにある Java SDK ディレクトリにインストールされます。たとえば、Windows 版インストールの標準の場所は、`C:\Program Files\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\conf\crystal-program.policy` です。

11.3.5.1.1 有効または可能にするプログラムオブジェクトを指定する

1. アプリケーションエリアで、**セントラル管理コンソール**を選択します。
2. **アクション** > **プログラムオブジェクト権限** をクリックします。
[プログラムオブジェクト権限]ダイアログボックスが表示されます。
3. [ユーザが行える操作]エリアで、ユーザが実行できるようにするプログラムオブジェクトの種類を選択します。

スクリプト/バイナリの実行と Java プログラムの実行のどちらかを選択できます。

Java プログラムの実行を選択した場合は、**偽装の使用**チェックボックスをオンまたはオフにできます。このオプションを使用すると、情報プラットフォームサービスにログオンするためのトークンが Java プログラムに提供されます。

4. **保存して閉じる**をクリックします。

① 注記

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.3 サポートパッケージ 3 にアップグレードすると、すべてのユーザに対するプログラムオブジェクト権限がデフォルトで拒否されます。管理者ユーザ (または管理者グループの任意のユーザ) がこれを有効にすることができます。

Java プログラムの実行の下に、**偽装の使用**チェックボックスがあります。4.3 サポートパッケージ 3 では、**偽装の使用**チェックボックスが削除されました。

11.3.5.2 処理拡張機能のシステムへの登録

① 注記

この機能は Web Intelligence ドキュメントには適用されません。

処理拡張機能を特定のオブジェクトに適用するには、関連するスケジュールの処理やリクエストの表示を行う各マシンで、コードライブラリを使用できるようにする必要があります。BI プラットフォームのインストール時には、Job Server、Processing Server、Report Application Server (RAS) に処理拡張機能用のデフォルトディレクトリが作成されます。処理拡張機能は、各サーバ上のこのデフォルトディレクトリにコピーすることをお勧めします。Windows の場合、デフォルトディレクトリは、`C:\Program Files\SAP Business Objects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win64_x64\ProcessExt` です。UNIX の場合、`sap_bobj/ProcessExt` ディレクトリです。

→ ヒント

処理拡張機能ファイルは、共有することができます。

拡張機能に記述した機能に応じて、次のマシンにライブラリをコピーします。

- 処理拡張機能をスケジュールリクエストだけに対して実行する場合は Adaptive Job Server として起動する各マシンにライブラリをコピーします。
- 処理拡張機能を表示リクエストだけに割り込ませる場合、Crystal Reports Processing Server または RAS として実行されている各マシンにライブラリをコピーします。
- 処理拡張機能をスケジュールリクエストと表示リクエストの両方に割り込ませる場合は、Adaptive Job Server、Crystal Reports Processing Server、または RAS として実行されている各マシンにライブラリをコピーします。

① 注記

処理拡張機能を特定のサーバグループに対して行われるスケジュール/表示リクエストだけに割り込ませる場合、そのグループ内の各処理サーバだけにライブラリをコピーします。

11.3.5.2.1 システムに処理拡張機能を登録する

1. CMC の [アプリケーション] 管理エリアを表示します。
2. [セントラル管理コンソール] を選択します。
3. ► **アクション** ► **処理拡張機能** ► をクリックします。
[処理拡張機能: CMC] ダイアログボックスが開きます。
4. [名前] フィールドに、処理拡張機能の表示名を入力します。
5. [場所] フィールドに、処理拡張機能のファイル名を追加パス情報と共に入力します。
 - 使用するマシン上のデフォルトのディレクトリに処理拡張機能をコピーした場合は、ファイル名のみを拡張子なしで入力します。
 - デフォルトのディレクトリのサブフォルダに処理拡張機能をコピーした場合は、「<subfolder>/<filename>」というように場所を入力します。
6. [説明] フィールドを使用して、処理拡張機能に関する情報を追加します。

7. [\[追加\]](#)をクリックします。

→ ヒント

処理拡張機能を削除するには、[\[既存の拡張機能\]](#)一覧からその機能を選択して、[\[削除\]](#)をクリックします。繰り返して実行されるジョブで、この処理拡張機能を使用していないことを確認してください。この拡張機能を使用したジョブが今後実行されるとエラーになります。

8. [\[保存して閉じる\]](#)をクリックします。
処理拡張機能は CMC に登録されます。

これで、この処理拡張機能を選択し、そのロジックを特定のオブジェクトに適用できます。

11.3.6 BI Commentary アプリケーション設定の管理

BI Commentary は、CMC に導入されているアプリケーションです。ドキュメントユーザは、指定されたドキュメントで利用できるデータ/統計に関するコメントを作成することによって、相互にコラボレーションすることができます。

BI Commentary で、ユーザはレポート内のデータ/統計に関するコメントを投稿できます。

→ 推奨事項

デフォルトで、BI Commentary のテーブルは監査データベースに作成されて保持されます。

① 注記

Windows 以外のシステム上で監査データベースで BI Commentary を使用するには、[データアクセスガイド](#)を参照して、ODBC ドライバを設定します。

ただし、SAP は BI Commentary アプリケーションのコメントを保存する新しいデータベースを設定することを推奨します。BI Commentary がサポートされているデータベースは、監査がサポートされているデータベースと同じです。BI Commentary がサポートされているデータベースおよび対応する認定済み jdbc.jar には以下を含みます。

- IBM DB2 Workgroup Edition db2jcc4.jar
- Microsoft SQL Server - sqljdbc4.jar
- MySQL - com.mysql.jdbc_5.1.5.jar
- Oracle - ojdbc6.jar
- SAP HANA - ngdbc.jar
- Sybase Adaptive Server Enterprise - jconn4.jar
- Sybase SQL Anywhere - jconn4.jar

① 注記

監査データベースまたはその他のサポートされているデータベースで BI Commentary を設定することを選択するかどうかに関わらず、BI Commentary を MySQL データベースで使用するには次の場所に MySQL jdbc.jar を置いておく必要があります。<INSTALL_DIR¥SAP BusinessObjects¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥java¥pjs¥services¥BICommentaryService¥lib>.

IBM DB2 で BI Commentary を設定する場合は、システムで一時表スペースのページサイズ、8K、16K、または 32K が必要です。デフォルトでは、ページサイズは、4K です。

① 注記

デフォルトで監査テーブルが設定/有効化されていない場合、BI Commentary 用の新しいデータベースを手動で設定しない限り、BI Commentary は動作しません。

監査データベースで BI Commentary を設定し、監査データベースを削除した場合、監査データベースに格納されたすべてのコメントも削除されます。

監査データベースは、ODBC またはネイティブデータベースいずれかのドライバタイプを使用します。新しい Commentary データベースを設定するには、JDBC ドライバが必要です。

① 注記

コメントのサイズは、UTF-8 文字 2000 バイトまたは UTF-16 文字 666 バイトに制限されています。

① 注記

フェデレーションツールを使用してコメントを移行することはできません。

① 注記

BI Commentary は MaxDB 接続ではサポートされていません。

① 注記

ユーザが作成した Commentary のエントリを削除するには、以下のクエリを使用します。

```
DELETE from dba.COMMENTARY_MASTER where UserName = '<User Name>'
```

11.3.6.1 新しい BI Commentary データベースの設定

JDBC の接続を作成しておきます。

① 注記

新しい BI Commentary データベースを設定する場合、Adaptive Processing Server に含まれている Commentary サービスにより Commentary 情報がデータベースに書き込まれます。Commentary サービスが実行されているクラスタ内の各マシンで以下の手順を実行してください。

新しい JDBC 接続を作成するには、以下の手順を実行します。

1. 設定するデータベースの JDBC ドライバ jar を以下の場所に配置します。 <INSTALL_DIR¥SAP BusinessObjects¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥java¥pjs¥services¥BICommentaryService¥lib>

① 注記

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 サポートパッケージ 2 にアップグレードするときに、以前のバージョンの BI Commentary に対する新しいデータベースをすでに設定してある場合には、データベースドライバファイルを <INSTALL_DIR¥SAP BusinessObjects¥SAP

```
BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥java¥lib¥external> の 'jdbc' フォルダから、  
<INSTALL_DIR¥SAP BusinessObjects¥SAP BusinessObjects Enterprise XI  
4.0¥java¥pjs¥services¥BICommentaryService¥lib> に移動する必要があります。
```

2. SIA を再起動します。

BI Commentary 用の新しいデータベースを設定するには、以下の手順を実行します。

1. CMC にログインします。
2. CMC のホームページで、ドロップダウンメニューから [\[アプリケーション\]](#) を選択します。
3. [アプリケーション名](#) リストから *BI Commentary アプリケーション* を選択します。

[\[BI Commentary\]](#) ポップアップウィンドウが表示されます。デフォルトで、[\[監査データベースを使用\]](#) ラジオボタンが選択されています。

4. [\[その他のサポートされているデータベースを使用\]](#) ラジオボタンを選択します。
5. [\[BI Commentary データベースの設定\]](#) ペインに、[タイプ](#)、[データベース名](#)、[ホスト](#)、[ポート](#)、[ユーザ名](#)、および [パスワード](#) を入力します。
6. [\[保存して閉じる\]](#) を選択します。
7. APS を再起動します。

BI Commentary データベースの設定に対する変更は、Adaptive Processing Server (APS) の再起動後でのみ有効になります。

[\[接続テスト\]](#) を選択して、接続を検証できます。

① 注記

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.3 サポートパッケージ 3 にアップグレードし、以前のバージョンの JDBC 向けに BI Commentary のデータベースをすでに設定している場合、[\[接続テスト\]](#)、[\[保存して閉じる\]](#)、または [\[保存\]](#) を選択すると、パスワードフィールドが空になります。

[以下よりも古いコメントをすべて削除](#) チェックボックスを有効にし、日数を指定することによって、古いコメントを削除またはクリーンアップすることができます。

① 注記

変更を反映するには、BI Commentary サービスをホストしているすべての APS サーバを再起動する必要があります。

これで、BI Commentary アプリケーションのコメントを保存する新しいデータベースが設定されました。

11.3.7 ごみ箱設定の管理

ごみ箱について

ごみ箱は、CMC の新しいアプリケーションです。ユーザが BOE システムからアイテムを削除すると、そのアイテムはごみ箱に移動し、ごみ箱が空になるまで一時的に保存されます。これにより、ユーザは誤って削除したレポート/フォルダを取り戻して元の場所に復元することができます。

ごみ箱アプリケーションで、管理者は以下の処理を行うことができます。

- 削除されたアイテム (レポートやフォルダなど) の復元を開始する。
- アイテムをごみ箱から完全に削除する。
- ごみ箱の自動クリーンアップを実行する。

ごみ箱に一時的に保存できるのは、共有フォルダ内のアイテムだけです。

11.3.7.1 アイテムをごみ箱から復元する

ごみ箱には削除されたアイテムの一覧が表示されます。アイテムをごみ箱から復元するには、以下の手順を実行します。

1. CMC にログインします。
2. CMC ホームページの [管理] ペインで、[ごみ箱] を選択します。
3. 復元するアイテムを右クリックして、コンテキストメニューから [復元] を選択します。
4. [OK] を選択します。

復元されたアイテムの場所を参照すると、復元操作を確認できます。

① 注記

アイテムをごみ箱から復元するときに、復元場所に同名の別のアイテムがすでに存在する場合、"<item name> restored(1, 2, ...)" という名前でアイテムが復元場所に保存されます。

ごみ箱内のアイテムの親フォルダが削除された場合、アイテムの復元時にその親フォルダが再作成されます。ただし、この親フォルダには、ごみ箱から復元されたアイテムのみが含まれます。

ごみ箱からアイテムを開くまたは参照することはできません。

これで、ゴミ箱からアイテムが正常に復元されました。

11.3.7.2 アイテムをごみ箱から完全に削除する

管理者として、ごみ箱から選択したアイテムを完全に削除する、またはゴミ箱を空にする権限があります。

ゴミ箱からアイテムを完全に削除するには、以下の手順を実行します。

1. CMC にログオンします。
2. CMC ホームページの [\[管理\]](#) ペインから、[\[ゴミ箱\]](#) を選択します。
3. 削除するアイテムの上で右クリックして、コンテキストメニューから [\[削除\]](#) を選択します。
4. [\[OK\]](#) を選択します。

これで、ゴミ箱からアイテムが正常に削除されました。

[\[ごみ箱\]](#) を空にする

ゴミ箱を空にするには、以下の手順を実行します。

1. CMC にログオンします。
2. CMC ホームページの [\[管理\]](#) ペインから、[\[ゴミ箱\]](#) を選択します。
3. [\[Empty Recycle Bin\]](#) を選択します。

これで、ゴミ箱を正常に空にすることができました。

11.3.7.3 ごみ箱の自動クリーンアップを有効にする

定期的にゴミ箱の自動クリーンアップを実行することができます。

ゴミ箱の自動クリーンアップを有効にするには、以下の手順を実行します。

1. CMC にログオンします。
2. CMC ホームページの [\[管理\]](#) ペインから、[\[ごみ箱\]](#) を選択します。
3. [\[ゴミ箱\]](#) ダイアログボックスから、[\[プロパティ\]](#) を選択します。
[プロパティ](#): [\[ゴミ箱\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
4. チェックボックスを選択して、削除されたアイテムが自動クリーンアップされるまでに必要な期間 (何日間) を指定します。
5. [\[OK\]](#) を選択します。

これで、ゴミ箱の自動クリーンアップが正常に有効になりました。

11.3.8 アラート設定の管理

[BI プラットフォーム](#)の CMC の [\[アプリケーション\]](#) エリアで、アラートのシステムレベルの設定を指定できます。

[アラート](#) アプリケーションについては、システムユーザがアラートにアクセスする方法を、次の手順を実行して制御および定義できます。

- アラート購読者の[マイアラート]フォルダを有効にする
- 電子メールで送信されるアラートメッセージを有効にして書式設定する
- システムのアラート数の制限を設定する
- アラートメッセージの有効期限の設定

関連情報

[アプリケーションに対するユーザアクセス権の設定 \[180 ページ\]](#)

11.3.8.1 アラートのデフォルトプロパティを変更する

1. CMC の [アプリケーション] エリアに移動し、[アラートアプリケーション] を選択します。
2. **管理 > プロパティ > デフォルト設定** をクリックします。
3. 以下のプロパティに適切な値を設定します。

オプション	説明
有効期限	アラートメッセージが削除されるまでにシステムで保持される期間を指定します。
アラートメッセージの最大数	システムでサポートされるアラートメッセージの最大数を指定します。しきい値に達すると、システムによって、アラートメッセージの 20 パーセントが古いメッセージから順に削除されます。

4. [保存して閉じる] をクリックします。

関連情報

[アラート設定の管理 \[200 ページ\]](#)

11.3.8.2 アラートの出力先プロパティを変更する

1. CMC の [アプリケーション] エリアで、[アラートアプリケーション] をダブルクリックします。
2. **管理 > プロパティ** をクリックします。
[アラート] ダイアログボックスが表示されます。
3. (必須) 次の操作のいずれかを実行します。
 - アラート購読者が BI ラウンチパッドの [マイアラート] で通知を受信できるようにする場合は、[マイアラートの有効化] を選択します。

- アラート購読者が電子メールで通知を受信できるようにする場合は、[電子メールを有効にする] を選択します。
アラートのグローバル電子メールオプションが表示されます。

4. [電子メールを有効にする] を選択した場合は、次の操作を実行します。

- [差出人] ボックスに、アラート通知の送信元電子メールアドレスを入力します。
購読者はこの電子メールアドレスからアラート電子メールを受信します。システムが認識している有効な電子メールアドレスを使用します。
- [宛先] ボックスに、アラート受信者の電子メールアドレスを入力します。
デフォルトでは、すべてのシステムアラートがこの電子メールアドレスに送信されます。

→ ヒント

電子メールアドレスまたは受信者を指定しないでください。[%SI_EMAIL_ADDRESS%] プレースホルダを使用してください。

- [CC] ボックスに、アラートのカーボンコピーを受信する各受信者の電子メールアドレスを入力します。
- [件名] ボックスに、アラートを含む電子メールに使用されるデフォルトの表題を入力します。
- [メッセージ] ボックスに、アラートを含む電子メールに記載されるデフォルトのメッセージを入力します。
- アラートを含む電子メールにデフォルトでファイルが添付されるようにするには、[添付ファイルの追加] を選択します。
たとえば、トリガされたアラートに関連付けられた Crystal レポートを含める場合は、このオプションを選択します。
- [添付ファイルの追加] を選択した場合、[ファイル名] で [自動生成される名前] または [指定の名前] を選択して、電子メールの添付ファイルに名前を付ける方法を指定します。

5. [保存して閉じる] をクリックします。

関連情報

[アプリケーションに対するユーザアクセス権の設定 \[180 ページ\]](#)

[アラート設定の管理 \[200 ページ\]](#)

11.3.9 ウィジェット設定の管理

SAP BusinessObjects 向けウィジェットは、ユーザがデスクトップにミニアプリケーションを追加するために使用できるデスクトップアプリケーションです。ユーザは、SAP NetWeaver Application Server の BI プラットフォームおよび Web Dynpro アプリケーションにある企業のビジネスインテリジェンスコンテンツに容易にアクセスできるようになります。

CMC の [アプリケーション] エリアでは、ユーザのデスクトップでウィジェットを作成したり、使用したりするためのユーザアクセス権と、デスクトップ上のウィジェットアプリケーションから BI プラットフォームリポジトリを検索する操作を制御できます。

ユーザまたはグループに以下の操作を許可することができます。

- ウィジェットを使用する
- ウィジェットで作成したオブジェクトを編集する
- オブジェクトにアクセスするためのユーザ権限を変更する

① 注記

デフォルトでは、すべての一般ユーザがこうした機能にアクセスできます。

11.3.10 SAP BusinessObjects Mobile 設定の管理

SAP BusinessObjects Mobile でユーザがアクセスできる機能を定義するには、CMC の [アプリケーション] エリアで SAP BusinessObjects Mobile のプロパティおよびセキュリティ権限を設定します。

11.3.10.1 SAP BusinessObjects Mobile のデフォルトのモバイルプロパティを変更する

1. CMC の [アプリケーション] エリアを表示します。
2. [SAP BusinessObjects Mobile アプリケーション] を選択して、このアプリケーション上で右クリックします。
3. [プロパティ] を選択します。
4. [モバイルプロパティ] で以下のプロパティに適切な値を設定します。

プロパティ	デフォルト値	説明	指定できる値
default.corporateCategory	'Mobile'	会社用カテゴリの名前を指定します。このカテゴリに割り当てられているドキュメントは、モバイル対応ドキュメントです。モバイルユーザは、Blackberry、Android、iOS を含むどのモバイルデバイスからでも、SAP BusinessObjects Mobile アプリケーションを使用して、このカテゴリに割り当てられた BI ドキュメントにアクセスできます。 カテゴリ名が複数ある場合は、それぞれの値をカンマで区切って指定します。	管理者によって選択された特定の会社用カテゴリのいずれか

プロパティ	デフォルト値	説明	指定できる値
		<div>① 注記</div> <p>ここで指定する値では、大文字と小文字が区別されます。</p>	
default.personalCategory	'Mobile'	個人用カテゴリの名前を指定します。このカテゴリに割り当てられたドキュメントは、各ユーザの個人用であり、他のモバイルユーザはアクセスできません。カテゴリ名が複数ある場合は、それぞれの値をカンマで区切って入力します。	管理者によって選択された特定の個人用カテゴリのいずれか
		<div>① 注記</div> <p>ここで指定する値では、大文字と小文字が区別されます。</p>	
default.category.mobileDesigned	'MobileDesigned'	モバイル用デザイン済みカテゴリの名前を指定します。ユーザがモバイルデバイスでドキュメントを表示する場合、このカテゴリに割り当てられたドキュメントは[ページレイアウト]モードで表示されます。カテゴリ名が複数ある場合は、それぞれの値をカンマで区切って入力します。	管理者によって選択された特定の個人用カテゴリのいずれか
		<div>① 注記</div> <p>ここで指定する値では、大文字と小文字が区別されます。</p>	
default.category.security	'Confidential'	セキュリティ用カテゴリの名前を指定します。このカテゴリに割り当てられたドキュメントは、オンラインモードのユーザのみに表示されます。ユーザはこのドキュメントのローカルコピー	管理者によって選択された特定の個人用カテゴリのいずれか

プロパティ	デフォルト値	説明	指定できる値
		をダウンロードまたは保存できません。カテゴリ名が複数ある場合は、それぞれの値をカンマで区切って入力します。	
		<div>① 注記</div> <div>ここで指定する値では、大文字と小文字が区別されます。</div>	
default.category.featured	'Featured'	現在、このプロパティの値は SAP BI アプリケーションで使用されていません。	
default.imageSize	'1048576 bytes'	モバイルデバイスの SAP BI アプリケーションで表示できる画像の最大サイズを指定します。	任意の数値
default.save.maxPages	20	モバイルデバイスのページごとに表示する検索結果の数を指定します。	任意の数値

5. (オプション) プロパティを追加するには [\[+ さらに追加...\]](#) を選択して、プロパティ詳細を入力します。
6. (オプション) 1 つまたは複数のプロパティを削除するには、削除するプロパティに対応するチェックボックスをオンにします。
7. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

11.3.10.2 SAP BusinessObjects Mobile のデフォルトのクライアント設定を変更する

1. CMC の [\[アプリケーション\]](#) エリアを表示します。
2. [\[SAP BusinessObjects Mobile アプリケーション\]](#) を選択して、このアプリケーション上で右クリックします。
3. [\[プロパティ > クライアント設定\]](#) を選択します。
4. [\[クライアント設定\]](#) で以下のプロパティに適切な値を設定します。

プロパティ	デフォルト値	説明	指定できる値
savePassword	'false'	接続の作成中に、クライアントアプリケーションにパスワードを保存することができます。このオプションを	true または false

プロパティ	デフォルト値	説明	指定できる値
		<p>選択すると、ユーザはアプリケーションにログオンするたびにパスワードを入力する必要はありません。</p> <p>クライアントアプリケーションでパスワード保存のオプションを有効化するには、値を 'true' に設定します。</p>	
offlineStorage	'false'	<p>モバイルデバイス上でドキュメントのローカルコピーを保存することができます。</p> <p>ドキュメントのローカルコピーを保存するには、値を 'true' に設定します。</p>	true または false
offlineStorage.ttl	'365'	サーバ上でドキュメントが期限切れになるまでの最大日数を指定します。	任意の数値
offlineStorage.appPwd	'true'	<p>接続の作成中に、アプリケーションのパスワードを入力することができます。</p> <p>クライアントアプリケーションでアプリケーションのパスワードのオプションを有効化するには、値を 'true' に設定します。</p>	true または false

5. (オプション) プロパティを追加するには [\[+ さらに追加...\]](#) を選択して、プロパティ詳細を入力します。
6. (オプション) 1つまたは複数のプロパティを削除するには、削除するプロパティに対応するチェックボックスをオンにします。
7. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

11.3.11 SAP BusinessObjects Mobile でのプッシュ通知サービスの管理

SAP BusinessObjects Mobile サーバでは、SAP BusinessObjects Mobile アプリケーションユーザの iOS デバイスに通知がプッシュされます。通知は以下のシナリオでプッシュされます。

- ユーザのデバイスにダウンロードされた BI ドキュメントの更新または新しいインスタンスがサーバ上で利用可能になった場合。
- 新しいドキュメントがユーザの BI 受信ボックスに届いた場合。

- BI プラットフォームまたは BOE 管理者がメッセージを配信した場合。

通知は、Mobile サーバから Apple Push Notification Server (APNS) を通してデバイスに自動的にプッシュされます。プッシュ通知を受信するために、ユーザがサーバに接続している必要はありません。システム上でアプリケーションが実行されていない場合でも、ユーザはプッシュ通知を受信することができます。アプリケーションで [通知設定] が有効になっている必要があります。プッシュ通知の設定の詳細については、Mobile サーバ 4.2 の Mobile サーバのデプロイメントおよび設定ガイドを参照してください。

① 注記

Mobile でプッシュ通知を有効にするには、BIMobileService が APS で実行されている必要があります。

BIMobileService はメモリを大量に消費しないため、APS で他のサービスとともに実行することができます。

11.3.12 プラットフォーム検索設定の管理

BI プラットフォームの CMC の [アプリケーション] エリアで、プラットフォーム検索アプリケーションのシステムレベルの設定を指定できます。

11.3.12.1 CMC でのアプリケーションプロパティの設定

プラットフォーム検索アプリケーションプロパティを設定するには、次の手順に従います。

1. CMC の [アプリケーション] エリアを表示します。
2. [プラットフォーム検索アプリケーション] を選択します。
3. **管理 > プロパティ** をクリックします。[プラットフォーム検索アプリケーションプロパティ] ダイアログボックスが表示されます。

The screenshot shows the 'Properties: Platform Search Application' dialog box. It has a left sidebar with 'Properties' selected. The main area contains the following sections:

- Indexing Status:** Running... Number of indexed documents: 113. Last indexed time stamp: 30/06/2015 01:39:49. Buttons: Stop Indexing, Start Indexing.
- Default Index Locale:** Select locale: English (dropdown).
- Crawling Frequency:** Radio buttons for Continuous crawling (selected) and Scheduled crawling.
- Index Location:**
 - Master Index Location (Indexes, Spellers): [dobj.enterprise.home]/data/PlatformSearch/Data
 - Persistent data location (Content Stores): [dobj.enterprise.home]/data/PlatformSearch/Data/workplace
 - Non-persistent data location (Temporary surrogate files, DeltaIndexes): [dobj.enterprise.home]/data/PlatformSearch/Data/workplace
- Scope of indexing:**
 - Level of indexing:** Radio buttons for Platform Metadata (selected), Platform and Document Metadata, and Full Content.
 - Content Types:** Checkboxes for Crystal Reports, Web Intelligence, Universe, BI Workspace, Microsoft Powerpoint, Adobe Acrobat, Rich-Text, Text, Microsoft Word, and Microsoft Excel (all are checked).

4. プラットフォーム検索の設定を、以下のとおりに行います。

オプション	説明
検索統計	<p>プラットフォーム検索は、以下の検索統計を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> インデックス処理のステータス: インデックス処理プロセスのステータスを示します。 インデックス済みドキュメント数: インデックス処理されたドキュメントの数を表示します。 前回インデックス処理タイムスタンプ: ドキュメントが最後にインデックス処理されたときのタイムスタンプを表示します。
インデックス処理の停止/開始	<p>[インデックス処理の開始] または [インデックス処理の停止] オプションにより、継続的クロールからスケジュール済みクロールへ切り替える場合、またはメンテナンス目的で、インデックス処理プロセスを開始または停止することができます。</p> <p>インデックス処理を停止するには、[インデックス処理の停止] をクリックします。</p>
デフォルトのインデックスロケール	<p>プラットフォーム検索では、CMC で指定したロケールを使用して、すべてのローカライズされていない BI ドキュメントをインデックス処理します。ドキュメントがローカライズされると、対応する言語のアナライザがインデックス処理に使用されます。</p> <p>検索はクライアントの製品ロケールに基づいて行われます。クライアントの製品ロケールには加重が適用されます。</p> <p>CMC の設定プロパティでこの加重を設定できます。</p>
クロール頻度	<p>以下のオプションを使用して、BI プラットフォームリポジトリ全体をインデックス処理することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 継続的クロール: このオプションを使用すると、インデックス処理は継続的に行われ、オブジェクトが追加、変更、または削除されるたびにリポジトリがインデックス処理されます。これにより、最新の BI プラットフォームコンテンツを表示または処理できます。デフォルトの設定で、リポジトリは、実行するアクションによって継続的クロールにより継続的に更新されます。継続的クロールは、ユーザの操作なしに動作し、ドキュメントのインデックス処理にかかる時間を短縮します。 スケジュール済みクロール: このオプションを使用すると、インデックス処理は、スケジュールオプションで設定されたスケジュールに基づきます。オブジェクトをスケジュールする方法については、<i>SAP BusinessObjects Business Intelligence</i> プラットフォーム CMC オンラインヘルプのプラットフォーム検索のオブジェクトのスケジュールの節を参照してください。

① 注記

- [\[スケジュール済みクロール\]](#) を選択し、[\[繰り返し\]](#) に [\[今すぐ\]](#) 以外のオプションを設定した場合は、ドキュメントの次のインデックス処理がスケジュールされると、プラットフォーム検索によって日時のタイムスタンプが表示されます。
- [\[スケジュール済みクロール\]](#) を選択した場合は、[\[インデックス処理の開始\]](#) ボタンが有効になり、[\[インデックス処理の停止\]](#) ボタンは無効になります。
- スケジュールの設定が完了すると、[\[インデックス処理の停止\]](#) ボタンは無効になります。

インデックスの場所

インデックスは、以下の場所にある共有フォルダに格納されます。

- マスタインデックスロケーション (インデックス、スペラ): この場所に保存されているマスタおよびスペラインデックスです。検索中、最初の検索結果はマスタインデックスを使用して取得され、スペラインデックスは提案を取得するために使用されます。クラスタ化された BI プラットフォームデプロイメントでは、この場所は、共有ファイルシステム上にあり、クラスタのすべてのノードからアクセスできる必要があります。
- 永続データロケーション (コンテンツストア): コンテンツストアはこの場所に配置されます。マスタインデックスロケーションから作成され、それとの同期が維持されます。コンテンツストアは、ファセットの生成と、マスタインデックスロケーションから生成された最初の検索結果を処理するために使用されます。クラスタ化された BI プラットフォームデプロイメントでは、コンテンツストアはすべてのノードで生成されます。

永続データロケーションは、コンテンツストアフォルダを含むため、クラスタ環境の影響を受ける唯一のインデックスの場所です。マシンの検索サービスが1つである場合、コンテンツストアの場所は1つだけになります。たとえば、

```
{bobj.enterprise.home}¥data¥PlatformSearchData¥workspace¥<ServerName>¥ContentStores になります。
```

ただし、クラスタ環境では、複数の検索サービスがある場合、コンテンツストアの場所は各検索サービスに対して1つになります。たとえば、実行中のサーバのインスタンスが2つある場合、コンテンツストアの場所は以下のようにになります。

1. {bobj.enterprise.home}¥data¥PlatformSearchData¥workspace¥<ServerName>¥ContentStores
2. {bobj.enterprise.home}¥data¥PlatformSearchData¥workspace¥<ServerName 1>¥ContentStores

- 非永続データロケーション (一時ファイル、デルタインデックス): この場所には、デルタインデックスが作成され、マスタインデックスと結合される前に一時的に格納されます。インデックスがマスタインデックスに結合されると、この場所から削除されます。また、代理ファイル (エクストラクタからの出力) がこの場所に作成され、デルタインデックスに変換されるまで一時的に格納されます。

① 注記

- マスタインデックスロケーションは、共有の場所にする必要があります。
- インデックスの場所を変更するには、[インデックス処理の停止] をクリックする必要があります。
- インデックスの場所を変更する場合は、新しい場所にコンテンツをコピーしないと、既存のインデックス情報が失われます。
- インデックスファイルには、ドキュメントコンテンツをインデックス化するように選択した場合には特に、個人情報や機密情報が保存される可能性があります。データの盗難を防ぐために、共有フォルダへのアクセスをシステムユーザにのみ許可し、共有フォルダを暗号化された環境に保存してください。

インデックス処理のレベル インデックス処理のレベルを以下のように設定することにより、検索内容を調整することができます。

- プラットフォームメタデータ: タイトル、キーワード、ドキュメントの説明などのプラットフォームメタデータ情報に対してのみ、インデックスが作成されます。デフォルトでは、このオプションはオンです。
- プラットフォームおよびドキュメントのメタデータ: このインデックスには、プラットフォームメタデータとドキュメントメタデータが含まれます。ドキュメントのメタデータには、作成日、変更日、作成者名が含まれます。
- フルコンテンツ: このインデックスには、プラットフォームメタデータ、ドキュメントメタデータ、および以下のようなその他のコンテンツが含まれます。
 - ドキュメントの実際のコンテンツ
 - プロンプトと LOV のコンテンツ
 - チャート、グラフ、ラベル

① 注記

Analysis Office ドキュメントおよび Lumira ドキュメントでは、フルコンテンツのインデックス処理はサポートされていません。Analysis Office ドキュメントおよび Lumira ドキュメントでは、メタデータのインデックス処理のみがサポートされています。

① 注記

インデックス処理のレベルを変更すると、BI プラットフォームリポジトリ全体に対してインデックス処理が再度初期化されます。

オプション	説明
コンテンツタイプ	<p>インデックス化の目的で次のコンテンツタイプを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> Crystal レポート Web Intelligence ユニバース BI ワークスペース Analysis Office Lumira Microsoft PowerPoint Adobe Acrobat リッチテキスト形式 テキスト Microsoft Word Microsoft Excel <p>プラットフォームメタデータのインデックス処理では、コンテンツタイプフィルタは適用されません。プラットフォームメタデータのインデックス処理は、選択したコンテンツタイプに関係なく、すべてのサポートされるオブジェクトタイプに対して実行され、BI ラウンチパッドの検索結果にプラットフォームメタデータに関連するキーワードのすべてのオブジェクトが返されます。</p> <p>コンテンツタイプフィルタは、ドキュメントメタデータのインデックス処理(ドキュメント作成者、ドキュメントヘッダ、ドキュメントフッタなど)およびコンテンツのインデックス処理(レポートのグラフ、チャート、テーブル)に適しています。ドキュメントメタデータおよびコンテンツに関連するキーワードを検索すると、プラットフォーム検索は、選択されたインデックス処理のレベルとコンテンツタイプに基づいて、リポジトリの選択されたオブジェクトタイプのドキュメントメタデータとコンテンツをインデックス処理します。処理されたオブジェクトだけが BI ラウンチパッドの検索結果に表示されます。</p>
インデックスの再構築	<p>このオプションを使用して、既存のインデックスを削除し、リポジトリ全体を再インデックス処理することができます。</p> <p>インデックス処理が実行中か停止中かに関係なく、[インデックスの再構築] オプションを選択できます。既存のインデックスは、[プロパティ] ページへの変更を保存すると、削除されます。ただし、インデックス処理が現在停止されている場合、インデックス処理を再開するまでインデックスの再構築は開始されません。</p> <p>プラットフォーム検索でドキュメントの再インデックス処理を行わない場合は、[インデックスの再構築] オプションを選択解除してから、[インデックス処理の開始] をクリックします。</p>

インデックス処理から除外するドキュメント

[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] オプションは、ドキュメントをインデックス処理から除外します。たとえば、レポートアプリケーションサーバのリソースに過負荷がかからないように、サイズが非常に大きい Crystal レポートを検索対象から外す必要がある場合があります。または、大量のパーソナライズされたレポートのあるパブリケーションのインデックス処理をしない場合です。

特定のドキュメントを除外することで、プラットフォーム検索でそのドキュメントがアクセスされないように指定できます。このグループに分類される前にドキュメントがインデックス処理されると、そのドキュメントは検索できるので注意してください。[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] グループに属するドキュメントが検索されないようにするには、インデックスを再構築する必要があります。

デフォルトでは、[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] オプションのフルコントロールを持つのは管理者アカウントのみです。次の権限を持つその他のユーザは、[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] グループに対するドキュメントの追加のみを実行できます。

- カテゴリの表示権限および編集権限
- ドキュメントの直接編集

その他の設定 - インスタンスのスキップ

デフォルトでは、ドキュメントのインスタンスが取得されてインデックス処理が行われます。これによって、インデックスサイズが増大し、ディスク容量の消費が増えます。リポジトリ内の膨大な数のインスタンスのインデックス処理のため、PlatformSearchData フォルダ内の "Lucene Index Engine" フォルダのサイズが非常に大きくなります。数百万の (またはそれ以上の) ドキュメントがあり、これらのドキュメントの多くが、システム内にも膨大な数の既存インスタンスを (定期的に生成するスケジュールされたインスタンスとともに) 持つ場合、インデックス処理レベルが "プラットフォームメタデータ" に設定されていたとしても、"Lucene Index Engine" フォルダのサイズは過度に大きくなります。

プラットフォーム検索インスタンスのスキップ機能では、インスタンスのインデックス処理を CMC のプラットフォーム検索アプリケーションプロパティページにある 'その他の設定 - インスタンスのスキップ' チェックボックスで有効化または無効化することによって制御することができます。

① 注記

- インスタンスのスキップを有効/無効にすると、プラットフォーム検索 Adaptive Processing Server を再開する必要があります。この変更はすべてのインデックス処理レベルに影響します。
- インスタンスのスキップを変更し、この変更をすべての既存のインスタンスに適用する場合 (すなわち、取得してインデックス処理を行う)、インデックスを再構築する必要があります。

インデックス処理から除外するオブジェクト [インデックス処理から除外するオブジェクト] オプションは、オブジェクトをインデックス処理から除外します。たとえば、レポートアプリケーションサーバのリソースに過負荷がかからないように、特定のオブジェクトを検索対象から外す必要がある場合です。

特定のオブジェクトを除外することで、プラットフォーム検索でそのドキュメントがアクセスされないように指定できます。このグループに分類される前にオブジェクトがインデックス処理されると、そのオブジェクトは検索可能になるので注意してください。[インデックス処理から除外するオブジェクト] グループに属するドキュメントが検索されないようにするには、インデックスを再構築する必要があります。

インデックスから除外できるオブジェクトの一覧:

- CrystalReport
- Webi
- LCMJob
- Universe
- Excel
- PDF
- PowerPoint
- Rtf
- Txt
- Word
- AFDashboardPage
- ObjectPackage
- QaaWS
- プロファイル
- イベント
- ディスカッション
- InformationDesigner
- MDAnalysis
- パブリケーション
- Agnostic
- Analytics
- Hyperlink
- プログラム
- pQuery
- DSL.MetadataFile
- Shortcut
- DataDiscoveryAlbum
- AO.Workbook
- VISI.Story
- VISI.Dataset

オプション	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • VISI.Lums • VISILums • ユーザ • UserGroup

5. [保存して閉じる] をクリックします。

① 注記

[インデックスの再構築] オプションを選択せず、インデックス処理のレベルを変更するか、エクストラクタを選択もしくは選択解除した場合は、既存のインデックスは削除されずにインデックスは増分更新されます。

11.3.12.2 インデックス処理失敗一覧

インデックス処理失敗一覧では、インデックス処理できなかったドキュメントの一覧が表示されます。プラットフォーム検索では、ドキュメントのインデックス処理を 3 回試行します。ドキュメントのインデックス処理に失敗した場合は、そのドキュメントはインデックス処理失敗一覧に表示されます。

インデックス処理失敗一覧を表示するには、次の手順に従います。

1. CMC の[アプリケーション]エリアを表示します。
2. [プラットフォーム検索アプリケーション] を選択します。
3. ▶ **アクション ▶ インデックス処理失敗一覧** ▶ をクリックします。
[プラットフォーム検索アプリケーション] ダイアログボックスが表示され、以下の詳細とともにドキュメントの一覧が表示されます。
 - タイトル: インデックス処理に失敗したドキュメントのタイトルを表示します。
 - タイプ: Crystal Report や Web Intelligence などのドキュメントタイプの名前と、ドキュメントの場所を表示します。
 - エラータイプ: エラーコードとドキュメントのインデックス処理に失敗した理由を表示します。エラーの原因のスタックトレースについて詳細を確認するには、詳細ハイパーリンクをクリックします。
 - 最終指定時刻: ドキュメントのインデックス処理を最後に試行した時点のタイムスタンプを表示します。

11.3.13 BEx Web 統合の設定

BEx Web アプリケーションは、データ分析、レポートティング、および Web 上の分析アプリケーションのための SAP Business Warehouse (BW) の Business Explorer (BEx) に含まれている Web ベースのアプリケーションです。

Business Explorer は、SAP NetWeaver Business Intelligence Suite の一部で、戦略的分析および意思決定をサポートする柔軟性の高いレポートティングおよび分析ツールを提供します。これらのツールには、クエリ、レポートティング、および分析の機能が含まれます。アクセス権を持つ従業員は、Web 上および Microsoft Excel にある履歴データまたは現在のデータを、さまざまな詳細レベルそしてさまざまな角度から評価することができます。

ユーザは、SAP NetWeaver Portal、または SAP BI プラットフォームの BI ラウンチパッドからデータにアクセスします。BEx Web アプリケーションの作成者は、BEx Web Application Designer から直接 BI 起動パッドで Web アプリケーションを実行することができます。

BEx Web アプリケーションを BI プラットフォームに統合するには、以下の設定手順に従います。

1. セントラル管理コンソール (CMC) で BEx Web アプリケーションのサーバを設定する。

BEx Web アプリケーションには、一般サーバまたはスタンドアロンサーバのどちらでも使用できます。

→ ヒント

一般サーバは他の多数のサービスによって使用されるため、BEx Web アプリケーション用のスタンドアロンサーバをセットアップすることをお勧めします。

2. サーバを設定する。
3. BW システムへの接続を確認する。
4. 作成者が BEx Web Application Designer から直接 BI 起動パッドで BEx Web アプリケーションを実行できるようにするには、BW システムの [\[接続済みポータル\]](#) テーブル (**RSPOR_T_PORTAL**) で関連の設定を行います。

BI プラットフォームサーバの設定後、ユーザは BI 起動パッドで BEx Web アプリケーションを開くことができます。ここでデータをナビゲートして、BEx Web アプリケーションをブックマークとして Web ブラウザのお気に入り保存することができます。

⚠ 制限

統合は次の SAP NetWeaver リリースでサポートされています。

SAP NetWeaver 7.0 拡張パッケージ 1 サポートパッケージスタック 8

SAP NetWeaver 7.3 サポートパッケージスタック 1

SAP NetWeaver Java スタックは、この統合では必要ないため、以下の制約が適用されます。

インフォメーションブロードキャストはサポートされていません。

SAP NetWeaver のポータルおよびナレッジマネジメントが必要ないため、BEx Web アプリケーションでは、ドキュメント統合およびポータルモチーフの使用はサポートされていません。

Web 項目の [\[レポート\]](#) はサポートされていません。書式付きレポートには、SAP Crystal Reports を使用することをお勧めします。

BEx Web アプリケーションの印刷バージョンを作成するには、SAP Business Explorer のエクスポートライブラリを使用します。Adobe ドキュメントサービス (ADS) は使用できません。

BI プラットフォームに統合されている BEx Web アプリケーションには、BW マスタシステムに保存されているデータソースのみを格納することができます。システム管理においては、BI プラットフォームで BW マスタシステムとして設定されているシステムを定義します。

BI プラットフォームおよび SAP NetWeaver BW システム間のシングルサインオンは有効化されていません。BEx Web アプリケーションユーザは、各 BI プラットフォームセッションで、対応する BW マスタシステムへのログオンを要求されます。

BEx Web アプリケーションとのレポート間インタフェースはサポートされていません。対応するコマンドは実行されません。

BEx クエリまたはクエリビューを基にしたダッシュボード、および SAP BusinessObjects Dashboards で作成されたダッシュボードはサポートされません。

BEx Web アプリケーションの機能の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で次を参照してください。▶ *SAP NetWeaver 7.3* ▶ *SAP NetWeaver Library: Function-Oriented View* ▶ *Business Warehouse* ▶ *SAP Business Explorer* ▶ *BEx Web* ▶ *Analysis & Reporting: BEx Web Applications* ▶。

BI 起動パッドでの BEx Web アプリケーションへのアクセスおよび保存の詳細については、BI 起動パッドユーザガイド (<http://help.sap.com>) を参照してください。

関連情報

[BEx Web アプリケーション用のサーバの開始 \[216 ページ\]](#)

[BEx Web アプリケーション用のスタンドアロンサーバの開始 \[216 ページ\]](#)

[サーバの設定 \[217 ページ\]](#)

[BW システムへの接続の確認 \[217 ページ\]](#)

[BEx Web Application Designer と BI プラットフォーム間の接続の設定 \[218 ページ\]](#)

11.3.13.1 BEx Web アプリケーション用のサーバの開始

このタスクを実行する前に、Adaptive Processing Server を停止状態にしておく必要があります。

1. セントラル管理コンソール (CMC) にログインします。
2. [サーバ] を選択します。
3. [サービスカテゴリ] ノードを展開し、[Analysis サービス] を選択します。
4. [Adaptive Processing Server] を選択し、コンテキストメニューから [サービスの選択] を選択します。
5. [BEx Web アプリケーションサービス] を [利用可能なサービス] リストから、右側の [サービス] リストに移動します。
6. Adaptive Processing Server を再起動することにより、BEx Web アプリケーションサービスを再起動します。

11.3.13.2 BEx Web アプリケーション用のスタンドアロンサーバの開始

1. セントラル管理コンソール (CMC) にログインします。
2. [サーバ] を選択します。
3. [サービスカテゴリ] ノードを展開し、[Analysis サービス] を選択します。
4. [Adaptive Processing Server] を選択し、コンテキストメニューから [クローンサーバ] を選択します。
5. サーバの名前 (**AdaptiveProcessingServer** など) を入力して、[ノードに複製] ボックスで必要なノードを選択します。
6. クローンサーバを選択して、コンテキストメニューから [サービスの選択] を選択します。
7. [利用可能なサービス] リストで、[BEx Web アプリケーションサービス] を選択して、右側の [サービス] リストに移動します。

8. 新しい Adaptive Processing Server を起動することにより、BEx Web アプリケーションサービスを起動します。

11.3.13.3 サーバの設定

1. セントラル管理コンソール (CMC) にログオンします。
2. [サーバ] を選択します。
3. [サービスカテゴリ] ノードを展開し、[Analysis サービス] を選択します。
4. BEx Web アプリケーションサービスをホストするサーバを選択して、コンテキストメニューで [プロパティ] を選択します。
5. [BEx Web アプリケーションサービス] 領域の [BEx Web アプリケーションサービスの設定] の下で、次の設定を行います。
 - a. クライアントセッションの最大数を確認し、必要に応じて変更します。
 - b. [SAP BW マスタシステム] で、BI プラットフォームで作成した BW システムへの OLAP 接続名を入力します。デフォルト名は [SAP_BW] です。
 - c. BW システムの [RFC 接続の設定] (トランザクションコード **sm59**) で入力した [JCo サーバ RFC 宛先] の名前を入力します。
 - d. BW システムの [RFC 接続の設定] (トランザクションコード **sm59**) で定義した [JCo サーバゲートウェイホスト] の名前を入力します。
 - e. BW システムの [RFC 接続の設定] (トランザクションコード **sm59**) で定義した [JCo サーバゲートウェイサービス] の名前を入力します。
 - f. [JCo サーバ接続数] を確認し、必要に応じて変更します。
6. [保存して閉じる] を選択します。
7. BEx Web アプリケーションサービスをホストするサーバを選択して、コンテキストメニューで [サーバの再起動] を選択します。

選択した設定を適用するには、サーバを再起動する必要があります。

① 注記

サーバを再起動する前に、ABAP システムに RFC 宛先を作成しておく必要があります。

関連情報

[ABAP システムでの RFC 宛先の作成 \[219 ページ\]](#)

11.3.13.4 BW システムへの接続の確認

1. セントラル管理コンソール(CMC)にログオンします。
2. [OLAP 接続] を選択します。

3. BW システムへの接続が確立されているかどうかを確認します。確立されていない場合、[新しい接続] ボタンをクリックして接続を設定します。接続のデフォルト名は「**SAP_BW**」です。別の名前を入力することもできます。
4. [認証] で [事前定義済み] を選択していること、およびユーザとパスワードに必要な入力を行っていることを確認します。

① 注記

このユーザアカウントは JCo サーバ RFC 宛先に必要です。このアカウントにより、BEx Web Application Designer、BW システム、および BI プラットフォームの統合が許可されます。

→ ヒント

接続をセキュリティ保護するには、管理者のみがこの接続に対するアクセス権を持つようにします。

1. これを行うには、BW システム (デフォルト名は **SAP_BW**) への接続を右クリックし、コンテキストメニューで [ユーザセキュリティ] を選択します。
2. 必要なセキュリティ設定を行い、可能な場合はアクセス権を管理者のみに付与します。

11.3.13.5 BEx Web Application Designer と BI プラットフォーム間の接続の設定

作成者が BEx Web Application Designer から直接 BI 起動パッドで BEx Web アプリケーションを実行できるようにするには、BW システムの [接続済みポータル] テーブル (**RSPOR_T_PORTAL**) で関連の設定を行う必要があります。

1. BW システムで、トランザクション **SM30** を呼び出します ([テーブルビューのメンテナンス])。
2. [テーブル/ビュー] で、「**RSPOR_T_PORTAL**」と入力します。
3. [更新] を選択します。
4. 新しいエントリを作成するには、[新規エントリ] を選択します。
5. 次の設定を行います。
 - a. BW システムと BI プラットフォームとを統合するには、トランザクション **SM59** で RFC 宛先を作成する必要があります。[出力先] の下にこの RFC 宛先を入力します。
 - b. [標準ポータル] を選択します。これにより、Web Application Designer では Web アプリケーションが常に BI プラットフォームで呼び出されるようになります。
 - c. [URL プレフィックス] で、BI プラットフォーム Web Application Container Server (WACS) への URL を入力します。URL にはプロトコル、ホスト名、およびポートを含め、たとえば「**http://<wacs><domain>:<port>**」のように入力します。
 - d. [プラットフォーム] で、[BOE] を選択します。
 - e. SAP Business Explorer 用のエクスポートライブラリを有効化する場合は、[SAP エクスポートライブラリ (PDF) を使用] を選択し、PDF ファイル、PostScript ファイル、および PCL ファイルを BEx Web アプリケーションからエクスポートできるようにします。
6. 入力内容を保存します。

関連情報

[ABAP システムでの RFC 宛先の作成 \[219 ページ\]](#)

11.3.13.5.1 ABAP システムでの RFC 宛先の作成

BW システムと BI プラットフォームとを統合するには、RFC 宛先が必要です。この RFC 宛先により、BW システムと BI プラットフォームが相互通信できるようになります。

1. [\[RFC 接続の設定\]](#) (トランザクションコード **SM59**) を呼び出します。
2. [\[作成\]](#) を選択します。
3. RFC 宛先を更新します。
 - a. RFC 宛先の名前を入力します。
 - b. 接続の種類として [\[T \(TCP/IP 接続用\)\]](#) を選択します。
 - c. 説明を入力します。

RFC 宛先言語の記述は、独立して更新できます。
 - d. [\[技術設定\]](#) で、有効化の種類として [\[登録サーバプログラム\]](#) を選択します。
 - e. [\[技術設定\]](#) に、プログラム ID を入力します。

このプログラム ID は、BI プラットフォームサーバでこの BW システム用の宛先を作成したときに指定したプログラム ID (JCo サーバ RFC 宛先) と同じである必要があります。
 - f. [\[技術設定\]](#) の [\[ゲートウェイオプション\]](#) の下に、BI プラットフォームサーバが BW システムとの通信に使用するゲートウェイホストおよびゲートウェイサービスを入力します。
4. [\[ログオン & セキュリティ\]](#) タブページで、[\[SAP ログオンチケットの送信\]](#) オプションを有効化します。
5. 入力内容を保存します。

関連情報

[サーバの設定 \[217 ページ\]](#)

11.3.14 SAP HANA シングルサインオンの設定

BI プラットフォームの CMC の [\[アプリケーション\]](#) エリアで、SAP HANA データベース接続のシングルサインオン (SSO) を設定できます。SSO は SAML (Security Assertion Markup Language) を使用して実装されます。

BI プラットフォームセッションが確立されると、パスワードを入力せずに SAP HANA にログインして使用できる SAML チケットが生成可能になります。

SAP HANA データソースへの接続における基本ワークフローは次のようになります。

1. 管理者が CMC で SAP HANA と BI プラットフォーム間の信頼を設定します。
2. ユーザがサポートされる認証プロバイダのいずれかを使用して BI プラットフォームにログインします。

3. SAP HANA と BI プラットフォームのユーザ ID が一致する場合、SAP HANA が現在のユーザの接続確立に受け入れ可能な SAML アサーションを BI プラットフォームが生成できるようになります。SAP HANA に渡されるユーザ ID は、ログインしているユーザの BI プラットフォームユーザ ID です。
4. BI プラットフォームクライアントアプリケーションにより SAP HANA 接続が作成されます。

① 注記

SAP HANA シングルサインオンを SAML で設定する前に、SAP HANA マシンで SSL を設定する必要があります。詳細については、SAP HANA ドキュメントを参照してください。

11.3.14.1 SAP HANA 接続を作成する

1. 関連する SAP HANA データベースパラメータを取得します。
 - a. SAP HANA Studio アプリケーションを開きます。
 - b. システムのプロパティページを開き、データベース接続の URL を検索します。
 - c. ホストマシン名、ポート番号、インスタンス番号、テナントデータベース名を記録します。
手順 2 でこの情報が必要になります。
2. BI プラットフォームで SAP HANA 接続を設定します。
 - a. CMC の [アプリケーション] エリアに移動し、[HANA 認証] をダブルクリックします。
 - b. [HANA] 認証ダイアログボックスで、[接続を作成します] ボタンをクリックします。
[HANA 認証接続の作成] ダイアログボックスが開きます。
 - c. 接続の種類を選択します。

① 注記

JDBC 接続の場合は [SAP HANA]、HTTP 接続の場合は [SAP HANA http] を選択する必要があります。

- d. 手順 1 で記録したポート番号、ホストマシン名、インスタンス番号、テナントデータベース名を入力します。
- e. [プロバイダ ID の一意の ID] フィールドで、BI プラットフォームデプロイメントで使用する値を指定します。
- f. サービスプロバイダ名を入力します。

① 注記





HANA でサービスプロバイダ名の設定を確認するには、indexserver.ini → Authentication → saml_service_provider_name に移動します。また、以下に示すコードを入力して、HANA でその値を変更することもできます。ALTER SYSTEM ALTER CONFIGURATION ('indexserver.ini', 'SYSTEM') SET ('authentication', 'saml_service_provider_name') = 'DEV00' WITH RECONFIGURE;。このコードで、DEV00 はサービスプロバイダの名前であり、任意の名前を入力できます。サービスプロバイダの名前を付ける際のベストプラクティスは、システム ID (DEV) とインスタンス番号 (00) を結合することです。

- g. [セキュア接続] を選択します。

① 注記

[[セキュア接続](#)] を選択して、セキュリティで保護された JDBC または HTTPS 接続を確立する必要があります。

- HTTPS 接続を確立するには、[[接続の種類](#)] として [[SAP HANA http](#)] を選択し、[[セキュア接続](#)] を選択する必要があります。
- セキュリティで保護された JDBC 接続を確立するには、[[接続の種類](#)] として [[SAP HANA](#)] を選択し、[[セキュア接続](#)] を選択する必要があります。

- h. [[生成](#)] をクリックします。
[[ID プロバイダの Base64 証明書](#)] ボックスに証明書が作成されます。
3. SAP HANA デプロイメントを設定します。
 - a. HANA システムにログインします。
 - b. [[SSL およびトラスト設定](#)] を展開し、[[PSE 管理](#)] を選択します。
 - c. [[PSE 管理](#)] に対して、PSE ファイルをドロップダウンから選択します。
 - d. [[証明書のインポート](#)] を選択します。
 - e. BI プラットフォームで以前のステップで生成された証明書をペーストします。
 - f. [[インポート](#)] を選択します。
 - g. SAP HANA Studio を起動します。
 - h. [[システム](#)] ビューで、SAP HANA システムを展開します。[SAP HANA One 管理ガイド](#)を参照してください。
 - i. Security フォルダから  (セキュリティエディタ) を開きます。
 - j.  (証明書ファイルの SAML アイデンティティプロバイダをインポート) を選択します。
 - k. [[SAML アイデンティティプロバイダ](#)] 一覧から自分のアイデンティティプロバイダを選択します。
 - l.  (デプロイ) を選択します。
 - m. [[システム](#)] ビューで、HANA ユーザにナビゲートします。
 - n. [エディタ] 領域で HANA ユーザを開きます。
 - o. [[ユーザ](#)] タブで、認証として [[SAML](#)] を選択し、[[設定](#)] を選択します。
 - p. [[外部 SAML ID の設定](#)] ウィザードで、[[追加](#)] を選択します。
 - q. アイデンティティプロバイダを選択します。
 - r. [OK] を選択します。
 - s. アイデンティティプロバイダを選択し、これに対して HANA ユーザにマッピングされた BI プラットフォームユーザ名を入力します。
 - t. [OK] を選択します。
 - u.  (デプロイ) を選択します。
 - v. SAP HANA システムを再起動します。
 1. SAP HANA システムのコンテキストメニューを開きます。
 2. [[設定および監視](#)] を選択します。
 3. [[システムの再起動](#)] を選択します。
 4. SAP HANA 設定をテストします。
 - a. CMC の [[アプリケーション](#)] エリアに移動し、[[HANA 認証](#)] をダブルクリックします。
 - b. [HANA 認証](#) ダイアログボックスで、手順 2 で作成した接続を開きます。
[[HANA 認証接続の編集](#)] ダイアログボックスが開きます。
 - c. [[このユーザの接続テスト](#)] の下にユーザ名を入力し、[[接続テスト](#)] ボタンをクリックして接続設定が有効になっていることを確認します。

たとえば、ユーザ名「**Administrator**」を入力します。設定が正しくない場合、エラーメッセージが表示されます。以下のトラブルシューティング手順を実行できます。

- trust.pem ファイルにある他の証明書に、同じ CN プロパティ値のサブジェクトまたは発行者が含まれていないことを確認します。証明書のコンポーネントを表示するには、インターネットで「x509 証明書デコーダ」を入力して証明書デコーダを検索します。
- HANA 側の設定を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
select * from "SAML_PROVIDERS"
select user_name, is_saml_enabled from users where user_name =
'<UserName>'
select * from "PUBLIC"."SAML_USER_MAPPINGS"
```

- SAP HANA への SSO の設定中に SAML 認証エラーが表示された場合は、次の手順を実行します。
 1. indexserver.ini ファイルで、sslCreateSelfSignedCertificate パラメータを **false** に設定します。
 2. 同じファイルで、sslKeyStore パラメータおよび sslTrustStore パラメータで絶対パスを使用するように設定します。
 3. key.pem ファイルおよび trust.pem ファイルを再生成します。

.ssl ディレクトリに key.pem ファイルが存在しない場合、SAP HANA は SSL を使用する設定になっていません。

11.3.14.2 SAP HANA HTTPS 接続の設定

SAP HANA HTTPS を設定するときには、HANA サーバおよび HANA サーバ CA 証明書をトラストストアまたは任意の場所に追加します。

① 注記

SAP HANA サーバ証明書をトラストストアや異なる場所に追加する前に、SAP HANA システムからエクスポートする必要があります。

トラストストアへの証明書の追加

1. <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%sapjvm%jre%lib%security に移動します。
2. 次のコマンドを実行します。..
%bin%keytool -importcert -file "<absolute path of the certificate>" -alias CertificateAliasName -keystore cacerts -storepass changeit.
3. HANA サーバおよび HANA サーバ CA 証明書がトラストストアに格納されます。

① 注記

キーストアファイルがデフォルトの場所 <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%sapjvm%jre%lib%security にある場合、キーストアファイルに対する変更内容は、Business Intelligence プラットフォームサポートパッケージ 4 からサポートパッケージ 5 にアップグレードした後に失われます。このため、証明書を別の場所に追加することをお奨めします。

別の場所への証明書の追加

1. <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%sapjvm%jre%bin に移動します。
2. 次のコマンドを実行します。keytool -importcert -file
"C:%certificate%HANASERVERCertificate " -alias CertificateAliasName -keystore
C:%certificate%cacerts -storepass changeit。

① 注記

上記で定義した場所は単なる例です。任意の場所を追加することができます。

3. APS サーバがファイルの場所を識別できるように、次のコマンドを実行します。

```
-Djavax.net.ssl.trustStore= cacerts_PATH  
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword= Password
```

① 注記

cacerts_PATH および Password は、キーストアパスおよび証明書パスワードの単なる例です。任意のパスおよびパスワードを追加することができます。

11.3.14.3 SAP HANA 接続設定

SAP HANA 接続を設定するために CMC で使用できる設定について、以下の表にまとめます。

設定	説明
HANA ホスト名	SAP HANA ホストの名前を指定します。
HANA ポート	SAP HANA ホストのポート番号を指定します。
プロバイダ ID の一意の ID	指定された HANA インストール内の一意の名前です。HANA インストールは、このログオン ID プロバイダ名から、正しく署名されたチケットを許可します。
ID プロバイダの Base64 証明書	[生成] をクリックすると、[ID プロバイダの Base64 証明書] フィールドに証明書が作成されます。この証明書を SAP HANA デプロイメントの trust.pem ファイルにコピーします。この証明書は、SAP HANA と BI プラットフォーム間の信頼関係を確立します。外部 ID プロバイダ自体は、X509 証明書で識別されます。この証明書は、すべての ID アサーションの署名に使用されます。証明書は Base64 でエンコードする必要があります。
HANA インスタンス番号	SAP HANA データベースのインスタンス番号を指定します。
HANA テナントデータベース	SAP HANA テナントデータベースの名前を指定します。

11.3.15 SAP Lumira の設定の管理

CMC の "アプリケーション" 領域から、各ユーザまたはユーザグループに対して SAP Lumira のデータ取得およびコンテンツ共有機能に関連するアクセス権を管理することができます。

SAP Lumira のアクセス権を管理するには、以下の手順に従います。

1. CMC ホームページで、▶ [アプリケーション](#) ▶ [SAP Lumira](#) ▶ [ユーザセキュリティ](#) ▶ を選択します。
2. アクセス権を設定するユーザまたはグループを選択します。
3. [セキュリティの割り当て](#)を選択します。
4. [詳細](#)を選択します。
5. [権限の追加/削除](#)を選択します。
6. SAP Lumira に対してユーザに必要な権限を定義します。
7. [適用](#)をクリックします。

11.3.16 コラボレーション設定の管理

11.3.16.1 コラボレーションアプリケーション統合の管理

このガイドは、BI プラットフォームと SAP Jam コラボレーションアプリケーションを統合する BI プラットフォーム管理者を対象としています。

BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) の [アプリケーション](#) 領域を使用して、コラボレーションを有効化して設定できます

コラボレーションアプリケーションのエンタープライズエージェントで、次の追加の設定をする必要があります。

- サービスプロバイダとの HTTPS 接続を確立する
- 認証用の前提条件を満たす

SAP Jam を設定すると、コラボレーションアプリケーションのフィードが BI ラウンチパッドで使用できるようになります。

SAP Jam では、Microsoft Internet Explorer 11 はサポートされていません。

11.3.16.1.1 コラボレーションの前提条件

BI プラットフォームとコラボレーションアプリケーションを統合するには、コラボレーションの前提条件を満たしている必要があります。

- BI プラットフォームに少なくとも 1 つの Central Management Server (CMS) をインストールする必要があります。
- セントラル管理コンソール (CMC) で、コラボレーションアプリケーション (SAP Jam) を設定する必要があります。
- コラボレーションアプリケーション (SAP Jam) のエンタープライズ組織を定義する必要があります。
- SAP Jam のユーザは、エンタープライズ組織に所属する必要があります。

- オンプレミス LDAP/AD ディレクトリサービスを使用するユーザをプロビジョニングするために、SAP Jam エンタープライズエージェントが必要です。

11.3.16.1.2 BI プラットフォーム設定

11.3.16.1.2.1 コラボレーション設定オプション

コラボレーションオプションは、BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) の [\[プロパティ: コラボレーション\]](#) ダイアログボックスに表示されます。

[プロパティ: コラボレーション](#) ダイアログボックスにアクセスするには、CMC の [アプリケーション](#) タブで [コラボレーション](#) をクリックして、[管理 > プロパティ](#) を選択します。

オプション	説明
コラボレーションを有効にする	このチェックボックスを選択し、 [SAP Jam] を選択します。
接続 URL	コラボレーションアプリケーションへの URL を入力します。
プロバイダ ID の一意の ID	BI プラットフォームデプロイメントのための一意の値を入力します。 この値は、コラボレーションアプリケーションの管理コンソールで統合を設定するために使用される証明書に関連付ける必要があります。シングルサインオンの ID をアサートするアプリケーションは、管理 OAuth アプリケーションとして設定する必要があります。
ID プロバイダの Base64 証明書	生成 をクリックすると、このボックスに証明書が作成されます。この証明書をコラボレーションアプリケーションの管理コンソールで使用して、OAuth コンシューマキーを生成します。 この証明書によって、コラボレーションアプリケーションと BI プラットフォームとの信頼関係を確立します。外部 ID プロバイダ自体は、X509 証明書で識別されます。この証明書は、すべての ID アサーションの署名に使用されます。証明書は Base64 でエンコードする必要があります。
OAuth コンシューマキー	コラボレーションアプリケーションの管理コンソールから生成された OAuth コンシューマキーを入力します。
プロキシを使用した接続	このチェックボックスを選択してプロキシ経由での接続を有効にし、 HTTP プロキシホスト ボックスおよび ポート ボックスにプロキシホストに関する情報を入力します。 コラボレーションアプリケーションのサーバから会社のネットワークへのインバウンド接続を許可するには、DMZ 内にリバースプロキシを設定する必要があります。 SSL 証明書プロバイダの信頼できる証明書をリバースプロキシに追加するには、リバースプロキシのドメイン名またはサブドメイン名を設定する必要があります。

オプション	説明
HTTP プロキシホスト	<p>リバースプロキシ設定で、コラボレーションアプリケーションにアクセスできる外部アドレスを入力します。たとえば、<code>https://<ReverseProxy>/</code> を使用します。ここでの <code><ReverseProxy></code> は、リバースプロキシのドメイン名またはサブドメイン名です。</p> <p>コラボレーションアプリケーションはこのアドレスを使用して、BI プラットフォームに情報を送信します。リバースプロキシはこのアドレスを使用して、コラボレーションアプリケーションから取得した情報を、コラボレーションアプリケーションのエンタープライズエージェントを含むマシンにリダイレクトします。</p>
ポート	<p>コラボレーションアプリケーションのエンタープライズエージェントは、ポート 8443 から受信するように設定します。</p>

11.3.16.1.2.2 CMC でのコラボレーションの有効化と設定

このタスクでは、コラボレーションアプリケーション (SAP Jam) の管理コンソールへの有効な接続が必要です。コンソールのセキュリティ詳細情報を渡したり取得したりする必要があります。

セキュリティ上の理由から、以下のデフォルトアカウントは、SAP Jam へのコンテンツの送信やスケジュールを行うことはできません。

- Guest
- SMAdmin
- Administrator
- WaaWServletPrincipal

1. BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) で、[アプリケーション] エリアに移動し、[コラボレーション] をダブルクリックします。
2. In the *Properties*: [プロパティ: コラボレーション] ダイアログボックスで、[コラボレーションを有効にする] チェックボックスを選択し、[SAP Jam] を選択します。
3. 接続 URL ボックスに、コラボレーションアプリケーションの URL を入力します。
4. プロバイダ ID の一意の ID ボックスに、BI プラットフォームデプロイメントに対して一意である ID プロバイダ値を入力します。
ID プロバイダ値を書き留めます。後でコラボレーションアプリケーションの設定に使用します。
5. [生成] (または、以前に証明書を作成したことがある場合は [再生成]) をクリックします。
ID プロバイダの Base64 証明書ボックスに証明書が表示されます。コラボレーションアプリケーションの設定に証明書を使用します。
6. OAuth コンシューマキーボックスに、有効な OAuth コンシューマキーを入力します。
7. プロキシを経由して SAP Jam を実行しているサーバに接続している場合は、以下のアクションを実行します。
 - a. [プロキシを使用した接続] チェックボックスを選択します。
 - b. HTTP プロキシホストボックスに、サーバのプロキシホスト名を入力します。
 - c. ポートボックスに、サーバのポート番号を入力します。

8. [保存して閉じる](#)をクリックします。

11.3.16.1.3 SAP Jam 設定

11.3.16.1.3.1 SAP に対する新しい SAML 信頼済み IDP の登録

BI ラUNCHパッド内のユーザの Enterprise 電子メールアドレスに対応する一意の電子メールアドレスとともに、各ユーザを登録する必要があります。この電子メールアドレスによって、BI プラットフォームと SAP の間がマップされます。

新しい SAML 信頼済み IDP を登録するには、次の条件を満たす必要があります。

- SAP に会社を追加して設定する必要があります。
- SAP 内の会社に関連付けられた有効な SAP ユーザアカウントが必要です。
- SAP 内の会社の会社管理権限と、BI プラットフォームおよび BI ラUNCHパッドの完全な管理者権限が必要です。
- BI ラUNCHパッドを OAuth クライアントとして登録する必要があります。OAuth クライアントは、SAP 内でラUNCHパッドの代表として動作します。

SAP Jam では、Microsoft Internet Explorer 11 はサポートされていません。

1. BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) の右上隅で、[管理者](#)を選択し、[管理](#)を選択します。SAP ライセンスを含む、会社に関する情報が表示されます。この情報を記録またはメモしてください。
2. [管理メニュー](#)で [SAML 信頼済み ID](#) を選択し、[アイデンティティプロバイダの登録](#)をクリックします。BI ラUNCHパッドで作成した IDP を登録する必要があります。
3. [IDP ID](#) ボックスに、SAP を BI プラットフォームで設定したときに作成された、一意の ID プロバイダの値を入力します。
値がない場合は、外部アプリケーション管理者に問い合わせてください。
たとえば、`<CompanyName>_<SystemId>_<client>` を入力します。
4. [Single Sign-On URL](#) ボックスに、SAP に直接アクセスする URL を入力します。
SAP では、一意の ID プロバイダとのシングルサインオンに、この URL が使用されます。
5. [Single Log-Out URL](#) ボックスに、SAP からログオフした後に表示する URL を入力します。
SAP では、一意の ID プロバイダからのシングルログアウトに、この URL が使用されます。
6. [\[Default Name ID Format\]](#) ボックスに、認証要求で使用する名前 ID 形式を入力します。
7. [\[Default Name ID Policy SP Name Qualifier\]](#) ボックスに、認証要求で使用する SP 名前修飾子を入力します。
8. [Allowed Assertion Scope](#) リストで [Users in my company](#) を選択します。
このオプションでは、SAP が IDP からのアサーションを受け入れるユーザのセットを指定します。
9. [X509 証明書 \(Base64\)](#) ボックスに、SAP を BI プラットフォームで設定したときに生成された、Base64 証明書の値を入力します。
値がない場合は、外部アプリケーション管理者に問い合わせてください。
10. [\[登録\]](#) をクリックします。

11.3.16.1.3.2 SAP Jam に対する OAuth クライアントの作成

OAuth コンシューマキーを作成するには、次の条件を満たす必要があります。

- SAP Jam に会社を追加して設定する必要があります。
- SAP Jam 内の会社に関連付けられた有効な SAP Jam ユーザアカウントが必要です。
- SAP Jam 内の会社の会社管理権限と、BI プラットフォームおよび BI ラウンチパッドの完全な管理者権限が必要です。
- BI ラウンチパッドを SAP Jam に OAuth クライアントとして登録する必要があります。OAuth クライアントは、SAP Jam 内でラウンチパッドの代表として動作します。
- 各ユーザは、BI ラウンチパッド内のユーザの Enterprise 電子メールアドレスに対応する一意の電子メールアドレスとともに、SAP Jam に登録する必要があります。この電子メールアドレスによって、BI プラットフォームと SAP Jam 間がマップされます。

SAP Jam では、Microsoft Internet Explorer 11 はサポートされていません。

1. SAP Jam で、右上隅の [\[Administrator\]](#) メニューから [\[Admin\]](#) を選択します。
SAP Jam ライセンスを含む、会社に関する情報が表示されます。
2. [管理](#)メニューから [OAuth クライアント](#)を選択し、[OAuth クライアントの追加](#)をクリックします。
3. [\[新しい OAuth クライアントの登録\]](#) ダイアログボックスの [\[名前\]](#) ボックスに、SAP Jam を BI プラットフォームで設定したときに作成された、一意の ID プロバイダを入力します。
値がない場合は、外部アプリケーション管理者に問い合わせてください。
ユーザの代わりに処理を行ったときに、SAP Jam に、入力する URL に対するハイパーリンクとしてアプリケーション名が表示されます。
たとえば、[<CompanyName>_<SystemId>_<Client>_<Application>](#)を入力します。
4. [Integration URL](#) ボックスに、BI ラウンチパッドの URL を入力します。
ユーザの代わりに処理を行ったときに、SAP Jam に、この URL に対するハイパーリンクとしてアプリケーション名が表示されます。
5. [\[X509 証明書 \(Base64\)\]](#) ボックスに、SAP Jam を BI プラットフォームで設定したときに生成された、Base64 証明書の値を入力します。
値がない場合は、外部アプリケーション管理者に問い合わせてください。
このボックスを空欄のままにすると、SAP Jam によってコンシューマシークレットが設定されます。
6. [保存](#)をクリックします。

OAuth コンシューマキーが生成されます。BI プラットフォーム管理者が使用できるように、OAuth コンシューマキー値を書きとめます。

11.3.17 ディスカッション設定の管理

BI プラットフォームの CMC の [\[アプリケーション\]](#) エリアで、ディスカッションスレッドのシステムレベルの設定を指定できます。

[ディスカッション](#)アプリケーションでは、以下のいくつかの方法でディスカッションスレッドを管理し、ディスカッションスレッドを操作できます。

- 指定した検索条件に従ってディスカッションスレッドを検索する

- ディスカッションスレッドの検索結果を並べ替える
- ディスカッションスレッドを削除する

① 注記

ユーザのアクセス権の設定は、ディスカッションアプリケーションでは使用できません。ただし、個々のレポートに対するアクセス権は設定できます。

11.3.17.1 ディスカッションスレッドを検索する

デフォルトでは、[ディスカッション]ページにすべてのディスカッションスレッドのタイトルが表示されます。ルートレベルのスレッドだけが表示され、

ディスカッションスレッドのリスト内のページを移動するには、[戻る]ボタンおよび[次へ]ボタンをクリックします。特定のスレッドまたはスレッドのグループを検索することもできます。

1. CMC の [アプリケーション] エリアに移動し、[ディスカッション] を選択します。
2. ▶ **管理** ▶ **スレッドの管理** ▶ をクリックします。
[メモの管理] ダイアログボックスが表示されます。
3. [フィールド名] リストからオプションを選択します。

オプション	説明
スレッドタイトル	スレッドタイトルを指定して検索します。
作成日	作成日を指定して検索します。
最終更新日	最終更新日を指定して検索します。
作成者	作成者を指定して検索します。

4. 2 つ目のリストで、検索対象を絞ります。

① 注記

検索では大文字と小文字が区別されません。

- [スレッドタイトル] または [作成者] を選択した場合は、2 つ目のフィールドで次のオプションを選択します。

オプション	説明
である	スレッドタイトルまたは作成者名が、3 つ目のフィールドに入力したテキストと正確に一致するディスカッションスレッドを検索します。
でない	スレッドタイトルまたは作成者名が、3 つ目のフィールドに入力したテキストと正確に一致しないディスカッションスレッドを検索します。
を含む	スレッドタイトルまたは作成者名の一部に検索対象のテキスト文字列が含まれるディスカッションスレッドをすべて検索します。

オプション	説明
を含まない	スレッドタイトルの一部に検索対象のテキスト文字列が含まれないディスカッションスレッドを検索します。

- [\[作成日\]](#)または[\[最終更新日\]](#)で検索する場合は、次のオプションの中から選択し、日付を指定します。

オプション	説明
以前	検索日より前に作成または変更されたディスカッションスレッドを検索します。
以降	検索日より後に作成または変更されたディスカッションスレッドを検索します。
の間	2つの検索日の間に作成または変更されたディスカッションスレッドを検索します。

5. 検索対象をさらに絞るには、3つ目のテキストフィールドを使用します。
 - 最初の2つのフィールドでテキストベースの検索を選択した場合は、テキスト文字列を入力します。
 - 日付ベースの検索を選択した場合は、該当フィールドに1つまたは複数の日付を入力します。
6. [\[検索\]](#)をクリックします。

11.3.17.2 ディスカッションスレッドの検索結果を並べ替える

ディスカッションスレッドを検索する場合は、検索結果を表示する方法を選択できます。たとえば、検索結果を昇順のアルファベット順で表示したり、1ページに表示する結果の数を選択できます。

1. CMCの[\[アプリケーション\]](#)エリアに移動し、[\[ディスカッション\]](#)を選択します。
2. [▶ 管理 ▶ スレッドの管理 ▶](#)をクリックします。
[\[メモの管理\]](#)ダイアログボックスが表示されます。
3. [\[並べ替え基準\]](#)リストから並べ替えオプションを選択します。

オプション	説明
スレッドタイトル	ディスカッションスレッドのタイトル別に並べ替えます。
作成日	スレッドの作成日別に並べ替えます。
最終更新日	ディスカッションスレッドが最後に更新された日付に基づいて並べ替えます。
作成者	特定のディスカッションスレッドの作成者別に並べ替えます。

4. 2つ目のリストで、レコードを昇順と降順のどちらで表示するか選択します。
5. 3つ目のテキストフィールドに、1ページに表示するディスカッションスレッドの結果の数を入力します。
デフォルトは、1ページにつき10の結果です。
6. [\[検索\]](#)をクリックします。

11.3.17.3 ディスカッションスレッドを削除する

ディスカッションスレッドは、BI プラットフォームの CMC の [\[アプリケーション\]](#) エリアで削除できます。

1. CMC の [\[アプリケーション\]](#) エリアに移動し、[\[ディスカッション\]](#) を選択します。
2. [▶ 管理 ▶ スレッドの管理](#) をクリックします。
[\[メモの管理\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
3. 結果リストで、削除するディスカッションスレッドを探して選択します。
4. [\[削除\]](#) をクリックします。

11.3.18 認可サーバの設定

認可サーバの設定アプリケーションは、認可サーバのメカニズムやプロトコルを介してアクセスするすべてのデータベースリソースに使用されます。

エンドツーエンドの **SSO OAuth** サポート - 単一および複数 **OAuth** サーバのサポート

セントラル管理コンソールでは、BI プラットフォームで認可サーバを設定および管理するために、[認可サーバの設定](#) アプリケーションを使用できます。このアプリケーションでは、管理者が認可参照オブジェクトを使用して設定を登録および管理します。認可サーバの各設定に対し、認可参照オブジェクトがあります。認可サーバの設定は、その他、Google ドライブ、Microsoft Drive、または OData リソースに対して作成できます。

認可サーバ設定を作成するには、[\[認可サーバの設定情報入力\]](#) の必須フィールドを入力します。

エンドユーザがオンラインまたはオフラインでアクセスできる対象を制御するため、[\[認可範囲\]](#) をニーズに基づいて定義できます。

11.3.18.1 認可サーバを設定する

認可サーバを設定することができます。

1. セントラル管理コンソールを起動し、管理者としてログインします。
2. ホームページで、[\[管理\]](#) 列の下にある [\[アプリケーション\]](#) を選択します。
3. [\[アプリケーション\]](#) ページで、[\[認可サーバの設定\]](#) をダブルクリックします。
4. [\[認可サーバの設定\]](#) ダイアログで、以下のいずれかを実行します。
 - [▶ 管理 ▶ 新規認可サーバの設定](#) を選択します。
 - [\[新規認可サーバの設定の作成\]](#) ツールバーアイコンを選択します。
5. [\[新規認可サーバの設定の作成\]](#) ダイアログで、以下のパラメータを入力します。
 - 参照名

一意のランダム文字列を選択し、同じ文字列を入力して設定を識別し、権限ベースの SSO を実現するためのさまざまなワークフローの設定を認識および選択します。

- **説明** (オプション)
説明のための文またはキーワードを入力して、利用可能な設定の一覧から設定を識別します。
- **OpenID 接続に固有のフィールド**
以下のフィールドは OpenID 接続の認証に固有であり、権限 SSO には必要ありません。
 - [\[OpenID 接続認証に対して有効\]](#) チェックボックス
 - [発行者 URI](#)
 - [JSON Web キーセット URI \(jwks_uri\)](#)
 - [ID トークン署名アルゴリズム](#)
- **認可エンドポイント**
権限付与を取得できる、認可サーバの URL を入力します。
- **トークンエンドポイント**
権限コードを変更することでアクセストークンを要求できる、認可サーバの URL を入力します。
- **クライアント ID**
認可サーバでの BI ランドスケープの登録に使用されるアプリケーションの名前を入力します。
- **クライアントシークレット**
認可サーバでの BI ランドスケープの登録に使用されるアプリケーションに対応する特定のシークレットコードを入力します。
- **リダイレクト URL**
権限チェックが成功した後、認可サーバによって認証コードが送信される BI ランドスケープエンドポイントの URL を入力します。
- **失効エンドポイント** (オプション)
認可サーバの URL を入力します。これにより、特定のリフレッシュトークンを使用して、以前に発行されたすべてのアクセストークンの失効をアプリケーションで要求することができます。
- **認可範囲**
認可サーバによってサポートされる認可範囲を入力して、利用可能なさまざまな API リソースへのアプリケーション (BI ランドスケープ) アクセスの制限を定義します。

④ 注記

OAuth SSO の BI プラットフォーム実装は、オフラインアクセスに基づいています。BI プラットフォームでの認可サーバの設定の目的が、毎回権限チェックを要求されることなくデータをリフレッシュしたりリソースにアクセスしたりすることである場合は、このフィールドを 1 つの必須パラメータ (たとえば、認可サーバのベンダに基づく "refresh_token" または "offline_access") とともに、必要な範囲パラメータで設定する必要があります。

- **リソースのタイプ**
BI プラットフォームでサポートされるリソースタイプの利用可能な一覧から、目的のリソースタイプを選択します。以下は、対応する認可サーバを介して設定およびアクセスするために BI プラットフォームでサポートされている現在のリソースタイプの一覧です。
 - **その他** (デフォルト値)
認可サーバによる権限付与が成功してアクセス可能なリソースを示します。ベンダまたはプロトコルに固有ではありません。
 - **Google ドライブ**
設定が Google 認可サーバであり、さまざまな BI プラットフォームシナリオに対する Google ドライブへのアクセスに使用できることを示します。どの時点でも、システム内に存在できるのは Google ドライブタイプの 1 つの設定のみです。

- **Microsoft Drive**
設定が Microsoft 認可サーバであり、さまざまな BI プラットフォームシナリオに対する Microsoft Drive へのアクセスに使用できることを示します。どの時点でも、システムに存在できるのは Microsoft Drive タイプの 1 つの設定のみです。
- **OData**
どのベンダにも固有ではありませんが、設定がリソースに関連していることを示します。リソースには、認可サーバによって権限を付与された OData プロトコルを介してアクセスできます。Google ドライブと同様に、どの時点でも、システムに存在できるのは OData タイプの 1 つの設定のみです。

① 注記

[**リソースのタイプ**] パラメータは、OAuth 2.0 標準とは関係ありません。ただし、これは、BI プラットフォームでの特定のリソースの特定におけるあいまいさを回避するために設定で導入されています。そのため、権限を取得するために、対応する設定を特定のシナリオで簡単に選択して使用することができます。

- **アクセスの種類**
このパラメータは、タイプ [**Google ドライブ**] の権限設定に固有です。[**リソースのタイプ**] フィールドの値が [**Google ドライブ**] の場合は、自動的に入力されます。
- **カスタムパラメータ (オプション)**
権限の要求中に送信するために必要なカスタムパラメータを入力します。これは、設定されている認可サーバのカスタム要件 (必要な場合) に基づきます。

① 注記

カスタムパラメータの名前は、設定で一意にする必要があります。
どの権限設定でも、最大 5 つのカスタムパラメータを設定できます。

6. 必要なパラメータをすべて入力したら、[OK] を選択して詳細をチェックし、設定を保存します。

設定は、タイプ [**権限参照**] でシステムオブジェクトとしてリポジトリに保存されます。サポートされているすべてのシナリオの設定を [**参照名**] で参照することができます。

11.3.18.2 認可サーバの設定をテストする

認可サーバの設定をテストできます。

1. 認可サーバの設定が正常に保存されたら、BI ラUNCHパッドを起動し、ログインして設定をテストします。

① 注記

現在、CMC から設定をテストすることはできません。

管理者として、または上記で保存した権限設定の使用が制限されていない BI プラットフォームユーザアカウントを使用してログインします。

BI ラUNCHパッドに設定された現在のログイン方法 (Enterprise や任意の認証方法など) を使用します。

2. ユーザアイコンを選択します。
3. 表示されるドロップダウンメニューで、[設定] を選択します。

4. [設定] ダイアログの [ユーザアカウント] セクションで、[認可トークン] を選択します。
5. [トークンの管理] 列で [生成] を選択します。
6. 組織のポリシーに従い、認可サーバの権限設定に基づいて、システムで設定された証明書に基づいたアカウントチェックが行われるか、設定に基づいてユーザ名、パスワード、多要素認証を使用して身元が確認されます。
7. 認証情報または証明書が正常に検証されると、BI プラットフォームはリフレッシュトークンを受信します。これは、BI プラットフォームリポジトリに安全に保存されます。これが成功すると、[認可トークン] タブに以下の変更が表示されます。
 - [有効期限] 列に、認可サーバによって発行されたトークンの有効期限値が表示されます。認可サーバが期限切れのないトークンを発行した場合、列の値は [期限なし] として更新されます。
 - [トークンの管理] 列で、[生成] ボタンの横に [削除] ボタンが表示されます。
 - [削除] ボタンは、認可サーバによって発行されたトークンを削除するためのものです。この削除は、BI プラットフォームリポジトリストレージからのトークンの削除に限定されません。また、設定とサポートに基づいて認可サーバに伝播することもできます。
 - オプションの [失効エンドポイント] パラメータに、認可サーバのサポートに基づいて適切な URL が入力されている場合、発行されたトークンは BI プラットフォームリポジトリストレージからクリアされるとともに、認可サーバレベルでも無効化されます。
8. トークンが発行され、発行されたトークンの有効期限に従って [有効期限] 列が更新されると、設定が正常に機能し、BI 開発者と BI エンドユーザが使用できるようになります。

11.3.19 情報分類設定

BI プラットフォームでは、組織の Azure Policy サーバを設定して、BI ランドスケープで BI コンテンツを分類できるようにすることができます。これらの分類機能は、組織の Azure Policy サーバ管理者が定義した秘密度ラベルによって適用できます。

① 注記

Policy サーバを設定するこの統合オプションは、Microsoft Azure Information Protection プラットフォームでのみサポートされています。

SAP BusinessObjects BI 4.3 SP04 リリースには、Microsoft Azure Information Protection プラットフォームの統合オプションが含まれています。ただし、BI プラットフォームで Azure Policy サーバの詳細を設定するアプリケーションはデフォルトでは有効化されずに、非表示機能として出荷されていることに注意してください。この非表示機能を表示するには、[3409349](#) を参照してください。

この機能は、Windows プラットフォームでのみ利用可能です。

11.3.19.1 情報分類の設定方法

1. セントラル管理コンソールに管理者としてログインします。
2. アプリケーションに移動します。
3. 情報分類設定アプリケーションを右クリックします。

4. **情報分類の設定**を選択します。
5. **情報分類の有効化**チェックボックスを選択し、設定およびフィールドを有効化します。
6. 組織の Azure Policy サーバの**ポリシーサーバ URL** フィールドのトークン URL を入力します。
URL 書式は、`https://login.microsoftonline.com/<tenant-id>/oauth2/v2.0/token` である必要があります。
7. Azure のクライアントアプリケーションの**クライアント ID** および**クライアントシークレット**の値を入力します。
これらは、組織の Azure Policy サーバにアクセスする権限のクライアント認証情報フローモードに対して有効化されます。
8. **設定の保存およびテスト**をクリックして、接続をテストします。
9. 設定テストが成功したら、**保存**または**保存して閉じる**をクリックします。

① 注記

証明書の認証に対して有効に関連するチェックボックスは、この認証設定のモードがサポートされていないため選択しないでください。

12 データソースと接続の管理

12.1 接続の管理

接続は、名前の付いたパラメータのセットのことで、1つまたは複数の SAP BusinessObjects アプリケーションがリレーショナルまたは OLAP データベースにアクセスする方法を定義します。サーバ名、データベース、ユーザ名、およびパスワードなどの接続の詳細情報は、接続フォルダの BI プラットフォームリポジトリに安全に格納できます。

デザイナーは接続に基づいてユニバースを定義します。クエリアプリケーション、分析アプリケーション、およびレポートアプリケーションのユーザは、データベース内の基となるデータ構造を意識する必要なく、データベースにアクセスします。

次のアプリケーションを使用して、接続を作成できます。

- ユニバースデザインツール: 接続はリポジトリに格納されます。
- インフォメーションデザインツール: 接続はローカルで作成してからリポジトリに公開するか、または直接リポジトリで作成し、編集できます。

① 注記

OLAP データソース接続の管理方法については、*SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP* 管理者ガイドを参照してください。

ユーザが接続を作成、編集、削除できる権限を付与します。

ユーザにユニバース接続へのアクセス権を付与し、ユニバースや接続を使用するドキュメントの作成や表示を許可します。

関連情報

[CMC でのオブジェクトのセキュリティ設定の管理 \[47 ページ\]](#)

[接続のアクセス権 \[456 ページ\]](#)

12.1.1 ユニバース接続を削除する

→ ヒント

接続は、ユニバースデザインツールでもインフォメーションデザインツールでも削除できます。

1. [\[接続\]](#) エリアで、一覧からユニバース接続を選択します。

2. **管理** > **削除** をクリックします。

12.2 ユニバースの管理

ユニバースとは、編成されたメタデータオブジェクトのコレクションのことで、これにより、専門用語を使わずに、ビジネスユーザが企業のデータを分析してレポートを作成できます。これらのオブジェクトには、ディメンション、メジャー、階層、属性、定義済みの計算、関数、およびクエリが含まれます。メタデータオブジェクトレイヤは、リレーショナルデータベースのスキーマまたは OLAP キューブ上で構築されるため、オブジェクトは直接データベース構造にマップされます。ユニバースにはデータソースへの接続が含まれているため、クエリツールおよび分析ツールのユーザはユニバースに接続し、クエリを実行し、ユニバースのオブジェクトを使用してレポートを作成できます。その際、ユーザはデータベース内の基となるデータ構造を意識する必要はありません。

次のツールを使用して、ユニバースを作成できます。

- **ユニバースデザインツール** このツールを使用して作成したユニバースは、拡張子 .unv で識別可能なため、.unv ユニバースと呼ばれます。.unv ユニバースはセキュリティ接続で定義され、リポジトリのユニバースフォルダに格納されます。
- **インフォメーションデザインツール** このツールを使用して作成されたユニバースは、新しいセマンティックレイヤに基づきます。このようなユニバースは、拡張子 .unx で識別可能なため、.unx ユニバースと呼ばれます。.unx ユニバースはローカルで作成してリポジトリのユニバースフォルダに公開できます。デザイナーは、インフォメーションデザインツールのセキュリティエディタを使用して、オブジェクトレベルのセキュリティを定義できます。

ユーザにアプリケーションの権限とユニバースの権限を付与し、ユニバースの作成、編集、削除、およびユニバースに対するセキュリティのデザインを許可することができます。

ユーザにユニバースの権限を付与し、ユニバースを使用するドキュメントの作成や表示を許可することができます。

関連情報

[CMC でのオブジェクトのセキュリティ設定の管理 \[47 ページ\]](#)

[ユニバースデザインツール \[461 ページ\]](#)

[ユニバース \(.unv\) のアクセス権 \[452 ページ\]](#)

[インフォメーションデザインツール \[461 ページ\]](#)

[ユニバース \(.unx\) のアクセス権 \[453 ページ\]](#)

12.2.1 ユニバースを削除する

→ ヒント

ユニバースは、インフォメーションデザインツールでも削除できます。

1. CMC の[ユニバース]エリアで、一覧からユニバースを選択します。
2. ► 管理 ► 削除 ► をクリックします。
3. 確認を求めるメッセージが表示されたら、[OK]をクリックします。

13 ホットバックアップの管理

13.1 ホットバックアップ

ホットバックアップ機能を使用すると、ユーザによるシステムの通常使用を中断することなく BI プラットフォームシステムをバックアップできます。システムのバックアップ中も営業を続ける必要がある場合、セントラル管理コンソールでホットバックアップを有効化して設定します。

[[ホットバックアップ最長持続時間](#)] 設定では、バックアップの予測最大時間 (CMS バックアップの開始時間から、FRS バックアップの終了時間まで) を指定します。指定した時間が短すぎると、バックアップによるファイルのコピーが完了する前にファイルが削除される可能性があります。この問題を回避できるように所要時間を多めに見積もっておくと安全です。値が大きいと FRS ファイルストアサイズが若干増大するため、この問題とシステムリソースのバランスを取ってください。

① 注記

- ホットバックアップでは、実際にはバックアップは実行されず、ファイルの削除が遅延するだけです。ファイルが編集または更新されると、複数のコピーが保持されます。これは、CMS と FRS が常に正しい関係を保ち、それぞれのバックアップを異なる時間に作成できることを意味します。ただし、これは [[ホットバックアップ](#)] ウィンドウ内で行われます。
- システムをリストアすると、FRS に余分なファイルが多数残ります。これらは、リポジトリ診断ツールで削除する必要があります。
- CMS バックアップは、常に FRS ファイルストアをバックアップする前に開始してください。

ホットバックアップは、CMC で [[ホットバックアップの有効化](#)] チェックボックスが選択されている場合に有効であり、[[ホットバックアップ最長持続時間](#)] 設定は、ホットバックアップが有効であるかどうかに影響を与えません。

特定のバックアップ時間にシステムを復元することは非常に簡単です。たとえば、システムバックアップが毎日午前 3 時に実行される場合、CMS システムのバックアップが開始されたときの状態 (選択した日付の午前 3 時) にシステムを簡単に復元できます。CMS データベースまたは監査データベースで障害が発生した場合も、CMS データベースまたは監査データベースでトランザクションロギングを有効にしていれば、システムを障害発生直前の状態に復元できます。

最大限の安全性を確保するため、トランザクションロギングレコードを、プライマリデータベースのバックアップレコードとは異なる場所に保存してください。これにより、データベース障害が発生した場合でも、データベースを障害発生前の状態に復元できます。

① 注記

古いバージョンの IBM DB2 のトランザクションログサイズの制限のため、ホットバックアップおよびトランザクションログ関連のタスクは、CMS システムデータベースが DB2 データベースサーババージョン 9.5 FixPack 5 以上 (9.5 系用)、および 9.7 FixPack 1 以上 (9.7 系用) 上でホストされている場合にのみサポートされます。

① 注記

トランザクションログはメインのデータベースサーバシステム以外のファイルシステムに書き込み、定期的にこのトランザクションログをバックアップして、バックアップ設定内の他のファイルと共に保存することをお奨めします。

13.1.1 ホットバックアップを有効にする

1. セントラル管理コンソール (CMC) を開きます。
2. [管理] 領域で、[設定] ページを開きます。
3. [ホットバックアップ] セクションで、[ホットバックアップの有効化] を選択します。
4. [ホットバックアップ最長持続時間 (分)] でバックアップの予測最大時間 (分) を入力します。
BI プラットフォームホストマシンの CMS データベースとファイルシステムの両方のバックアップに必要な時間を含めるようにします。

① 注記

実際のバックアップ時間がここで入力した上限を超えた場合、バックアップデータに不整合が生じる可能性があります。この問題を回避できるように所要時間を多めに見積もっておくと安全です。

5. [更新] をクリックします。
ホットバックアップが有効になります。

▼ Hot Backup

Enable Hot Backup:

☒

Hot Backup Maximum Duration (Minutes):

Enable Legacy Applications Support (Backup Limitations)

☒

Update

ホットバックアップのサポートが有効になると、データベースおよびファイルシステムのベンダーのバックアップツールを使用してバックアップを実行できます。

14 フォルダ

14.1 フォルダ

フォルダとは、コンテンツを論理グループに分類できるように他のオブジェクトをグループ化し整理するために使用するオブジェクトです。BI プラットフォーム内の各オブジェクトは、フォルダ内に置く必要があります。

デフォルトでは、フォルダに追加した新しいオブジェクトは、そのフォルダのオブジェクトアクセス権を継承します。フォルダレベルでセキュリティを設定できるため、フォルダを使用して情報へのアクセスを制御できます。

組織内にすでに存在する構造(部署、地域、またはデータベーステーブルなど)でフォルダを設定してから、カテゴリを使用して組織の別のシステムを設定することをお勧めします。

14.1.1 フォルダの作成

新しい最上位(親)フォルダを作成する前に、[すべてのフォルダ]を表示していることを確認します。

フォルダの名前、説明、またはキーワードをすばやく編集するには、フォルダを選択し、▶管理▶プロパティ▶の順に選択します。

1. CMC のフォルダ管理エリアを表示します。
2. フォルダの作成場所に移動します。
サブフォルダを作成する場合、新しいフォルダを配置するターゲットフォルダを見つけます。
3. ▶管理▶新規▶フォルダ▶を選択します。
4. フォルダの作成ダイアログボックスで、新しいフォルダの名前を入力し、OK をクリックします。

新しいフォルダがフォルダとオブジェクトの一覧に表示されます。

オブジェクトをフォルダに追加したり、フォルダのプロパティを編集したりできます。

14.1.2 フォルダの削除

1. CMC のフォルダ管理エリアを表示します。
2. 削除するフォルダを見つけて選択します。
複数のフォルダを同時に削除するには、Ctrl キーまたは Shift キーを押したまま、削除する各フォルダをクリックします。
3. ▶管理▶削除▶を選択します。
4. 表示される削除メッセージボックスで、OK をクリックして削除を確認します。

フォルダ、フォルダ内のすべてのサブフォルダ、レポートおよびその他のオブジェクトが BI プラットフォームから削除されます。

14.1.3 フォルダのコピーまたは移動

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. コピーまたは移動するフォルダを選択します。
フォルダが最上位のフォルダでない場合は、その親フォルダを探して、親フォルダのコンテンツを選択します。複数のフォルダを同時にコピーまたは移動するには、**[Ctrl]** キーまたは **[Shift]** キーを押したまま、コピーまたは移動する各フォルダをクリックします。
3. **整理 > コピー先** または **整理 > 移動先** を選択します。
4. **コピー先** ダイアログボックスまたは **移動先** ダイアログボックスで、出力先フォルダを選択します。
5. **[コピー]** または、**[移動]** をクリックします。

選択したフォルダは、新しい場所へコピーまたは移動されます。

14.1.4 フォルダレベルでのレポートインスタンスの制限

制限を設定することで、BI プラットフォームのレポートインスタンスを自動的に削除できます。

フォルダに対して設定した制限は、そのフォルダ内のすべてのオブジェクトに影響します。フォルダレベルでは、次の制限を設定できます。

- オブジェクト、ユーザ、またはユーザグループごとのインスタンス数
 - ユーザまたはグループのインスタンスが保持される日数
1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
 2. 制限を設定するフォルダを見つけて選択し、**アクション > 制限** を選択します。
 3. **制限** ダイアログボックスで **オブジェクトのインスタンスが N 個より多い場合は、超過インスタンスを削除する** チェックボックスをオンにし、フォルダに格納できるオブジェクトあたりの最大インスタンス数 (この数を超過するとインスタンスが削除される) をボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 4. **更新** をクリックします。
 5. ユーザまたはグループあたりのインスタンス数を制限するには、**[超過インスタンスを削除するユーザ/グループ]** の隣にある **[追加]** をクリックします。
 6. ユーザまたはグループを選択し、**[>]** をクリックしてユーザまたはグループを **[選択されたユーザ/グループ]** リストに追加し、**[OK]** をクリックします。
 7. 手順 6 で追加したユーザまたはグループごとに、BI プラットフォームに表示する最大インスタンス数を **[ユーザごとのオブジェクトあたりの最大インスタンス数]** ボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 8. ユーザまたはグループあたりのインスタンスの有効期間を制限するには、**[N 日後にインスタンスを削除するユーザ/グループ]** の隣にある **[追加]** をクリックします。
 9. ユーザまたはグループを選択し、**>** をクリックしてユーザまたはグループを **選択されたユーザ/グループ** リストに追加し、**OK** をクリックします。
 10. 手順 9 で追加したユーザまたはグループごとに、BI プラットフォームからインスタンスが削除されるまでの最大有効日数を **[インスタンスの最大保存期間]** ボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。

11. [更新](#)をクリックします。

関連情報

[インスタンスに対する制限の設定 \[283 ページ\]](#)

14.1.5 受信ボックスでのドキュメントの制限

制限を設定することで、BI プラットフォームのドキュメントを自動的に削除できます。

受信ボックスに対して設定した制限は、その受信ボックス内のすべてのオブジェクトに影響します。受信ボックスレベルでは、次の制限を設定できます。

- 受信ボックス、ユーザ、またはユーザグループごとのドキュメント数
 - ユーザまたはグループのドキュメントが保持される日数
1. CMC の [\[受信ボックス\]](#) 管理エリアを表示します。
 2. [\[受信ボックス\]](#) を右クリックし、[\[制限\]](#) を選択します。
 3. [\[制限\]](#) ダイアログボックスで、[\[N を超える数のドキュメントがある場合に、超過ドキュメントを削除します:\]](#) チェックボックスをオンにし、受信ボックスに格納できる最大ドキュメント数 (この数を超過するとドキュメントが削除される) をボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 4. [\[更新\]](#) を選択します。
 5. ユーザまたはグループあたりのドキュメント数を制限するには、[\[以下のユーザ/グループの超過ドキュメントを削除します\]](#) の横にある [\[追加\]](#) をクリックします。
 6. ユーザまたはグループを選択し、[\[>\]](#) をクリックしてユーザまたはグループを [\[選択されたユーザ/グループ\]](#) 一覧に追加し、[\[OK\]](#) をクリックします。
 7. 手順 6 で追加したユーザまたはグループごとに、BI プラットフォームに表示する最大ドキュメント数を [\[最大ドキュメントカウント\]](#) ボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 8. ユーザまたはグループあたりのインスタンスの有効期間を制限するには、[\[N 日が経過した以下のユーザ/グループの超過ドキュメントを削除します\]](#) の横にある [\[追加\]](#) を選択します。
 9. ユーザまたはグループを選択し、[\[>\]](#) をクリックしてユーザまたはグループを [\[選択されたユーザ/グループ\]](#) 一覧に追加し、[\[OK\]](#) をクリックします。
 10. 手順 9 で追加したユーザまたはグループごとに、BI プラットフォームからドキュメントが削除されるまでの最大日数を [\[ユーザ別の最大ドキュメントカウント\]](#) ボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 11. [\[更新\]](#) を選択します。

15 カテゴリ

15.1 カテゴリの使用

15.1.1 カテゴリの作成

1. CMC で、[[カテゴリ](#)] エリアを選択します。
2. **管理 > 新規 > カテゴリ** を選択します。
3. [カテゴリの作成](#) ダイアログボックスで、[新しいカテゴリ名の入力ボックス](#)にカテゴリの名前を入力します。
4. [OK](#) をクリックします。

カテゴリが BI プラットフォームに追加されます。

15.1.2 カテゴリの削除

カテゴリを削除すると、カテゴリ内のすべてのサブカテゴリも削除されます。ただし、カテゴリ内のレポートおよびその他のオブジェクトは BI プラットフォームから削除されません。

1. CMC で、[[カテゴリ](#)] エリアを選択します。
2. 削除するカテゴリを選択します。
カテゴリが最上位のカテゴリでない場合は、その親カテゴリを見つけてからサブカテゴリを探します。複数のカテゴリを同時に削除するには、**Ctrl** キーまたは **Shift** キーを押したまま、削除する各カテゴリをクリックします。
3. **管理 > 削除** を選択します。
4. 表示される [削除](#) メッセージボックスで、[OK](#) をクリックして削除を確認します。

カテゴリが BI プラットフォームから削除されます。

15.1.3 カテゴリの移動

カテゴリを移動しても、カテゴリに関連付けられているオブジェクトとそのオブジェクトのアクセス権はそのまま維持されます。

たとえば、南米地域のユーザのみがアクセスできる South American Sales カテゴリと、すべてのユーザがアクセスできる世界中の売上レポートを含む World Sales カテゴリがあるとします。この地域のカテゴリを World Sales カテゴリに移動します。South American Sales カテゴリは、World Sales カテゴリのサブカテゴリになりますが、アクセス権と関連オブジェクトはそのまま維持されます。

1. CMC で、[カテゴリ] エリアを選択します。
2. 移動するカテゴリを選択します。

カテゴリが最上位のカテゴリでない場合は、その親カテゴリを見つけてからサブカテゴリを探します。複数のカテゴリを同時に移動するには、**Ctrl** キーまたは **Shift** キーを押したまま、移動する各カテゴリをクリックします。

3. **整理 > 移動先** を選択します。

BI プラットフォームに多数のカテゴリがある場合、**タイトルの検索**ボックスにカテゴリ名を入力するか、**前へ**、**次へ**、または **+** (プラス記号) をクリックしてカテゴリリストを参照します。

4. **移動先** ダイアログボックスで、移動先のカテゴリを選択して、**移動** をクリックします。

カテゴリが新しい場所に移動されます。

15.1.4 カテゴリへのオブジェクトの追加

1. CMC で、[フォルダ] 領域を選択します。
2. カテゴリに追加するオブジェクトを見つけて選択します。
3. **管理 > カテゴリ** を選択します。
4. **カテゴリ** ダイアログボックスで、オブジェクトを追加するカテゴリを選択します。
5. **保存して閉じる** をクリックします。

オブジェクトがカテゴリに追加されます。

15.1.5 カテゴリからのオブジェクトの除去または削除

オブジェクトを除去する場合は、カテゴリから除去されますが、BI プラットフォーム内には残ります。オブジェクトを削除する場合は、カテゴリから除去され、同時にプラットフォームからも削除されます。

1. CMC で、[カテゴリ] エリアまたは [個人用カテゴリ] エリアを選択します。
2. オブジェクトを除去または削除するカテゴリをダブルクリックします。
3. 除去または削除するオブジェクト (複数可) を選択します。
4. 次の操作のいずれかを実行します。
 - カテゴリからオブジェクトを除去するが、プラットフォームからは削除しない場合は、**アクション > カテゴリから削除** の順に選択します。
 - カテゴリからオブジェクトを除去し、プラットフォームからも削除する場合は、**管理 > 削除** を選択します。
5. **カテゴリから削除** または **削除** ダイアログボックスで、**OK** をクリックして、除去または削除を確認します。

オブジェクトが除去または削除されます。




15.1.6 ユーザの個人用カテゴリの表示


適切なアクセス権がある場合は、ユーザの個人用カテゴリを表示、編集、および削除することができます。

1. CMC で、[[カテゴリ](#)] エリアを選択します。
2. 個人用カテゴリを表示するユーザアカウントを選択します。

ユーザの個人用カテゴリのリストが表示されます。

15.1.7 カテゴリへの複数のオブジェクトの追加

1. CMC の[カテゴリ](#)または[個人用カテゴリ](#)管理エリアを表示します。
2. オブジェクトを追加するカテゴリを見つけて選択します。
3.  [アクション](#)  [カテゴリに追加](#)  を選択します。

4. [カテゴリに追加](#)ダイアログボックスの[使用できるオブジェクト](#)で、追加するオブジェクトを見つけ、 をクリックしてオブジェクトを[選択されたオブジェクト](#)リストに移動します。

5. [OK](#) をクリックします。

16 オブジェクトの管理

16.1 デフォルト設定

デフォルト設定を使用すると、さまざまなコンテンツオブジェクトのカスタムプロパティを編集したり、管理したりすることができます。オブジェクトタイプによって、使用できるデフォルト設定は異なる場合があります。この節では、使用できるさまざまな種類のデフォルト設定を一覧表示し、詳細を説明する別のトピックへのリンクを示します。デフォルト設定をアルファベット順に説明していきます。

コンポーネントのエラー

この設定は、オブジェクトパッケージのみに適用されます。

出力先

この設定は、送信可能なオブジェクトのみに適用されます。

イベント

この設定は、スケジュール可能なオブジェクトのみに適用され、スケジュールのイベント設定と同じ方法で機能します。

フォールバックサーバ

[[プロパティ: 新規イベント](#)] ウィンドウの [[イベント設定](#)] で、ファイルイベントを含む *Event Server* のフェイルオーバーサポートに対応するため、既存の [[サーバ](#)] オプションのバックアップとして [[フォールバックサーバ](#)] フィールドが追加されています。

[[フォールバックサーバ](#)] 一覧では、各イベントと、デフォルト *Event Server* を選択するための既存の [[サーバ](#)] オプションがサポートされています。

たとえば、デフォルト *Event Server* がダウンした場合、ファイルイベントをフォールバック一覧の *Event Server* で予定どおりに処理できます。

このオプションは、作成シナリオとファイルイベントの編集シナリオのどちらでも利用することができます。

通知

この設定は、スケジュール可能なオブジェクトのみに適用され、スケジュールの通知設定と同じ方法で機能します。

プログラムのログオン

この設定は、プログラムオブジェクトのみに適用されます。

プログラムパラメータ

この設定は、プログラムオブジェクトのみに適用されます。

繰り返し

この設定は、スケジュール可能なオブジェクトのみに適用され、スケジュールの繰り返し設定と同じ方法で機能します。

スケジュール

この設定は、スケジュール可能なオブジェクトのみに適用され、スケジュールの[対象指定](#)設定と同じ方法で機能します。

サーバグループのスケジュール

この設定は、スケジュール可能なオブジェクトのみに適用され、スケジュールのイベント設定と同じ方法で機能します。

関連情報

[オブジェクトパッケージのコンポーネントエラーオプションを設定する \[266 ページ\]](#)

[オブジェクトまたはインスタンスを出力先に送信する \[252 ページ\]](#)

[イベントの発生に基づくオブジェクトのスケジュール \[276 ページ\]](#)

[イベントを発生させるオブジェクトのスケジュール \[277 ページ\]](#)
[インスタンスに対する成功または失敗の通知の設定 \[278 ページ\]](#)
[プログラムオブジェクトのユーザアカウントの指定 \[265 ページ\]](#)
[コマンドライン引数の指定 \[262 ページ\]](#)
[プログラムオブジェクトの作業ディレクトリの設定 \[262 ページ\]](#)
[外部ファイルまたは補助ファイルへのパスの指定 \[263 ページ\]](#)
[Java プログラムの必須パラメータの指定 \[264 ページ\]](#)
[Java プログラムが他のファイルにアクセスできるようにする設定 \[265 ページ\]](#)
[定期スケジュールパターン \[269 ページ\]](#)
[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[269 ページ\]](#)
[個々のユーザに対するレポートオブジェクトのスケジュール \[280 ページ\]](#)
[スケジュール済みオブジェクトでのサーバまたはサーバグループの選択 \[280 ページ\]](#)

16.2 CMC におけるオブジェクトの追加

CMC でオブジェクトを追加するには、管理者権限を持っている必要があります。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. オブジェクトを追加するフォルダを見つけて選択します。
3. [管理](#) [追加](#) を選択し、次のうちいずれかのオプションを選択します。

オプション	説明
プログラムファイル	プログラムオブジェクトを追加します。
ローカルドキュメント	その他の種類のオブジェクトを追加します。

ダイアログボックスが表示され、オブジェクトのプロパティを指定できます。

4. オブジェクトのプロパティを指定します。
表示されるプロパティのフィールドは、公開するオブジェクトの種類に応じて変わります。プロパティのフィールドは“CMC でのオブジェクトプロパティ”テーブルにまとめられます。
5. オブジェクトをカテゴリに割り当てるには、リストからカテゴリを選択します。
6. [OK](#) をクリックします。
ダイアログボックスが閉じると、CMC で最新表示が実行されて、フォルダのオブジェクトおよびその他のコンテンツが表示されます。

16.3 オブジェクトをコピーする

1. [\[フォルダ\]](#) エリアで、コピーするオブジェクトを探して選択します。
2. [整理](#) [コピー先](#) をクリックします。
[\[コピー\]](#) ダイアログボックスが表示されます。

3. [コピー先の選択]エリアで、オブジェクトのコピー先のフォルダを探し、[>]をクリックして[出力先]一覧に移動します。

① 注記

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。

→ ヒント

複数のフォルダを選択するには、`[Shift]` + `[クリック]`または`[Ctrl]` + `[クリック]`を使用します。

4. 完了したら、[コピー]をクリックします。
選択したオブジェクトはコピー先にコピーされます。

16.4 オブジェクトを移動する

1. [フォルダ]エリアで、移動するオブジェクトを探して選択します。
2. **整理 > 移動先** をクリックします。
[移動]ダイアログボックスが表示されます。
3. コピー先フォルダを選択します。

① 注記

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。

→ ヒント

複数のフォルダを選択するには、`[Shift]` + `[クリック]`または`[Ctrl]` + `[クリック]`を使用します。

4. [移動]をクリックします。
元のフォルダから移動先のフォルダへオブジェクトが移動します。

16.5 オブジェクトショートカットを作成する

ショートカットは、あるユーザに、オブジェクトに対するアクセス権を付与し、そのオブジェクトが含まれるフォルダ全体に対するアクセス権は付与しない場合に役立ちます。

ショートカットを作成すると、ショートカットが存在するフォルダにアクセスできるユーザは、そのオブジェクトとレポートインスタンスにアクセスできるようになります。

1. [フォルダ]エリアで、ショートカットを作成するオブジェクトを探して選択します。
2. **整理 > ショートカットの作成** をクリックします。
[ショートカットの作成]ダイアログボックスが開きます。

3. [コピー先の選択]エリアで、ショートカットの作成先のフォルダを探し、[>]をクリックして[出力先]一覧に移動します。

① 注記

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。

4. [ショートカットの作成]をクリックします。
オブジェクトへのショートカットが、指定したフォルダに表示されます。

16.6 オブジェクトを削除する

1つ以上のオブジェクト、フォルダ(フォルダ内の全オブジェクトおよびインスタンスを含む)、または(オブジェクト自体ではなく)オブジェクトインスタンスを削除できます。

① 注記

オブジェクトを削除すると、既存のインスタンスとスケジュールされたインスタンスがすべて削除されます。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアに移動します。
2. 削除するオブジェクトを選択します。
3. ► 管理 ► 削除 ◀ をクリックします。
4. 確認のメッセージが表示されたら、[OK]をクリックします。

16.7 1つまたは複数のオブジェクトを検索する

検索機能を使用して、オブジェクトのタイトルや説明内の特定のテキストを検索することができます。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
[検索] フィールドは、[フォルダ] 管理エリアの右上隅にあります。検索の種類は、デフォルトで [タイトルの検索] に設定されています。
2. 検索条件を指定します。
 - a. ファイル名以外を指定して検索する場合は、[タイトルの検索]をクリックして、検索の種類を変更します。

次のオプションがあります。

- **すべてのフィールドの検索**
このオプションでは、オブジェクトに関連付けられたファイル名、キーワード、および説明が検索されます。
- **タイトルの検索**
これはデフォルトオプションで、ファイル名が検索されます。
- **キーワードの検索**
このオプションでは、オブジェクトに関連付けられたキーワードが検索されます。

- 説明の検索

このオプションでは、オブジェクトに関連付けられた説明が検索されます。

b. [検索]フィールドに、検索するテキストを入力します。

3. [検索]をクリックします。

検索が完了すると、検索基準に一致した結果の一覧が表示されます。

16.8 オブジェクトまたはインスタンスを出力先に送信する

オブジェクトのコピーかインスタンスのどちらか、またはオブジェクトインスタンスのショートカットを送信できます。出力先 (FTP や SFTP、BI 受信ボックスなど) も選択できます。すべてのタイプのオブジェクトがすべての出力先に送信できるわけではありません。

① 注記

▶ **整理** ▶ **送信** を使用すると、既存のオブジェクトまたはオブジェクトのインスタンスを別の出力先に送信できます。[送信]コマンドでは、既存のオブジェクトまたはインスタンスのみ処理できます。この機能では、システムでのオブジェクトの実行や新しいインスタンスの作成、レポートインスタンスのデータの最新表示は実行できません。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。

2. 送信するオブジェクトまたはインスタンスを選択します。

- オブジェクトを送信する場合は、オブジェクトを選択し、▶ **整理** ▶ **送信** をクリックして出力先を選択します。
- インスタンスを送信する場合は、オブジェクトを選択し、▶ **アクション** ▶ **履歴** をクリックします。[履歴] ダイアログボックスでインスタンスを選択し、[送信] をクリックして、出力先オプションをクリックします。
ステータスが "成功" または "失敗" のインスタンスのみを選択します。ステータスが "定期" または "待機" のインスタンスはスケジュールされており、まだデータが格納されていません。

出力先オプション	説明
BI 受信ボックス	オブジェクトをユーザの BI ラUNCHパッド受信ボックスに送信します。
電子メール	オブジェクトをユーザの電子メールアドレスに送信します。
FTP の場所へ	オブジェクトを FTP サーバの場所に送信します。
SFTP の場所	オブジェクトを SFTP サーバの場所に送信します。
ファイルの場所	オブジェクトをローカルディスクの場所へ送信します。

① 注記

Interactive Analysis ドキュメントは、BI 受信ボックスのみに送信されるか、情報プラットフォームサービス内で設定された電子メールの出力先のみに送信されます。

→ ヒント

複数のオブジェクトを選択するには、**Shift** + **クリック** または **Ctrl** + **クリック** を使用します。

3. 出力先オプションを設定します。

Adaptive Job Server のデフォルト設定を使用するか、独自の設定を使用するか選択できます。独自の設定を使用する場合は、次を指定します。

- オブジェクトを受信するユーザとグループ (BI 受信ボックスまたは電子メールの出力先に送信する場合)
- オブジェクトのコピーまたはそのオブジェクトにリンクするショートカットを送信するかどうか
- 送信するオブジェクトの名前
- オブジェクトを送信した後にインスタンスをクリーンアップするかどうか
- 出力先の種類に固有の設定 (ファイルの場所の場合はディレクトリ、FTP または SFTP サーバの場合はホスト名と接続ポートなど)

4. 完了したら、[送信] をクリックします。

16.9 オブジェクトのプロパティを変更する

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
2. ► 管理 ► プロパティ をクリックします。
[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
3. 変更を行います。
オブジェクト名、キーワード、および説明を変更できます。
4. 作業が完了したら、[保存して閉じる] をクリックします。

16.10 オブジェクトの関係をチェックする

1. 関係クエリを実行するオブジェクトに移動します。
2. ► 管理 ► ツール ► 関係のチェック をクリックします。
[クエリの結果] エリアに、実行した関係クエリの結果が表示されます。

→ ヒント

必要な場合は、さらに結果オブジェクトの関係をチェックするために、オブジェクトを選択して ► 管理 ► ツール ► 関係のチェック を選択します。

3. 元のクエリに戻るには、ツリーパネルでそのオブジェクトの名前を選択します。

16.11 新しいハイパーリンクを作成する

1. [フォルダ] または [個人用フォルダ] エリアで、新しいハイパーリンクを作成するフォルダに移動します。

2. **管理** > **新規** > **ハイパーリンク** の順にクリックします。
[ハイパーリンク] ダイアログボックスが表示されます。
3. ハイパーリンクのタイトル、説明、およびキーワードを入力します。
4. ナビゲーションペインで [URL] をクリックします。
5. [URL] フィールドに URL を入力します。
6. [OK] をクリックします。

17 レポート

17.1 レポートの最新表示オプションの選択

Crystal レポートでのみ最新表示オプションを選択することができます。

→ ヒント

[レポートを最新表示] をクリックして、レポートをすぐに最新表示できます。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアに移動します。
2. レポートを選択してから、[▶ アクション ▶ 最新表示オプション](#) を選択します。
3. [\[最新表示オプション\]](#) ダイアログボックスで、ソース `.rpt` ファイルから最新表示するレポート要素を選択します。
4. [更新](#) をクリックします。

17.2 Crystal レポートのレポート表示オプションの選択

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. 表示オプションを設定するレポートを見つけて選択します。
3. [▶ 管理 ▶ デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [サーバグループの表示](#) をクリックします。
5. [\[表示データの最新表示\]](#) で [\[レポート独自の表示設定を使用する\]](#) を選択して、レポートのオプションを選択します。
6. [保存して閉じる](#) をクリックします。

17.3 オブジェクトの処理用デフォルトサーバの選択

1. CMC の [\[フォルダ\]](#) 管理エリアにジャンプします。
2. デフォルトサーバを指定するレポートオブジェクトを選択します。
3. [▶ 管理 ▶ デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、次のいずれかの操作を実行します。
 - レポートオブジェクトをスケジュールするためにデフォルトサーバを指定するには、ナビゲーション一覧で [サーバグループのスケジュール](#) を選択します。

- オブジェクト表示時にオブジェクトを処理するデフォルトサーバを指定するには、オブジェクトが Crystal レポートの場合は [サブグループの表示](#) を選択し、オブジェクトが Web Intelligence ドキュメントの場合は [Web Intelligence 処理設定](#) を選択します。
5. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

17.4 Crystal レポートでのデータベース設定の変更

データベースの種類の選択、デフォルトデータベースログオン情報の設定、データソースまたは Crystal レポートオブジェクトとそのインスタンスのデータソースの表示、およびレポートインスタンス表示時の必要に応じたユーザへのログオン名とパスワードの入力要求を行うことができます。

データベース設定を変更するレポートオブジェクトを複数選択した場合、同じデータソースに接続しているレポートオブジェクトのみが更新されます。サポートされるデータベースとドライバの詳細については、SAP Service Marketplace でサポートされているプラットフォームドキュメントを参照してください。

- CMC の [フォルダ管理](#) エリアに移動します。
- データベース設定を変更するレポートオブジェクトを選択します。
- [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
- [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [データベース設定](#) をクリックします。
- 次の操作のいずれかを実行します。
 - [レポートのオリジナルのデータベースログオン情報を使用する](#) を選択して、オリジナルのレポートデータベースのユーザ名とパスワードを入力します。
 - [ここで指定するカスタムのデータベースログオン情報を使用する](#) を選択して、事前定義されたデータベースドライバまたはカスタムデータベースドライバのサーバ名 (ODBC データソースの DSN)、データベース名、ユーザ名、およびパスワードを入力します。データベースのデフォルトのテーブルプレフィックスを変更した場合は、カスタムテーブルプレフィックスを指定します。
- 次の操作のいずれかを実行します。
 - レポートの最新表示時にユーザにパスワードを求めるには、[ユーザにデータベースログオン入力を要求する](#) を選択します。
ユーザが初めてレポートを最新表示するときに、BI プラットフォームによってメッセージが表示されます。ユーザが再度レポートを最新表示するときは、メッセージは表示されません。このオプションはスケジュールされたインスタンスには影響しません。
 - データベースへのログオンにユーザのログオン情報とパスワードを使用するには、[コンテキストをデータベースログオンに使用する](#) を選択します。
エンドツーエンドシングルサインオンまたはデータベースに対するシングルサインオン用に BI プラットフォームを設定する必要があります。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドを参照してください。
 - レポートを Job Server で実行したときに使用したのと同じデータベースログオン情報を使用するには、[レポート実行時と同じデータベースログオン情報を使用する](#) を選択します。
 - ユーザアカウントに指定されているデータベース認証情報を使用するには、[ユーザのデータベース認証をデータベースログオンに使用する](#) を選択します。
- [保存して閉じる](#) をクリックします。

17.5 Crystal レポートのデフォルトパラメータ値を変更する

Crystal レポートにパラメータが含まれる場合は、各パラメータのデフォルト値を設定できます。デフォルト値は、レポートインスタンス生成時に使用されます。

既定値を含むパラメータフィールドを使用すると、ユーザは BI プラットフォームに表示するデータを表示および指定できます。BI ラUNCHパッドなどの BI プラットフォームアプリケーションを使用すると、ユーザはデフォルト値を使用してレポートを開くか、別の値を選択できます。デフォルト値を指定しなかった場合、ユーザはレポートをスケジュールする際に値の入力を求められます。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. デフォルトのプロンプト値を更新するレポートオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [プロンプト](#) をクリックします。
このオプションは、レポートオブジェクトにパラメータが含まれる場合にのみ利用できます。パラメータが含まれない場合は、このオプションは利用できないため、この手順をスキップします。
5. [\[デフォルト値\]](#) 列で、パラメータのデフォルト値を入力するか選択します。
デフォルト値を変更するためのオプションが表示されます。パラメータ値のタイプに応じて、ボックスに値を入力するか、リストで値を選択することができます。
6. [\[値のクリア\]](#) ボタンをクリックして、パラメータに設定されている現在の値をクリアします。
7. BI プラットフォームアプリケーションでレポートインスタンスを表示する前にユーザにプロンプトを表示するには、[\[表示時にプロンプトを表示\]](#) チェックボックスをオンにします。
8. [保存して閉じる](#) をクリックします。

17.6 Web Intelligence ドキュメントのプロンプトの更新

レポートにパラメータが含まれる場合は、各パラメータのデフォルトのプロンプト値を設定できます。デフォルト値は、レポートインスタンス生成時に使用されます。

既定値を含むプロンプトフィールドを使用すると、表示するデータを指定できます。BI ラUNCHパッドなどの BI プラットフォームアプリケーションでは、ユーザはあらかじめ設定されたデフォルト値を使用するか、別の値を選択して、レポートを使用できます。デフォルト値を指定しなかった場合、ユーザはレポートをスケジュールする際に値の入力を求められます。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. プロンプトを更新する Web Intelligence ドキュメントを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [プロンプト](#) をクリックします。
このオプションは、Web Intelligence ドキュメントオブジェクトにプロンプトが含まれる場合にのみ表示されます。プロンプトが含まれない場合は、このオプションは利用できません。
5. [\[変更\]](#) をクリックします。
6. プロンプトを選択して、プロンプト値を入力します。
使用可能な値が表示されていない場合は、[\[値の最新表示\]](#) ボタンをクリックします。

7. 変更するプロンプト値それぞれについて、手順 5 と 6 を繰り返します。
8. [適用](#)をクリックし、[保存して閉じる](#)をクリックします。

関連情報

[Crystal レポートのデフォルトパラメータ値を変更する \[257 ページ\]](#)

17.7 フィルタの使用

一部の種類のレポートのみに対してフィルタリングできます。これらは、Web Intelligence ドキュメント、.rptx 形式の SAP Crystal レポート、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートで使用できません。

1. CMC の[フォルダ](#)管理エリアを表示します。
2. フィルタを追加するレポートオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の[フィルタ](#)をクリックします。
5. 選択式を更新または新しく追加するために、次の操作のいずれかを実行します。
 - [\[レコードの選択\]](#) ボックスで、レポートのスケジュール時に使用するレコード数を制限する 1 つまたは複数のレコード選択式を作成または編集する。
 - [\[グループの選択\]](#) ボックスで、レポートのスケジュール時に使用するグループ数を制限する 1 つまたは複数のグループ選択式を作成または編集する。
6. [保存して閉じる](#)をクリックします。

17.8 Crystal レポートのプリンタの選択

1. CMC の[フォルダ](#)管理エリアを表示します。
2. プリンタを割り当てるレポートオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の[印刷設定](#)をクリックします。
5. [\[印刷設定\]](#) で、[\[スケジュール時に Crystal レポートを印刷する\]](#) チェックボックスをオンにします。
Crystal レポートは、SAP Crystal Reports 形式でプリンタに送信されます。この形式は、レポートをスケジュールしたときに選択したページレイアウトに影響を与えません。
6. [部数](#)ボックスに、印刷する部数を入力します。
7. [ページ範囲](#)で、[すべて](#)を選択してすべてのレポートページを印刷するか、[ページ](#)を選択して、印刷する最初のページと最後のページをボックスに入力します。
8. [\[部単位で印刷するオプションを設定\]](#) リストで、次の操作のいずれかを実行します。

- レポートを部単位で印刷する場合は **[部単位で印刷]** を選択します。
 - レポートを部単位で印刷しない場合は **[ページ単位で印刷]** を選択します。
 - プリンタのデフォルトの部単位印刷設定を使用する場合は **[プリンタのデフォルト値を使用]** を選択します。
9. **[ページの拡大縮小]** リストで、次の操作のいずれかを実行します。
- 印刷するページに合わせてレポートページを拡大する場合は **[拡大して合わせる]** を選択します。
 - 印刷するページに合わせてレポートページを縮小する場合は **[縮小のみで合わせる]** を選択します。
 - レポートの縮小拡大をしない場合は **[縮小拡大しない]** を選択します。
10. 印刷するページでレポートを中央揃えにする場合は **[ページの中央揃え]** チェックボックスをオンにします。
11. 横方向のページを印刷する 1 ページに合わせて印刷する場合は **[横方向のページを 1 ページに合わせる]** チェックボックスをオンにします。
12. **[ページレイアウトの指定]** で、次の操作のいずれかを実行します。
- Crystal Reports Job Server のデフォルトのプリンタに印刷する場合は、**[通常使用するプリンタ]** を選択します。
 - **プリンタの指定** を選択して、ボックスにプリンタのパスと名前を入力します。
Job Server が Windows にある場合は、**¥¥<PrintServer>¥<PrinterName>** と入力します。
<PrintServer> はプリンタサーバの名前で、**<PrinterName>** はプリンタの名前です。
Job Server が Unix にある場合は、Unix プリンタが表示されている (非表示になっていない) ことを確認して、**lp -d <PrinterName>** などの通常使用している印刷コマンドを入力します。
13. **保存して閉じる** をクリックします。

17.9 Crystal レポートおよび PDF オブジェクトのページレイアウトオプションの選択

- CMC の **[フォルダ]** 管理エリアにジャンプします。
- ページレイアウトを設定するレポートオブジェクトを選択します。
- 管理 > デフォルト設定** を選択します。
- デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **印刷設定** をクリックします。
- デフォルトの印刷モードを選択するために、**[印刷設定]** で次の操作のいずれかを実行します。
 - Web ビューアからレポートを印刷するときに PDF 印刷設定を使用する場合は、**[常に PDF に印刷する (プレビュー)]** を選択します。
 - CMC の基本設定で定義されている Crystal レポートのデフォルトの印刷設定を使用する場合は、**[Crystal Reports の基本設定に従う]** を選択します。
- [ページレイアウトの指定]** の **[レイアウトの設定]** リストで、次の操作のいずれかを実行します。
 - Crystal Reports で定義されているページレイアウトを使用する場合は、**[レポートファイルのデフォルト]** を選択します。
 - プリンタのデフォルトのページレイアウトを使用する場合は **[指定のプリンタ設定]** を選択して、Crystal Reports Job Server のデフォルトのプリンタか別のプリンタを選択します。
スケジュールされたレポートインスタンスは、**[スケジュール時の印刷]** で指定されたプリンタのみに印刷できます。つまり、1つのプリンタのデフォルトのページレイアウトを使用するようにレポートを設定した後で、別のプリンタに印刷することはできません。


- すべてのページレイアウト設定をカスタマイズする場合は、[カスタム設定] を選択して、ページの方向と用紙サイズを選択します。
7. [保存して閉じる] をクリックします。

17.10 レポートへの処理拡張機能の割り当て

レポートオブジェクトには、複数の処理拡張機能を適用することができます。

処理拡張機能をレポートオブジェクトに適用するには、CMC に処理拡張機能を登録する必要があります。

処理拡張機能は、Web Intelligence ドキュメント、.rptx 形式の Crystal レポート、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 処理拡張機能を適用するレポートオブジェクトを選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **拡張機能** をクリックします。
5. **利用可能な処理拡張機能** リストで処理拡張機能を選択し、 をクリックしてその機能を **これらの処理拡張機能を使用する (表示順)** リストに移動します。
[利用可能な処理拡張機能] リストには、登録済みの処理拡張機能のみが含まれます。
6. **上へ移動** ボタンと **下へ移動** ボタンを使用して、処理拡張機能を使用する順序を設定します。
7. **保存して閉じる** をクリックします。

処理拡張機能が、レポートオブジェクトに割り当てられます。

17.11 Crystal レポートの最初のページのサムネイル画像の表示

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 最初のページにサムネイル画像を表示するレポートを見つけて選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **拡張機能** をクリックします。
5. **[レポートのサムネイルを表示]** チェックボックスをオンにします。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

17.12 BI リポジトリへのレポートの追加およびハイパーリンクの追加

レポート間のハイパーリンクが切れないようにするために、最初にレポートを追加してからハイパーリンクを作成します。

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、または Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。SAP Crystal Reports でのタスクの詳細については、SAP Crystal Reports ヘルプを参照してください。

1. Crystal Reports でハイパーリンクを設定せずにレポートを作成します。
2. レポートを BI プラットフォームリポジトリに追加します。
3. Crystal Reports を使用してプラットフォームにログインします。
4. ホームレポートと出力先レポートの間にハイパーリンクを作成します。

Crystal Reports で自動的に、レポート間に相対リンクを確立するか絶対リンクを確立するかが決定されます。プラットフォームでは、相対リンクは同じオブジェクトパッケージ内のレポートに割り当てられ、絶対リンクは個別のレポートオブジェクトまたはインスタンスに割り当てられます。

17.13 Web Intelligence ドキュメントのユニバースの表示

CMC では、Web Intelligence ドキュメントが使用するユニバースを表示できます。

ユニバースとは、データベースで利用できる情報の表現です。ユニバース内のオブジェクトを使用して、Web Intelligence ドキュメントへのクエリを作成します。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. ユニバースを表示する Web Intelligence ドキュメントオブジェクトを選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **レポートユニバース** をクリックします。

ドキュメントで使用されているユニバースの一覧が表示されます。

17.14 Crystal レポートでのアラート表示

セントラル管理コンソール (CMC) で、Crystal レポートのアラートを表示することができます。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 表示する Crystal レポートが含まれるフォルダまたはカテゴリを見つけて、オブジェクトを選択します。
3. **その他のアクション** > **アラート** を選択します。

アラート ダイアログボックスには、アラートを生成したインスタンスが表示されます。

4. インスタンスタイトルをダブルクリックしてインスタンスを開きます。

18 プログラムオブジェクト

18.1 コマンドライン引数の指定

[管理]メニューの[デフォルト設定]コマンドで、プログラムオブジェクトごとにコマンドライン引数を指定できます。

プログラムのコマンドラインインターフェースでサポートされている引数であれば、どのような引数でも指定できます。引数は、解析されずに、コマンドラインインターフェースに直接渡されます。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアで、プログラムオブジェクトを選択します。
2. ► 管理 ► デフォルト設定 ▼ を選択します。
3. デフォルト設定ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧のプログラムパラメータをクリックします。
4. 引数ボックスには、コマンドラインで使用するのと同じ形式で、プログラムのコマンドライン引数を入力します。

たとえば、プログラムにループオプションがある場合に、ループ値を 100 に設定するには、「**-loops 100**」と入力します。
5. 保存して閉じるをクリックします。

18.2 プログラムオブジェクトの作業ディレクトリの設定

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアで、プログラムオブジェクトを選択します。
2. ► 管理 ► デフォルト設定 ▼ を選択します。
3. デフォルト設定ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧のプログラムパラメータをクリックします。
4. 作業ディレクトリボックスに、プログラムオブジェクトの作業ディレクトリとして設定するディレクトリの完全パスを入力します。

たとえば、Windows で `working_directory` という作業ディレクトリを作成した場合は、**C:\working_directory** と入力します。Unix では、**/working_directory** と入力します。
5. 保存して閉じるをクリックします。

18.3 プログラムオブジェクトのデフォルトの作業ディレクトリの変更

1. CMC のサーバ管理エリアを表示します。
2. プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server を選択します。

Adaptive Job Server がプログラムスケジュールサービスをホストしているかどうかを確認するには、サーバを選択して、**管理 > プロパティ** を選択します。

3. **管理 > プロパティ** を選択します。
4. **プロパティ** ダイアログボックスの**一時ディレクトリ**ボックスで、作業ディレクトリとして設定するディレクトリの完全パスを入力します。
5. **保存して閉じる** をクリックします。

18.4 外部ファイルまたは補助ファイルへのパスの指定

外部ファイルまたは補助ファイルの場所をバイナリファイル、バッチファイル、およびシェルスクリプトに指定する必要があります。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. パスを指定する実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. **管理 > デフォルト設定** を選択します。
4. **[デフォルト設定]** ダイアログボックスで、**[プログラムパラメータ]** をクリックします。
5. **外部依存**ボックスに、ファイルの完全パスを入力し、**追加** をクリックします。
6. 外部依存を編集または削除するには、**[外部依存]** でパスを選択して、**[編集]** または **[削除]** をクリックします。
7. パスを指定する外部ファイルまたは補助ファイルごとに手順 5 を繰り返します。
8. **保存して閉じる** をクリックします。

18.5 File Repository Server への外部ファイルまたは補助ファイルのアップロード

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. ファイルをアップロードする実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. **アクション > 関連ファイル** を選択します。
4. **参照** をクリックして、必要なファイルを見つけ、**ファイルの追加** をクリックします。
5. アップロードする各ファイルに対してステップ 4 を繰り返します。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

18.6 環境変数の追加

CMC では、環境変数の追加または変更を行って実行可能プログラムオブジェクトを設定することができます。

既存の環境変数を変更すると、デフォルトの変数を書き換えられます (変数に変更が付け足されるものではありません)。ただし、環境変数に対する変更は、情報プラットフォームサービスがプログラムを実行する一時的なシェル内でのみ有効です。そのため、プログラムが終了すると環境変数は破棄されます。

たとえば、次のように path 変数を設定して、ユーザの bin ディレクトリを既存のパスに付加します。

- Windows では、次のように入力します。 `path=%path%;c:\usr\bin`
- UNIX では、次のように入力します。 `PATH=$PATH:/usr/bin`

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 環境変数を追加する実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、**プログラムパラメータ** をクリックします。
5. **環境変数** ボックスで、環境変数を `<name>=<value>` のように入力して、**追加** をクリックします。

`<name>` は環境変数名で、`<value>` は環境変数の値です。情報プラットフォームサービスは、お使いのオペレーティングシステムに適した構文を使用して、環境変数を設定します。ただし、UNIX では、以下の規則に従って大文字/小文字を適切に使い分けます。たとえば、UNIX では name の値をすべて大文字にする必要があります。

6. **保存して閉じる** をクリックします。

18.7 Java プログラムの必須パラメータの指定

Java プログラムのスケジュールと実行を正常に行うには、SAP BusinessObjects Enterprise Java SDK の IProgramBase インタフェースを実装する .class ファイルの基本名を情報プラットフォームサービスに指定する必要があります。

Java Runtime Environment は、Adaptive Job Server を実行する各マシン上にインストールする必要があります。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 必須パラメータを指定する Java プログラムオブジェクトを選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **プログラムパラメータ** をクリックします。
5. **実行するクラス** ボックスに、SAP BusinessObjects Enterprise Java SDK の IProgramBase (com.businessobjects.sdk.plugin.desktop.program.IProgramBase) を実装する .class ファイルの基本名を入力します。
たとえば、ファイル名が Arius.class の場合は、**Arius** と入力します。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

18.8 Java プログラムが他のファイルにアクセスできるようにする設定

Java プログラムが Java ライブラリといったプログラムスケジューラサービスマシン上のファイルにアクセスできるように設定することができます。

Java Runtime Environment は、Adaptive Job Server を実行する各マシン上にインストールする必要があります。

1. CMC の [フォルダ管理](#) エリアに移動します。
2. プログラムスケジューラサービスをホストする Adaptive Job Server 上のファイルへのアクセスを付与する Java プログラムオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [プログラムパラメータ](#) をクリックします。
5. [クラスパス](#) ボックスに、プログラムスケジューラサービスをホストする Adaptive Job Server に保存されている、必要な Java ライブラリファイルそれぞれの完全パスを入力します。
パスは、ご使用のオペレーティングシステムのクラスパス区切り記号で区切ります。たとえば、パスを区切るために、Windows の場合はセミコロンを、Unix の場合はコロンを使用します。
6. [保存して閉じる](#) をクリックします。

18.9 プログラムオブジェクトのユーザアカウントの指定

Java Runtime Environment は、Adaptive Job Server を実行する各マシン上にインストールする必要があります。

1. CMC の [フォルダ管理](#) エリアを表示します。
2. ユーザアカウントを指定する実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [プログラムのログオン](#) をクリックします。
5. [ユーザ名](#) ボックスと [パスワード](#) ボックスに、プログラムを実行するときのアカウントの認証情報を入力します。
6. [保存して閉じる](#) をクリックします。

19 オブジェクトパッケージ

19.1 新しいオブジェクトパッケージを作成する

1. CMC の[フォルダ]管理エリアに移動し、オブジェクトパッケージを作成するフォルダに移動します。
2. ► 管理 ► 新規 ► オブジェクトパッケージ の順にクリックします。
[オブジェクトパッケージ]ダイアログボックスが表示されます。
3. オブジェクトパッケージのタイトル、説明、およびキーワードを入力します。
4. [OK]をクリックします。

オブジェクトパッケージがシステムに追加されると、そのオブジェクトパッケージのプロパティ、コンテンツ、スケジュール情報、出力先、ユーザアクセス権、オブジェクト設定、および通知を変更できます。それには、► 管理 ► プロパティ または ► 管理 ► デフォルト設定 を使用します。

19.2 新しいオブジェクトをオブジェクトパッケージに追加する

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトパッケージをダブルクリックします。
オブジェクトパッケージのコンテンツは、詳細パネルに表示されます。
2. 追加するオブジェクトに応じて、► 管理 ► 追加 ► ローカルドキュメント または [プログラムファイル] をクリックします。
このダイアログボックスは、選択したオプションに応じて変わります。
3. [参照] をクリックして、追加するオブジェクトを選択します。
4. 適切なプロパティを設定します。
プログラムオブジェクトを追加する場合は、[実行ファイル]、[Java]、または [スクリプト] をクリックしてプログラムの種類を指定します。
5. [OK] をクリックします。

19.3 オブジェクトパッケージのコンポーネントエラーオプションを設定する

このタスクを実行して、実行時のコンポーネントのエラーに対するオブジェクトパッケージの対処法を指定できます。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアでオブジェクトパッケージに移動し、選択します。
2. ► 管理 ► デフォルト設定 をクリックします。

3. ナビゲーション一覧で [\[コンポーネントのエラー\]](#) をクリックします。
4. [\[個々のコンポーネントにエラーが発生するとスケジュールされたパッケージが失敗する\]](#) チェックボックスをオンまたはオフにします。
5. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

20 スケジュール

20.1 オブジェクトのスケジュール

オブジェクトのデフォルトのスケジュール設定をすばやく変更するには、[スケジュール] ダイアログボックスの [デフォルト設定] をクリックし、スケジュールオプションを設定して、[保存] をクリックします。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ► を選択します。
[スケジュール] ダイアログボックスが表示され、オブジェクトのデフォルト設定が示されます。
4. インスタンスのタイトルを入力します。
5. [繰り返し] をクリックし、定期的なスケジュールパターンを選択します。
たとえば、1週間に1回オブジェクトを実行するには、[週単位] を選択します。
6. 実行オプションおよびスケジュールパラメータを指定します。

① 注記

オプション [データプロバイダごとに個別の CSV を生成する] は、現在 [FTP] および [ファイルシステム] の出力先にのみ使用できます。

たとえば、[月曜日]、[水曜日]、および [金曜日] を選択します。

7. [スケジュール] をクリックします。

BI プラットフォームにより、スケジュールされたインスタンスが作成され、指定したスケジュールに従ってそのインスタンスが実行されます。スケジュールされたインスタンスは、オブジェクトの [履歴] ダイアログボックスに表示されます。

① 注記

また、セントラル管理コンソール (CMC) または BI ラウンチパッドで、BI コンテンツをスケジュールする際に、複数の出力先へのレポートを一度にスケジュールすることもできます。CMC を使用する場合、ここで選択する値がラウンチパッドのデフォルトのスケジュール値になります。

出力先オプションのスケジュールの詳細については、[出力先オプションのスケジュール \[415 ページ\]](#)を参照してください。

関連情報

[定期スケジュールパターン \[269 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[269 ページ\]](#)

20.1.1 定期スケジュールパターン

まず定期的なスケジュールパターンを選択し、次に定期スケジュールパターンの実行オプションを選択します。

定期スケジュールパターン	説明
今すぐ	ユーザが [スケジュール] をクリックするとオブジェクトが実行されます。
1 回	オブジェクトは 1 回だけ実行されます。実行時間、開始日、終了日を指定します。
時間単位	オブジェクトは時間ごとに実行されます。オブジェクトの実行頻度、実行時間、開始日、終了日を指定します。
日単位	オブジェクトは <N> 日ごとに 1 回だけ実行されます。オブジェクトの実行頻度、実行時間、開始日、終了日を指定します。
週単位	オブジェクトは毎週実行されます。実行日、実行時間、開始日、終了日を指定します。
月単位	オブジェクトは <N> カ月ごとに実行されます。オブジェクトの実行頻度、実行時間、開始日、終了日を指定します。
N 日	オブジェクトは毎月 <N> 日に実行されます。実行する月の日、実行時間、開始日、終了日を指定します。
第 1 月曜日	オブジェクトは毎月第 1 月曜日に実行されます。実行時間、開始日、終了日を指定します。
月末日	オブジェクトは毎月末日に実行されます。開始日と終了日を指定します。
第 N 週の X 曜日	オブジェクトは各月特定の週の特定の曜日に実行されます。実行する週および曜日、実行時間、開始日、終了日を指定します。
カレンダー	オブジェクトはカレンダーで指定された日に実行されます。
業務時間	オブジェクトは、営業日および [業務時間] で指定された特定の曜日の特定の時間帯に実行されます。

関連情報

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[269 ページ\]](#)

20.1.2 定期的なスケジュールパターンの実行オプション

まず定期的なスケジュールパターンを選択し、次にパターンの実行オプションを選択します。オブジェクトによって使用できる実行オプションが異なります。変数が含まれる実行オプションを選択すると、BI プラットフォームに変数のデフォルト値が表示されます。デフォルト値は必要に応じて変更できます。

定期的なスケジュールパターンの実行オプション	説明
開始日時	<p>これらの一覧は、[今すぐ] および [カレンダー] 以外のすべての定期的なスケジュールパターンで表示されます。</p> <p>オブジェクトの開始時間 (時、分、および午前/午後) および日付を選択します。</p> <p>プラットフォームでは、開始時間を過ぎると、指定されたスケジュールに従って可能な限り早くオブジェクトが実行されます。デフォルトは、現在の日時です。たとえば、3 カ月後の開始時間を指定すると、プラットフォームでは、他のすべての基準が満たされている場合でも、その開始日が経過するまでオブジェクトは実行されません。開始日後に、プラットフォームで指定された時間にレポートが実行されます。</p>
終了日時	<p>これらの一覧は、[今すぐ] および [カレンダー] 以外のすべての定期的なスケジュールパターンで表示されます。</p> <p>オブジェクトの終了時間 (時、分、および午前/午後) および日付を選択します。</p> <p>終了時間を過ぎると、プラットフォームでは、オブジェクトがそれ以上実行されません。デフォルトは遠い将来における現在の時刻と日付で、それまでは何度もオブジェクトが実行されます。</p>
時間 (N) および分 (X)	<p>これらの一覧は、時間単位 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>オブジェクトの実行間隔 (時間単位および分単位) を選択します。<N> または <X> の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎時間レポートが実行されます。</p>
日数 (N)	<p>このボックスは、日単位 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>オブジェクトの実行間隔 (日単位) を入力します。<N> の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎日レポートが実行されます。</p>
月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日、および日曜日	<p>これらのチェックボックスは、週単位 および 業務時間 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>ジョブを実行する週の各曜日の横のチェックボックスを選択します。</p>
月 (N)	<p>この一覧は、月単位 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>オブジェクトの実行間隔 (月単位) を入力します。<N> の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎月レポートが実行されます。</p>

定期的なスケジュールパターンの実行オプション	説明
日 (N)	<p>このボックスは、N 日 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>ジョブを実行する月の日を選択します。 <N> の値を選択しない場合、プラットフォームでは毎日レポートが実行されます。</p>
週 (N) および日数 (X)	<p>これらの一覧は、定期的なスケジュールパターン 第 N 週の X 曜日 を選択すると表示されます。</p> <p>オブジェクトを実行する月の週および週の曜日を選択します。 <N> または <X> の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎日レポートが実行されます。</p>
業務時間開始	<p>このボックスは、[業務時間] 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>業務または稼働日の開始時刻を入力します。</p>
業務時間終了	<p>このボックスは、[業務時間] 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>業務または稼働日の終了時刻を入力します。</p>

20.2 デフォルトの Enterprise の場所へのオブジェクトのスケジュール

インスタンスを別の場所ではなく Output File Repository Server (FRS) のみに保存する場合は、出力先として **[デフォルトの Enterprise の場所]** を使用します。

1. CMC の **[フォルダ]** 管理エリアに移動します。
2. デフォルトの出力先を設定するオブジェクトを選択します。
3. **▶ アクション ▶ スケジュール ▶** を選択します。
4. **[出力先]** をクリックします。
5. **[出力先]** リストで、**[デフォルトの Enterprise の場所]** を選択します。
6. **[スケジュール]** をクリックします。

20.3 ファイルの場所に対するオブジェクトのスケジュール

オブジェクトをスケジュールするときに、出力先がアンマネージドディスクになるようにオブジェクトを設定できます。この場合、BI プラットフォームは Output File Repository Server (FRS) および指定された出力先に出力インスタンスを保存します。

ファイルの場所に対してオブジェクトをスケジュールするための条件は、次のとおりです。

- ファイルの場所は、処理サーバ上のローカルディレクトリである必要があります。Windows 上のサーバでは、保存場所として Universal Naming Convention (UNC) パスまたはローカルディレクトリを指定できます。
- ファイルの場所は、Adaptive Job Server で有効化と設定が行われている必要があります。
- 処理サーバには、ファイルの場所に対する十分なアクセス権が必要です。

オブジェクトが Web Intelligence ドキュメントまたはオブジェクトパッケージの場合は、出力先としてアンマネージドディスクを選択できません。ただし、オブジェクトパッケージの場合は、オブジェクトパッケージ内の個々のオブジェクトの出力先をアンマネージドディスクに設定することができます。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ▼ を選択します。
4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[ファイルシステム] を選択します。
6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。
デフォルト設定を使用チェックボックスをオンにした場合は、ステップ 9 に進んでください。
8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [ユーザ名] ボックスに、出力先ディレクトリにファイルを保存可能なアクセス権を持つユーザ名を入力します。
 - b. [パスワード] ボックスに、出力先ディレクトリにアクセスするのに必要なユーザパスワードを入力します。
 - c. [ディレクトリ] ボックスに、インスタンスの送信先となるローカルハードディスクの場所、マップされた場所、またはディレクトリへの UNC パスを入力します。
 - d. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。

④ 注記

BI 4.3 P03 パッチ 8 以降では、ファイル出力先へのスケジュール時にユーザ名とパスワードを追加する必要があります。これらの変更は、SAP セキュリティノート [3387498](#) に記載されている要件と一致しています

9. [スケジュール] をクリックします。

20.4 FTP サーバへのオブジェクトのスケジュール

オブジェクトをスケジュールするときに、オブジェクトの出力先を FTP(File Transfer Protocol)サーバに設定できます。FTP サーバに接続するには、FTP サーバにファイルをアップロードできるアクセス権を持つユーザを指定する必要があります。FTP の出力先を指定する場合、出力インスタンスは、システムにより Output FRS および指定した出力先に保存されます。

この出力先を使用する前に、Adaptive Job Server で出力先が有効になっており、設定されている必要があります。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ▼ を選択します。

4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[FTP サーバ] を選択します。
6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。
チェックボックスをオンにした場合は、手順 9 に移動してください。
8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [ホスト] ボックスに、インスタンスを送信する FTP サーバホストコンピュータの IP アドレスを入力します。
 - b. [ポート] ボックスに、インスタンスを送信する FTP サーバのポートを入力します。
 - c. [ユーザ名] ボックスに、FTP サーバへのオブジェクトのアップロードが可能なアクセス権を持つユーザ名を入力します。
 - d. [パスワード] ボックスに、FTP サーバにアクセスするのに必要なユーザパスワードを入力します。
 - e. [アカウント] ボックスに、FTP サーバにアクセスするのに必要なアカウントを入力します。
 - f. [ディレクトリ] ボックスに、インスタンスを送信する FTP ディレクトリへのパスを入力します。
 - g. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
9. [スケジュール] をクリックします。

20.5 SFTP サーバへのオブジェクトのスケジュール

オブジェクトをスケジュールするときに、オブジェクトの出力先を SFTP (Secure File Transfer Protocol) サーバに設定できます。SFTP サーバに接続するには、SFTP サーバにファイルをアップロードできるアクセス権を持つユーザを指定する必要があります。SFTP の出力先を指定する場合、出力インスタンスは、システムにより Output FRS および指定した出力先に保存されます。

この出力先を使用する前に、Adaptive Job Server で出力先が有効になっており、設定されている必要があります。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアにジャンプします。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ▼ を選択します。
4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[SFTP サーバ] を選択します。
6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。
チェックボックスをオンにした場合は、手順 9 に移動してください。
8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [ホスト] ボックスに、インスタンスを送信する SFTP サーバホストコンピュータの IP アドレスを入力します。
 - b. [ポート] ボックスに、インスタンスを送信する SFTP サーバのポートを入力します。
 - c. [ユーザ名] ボックスに、SFTP サーバへのオブジェクトのアップロードが可能なアクセス権を持つユーザ名を入力します。
 - d. [パスワード] ボックスに、SFTP サーバにアクセスするのに必要なユーザパスワードを入力します。
 - e. [アカウント] ボックスに、SFTP サーバにアクセスするのに必要なアカウントを入力します。

- f. [ディレクトリ] ボックスに、インスタンスを送信する SFTP ディレクトリへのパスを入力します。
 - g. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
 - h. [フィンガープリント] ボックスに、SFTP サーバのホストキーフィンガープリントを入力します。
9. [スケジュール] をクリックします。

20.6 電子メールに対するオブジェクトのスケジュール

[電子メール] 出力先を選択する場合、BI プラットフォームでは Output File Repository Server に出力インスタンスが保存され、指定した電子メールアドレスに添付ファイルとしてインスタンスのコピーが送信されます。

この出力先を使用する前に、Adaptive Job Server で電子メール (SMTP) 出力先が有効になっており、設定されている必要があります。

Crystal レポートおよびその他のオブジェクトインスタンスは、Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) メールサポートを経由して電子メール出力先に送信されます。

BI プラットフォームは、MIME (Multipurpose Internet Mail Extensions) エンコーディングをサポートしています。

1. CMC で、[フォルダ] 領域を選択します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ► を選択します。
4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[電子メール] を選択します。
6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。
デフォルト設定を使用チェックボックスをオンにした場合は、ステップ 9 に進んでください。
8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [差出人] ボックスに、返信先の電子メールアドレスを入力します。
 - b. [宛先] ボックスに、インスタンスを送信する各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - c. [CC] ボックスに、電子メールおよびインスタンスのコピーを送信する各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - d. [BCC] ボックスに、電子メールおよびインスタンスのコピーを送信する非公開の各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - e. [件名] ボックスに、電子メールの件名を入力します。
 - f. [メッセージ] ボックス (電子メールの本文) において、さまざまな書式設定オプションを含むカスタムツールバーを含むリッチテキストエディタを使用して、メッセージコンテンツをカスタマイズできるようになりました。

① 注記

電子メールにイメージを挿入すると、使用されているイメージリンクに送信者および受信者の両方がアクセスできる場合、イメージが自動的にダウンロードされます。

- g. [添付ファイルの追加] チェックボックスをオンまたはオフにします。
 - h. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
9. **スケジュール** をクリックします。

関連情報

[Job Server の出力先の有効化または無効化 \[276 ページ\]](#)

SMTP over SSL のセットアップ

SMTP over SSL をセットアップするには、サーバとクライアントのシステムに同じ証明書があることが必要です。

SMTP over SSL をセットアップするには、次の手順に従います。

1. Windows プラットフォームで、<install_dir>%SAP BusinessObjects%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64 にジャンプします。また、BI プラットフォームに接続するクライアントの場合は、<install_dir>%SAP BusinessObjects%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win32_x86 にジャンプします。

① 注記

サポートされているその他すべてのプラットフォームの、それぞれのフォルダに移動します。

2. 証明書に "certificate.crt" と名前を付けます。

たとえば、SMTP サーバへの接続中に、サーバは証明書の詳細を送信します。証明書の詳細を未使用のテキストファイルにコピーして、"certificate.crt" に名前を変更する必要があります。これは、Windows プラットフォームでは win64_x64 フォルダに、クライアントの場合は win32_x86 フォルダに置く必要があります。

これで、SMTP over SSL がセットアップされました。

① 注記

ユーザが [\[SSL を有効にする\]](#) チェックボックスにチェックを入れている場合、セキュリティ保護されたチャネルが有効になります。これにより、セキュリティ保護された SMTP over SSL 送信が可能になります。

20.7 ユーザの BI 受信ボックスに対するオブジェクトのスケジュール

オブジェクトをスケジュールする際に、1 つまたは複数のユーザの BI 受信ボックスにインスタンスを送信するように、オブジェクトを設定できます。BI プラットフォームでは、Output File Repository Server (FRS) にインスタンスが保存され、指定した BI 受信ボックスにインスタンスのコピーが送信されます。

デフォルトでは、BI 受信ボックスの出力先が Adaptive Job Server で有効になっており、設定されています。

1. CMC の [\[フォルダ\]](#) 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. [▶ アクション ▶ スケジュール ▶](#) を選択します。
4. [\[出力先\]](#) をクリックします。
5. [\[出力先\]](#) リストで、[\[BI 受信ボックス\]](#) を選択します。

6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。
デフォルト設定を使用チェックボックスをオンにした場合は、ステップ9に進んでください。
8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [利用可能な受信者] で、インスタンスを送信するユーザを選択します。
 - b. [ターゲット名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
 - c. [送信者の名前] で、[ショートカット] または [コピー] を選択します。
9. [スケジュール] をクリックします。

20.8 Job Server の出力先の有効化または無効化

デフォルトでは、BI プラットフォームでのスケジュールされたレポートまたはプログラムオブジェクトの実行時に、作成された出力インスタンスが Output File Repository Server (FRS) に保存されます。オブジェクトをスケジュールしたり送信したりする出力先 (デフォルトの Enterprise の場所以外) を選択した場合、BI プラットフォームは、Output FRS に出力インスタンスを保存し、指定した出力先にコピーを保存します。

出力先を選択する前に、Adaptive Job Server で出力先が有効になっており、設定されている必要があります。


デフォルトでは、レポートおよびドキュメントを配信できるように、BI 受信ボックスの出力先が Adaptive Job Server で有効になっており、設定されています。Adaptive Job Server に出力先を追加して設定できます。

1. CMC の [サーバ管理](#) エリアを表示します。
2. 出力先を有効または無効にする Adaptive Job Server を選択します。
3. [管理](#) > [プロパティ](#) を選択します。
4. [プロパティ] ダイアログボックスで、[出力先] をクリックします。
5. 次の操作のいずれかを実行します。
 - 出力先を有効にするには、[出力先一覧](#) で出力先を選択し、[追加](#) をクリックし、設定します。
 - 出力先を無効にするには、[出力先] リストで出力先を選択し、[削除](#) をクリックします。
6. [保存](#) または [保存して閉じる](#) をクリックします。

20.9 イベントの発生に基づくオブジェクトのスケジュール

イベントの発生後にスケジュールされたジョブを実行する場合は、このタスクを実行します。

1. CMC の [フォルダ管理](#) エリアを表示します。
2. イベントの発生に基づいて実行するオブジェクトを選択します。
3. [アクション](#) > [スケジュール](#) を選択します。
4. ナビゲーション一覧で [繰り返し](#) をクリックします。
5. [オブジェクトの実行] リストで、実行オプションを選択します。
6. 必要に応じて、オブジェクトの他の定期的なスケジュールオプションを設定します (開始日、終了日など)。

7. ナビゲーション一覧で[イベント]をクリックします。
8. [利用可能なイベント](#)で、1つまたは複数のイベントを選択し、をクリックしてそのイベントを[待機するイベント](#)リストに追加します。

① 注記

いずれかのイベントが発生した後にスケジュールされたオブジェクトをトリガする場合は、ドロップダウンメニューから[任意のイベント](#)を選択します。

9. [スケジュール](#)をクリックします。

関連情報


[定期スケジュールパターン \[269 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[269 ページ\]](#)

[イベントとスケジュール \[292 ページ\]](#)

20.10 イベントを発生させるオブジェクトのスケジュール

スケジュールされたジョブの実行時にイベントを発生させる場合は、このタスクを実行します。

1. CMC の [\[フォルダ\]](#) 管理エリアに移動します。
2. イベントを発生させるオブジェクトを選択します。
3. [▶ アクション ▶ スケジュール ▶](#)を選択します。
4. ナビゲーション一覧で[\[繰り返し\]](#)をクリックします。
5. [\[オブジェクトの実行\]](#) リストで、実行オプションを選択します。
6. 必要に応じて、オブジェクトの他の定期的なスケジュールオプションを設定します (開始日、終了日など)。
7. ナビゲーション一覧で[\[イベント\]](#)をクリックします。
8. [利用可能なスケジュールイベント](#)で、1つまたは複数のイベントを選択し、をクリックしてそのイベントを[完了時に発生させるイベント](#)リストに追加します。
スケジュールに基づくイベントだけを選択できます。
9. [\[スケジュール\]](#)をクリックします。

関連情報

[定期スケジュールパターン \[269 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[269 ページ\]](#)

20.11 インスタンスに対する成功または失敗の通知の設定

通知オプションが利用可能でも選択されていないときは、ラベルは "無効" となります。通知タイプが使用中の場合、ラベルは "有効" となります。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアに移動します。
2. 通知を設定するオブジェクトを選択します。
3. **アクション** > **スケジュール** を選択します。
4. ナビゲーション一覧で **[通知]** をクリックします。
5. 監査通知を使用するには、**[監査通知]** をクリックし、以下のアクションを実行します。
 - ジョブの成功時にレコードを監査データベースに送信する場合は、**ジョブの実行の成功** チェックボックスをオンにします。
 - ジョブの失敗時にレコードを監査データベースに送信する場合は、**ジョブの実行の失敗** チェックボックスをオンにします。
6. 電子メール通知を使用するには、**[電子メール通知]** をクリックし、以下のアクションを実行します。
 - ジョブの成功時に電子メールを送信する場合は、**ジョブの実行の成功** チェックボックスをオンにします。電子メールのコンテンツと受信者を指定する場合は、**ここで使用する値を設定する** を選択し、**差出人と宛先** ボックスに電子メールアドレスを入力し、件名を入力して、メッセージを入力します。複数のアドレスまたは配信リストの区切り文字には、セミコロン (;) を使用してください。
 - ジョブの失敗時に電子メールを送信する場合は、**ジョブの実行の失敗** チェックボックスをオンにします。電子メールのコンテンツと受信者を指定する場合は、**ここで使用する値を設定する** を選択し、**差出人と宛先** ボックスに電子メールアドレスを入力し、件名を入力して、メッセージを入力します。複数のアドレスまたは配信リストの区切り文字には、セミコロン (;) を使用してください。

デフォルトで、通知はサーバのデフォルトの電子メール宛先に送信されます。

20.12 アラート通知の設定

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアに移動します。
2. アラートを設定するレポートオブジェクトを選択します。
3. **アクション** > **スケジュール** を選択します。
4. **[スケジュール]** ウィンドウで **[通知]** をクリックします。
5. **[アラート通知を有効にする]** チェックボックスをオンにします。
6. **[デフォルト設定を使用]** をオンにしてデフォルトの Adaptive Job Server 設定を使用してアラート通知を配信するか、**[カスタム設定]** を選択して電子メール設定を指定します。

CMC の **[サーバ]** エリアで、デフォルトの Adaptive Job Server の設定を変更できます。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。
7. 受信者がレポートの表示に使用するビューアの URL を入力するか、デフォルトビューアを選択します。

ビューア URL には、W3C (World Wide Web Consortium) エンコーディングを使用する必要があります。たとえば、パス内のスペースを **%20** に置き換えます。詳細については、<http://www.w3.org/> を参照してください。

ビューア URL をデフォルトとして設定するには、CMC の [アプリケーション](#) エリアにある [セントラル管理コンソール](#) を選択し、[アクション](#) ▶ [処理設定](#) を選択して [URL](#) (URL エンコードされている必要があります) ボックスに URL を入力します。

ビューア URL は、アラート通知電子メール内にハイパーリンクとして表示されます。

8. アラート通知に含めるアラートレコードの最大数を入力します。

アラート通知内のハイパーリンクは、アラートを発生させたレコードが含まれるレポートページを表示します。

SAP Crystal Reports でアラート名およびステータスを入力します。

9. [スケジュール](#) をクリックします。

20.13 出力ファイル形式の選択

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアに移動します。
2. 出力ファイル形式を選択するレポートオブジェクトを選択します。
3. [アクション](#) ▶ [スケジュール](#) を選択します。
4. [形式](#) をクリックします。
5. 出力形式を選択します。
たとえば、Crystal レポートの場合は、[選択したドキュメントの形式オプション](#) で形式を選択します。Web Intelligence ドキュメントの場合は、[出力形式](#) で形式を選択します。
6. 必要に応じて残りのスケジュールオプションを設定します。
7. [スケジュール](#) をクリックします。

20.14 Web Intelligence ドキュメントのキャッシュ形式の選択


スケジュールされた Web Intelligence ドキュメントを BI プラットフォームが実行する際には、生成されたインスタンスが Output File Repository Server (FRS) に保存されます。キャッシュ形式を選択すると、プラットフォームは適切なレポートサーバにインスタンスをキャッシュします。キャッシュ形式を選択しないと、システムはインスタンスをキャッシュしません。

キャッシュ形式の選択は、Web Intelligence ドキュメントにのみ適用され、Crystal レポートには適用されません。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアに移動します。
2. キャッシュ形式を選択する Web Intelligence ドキュメントオブジェクトを選択します。
3. [アクション](#) ▶ [スケジュール](#) を選択します。
4. [キャッシュ](#) をクリックします。
5. [キャッシュで利用可能な形式](#) で、[Microsoft Excel](#)、[標準の HTML](#)、または [Adobe Acrobat](#) を選択します。

複数の形式を選択できます。

キャッシュは、選択した形式で事前ロードされます。

6. **利用可能なロケール**で、キャッシュの事前ロードで使用するロケールを選択し、 をクリックしてロケールを**選択されたロケール**リストに移動します。
複数のロケールを選択できます。この Web Intelligence ドキュメントをスケジュールすると、プラットフォームはこれらのロケールでドキュメントのキャッシュ済みバージョンを生成します。
キャッシュは、選択したロケールで事前ロードされます。
7. 必要に応じて残りのスケジュールオプションを設定します。
8. **スケジュール**をクリックします。

20.15 個々のユーザに対するレポートオブジェクトのスケジュール

1. CMC の**フォルダ**管理エリアに移動します。
2. スケジュールするレポートオブジェクトを選択します。
3. **アクション > スケジュール** を選択します。
4. **[対象指定]** をクリックします。
5. **[現在のユーザだけを対象にスケジュールする]** または **[スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する]** を選択します。
6. **スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する** を選択した場合、レポートインスタンスを生成するユーザまたはユーザグループを見つけて選択し、> をクリックして**選択**リストに追加します。
選択リストからユーザまたはグループを削除するには、ユーザまたはグループを選択し、< をクリックします。
7. 他のスケジュールオプションを指定し、**[スケジュール]** をクリックします。

関連情報

[定期スケジュールパターン \[269 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[269 ページ\]](#)

20.16 スケジュール済みオブジェクトでのサーバまたはサーバグループの選択

スケジュールされたオブジェクトを実行するサーバまたはサーバグループを選択できます。これにより、負荷分散をさらに制御できます。

ユーザが Crystal レポートまたは Web Intelligence ドキュメントのインスタンスを表示しながら最新表示するときに BI プラットフォームで使用するサーバグループを選択することができます。また、システムリソースを独占しないように、特定のサーバグループ上でプログラムジョブを実行できます。

このタスクのオプションは、**管理** ▶ **デフォルト設定**、および**サーバグループの表示** (Crystal レポート) または **Web Intelligence 処理設定** (Web Intelligence ドキュメント) を選択している場合に使用できます。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. **アクション** ▶ **スケジュール** を選択します。
4. ナビゲーション一覧で [**サーバグループのスケジュール**] をクリックします。
5. 使用するサーバの種類を、以下のように選択します。
 - **最初に見つけた利用可能なサーバを使用する**を選択すると、使用されているサーバグループに関係なく、できるだけ速やかにオブジェクトを実行します。
 - 複数のサーバが使用可能な場合に、サーバグループ内の特定のサーバを使用するには、**選択したグループに所属するサーバを優先して使用する**を選択します。
 - 指定したサーバグループを使用する場合は、**選択したグループに所属するサーバだけを使用する**を選択して、サーバグループを入力します。

プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server 上にローカルで保存されたファイルにアクセスする必要があるプログラムオブジェクトをスケジュールしている場合、Adaptive Job Server が複数存在するときは、プログラムを実行するサーバを指定する必要があります。

6. オブジェクトが配置されているサイトでオブジェクトを実行する場合は、**元のサイトで実行**チェックボックスをオンにします。
7. 必要に応じて他のスケジュールオプションを設定し、**スケジュール**をクリックします。

20.17 オブジェクトのインスタンスの管理

このタスクは、特定のオブジェクトのインスタンスを表示および管理する場合に実行します。すべてのオブジェクトのインスタンスを表示および管理するには、このタスクの代わりに、インスタンスマネージャを使用します。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. インスタンスを管理するオブジェクトを選択します。
3. **アクション** ▶ **履歴** を選択します。
4. インスタンス(複数可)を選択します。

このリストを最新表示するには、**[最新表示]**をクリックします。この場合、最初にインスタンスを選択する必要はありません。
5. **今すぐ実行**、**一時停止**、**再開**、**送信**、**再スケジュール**、または**削除**のいずれかを選択します。

今すぐ実行を選択すると、BI プラットフォームはオブジェクトをすぐに実行するようにスケジュールします。スケジュールされたジョブのステータスは、待機中になります。

関連情報

[インスタンスマネージャ \[282 ページ\]](#)

20.18 インスタンスマネージャ

インスタンスマネージャを使用すると、BI プラットフォームデプロイメント内のすべてのインスタンスを1つの場所から表示および管理できます。

インスタンスマネージャを使用して、次のタスクを実行できます。

- 特定のインスタンスを検索する
- 複数のインスタンスを選択し、それらに対して、一時停止、再開、削除などのバッチ操作を実行する
- 単一インスタンスの詳細情報を表示する
- インスタンスエラーの原因となっているシステムの問題を診断して解決する

インスタンスマネージャのデフォルトビューには、保留中のインスタンスがタイトル別に表示されます。 インスタンスに関する詳細情報を表示するには、インスタンスを選択し、ツールバーの[インスタンスの詳細](#)アイコンをクリックします。

例: インスタンスマネージャを使用したトラブルシューティング

管理者がCMC にログオンし、インスタンスマネージャを確認して、複数のジョブが失敗していることに気づいたとします。 管理者は一覧をフィルタ処理し、この2日間に失敗したジョブだけを表示すると、それらはすべて同じサーバで実行されていることがわかりました。 管理者は一覧をサーバ別に並べ替え、失敗したジョブがすべて同じサーバで実行されていることを確認します。 各失敗のエラーコードは同じでした。 管理者が1つのインスタンスの詳細情報を表示すると、データベース接続が正しく再接続されていないことがわかりました。 管理者はデータベース接続を正しく再接続し、インスタンスマネージャに戻って失敗したすべてのジョブを再実行します。

20.19 インスタンスの表示

インスタンスマネージャを使用すると、ステータス別やユーザ別にインスタンスのリストを表示することができます。

1. CMC の[フォルダ](#)管理エリアを表示します。
2. インスタンスを表示するオブジェクトを選択します。
3. [アクション](#) > [履歴](#) を選択します。
4. [インスタンスの日時列](#)で、表示するインスタンスをクリックします。

すべての列をデフォルトの幅で表示するには、右にスクロールします。 送信時刻、開始時刻、期間、繰り返し、または有効期限列を使用してインスタンスを並べ替えることはできません。

関連情報

[インスタンスマネージャ \[282 ページ\]](#)

20.20 インスタンスの一時停止

1. オブジェクトの履歴ダイアログボックスを開きます。
2. 一時停止するスケジュールされたインスタンスを選択して、一時停止をクリックします。

20.21 一時停止インスタンスの再開

1. オブジェクトの履歴ダイアログボックスを開きます。
2. 再開するスケジュールされたインスタンスを選択して、再開をクリックします。

20.22 インスタンスの削除

必要に応じてオブジェクトからインスタンスを削除できます。ステータスが"定期"または"待機"のスケジュールされたインスタンスと、ステータスが"成功"または"失敗"のレポートインスタンスまたはプログラムインスタンスの両方を削除できます。

1. オブジェクトの履歴ダイアログボックスを開きます。
2. 削除するインスタンスを選択し、削除をクリックします。

20.23 インスタンスに対する制限の設定

オブジェクトまたはフォルダレベルで制限を設定し、古いインスタンスの定期的なクリーンアップを自動化します。

BI プラットフォームに残すオブジェクト、ユーザ、またはユーザグループのインスタンスの数をオブジェクトレベルで制限することができます。また、ユーザまたはグループのインスタンスをプラットフォームに残す日数を制限することもできます。オブジェクトレベルで制限を設定すると、その制限は、フォルダに設定されているすべての制限を上書きします (つまり、オブジェクトはフォルダの制限を継承しません)。

フォルダレベルでは、制限を設定すると、その制限がサブフォルダなど、フォルダ内のすべてのオブジェクトに影響します。

1. CMC のフォルダ管理エリアに移動して、オブジェクトを選択します。
2. ▶ アクション ▶ 制限 を選択します。
3. 制限ダイアログボックスで、次のいずれかの操作を実行します。
 - オブジェクトあたりのインスタンス数を制限するには、オブジェクトのインスタンスが N 個より多い場合は、超過インスタンスを削除するチェックボックスをオンにし、システム上に残す必要があるインスタンスの最大数を入力します。
デフォルト値は 100 です。

- ユーザまたはグループのインスタンス数を制限するには、[超過インスタンスを削除するユーザ/グループ](#)チェックボックスをオンにし、[追加](#)をクリックします。さらに、ユーザまたはグループを選択し、>をクリックしてユーザまたはグループをリストに移動し、[OK](#)をクリックして、[インスタンスの制限列](#)にインスタンスの最大数を入力します。
デフォルト値は100です。
 - ユーザまたはグループのインスタンスを保存する日数を制限するには、[N 日後にインスタンスを削除するユーザ/グループ](#)チェックボックスをオンにし、[追加](#)をクリックします。さらに、ユーザまたはグループを選択し、>をクリックしてユーザまたはグループをリストに移動し、[OK](#)をクリックして、[最大日数列](#)にインスタンスの最大有効日数を入力します。
デフォルト値は100です。
4. [更新](#)をクリックします。

関連情報

[フォルダレベルでのレポートインスタンスの制限 \[242 ページ\]](#)

20.24 複数オブジェクトの即時実行

個々のオブジェクトをスケジュールする代わりに、[今すぐ実行](#)を使用して、CMC から複数のオブジェクトを実行できます。オブジェクトをすぐに実行すると、オブジェクトはデフォルトのスケジュール設定を使用して直ちに実行されます。

1. CMC の[フォルダ](#)管理エリアに移動します。
2. 実行するオブジェクトを見つけて選択します。
3. [アクション](#) > [今すぐ実行](#) をクリックします。

20.25 レポートインスタンスの言語を選択する

① 注記

このタスクは、SAP Crystal Reports のみに適用されます。

このタスクは、レポートインスタンスを異なる言語で生成する場合に実行します。

1. [\[スケジュール\]](#) ダイアログボックスで、[\[言語\]](#) をクリックします。
2. 言語オプションを選択します。
 - [優先表示ロケールでレポートをスケジュール](#)
このオプションを選択すると、基本設定で設定した優先表示ロケールに従ってレポートがスケジュールされ、そのロケールだけを使用してインスタンスが生成されます。
 - [複数のロケールでレポートをスケジュール](#)

このオプションを選択すると、レポートが複数の言語でスケジュールされます。このオプションを選択した場合は、ロケールの選択も必要になります。このためには、[すべてのロケール]一覧から [選択インスタンスロケール] 一覧にロケールを移動します。

3. 必要に応じて他のスケジュールパラメータを設定し、[スケジュール] をクリックします。

21 カレンダ

21.1 カレンダの作成

新しいカレンダを作成するためのテンプレートに使用するカレンダを作成すると便利です。このようなテンプレートカレンダは、必要に応じてコピーし、変更することができます。たとえば、週末と会社の休日を除くすべての日付を実行日とした、デフォルトの平日カレンダを作成することができます。

1. CMC の[カレンダ](#)管理エリアを表示します。
2. **管理** > **新規** > **新しいカレンダ** の順に選択します。
3. カレンダの名前と説明を入力し、**OK** をクリックします。

カレンダがシステムに追加され、**日付**タブでカレンダに実行日を追加することができます。

関連情報

[カレンダへの日付の追加 \[286 ページ\]](#)

21.2 カレンダへの日付の追加

カレンダを作成後、日付をカレンダに追加する前に年単位、四半期単位、または月単位の形式で表示することができます。また、日別または曜日別に定期的な日付を指定することができます。

既存のカレンダを変更する場合は、システム内で現在スケジュールされているすべてのインスタンスが BI プラットフォームによってチェックされ、カレンダを使用しているオブジェクトが更新されます。これらは、改定された日付スケジュールに従って実行されるように自動的に更新されます。

1. CMC の[カレンダ](#)管理エリアを表示します。
2. 日付を追加するカレンダを選択します。
3. **アクション** > **日付の選択** を選択します。
4. **年単位**、**四半期単位**、または**月単位**カレンダ形式を選択します。
5. 定期的な日付のカレンダを作成するには、**日別**または**曜日別**を選択します。
6. カレンダを実行する日を選択します。

実行日を削除するには、その日をクリックします。実行日として、週または月のすべての平日を選択するには、行ヘッダまたは列ヘッダをクリックします。

7. 作業が完了したら、**[保存]** をクリックします。

21.3 カレンダの削除

カレンダを削除すると、BI プラットフォームで、削除されたカレンダによってスケジュールされたオブジェクトがもう一度実行されます。

カレンダを削除する前に、そのカレンダが適用されていたオブジェクトのスケジュール情報を確認します。必要なオブジェクトを引き続き実行することもできます。必要な場合は、オブジェクトに対して別のカレンダまたは別の定期スケジュールパターンを選択できます。

1. CMC の [\[カレンダ\]](#) 管理エリアを表示します。
2. 削除するカレンダを選択します。
複数のカレンダを選択するには、`Ctrl` または `Shift` キーを押しながら各カレンダをクリックします。
3. [管理](#) [削除](#) を順に選択し、[OK](#) をクリックします。

関連情報

[オブジェクトのスケジュール \[268 ページ\]](#)

22 イベント

22.1 イベントについて

イベントは、サーバ上で発生するイベントやアクションに関する情報を提供するフラグやチェックポイントと似ています。イベントベースのスケジュールを使用すると、オブジェクトのスケジュールをより詳細に制御できます。指定した特定のイベントが発生した後にのみオブジェクトが処理されるように、イベントを設定できます。

CMC で使用できるイベントの一覧は以下のとおりです。

Crystal Report イベント

Crystal Report イベントでは、イベントで待機中のレポートがすでにスケジュールされていて実行可能である場合にのみ、レポート実行がトリガされます。Crystal Report イベントのベースとして新しいファイルを使用し、イベントのトリガを待機するようにレポートをスケジュールすることができます。

カスタムイベント

カスタムイベントは、"手動イベント" とも呼ばれます。それぞれのカスタムイベントには、イベント名と対応する説明、の 2 つのプロパティがあります。カスタムイベントは、ユーザの BI 受信ボックスとユーザの電子メール ID へのアラートをトリガするために使用されます。カスタムイベントでは、必要な条件を設定することによって、イベントのトリガに基づいたオブジェクトのスケジュールを作成するオプションも提供されます。

モニタリングイベント

モニタリングイベントは、サービスのヘルスステータスに関連するシステム生成イベントです。モニタリングは、CMC に組み込まれているアプリケーションで、管理者はシステムの健全性をモニタリングできます。モニタリングの最も重要なアスペクトは、監視とプローブです。

監視では、250 を超えるメトリクスのしきい値をシステム内に設定できます。設定したしきい値を超えると、通知が発行されます。

❖ 例

Output FRS で消費されるディスク領域をモニタリングする監視がある場合、消費量が指定したディスク領域の値に達すると、通知が発行されます。

システムイベント

システムイベントには、次の 2 種類があります。

- **ファイルベースのイベント**
ファイルベースのイベントは、パスの下に置かれている任意のファイルがベースとなります。たとえば、ファイルが複数のサーバパスの 1 つに置かれている場合、そのファイルのパスをベースとしてスケジュールすることによって、レポートを実行できます。ビジネス上の観点から、レポートに必要なテーブルを月次/週次/日次ベースでロードすることを考慮する場合、ロードしたレポートでファイルベースのシステムイベントがトリガされた後で、テキストファイルをパスの下に置きます。
- **スケジュールベースのイベント**
スケジュールベースのイベントは、レポートまたは BI オブジェクトを順次的に実行するために使用します。このイベント定義には、成功、失敗、および成功/失敗 の 3 つのアクションが含まれます。これは、指定された時点での実行中オブジェクトのステータスは成功か失敗のいずれかであると考えられるためです。

ユーザ通知

ユーザ通知イベントは、BI ラウンチパッドを使用している BI エンドユーザに重要なイベントに関する通知を発行するために、管理者が使用します。管理者は、スケジュールした時間 (たとえば、システム停止時間) に、選択したユーザに対して、重要なメッセージと他の関連情報を通知することができます。アラートメッセージは、ユーザがログオンすると、通知ポップアップとして BI ラウンチパッド画面に表示されます。

BW イベント

BW システムでは、[BOE トリガイイベント] という BW プロセスチェーンのプロセスタイプによって、BI プラットフォームの BW イベントがトリガされます。各 BW イベントは、イベント名とその説明で構成されます。BW イベントは、BW データソースに基づくレポートのイベントベースのスケジュールを設定するために使用されます。システム内のデータが変更されたときに、BW システムによって BW イベントがトリガされます。BW イベントで、ユーザの BI 受信ボックスおよび電子メール ID 宛のアラートをトリガすることもできます。

22.1.1 ユーザ通知

管理者は通知機能を使用して、CMC からユーザにアラートメッセージを送信することができます。管理者は、この機能を使用して、(たとえば、システム停止時間) に、選択したユーザに対して、重要なメッセージと他の関連情報を通知することができます。アラートメッセージは、ユーザがログオンすると、通知ポップアップとして BI ラウンチパッド画面の右上隅に表示されます。

22.1.1.1 通知イベントの作成

通知イベントは、スケジュール可能なプラグインです。新しい通知イベントの作成時に、管理者は「開始」と「終了」の日時を指定する必要があります。指定した通知「開始」日時になると、スケジュールを担う Adaptive Job Server (AJS) で、スケジュールインスタンスが作成されます。次に、AJS からラUNCHパッドのアラート受信ボックスにアラートがプッシュされます。これらの通知は、BI ラUNCHパッド画面の右上隅に表示されます。

通知イベントを作成するには、次の手順を実行します。

1. CMC にログオンします。
2. CMC のホームページで、ドロップダウンメニューから **[イベント]** を選択します。
3. 左側の **[イベント]** ペインで、**[ユーザ通知]** を右クリックし、**▶ 新規 ▶ 新しい通知** を選択します。

[新しい通知] ポップアップウィンドウが表示されます。

4. 通知メッセージをスケジュールするには、次の手順を実行します。
 - a. **[タイムゾーン]** ドロップダウンメニューから、該当するタイムゾーンを選択します。
 - b. 該当する **[開始日時]** を設定します。
 - c. 該当する **[終了日時]** を設定します。

① 注記

- **[終了]** 時刻を **[開始]** 時刻より早くすることはできません。
- **[開始]** 時と **[終了]** 時との差は 14 日間までに制限されています。
- 選択したタイムゾーンとは無関係に、**[開始]** 時刻を CMS サーバ時刻より早くすることはできません。**[開始]** 時刻が CMS サーバ時刻より早いと、通知はトリガされません。

- d. **[通知タイトル]** ボックスに、通知のタイトルを入力します。

① 注記

[通知タイトル] の長さは 256 文字までに制限されています。

- e. **[説明]** ボックスに、通知に適した説明を入力します。

① 注記

[説明] の長さは 1024 文字までに制限されています。

① 注記

通知がユーザの電子メールに送信されるようにするには、**[このメッセージを通知としてユーザ電子メール ID に送信]** チェックボックスを選択します。

5. **[OK]** を選択します。

これで、通知イベントが正常に作成されました。

① 注記

[通知プロパティ] ページで、作成時刻および変更時刻は CMS サーバ時刻を反映しています。

管理者は BI ラUNCHパッドでの通知バナーの自動ポップアップを無効にすることができます。これを行うには、`BIlaunchpad.properties` ファイルを修正し、`Notification.enabled` フィールドを `false` に設定

することによってポーリングを無効にします。通知ポーリングをデフォルトで使用するには、`global.properties` ファイルの `pinger.enabled` プロパティを有効にする必要があります。ポーリングと警告が有効ではない場合、通知ポップアップが表示されるのは、ユーザがページを最新表示した場合、初回にログインした場合、または通知が有効であるときに再ログインした場合に限られます。

ポーリングは BI ラウンチパッドで 3 分ごとに行われます。

22.1.1.2 通知対象読者の選択

通知機能によって、作成するすべての通知に対して必要な対象読者を選択することができます。

通知の対象読者を選択するには、以下の手順を実行します。

1. 作成した通知を右クリックし、コンテキストメニューから **[購読者の管理]** を選択します。

[購読者の管理] ポップアップウィンドウが表示されます。

2. **[受信者一覧]** ペインから、**[追加]** を選択します。

[購読者の追加] ポップアップウィンドウが表示されます。

3. 通知を送信するユーザ/ユーザグループを選択します。

4. **[デフォルト購読の追加]** を選択します。

[購読者の追加] ポップアップウィンドウが表示されなくなります。

5. **[購読者の管理]** ポップアップウィンドウから、**[保存して終了]** を選択します。

これで、通知を送信する読者を正常に選択することができました。

① 注記

- 通知がトリガされた後は、購読一覧を変更することはできません。
- 通知を OpenDocument ユーザに送信することが可能になりました。

22.1.1.3 通知イベントの編集

通知イベントを編集するには、次の手順を実行します。

1. CMC にログインします。
2. CMC のホームページで、ドロップダウンメニューから **[イベント]** を選択します。
3. 左側の **[イベント]** ペインで、**[ユーザ通知]** を選択します。
4. 編集する通知を右クリックして、コンテキストメニューから **[イベントの編集]** を選択します。

イベントの編集 ダイアログボックスが表示されます。

5. 通知イベントの該当するパラメータを編集します。

① 注記

通知イベントの以下のパラメータを編集することができます。

- タイムゾーン
- 開始日時
- 終了日時
- 通知タイトル
- 説明
- 購読者の管理

6. [OK] を選択します。

これで、通知イベントが正常に編集されました。

① 注記

▶ イベント ▶ ユーザ通知 ▶ プロパティ ▶ を選択して通知イベントを編集した場合、[イベントの編集] ページで [OK] を選択しない限り、通知はトリガされません。

22.2 イベントとスケジュール

イベントは、システム内での発生を表すオブジェクトです。

イベントタイプに従って、スケジュール、アラート、またはシステムの健全性をモニタリングするために使用できます。CMC の [イベント] 管理エリアでは、イベントタイプに従ってすべてのイベントがフォルダに整理されます。各イベントタイプフォルダ内では、イベントの保存と管理のためにサブフォルダを作成できます。

イベントベースのスケジュールを使用すると、オブジェクトのスケジュールをより詳細に制御できます。たとえば、指定したイベントが発生した後にのみオブジェクトが処理されるように、イベントを設定できます。イベントに関する作業は、イベントの作成と、イベント発生に合わせたオブジェクトのスケジュールという 2 つのステップによって成り立ちます。一度イベントを作成すれば、オブジェクトをスケジュールする際にそれを依存関係として選択できます。これにより、スケジュールされたジョブは、イベントの発生時にのみ処理されます。

スケジュールと併用する、以下のタイプのイベントを作成できます。

イベントのタイプ	説明
ファイルイベント	ファイルベースのイベントを定義するときには、 <i>Event Server</i> で監視する特定のファイルの名前を指定します。その名前のファイルが生成されると、 <i>Event Server</i> はイベントを生成します。たとえば、他のプログラムやスクリプトの通常のファイル出力に応じてレポートが実行されるようにできます。ファイルイベントは、[システムイベント] フォルダに保存されます。

イベントのタイプ	説明
スケジュールイベント	スケジュールベースのイベントを定義するときには、イベントのトリガとして機能する定期的なスケジュールが設定されているオブジェクトを選択します。スケジュールベースのイベントでは、このようにして、スケジュールされたオブジェクト間に依存関係(条件)を設定することができます。たとえば、大量のレポートを連続して実行したり、詳細売上レポートが正常に実行された場合のみ、特定の売上集計レポートを実行することができます。スケジュールイベントは、[システムイベント] フォルダに保存されます。
カスタムイベント	カスタムイベントを作成するときには、イベントを発生させるためのショートカットを手動で作成します。カスタムイベントは、[カスタムイベント] フォルダに保存されます。

イベントを使ってスケジュールする場合、オブジェクトの定期的なスケジュールによってオブジェクトの実行頻度が決定されることに注意してください。たとえば、ファイルベースイベントに依存する日次レポートは、指定したファイルが毎日生成される限り、1日1回実行されます。さらにこのイベントは、ユーザがイベントベースのレポートのスケジュールで設定した時間枠内に発生する必要があります。

アラートにはファイルベースのイベントを使用します。

自動的に作成されたイベント

リポジトリに特定のタイプのオブジェクト (例: Crystal レポート) が追加されると、対応するイベントが自動的に作成されます。

① 注記

これらのタイプのイベントは[イベント] エリアで表示できます。ただし、これらのタイプのイベントを管理または変更するには、対応するイベントソース、または関連アプリケーションに対するアクセス権が必要です。

イベントのモニタリング

システムの総合的な健全性を監視するために、BI プラットフォームにはモニタリングイベントがあります。これらのイベントは[モニタリング] エリアで作成および管理されるモニタリングプローブに対応します。

22.2.1 ファイルベースのイベントの作成

ファイルベースのイベントは、[システムイベント](#)フォルダに保存され、管理されます。

1. CMC の[イベント](#)管理エリアに移動します。
2. システムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. [管理](#) [新規](#) [新規イベント](#) の順に選択します。
4. [タイプ](#)リストで[ファイル](#)を選択します。
5. [イベント名](#)ボックスにイベントの名前を入力します。
6. [説明](#)ボックスに説明を入力します。
7. [サーバ](#)リストで、指定したファイルをモニタリングするイベントサーバを選択します。
8. [ファイル名](#)ボックスにファイル名を入力します。
イベントサーバが監視するファイルの絶対パス (例: c:\¥<folder>¥<FileName> または /home/
<folder>/<FileName>) を入力します。指定するドライブとディレクトリは、イベントサーバから見える
ようにしておく必要があります。通常は、ローカルドライブ上のディレクトリを指定してください。
9. イベントのアラートを有効化するには、[アラート有効](#)を選択し、[アラートメッセージ](#)ボックスにメッセージを
入力します。
イベントが発生すると、送信されるアラート通知にこのメッセージが含まれます。
10. [OK](#) をクリックします。

22.2.2 スケジュールベースのイベントの作成

スケジュールベースのイベントは、[\[システムイベント\]](#) に保存され、管理されます。

1. CMC の[イベント](#)管理エリアに移動します。
2. システムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. [管理](#) [新規](#) [新規イベント](#) の順に選択します。
4. [新規イベント](#)ダイアログボックスの[タイプ](#)リストで、[スケジュール](#)を選択します。
5. [イベント名](#)ボックスにイベント名を入力します。
6. [説明](#)ボックスにイベントの説明を入力します。
7. 次のいずれかのイベントのステータスオプションを選択します。

イベントのステータス	説明
成功	指定したオブジェクトが正常に完了した場合のみ、イベントが発生します。
失敗	指定したオブジェクトが正常に完了しなかった場合のみ、イベントが発生します。
成功または失敗	このイベントは、指定したオブジェクトが完了した場合に発生します。

8. イベントのアラートを有効化するには、[アラート有効](#)を選択します。
イベントが発生されると、ユーザにアラート通知が送信されます。
9. [OK](#) をクリックします。

22.2.3 カスタムイベントの作成

まずカスタムイベントを作成してから、イベントに依存するオブジェクトをスケジュールし、イベントを発生させます。

1. CMC の**イベント**管理エリアに移動します。
2. カスタムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. **管理** > **新規** > **新規イベント** の順に選択します。
4. **イベント名**ボックスにイベントの名前を入力します。
5. **説明**ボックスにイベントの説明を入力します。
6. イベントのアラートを有効化するには、**アラート有効**を選択し、**アラートメッセージ**ボックスにメッセージを入力します。
イベントが発生すると、このメッセージがアラート通知に含まれます。
7. **OK**をクリックします。

関連情報

[オブジェクトのスケジュール \[268 ページ\]](#)

[イベントのアラートの有効化 \[296 ページ\]](#)


22.2.4 カスタムイベントの呼び出し

1. CMC の**イベント**管理エリアに移動します。
2. カスタムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. カスタムイベントを選択します。
4. **アクション** > **イベントの呼び出し** をクリックします。

23 アラート

23.1 CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索

アラートソースは、オブジェクトタイプに基づいて異なる場所に格納されます。下の表は、各種アラートソースを検索する方法をまとめたものです。

オブジェクト (アラートソース)	CMC での場所
Crystal レポート	[フォルダ] または [個人用フォルダ] エリア アラートをサポートするシステムにおけるすべての Crystal レポートアラートのリストは、CMC の [イベント] エリアの [Crystal Reports のイベント] フォルダにあります。アラートを購読するには、Crystal レポートを [フォルダ] または [個人用フォルダ] エリアに格納します。
イベント (ファイルベース、スケジュールベース、カスタム)	[イベント] エリア [イベント] は、イベントタイプで整理されます。アラートが有効化されたイベントは、  アイコンで示されます。

23.2 イベントのアラートの有効化

アラートは、アラートを含む Crystal レポートに対して自動的に有効化されます。つまり、ユーザは、レポートがリポジトリに追加された瞬間から、レポートアラートを購読することができます。

イベントのアラートを有効化するには、新しいイベントの作成時にアラートを有効化するなどの追加の手順が必要になります。

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートを有効化するイベントを検索し、選択します。
3. [管理](#) > [プロパティ](#) の順に選択します。
4. [[プロパティ](#)] ダイアログボックスのナビゲーションペインで、[[イベントの設定](#)] をクリックします。
5. [[アラート有効](#)] チェックボックスをオンにし、アラートがトリガされたときに購読者に送信されるメッセージを [[アラートメッセージ](#)] ボックスに入力します。
スケジュールベースのイベントに対してメッセージを入力することはできません。
6. [保存して閉じる](#) をクリックします。

23.3 アラートの購読

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読](#) を選択します。
4. [パブリケーションの購読](#) ダイアログボックスの [出力先](#) で、アラートの出力先を選択します。

オプション	説明
-------	----

マイアラート	このチェックボックスをオンにすると、アラート通知がビジネスインテリジェンスシステム (BI ラウンチパッドなど) の送信先に送信されます。
------------------------	---

電子メール	このチェックボックスをオンにすると、アラート通知が BI プラットフォームのユーザアカウントに対して指定された電子メールアドレスに送信されます。送信先は、ユーザアカウントに対して電子メールアドレスが指定されている場合にのみ使用することができます。
-----------------------	---

電子メールアドレスが有効であり、正しく入力されていることを確認します。電子メールアドレスが正しくない場合、アラート通知を受け取ることができません。

5. 複数のドキュメントが [\[アラート\]](#) に一覧表示されている場合、受信する各アラートのチェックボックスをオンにします。
6. アラートのパラメータを指定するには、[\[パラメータ\]](#) で [\[編集\]](#) をクリックして、パラメータ値を変更します。ドキュメントがパーソナライズされている場合、アラートのチェックボックスにマウスを重ねると、パーソナライゼーションの詳細が表示されます。
7. 必要に応じて、残りのアラート購読オプションを設定します。
アラートソースによっては、その他の購読オプションが表示される場合があります。たとえば、複数のアラートを含む Crystal レポートの場合、購読するアラートを選択する必要があります。
8. [OK](#) をクリックします。

次回アラートがトリガされると、通知が選択した送信先に送信されます。アラート通知を別の出力先に送信するには、アラートソースを選択し、[▶ アクション ▶ 購読の変更](#) の順に選択します。このオプションを使用して、アラートを購読する Crystal レポートを選択することもできます。

アラートソースのカスタム設定を指定しない場合、通知は、アラートアプリケーションに対して設定された出力先デフォルトを使用して送信されます。

関連情報

[アラートソースのアラート設定の管理 \[299 ページ\]](#)

[CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索 \[296 ページ\]](#)

23.4 アラートの購読解除

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読解除](#) を選択します。
4. [\[アラートの購読解除\]](#) ダイアログボックスで確認を求めるメッセージが表示されたら、[\[購読解除\]](#) をクリックします。

23.5 他のユーザのアラートの購読

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読者の管理](#) を選択します。
4. [\[購読者の管理\]](#) ダイアログボックスのナビゲーションペインで、[\[受信者一覧\]](#) をクリックします。
5. 新しい購読者を追加するには、次の手順を実行します。
 - a. [追加](#) をクリックします。
 - b. [\[購読者の追加\]](#) ダイアログボックスで、[\[>\]](#) ボタンを使用して、ユーザおよびグループを [\[利用可能\]](#) リストから [\[購読済み\]](#) リストに移動させ、[\[デフォルト購読の追加\]](#) をクリックします。
 - c. [\[購読の編集\]](#) ダイアログボックスで、必要に応じてアラートおよび送信先オプションを設定します。

たとえば、購読するアラート (アラートソースに複数のアラートが含まれる場合) を変更することができます。アラートソースによっては、その他の設定も行うことができます。
 - d. [保存して閉じる](#) をクリックします。
6. 購読者の設定を編集するには、次の手順を実行します。
 - a. [\[購読者\]](#) 列でユーザを選択し、[\[編集\]](#) をクリックします。
 - b. ユーザが受信するアラートを編集するには、[\[購読の編集\]](#) ダイアログボックスのナビゲーション一覧で、[\[アラート\]](#) をクリックし、ユーザが購読する各アラートのチェックボックスをオンにします。

アラートソースに複数のアラートが含まれている場合、各アラートが一覧表示されます。複数のアラートが含まれていない場合、1つのアラートのみが表示されます。
 - c. アラートの送信先を編集するには、ナビゲーション一覧で [\[送信先\]](#) をクリックし、アラートの各送信先のチェックボックスをオンにします。

Adaptive Job Server で有効化および設定されている電子メール送信先のみを使用できます。電子メール送信先が設定されていない場合、[\[マイアラート\]](#) チェックボックスのみが表示されます。
 - d. 使用可能な場合、必要に応じて他のアラートオプションを設定します。

アラートソースによっては、その他のオプションも使用できます。
 - e. [保存して閉じる](#) をクリックします。
7. [\[購読者の管理\]](#) ダイアログボックスで、[\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

23.6 他のユーザのアラートの購読の解除

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読者の管理 ▶](#) を選択します。
4. [購読者の管理](#) ダイアログボックスのナビゲーションペインで、[受信者一覧](#) をクリックします。
5. アラートの購読を停止するユーザまたはユーザグループを選択し、[\[購読解除\]](#) をクリックします。

23.7 アラートからのユーザの除外

ユーザの除外は、グループの少数ユーザのみを購読者として指定する場合に有用です。グループ全体を購読者として指定してから、アラート通知を受け取る必要がないユーザを除外します。

[\[除外する\]](#) リストは、ユーザのその他すべての購読設定より優先されます。

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読者の管理 ▶](#) を選択します。
4. [購読者の管理](#) ダイアログボックスで、ナビゲーションパネルの [除外リスト](#) を選択します。
5. [\[>\]](#) ボタンを使用して、ユーザまたはグループを [\[利用可能\]](#) リストから [\[除外する\]](#) リストに移動させます。
6. [保存して閉じる](#) をクリックします。

関連情報

[CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索 \[296 ページ\]](#)

23.8 アラートソースのアラート設定の管理

アラートソースのアラート設定を変更しない限り、通知はアラートアプリケーションのデフォルト送信先設定を使用して送信されます。

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ アラート設定の管理 ▶](#) を選択します。
4. [アラート設定の管理](#) ダイアログボックスで、BI ラウンチパッドを出力先として有効化するには、[マイアラートの有効化](#) チェックボックスを選択します。
このオプションをオンにすると、アラート通知が購読者の BI ラウンチパッドアカウントに送信され、購読者はアラート通知をラウンチパッドの [マイアラート](#) で表示できます。

5. 送信先として電子メールを有効化するには、[電子メールを有効にする] チェックボックスをオンにし、[デフォルト電子メール設定を使用] または [カスタム電子メール設定を使用] を選択します。
[デフォルト電子メール設定を使用] を選択した場合、[アプリケーション] エリアで設定されたアラート値からデフォルト設定が生成されます。
6. [カスタム電子メール設定を使用] を選択した場合、必要に応じて次のアクションを実行します。
 - a. 差出人ボックスで、差出人の電子メールアドレスを入力するか、[プレースホルダの追加リスト](#)から電子メールアドレスの変数を選択します。
 - b. 宛先ボックスで、アラート通知を送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、[プレースホルダの追加リスト](#)から電子メールアドレスの変数を選択します。
 - c. CC ボックスで、アラート通知を送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、[プレースホルダの追加リスト](#)から電子メールアドレスの変数を選択します。
 - d. BCC ボックスで、アラート通知を送信する非公開の各受信者の電子メールアドレスを入力するか、[プレースホルダの追加リスト](#)から電子メールアドレスの変数を選択します。
 - e. 件名ボックスで、アラート通知の件名を入力するか、[プレースホルダの追加リスト](#)から件名の変数を選択します。
 - f. メッセージボックスで、アラート通知の本文のメッセージを入力するか、[プレースホルダの追加リスト](#)からメッセージの変数を選択します。
 - g. アラート通知に添付ファイルを追加する場合は、[添付ファイルの追加] チェックボックスをオンにします。
 - h. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。 [指定の名前を使用する](#) を選択した場合、ファイル名を入力するか、リストのプレースホルダを選択します。
 - i. ファイル名に自動的にファイル拡張子を追加する場合は、[ファイル拡張子を追加する] チェックボックスをオンにします。
ファイル名にファイル拡張子を追加しない場合は、ドキュメントを開くことができません。
7. [保存して閉じる](#) をクリックします。

関連情報

[CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索 \[296 ページ\]](#)

24 プロファイル

24.1 プロファイルの作成

1. CMC の [\[プロファイル\]](#) 管理エリアに移動します。
2. [▶ 管理 ▶ 新規 ▶ 新しいプロファイル](#) の順に選択します。
3. [\[新規プロファイルの作成\]](#) ダイアログボックスで、[\[タイトル\]](#) ボックスにプロファイルの名前を入力します。
4. [\[説明\]](#) ボックスにプロファイルの説明を入力し、[\[OK\]](#) をクリックします。

24.2 プロファイルへのグローバルプロファイルターゲットの指定

ローカルプロファイルターゲットは、公開プロセス中に指定します。

1. CMC の [プロファイル](#) 管理エリアに移動します。
2. プロファイルターゲットを指定するプロファイルを検索し、選択します。
3. [▶ アクション ▶ プロファイルターゲット](#) の順に選択します。
4. [プロファイルターゲット](#) ダイアログボックスで、[追加](#) をクリックします。
5. [ユニバース名](#) 一覧でユニバースを選択します。
6. [クラス名](#) ボックスにクラス名を入力するか、[ユニバースからオブジェクトを選択します](#) をクリックします。
7. [変数名](#) ボックスに変数名を入力するか、[ユニバースからオブジェクトを選択します](#) をクリックします。
8. [OK](#) をクリックします。

24.3 ユーザまたはグループにプロファイル値を指定する

値を指定するプロファイルで開始することによって同じ結果を導き出すことができます。

異なるタイプのプロファイル値 (静的なプロファイル値か式、またはシステムにマップされているサードパーティのユーザおよびグループに対する変数プロファイル値など) を使用することができます。

1. CMC の [プロファイル](#) または [ユーザとグループ](#) 管理エリアに移動します。
2. 値を指定するプロファイルを選択するか、またはプロファイル値を指定するユーザまたはユーザグループを選択します。
3. [▶ アクション ▶ プロファイル値](#) を選択します。
4. [プロファイル値](#) ダイアログボックスで、[追加](#) をクリックします。
5. [選択](#) をクリックします。

6. ユーザまたはグループ(それぞれ複数可)を選択し、[>] をクリックして右側の一覧に選択したものを移動します。
7. [OK](#) をクリックします。
8. 選択したユーザまたはグループのプロファイル値を入力します。
 - 値を追加するには、[値](#)をクリックして、[新しい値](#)ボックスに値を入力してから[追加](#)をクリックします。パーソナライゼーションのためにプロファイルでフィルタ処理できる値がユーザまたはグループに含まれていない場合は、ユーザまたはグループに複数の静的な値を追加して、静的なプロファイル値として [%NULL%](#) を使用できます。
 - フィルタ式を使用する場合、[フィルタ式](#)をクリックして、[Web Intelligence 式](#) ボックスまたは [Crystal Reports 式](#) ボックスに式を入力します。複数のドキュメントの種類にプロファイルを適用するには、3つのボックスすべてにフィルタ式を入力します。
Web Intelligence 式を使用するには、最初にプロファイルに対するグローバルプロファイルターゲットを指定します。
9. [OK](#) をクリックします。

関連情報

[プロファイル値としての変数の使用 \[302 ページ\]](#)

24.4 プロファイル値としての変数の使用

ユーザまたはユーザグループをプロファイルに追加すると、ユーザのフルネーム、アカウント名、または電子メールアドレスに変数プロファイル値を指定することができます。

以下の表は、プロファイルを具体化する際に使用可能なブレースホルダ変数について説明しています。

変数	説明
タイトル	ユーザまたはユーザグループのアカウント名との関連付け
ユーザのフルネーム	ユーザまたはユーザグループのフルネームとの関連付け
電子メールアドレス	ユーザまたはユーザグループの電子メールアドレスとの関連付け 電子メールアドレス 変数をユーザグループの共通の電子メールアドレスにマップすると、BI プラットフォームが変数を解決して、グループの各メンバーの個別の電子メールアドレスを取得します。

1. CMC の [プロファイル](#) 管理エリアに移動します。
2. ユーザまたはユーザグループを追加するプロファイルを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ プロファイル値 ▶](#) の順に選択します。
4. [プロファイル値](#) ダイアログボックスで、[追加](#) をクリックします。

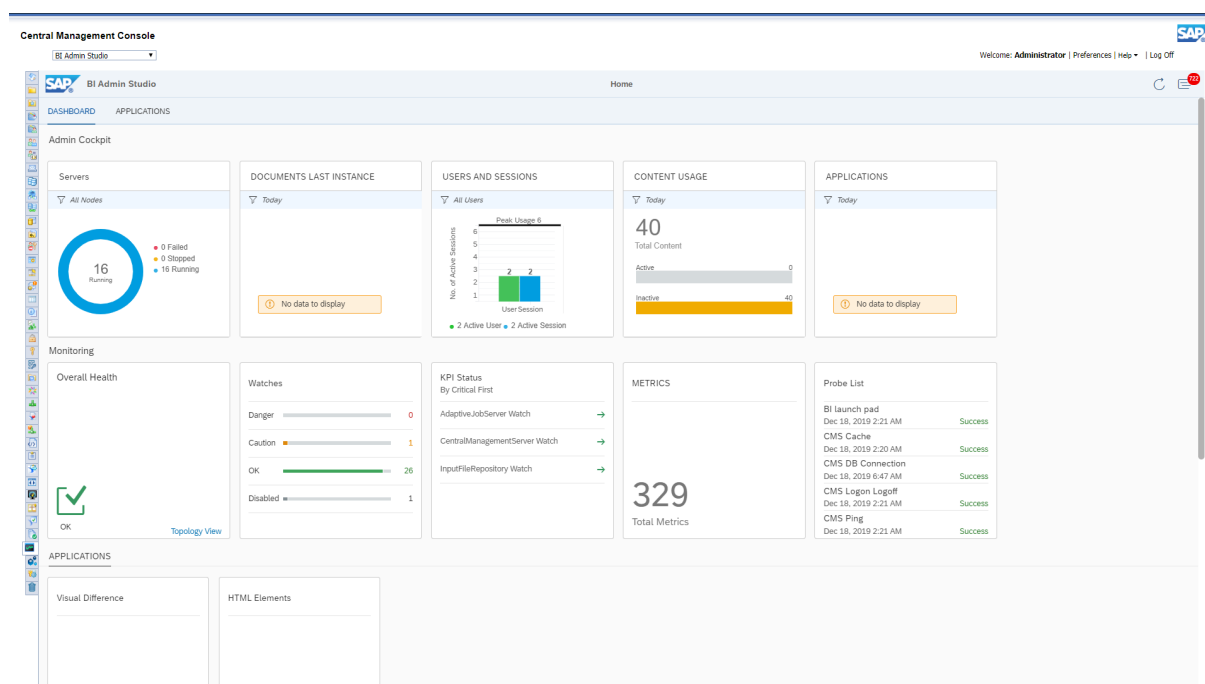
5. [選択](#)をクリックします。
6. 左側の一覧からユーザまたはグループを選択し、[>](#) をクリックして右側の一覧にユーザまたはグループを移動します。
7. [OK](#) をクリックします。
8. [\[値\]](#) をクリックします。
9. [ブレースホルダの追加](#)一覧でブレースホルダ変数を選択し、[追加](#)をクリックします。
ブレースホルダは、[既存値](#)ボックスに表示されます。
10. [OK](#) をクリックします。

プロファイルを使用してパブリケーションをパーソナライズする場合、サードパーティユーザのプロファイル値は最新のユーザ情報で自動的に更新されます。たとえば、最後にパブリケーションを実行した後にユーザの電子メールアドレスが変更された場合、次にパブリケーションを実行すると、プロファイル値に使用されている電子メールアドレスが変更されます。

25 BI 管理スタジオ

BI 管理スタジオは、モニタリング、アラート、および管理コックピット (以前の名称は BI 管理者のコックピット) を組み合わせた CMC のアプリケーションです。

このアプリケーションは、[\[ダッシュボード\]](#) および [\[アプリケーション\]](#) の 2 つのタブで構成されています。




ダッシュボード

[\[ダッシュボード\]](#) タブには、[\[管理コックピット\]](#) および [\[モニタリング\]](#) で利用可能なダッシュボードの単一のビューがあります。各ダッシュボードをクリックすると、そのダッシュボードに関する詳細情報を確認することができます。たとえば、[\[サーバ\]](#) ダッシュボードを選択すると、[\[ステータス\]](#) が [\[実行中\]](#)、[\[停止\]](#)、および [\[失敗\]](#) であるサーバの一覧を [\[サーバ名\]](#)、[\[PID\]](#)、[\[タイプ\]](#) などの詳細とともに表示できます。管理コックピットの詳細については [管理コックピット \[305 ページ\]](#) を、モニタリングの詳細については [モニタリング](#) を参照してください。

アプリケーション

[アプリケーション] タブから [\[Visual Difference\]](#) および [\[権限のある HTML 要素\]](#) にアクセスできます。[Visual Difference](#) の詳細については [Visual Difference \[335 ページ\]](#) を、[HTML 要素](#) の詳細については [HTML 要素の許可](#) を参照してください。

アラート

 を選択して、アラートの通知ペインにアクセスできます。通知ペインで [\[アラートページへ\]](#) オプションを選択すると、作成したアラートに関する詳細を確認できます。

25.1 管理コックピット

管理コックピットは、CMC に追加された新しいアプリケーションです。このコックピットで、管理者は BI 環境に関する基本データを収集することができます。つまり、BI 環境のデータからビジネスインテリジェンス情報が派生します。管理コックピットを使用して、サーバ、スケジュールされたジョブ、ユーザとセッション、コンテンツの使用状況、およびアプリケーションについての情報を取得することができます。

① 注記

管理コックピットを正常に使用するには、以下の要件が必要です。

- モニタリングサービスを有効にする必要があります。
- 正しいデータがフェッチされるように、監査および関連イベントを有効にする必要があります。
- クライアントによる BI プラットフォーム RESTful Web サービスへのアクセスが可能である必要があります。
- RESTful Web サービスが Tomcat にデプロイされている場合を除き、WACS が実行されている必要があります。
- CMC に SSL を設定している場合は、RESTful Web サービスが Tomcat にデプロイされている場合を除き、WACS にも SSL を設定する必要があります。
- クロスドメインへのアクセスを有効にする必要があります。
- 管理コックピットにアクセスするには、管理者グループまたはそのサブグループに属している必要があります。

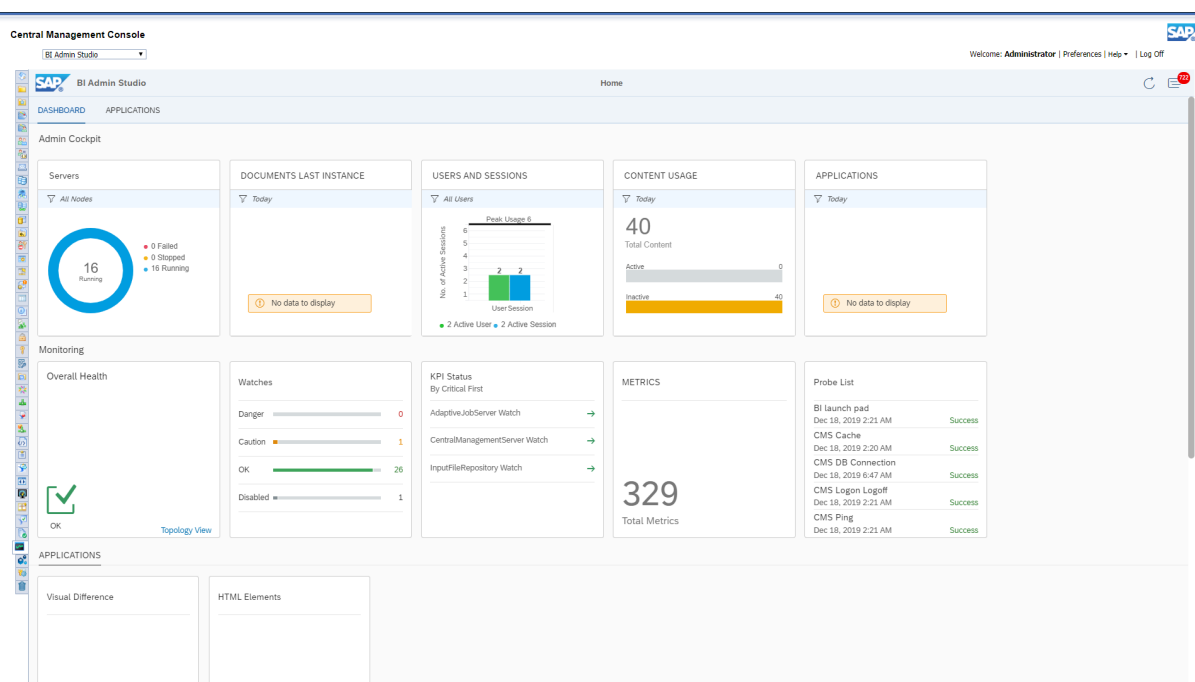
25.1.1 管理コックピット


管理コックピットでは、画像ビジュアライゼーションの以下のコンポーネントに関連するデータを包括的に分析できます。

- サーバ
- ドキュメント最終インスタンス
- ユーザとセッション
- コンテンツの使用
- アプリケーション

① 注記

コンテンツの使用とアプリケーションに関する分析を表示するには、監査データベースを有効にする必要があります。



ホームページの右上隅にある  をクリックすると、管理コックピットの各ページに表示されるデータを最新表示できます。

25.1.2 BI のサーバ

管理コックピットでは、BI 環境におけるすべてのサーバのステータスと関連する詳細のリアルタイムのデータを取得できます。

ホームページには以下の詳細が表示されます。

- サーバの合計数
- エラーがあるサーバの数
- 停止したサーバの数

希望するサーバクラスタを選択して、[サーバ] タイルに表示するデータをフィルタ処理することができます。

[サーバ] タイルをクリックすると、[サーバ] ページが表示されます。このページには、サーバの合計数、エラーが発生したサーバ、および停止したサーバに関する詳細が表示されます。[サーバ] ページには、各エラー発生サーバの[ステータス]、[サーバ名]、[PID](プロセス ID)、[タイプ]、[状態]、および[前回の変更時刻] も表示されます。

[サーバ] ページ内で、希望するサーバクラスタを選択して、特定のサーバクラスタに従ってデータをフィルタ処理することができます。

対応する行を選択すると、エラー発生サーバに関するより詳細な情報を表示することができます。この場合、エラーの理由が詳細に説明された新しいページが表示されます。[開始] を選択すると、ページ内からエラー発生サーバを再起動することができます。

25.1.3 ドキュメントインスタンスに関する BI

管理コックピットを使用して、BI 環境におけるスケジュールされたドキュメントのすべてのインスタンスのステータスと詳細に関するデータを取得できます。

ホームページには以下の情報が表示されます。

- スケジュールされた各ドキュメントの最近のインスタンスの合計数。
- スケジュールされた各ドキュメントの最近の実行中のインスタンスの数。
- スケジュールされた各ドキュメントの最近のエラー発生インスタンスの数。
- スケジュールされた各ドキュメントの最近の待機中のインスタンスの数。

[ドキュメント最終インスタンス] タイルで、ドロップダウンメニューから特定の期間を選択すると、その期間のデータをフィルタリングできます。以下の期間を使用できます。

- 今日
- 最後の 7 日間
- 最後の 30 日間
- 四半期
- 年

[ドキュメント最終インスタンス] タイルをクリックすると、[最終インスタンス] ページが表示されます。このページには、スケジュールされた各ドキュメントの最近のインスタンスの合計数の詳細が状態別に表示されます (実行中、エラー、および待機中)。[統計] タブに詳細が表示され、セクション[インスタンス数が最も多いドキュメント] および[実行時間が最も長いインスタンス] で参照することができます。[ドキュメントのインスタンス] ページには、エラーステータスごとに[インスタンス名]、[ステータス]、[タイプ]、[所有者]、および[終了時刻] も表示されます。

[エクスポート] リンクボタンをクリックして、[最終インスタンス] ページに表示されているデータを .CSV ファイルとしてエクスポートすることができます。対応するチェックボックスを選択し、[エクスポート] ドロップダウンリストから[選択済みエクスポート] を選択して、選択したインスタンスをエクスポートすることもできます。

対応する行を選択すると、エラー発生インスタンスに関するより詳細な情報を表示することができます。[実行] を選択すると、ページ内からジョブを再起動することができます。

[統計] タブで、上位 5、上位 10、上位 15、および上位 20 のドキュメントをフィルタ処理および表示することを可能にする新規チャートフィルタが有効化されます。

25.1.4 BI のユーザとセッション

管理コックピットでは、BI 環境におけるユーザとセッションに関するデータを取得できます。

たとえば、ホームページには以下の詳細が表示されます。

- アクティブユーザの数
- アクティブセッションの数

[[ユーザとセッション](#)] タイルで、次のデータをフィルタ処理することができます。

- すべてのユーザ
- 登録ユーザ
- 同時接続ユーザ

[[ユーザとセッション](#)] タイルをクリックすると、すべてのユーザ、登録ユーザ、同時接続ユーザの詳細が示されている [[ユーザとセッション](#)] ページが表示されます。[統計] タブに、最もアクティブなユーザと最も非アクティブなユーザに関連する詳細が表示されます。

[ユーザとセッション] ページには、[[ユーザ名](#)]、[[合計セッション](#)]、[[最終ログイン時刻](#)]、および [[最長の実行中セッション](#)] も表示されます。

対応する行を選択すると、特定のユーザに関するより詳細な情報を表示できます。これによって、その特定のユーザの上位セッションが詳細に説明された新しいページが表示されます。指定するセッションを選択し、[[セッション終了](#)] を選択することによって、ページ内からその特定のユーザのどのセッションも終了することができます。

25.1.5 BI におけるコンテンツの使用

管理コックピットでは、BI 環境におけるコンテンツの使用に関するデータを取得できます。

たとえば、ホームページには以下の詳細が表示されます。

- アクティブなドキュメントの数
- 非アクティブなドキュメントの数

[[コンテンツの使用状況](#)] タイルで、ドロップダウンリストから特定の期間を選択すると、その期間のデータをフィルタリングできます。

① 注記

アクティブなコンテンツを削除しており、特定の期間のデータをフィルタリングする場合、削除したアイテムは、選択した期間においてアクティブであった場合には、まだアクティブなコンテンツとして表示されます。

以下の期間を使用できます。

- 今日
- 最後の 7 日間
- 最後の 30 日間
- 四半期
- 年

[[コンテンツの使用状況](#)] タイルをクリックすると、[コンテンツの使用] ページが表示されます。このページには、アクティブなコンテンツ、非アクティブなコンテンツ、および統計に関する詳細が表示されます。[統計] タブに、最大量の非アクティブコンテンツを持つ受信ボックス、最大量のコンテンツを持つユニバース、および最大量のコンテンツを持つフォルダに関する詳細が表示されます。

エクスポートリンクボタンを選択して、csv ファイルの [[コンテンツの使用状況](#)] ページに表示するデータをエクスポートすることができます。対応するチェックボックスを選択し、エクスポートドロップダウンから [[エクスポートを選択](#)] を選択して、特定のジョブをエクスポートするよう選択することもできます。

[コンテンツの使用] ページには、[[コンテンツ名](#)]、[[タイプ](#)]、および [[実行時刻](#)] も表示されます。

[統計] タブで、上位 5、上位 10、上位 15、および上位 20 のドキュメントをフィルタ処理および表示することを可能にする新規チャートフィルタが有効化されます。

25.1.6 BI のアプリケーション

管理コックピットでは、BI 環境のアプリケーション名で並び替えられたアプリケーションの数に関するデータが表示されます。

[[アプリケーション](#)] タイルで、ドロップダウンリストから特定の期間を選択すると、その期間のデータをフィルタリングできます。以下の期間を使用できます。

- 今日
- 最後の 7 日間
- 最後の 30 日間
- 四半期
- 年

[[アプリケーション](#)] タイルをクリックすると、[アプリケーション] ページが表示されます。このページには、[[すべてのアプリケーション](#)] および [[上位アプリケーション](#)] に関連する詳細が表示されます。

[[上位アプリケーション](#)] タブに、選択された期間内に最も多くのドキュメントが含まれる上位 5 のアプリケーションが一覧表示されます。[アプリケーション] ページには、[[アプリケーション名](#)]、[[ユーザの数](#)]、および [[アーティファクトの数](#)] も表示されます。

25.2 モニタリング

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームのモニタリングアプリケーションは、レポートインクと通知について、BI プラットフォームサーバのランタイムメトリクスおよび履歴メトリクスを取得するための機能を提供します。モニタリングアプリケーションは、アプリケーションが通常通り機能していることを示すアクティビティをカバーします。

モニタリングアプリケーションには、CMC ホームページからアクセスすることができます。モニタリングアプリケーションは、以下のタブで構成されています。

- **ダッシュボード**: 全体ヘルスステータス、KPI ステータス、監視リストステータス、最近のアラート、およびクイックリンクが含まれています。

- **メトリクス**: BI プラットフォームシステムで見つかったすべてのメトリクスが一覧表示されます。新しいメトリクスを作成するためのオプションが提供されます。
- **監視リスト**: [危険]、[注意]、[OK]、[無効]、[失敗]などのステータス別に監視数がリストされます。
- **プローブ**: プローブとそのステータス、および関連するグラフが一覧表示されます。
- **アラート**: モニタリングアプリケーションで生成されたすべてのアラートが一覧表示されます。

25.2.1 ダッシュボード

ユーザは、[ダッシュボード] ページを使用して1つの画面からシステムの状態を追跡することができます。このページには、KPI、最近のアラート、および BI デプロイメントのヘルスに関するリアルタイムの情報が表示されます。

25.2.1.1 ダッシュボードアラート

ダッシュボードの [最近のアラート] ペインには、最大6個までの最近のアラートと、アラートが記録された時刻が表示されます。アラートをクリックすると、考えられる問題の原因とそれを解決するために実行されたアクションを表示することができます。アラートのタイルヘッダをクリックすると、[アラート] ページに進みます。

① 注記

原因とアクションは、アラートが確認されたときに記録された場合のみ表示されます。

[アラート] ページで実行できるアクティビティの詳細については、[アラート \[333 ページ\]](#) を参照してください。

25.2.1.2 ダッシュボード KPI

25.2.1.2.1 [KPI ステータス] ペインのカスタマイズ

[KPI ステータス] ペインには、ユーザの選択に基づいて KPI が表示されます。[KPI ステータス] ペインに表示される KPI をカスタマイズするには、次の手順に従います。

1. **[KPI の選択]** をクリックします。選択できる KPI の一覧が表示されます。
2. **[KPI ステータス]** ペインに表示する必要がある KPI を選択します。ここでは、最大で8個の KPI を選択できます。KPI を削除するには、ドロップダウンリストからその選択を解除します。KPI のタイルヘッダをクリックして、[監視リスト] ページに移動します。そこでは、KPI の追加や削除が可能です。

① 注記

[KPI ステータス] ペインに表示されている KPI から **[最近の更新]** リンクをクリックして、KPI に関連する最近の更新を表示できます。

25.2.1.2.2 [KPI ステータス] ペインでの根本的原因分析の実現

[KPI ステータス] ペインを使用して、メトリクスの変動原因を特定できます。

1. [\[KPI ステータス\]](#) ペインに表示されている KPI をクリックします。
[\[監視の詳細\]](#) 画面が表示されます。
2. [\[監視の詳細\]](#) ペインで、[\[一般プロパティ\]](#) と [\[監視ルール\]](#) を選択して、メトリクスの成功または失敗の根本的原因を表示します。

25.2.1.3 [全体ヘルス] ステータスインジケータ

[\[全体ヘルス\]](#) ペインには、BI プラットフォームデプロイメントの全体ヘルスステータスのインジケータがあります。




たとえば、サービスカテゴリ、Enterprise ノード、またはサーバグループのヘルスステータスが赤の場合、全体ヘルスステータスのインジケータも赤くなります。

[\[全体ヘルス\]](#) ペインにある [\[トポロジビュー\]](#) をクリックし、以下に基づいて BI プラットフォームのデプロイメントを表示します。

- Enterprise ノード
- サーバグループ
- サービスカテゴリ

トポロジビュー

[\[トポロジビュー\]](#) では、以下が可能です。

-   アイコンを切り替えて、選択した BI プラットフォームのデプロイメントをグラフィックまたは表形式で表示する。
 - ドリルダウンすると、展開されたノードの直接の親とピアがグラフィック形式でインセットウィンドウに表示されます。インセットウィンドウをクリックすると、親ノードに戻ります。サーバグループの場合、階層のルートノードを表示できます。
グラフィック表示では、各ノードの上にマウスポインタを移動すると、ヘルスステータスが表示されます。ノードをダブルクリックすると、そのノードの監視の詳細が表示されます。
 - 表形式の表示では、ヘルスステータスが [\[全体状態\]](#) 列に表示されます。
- デプロイメントを [\[種類の表示\]](#) ドロップダウンリストにより種類でフィルタリングする。
- 選択したデプロイメントを [\[状態\]](#) ドロップダウンリストにより状態でフィルタリングする。
- [\[フィルタパネル\]](#) で [\[最新表示\]](#) アイコン  をクリックして、最新のヘルスステータスを取得する。

25.2.1.4 監視リストステータス

[監視リストステータス] は、監視全体のカウントを示し、以下の各ステータスの監視の数が表示されます。

- 危険
- 注意
- OK
- 無効
- 失敗

Watchlist Status		
Danger	0	<div></div>
Caution	0	<div></div>
OK	33	<div></div>
Disabled	0	<div></div>
Failed	0	<div></div>

25.2.1.5 クイックリンク

[クイックリンク] タイルでは、ダッシュボードから以下のタスクを直接実行できます。

- [新しいメトリクスの作成](#)
- [新しい監視の作成](#)
- [Java ベースのプロープを作成](#)
- [スクリプトプロープの作成](#)

25.2.2 グラフ

モニタリングアプリケーションのグラフを使用して、異なる期間のシステムパフォーマンスをモニタリングすることができます。[プローブ] ページでは、グラフは往復時間とプローブステータスに基づきます。その他のページでは、グラフはメトリクスデータに基づきます。

① 注記

グラフに表示される時刻は、[CMC 基本設定] の [タイムゾーン] フィールドで設定された時刻です。[デフォルト - Web サーバと同じ] を選択した場合、サーバのロケーションのタイムゾーンが使用されます。

グラフは、以下の2つのモードで表示することができます。

- ライブモード: このモードでは、最近2分間のプローブステータスが表示され、継続的に更新されます。このモードでは、[ヒストグラム]、[拡大]、[縮小]、および[カレンダー]オプションは無効化されます。
- 履歴モード: このモードでは、履歴データを使用するグラフを表示することができます。このモードでは、[ヒストグラム]、[拡大]、[縮小]、および[カレンダー]オプションは有効化されます。履歴モードでは、最大で6カ月のグラフを表示することができます。

グラフの主な領域は以下のとおりです。

- ヘッダ - メトリクスのタイトルとモード、および表示されているグラフの時間範囲が表示されます。ヘッダには、ライブモードの現在値も表示されます。
- メイングラフ - メトリクスまたはプローブ実行の現在のステータス、および日付と時刻が表示されます。
- ツールバー - ツールバーには、次のボタンがあります。



: このトグルボタンを使用して、ライブモードと履歴モードを切り替えることができます。



: カレンダーオプションを使用して、開始時刻と終了時刻、および開始日付と終了日付を選択することができます。



: グラフを全画面表示することができます。

時間軸の同期

時間軸の同期は、モニタリングアプリケーションのグラフで提供される機能です。複数のグラフを同じウィンドウ内に表示させる場合、[\[時間軸の同期\]](#)をクリックし、すべてのグラフに対して同じ時間範囲を設定することができます。1つのグラフの時間範囲を変更すると、すべてのグラフの時間範囲がそれに合わせて変更されます。時間軸の同期は、履歴モードとライブモードの両方で使用することができます。

25.2.3 プローブ

プローブは、シミュレーションされたアプリケーションを使用して SAP BusinessObjects システムをモニタリングするための機能を提供するユーティリティです。プローブによって生成された結果とグラフは、システムの可用性、状態、安定性に関する貴重な情報と、各種 SAP BusinessObjects サービスおよび機能のパフォーマンス統計を提供します。このデータは、キャパシティ計画にも使用することができます。

プローブは、システムの状態をチェックするためにいつでも実行することができます。プローブは、指定された間隔で実行されるようスケジュールすることができます。1つのプローブに対して複数のスケジュールを指定することができます。プローブの実行時には、プローブの結果および往復時間が表示され、グラフィカルにも表現されます。プローブによって生成されたメトリクスは、仮想メトリクスと呼ばれます。仮想メトリクスは、監視の作成時に使用することができます。

BI プラットフォームモニタリングプローブを使用して、以下のアクティビティを実行できます。

- エンドユーザーワークフローのシミュレーション (Web Intelligence および Crystal Reports アプリケーションのユーザログインアクションおよびレポート実行など)
- SAP BusinessObjects サービスの可用性、機能およびパフォーマンスのテスト
- Central Management Server (CMS) コア機能、CMS キャッシュサービス、および CMS データベース接続のテスト

プローブは、以下のシナリオで 사용할 수 있습니다。

- CMS に対する負荷を检查するため、CMS データベース接続プローブを実行할 수 있습니다。プローブの結果と往復時間をさまざまな時間間隔で 사용し、배포イメント의 計画や大規模なレポート作成의 스케줄을 효과적으로 할 수 있습니다。
- 서버의 可用性을 检查するため、CMS 프로브의 1つ을 다양한 시간 간격에서 실행하고, 特定の 시점에서 서버 트래픽을 把握할 수 있습니다。

25.2.3.1 프로브의 종류

プローブは、以下のように分類할 수 있습니다。

- **診断プローブ:** 現在の 시스템 정보를 포함하는 보고서를 생성합니다. 진단 프로브에는, 서버의 起動/停止가 포함됩니다. 이 프로브에서는, 全ての 서버가 检查され, 各 서버의 스테이츠가 记录され, 서버가 再起動されて, 서버에 關한 정보가 再度 收集됩니다。
- **헬스プロー브:** 整数、論理型、文字列などの 데이터 타입의 메트릭스가 생성됩니다. 헬스 프로브에는, CMS 로그인/로그오프가 포함됩니다. 이 프로브에서는, 유저에 의한 Central Management Server (CMS) への 로그인および 로그오프가 正常에 行われる かどうか가 检查됩니다。
- **하이브리드プロー브:** 診断 프로브와 헬스 프로브의 どちらとしても 機能합니다. 診断 프로브である 서버의 起動/停止 프로브를 除外하고, BI 플랫폼에서 提供される 全ての 프로브는 하이브리드 프로브입니다。

デフォルトでは、BI プラットフォームでは以下のモニタリングプローブが提供されます。

CMS 로그인/로그오프

CMS 로그인/로그오프 프로브에서는, CMS 的 可用性、および 유저가 클라이언트 애플리케이션을 介して 시스템에 로그인할 ことができる かどうか가 测试됩니다. 이 프로브는 유저로서 로그인하고, 세션의 有効性을 检查してから, 로그아웃합니다。

Page Server および Cache Server からの Crystal Reports 서비스

Page Server および Cache Server からの Crystal Reports 서비스 프로브에서는, Page Server および Cache Server を 介した Crystal Reports 서비스의 可用性가 测试됩니다. 이 프로브에서는, Crystal Reports 的 Page Server および Cache Server を 使用して 報告를 開き, 任意로 報告의 最新表示와 PDF 形式에 的 엑스포트를 行い, 報告를 閉じます。

Report Application Server の Crystal Reports サービス

Report Application Server の Crystal Reports サービスプローブでは、Report Application Server を介した Crystal Reports サービスの可用性がテストされます。このプローブは、Report Application Server を使用してレポートを開き、任意でレポートの最新表示と PDF 形式へのエクスポートを行い、レポートを閉じます。

Web Intelligence サービス

Web Intelligence サービスプローブでは、Web Intelligence レポートサーバを介した Web Intelligence サービスの可用性がテストされます。このプローブは、Web Intelligence ドキュメントを開き、任意でドキュメントの最新表示と XLS および PDF 形式へのエクスポートを行い、ドキュメントを閉じます。

CMS Ping

CMS Ping は、CMS に空のクエリを送信します。このプローブは、CMS が解析失敗エラーを返した場合に成功とみなされます。クエリ解析は CMS コア機能に含まれているため、このプローブは短時間で完了するはずです。

CMS キャッシュ

CMS キャッシュプローブでは、以下のクエリを送信して CMS キャッシュの可用性と状態がテストされます。

```
select SI_NAME from
  CI_SYSTEMOBS where SI_OBTYP=4
```

このクエリは、CMS クラスタ名を含むシステム InfoObject を返します。CMS は、リポジトリデータベースではなくキャッシュからシステム InfoObject を取得します。キャッシュが正常に機能していない場合、またはクラスタ定義が正しくない場合は、クエリが失敗します。

CMS データベース接続

CMS データベース接続プローブでは、以下のクエリを実行してリポジトリの可用性がテストされます。

```
select SI_NAME from CI_SYSTEMOBS
  where SI_OBTYP=13
```

このクエリは、ユーザデスクトッププラグインオブジェクトであるシステム InfoObject を返します。CMS は、リポジトリデータベースからシステム InfoObject を取得します。CMS サーバとリポジトリサーバの間の接続が正常ではない場合、クエリは失敗します。

BI ラウンチパッド

BI ラウンチパッドプローブは、BI ラウンチパッドの基本的な状態をチェックします。このプローブでは、選択された認証の種類 (Enterprise、LDAP、SAP、Windows AD など) を使用して BI ラウンチパッドにログインし、ログアウトします。

これらの制限に関する注意:



- BI ラウンチパッドがログイン中の認証方法を非表示にするよう設定されている場合、プローブの [プロパティ] ページで選択されている認証の種類は無視されます。
- BI ラウンチパッドへのカスタムエントリポイント (BI ラウンチパッドのログオンページにリダイレクトする別の Web ページ。たとえば、`http://localhost:8080/BOE/BI` にリダイレクトする `http://localhost:8080/BOE/BI/custom.jsp` ページ) を設定している場合、BI ラウンチパッドプローブではカスタムエントリポイントを使用しないでください。
- BI ラウンチパッドプローブの [プロパティ] ページでは、"Infoview のアプリケーション名" 設定は使用されません (これは削除されています)。

サーバの起動/停止

サーバの起動/停止プローブでは、ユーザがチェックする必要があるサーバのステータスがチェックされます。このプローブでは、モニタリング対象のサーバの停止と起動が行われます。


25.2.3.2 プローブの管理

モニタリングアプリケーションの [プローブ] ページには、すべてのプローブとスケジュールステータス、次のスケジュールされた実行、および前回の実行結果と時間が表示されます。プローブが選択されると [結果] および [往復時間] という 2 つのグラフが表示されます。デフォルトでは、これらのグラフは履歴モードになっています。[プローブ] ページでは、プローブの実行、プローブのスケジュール、プローブのプロパティまたは履歴のチェック、プローブ制限の設定、およびプローブの最新表示が可能です。

プローブが自動的に最新表示されるよう設定するには、 をクリックします。プローブを手動で最新表示するには、 をクリックします。

25.2.3.2.1 プローブを実行する

プローブは、必要なときにいつでも実行することができます。プローブの一覧から監視を選択し、[今すぐ実行]

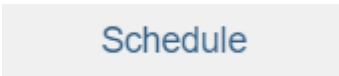
 をクリックします。プローブの実行中は、[前回の実行結果と時間] 列にプローブのステータスとして [実行中] が表示され、プローブの実行が開始された時刻が表示されます。プローブのアクティビティが完了すると、[前回の実行結果時間] 列にミリ秒単位の往復時間、およびプローブの開始日時が表示されます。プローブの結果および往復時間のグラフが表示されます。

① 注記



プローブのステータスは、成功、失敗、タイムアウトのいずれかになります。プローブの結果詳細を表示するには、プローブステータスをクリックします。プローブが実行されなかった場合、またはプローブデータが削除された場合は、ステータスデータがありませんが表示されます。

25.2.3.2.2 プローブをスケジュールする

指定された時刻に実行されるよう、個別のプローブをスケジュールできます。プローブをスケジュールするための手順:

1. [プローブ] 列からプローブを選択し、 をクリックします。
2. 表示された [スケジュール] ダイアログボックスの左側ペインにある [定期] をクリックし、[オブジェクトの実行] ドロップダウンメニューから繰り返しパターンを選択します。
繰り返しパターンを選択すると、追加情報を入力するよう要求されます。次の表は、各繰り返しパターンに対して入力する必要がある追加情報の一覧です。

オブジェクトの実行オプション	必要な追加情報
今すぐ	なし
1回	開始/終了日時を定義します。
時間単位	時間と分、および開始/終了日時を定義します。
日単位	日数および開始/終了日時を定義します。
週単位	曜日を選択し、開始/終了日時を定義します。
月単位	月数および開始/終了日時を定義します。
N日	日付を選択し、開始/終了日時を定義します。
第1月曜日	開始/終了日時を定義します。
月末日	開始/終了日時を定義します。
第N週のX日	週と日付を選択し、開始/終了日時を定義します。
カレンダー	カスタマイズされたカレンダーを選択し、開始/終了日時を定義できます。

3. [可能な再試行回数] に数字を入力し、[再試行間隔(秒単位)] フィールドに希望する時間を入力します。
4. [対象指定] をクリックし、要件に応じて [現在のユーザだけを対象にスケジュールする] と [スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する] のどちらかを選択します。
[スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する] を選択した場合、ユーザまたはユーザグループの名前を入力するよう要求されます。[利用可能] 列で提供される一覧からユーザまたはユーザグループを選択し、 をクリックします。選択したユーザグループを削除するには、 をクリックします。
5. [スケジュール] をクリックします。

デフォルトスケジュール

デフォルトスケジュール設定を使用して、類似するスケジュールで複数のプローブを実行することができます。デフォルトスケジュール設定を定義するには、次の手順に従います。

1. [プローブ] 列からプローブを選択し、[スケジュール] をクリックします。
2. [デフォルト設定] をクリックします。
3. 個々のプローブのスケジュールと同じ手順に従います。

25.2.3.2.3 プローブプロパティを表示する

[プローブ] ページを使用して、プローブのプロパティを表示し、特定のフィールドを変更することができます。すべてのプローブに、一般プロパティと各プローブ固有のプロパティがあります。プローブのプロパティを表示および変更するには、次の手順に従います。

1. プローブを選択して [プロパティ] をクリックします。
2. 要件に応じてフィールドを変更し、[保存して閉じる] をクリックします。

次の表は、プローブの一般プロパティの一覧です。

パラメータ	説明	種類
タイトル	プローブのタイトル	文字列
CUID	プローブの CUID	
説明	プローブ機能の簡潔な説明	文字列
作成日時	プローブが作成された日付と時刻	
最終変更日時	プローブが変更された日付と時刻	
最終実行日時	プローブが最後に実行された日付と時刻	
タイムアウト (秒)	プローブの実行が停止される時間制限 (秒)	整数

次の表は、特定のプローブで必要とされる入力パラメータの一覧です。

ページおよび Cache Server の Crystal Reports サービス

入力パラメータ	説明	種類
CUID	ドキュメントの CUID	文字列
エクスポート	True を選択した場合、ドキュメントが PDF 形式にエクスポートされます。 False を選択した場合、ドキュメントが PDF 形式にエクスポートされません。	論理型
最新表示	True を選択した場合、ドキュメントが最新表示されます。 False を選択した場合、ドキュメントが最新表示されません。	論理型

Report Application Server の Crystal Reports サービス

入力パラメータ	説明	種類
CUID	ドキュメントの CUID	文字列
エクスポート	True を選択した場合、ドキュメントが PDF 形式にエクスポートされます。 False を選択した場合、ドキュメントが PDF 形式にエクスポートされません。	論理型
最新表示	True を選択した場合、ドキュメントが最新表示されます。 False を選択した場合、ドキュメントが最新表示されません。	論理型

BI ラウンチパッド

入力パラメータ	説明	種類	サンプル値
認証の種類	認証の種類	文字列	Enterprise
CMS 名前	BI ラウンチパッドアプリケーションで使用する CMS の名前	文字列	localhost:6400
パスワード	BI ラウンチパッドのパスワード	文字列 (暗号化されている)	Password1
URL ベース	ユーザの接続先となる BI ラウンチパッドアプリケーションのベース URL	文字列	http://localhost:8080/BOE/BI
ユーザ名	BI ラウンチパッドのユーザ名	文字列	Administrator

サーバの起動/停止

入力パラメータ	説明	種類	サンプル値
whereclause	ユーザは、この入力パラメータを使用してモニタリング対象のサーバを定義することができます。	文字列	Where SI_PROGID='CrystalEnterprise.Server' AND SI_SERVER_KIND NOT IN ('aps') AND SI_NAME NOT LIKE '%AdaptiveProcessingServer%' AND SI_NAME NOT LIKE '%AdaptiveJobServer%'

Web Intelligence サービス

入力パラメータ	説明	種類
CUID	ドキュメントの CUID	文字列
pdfexport	True を選択した場合、ドキュメントが PDF 形式にエクスポートされます。 False を選択した場合、ドキュメントが PDF 形式にエクスポートされません。	論理型
最新表示	True を選択した場合、ドキュメントが最新表示されます。 False を選択した場合、ドキュメントが最新表示されません。	論理型

入力パラメータ	説明	種類
xlsexport	True を選択した場合、ドキュメントが Excel 形式にエクスポートされます。 False を選択した場合、ドキュメントが Excel 形式にエクスポートされません。	論理型




25.2.3.2.4 プローブ履歴を表示する

モニタリング機能により、実行されたプローブの結果が記録されます。プローブの履歴を表示するには、[[プローブ](#)] 列からプローブを選択し、[[履歴](#)] をクリックします。

[[履歴](#)] ダイアログボックスが表示されます。ここでは、プローブ実行インスタンスが一覧にされます。[[履歴](#)] ダイアログボックスは、すべてのインスタンスの以下の詳細情報を提供します。

フィールド	説明
インスタンスの日時	プローブが開始された日付と時刻を表示
タイトル	プローブのタイトルを表示
ステータス	スケジュールが問題なく実行されたかどうかを表示
作成者	プローブの作成者を表示
タイプ	プローブのタイプを表示例: 診断、ヘルス、混合
実行結果	正、負、または結果なしとしてプローブの結果を表示

[[履歴](#)] ダイアログボックスでは、次の操作を実行できます。

- インスタンスの一覧を最新表示するには、 をクリックするか、[[管理](#)] をクリックして [[最新表示](#)] を選択します。
- インスタンスを削除するには、[[管理](#)] をクリックし、[[削除](#)] を選択します。
- インスタンスの詳細を表示するには、インスタンスを選択して  をクリックします。[[インスタンスの詳細](#)] が別ウィンドウで開きます。
- インスタンスを一時停止するか、一時停止中のインスタンスを再開するには、インスタンスを選択して [[アクション](#)] をクリックし、[[一時停止](#)] または [[再開](#)] を適宜選択します。また、提供されるアイコンを使用することもできます。
- インスタンスを再実行するには、インスタンスを選択して  をクリックするか、[[アクション](#)] をクリックして [[今すぐ実行](#)] を選択します。

① 注記

[[インスタンスの日時](#)]、[[タイトル](#)]、[[ステータス](#)]、および [[作成者](#)] 列に提供されたフィルタを使用することができます。



- プローブ結果の詳細を表示するには、プローブの結果をクリックします。[[プローブの結果](#)] ダイアログボックスが開きます。[[プローブの結果](#)] ページには、次の情報が表示されます。

プローブ名
結果
所要時間
診断メッセージ



25.2.3.2.5 スケジュール制限を設定する

プローブ制限機能を使用して、プローブインスタンスを管理することができます。この機能を使用して、[\[履歴\]](#) ダイアログボックスに表示されるインスタンス数、または履歴インスタンスを保持する日数を指定することができます。インスタンス数または日数の設定後、制限を超過しているインスタンスはデータベースから削除されます。プローブ履歴に制限を設定するには、次の手順に従います。

1. [\[プローブ\]](#) 列からプローブを選択し、[\[履歴\]](#) をクリックします。
2. 左側のペインで、[\[制限\]](#) を選択します。[\[制限\]](#) ダイアログボックスで [\[オブジェクトのインスタンスが N 個より多い場合は、超過インスタンスを削除する\]](#) を選択し、希望する数を入力します。
3. 設定したインスタンス制限が選択されたユーザまたはユーザグループのみに適用されるようにするには、[\[超過インスタンスを削除するユーザ/グループ\]](#) に対して [\[追加\]](#) をクリックします。[\[利用可能なユーザ/グループ\]](#)

[\[ユーザ/グループ\]](#) からユーザまたはユーザグループを選択し、 をクリックするか、 をクリックしてすべてのユーザおよびユーザグループを選択します。

4. 日数のインスタンス制限が選択されたユーザまたはユーザグループのみに適用されるようにするには、[\[N 日後にインスタンスを削除するユーザ/グループ\]](#) に対して [\[追加\]](#) をクリックします。[\[利用可能なユーザ/グループ\]](#)

[\[ユーザ/グループ\]](#) からユーザまたはユーザグループを選択し、 をクリックするか、 をクリックしてすべてのユーザおよびユーザグループを選択します。

25.2.3.2.6 コマンドラインを介したプローブの管理

BI プラットフォーム監視アプリケーションでは、コマンドラインインタフェース (CLI) を介してプローブを追加、実行、および削除できます。

① 注記

各パラメータの定義は、形式が `<name>:<type>:<value>` となっています。また、オプションの 4 つ目のパラメータとして `true` があり、値を暗号化します。`true` が指定されている場合、Central Management Server データベースで値が暗号化され、セントラル管理コンソールのプローブのプロパティページでもマスクされます。

① 注記

コマンド構文では、区切り文字としてコロンおよびセミコロンを使用するため、`localhost:8080` となる `urlbase` のようなパラメータは設定できません。最初にプローブを作成してから、CMC を使用してプローブの URL を設定する必要があります。

CLI を介した新しいプローブの追加

1. コマンドラインインタフェースにパス「cd C:¥Program Files (x86)¥SAP BusinessObjects¥SAP BusinessObjects Enterprise 4.0¥win64_x64¥scripts」を入力します。
2. 下の表の説明に従って、**probeAdd** コマンドと必須属性およびパラメータを入力します。

属性/パラメータ	説明	例
-auth	認証の種類 (プローブの追加用)	secEnterprise
-classname	プローブの完全修飾クラス名	-classname com.businessobjects.monitoring.pro be.ProbeInfoView
-cms	CMS 名	localhost:6400
-help	このアプリケーションのヘルプの印刷	
-inputparam	指定されたプローブの入力パラメータ	-inputparam "authtype:string:enterprise;urlbase:st ring:localhost;cmsname:string:host_ machine_name;username:string:adm inistrator;password:string>Password1: true"
-name	プローブの名前	BI ラウンチパッド
-password	パスワード (プローブの追加用) (大文字と小文字が区別される)	Password1
-timeout	タイムアウト間隔 (秒単位)	10
-username	ユーザ名 (プローブの追加用)	Administrator

① 注記

上記のパラメータ -auth、-username、および -password は、プローブを追加するのに使用されます。プローブ実行用の認証の種類、ユーザ名、およびパスワードは、-inputparam パラメータ内に含まれません。

CLI を介したプローブの実行

1. コマンドラインインタフェースにパス「cd C:¥Program Files (x86)¥SAP BusinessObjects¥SAP BusinessObjects Enterprise 4.0¥win64_x64¥scripts」を入力します。
2. 下の表の説明に従って、**probeRun** コマンドと必須属性およびパラメータを入力します。

属性/パラメータ	説明	例
-auth	認証の種類	secEnterprise
-cms	CMS 名	localhost:6400
-cuid	プローブの CUID	

属性/パラメータ	説明	例
-help	このアプリケーションのヘルプの印刷	
-id	プローブの ID	
-name	プローブの名前	BI ラUNCHパッド
-password	プローブを実行するためのパスワード (大文字と小文字が区別される)	Password1
-resultdir	プローブ結果をダンプするためのディレクトリ	C:\¥proberesults
-username	プローブを実行するためのユーザ名	Administrator

① 注記

プローブを実行するには、-cuid、-id、-name のうち、パラメータを1つだけ指定する必要があります。これらのうち複数のパラメータが指定されると、エラーが発生します。

CLI を介したプローブの削除

1. コマンドラインインタフェースにパス「cd C:\¥Program Files (x86)\¥SAP BusinessObjects\¥SAP BusinessObjects Enterprise 4.0\¥win64_x64\¥scripts」を入力します。
2. 下の表の説明に従って、**probeDelete** コマンドと必須属性およびパラメータを入力します。

属性/パラメータ	説明	例
-auth	認証の種類	secEnterprise
-cms	CMS 名	localhost:6400
-cuid	プローブの CUID	
-help	このアプリケーションのヘルプの印刷	
-id	プローブの ID	
-name	プローブの名前	BI ラUNCHパッド
-password	プローブを削除するためのパスワード (大文字と小文字が区別される)	Password1
-username	プローブを削除するためのユーザ名	Administrator

① 注記

プローブを削除するには、-cuid、-id、-name のうち、パラメータを1つだけ指定する必要があります。これらのうち複数のパラメータが指定されると、エラーが発生します。


25.2.3.2.7 新しいプローブの追加

BI プラットフォームモニタリングアプリケーションでは、いくつかのデフォルトプローブが提供されます。これらデフォルトのプローブに加え、独自にカスタマイズしたプローブを作成し、モニタリングアプリケーションに追加することができます。提供されるソフトウェア開発キット (SDK) を使用して、新しいプローブを作成できます。

プローブの新規作成に関する詳細については、*SAP BusinessObjects Java 開発者ガイド*を参照してください。

25.2.3.2.8 Java ベースのプローブの登録

Java ベースのプローブを登録するには、次の手順に従います。

1. [プローブ] から、 を選択した後、**Java Based Probe** を選択します。
[Java ベースのプローブ] 画面が表示されます。
2. [プローブ名]、[説明]、[タイムアウト] および [クラス名] フィールドに詳細情報を入力します。

① 注記

[クラス名] フィールドには、パッケージ名を含めた完全なクラス名を入力します。たとえば、「`com.businessobjects.monitoring.probe.CMSLogOnOffProbe`」と入力します。

3. [プローブタイプ] を選択します。
4. [追加] をクリックして、プローブの実行に必要なユーザ名やパスワードなどの入力パラメータを指定します。これらの入力パラメータの名前やタイプは、実装クラスの名前やタイプと一致している必要があります。

25.2.3.2.9 スクリプトベースのプローブの登録

スクリプトベースのプローブを登録するには、次の手順に従います。

1. [プローブ] タブで、**登録 ▶ スクリプトプローブ** をクリックします。
[プローブの登録] ウィンドウが表示されます。
2. [プローブ名] を入力します。
3. [プローブ入力タイプ] を選択します。選択したプローブ入力タイプが [コマンドライン] の場合、[コマンド] フィールドにコマンドを入力します。それ以外の場合は、[スクリプトファイル] フィールドでスクリプトファイルの場所を参照して選択します。
4. 仮想メトリクスを定義するには、[仮想メトリクスの定義] チェックボックスをオンにします。
 - **区切り文字の定義:** 出力を解析するために使用する区切り文字をここに入力します。管理者は、区切り文字で正しく出力が解析されることを確認する必要があります。
 - **出力タイプ:** プローブでは [表形式出力] または [キー値出力] を使用できます。[表形式出力] を選択した場合、[メトリクス識別子列] および [メトリクス値列番号] を入力します。

25.2.4 監視

監視は、BI プラットフォーム環境内におけるサーバとワークフローのリアルタイムステータスおよび履歴トレンドを提供します。ユーザは、しきい値とアラートを監視に関連付けることができます。監視は、プローブメトリクス、サーバメトリクス、またはその両方からのデータを使用して作成することができます。監視を使用することにより、BI プラットフォーム環境のシステム機能とパフォーマンスを理解し、改善することができます。

各監視に関連付けられた信号は、常に監視ステータスを示します。監視におけるステート数は、2 または 3 に設定することができます。

- ステート数 = 2: 移行が 1 度だけ行われます。設定された監視のしきい値に対する違反が発生すると、関連する信号は緑から赤、または赤から緑に変化します。
- ステート数 = 3: 移行が 2 度行われ、関連する信号は緑、黄色、赤、または赤、黄色、緑の順に変化します。

監視は、[\[監視リスト\]](#) ページおよび [\[ダッシュボード\]](#) ページで表示することができます。[\[監視リスト\]](#) ページでは、監視、および監視ステータス、種類、説明、そして電子メール通知が一時停止または再開されたかどうかなどの重要な情報の一覧を表示することができます。[\[監視リスト\]](#) ページには、サーバ名のみが表示されます。ノードの上にカーソルを置くと、サーバの完全な名前が表示されます。監視が選択されると、メトリクスデータに基づくグラフが表示されます。グラフはライブモードと履歴モードの両方で表示することができますが、デフォルトではライブモードになっています。[\[監視リスト\]](#) ページから、新しい監視を作成することができます。また、監視の詳細の表示、既存の監視の電子メール通知設定のコピー、編集、変更、電子メール通知の一時停止または再開、およびお気に入りへの監視の追加を行うこともできます。



25.2.4.1 監視の種類


監視は、以下のように分類することができます。

- システム監視: BI プラットフォームモニタリングアプリケーションで提供される監視。デフォルトでは、各サーバタイプに対して 1 つのシステム監視が関連付けられます。デフォルトシステム監視は削除できません。ただし、メトリクスを変更し、しきい値を編集して、それらの監視をカスタマイズすることはできます。デフォルトシステム監視をコピーし、異なるメトリクスとしきい値を使用して独自の監視を作成することもできます。監視とサーバの関連付けは変更できません。
- ユーザ作成監視: ユーザが作成する監視。任意のメトリクスを使用して監視を作成し、しきい値とアラートを設定することができます。また、システム監視をコピーし、それをニーズに応じてカスタマイズすることもできます。ユーザ作成監視は、削除することができます。ユーザ作成監視をサーバに関連付けることはできません。

25.2.4.2 新しい監視の作成

[\[ダッシュボード\]](#) ページまたは [\[監視リスト\]](#) ページから、新しい監視を作成することができます。[\[ダッシュボ](#)

[\[ダッシュボード\]](#) ページでは  **Create New Watch** をクリックし、[\[監視リスト\]](#) ページでは  をクリックします。

1. CMC の [\[モニタリング\]](#) エリアに移動し、[\[監視リスト\]](#) タブをクリックします。
2.  をクリックし、以下の節の説明に従ってプロパティとオプションを設定します。

① 注記

選択したメトリクスはデフォルトで **[追加されたメトリクス]** エリアに表示されます。

一般プロパティ

[新しい監視 - 一般プロパティ] 画面では、**[名前]**、**[説明]**、**[ステータス数]**、および **[設定]** を定義することができます。一般プロパティを定義するには、次の手順に従います。

1. 該当するフィールドに名前と説明を入力します。
2. **[ステータス数]** を選択し、しきい値の数を設定します。
ステータス数として 2 を選択した場合、監視のステータスは緑から赤、または赤から緑に変化します。ステータス数として 3 を選択した場合、監視のステータスは緑、黄色、赤、または赤、黄色、緑の順に変化します。


① 注記

トレンドデータベースに保存する監視結果に対しては、**[トレンドデータベースへの書き込み]** を選択します。このデータから、トレンドグラフを表示することができます。

3. **[ステップ 2]** をクリックします。


注意ルール

[新しい監視 - 注意ルール] 画面では、メトリクスの追加、しきい値の設定、および作成する監視の現在のステータスの表示が可能です。注意設定を設定するには、次の手順に従います。

1. **[使用できるメトリクス]** ペインでメトリクスを選択し、 をクリックします。
[フィルタ] オプションを使用して、既存の一覧から任意のメトリクスを検索することができます。
デフォルトでは、2つのメトリクスの論理演算子は (AND) && です。メトリクスの下に表示されるドロップダウンリストを使用して、論理演算子を (OR) || に変更することができます。メトリクスの追加後、追加されたメトリクスの論理式が表示されます。論理式を編集することができます。論理式の形式は、`NodeName.ServerName$'MetricName'>=ThresholdValue` にする必要があります。以下は、論理式の例です。
`<Node_name>.CentralManagementServer$'Completed Jobs'>=1`
2. ドロップダウンリストから演算子を選択した後、しきい値を設定します。
次の表は、しきい値の設定に使用できる演算子を示します。

演算子	説明
>=	以上
<=	以下
>	より大きい
<	より小さい
==	等しい



演算子	説明
!=	等しくない

現在の式のステータスを表示するには、 をクリックします。

3. [ステップ 3] をクリックします。

危険ルール

[新しい監視 - 危険ルール] 画面は、選択されたステート数が 3 である場合にのみ表示されます。[新しい監視 - 危険ルール] 画面では、メトリクスの追加、しきい値の設定、および作成する監視の現在のステータスの表示が可能です。デフォルトでは、注意設定に対して指定された値が危険ルール画面で保持されます。同じメトリクスを保持する必要がある場合、演算子またはしきい値を変更する必要があります。また、これらのメトリクス設定を削除することもできます。危険設定を設定するには、次の手順に従います。

1. [使用できるメトリクス] ペインでメトリクスを選択し、 をクリックします。
2. ドロップダウンリストから演算子を選択した後、しきい値を設定します。現在の式のステータスを表示するには、 をクリックします。
3. [ステップ 4] をクリックします。

スロットルおよび通知

[新しい監視 - スロットルおよび通知] 画面では、電子メール通知を有効化し、[ダッシュボード] および [監視リスト] ページにおける監視ステータスの表示方法を設定することができます。すべてのしきい値違反の監視のステータスを変更するか、その絞り込み条件を設定することができます。

1. すべてのしきい値違反の監視のステータスを変更する場合、[注意または危険のルール評価が true であるたびに監視のステータスを変更します] を選択します。注意または危険の評価が true だった場合には、監視ステータスが対応する状態に変更されます。注意と危険ルールの両方の評価が true だった場合には、監視ステータスは赤色に変わります。
2. 監視のステータスが絞り込み条件に基づいて変更されるようにする場合、[以下の条件の絞り込みに従い監視のステータスを変更します] を選択し、下記の説明に従って [注意の条件の絞り込み] および [危険の条件の絞り込み] を指定します。

[最後のルール評価が true の場合] を選択し、希望する期間を指定します。期間は、日単位、時間単位、分単位、または秒単位で指定することができます。たとえば、このオプションを選択して、注意ルールの期間を 5 分に設定し、注意ルールの評価が true の場合は、監視ステータスは黄色に変わります。同様に、危険ルールも設定できます。注意と危険ルールの両方の評価が true だった場合には、監視ステータスは赤色に変わります。

設定された期間に true 評価が特定の数に達した場合にのみ監視のステータスに変化するようにするには、[過去: で __ 個の true 評価を待機] を選択し、true 評価の数を入力して、希望する期間を指定します。たとえば、True 評価の数を 20 に設定し、期間を 5 日に設定した場合、True 評価の数が 5 日間で 20 を超えた場合にのみ監視のステータスに変化します。注意と危険ルールの両方の評価が true だった場合には、監視ステータスは赤色に変わります。

- 監視ステータスが変化したときにアクションを実行するには、[アクションの設定]を選択し、[プローブの実行]ドロップダウンリストから適切なプローブを選択します。たとえば、3つのステータスで監視を作成した場合、監視ステータスが黄色と赤色になったときにそれぞれプローブが実行されるように設定できます。
- アラートを有効化するには、[通知設定]で[アラート通知を有効にする]を選択します。
アラートは、監視ステータスの変化に基づいて生成されます。

過去の監視ステータス	現在の監視ステータス	アラート生成の有無
緑色	赤色	はい
黄色	赤色	はい
緑色	黄色	はい
赤色	緑色	該当せず
黄色	緑色	該当せず
緑色	緑色	該当せず
黄色	黄色	いいえ
赤色	赤色	いいえ
赤色	黄色	いいえ

- [ディレクトリ]をクリックします。[ディレクトリ]ページが開きます。
- 個別の電子メールを追加するには、電子メール ID を入力して[電子メール受信者の追加]をクリックするか、テーブルからユーザまたはグループ名を選択し、[アラート設定]をクリックして、希望するオプションを選択します。
- アラートを発生させたメトリクスの詳細情報が必要な場合は、[メトリクスのトレンド履歴を添付ファイルとして追加]を選択します。履歴メトリクスデータのグラフがアラートに追加されます。グラフには、アラートがトリガされてから 10 分間のデータが含まれています。
- 新しい監視の作成を完了するには、[確認]をクリックしてから[保存]をクリックします。

① 注記

[注意の条件の絞り込み]をコピーするには、[危険の条件の絞り込み]で[注意基準の適用]のチェックボックスをクリックします。

25.2.4.3 監視の管理

モニタリングアプリケーションの[監視リスト]ページには、すべての監視とそのステータス、種類、および説明が表示されます。監視が選択されると、メトリクスデータに基づくグラフが表示されます。すべての監視を表示するか、[表示]オプションを使用し、ステータスに基づいて監視をフィルタするか、お気に入りとして追加された監視を表示することができます。たとえば、KPI の監視を表示するには、▶ **表示** ▶ **KPI** ▶ を選択します。

[監視リスト]ページでは、監視の編集、監視のコピーまたは削除、監視詳細のチェック、電子メール通知の有効化または無効化、お気に入りへの監視の追加、および監視の最新表示が可能です。


電子メール通知

[電子メール通知] ボタンを使用して、特定の監視に対する電子メール通知を有効化または無効化することができます。[属性] 列は、監視に対する電子メール通知が一時停止または再開されているかどうかを示します。

お気に入りへの監視の追加


[お気に入りに追加] ボタンをクリックし、お気に入りリストに監視を追加できます。[表示] リストの [お気に入り] を選択することにより、お気に入りの監視のみを表示できます。お気に入りとして追加した監視はユーザ固有であり、別のユーザとしてログインした人は表示できません。

監視の最新表示

監視が自動的に最新表示されるようにする場合は [自動最新表示を有効にする] を使用することも、 をクリックして監視を手動で最新表示することもできます。

25.2.4.3.1 監視の編集

必要に応じて監視を編集し、カスタマイズすることができます。ただし、監視のサーバの関連付けは変更できません。監視を編集するには、以下の手順を実行します。

1. 監視の一覧から監視を選択し、 をクリックします。
2. ヘッダパネルからタブを選択し、選択したタブに関連する詳細を編集します。

オプション	説明
一般プロパティ	選択された監視の名前、説明、ステート数、および設定に関連する情報を編集することができます。
注意ルール	利用可能メトリクス、追加メトリクス、および現在の監視ステータスに関連する注意ルール情報を編集することができます。
危険ルール	利用可能メトリクス、追加メトリクス、および現在の監視ステータスに関連する危険ルール情報を編集することができます。
スロットルおよび通知	電子メール通知に関連する情報を編集することができます。

3. [保存] をクリックします。

25.2.4.3.2 監視をコピーまたは削除する

監視をコピーするための手順

モニタリングアプリケーションでは、監視のコピーオプションが提供されます。監視をコピーすると、新しい監視が同じ情報と設定を使用して作成されます。新しい監視は、同じ名前を使用し、それに番号が追加されてコピーされます。たとえば、AdaptiveJobServer 監視という名前の監視をコピーすると、新しい監視は AdaptiveJobServer 監視(2) という名前で作成されます。

監視をコピーするには、監視の一覧から監視を選択し、[コピー] をクリックします。

① 注記

すべてのデフォルト監視は、サーバに関連付けられています。監視をコピーすると、サーバとの関連付けはコピーされた監視から解除されます。

監視を削除するための手順

デフォルト監視は削除できません。ただし、ユーザ作成監視は削除できます。ユーザ作成監視を削除するには、以下の手順に従います。

1. 監視を選択し、[削除] をクリックします。
2. [削除] 確認ダイアログボックスで [OK] をクリックします。

また、複数の監視を選択して [削除] をクリックすると、複数の監視を同時に削除できます。


25.2.4.3.3 監視の詳細の表示

1. 監視を選択し、[詳細] をクリックします。
2. [監視の詳細] ダイアログボックスには、選択されている監視の一般プロパティおよび監視ルールが表示されます。

オプション	説明
一般プロパティ	監視名、監視ステータス、監視の説明、開封済みおよび未読アラート、最新アラート、注意設定、危険設定、および受信ボックス購読者に関連する情報を提供します。
監視ルール	注意設定と危険設定、およびメトリクスステータスに基づくグラフで使用される、メトリクスの現在のステータスに関連する情報を提供します。グラフは、ライブモードと履歴モードのどちらかで表示することができます。

25.2.4.3.4 監視の無効化

BI プラットフォームモニタリングアプリケーションには、多数の監視があります。監視を無効化するオプションがあり、無効化したオプションは必要に応じて再度有効化することができます。監視が無効化されていると、監視のステータスは決定されません。そのため、設定された期間について監視が無効化されている場合、以下のような状況になります。

- その特定の期間について、グラフに監視のステータスのデータが表示されません。
- 無効化された監視に含まれ、その他の監視には含まれないメトリクスについても、その特定の期間についてはグラフにデータが表示されません。
- 監視を選択し、 をクリックしてから **[監視の無効化]** をクリックします。
- **[削除]** 確認ダイアログボックスで **[OK]** をクリックします。

また、複数の監視を選択して **[監視の無効化]** をクリックすると、複数の監視を同時に無効化できます。

① 注記

管理者グループおよび監視を作成したユーザのみに、監視を有効化または無効化する権限があります。

25.2.4.4 監視の検索

[監視リスト] ページにある検索ボックスでは、既存の監視を検索できます。

監視名に基づいた監視の検索

1. **[監視リスト]** ページに移動します。
2. 検索コンボボックスから、**[監視名別検索]** を選択します。
3. 検索ボックスに検索する監視の名前を入力し、**[検索]** アイコンをクリックします。

メトリクス名に基づいた監視の検索

1. 検索コンボボックスから、**[メトリクス名別検索]** を選択します。
2. 検索ボックスにメトリクス名を入力し、**[検索]** アイコンをクリックします。

25.2.5 メトリクス

[メトリクス] ページには、プローブとサーバから生成されたすべてのメトリクスが表示されます。左側のパネルからメトリクスを選択し、それらを **[選択したメトリクスの表示]** ペインで表示することができます。**[検索]** オプションにより、必要なメトリクスのみを表示することができます。

① 注記

デフォルトプローブから生成されるメトリクスは、実行時間と合格です。プローブの結果は合格メトリクスによって以下の値のいずれかで表されます。

- 0: プローブが失敗したことを示します。
- 1: プローブが合格したことを示します。
- 2: プローブがタイムアウトになったことを示します。

ただし、ユーザは新しいプローブの作成時に表示されるメトリクスをいくつでも定義することができます。これらのメトリクスは、仮想メトリクスと呼ばれます。サーバメトリクスの詳細なリストについては、サーバのメトリクスに関する付録を参照してください。

[[選択したメトリクスの表示](#)] ペインには、選択したメトリクスとメトリクス値、および日付と時刻が表示されます。選択した各メトリクスでは、グラフも表示されます。グラフは、ライブモードまたは履歴モードのどちらかで表示することができます。グラフを非表示にするには、[[すべて折りたたむ](#)] を選択します。同じ時間範囲で複数のグラフを表示するには、[[時間軸の同期](#)] を選択します。

SAPOSCOL を介したサーバメトリクス

SAPOSCOL をインストールすることにより、CPUcount、FreeMemory、PhysicalMemory などのサーバレベルメトリクスを表示することができます。これらのメトリクスを取得するには、モニタリングアプリケーションプロパティでホストメトリクスを有効化し、SAPOSCOL がインストールされたパスを入力します。ホストメトリクスを有効化すると、メトリクスページおよび監視作成ウィザードでこれらのメトリクスを表示できるようになります。サーバメトリクスを選択します。ツールヒントにこのサーバメトリクスのサービス名が表示されます。

関連情報

[サーバのメトリクスに関する付録について \[499 ページ\]](#)





25.2.5.1 派生メトリクス

派生メトリクスとは、数学の方程式内に複数の既存のメトリクスを組み合わせて作成するメトリクスです。ユーザの必要性に基づいてメトリクスを作成し、このメトリクスを使用して監視を作成できます。

派生メトリクスは、[[メトリクス](#)] タブの左側のペインで表示することができます。

25.2.5.1.1 派生メトリクスの作成

1. [[メトリクス](#)] ページまたは [[ダッシュボード](#)] ページで、[[メトリクスの作成](#)] または  をクリックします。

2. メトリクス名を入力し、左側のパネルからサーバを選択します。
3. メトリクスを選択し、 をクリックしてメトリクスをメトリクス式に追加します。
4. メトリクス式に演算子を手動で入力します。サポートされている演算子は、加算 (+)、減算 (-)、乗算 (*)、除算 (/) です。
5. メトリクス式が論理的に正しいかどうかを確認するには、[評価] をクリックします。
6. [ステップ 2] をクリックします。
7.  [メトリクス](#)  [派生メトリクス](#)  を選択します。
8. [確認] をクリックします。
9. [保存] をクリックします。





① 注記

メトリクス式が論理的に正しい場合にのみ、メトリクスを保存できます。

新しい派生メトリクスが、[\[メトリクス\]](#) ページで適切なサーバの下に表示されます。

25.2.5.1.2 派生メトリクスの編集

派生メトリクスの式は編集できますが、派生メトリクス名とサーバは編集できません。派生メトリクスを編集するには、以下の手順を実行します。

1. 左のパネルでメトリクスを選択し、 をクリックします。
2. 必要に応じて、メトリクス式を修正します。
3. メトリクス式が論理的に正しいかどうかを確認するには、[評価] をクリックします。
4. [ステップ 2] をクリックします。
5.  [メトリクス](#)  [派生メトリクス](#)  を選択します。
6. [確認] をクリックします。
7. [保存] をクリックします。

25.2.6 アラート

アラートは、ユーザ定義の式またはルールが True の場合に、モニタリングアプリケーションによって生成される通知です。1つのルールまたは式には複数のメトリクスおよびしきい値を指定できるので、ルール全体が True になる必要があります。アラートは、電子メールで取得するか、[\[ダッシュボード\]](#) ページで表示できます。アラートの電子メールでは、しきい値に違反して、監視でアラートが生成された原因となったメトリクスが強調表示されます。

監視の作成時にアラートを有効化することができます。アラートの設定に関する詳細については、[新しい監視の作成 \[325 ページ\]](#) のイベント設定を参照してください。

[アラート] ページでは、すべてのモニタリングアラートとアラートのステータス、アラート名、アラートメッセージ、およびアラートの生成時刻を表示することができます。アラート名をクリックすると、[\[アラートの詳細\]](#) ページにアクセスすることができます。このページには次の情報があります。

- 監視名
- アラート評価
- アラートの時刻
- 注意ルール、危険ルール、およびアラート時のメトリクスとメトリクス値

生成されたアラートのステータスはすべて **[未読]** であり、アラートの詳細をチェックした後に **[開封済み]** ステータスに変更されます。アラートに対するアクションの実行後、ステータスを **[確認済み]** に変更することができます。

次の表に、**[アラート]** ページで実行できるアクティビティを示します。

オプション	説明
参照	一覧から警告を選択し、選択された監視から生成されたアラートを表示することができます。
クリア	すべての監視によって生成されたアラートを表示することができます。
フィルタ	[開封済み] 、 [未読] 、 [確認済み] の3つのステータスに基づき、アラートをフィルタすることができます。 <div> ① 注記 特定のアラートの [アラートの詳細] ページにアクセスすると、アラートステータスが [開封済み] に設定されます。 </div>
確認	アラートの原因とそれを解決するために実行されたアクションを記録することができます。アラートに対してアクションが実行された後、アラートのステータスを [確認済み] に設定することができます。 <div> ① 注記 アラートを [確認済み] に設定すると、アラートステータスも [開封済み] に設定されます。 </div>
削除	アラートを削除することができます。

リマインダアラート

最初のアラートに応答しなかった場合、リマインダアラートが送信されます。たとえば、監視のしきい値に達してアラートが送信されたとします。最初に送信されたアラートを確認しなかった場合、リマインダアラートが送信されます。監視のリマインダアラートを確認すると、同じ監視で生成された以前のアラートは自動的に確認済みになります。

25.2.7 モニタリングデータのレポートの生成

Universes > Monitoring TrendData Universes フォルダにある“Monitoring TrendData ユニバース”を使用してモニタリングのレポートを生成できます。モニタリングに関する情報を表示する直感的なレポートを作成できます。このレポートでは、監視データ、監視のトレンド、一定期間の監視の動作、プローブのトレンドをレポートしたり、監視からそのメトリクスにドリルダウンしたりできます。このようなレポートを作成するには、SAP BusinessObjects デスクトップクライアントをインストールし、ユニバースデザインツールを使用して、Web Intelligence や Crystal Reports などのレポートングアプリケーションを使用する必要があります。

25.3 Visual Difference

Visual Difference を用いて、LCMBIAR またはオブジェクト、またはその両方の 2 つのバージョン間の差分を表示することができます。この機能を使用すると、ファイルまたはオブジェクト間の差分を確認し、さまざまな種類のレポートを作成および管理できます。この機能では、比較元バージョンと比較先バージョン間の比較ステータスが提供されます。たとえば、以前のバージョンのユーザレポートが正確で現在のバージョンのユーザレポートは不正確である場合、ファイルを比較および分析して問題点を評価できます。

ホーム ページ

Visual Difference ホームページは、次のタブおよびペインで構成されています。

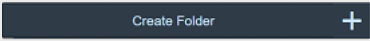
- 新しい比較 - このタブでは、オブジェクト間の新しい比較を作成できます。
- 比較の検索 - このフィールドでは、すでに比較したオブジェクトを検索できます。
- [比較] ペイン - このペインには、フィルタおよび差分のタブの一覧が表示されます。
- 比較: [差分] ペイン - このペインには、比較されたオブジェクト、比較名、日付/時刻、および差分のステータスが一覧で表示されます。


25.3.1 Visual Difference を使用してオブジェクトまたはファイルを比較する

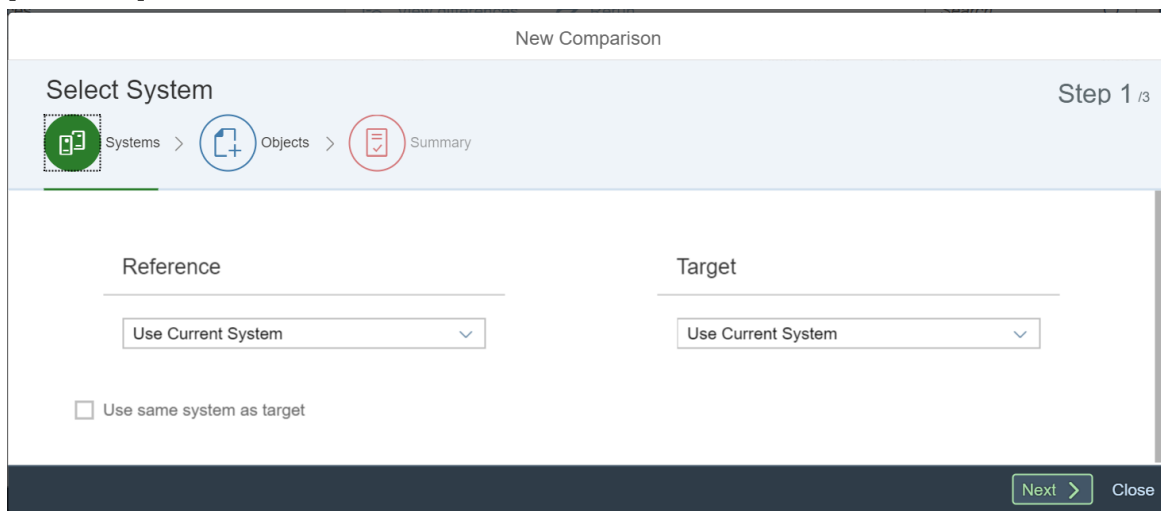
Visual Difference を使用してファイルを比較するには、次の手順に従います。

1. CMC アプリケーションにログインします。
2. CMC ホームページで、**管理**タブの [Visual Difference](#) リンクをクリックします。
Visual Difference ページが表示されます。比較対象のファイルは、“Differences” フォルダまたはユーザが作成したいいずれかのサブフォルダに保存されています。

① 注記

新しいサブフォルダを作成するには、 を選択します。

3.  を選択して、新しい比較を作成します。
[新しい比較] ウィザードが表示されます。



4. [参照] および [ターゲット] システムをドロップダウンから選択します。
以下の参照およびターゲットシステムのいずれにも接続できます。

① 注記

オブジェクトがバージョン管理システム (VMS) に追加されている場合、次のステップでバージョンを選択することができます。

- CMS
 - ローカルファイルシステム
5. [オブジェクト選択] 画面で、[参照] および [ターゲット] システムからオブジェクトまたはファイルを検索して選択します。
6. 必要であれば [比較名] を変更します。
7. [比較] を選択して、オブジェクトを比較します。

① 注記

- 差異をチェックするには、まず比較を選択し、次に [違いを表示] を選択します。差分はオレンジ色で強調表示され、見つからないオブジェクトは赤色で強調表示されます。
- 比較を再実行するには、まず比較を選択し、次に [再実行] を選択します。

比較処理はすぐに開始されます。

また、比較したオブジェクトは、フィルタオプションを使用してタイプ別に表示したり、差分または共通の属性と共に表示することもできます。

25.3.2 バージョン管理システムを使用してオブジェクトまたはファイルを比較する

Visual Difference オプションを使用すると、バージョン管理システム内のプロモーションマネジメントジョブまたはフォルダを比較することができます。

バージョン管理システム内のオブジェクトを比較するには、次の手順に従います。

1. CMC アプリケーションにログインします。
2. CMC ホームページで、**管理**タブの [Visual Difference](#) リンクをクリックします。
Visual Difference ページが表示されます。比較対象のファイルは、"Differences" フォルダまたはユーザが作成したいずれかのサブフォルダに保存されています。

① 注記

新しいサブフォルダを作成するには、フォルダアイコンをクリックします。

3. [\[新しい比較\]](#) をクリックします。
[比較画面](#)が表示されます。
4. [\[参照\]](#) の [\[システムの選択\]](#) から [\[VMS にログイン\]](#) を選択します。
5. VMS へのログイン認証情報を入力し、[ログイン](#) をクリックします。
[ターゲットシステムの自動選択](#) ダイアログボックスが表示されます。
6. 異なるターゲットシステムを設定する場合は [\[いいえ\]](#) をクリックし、ターゲットシステムを参照システムと同じように設定する場合は、[\[はい\]](#) をクリックします。
7. [\[参照\]](#) をクリックし、参照システムおよびターゲットシステムの両方から、比較するオブジェクトまたはジョブを選択します。
8. [追加](#) をクリックします。
比較目的で選択されたオブジェクトの一覧が、[新しい比較](#) ペインに表示されます。
ファイルの比較をすぐに行うことも、後で行うようにスケジュールすることもできます。ファイルを比較するには、続けて次の手順に従います。
9. [\[比較\]](#) をクリックして、ジョブまたはフォルダを比較します。
比較処理はすぐに開始され、差分が存在する場合は [\[Visual Difference ビューア\]](#) に表示されます。差分はオレンジ色で強調表示され、見つからないオブジェクトは赤色で強調表示されます。
また、比較したオブジェクトは、フィルタオプションを使用してタイプ別に表示したり、差分または共通の属性と共に表示することもできます。
10. 差分レポートを保存するには、[\[保存\]](#) をクリックします。
11. レポートを保存する場所を指定して、[\[OK\]](#) をクリックします。

25.3.3 比較をスケジュールする

ファイルまたはオブジェクトの比較をスケジュールするには、次の手順に従います。

1. [スケジュール](#) をクリックします。
[スケジュールウィンドウ](#)が表示されます。
2. [\[比較の実行\]](#) リストから比較スケジュールの間隔を選択します。
3. 可能な再試行回数、および対応するフィールドでの試行間隔を指定します。

① 注記

再試行回数を指定する場合のみ、試行間隔を指定することができます。

4. レポート名を指定し、[参照] をクリックしてレポートを保存する場所を探します。
ジョブの保存場所ウィンドウが表示されます。
5. レポートを保存する必要なフォルダを選択し、[OK] をクリックします。

① 注記

[比較の実行] リストから選択するオプションに応じて、比較の日時をそれぞれ指定する必要があります。

6. スケジュールをクリックします。

ユーザは後で、Visual Difference ビューアに比較オブジェクトまたは相違レポートを表示することができます。比較済み: 差ページに、フォルダおよびファイルの一覧または比較レポートが表示されます。

[比較後の相違点] ページには、次のオプションも含まれます。

- 履歴: このオプションでは比較の履歴を表示することができます。
- 再実行: このオプションは比較を再度実行します。
- スケジュール: このオプションでは比較をスケジュールすることができます。

26 監査

26.1 概要

監査を使用して、サーバおよびアプリケーションの重要なイベントを記録することができます。このようにして、アクセスされている情報、アクセスと変更の方法、およびそれらの操作の実行者を把握するのに役立てることができます。この情報は、監査データストア (ADS) と呼ばれるデータベースに記録されます。データが ADS に格納されたら、それぞれのニーズに合うようカスタムレポートをデザインすることができます。SAP Community (<http://community.sap.com/>) でサンプルユニバースとサンプルレポートを検索できます。

この章では、監査実行サーバは、イベントに関する情報を記録または保存するシステムを指します。また、監査対象サーバは、監査可能なイベントを実行するシステムを指します。1つのシステムが両方の役割を果たす場合もあります。

監査の仕組み

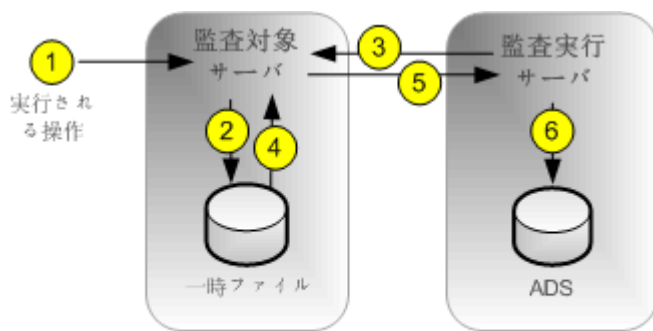
Central Management Server (CMS) はシステム監査実行サーバとして機能し、監査可能なイベントを発生させる各サーバまたはアプリケーションは監査対象サーバとして機能します。監査対象イベントが発生すると、監査対象サーバはレコードを生成してローカルの一時ファイルに格納します。CMS は定期的に監査対象サーバと交信し、これらのレコードを要求し、ADS にデータを書き込みます。

また、CMS は、異なるマシン上で発生する監査対象イベントの同期制御も行います。各監査対象サーバは、記録される監査イベントに、タイムスタンプを付けます。異なるサーバ上で発生するイベントのタイムスタンプの一貫性を保つために、CMS は定期的に、監査対象サーバに対し自分のシステム時間を配信します。監査対象サーバは、この時間をそれぞれの内部クロックと比較します。もし違いがあれば、それ以降の監査イベントに対して記録する時間を修正します。

監査対象サーバの種類に応じて、次のワークフローのいずれかを使用してイベントが記録されます。

サーバ監査

サーバによって生成されたイベントの場合、CMS は監査対象サーバとしても監査実行サーバとしても実行できます。

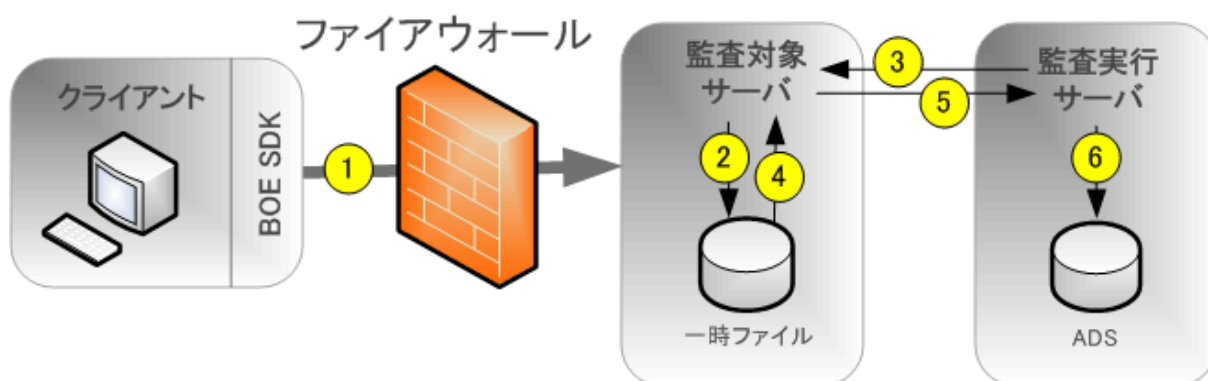


注: Auditor と監査対象サーバは、同じ CMS サーバ上に共存できます。

1. 監査可能なイベントがサーバで実行されます。
2. 監査対象サーバはイベントを一時ファイルに書き込みます。手順1および2は、手順3の前に複数回発生する場合があります。
3. 一定の間隔で、監査実行サーバは監査対象サーバをポーリングし、監査イベントのバッチを要求します。
4. 監査対象サーバは一時ファイルからイベントを取得します。
5. 監査対象サーバはイベントを監査実行サーバに送信します。
6. 監査実行サーバは、ADS にイベントを書き込み、監査対象サーバに一時ファイルからイベントを削除するよう通知します。

CORBA によるクライアント接続のクライアントログオン監査

これには、SAP BusinessObjects Web Intelligence などのアプリケーションが含まれます。



注: 監査実行サーバと監査対象サーバは、同じ CMS サーバ上に共存できます。

1. クライアントはCMS に接続します。この CMS は監査対象サーバとして機能します。クライアントはその IP アドレスとマシン名を提供し、監査対象サーバがそれを検証します。

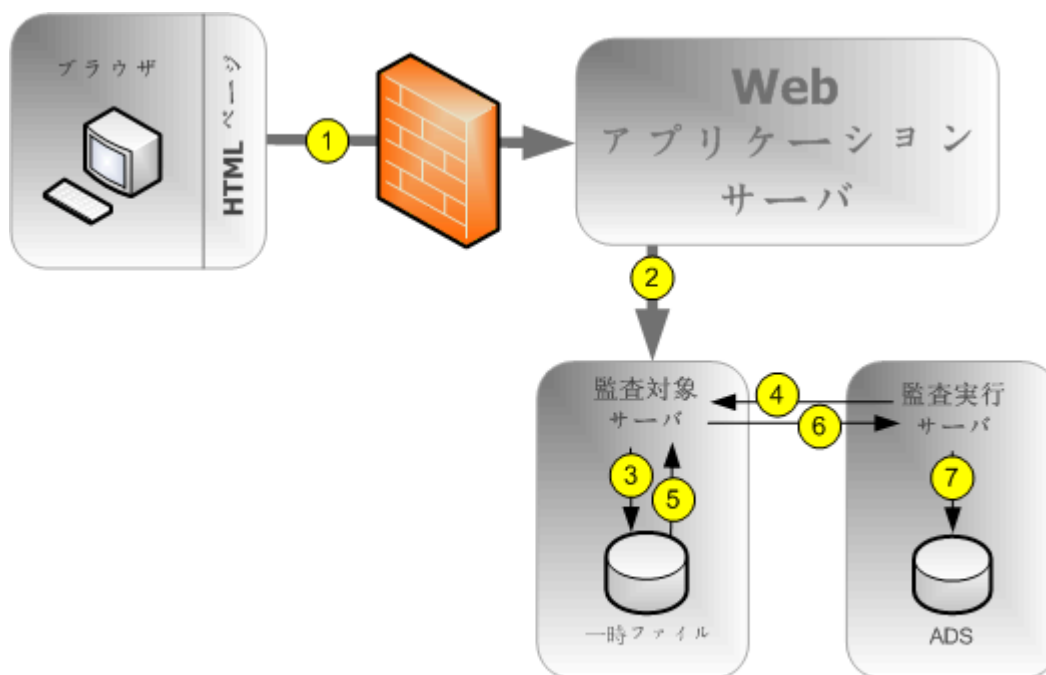
① 注記

クライアントと CMS 間のファイアウォールでポートを開く必要があります。ファイアウォールの詳細については、SAP BusinessObjects Enterprise Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドのセキュリティに関する章を参照してください。

2. 監査対象サーバはイベントを一時ファイルに書き込みます。手順1および2は、手順3の前に複数回発生する場合があります。
3. 一定の間隔で、監査実行サーバは監査対象サーバをポーリングし、監査イベントのバッチを要求します。
4. 監査対象サーバは一時ファイルからイベントを取得します。
5. 監査対象サーバはイベントを監査実行サーバに送信します。
6. 監査実行サーバは、ADS にイベントを書き込み、監査対象サーバに一時ファイルからイベントを削除するよう通知します。

HTTP によるクライアント接続のクライアントログオン監査

これには、BI ラウンチパッド、セントラル管理コンソール、SAP BusinessObjects Web Intelligence などのオンラインアプリケーションが含まれます。

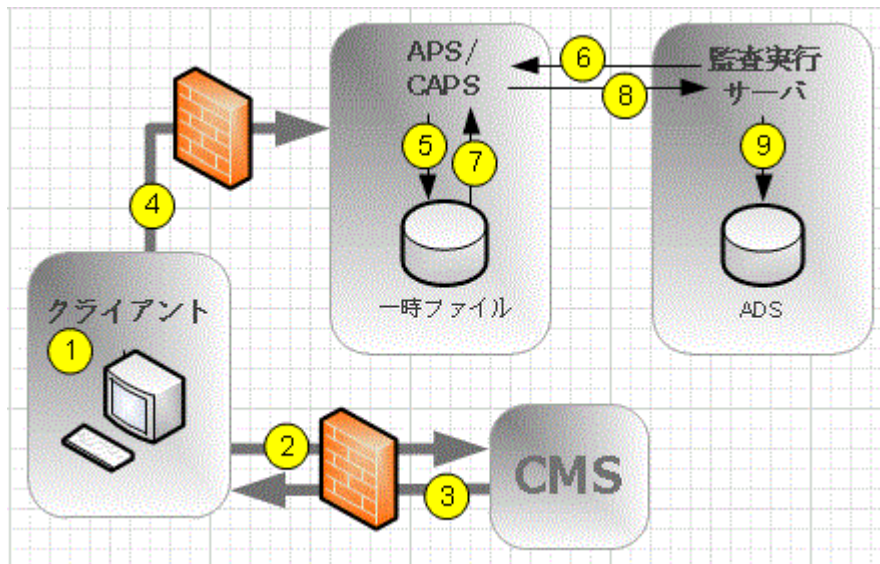


注: Auditor と監査対象サーバは、同じ CMS サーバ上に共存できます。

1. ブラウザが Web アプリケーションサーバに接続し、ログオンデータが Web アプリケーションサーバに送信されます。
2. BI プラットフォーム SDK は、ブラウザマシンの IP アドレスおよび名前とともに、ログオン要求を監査対象サーバ (CMS) に送信します。
3. 監査対象サーバはイベントを一時ファイルに書き込みます。手順1および3は、手順4の前に複数回発生する場合があります。
4. 一定の間隔で、監査実行サーバは監査対象サーバをポーリングし、監査イベントのバッチを要求します。
5. 監査対象サーバは一時ファイルからイベントを取得します。
6. 監査対象サーバはイベントを監査実行サーバに送信します。
7. 監査実行サーバは、ADS にイベントを書き込み、監査対象サーバに一時ファイルからイベントを削除するよう通知します。

CORBA によるクライアント接続のログオンなしの監査

このワークフローは、CORBA による接続時の SAP BusinessObjects Web Intelligence のイベントの監査に適用されます。



1. ユーザは、監査対象となる動作を実行します。
2. クライアントは CMS に接続し、動作が監査対象として設定されているかどうかを確認します。
3. 動作が監査対象として設定されている場合は、CMS はクライアントにその情報を通知します。
4. クライアントは、Adaptive Processing Server でホストされている クライアント監査プロキシサービス (CAPS) にイベント情報を送信します。

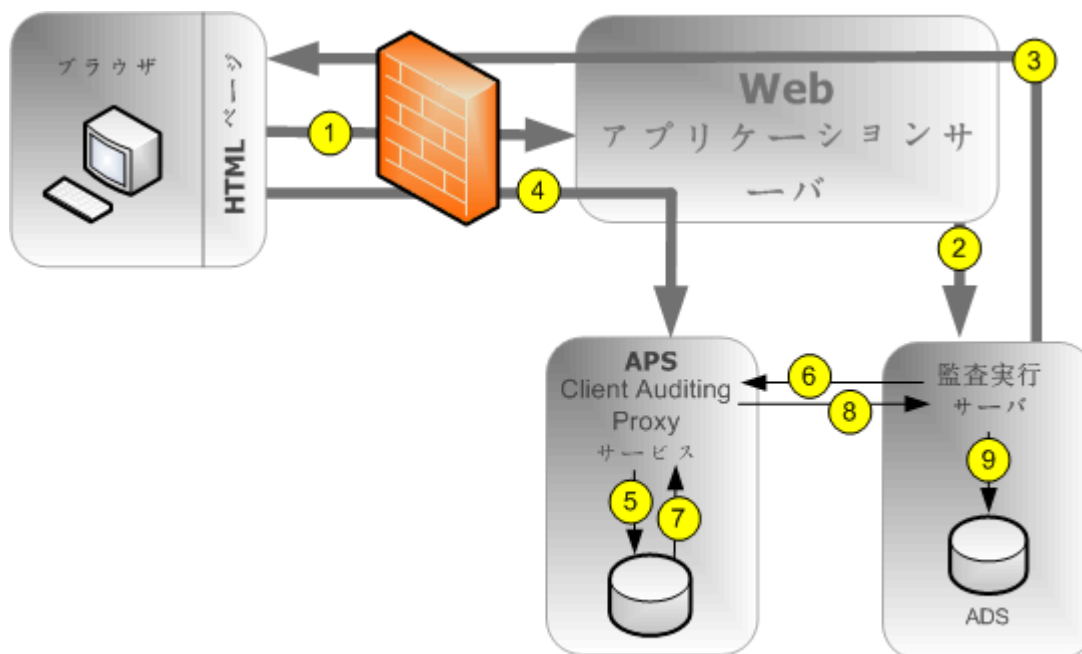
① 注記

ファイアウォールのポートは、各クライアントと CAPS をホストするすべての Adaptive Processing Server 間、さらに各クライアントと CMS との間で開かれる必要があります。ファイアウォールの詳細については、*SAP BusinessObjects Enterprise Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドのセキュリティに関する章を参照してください。

5. CAPS はイベントを一時ファイルに書き込みます。手順 1 および 5 は、手順 6 の前に複数回発生する場合があります。
6. 一定の間隔で、監査実行サーバは CAPS をポーリングし、監査イベントのバッチを要求します。
7. CAPS は一時ファイルからイベントを取得します。
8. CAPS はイベント情報を監査実行サーバに送信します。
9. 監査実行サーバは、ADS にイベントを書き込み、CAPS にイベントを一時ファイルから削除するよう通知します。

HTTP によるクライアント接続のログオンなしの監査

このワークフローは、HTTP による接続時の SAP BusinessObjects Web Intelligence のイベント (ログオンイベントは除く) の監査に適用されます。



注: Auditor と監査対象サーバは、同じ CMS サーバ上に共存できます。

1. ユーザは、潜在的に監査可能なイベントを開始します。クライアントアプリケーションは、Web アプリケーションサーバに接続します。
2. Web アプリケーションは、イベントが監査対象として設定されているかどうかを確認します。

① 注記

図では監査実行サーバの CMS が接続されていますが、クラスタ内のどの CMS に接続してもこの情報を得ることができます。

3. CMS は監査設定情報を Web アプリケーションサーバに返し、Web アプリケーションサーバはこの情報をクライアントアプリケーションに渡します。
4. イベントが監査対象として設定されている場合、クライアントはイベント情報を Web アプリケーションサーバに送信し、Web アプリケーションサーバはその情報を、Adaptive Processing Server (APS) でホストされているクライアント監査プロキシサービス (CAPS) に渡します。
5. CAPS はイベントを一時ファイルに書き込みます。手順 1 および 5 は、手順 6 の前に複数回発生する場合があります。
6. 一定の間隔で、監査実行サーバは CAPS をポーリングし、監査イベントのバッチを要求します。
7. CAPS は一時ファイルからイベントを取得します。
8. CAPS はイベント情報を監査実行サーバに送信します。
9. 監査実行サーバは、ADS にイベントを書き込み、CAPS にイベントを一時ファイルから削除するよう通知します。

監査をサポートするクライアント

以下のクライアントアプリケーションが監査をサポートしています。

- Analysis, OLAP エディション (AOLAP)
- BI ラウンチパッド (BILP)
- ビジネスビューマネージャ (BVM)
- セントラル設定マネージャ (CCM)
- セントラル管理コンソール (CMC)
- OpenDocument
- インフォメーションデザインツール (IDT)
- Live Office (LO)
- SAP BusinessObjects Mobile
- トランスレーションマネジメントツール (TMT)
- Web Intelligence リッチクライアント (WIRC)
- Lumira Desktop アプリケーション (Discovery)
- Lumira Designer アプリケーション

① 注記

上に一覧表示された監査イベントを収集するには、CAPS のインスタンスを少なくとも1つ実行中である必要があります。

上に一覧表示されていないクライアントは直接イベントを生成しませんが、クライアントアプリケーション操作の結果としてサーバによって実行されたアクションの一部は監査できます。

監査の整合性

多くの場合、監査が正しくインストール、設定、保護され、すべてのクライアントアプリケーションの正しいバージョンが使用されている場合、監査機能は指定されたすべてのシステムイベントを正しくかつ一貫して記録します。ただし、特定のシステムおよび環境の条件が監査に悪影響を及ぼす可能性があるため、注意が必要です。

イベントが発生してから ADS に最後の転送が行われるまでの間に常に遅延が発生します。CMS または監査データベースが使用できない、またはネットワークに接続できないといった状況は、このような遅延を長引かせます。

システム管理者は、次の状況をすべて回避する必要があります。これらの状況では、不完全な監査レコードが生成される可能性があります。

- 監査データが格納されているドライブが、最大容量に達している。監査データベースと監査対象サーバの一時ファイルに使用するディスク領域が十分であることを確認する必要があります。
- 監査対象サーバがネットワークから正しく削除されていないため、すべての監査イベントを送信できない。ネットワークからサーバを削除する場合は、監査イベントを監査データベースに送信するための十分な時間を確保する必要があります。
- 監査対象サーバの一時ファイルの削除または変更。
- ハードウェア障害またはディスク障害。
- 監査対象サーバまたは監査実行サーバのホストマシンの物理的な破損。

監査イベントが CMS 監査実行サーバに到達できなくなる条件もいくつかあります。たとえば、次のような条件があります。

- ユーザが、古いクライアントバージョンを使用している。

- 正しく設定されていないファイアウォールによって、監査情報の送信がブロックされる。

① 注記

クライアントアプリケーションによって生成されたイベントに、システムの信頼できる領域外であるクライアント側から送信された情報が含まれている。そのため、状況によっては、この情報はシステムのサーバによって記録された情報ほど信頼性が高くない場合があります。

① 注記

デプロイメントからサーバを削除する場合は、最初にそのサーバを無効にする必要がありますが、一時ファイル内のすべてのイベントが監査データベースに転送できるようになるまで、サーバをネットワークに接続したまま稼働させておく必要があります。サーバの**キュー内の監査イベントの現在の数**メトリクスには、転送待ちの監査イベントの数が表示されます。このメトリクスが0になると、サーバを停止できます。一時ファイルの場所は、そのノードの %DefaultAuditingDir% プレースホルダに定義されています。プレースホルダの詳細については、サーバの管理に関する章を参照してください。

① 注記

Client Auditing を使用する場合は、Client Auditing Proxy Service 専用の Adaptive Processing Server を作成することをお奨めします。このことによって、最良のシステムパフォーマンスが得られます。システムのフォールトトレランスを向上するには、複数の APS 上で CAPS を実行することも考慮します。

関連リンク

[サーバとノードプレースホルダ \[515 ページ\]](#)

26.2 CMC 監査ページ

CMC の [\[監査\]](#) ページには、次の領域があります。

- [ステータスの概要](#)
- [イベントの設定](#)
- [イベント詳細の設定](#)
- [設定](#)

26.2.1 監査ステータス

監査の [\[ステータスの概要\]](#) には、監査設定の最適化に有用で、監査データの整合性に影響を与える可能性のある問題を警告する、一連のメトリクスが表示されます。ステータスの概要は、セントラル管理コンソールの [\[監査\]](#) ページの上部にあります。

概要には、次の状況における警告も表示されます。

- 監査データストア (ADS) データベースへの接続は、使用不可能です。
- クライアントイベントが収集されないようにする、実行中または有効化されたクライアント監査プロキシサービスはありません。
- 監査対象には、取得できなかったイベントがあります (サーバまたは影響のあったサーバは特定されます)。通常、これは、サーバが適切に停止またはシャットダウンされなかったこと、および一時ファイルにイベントがまだ存在することを示しています。

① 注記

ステータスの概要のメトリクスは、緑色、黄色、赤色でマークされ、監査機能の状態を示します。

監査ステータスのメトリクス

メトリクス	詳細
ADS 最終更新日	Auditor CMS が監査イベントの監査対象のポーリングを最後に終了した日付と時刻。
監査スレッド使用率	<p>Auditor CMS が監査対象からのデータ収集に費やすポーリングサイクルの割合、残りは、ポーリング間に存在する時間で</p> <p>この値が 100% に達している場合、数値は黄色で表示されます。これは、次のポーリングの開始時に、Auditor がまだ監査対象からのデータ収集を行っていることを意味します。これにより、イベントの ADS への到達が遅れる可能性があります。</p> <p>この状態が頻繁にまたは永続的に発生する場合は、デプロイメントを更新して ADS データベースにより高い頻度でデータが受信されるようにするか (より迅速なネットワーク接続またはより強力なデータベースハードウェアなど)、システムで追跡される監査イベントの数を減らすことをお勧めします。</p>
最終ポーリングサイクル期間	<p>最終ポーリングサイクル期間 (秒)。これは、以前のポーリングサイクルにおけるイベントデータの ADS への最長到達遅延を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 20 分 (1200 秒) 未満の場合は、数値は緑色の背景に表示されます。 • 20 分から 2 時間 (7200 秒) の場合は、数値は黄色の背景に表示されます。 • 2 時間を上回る場合は、数値は赤色の背景に表示されます。 <p>この状態が長く続き、遅延が長すぎると考えられる場合は、デプロイメントを更新して ADS データベースにより高い頻度でデータが受信されるようにするか (より迅速なネットワ</p>

メトリクス	詳細
	ーク接続またはより強力なデータベースハードウェアなど)、システムで追跡される監査イベントの数を減らすことをお勧めします。
CMS Auditor	Auditor として現在機能している CMS の名前。
ADS データベース接続名	監査データストア (ADS) に接続するために Auditor CMS により現在使用されているデータベース接続の名前。SQL Anywhere、SQL Server、および HANA サーバの場合、これは ODBC 接続の名前になります。その他の種類のデータベースの場合、データベース名と接続ポートの後にサーバ名が続きます。
ADS データベースのユーザ名	Auditor CMS が ADS データベースにログインするために使用しているユーザ名。

26.2.2 監査イベントの設定

CMC 監査ページは、監査を有効化し、全システムで監査されるイベントを選択するために使用することができます。

特定のイベントまたはイベント詳細に関心がない場合は、選択しないで、システムパフォーマンスを向上させることができます。

① 注記

監査イベントは、一度に1つのイベントではなく、バッチモードで監査データベースにプッシュされます。バッチサイズは現在、1000 件の監査イベントに設定されています。

① 注記

BI プラットフォームのインストール時に、ADS 接続を設定しないように選択した場合、監査イベントを設定する前にデータベースへの接続を設定する必要があります。接続がなくてもイベントは収集されますが、いったん接続されると、イベントは ADS に書き込まれます。監査をオフにするには、レベルがオフに設定されている必要があります。監査データストア設定を参照してください。

26.2.2.1 監査イベントを設定する

監査イベントを設定するには、次の手順に従います。

1. セントラル管理コンソールで、[\[監査\]](#) タブを選択します。
[\[監査\]](#) ページが表示されます。
2. [\[イベントの設定\]](#) スライダを目的の監査レベルに設定します。各監査レベルは特定のメトリクス値に対応します。

- オフ - 1
- 最小 - 2
- デフォルト - 3
- 完全 - 4
- カスタム - 0

次のテーブルに、各レベルで取得されたスライダおよびイベントの異なる設定が表示されます。

監査レベル	取得されたイベント
オフ	なし
最小	<ul style="list-style-type: none"> • ログオン • ログアウト • 権限の変更 • カスタムアクセスレベルの変更 • 監査変更
デフォルト	<p>[最小] イベント、プラス:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 表示 • 最新表示 • プロンプト • 作成 • 削除 • 変更 • 保存 • 検索 • 編集 • 実行 • 配信
完全	<p>[最小] および [デフォルト] イベントプラス:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 呼び出しイベント • 範囲外をドリル • ページの取得 • プロモーションマネジメント設定 • ロールバック • VMS へ追加 • VMS から取得 • VMS へのチェックイン • VMS からチェックアウト • VMS エクスポート • VMS ロック • VMS ロック解除 • VMS 削除 • キューブへの接続 • MDAS セッション

監査レベル	取得されたイベント
<div> <div>① 注記</div> <div>アドオンのインストール時に、より多くのイベントが表示される場合があります。</div> </div>	
カスタム	イベントのカスタム設定を選択します。

① 注記

[[イベントの設定](#)] が [[デフォルト](#)] に設定されている場合、[[監査レベル](#)] の値は 3 です。
[[イベントの設定](#)] が [[オフ](#)] に設定されている場合、[[監査レベル](#)] の値は 3 から 1 に変わります。

- [[カスタム](#)] を選択し、[[イベントの設定](#)] スライダの下にある一覧で取得するイベントをクリックします。
- [[イベント詳細の設定](#)] で、イベントと一緒に記録するオプション詳細をクリックします。記録する詳細が少ないほど、システムパフォーマンスが向上します。

詳細	説明
クエリ	設定すると、 クエリ イベント詳細 (詳細 ID 25) が、データベースをクエリするイベントについて記録されます。
フォルダパス詳細	設定すると、次の詳細が取得されます。 <ul style="list-style-type: none"> オブジェクトフォルダパス (詳細 ID 71) 最上位フォルダ名 (詳細 ID 72) コンテナフォルダパス (詳細 ID 64)
権限詳細	設定すると、次の詳細が取得されます。 <ul style="list-style-type: none"> 権限が追加されました (詳細 ID 55) 権限が削除されました (詳細 ID 56) 権限が変更されました (詳細 ID 57)
ユーザグループ詳細	設定すると、次の詳細が取得されます。 <ul style="list-style-type: none"> ユーザグループ名 (詳細 ID 16) ユーザグループ ID (詳細 ID 15)
プロパティ値詳細	設定されると、 プロパティ値 イベント詳細 (詳細 ID 29) は、オブジェクトのプロパティが更新される際に取得されます。これは、CMC、BI ラウンチパッド、または SharePoint イベントに対してのみ生成されます。

- [[保存](#)] をクリックします。

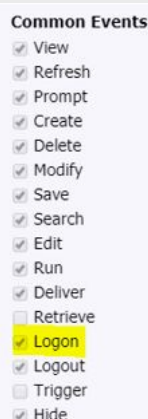
① 注記

クライアント監査の場合、システムが新しいイベントのデータの記録を開始する前は、変更が実行された後、最大 2 分かかります。システムの変更を実行する際、この遅延を考慮に入れるようにしてください。

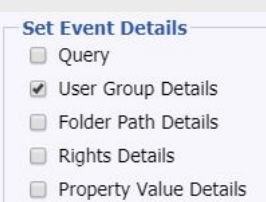
26.2.2.2 監査詳細テーブルの拡張されたイベント詳細記録

① 注記

- 以下に示す情報を利用するには、[CMC 監査ページ \[345 ページ\]](#)、特に [\[共通イベント\]](#)、[\[イベント詳細の設定\]](#)、[\[ユーザグループ詳細\]](#)、および [\[ログオン\]](#) に関する十分な理解が必要です。
- [\[ログオン\]](#) は、アプリケーションにアクセスするユーザの詳細を提供するイベントです。



- [\[ユーザグループ詳細\]](#) は、イベントごとに、ユーザに関連付けられたユーザグループの情報を提供します。



AUDIT_EVENT_DETAIL テーブルのユーザグループ詳細の記録は、[\[監査\]](#) ページの [\[共通イベント\]](#) および [\[イベント詳細の設定\]](#) で行った選択に部分的に依存します。[\[監査\]](#) ページで [\[ログオン\]](#) を選択し、[\[ユーザグループ詳細\]](#) を選択しなかった場合のシナリオについて考えてみます。このシナリオの場合、[\[ログオン\]](#) イベントのユーザグループ詳細は、引き続き AUDIT_EVENT_DETAIL テーブルに記録されます。BI 4.2 サポートパッケージ 5 の動作を理解するには、以下の表を参照してください。

ログオン	ユーザグループ詳細	動作
選択	選択	[共通イベント] で選択したすべてのイベントに関して、ユーザグループ詳細が記録されます。
選択	未選択	ユーザグループ詳細は、ログオンイベントに関してのみ記録されます。
未選択	未選択	ユーザグループ詳細は記録されません。
未選択	選択	ログオンイベントを除く選択したすべてのイベントに関して、ユーザグループ詳細が記録されます。

26.2.3 監査データストア設定

BI プラットフォームのインストール時に監査データベースを設定しないように選択した場合、またはデータベースの保存場所または設定を変更する場合、次のステップを使用して、ADS への接続を設定することができます。

このステップでは、監査イベントがデータベースに保持される期間を設定することもできます。

SAP BusinessObjects Enterprise XI 3.x の前のバージョンからアップグレードを実行し、Business Objects Metadata Manager (BOMM) をインストールしている場合、ADS を設定して、BOMM と同じデータベースまたはテーブルスペースを使用することをお勧めします。

① 注記

既存の DB2 9.7 Workgroup を監査データベースとして使用している場合は、データベースアカウントが 8KB を超えるページサイズを使用できるよう設定されていることを確認してください。

26.2.3.1 監査データストアのデータベース設定を設定する

1. セントラル管理コンソールで、[\[監査\]](#) タブを選択します。
2. [設定エリアの ADS データベース](#) 見出しの下で、監査データに設定したデータベースタイプを選択します。
3. [接続名](#) で、監査データベースに設定した接続の名前を入力します。

データベースの種類 接続名

IBM DB2	サービス名
Microsoft SQL Server	ODBC DSN
MySQL	<serverhostname>、<port>、<databasename>
Oracle	TNS サービス名
SAP HANA	ODBC DSN
SAP MaxDB	<serverhostname>、<port>、<databasename>
Sybase Adaptive Server Enterprise	サービス名
Sybase SQL Anywhere	ODBC DSN

- a. Windows 認証で Microsoft SQL データベースを使用している場合、[\[Windows 認証\]](#) オプションを有効にします。
4. [\[ユーザ名\]](#) フィールドと [\[パスワード\]](#) フィールドに、データベースへのログオン時に Auditor CMS で使用するユーザ名とパスワードを入力します。
 5. [\[\(日\) より古いイベントを削除する\]](#) フィールドで、データベースに情報を残す日数を入力します。(最小値 1、最大値 109,200)

⚠ 警告

ここで設定された日数より古いデータは、ADS から完全に削除されます。修復は不可能です。長期のレコードを維持する場合、レコードをアーカイブデータベースに定期的に移動することを考えてください。

6. Auditor-CMS をデータベースにマニュアルで再接続し、[ADS 自動再接続] を選択解除する場合、データベース接続はイベントで失われます。

① 注記

チェックが解除されている場合、接続が失われると、ADS への接続の再確立が必要になります。この処理は、CMS を再起動するか、または [ADS 自動再接続] を有効化することにより実行することができます。イベントは、記録され、ADS が再接続されるまで一時ファイルに保存されます。

7. [保存](#)をクリックします。
8. クラスタ内のすべての CMS を再起動します。

① 注記

ページの最上部にある[ステータスの概要](#)に現在の ADS 値が表示されますが、これは CMS が再起動されるまで [ADS データベース](#) セクション内の値と異なる場合があります。

27 プラットフォーム検索

27.1 プラットフォーム検索

BI プラットフォームのプラットフォーム検索アプリケーションを使用して、BI プラットフォームリポジトリ内におけるコンテンツを検索できます。

プラットフォーム検索アプリケーションに CMC ホームページからアクセスし、以下のタスクを実行することができます。

- アプリケーションプロパティを設定する
- インデックス処理失敗一覧を表示する
- ユーザのセキュリティ権限を設定する
- オブジェクトをスケジュールする

27.1.1 CMC でのアプリケーションプロパティの設定

プラットフォーム検索アプリケーションプロパティを設定するには、次の手順に従います。

1. CMC の **[アプリケーション]** エリアを表示します。
2. **[プラットフォーム検索アプリケーション]** を選択します。
3. **管理 > プロパティ** をクリックします。 **[プラットフォーム検索アプリケーションプロパティ]** ダイアログボックスが表示されます。

The screenshot shows the 'Properties: Platform Search Application' dialog box. The left sidebar contains a 'Hide Navigation' button and a list of tabs: 'Properties', 'Indexing failure list', 'Ranking', and 'User Security'. The 'Properties' tab is selected. The main area displays the following settings:

- Indexing Status:** Running...
Number of indexed documents : 113
Last indexed time stamp: 30/06/2015 01:39:49
Buttons: [Stop Indexing](#) [Start Indexing](#)
- Default Index Locale:**
Select locale: English (dropdown menu)
- Crawling Frequency:**
☒ Continuous crawling
☐ Scheduled crawling
- Index Location:**
Master Index Location (Indexes, Spellers): [dobj.enterprise.home]/data/PlatformSearch/Data
Persistent data location (Content Stores): [dobj.enterprise.home]/data/PlatformSearch/Data/workplace
Non-persistent data location (Temporary surrogate files, DeltaIndexes): [dobj.enterprise.home]/data/PlatformSearch/Data/workplace
- Scope of indexing:**
Level of indexing:
☒ Platform Metadata
☐ Platform and Document Metadata
☐ Full Content
Content Types:
☒ Crystal Reports
☒ Web Intelligence
☒ Universe
☒ BI Workspace
☒ Microsoft Powerpoint
☒ Adobe Acrobat
☒ Rich Text
☒ Text
☒ Microsoft Word
☒ Microsoft Excel

4. プラットフォーム検索の設定を、以下のとおりに行います。

オプション	説明
検索統計	<p>プラットフォーム検索は、以下の検索統計を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> インデックス処理のステータス: インデックス処理プロセスのステータスを示します。 インデックス済みドキュメント数: インデックス処理されたドキュメントの数を表示します。 前回インデックス処理タイムスタンプ: ドキュメントが最後にインデックス処理されたときのタイムスタンプを表示します。
インデックス処理の停止/開始	<p>[インデックス処理の開始] または [インデックス処理の停止] オプションにより、継続的クロールからスケジュール済みクロールへ切り替える場合、またはメンテナンス目的で、インデックス処理プロセスを開始または停止することができます。</p> <p>インデックス処理を停止するには、[インデックス処理の停止] をクリックします。</p>
デフォルトのインデックスロケール	<p>プラットフォーム検索では、CMC で指定したロケールを使用して、すべてのローカライズされていない BI ドキュメントをインデックス処理します。ドキュメントがローカライズされると、対応する言語のアナライザがインデックス処理に使用されます。</p> <p>検索はクライアントの製品ロケールに基づいて行われます。クライアントの製品ロケールには加重が適用されます。</p> <p>CMC の設定プロパティでこの加重を設定できます。</p>
クロール頻度	<p>以下のオプションを使用して、BI プラットフォームリポジトリ全体をインデックス処理することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 継続的クロール: このオプションを使用すると、インデックス処理は継続的に行われ、オブジェクトが追加、変更、または削除されるたびにリポジトリがインデックス処理されます。これにより、最新の BI プラットフォームコンテンツを表示または処理できます。デフォルトの設定で、リポジトリは、実行するアクションによって継続的クロールにより継続的に更新されます。継続的クロールは、ユーザの操作なしに動作し、ドキュメントのインデックス処理にかかる時間を短縮します。 スケジュール済みクロール: このオプションを使用すると、インデックス処理は、スケジュールオプションで設定されたスケジュールに基づきます。オブジェクトをスケジュールする方法については、<i>SAP BusinessObjects Business Intelligence</i> プラットフォーム CMC オンラインヘルプのプラットフォーム検索のオブジェクトのスケジュールの節を参照してください。

① 注記

- [\[スケジュール済みクロール\]](#) を選択し、[\[繰り返し\]](#) に [\[今すぐ\]](#) 以外のオプションを設定した場合は、ドキュメントの次のインデックス処理がスケジュールされると、プラットフォーム検索によって日時のタイムスタンプが表示されます。
- [\[スケジュール済みクロール\]](#) を選択した場合は、[\[インデックス処理の開始\]](#) ボタンが有効になり、[\[インデックス処理の停止\]](#) ボタンは無効になります。
- スケジュールの設定が完了すると、[\[インデックス処理の停止\]](#) ボタンは無効になります。

インデックスの場所

インデックスは、以下の場所にある共有フォルダに格納されます。

- マスタインデックスロケーション (インデックス、スペラ): この場所に保存されているマスタおよびスペラインデックスです。検索中、最初の検索結果はマスタインデックスを使用して取得され、スペラインデックスは提案を取得するために使用されます。クラスタ化された BI プラットフォームデプロイメントでは、この場所は、共有ファイルシステム上にあり、クラスタのすべてのノードからアクセスできる必要があります。
- 永続データロケーション (コンテンツストア): コンテンツストアはこの場所に配置されます。マスタインデックスロケーションから作成され、それとの同期が維持されます。コンテンツストアは、ファセットの生成と、マスタインデックスロケーションから生成された最初の検索結果を処理するために使用されます。クラスタ化された BI プラットフォームデプロイメントでは、コンテンツストアはすべてのノードで生成されます。

永続データロケーションは、コンテンツストアフォルダを含むため、クラスタ環境の影響を受ける唯一のインデックスの場所です。マシンの検索サービスが1つである場合、コンテンツストアの場所は1つだけになります。たとえば、

```
{bobj.enterprise.home}¥data¥PlatformSearchData¥workspace¥<ServerName>¥ContentStores になります。
```

ただし、クラスタ環境では、複数の検索サービスがある場合、コンテンツストアの場所は各検索サービスに対して1つになります。たとえば、実行中のサーバのインスタンスが2つある場合、コンテンツストアの場所は以下のようにになります。

1. {bobj.enterprise.home}¥data¥PlatformSearchData¥workspace¥<ServerName>¥ContentStores
2. {bobj.enterprise.home}¥data¥PlatformSearchData¥workspace¥<ServerName 1>¥ContentStores

- 非永続データロケーション (一時ファイル、デルタインデックス): この場所には、デルタインデックスが作成され、マスタインデックスと結合される前に一時的に格納されます。インデックスがマスタインデックスに結合されると、この場所から削除されます。また、代理ファイル (エクストラクタからの出力) がこの場所に作成され、デルタインデックスに変換されるまで一時的に格納されます。

① 注記

- マスタインデックスロケーションは、共有の場所にする必要があります。
- インデックスの場所を変更するには、[インデックス処理の停止] をクリックする必要があります。
- インデックスの場所を変更する場合は、新しい場所にコンテンツをコピーしないと、既存のインデックス情報が失われます。
- インデックスファイルには、ドキュメントコンテンツをインデックス化するように選択した場合には特に、個人情報や機密情報が保存される可能性があります。データの盗難を防ぐために、共有フォルダへのアクセスをシステムユーザにのみ許可し、共有フォルダを暗号化された環境に保存してください。

インデックス処理のレベル インデックス処理のレベルを以下のように設定することにより、検索内容を調整することができます。

- プラットフォームメタデータ: タイトル、キーワード、ドキュメントの説明などのプラットフォームメタデータ情報に対してのみ、インデックスが作成されます。デフォルトでは、このオプションはオンです。
- プラットフォームおよびドキュメントのメタデータ: このインデックスには、プラットフォームメタデータとドキュメントメタデータが含まれます。ドキュメントのメタデータには、作成日、変更日、作成者名が含まれます。
- フルコンテンツ: このインデックスには、プラットフォームメタデータ、ドキュメントメタデータ、および以下のようなその他のコンテンツが含まれます。
 - ドキュメントの実際のコンテンツ
 - プロンプトと LOV のコンテンツ
 - チャート、グラフ、ラベル

① 注記

Analysis Office ドキュメントおよび Lumira ドキュメントでは、フルコンテンツのインデックス処理はサポートされていません。Analysis Office ドキュメントおよび Lumira ドキュメントでは、メタデータのインデックス処理のみがサポートされています。

① 注記

インデックス処理のレベルを変更すると、BI プラットフォームリポジトリ全体に対してインデックス処理が再度初期化されます。

オプション	説明
コンテンツタイプ	<p>インデックス化の目的で次のコンテンツタイプを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Crystal レポート • Web Intelligence • ユニバース • BI ワークスペース • Analysis Office • Lumira • Microsoft PowerPoint • Adobe Acrobat • リッチテキスト形式 • テキスト • Microsoft Word • Microsoft Excel <p>プラットフォームメタデータのインデックス処理では、コンテンツタイプフィルタは適用されません。プラットフォームメタデータのインデックス処理は、選択したコンテンツタイプに関係なく、すべてのサポートされるオブジェクトタイプに対して実行され、BI ラウンチパッドの検索結果にプラットフォームメタデータに関連するキーワードのすべてのオブジェクトが返されます。</p> <p>コンテンツタイプフィルタは、ドキュメントメタデータのインデックス処理(ドキュメント作成者、ドキュメントヘッダ、ドキュメントフッタなど)およびコンテンツのインデックス処理(レポートのグラフ、チャート、テーブル)に適しています。ドキュメントメタデータおよびコンテンツに関連するキーワードを検索すると、プラットフォーム検索は、選択されたインデックス処理のレベルとコンテンツタイプに基づいて、リポジトリの選択されたオブジェクトタイプのドキュメントメタデータとコンテンツをインデックス処理します。処理されたオブジェクトだけが BI ラウンチパッドの検索結果に表示されます。</p>
インデックスの再構築	<p>このオプションを使用して、既存のインデックスを削除し、リポジトリ全体を再インデックス処理することができます。</p> <p>インデックス処理が実行中か停止中かに関係なく、[インデックスの再構築] オプションを選択できます。既存のインデックスは、[プロパティ] ページへの変更を保存すると、削除されます。ただし、インデックス処理が現在停止されている場合、インデックス処理を再開するまでインデックスの再構築は開始されません。</p> <p>プラットフォーム検索でドキュメントの再インデックス処理を行わない場合は、[インデックスの再構築] オプションを選択解除してから、[インデックス処理の開始] をクリックします。</p>

インデックス処理から除外するドキュメント

[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] オプションは、ドキュメントをインデックス処理から除外します。たとえば、レポートアプリケーションサーバのリソースに過負荷がかからないように、サイズが非常に大きい Crystal レポートを検索対象から除外する必要があります。または、大量のパーソナライズされたレポートのあるパブリケーションのインデックス処理をしない場合です。

特定のドキュメントを除外することで、プラットフォーム検索でそのドキュメントがアクセスされないように指定できます。このグループに分類される前にドキュメントがインデックス処理されると、そのドキュメントは検索できるので注意してください。[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] グループに属するドキュメントが検索されないようにするには、インデックスを再構築する必要があります。

デフォルトでは、[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] オプションのフルコントロールを持つのは管理者アカウントのみです。次の権限を持つその他のユーザは、[[インデックス処理から除外するドキュメント](#)] グループに対するドキュメントの追加のみを実行できます。

- カテゴリの表示権限および編集権限
- ドキュメントの直接編集

その他の設定 - インスタンスのスキップ

デフォルトでは、ドキュメントのインスタンスが取得されてインデックス処理が行われます。これによって、インデックスサイズが増大し、ディスク容量の消費が増えます。リポジトリ内の膨大な数のインスタンスのインデックス処理のため、PlatformSearchData フォルダ内の "Lucene Index Engine" フォルダのサイズが非常に大きくなります。数百万の (またはそれ以上の) ドキュメントがあり、これらのドキュメントの多くが、システム内にも膨大な数の既存インスタンスを (定期的に生成するスケジュールされたインスタンスとともに) 持つ場合、インデックス処理レベルが "プラットフォームメタデータ" に設定されていたとしても、"Lucene Index Engine" フォルダのサイズは過度に大きくなります。

プラットフォーム検索インスタンスのスキップ機能では、インスタンスのインデックス処理を CMC のプラットフォーム検索アプリケーションプロパティページにある 'その他の設定 - インスタンスのスキップ' チェックボックスで有効化または無効化することによって制御することができます。

① 注記

- インスタンスのスキップを有効/無効にすると、プラットフォーム検索 Adaptive Processing Server を再開する必要があります。この変更はすべてのインデックス処理レベルに影響します。
- インスタンスのスキップを変更し、この変更をすべての既存のインスタンスに適用する場合 (すなわち、取得してインデックス処理を行う)、インデックスを再構築する必要があります。

インデックス処理から除外するオブジェクト

[[インデックス処理から除外するオブジェクト](#)] オプションは、オブジェクトをインデックス処理から除外します。たとえば、レポートアプリケーションサーバのリソースに過負荷がかからないように、特定のオブジェクトを検索対象から外す必要がある場合です。

特定のオブジェクトを除外することで、プラットフォーム検索でそのドキュメントがアクセスされないように指定できます。このグループに分類される前にオブジェクトがインデックス処理されると、そのオブジェクトは検索可能になるので注意してください。[[インデックス処理から除外するオブジェクト](#)] グループに属するドキュメントが検索されないようにするには、インデックスを再構築する必要があります。

インデックスから除外できるオブジェクトの一覧:

- CrystalReport
- Webi
- LCMJob
- Universe
- Excel
- PDF
- PowerPoint
- Rtf
- Txt
- Word
- AFDashboardPage
- ObjectPackage
- QaaWS
- プロファイル
- イベント
- ディスカッション
- InformationDesigner
- MDAnalysis
- パブリケーション
- Agnostic
- Analytics
- Hyperlink
- プログラム
- pQuery
- DSL.MetadataFile
- Shortcut
- DataDiscoveryAlbum
- AO.Workbook
- VISI.Story
- VISI.Dataset

オプション	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • VISI.Lums • VISILums • ユーザ • UserGroup

5. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

① 注記

[\[インデックスの再構築\]](#) オプションを選択せず、インデックス処理のレベルを変更するか、エクストラクタを選択もしくは選択解除した場合は、既存のインデックスは削除されずにインデックスは増分更新されます。

27.1.2 インデックス処理失敗一覧

インデックス処理失敗一覧では、インデックス処理できなかったドキュメントの一覧が表示されます。プラットフォーム検索では、ドキュメントのインデックス処理を 3 回試行します。ドキュメントのインデックス処理に失敗した場合は、そのドキュメントはインデックス処理失敗一覧に表示されます。

インデックス処理失敗一覧を表示するには、次の手順に従います。

1. CMC の[\[アプリケーション\]](#)エリアを表示します。
2. [\[プラットフォーム検索アプリケーション\]](#) を選択します。
3. [▶ アクション ▶ インデックス処理失敗一覧 ▶](#) をクリックします。
[\[プラットフォーム検索アプリケーション\]](#) ダイアログボックスが表示され、以下の詳細とともにドキュメントの一覧が表示されます。
 - タイトル: インデックス処理に失敗したドキュメントのタイトルを表示します。
 - タイプ: Crystal Report や Web Intelligence などのドキュメントタイプの名前と、ドキュメントの場所を表示します。
 - エラータイプ: エラーコードとドキュメントのインデックス処理に失敗した理由を表示します。エラーの原因のスタックトレースについて詳細を確認するには、詳細ハイパーリンクをクリックします。
 - 最終指定時刻: ドキュメントのインデックス処理を最後に試行した時点のタイムスタンプを表示します。

27.1.3 ユーザセキュリティ権限の設定

[\[管理\]](#) メニューのセキュリティオプションを使用して、CMC でプラットフォーム検索のセキュリティ設定を管理できます。これらのオプションを使用すると、オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てたり、主体がオブジェクトに対して持っているアクセス権を表示したり変更したりできます。

27.1.3.1 オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てる

アクセスコントロールリストでは、オブジェクトでアクセス権が許可または拒否されるユーザを指定します。

アクセスコントロールリストに主体を割り当て、主体がオブジェクトに対して持つアクセス権を指定するには、次の手順を実行します。

1. 主体を追加するオブジェクトを選択します。
2. **管理 > ユーザセキュリティ** をクリックします。
[ユーザセキュリティ]ダイアログボックスが開き、アクセスコントロールリストが表示されます。
3. [主体の追加]をクリックします。
4. [利用可能なユーザ/グループ]一覧から主体として追加するユーザおよびグループを選択し、[選択されたユーザ/グループ]一覧に移動します。
5. [セキュリティを追加して割り当てる]をクリックします。
6. 主体に許可するアクセスレベルを選択します。
7. フォルダまたはグループの継承を有効にするかどうかを選択します。

必要に応じて、詳細レベルでアクセス権を変更し、アクセスレベルの特定のアクセス権を上書きすることもできます。

27.1.3.2 主体のアクセス権を削除する

1. **管理 > ユーザセキュリティ** をクリックします。
[ユーザセキュリティ] ダイアログボックスが開き、アクセスコントロールリストが表示されます。
2. アクセス権を削除するオブジェクト名を選択します。
3. [削除] タブをクリックします。
[アクセス] 権限が [アクセス権なし] に変更されます。

27.1.3.3 主体のアクセス権を表示する

オブジェクトの主体のアクセス権を表示するには、次の手順を実行します。

1. セキュリティ設定を表示するオブジェクトを選択します。
2. **管理 > ユーザセキュリティ** をクリックします。
[ユーザセキュリティ] ダイアログボックスが開き、オブジェクトのアクセスコントロールリストが表示されます。
3. アクセスコントロールリストから主体を選択し、[ビュー セキュリティ] をクリックします。
権限エクスプローラが開き、オブジェクトの主体に対する実効アクセス権のリストが表示されます。また、権限エクスプローラでは、次のことも実行できます。
 - アクセス権を表示する別の主体を検索する。
 - 表示されるアクセス権を次の基準に従ってフィルタする。

割り当てられているアクセス権
付与された権限
割り当てられていないアクセス権
種類で並べ替え
権限名で並べ替え
アクセスレベルから

- 次の基準に従って、表示されるアクセス権の一覧を昇順または降順に並べ替えます。

コレクション
種類
アクセス権の名前
アクセス権のステータス (許可、拒否、指定なし)
適用先 (すべて選択、オブジェクトのみ、サブオブジェクトのみ、オブジェクトとサブオブジェクト)

また、[ソース] 列内のリンクのいずれかをクリックして、継承された権限のソースを表示できます。

27.1.3.4 オブジェクトの主体のセキュリティを変更する

通常は、アクセスレベルを使用して主体にアクセス権を割り当てることをお勧めします。ただし、アクセスレベルの特定の詳細権限の上書きが必要になる場合があります。詳細なアクセス権を使用すると、主体がすでに持っているアクセスレベルの上で、主体のアクセス権をカスタマイズできます。オブジェクトの主体に詳細なアクセス権を割り当てる場合は、次の手順を実行します。

1. オブジェクトのアクセスコントロールリストに主体を割り当てます。
2. 主体が追加されている場合は、**管理** > **ユーザセキュリティ** の順に選択して、オブジェクトのアクセスコントロールリストを表示します。
3. アクセスコントロールリストから主体を選択し、[セキュリティの割り当て] をクリックします。
4. [詳細] タブをクリックします。
5. [権限の追加/削除] をクリックします。
6. 主体のアクセス権を変更します。

27.1.3.5 セキュリティ設定をリセットする

オブジェクトのセキュリティ設定をリセットすると、(存在する場合は) 初期設定を含む、オブジェクトに割り当てられたすべての明示的アクセスレベルまたはアクセス権が解除されます。継承されたアクセスレベルとアクセス権のみが保持されます。

1. [セキュリティ設定のリセット] タブをクリックします。
[セキュリティ設定のリセット: プラットフォーム検索アプリケーション] ダイアログボックスが表示されます。
2. 次のオプションのどちらか、または両方を選択します。
 - オブジェクトのプラットフォーム検索アプリケーションでセキュリティ設定をリセットします。
 - オブジェクトのプラットフォーム検索アプリケーションのすべての子および子孫で、セキュリティ設定をリセットします。

① 注記

両方のオプションを選択すると、確認のダイアログボックスが表示されます。[OK] をクリックして次に進みます。

3. [続行] をクリックしてセキュリティ設定をリセットします。

27.1.4 オブジェクトのスケジュール

スケジュールオプションを使用して、プラットフォーム検索でオブジェクトをスケジュールすることができます。プラットフォーム検索アプリケーションのスケジュールオプションにアクセスするには、以下の手順に従います。

1. CMC の [フォルダ] エリアに移動し、[プラットフォーム検索スケジュール] フォルダを選択します。
2. [プラットフォーム検索スケジュールオブジェクト] を右クリックし、[スケジュール] を選択します。
3. スケジュール所要時間を指定して、[プラットフォーム検索スケジュール所要時間] を設定します。
4. スケジュール所要時間を保存するには、[保存] をクリックします。
5. [インスタンスタイトル] をクリックして、インスタンスのタイトルを指定します。
6. [スケジュール] をクリックします。
7. [繰り返し] をクリックし、[オブジェクトの実行] ドロップダウンメニューから繰り返しパターンを選択します。

繰り返しパターンを選択すると、追加情報を入力するよう要求されます。次の表は、各繰り返しパターンに対して入力する必要がある追加情報の一覧です。

オブジェクトの実行オプション	必要な追加情報
今すぐ	なし
1 回	開始/終了日時を定義します。
時間単位	時間と分、および開始/終了日時を定義します。
日単位	日数および開始/終了日時を定義します。
週単位	曜日を選択し、開始/終了日時を定義します。
月単位	月数および開始/終了日時を定義します。
N 日	日付を選択し、開始/終了日時を定義します。
第 1 月曜日	開始/終了日時を定義します。
月末日	開始/終了日時を定義します。
第 N 週の X 日	週と日付を選択し、開始/終了日時を定義します。
カレンダー	カスタマイズされたカレンダーを選択し、開始/終了日時を定義できます。

8. [可能な再試行回数] に数字を入力し、[再試行間隔 (秒単位)] フィールドに希望する時間を入力します。
9. [スケジュール] をクリックします。
10. [対象指定] をクリックし、オブジェクトをスケジュールする対象者を指定します。
 - 自分だけに対してスケジュール場合は [現在のユーザだけを対象にスケジュールする] を選択し、[スケジュール] をクリックします。
 - 特定のユーザのセットまたはユーザグループに対してスケジュールする場合は、[スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する] を選択します。[利用可能] セクションが表示されます。[利用可能]

なユーザ/グループ] 一覧から [選択されたユーザ/グループ] 一覧に追加するユーザおよびグループを移動し、[スケジュール] をクリックします。

① 注記

最小時間 1 分から最大時間 1 年 (525600 分) までの間隔で、オブジェクトをスケジュール設定できます。デフォルトでは、プラットフォーム検索は 20 分間隔のスケジュールで設定されています。

28 フェデレーションの使用

28.1 フェデレーション

フェデレーションは、グローバル環境下での複数の BI プラットフォームデプロイメントで作業する場合の、サイト間レプリケーションツールです。

コンテンツは、BI プラットフォームデプロイメントで作成および管理でき、定期的に地理的に異なるサイト間で他の BI プラットフォームデプロイメントに複製できます。一方向レプリケーションジョブと双方向レプリケーションジョブの両方を実行できます。

フェデレーションの利点は次のとおりです。

- ネットワークトラフィックの削減
- 1つのサイトからのコンテンツの作成と管理
- エンドユーザに対するパフォーマンスの向上

フェデレーションを使用してコンテンツを複製する場合、次のことを実行できます。

- 複数のデプロイメントの管理ニーズを簡素化
- グローバルな組織の複数のオフィスに一貫したアクセス権ポリシーを提供
- データが存在するリモートサイトでの迅速な情報の取得、およびレポートの処理
- ローカルのデータや分散されているデータを高速に取得して時間を節約
- カスタムコードを記述することなく、複数のデプロイメントのコンテンツを同期

フェデレーションは、個々のセキュリティモデル、ライフサイクル、テストおよびデプロイメントの時間だけでなく、さまざまなビジネスの所有者や管理者を持つことができるツールです。たとえば、管理機能を委任して、販売アプリケーションの管理者が人事アプリケーションを変更しないようにすることができます。

フェデレーションではさまざまなオブジェクトを複製できます。

カテゴリ	複製できるオブジェクトの種類	その他の注意事項
ビジネスビュー	Business View Manager、DataConnection、LOV、データファンデーションなど。	すべてのオブジェクトはサポートされますが、個々のレベルではサポートされません。
レポート	Crystal レポート、Web Intelligence、および Dashboard Design	フルクライアントアドインおよびテンプレートはサポートされます。
サードパーティオブジェクト	Excel、PDF、PowerPoint、Word、テキスト、リッチテキスト、および Shockwave Flash ファイル	
ユーザ	ユーザ、グループ、受信ボックス、お気に入り、個人用カテゴリ	
Business Intelligence プラットフォーム	フォルダ、イベント、カテゴリ、カレンダー、アクセスレベル、ハイパーリンク、ショートカット、プログラム、プロファイル、オブジェクトパッケージ、その他	

カテゴリ	複製できるオブジェクトの種類	その他の注意事項
ユニバース	ユニバース、接続、ユニバースオーバーロード	

次のシナリオでは、組織でフェデレーションを使用する方法を示す2つの例を重点的に説明します。

シナリオ 1: 小売 (中央化された設計)

ACME ストアでは、一方向レプリケーション方式を使用してさまざまな場所にあるすべての店舗に月間販売レポートを送信する必要があります。レプリケート元サイトの管理者がレポートを作成すると、各レプリケート先サイトの管理者はそのレポートを複製し、その店舗のデータベースに対して実行します。

→ ヒント

ローカライズされたインスタンスをレプリケート元サイトに戻し、各オブジェクトの複製された情報を管理することができます。たとえば、適切なロゴ、データベース接続情報などが適用されます。

シナリオ 2: リモートスケジュール (分散アクセス)

データはレプリケート元サイトにあります。一時停止中のレプリケーションジョブは、レプリケート元サイトに送信されて実行されます。その後、完了したレプリケーションジョブは、確認のため、レプリケート先サイトに戻されます。たとえば、レポートのデータがレプリケート先サイトで利用できない場合でも、ユーザはレプリケート元サイトで実行されるようにレポートを設定してから、完了したレポートをレプリケート先サイトに戻すことができます。

28.2 フェデレーションの用語

ここでは、フェデレーションに関連する新しい単語とフレーズを紹介します。これらは、フェデレーションを操作および使用する際に役立ちます。

BI Application	特定の目的や対象者を持つ関連の Business Intelligence(BI)の論理グループ分け。BI Application はオブジェクトではありません。1つの BI プラットフォームデプロイメントで複数の BI Application をホストできます。各 BI Application は、個別のセキュリティモデル、ライフサイクル、テスト、およびデプロイメント時間枠に加え、個別のビジネス所有者や管理者を持つことができます。
レプリケート先サイト	レプリケート元サイトから複製された BI プラットフォームコンテンツを取得する BI プラットフォームシステム。
ローカル	ユーザまたは管理者が接続しているローカルシステム。たとえば、レプリケート先サイトの管理者は、レプリケート先サイトに対して“ローカル”と見なされます。
ローカルで実行して完了したインスタンス	レプリケート先サイトで処理されて、レプリケート元サイトに戻されるインスタンス。
複数のレプリケート元サイト	複数のサイトをレプリケート元サイトとして使用できます。たとえば、複数の開発センタには通常複数のレプリケート元サイトがあります。ただし、1つのレプリケーションで使用できるのは1つのレプリケート元サイトだけです。

一方向レプリケーション	オブジェクトは一方向、つまりレプリケート元サイトからレプリケート先サイトにのみ複製されます。レプリケート先サイトで行われた更新は、レプリケート先サイトで維持されます。
レプリケート元サイト	コンテンツが作成される BI プラットフォームシステム。
リモート	ユーザにローカルではないシステム。たとえば、レプリケート元サイトは、レプリケート先サイトのユーザおよび管理者に対して“リモート”であると見なされます。
リモート接続	ユーザ名やパスワード、CMS 名、WebService URL、クリーンアップオプションなど、BI プラットフォームデプロイメントへの接続に使用される情報を含むオブジェクト。
リモートスケジュール	レプリケート先サイトからレプリケート元サイトに戻されるスケジュール要求。レプリケート先サイトのレポートはリモートでスケジュールすることができ、レポートインスタンスはレプリケート元サイトに戻されて処理されます。その後、完了したインスタンスがレプリケート先サイトに戻されます。
レプリケーション	ある BI プラットフォームシステムから別のシステムにコンテンツがコピーされるプロセス。
レプリケーションジョブ	レプリケーションスケジュール、複製するコンテンツ、およびコンテンツの複製時に実行する必要がある特殊な条件に関する情報を含むオブジェクト。
レプリケーション一覧	複製されるオブジェクトの一覧。レプリケーション一覧は、BI プラットフォームデプロイメントに含まれている、まとめて複製されるその他のコンテンツ (ユーザ、グループ、レポートなど) を表します。
レプリケーションオブジェクト	レプリケート元サイトからレプリケート先サイトへ複製されるオブジェクト。レプリケート先サイトで複製されたすべてのオブジェクトには、レプリケーションアイコンが付けられます。競合が発生すると、オブジェクトには競合アイコンが付けられます。
レプリケーションパッケージ	転送中に作成されるレプリケーションパッケージには、レプリケーションジョブからのオブジェクトが含まれます。レプリケーションパッケージには、環境が短期間に変化する場合や初期レプリケーション用に、レプリケーション一覧で定義されているすべてのオブジェクトを含むことができます。または、レプリケーションジョブのスケジュールに比べてオブジェクトの変更頻度が少ない場合は、レプリケーション一覧の小さいサブセットを含むことができます。レプリケーションパッケージは、BI Application Resource(BIAR)ファイルとして実装されます。
レプリケーションの最新表示	レプリケーション一覧内のすべてのオブジェクトは、最終変更バージョンに関係なく最新表示されます。
双方向レプリケーション	一方向レプリケーションと同様に動作しますが、双方向レプリケーションでは両方向で変更が送信されます。レプリケート元サイトへの更新は各レプリケート先サイトに複製されます。レプリケート先サイトでの更新および新しいオブジェクトは、レプリケート元サイトに送信されます。

28.3 セキュリティアクセス権の管理

フェデレーションでは、別個のデプロイメント間でコンテンツを複製し、他の管理者との共同作業が必要になるため、フェデレーションの使用を開始する前にセキュリティについて理解する必要があります。

別個のプロイメントの管理者が相互に調整した上でフェデレーションを有効にする必要があります。コンテンツが複製されたら、管理者はコンテンツを変更できます。

特定のタスクを実行するには、レプリケート元プロイメントおよびレプリケート先プロイメントに対する次のような特定の権限が必要です。

- レプリケート元サイトで必要な権限
- レプリケート先サイトで必要な権限
- フェデレーション固有のオブジェクトに必要な権限
- フェデレーションシナリオ

→ ヒント

この章を読んでからフェデレーションを有効にすることをお勧めします。

28.3.1 レプリケート元サイトで必要な権限

ここでは、レプリケート元サイトで行われるアクションと、レプリケート元サイトに接続しているユーザアカウントに必要な権限について説明します。これは、レプリケート先サイトのリモート接続オブジェクトで入力したアカウントです。

対処方法	説明	必要な権限
一方向レプリケーション	レプリケート元サイトからレプリケート先サイトのみへのレプリケーションを実行します。 ① 注記 “表示”および“複製”権限は、複製中のすべてのオブジェクトに対して必要です。これには、依存関係の計算によって自動的に複製されるオブジェクトも含まれます。	<ul style="list-style-type: none">• 複製するすべてのオブジェクトに対する“表示”および“複製”権限• レプリケーション一覧に対する“表示”権限
双方向レプリケーション	レプリケート元サイトからレプリケート先サイト、およびレプリケート先サイトからレプリケート元サイトへのレプリケーションを実行します。	<ul style="list-style-type: none">• 複製するすべてのオブジェクトに対する“表示”および“複製”権限• レプリケーション一覧に対する“表示”権限• パスワードを変更するための、ユーザオブジェクトに対する“アクセス権の変更”権限
スケジューリング	レプリケート先サイトからレプリケート元サイトで行われるリモートスケジューリングを実行できるようにします。	<ul style="list-style-type: none">• リモートでスケジュールするすべてのオブジェクトに対する“スケジュール”権限

関連情報

[レプリケート先サイトで必要な権限 \[369 ページ\]](#)

28.3.2 レプリケート先サイトで必要な権限

ここでは、レプリケート先サイトに適用されるアクションと、レプリケーションジョブを実行しているユーザアカウントに必要な権限について説明します。これは、レプリケーションジョブを作成したユーザのアカウントです。

① 注記

他のスケジュール可能なオブジェクトと同様に、別のユーザに代わってレプリケーションジョブをスケジュールできます。

対処方法	説明	必要な権限
全てのオブジェクト	レプリケーションが一方か双方向かにかかわらず、オブジェクトを複製します。	<ul style="list-style-type: none">すべてのオブジェクトに対する“表示”、“追加”、“編集”、および“アクセス権の変更”権限すべてのユーザのオブジェクトに対する“ユーザパスワードの変更”権限
最初のレプリケーション	レプリケーションジョブを初めて実行するときには、オブジェクトはまだレプリケート先サイトに存在しません。したがって、レプリケーションジョブの実行に使用するユーザアカウントには、すべての最上位レベルのフォルダおよびそれらに追加するコンテンツを含むオブジェクトの権限が必要です。	<ul style="list-style-type: none">すべての最上位レベルのフォルダとデフォルトオブジェクトに対する“表示”、“追加”、“編集”、および“アクセス権の変更”権限

関連情報

[レプリケート元サイトで必要な権限 \[368 ページ\]](#)

28.3.3 フェデレーション固有の権限

ここでは、フェデレーションに固有のシナリオについて説明します。

対処方法	説明	必要な権限
オブジェクトのクリーンアップ	オブジェクトのクリーンアップは、レプリケート先サイトのオブジェクトを削除します。	<ul style="list-style-type: none"> レプリケーションジョブの実行に使用するアカウントには、削除される可能性のあるすべてのオブジェクトの“削除”権限が必要です。
特定のオブジェクトに対するクリーンアップの無効化	<p>特定のオブジェクトがレプリケート元サイトから複製されるときに、それらのオブジェクトがレプリケート元サイトで削除される場合でも、レプリケート先サイトからは削除したくない場合があります。これは権限を使用して保護できます。たとえば、レプリケート先サイトのユーザがレプリケート元サイトのユーザとは別に、独自にオブジェクトの使用を開始する場合に、このオプションを選択できます。</p> <p>たとえば、レプリケート先サイトのユーザが独自のローカルレポートを作成するときに使用する複製済みのユニバースがある場合、レプリケート元サイトからそのユニバースが削除されても、レプリケート先サイトではそのユニバースを失いたくはありません。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 保持するオブジェクトでレプリケーションジョブを実行する場合に使用するユーザアカウントの“削除”の拒否権限
レプリケート元サイトを変更しない、双方向レプリケーション	<p>双方向レプリケーションを選択していても、一部のレプリケート元のオブジェクトを、レプリケート先で変更された場合でも、変更したくない場合があります。この理由としては、オブジェクトが特殊でレプリケート元サイトのユーザのみが変更する必要がある、またはリモートスケジュールを有効にしても変更を戻したくないなどがあります。</p>	<ul style="list-style-type: none"> リモート接続オブジェクトで接続に使用されるユーザアカウントの“編集”の拒否権限

① 注記

リモートスケジュールの場合は、リモートスケジュール用のオブジェクトだけを処理するジョブを作成できます。ただし、この場合は、レポート、レポートを含むフォルダ、そのフォルダの親フォルダなど、祖先オブジェクトも複製されます。レプリケート先サイトで行った変更はレプリケート元サイトに複製され、レプリケート元サイトで行った変更はレプリケート先サイトに複製されます。

28.3.4 オブジェクトに対するセキュリティの複製

オブジェクトに対するセキュリティ権限を維持するには、オブジェクトおよびそのユーザまたはグループの両方を同時に複製する必要があります。これを行わない場合は、複製先のサイトにそれらがすでに存在するので、各サイトに同一の一意の識別子(CUID)が必要です。

オブジェクトが複製され、ユーザまたはグループが複製されない場合、または複製先のサイトにそれらが存在しない場合、権限は削除されます。

例

Group A と Group B には Object A に対する権限が割り当てられています。Group A には“表示”権限があり、Group B には“表示の拒否”権限があります。レプリケーションジョブで Group A と Object A だけを複製すると、レプリケート先サイトの Object A は、関連付けられている Group A の“表示”権限だけを持つことになります。

オブジェクトを複製するときに、オブジェクトに対する明示的な権限を持つすべてのグループを複製しない場合、潜在的なセキュリティリスクがあります。上記の例は、潜在的なリスクを示しています。User A が Group A と Group B の両方に属している場合、ユーザはレプリケート元サイトに対する Object A の表示権限を持ちません。ただし、User A は両方のグループに属しているため、レプリケート先サイトに複製されます。そこで、Group B が複製されなかったため、User A はレプリケート先サイトで Object A を表示する権限を持ちますが、レプリケート元サイトでは Object A を表示できません。

レプリケーションジョブに含まれていないその他のオブジェクトを参照するオブジェクト、またはすでにレプリケート先サイトに存在しないオブジェクトは、ログファイルに表示されます。ログファイルには、複製されていないオブジェクトを参照したオブジェクトおよび参照が削除されたオブジェクトが記録されています。

特定のユーザまたはグループのオブジェクトのセキュリティは、レプリケート元サイトからレプリケート先サイトにのみ複製されます。レプリケート先サイトで複製したオブジェクトのセキュリティを設定できますが、それらの設定はレプリケート元サイトに複製されません。

28.3.5 アクセスレベルを使用したセキュリティの複製

保持するには、アクセスレベルによってアクセス権を定義する必要があります。オブジェクト、ユーザまたはグループ、およびアクセスレベルを同時に複製するか、それらがレプリケート先のサイトにすでに存在している必要があります。

レプリケーションジョブに含まれていない、またはレプリケート先サイトに存在しないユーザまたはグループに明示的なアクセス権を割り当てるオブジェクトは、そのログファイルに表示されます。ログファイルには、複製されていない割り当て済みのアクセス権や、削除されたアクセス権を持つオブジェクトが表示されます。

また、インポートされたオブジェクトで使用される“アクセスレベル”を自動的に複製することもできます。このオプションは、レプリケーション一覧で使用できます。

① 注記

デフォルトのアクセスレベルは複製されませんが、参照は維持されます。

28.4 レプリケーションの種類とモードのオプション

レプリケーションの種類とレプリケーションモードの選択に応じて、次の4つのレプリケーションジョブオプションのいずれかを作成します。

- 一方向レプリケーション
- 双方向レプリケーション
- レプリケート元から最新表示
- レプリケート先から最新表示

28.4.1 一方向レプリケーション

[一方向レプリケーション]では、コンテンツを一方向、つまりレプリケート元サイトからレプリケート先サイトへのみ複製できます。レプリケーション一覧内のレプリケート元サイトのオブジェクトに加えられた変更が、レプリケート先サイトに送信されます。ただし、レプリケート先サイトのオブジェクトに加えられた変更は、レプリケート元サイトに戻されません。

[一方向レプリケーション]は、中央の1つのBIプラットフォームデプロイメントでオブジェクトが作成、変更、管理されている場合に適しています。他のデプロイメントは、中央のデプロイメントのコンテンツを使用します。

一方向レプリケーションを作成するには、次のオプションを選択します。

- レプリケーションの種類 = 一方向レプリケーション
- レプリケーションモード = 通常のレプリケーション

28.4.2 双方向レプリケーション

[双方向レプリケーション]では、レプリケート元サイトとレプリケート先サイト間で双方向にコンテンツを複製できます。レプリケート元サイトでオブジェクトに加えられた変更はレプリケート先サイトに複製され、レプリケート先サイトで加えられた変更はレプリケート元サイトに複製されます。

① 注記

リモートスケジュールを実行したり、ローカルで実行したインスタンスをレプリケート元に戻したりするには、[双方向レプリケーション]モードを選択する必要があります。

コンテンツが作成、変更、管理されているBIプラットフォームデプロイメントが複数あり、両方の場所で使用される場合は、[双方向レプリケーション]が最も効率的なオプションです。またこのモードは、デプロイメントを同期するのに役立ちます。

双方向レプリケーションを作成するには、次のオプションを選択します。

- レプリケーションの種類 = 双方向レプリケーション
- レプリケーションモード = 通常のレプリケーション

関連情報

[リモートスケジュールおよびローカルで実行したインスタンス \[391 ページ\]](#)

28.4.3 【レプリケート元から最新表示】または【レプリケート先から最新表示】

コンテンツを[一方向レプリケーション]モードまたは[双方向レプリケーション]モードで複製すると、レプリケーション一覧のオブジェクトがレプリケート先サイトに複製されます。ただし、レプリケーションジョブが実行されるたびにすべてのオブジェクトが複製されるわけではありません。

フェデレーションには、レプリケーションジョブを高速で完了することができる最適化エンジンが用意されています。最適化エンジンでは、オブジェクトのバージョンとタイムスタンプを組み合わせ使用して、最後のレプリケーション以降にオブジェクトが変更されているかどうかを確認します。この確認作業は、レプリケーション一覧内で明示的に選択されたオブジェクトおよび依存関係のチェック中に複製されたオブジェクトで実行されます。

ただし、最適化エンジンはオブジェクトを見逃す場合があります、その場合オブジェクトは複製されません。このような場合に、“レプリケート元から最新表示”および“レプリケート先から最新表示”を使用すると、レプリケーションジョブは、タイムスタンプに関係なく、コンテンツおよびそれらの依存関係を複製します。

[レプリケート元から最新表示]では、レプリケート元サイトからレプリケート先サイトへのみコンテンツが送信されます。[レプリケート先から最新表示]では、レプリケート先サイトからレプリケート元サイトへのみコンテンツが送信されます。

例

以下に示す3つの例で、“レプリケート元から最新表示”と“レプリケート先から最新表示”を使用している場合に、最適化によって特定のオブジェクトが失われるシナリオを詳しく説明します。

シナリオ 1: 他のオブジェクトを含むオブジェクトを複製中の領域に追加する場合。

Folder A がレプリケート元サイトからレプリケート先サイトへ複製されます。これで、Folder A は両方のサイトに存在します。ユーザが Report B を含む Folder B を、レプリケート元サイトの Folder A に移動またはコピーします。次のレプリケーション時に、フェデレーションは Folder B のタイムスタンプが変更されていることを確認し、Folder B をレプリケート先サイトに複製します。ただし、Report B のタイムスタンプは変更されていません。したがって、通常の一方または双方向レプリケーションジョブでは Report B は複製されません。

Folder B のコンテンツを正しく複製するためには、“レプリケート元から最新表示”を使用するレプリケーションジョブを一度だけ使用する必要があります。この後に、通常の一方または双方向レプリケーションジョブによって Folder B は正しく複製されます。反対に、Folder B をレプリケート先サイトに移動またはコピーする場合は、“レプリケート先から最新表示”を使用します。

シナリオ 2: LifeCycle Manager または BIAR コマンドラインを使用して新しいオブジェクトを追加する場合。

LifeCycle Manager または BIAR コマンドラインを使用して複製中の領域にオブジェクトを追加する場合、通常の一方または双方向レプリケーションジョブではオブジェクトは選択されない場合があります。これは、

LifeCycle Manager または BIAR コマンドラインを使用する場合、レプリケート元システムとレプリケート先システムの内部クロックが同期しない場合があるからです。

① 注記

レプリケート元サイトで複製中の領域に新しいオブジェクトをインポートした後は、“レプリケート元から最新表示”レプリケーションジョブを実行することをお勧めします。レプリケート先サイトで複製中の領域に新しいオブジェクトをインポートした後は、“レプリケート先から最新表示”レプリケーションジョブを実行することをお勧めします。

シナリオ 3: スケジュールされたレプリケーション時間の間。

オブジェクトを複製中の領域に追加し、次にスケジュールされているレプリケーション時間まで待てない場合は、“レプリケート元から最新表示”および“レプリケート先から最新表示”レプリケーションジョブを使用できます。オブジェクトが追加された領域を明確に選択することで、コンテンツを迅速に複製できます。

① 注記

このシナリオは、大きなレプリケーション一覧に対して実行すると時間がかかるので、頻繁に使用しないことをお勧めします。たとえば、時間単位でスケジュールされた、[レプリケート元から最新表示]モードまたは[レプリケート先から最新表示]モードで実行されるレプリケーションジョブを作成する必要はありません。これらのモードは、“今すぐ実行”する場合か、または頻度の低いスケジュールで使用してください。

① 注記

場合によっては、競合解決を使用できないことがあります。たとえば、“レプリケート元から最新表示”では、レプリケート先サイトが優先されるオプションがブロックされたり、“レプリケート先から最新表示”では、レプリケート元が優先されるオプションがブロックされたりします。

28.5 サードパーティユーザとグループの複製

フェデレーションでは、サードパーティのユーザとグループ、特に Active Directory(AD)および LDAP のユーザおよびグループを複製することができます。

→ ヒント

これらの種類のユーザとグループまたはその個人用コンテンツ(お気に入りフォルダや受信ボックスなど)を複製する場合は、この節を参照してください。

ユーザとグループのマッピング

1. ユーザとグループをレプリケート元サイトでマップしてフェデレーションでユーザとグループを正しく複製します。
2. マップしたユーザとグループをレプリケート先サイトへ複製します。

① 注記

レプリケート先サイトではグループとユーザを個別にマップしないでください。個別にマップすると、それらのグループとユーザはレプリケート先サイトとレプリケート元サイトで異なる一意の識別を持つことになり、フェデレーションはユーザまたはグループを照合できなくなります。

例

管理者は、User A を含む Group A をレプリケート元サイトとレプリケート先サイトでマップします。Group A と User A の両方が、レプリケート元サイトとレプリケート先サイトで異なる一意の識別子を持つことになります。レプリケーション中、フェデレーションはそれらを照合できず、Group A と User A はエイリアスが競合しているため複製されません。

① 注記

サードパーティユーザまたはグループを複製する前に、レプリケート先サイトは、AD または LDAP 認証を使用するように設定されている必要があります。ただし、AD または LDAP を使用するようにレプリケート先サイトを設定して、ディレクトリサーバまたはドメインコントローラと通信できるようにする必要もあります。

① 注記

AD または LDAP グループを初めて複製した後に、このグループ内のユーザは、AD/LDAP グループチャートが最新表示されるまではログオンできなくなります。これは、約 15 分ごとに自動的に発生します。AD/LDAP グループチャートを手動で最新表示するには、CMC の[[認証](#)]ページで、[[Windows AD](#)]または[[LDAP](#)]をダブルクリックし、[[更新](#)]をクリックします。

① 注記

サードパーティグループを複製する場合は注意が必要です。ユーザをディレクトリサーバ内のグループに追加すると、それらのユーザは両方のサイトにログオンできるようになります。AD 認証または LDAP 認証のこのセキュリティの問題は、フェデレーションとは無関係です。

レプリケート先サイトとレプリケート元サイトに個別にログオンするか、グループメンバーシップが CMC の[[認証](#)]ページの[[更新](#)]ボタンを使用して両方のサイトで更新されると、両方のサイトでユーザアカウントが作成されます。アカウントの一意の識別子が異なるため、フェデレーションはそれらを正しく複製できません。

1つのサイトでアカウントを作成してから、他のサイトに複製することが重要です。

28.6 ユニバースおよびユニバース接続の複製

BI プラットフォームデプロイメント間でユニバースを複製するためにフェデレーションを使用する場合、事前に計画を立てておくことが重要です。ユニバースオブジェクトは、基になるユニバース接続がないと機能しません。

ユニバース接続オブジェクトには、レポーティングデータベースへの接続に必要な情報が含まれています。正しく機能するためには、ユニバース接続オブジェクトに有効な情報が含まれており、確立されるデータベース接続が許可されている必要があります。

① 注記

双方向レプリケーションを使用して、ユニバース接続を含めずにレプリケート元サイトからレプリケート先サイトへユニバースを複製すると、以降のレプリケーションで、レプリケート元サイトのユニバースとレプリケート元サイトのユニバース接続との関係が上書きまたは削除される可能性があります。これを回避するためには、常にユニバース接続をユニバースと共に複製します。

依存するユニバース接続が必ずユニバースと共に複製されるようにするために、ユニバースを含むレプリケーション一覧を作成または変更する際、常に次のオプションを選択します。

- 選択したユニバースで使用される接続を含める
- 選択したユニバースに必要なユニバースを含める

① 注記

ユニバースとそのユニバース接続との関係が上書きまたは削除されている場合は、Universe Designer でユニバースを開き、▶ **ファイル** ▶ **パラメータ** ▶ の順に選択して、接続情報を変更します。

次の2つの例では、ユニバースとその関連のユニバース接続を複製するプロセスを示します。

例

ユニバースおよびユニバース接続を複製している場合は、レプリケート元サイトの接続環境とレプリケート先サイトの接続環境が一致していることを確認する必要があります。

たとえば、ユニバース接続で“TestODBC”という名前の ODBC 接続を使用している場合は、レプリケート先環境にも“TestODBC”という名前の適切に設定された ODBC 接続が必要です。ODBC 接続は、同じデータベースにも、別のデータベースにも解決できます。この接続を使用するユニバースで接続の問題が発生しないようにするには、データベースのスキーマが同じであることが必要です。

例

レプリケート先サイトに複製したユニバースで、レプリケート元のユニバースが使用しているデータベースと異なるデータベースを使用する場合、ユニバース接続を複製しますが、レプリケート先サイトの接続情報が目的のデータベースを指すようにします。

たとえば、レプリケート元サイトのユニバース接続が“DatabaseA”を指す“Test”という名前の ODBC 接続を使用している場合は、レプリケート先サイトの ODBC 接続が名前は同じ“Test”でも“DatabaseB”を指すようにします。

28.7 リモート接続の管理

リモート接続オブジェクトには、リモートの BI プラットフォームデプロイメントへの接続に必要な情報が含まれています。

① 注記

リモート接続オブジェクトは、レプリケート先サイトの BI プラットフォームデプロイメントで作成されます。リモート接続はレプリケート元サイトです。

リモート接続は、CMC の [\[フェデレーション\]](#) エリアで確認できます。

28.7.1 リモート接続の作成

フェデレーションのリモート接続は、リモートの BI プラットフォームデプロイメントに接続します。複製するコンテンツがあるレプリケート元サイトへの接続を確立するには、最初にレプリケート先サイトでリモート接続を作成する必要があります。

リモート接続を整理するために、フォルダおよびサブフォルダを作成できます。

28.7.1.1 リモート接続フォルダを作成する

1. CMC の [\[フェデレーション\]](#) エリアを表示します。
2. [\[リモート接続\]](#) をクリックします。
3. [▶ 管理 ▶ 新規 ▶ フォルダ ▶](#) の順にクリックします。
[\[フォルダの作成\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
4. フォルダ名を入力し、[\[OK\]](#) をクリックします。
これで、このフォルダ内にリモート接続を作成できるようになりました。

28.7.1.2 リモート接続を作成する

リモートの BI プラットフォームデプロイメントに接続するには、フェデレーションでリモート接続を作成する必要があります。

1. CMC の [\[フェデレーション\]](#) エリアを表示します。
2. [\[リモート接続\]](#) をクリックします。
3. [▶ 管理 ▶ 新規 ▶ 新しいリモート接続 ▶](#) の順にクリックします。
[\[新しいリモートシステム接続\]](#) ダイアログボックスが表示されます。
4. 必要に応じてタイトル、説明および関連フィールドを入力します。

① 注記

[\[“説明”\]](#) および [\[“クリーンアップオブジェクトの数を次に制限します”\]](#) 以外のフィールドはすべて必須です。

フィールド	説明
タイトル	リモート接続オブジェクトの名前。
説明	リモート接続オブジェクトの説明。(オプション)
リモートシステム Web サービス URI	<p>Java アプリケーションサーバに自動的にデプロイされるフェデレーション Web サービスへの URL。BI プラットフォーム では、レプリケート元サイトまたはレプリケート先サイト、あるいは別のデプロイメントのどのフェデレーション Web サービスでも使用できます。以下の形式を使用します。</p> <p>http:// <application_yourserver_machine_name>:<port>/ dswsbobje.</p> <p>例: http://<mymachine.mydomain.com>:<8080>/ dswsbobje</p>
リモートシステム CMS	<p>フェデレーション Web サービスでアクセスできる接続先 CMS の名前。これは、レプリケート元サイトの CMS と見なされます。形式は CMS 名:ポート です。</p> <p>例: <mymachine>:6400</p> <div> <p>① 注記</p> <p>デフォルトポート 6400 を使用する場合、ポートの指定は省略できます。</p> </div>
ユーザ名	<p>レプリケート元サイトに接続する際に使用するユーザ名。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>使用しているユーザ名に、レプリケート元サイトのデプロイメントでレプリケーション一覧の表示権限があることを確認してください。</p> </div>
パスワード	レプリケート元サイトに接続するユーザアカウントのパスワード。
認証	レプリケート元サイトに接続する際のアカウント認証の種類。オプションは、Enterprise、AD または LDAP です。
クリーンアップ間隔 (時間)	このリモート接続オブジェクトを使用するレプリケーションジョブでオブジェクトのクリーンアップを行う間隔。正の整数のみ入力します。単位は時間数です。デフォルトは 24 です。
クリーンアップオブジェクトの数を次に制限します	レプリケーションジョブがクリーンアップするオブジェクトの数。(オプション)

5. [OK] をクリックします。

28.7.2 リモート接続の変更

リモート接続を作成したら、そのプロパティとセキュリティのオプションを変更することができます。

リモート接続を変更する

1. CMC の [フェデレーション] エリアを表示します。
2. [リモート接続] をクリックします。
3. 変更するリモート接続をダブルクリックします。
[リモート接続のプロパティ] ダイアログボックスが表示されます。次のプロパティを変更できます。
 - タイトル
 - 説明
 - リモートシステム Web サービス URI
 - リモートシステム CMS
 - ユーザ名
 - パスワード
 - 認証
 - クリーンアップ間隔 (時間)
 - クリーンアップオブジェクトの数を次に制限します
4. 変更を指定します。
5. [保存して閉じる] をクリックします。

28.8 レプリケーションジョブの管理

レプリケーションジョブはスケジュールに基づいて実行されるオブジェクトの種類で、フェデレーション内の 2 つの BI プラットフォームデプロイメント間でコンテンツを複製するために使用します。

① 注記

レプリケート先サイトで複製されたオブジェクトには、次の図のようなレプリケーションアイコンが付けられます。競合が発生すると、次の図のように、オブジェクトには競合アイコンが付けられます。

CMC の [フェデレーション] エリア内の [リモート接続] フォルダで、レプリケーションジョブの一覧を表示できます。

28.8.1 レプリケーションジョブの作成

レプリケーションジョブは、フェデレーション内の 2 つの BI プラットフォームデプロイメント間のコンテンツを複製するために必要です。各レプリケーションジョブには、1 つのリモート接続と 1 つのレプリケーション一覧を関連付ける必要があります。

28.8.1.1 レプリケーションジョブを作成する

1. CMC の [フェデレーション] エリアを表示します。
2. [リモート接続] をクリックします。

- 新しいレプリケーションジョブを含める **リモート接続** を選択します。

⚠ 警告

CMC はリモート接続 URI の Web サービスに接続して、ウィザードで処理を進めることができるようにする必要があります。

- ▶ **管理** ▶ **新規** ▶ **新しいレプリケーションジョブ** ▶ の順にクリックします。
[新しいレプリケーションジョブ] ダイアログボックスが表示されます。
- レプリケーションジョブのタイトルと説明を入力します。
- [次へ] をクリックします。
レプリケート元サイトで使用可能なレプリケーション一覧のリストが表示されます。
- レプリケーションジョブで使用する [レプリケーション一覧] を選択します。
- [次へ] をクリックします。
- 以下の表で説明する設定オプションを選択します。

オプション	説明
レプリケート先でオブジェクトのクリーンアップを有効にする	レプリケート元サイトで作成されているオブジェクトが削除された場合、レプリケーションジョブでレプリケート先サイトの複製オブジェクトをすべて削除します。 <div>① 注記 オブジェクトのクリーンアップでは、レプリケーション一覧で選択した依存関係またはオブジェクトを使用して複製されたオブジェクトは削除されません。</div>
一方向レプリケーション	オブジェクトがレプリケート元サイトからレプリケート先サイトにのみ複製されることを指定します。レプリケーション後にレプリケート元サイトのオブジェクトに行われた変更はレプリケート先サイトに複製されますが、レプリケート先サイトの変更はレプリケート元サイトに複製されません。
双方向レプリケーション	オブジェクトが双方向、つまり、レプリケート元サイトからレプリケート先、およびレプリケート先からレプリケート元サイトへ複製されることを指定します。レプリケーションの後に一方のサイトでこれらのオブジェクトに行われた変更は、もう一方のサイトに自動的に複製されます。
レプリケート元サイトが優先されます	レプリケート元サイトのオブジェクトとレプリケート先サイトの複製バージョン間で競合が検出された場合、レプリケート元サイトのバージョンが優先されることを指定します。
自動競合解決なし	検出された競合を解決するためのアクションは実行しないことを指定します。
レプリケート先サイトが優先されます (双方向レプリケーションでのみ有効)	レプリケート元サイトのオブジェクトとレプリケート先サイトの複製バージョン間で競合が検出された場合、レプリケート先サイトのバージョンが優先されることを指定します。
通常のレプリケーション	レプリケーションジョブが通常どおり動作することを指定します。

オプション	説明
レプリケート元から最新表示	コンテンツが変更されているかどうかに関係なく、レプリケート元サイトからレプリケート先サイトへすべてのコンテンツが複製されます。レプリケーション一覧全体、またはその一部だけを複製できます。
レプリケート先から最新表示 (双方向レプリケーションでのみ有効)	コンテンツが変更されているかどうかに関係なく、レプリケート先サイトからレプリケート元サイトへすべてのコンテンツが複製されます。レプリケーション一覧全体、またはその一部だけを複製できます。
すべてのオブジェクトを複製 (双方向レプリケーションでのみ有効)	レプリケーション一覧全体を複製します。
<div> <div>① 注記</div> <div>これは最も完全なオプションですが、最も時間がかかります。</div> </div>	
リモートスケジュールを複製 (双方向レプリケーションでのみ有効)	レプリケート先サイトからレプリケート元サイトへ保留中のリモートインスタンスを複製し、レプリケート元サイトからレプリケート先サイトへ完了したインスタンスを複製します。
ドキュメントテンプレートを複製	インスタンスではない(ローカルで実行されるオブジェクトまたはリモートスケジュールのチェック対象となるレポート)オブジェクトをすべて複製します。これには、ユーザ、グループ、フォルダ、レポートなどが含まれます。
ローカルで実行して完了したインスタンスを複製	完了したインスタンスをレプリケート先サイトからレプリケート元サイトに複製します。

10. [OK] をクリックします。

28.8.2 レプリケーションジョブをスケジュールする

1. CMC の [フェデレーション] エリアを表示します。
2. スケジュールする **レプリケーションジョブ** を選択します。
3. **▶ アクション ▶ スケジュール** の順にクリックします。
4. 目的のスケジュールオプションを選択します。

28.8.3 レプリケーションジョブの変更

フェデレーションにレプリケーションジョブを作成したら、そのプロパティを変更することができます。

28.8.3.1 レプリケーションジョブを変更する

1. CMC の [フェデレーション] エリアを表示します。
2. [リモート接続] フォルダをクリックします。
3. 変更するレプリケーションジョブを含むリモート接続オブジェクトを選択します。
4. 変更するレプリケーションジョブを選択します。
5. **管理 > オブジェクトプロパティの管理** をクリックします。
6. 必要に応じて、[プロパティ]、[スケジュール]、[履歴]、[レプリケーション一覧]、および[ユーザセキュリティ]を表示および変更します。

セクション	説明
プロパティ	名前、説明、その他の一般的なプロパティおよびレプリケーションジョブのオプションを変更します。
スケジュール	レプリケーションジョブが定期的なスケジュールで実行されるように設定します。
履歴	レプリケーションジョブのすべてのインスタンスを表示および管理します。
レプリケーション一覧	選択したレプリケーション一覧を変更します。
ユーザセキュリティ	レプリケーションジョブにアクセス権を設定します。

28.8.4 レプリケーションジョブ後のログの表示

レプリケーションジョブを実行するたびに、フェデレーションでは自動的にレプリケート先サイトにログファイルが作成されます。ログファイルでは XML 1.1 標準を使用します。また、XML 1.1 を使用する Web ブラウザが必要です。

レプリケーションログを表示する

1. CMC の[フェデレーション]エリアを表示します。
2. [すべてのレプリケーションジョブ]をクリックします。
3. 一覧から[レプリケーションジョブ]を選択します。
4. [プロパティ]をクリックします。
選択したレプリケーションジョブの[プロパティ]ページが表示されます。
5. [履歴]をクリックします。
6. ログファイルの[インスタンスの日時]をクリックして成功したレプリケーションジョブを表示するか、[失敗]ステータスをクリックして失敗したレプリケーションジョブのログファイルを表示します。
7. 目的のインスタンスを選択して、ログファイルを表示します。
ログファイルは XML 形式で生成され、XSL フォームを使用して、情報を書式設定し、HTML ページに表示できるようにします。

Adaptive Job Server を含む Server Intelligence Agent を実行中のコンピュータから XML ログにアクセスすることができます。ログファイルは次の場所にあります。

- Windows では、<InstallDir>%SAP BusinessObjects XI 4.0¥logging です。

- Unix では、<InstallDir>/sap_bobj/logging です。

28.9 オブジェクトのクリーンアップの管理

フェデレーションでは、レプリケート元サイトから削除したすべてのオブジェクトが、各レプリケート先サイトからも削除されるように、レプリケーションプロセスのライフサイクルを通じてオブジェクトのクリーンアップを実行する必要があります。

オブジェクトのクリーンアップには、リモート接続とレプリケーションジョブの2つの要素があります。リモート接続オブジェクトでは一般的なクリーンアップオプションを定義し、レプリケーションジョブでは適切な間隔が経過したときにクリーンアップを実行します。

28.9.1 オブジェクトのクリーンアップ方法

別個のレプリケーションジョブが同じリモート接続を使用する場合、それらのレプリケーションジョブは、オブジェクトのクリーンアップ中に連携して動作します。つまり、レプリケーションジョブによって、そのレプリケーション一覧内のオブジェクトだけでなく、同じリモート接続を使用する他のレプリケーション一覧内のオブジェクトもクリーンアップされます。リモート接続は、レプリケーションジョブの親が同じリモート接続オブジェクトである場合のみ、同じと見なされます。

例

レプリケーションジョブ A と B はオブジェクト A とオブジェクト B を複製します。これらのジョブは、同じレプリケート元サイトから複製され、同じリモート接続を使用します。レプリケート元サイトでオブジェクト B を削除すると、レプリケーションジョブ A はオブジェクト B が削除されたことを確認します。レプリケーションジョブ B がオブジェクト B を複製している場合でも、オブジェクト B はレプリケート先サイトからも削除されます。レプリケーションジョブ B が実行されるときに、オブジェクトのクリーンアップを実行する必要はありません。

① 注記

オブジェクトのクリーンアップ中は、レプリケート先サイトのオブジェクトだけが削除されます。レプリケーションに含まれるオブジェクトをレプリケート元サイトから削除すると、そのオブジェクトはレプリケート先サイトから削除されます。ただし、オブジェクトがレプリケート先サイトから削除された場合、レプリケーションジョブが双方向レプリケーションモードで実行されている場合でも、そのオブジェクトはオブジェクトのクリーンアップ中にレプリケート元から削除されません。

レプリケーション一覧から削除されたオブジェクトは、レプリケート先サイトから削除されません。レプリケーション一覧で指定されたオブジェクトを正しく削除するには、レプリケート先サイトとレプリケート元サイトの両方でオブジェクトを削除する必要があります。依存関係の計算を通じて複製されたオブジェクトは削除されません。

28.10 競合の検出と解決の管理

フェデレーションでは、レプリケート元サイトとレプリケート先サイトの両方でオブジェクトのプロパティが変更されると競合が発生する場合があります。1つのオブジェクトにつき、最上位プロパティとネストされているプロパティの両方の競合がチェックされます。たとえば、レプリケート元サイトとレプリケート先サイトの両方でレポートまたはレポート名が変更されると競合が発生することがあります。

競合が作成されないインスタンスもあります。たとえば、レプリケート元サイトでレポート名が変更され、レプリケート先サイトで複製バージョンの説明が変更された場合、変更は共にマージされ、競合は発生しません。

28.10.1 一方向レプリケーションの競合の解決

一方向レプリケーションでは、競合解決について次の2つの選択肢があります。

レプリケート元サイトが優先されます

一方向レプリケーションで競合が発生すると、レプリケート元サイトのオブジェクトが優先されます。レプリケート先サイトでのオブジェクトの変更は、レプリケート元サイトの情報によって上書きされます。たとえば、レプリケート元サイトとレプリケート先サイトの両方でレポートが変更される場合、レプリケート先サイトでの変更は、次のレプリケーションジョブ実行時にレプリケート元サイトのバージョンによって上書きされます。

① 注記

競合は自動的に解決されるため、ログファイルに競合は記録されず、競合オブジェクトリストにも表示されません。

自動競合解決なし

競合が発生し、“自動競合解決なし”を選択している場合、競合は解決されません。また、ログファイルに競合は記録されず、競合オブジェクトリストにも表示されません。

管理者は、CMCの[フェデレーション]エリアを使用して競合しているすべての複製オブジェクトのリストにアクセスできます。競合しているオブジェクトは、レプリケート元サイトへの接続に使用したリモート接続でグループ化されます。これらのリストにアクセスするには、CMCの[フェデレーション]エリアの[複製エラー]フォルダに移動して、目的のリモート接続を選択します。レプリケート先サイトで複製されたすべてのオブジェクトには、レプリケーションアイコンが付けられます。競合が発生すると、オブジェクトには競合アイコンが付けられます。[プロパティ](#)ページには警告メッセージも表示されます。

① 注記

リモート接続を使用するレプリケーションジョブが完了すると、リストが更新されます。リストには、特定のリモート接続を使用するすべてのレプリケーションジョブについて競合しているすべてのオブジェクトが含まれます。

① 注記

CMC およびレプリケーションジョブインスタンスへのアクセス権を持つすべてのユーザは、logfile ディレクトリに保存される XML ログにアクセスできます。レプリケート先サイトのオブジェクトのアイコンは、競合を示すアイコンになります。処理中に、競合ログが作成されます。

Abdul がレプリケート元サイトで Report A を変更します。Maria がレプリケート先サイトで複製バージョンを変更します。レポートは、両方のサイトで変更されていて解決されないため、次にレプリケーションジョブを実行したときに競合します。

レプリケート先のレポートは維持され、レプリケート元のレポートの変更は複製されません。以降のレプリケーションジョブは、競合が解決されるまで同様に動作します。レプリケート元サイトの変更は、競合を手動で解決するまで複製されません。

① 注記

この場合、オブジェクト全体が複製されません。競合していない他の変更は複製されません。

競合を手動で解決する場合には、次の 3 つのオプションがあります。

1. 競合しているオブジェクトだけを複製するレプリケーションジョブを作成します。この場合、同じリモート接続オブジェクトとレプリケーション一覧を使用します。
レプリケート元サイトの変更を維持するには、レプリケーションジョブを作成します。次に、[レプリケーションモード]を“レプリケート元から最新表示”に設定し、[自動競合解決]を“レプリケート元サイトが優先されます”に設定します。
レプリケート先の変更を維持するには、[レプリケーションの種類]を“双方向レプリケーション”、[レプリケーションモード]を“レプリケート先から最新表示”、および[自動競合解決]を“レプリケート先サイトが優先されます”に設定して、レプリケーションジョブを作成します。

① 注記

[レプリケーションモード]で、“レプリケート元から最新表示”または“レプリケート先から最新表示”を設定し、レプリケーション一覧で競合しているオブジェクトだけを選択します。この方法では、他のオブジェクトは複製されません。次に、レプリケーションジョブの実行をスケジュールすると、レプリケーションジョブは選択したオブジェクトを複製し、指定されたとおりに競合を解決します。

2. 競合しているオブジェクトだけを複製するレプリケーションジョブを作成します。この場合、同じリモート接続オブジェクトを使用する必要があります。ただし、オプション 1 とは異なり、新しいレプリケーション一覧をレプリケート元サイトで作成できます。競合しているオブジェクトだけを使用し、このフォーカスされているレプリケーション一覧を使用する新しいレプリケーションジョブを作成します。
レプリケート元サイトの変更を維持するためには、[自動競合解決]を“レプリケート元サイトが優先されます”に設定します。
レプリケート先サイトの変更を維持するには、[自動競合解決]を“レプリケート先サイトが優先されます”、[レプリケーションの種類]を“双方向レプリケーション”に設定します。
3. 一方向レプリケーションジョブの場合は、レプリケート先サイトのオブジェクトだけを削除できます。レプリケーションジョブを次に実行するときに、レプリケーションジョブはレプリケート元サイトからレプリケート先サイトへオブジェクトを複製します。

① 注記

オブジェクトを削除するときは注意が必要です。そのオブジェクトに依存している他のオブジェクトが削除されたり、動作しなくなったり、セキュリティを失うことがあります。オプション 1 と 2 の使用をお勧めします。

28.10.2 双方向レプリケーションの競合の解決

双方向レプリケーションの競合では、競合の検出方法として次の3つの方法があります。

- レプリケート元サイトが優先されます
- レプリケート先サイトが優先されます
- 自動競合解決なし

レプリケート元サイトが優先されます

競合が発生すると、レプリケート元サイトが優先され、レプリケート先サイトの変更が上書きされます。

例

Lily はレポートの名前を Report A に変更します。Malik はレプリケート先サイトの複製バージョンの名前を Report B に変更します。次にレプリケーションジョブを実行するときに、レプリケート先サイトの複製バージョンは Report A に戻ります。

この場合、競合はレプリケート元サイトでユーザの指示に従って解決されているため、ログファイルに競合は記録されず、競合オブジェクトリストにも表示されません。

レプリケート先サイトが優先されます

競合が発生すると、レプリケート先サイトでは変更が維持され、その変更がレプリケート元サイトに上書きされます。

例

Kamal はレポートの名前を Report A に変更し、Peter はレプリケート先サイトの複製バージョンの名前を Report B に変更します。レプリケーションジョブを実行すると、競合が検出されます。レプリケート先レポートの名前は Report B のまま変わりません。

また、双方向レプリケーションでは、変更はレプリケート元サイトに戻されます。このシナリオでは、レプリケート元サイトは更新されて、そのレポート名は Report B に変更されます。この場合、競合はユーザの指示に従って解決されているため、ログファイルに競合は記録されず、競合オブジェクトリストにも表示されません。

自動競合解決なし

“自動競合解決なし”を選択すると、競合は解決されません。競合はログファイルに記録され、管理者が手動で解決できます。

① 注記

オブジェクトのアイコンは、競合の存在を示すアイコンになります。

① 注記

変更はレプリケート元サイトとレプリケート先サイトに双方向レプリケーションで複製されますが、レプリケート先サイトのバージョンにのみ競合アイコンのフラグが設定されます。

① 注記

CMC およびレプリケーションジョブインスタンスへのアクセス権を持つすべてのユーザは、logfile ディレクトリに出力される XML ログにアクセスできます。レプリケート先サイトのオブジェクトのアイコンは、競合を示すアイコンになります。処理中に、競合ログが作成されます。

管理者は、CMC の[フェデレーション]エリアを使用して競合しているすべての複製オブジェクトのリストにアクセスできます。競合しているオブジェクトは、レプリケート元サイトへの接続に使用したリモート接続でグループ化されます。これらのリストにアクセスするには、▶ [CMC](#) ▶ [フェデレーション](#) ▶ [複製エラー](#) ▶ [リモート接続](#) ▶ の順に選択します。

① 注記

リモート接続を使用するレプリケーションジョブが完了すると、リストが更新されます。リストには、特定のリモート接続を使用するすべてのレプリケーションジョブについて競合しているすべてのオブジェクトが含まれます。レプリケート先サイトで複製されたすべてのオブジェクトには、レプリケーションアイコンが付けられます。競合が発生すると、オブジェクトには競合アイコンが付けられます。

例

Michael がレプリケート元サイトで Report A を変更します。Damien がレプリケート先サイトで複製バージョンを変更します。レポートは、両方のサイトで変更されていて解決されないため、次にレプリケーションジョブを実行したときに競合します。

レプリケート先のレポートは維持され、レプリケート元のレポートの変更は複製されません。以降のレプリケーションジョブは、競合が解決されるまで同様に動作します。レプリケート元サイトの変更は、管理者または委任管理者が競合を手動で解決するまで複製されません。

① 注記

この場合、オブジェクト全体が複製されません。競合していない他の変更は複製されません。

① 注記

CMC およびレプリケーションジョブインスタンスへのアクセス権を持つすべてのユーザは、logfile ディレクトリに出力される XML ログにアクセスできます。レプリケート先サイトのオブジェクトのアイコンは、競合を示すアイコンになります。処理中に、競合ログが作成されます。

管理者は、CMC のフェデレーションエリアを使用して競合しているすべての複製オブジェクトのリストにアクセスできます。競合しているオブジェクトは、レプリケート元サイトへの接続に使用したリモート接続でグループ化されます。これらのリストにアクセスするには、**▶ CMC ▶ フェデレーション ▶ 複製エラー ▶ リモート接続 ▶**の順に選択します。

① 注記

リモート接続を使用するレプリケーションジョブが完了すると、リストが更新されます。リストには、特定のリモート接続を使用するすべてのレプリケーションジョブについて競合しているすべてのオブジェクトが含まれます。レプリケート先サイトで複製されたすべてのオブジェクトには、レプリケーションアイコンが付けられます。競合が発生すると、オブジェクトには競合アイコンが付けられます。

競合を手動で解決する場合には、次の 3 つのオプションがあります。

1. 競合しているオブジェクトだけを複製するレプリケーションジョブを作成します。この場合、同じリモート接続オブジェクトとレプリケーション一覧を使用します。
レプリケート元サイトの変更を維持するには、レプリケーションジョブを作成します。次に、[レプリケーションモード]を“レプリケート元から最新表示”に設定し、[自動競合解決]を“レプリケート元サイトが優先されます”に設定します。
レプリケート先の変更を維持するには、レプリケーションジョブを作成し、[レプリケーションの種類]を“双方向レプリケーション”、[レプリケーションモード]を“レプリケート先から最新表示”、および[自動競合解決]を“レプリケート先サイトが優先されます”に設定します。

① 注記

[レプリケーションモード]で、“レプリケート元から最新表示”または“レプリケート先から最新表示”を設定し、レプリケーション一覧で競合しているオブジェクトだけを選択します。この方法では、他のオブジェクトは複製されません。次に、レプリケーションジョブの実行をスケジュールすると、レプリケーションジョブは選択したオブジェクトを複製し、指定されたとおりに競合を解決します。

2. 競合しているオブジェクトだけを複製するレプリケーションジョブを作成します。この場合、同じリモート接続オブジェクトを使用する必要があります。ただし、オプション 1 とは異なり、新しいレプリケーション一覧をレプリケート元サイトで作成できます。競合しているオブジェクトだけを使用し、このフォーカスされているレプリケーション一覧を使用する新しいレプリケーションジョブを作成します。
レプリケート元サイトの変更を維持するためには、自動競合解決を“レプリケート元サイトが優先されます”に設定します。
レプリケート先サイトの変更を維持するには、自動競合解決を“レプリケート先サイトが優先されます”、レプリケーションの種類を“双方向レプリケーション”に設定します。
3. 配置しないサイト上のオブジェクトを削除します。

① 注記

オブジェクトを削除するときは注意が必要です。そのオブジェクトに依存している他のオブジェクトが削除されたり、動作しなくなったり、セキュリティを失うことがあります。オプション 1 と 2 の使用をお勧めします。

レプリケート先の変更を維持するには、レプリケート元サイトのオブジェクトを削除します。次にレプリケーションジョブを実行すると、オブジェクトはレプリケート先サイトからレプリケート元サイトに複製されます。

① 注記

レプリケート元サイトのコピーを削除する場合には注意が必要です。そのオブジェクトを複製している他のレプリケート先サイトが、コピーを複製し直す前にレプリケーションジョブを実行する可能性があります。これにより、他のレプリケート先サイトでコピーが削除され、コピーが戻されるまで使用できなくなります。

レプリケート元サイトの変更を維持するには、レプリケート先サイトでオブジェクトを削除します。

28.11 フェデレーションでの Web サービスの使用

フェデレーションは、Web サービスを使用してオブジェクトおよびその変更をレプリケート元サイトとレプリケート先サイト間で送信します。フェデレーション固有の Web サービスは自動的にインストールされ、BI プラットフォームインストールにデプロイされます。ただし、ここで説明するように、Web サービスでプロパティを変更したり、デプロイメントをカスタマイズする必要がある場合があります。

→ ヒント

ファイル管理や機能を向上させるためには、フェデレーションでファイルのキャッシュを有効にしてください。

28.11.1 セッション変数

1つのレプリケーションジョブで多くのコンテンツファイルを転送している場合は、フェデレーションの Web サービスのセッションタイムアウト期間を長くすることができます。

このプロパティは、次の場所の `dsws.properties` ファイルにあります。

```
<App Server Installation Directory>%dswsbobje%\Web-INF\classes
```

例:

```
C:\Program Files\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0\warfiles\webapps\dswsbobje\WEB-INF\classes
```

セッション変数を有効にするには、次のように入力します。

```
session.timeout = x
```

ここで、“x” は目的の時間です。この “x” は秒単位で表されます。指定されない場合、デフォルト値は 1200 秒(20 分)です。

これらの新しいプロパティが有効になるのは、変更された Web アプリケーションが Web アプリケーションサーバを実行しているコンピュータ上に再デプロイされてからです。WDeploy を使用して、Web アプリケーションサーバに BOE war ファイルを再デプロイします。WDeploy の使用については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドを参照してください。

28.11.2 ファイルのキャッシュ

ファイルのキャッシュを使用すると、非常に大きな添付ファイルをメモリにバッファリングしなくても Web サービスで処理できます。大きい転送サイズを使用しているときにこの機能を有効にしないと、Java の仮想マシンのメモリがすべて使用され、レプリケーションは失敗する可能性があります。

① 注記

Web サービスがメモリではなくファイルに対して処理されるため、ファイルのキャッシュによってパフォーマンスは低下します。両方のオプションを組み合わせで使用し、大きい転送ファイルをファイルに送信し、小さい転送ファイルをメモリに送信することができます。

ファイルのキャッシュを有効にするには、次のディレクトリにある `Axis2.xml` ファイルを変更します。

```
<App Server Installation Directory>%dswsbobje%\Web-Inf%\conf
```

例:

```
C:\Program Files\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI  
4.0\warfiles\webapps\dswsbobje\WEB-INF\conf
```

次を入力します。

```
<parameter name="cacheAttachments" locked="false">true</parameter>
```

```
<parameter name="attachmentDIR" locked="false">temp directory</parameter>
```

```
<parameter name="sizeThreshold" locked="false">4000</parameter>
```

① 注記

しきい値のサイズはバイト単位です。

これらの新しいプロパティが有効になるのは、変更された Web アプリケーションが Web アプリケーションサーバを実行しているコンピュータ上に再デプロイされてからです。WDeploy を使用して、Web アプリケーションサーバに BOE war ファイルを再デプロイします。WDeploy の使用については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイド*を参照してください。

28.11.3 カスタムデプロイメント

フェデレーション Web サービスは自動的にデプロイすることができますが、“federator”、“biplatform”、および“session”サービスを有効にする必要があります。フェデレーション、またはその他の Web サービスを無効にするには、対応する Web サービス `service.xml` ファイルを変更します。

BI プラットフォームの Web サービスは次の場所にあります。

```
<App Server Installation Directory>%dswsbobje%\WEB-INF\services
```

例:

```
C:\Program Files\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI  
4.0\warfiles\webapps\dswsbobje\WEB-INF\services
```

Web サービスを無効にする

- “service.xml”ファイルのサービス名タグに activate プロパティを追加し、このプロパティを false に設定します。
- Java アプリケーションサーバを再起動します。

たとえば、フェデレーションを無効にするには、次のようにします。

services.xml ファイルは次の場所にあります。

```
C:\Program Files\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0\warfiles\webapps\dswebobje\WEB-INF\services\federator\META-INF
```

次のサービス名を変更します。

```
<service name="Federator">
```

変更後

```
<service name="Federator" activate="false">
```

これらの新しいプロパティが有効になるのは、変更された Web アプリケーションが Web アプリケーションサーバを実行しているコンピュータ上に再デプロイされてからです。WDeploy を使用して、Web アプリケーションサーバに BOE war ファイルを再デプロイします。WDeploy の使用については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドを参照してください。

28.12 リモートスケジュールおよびローカルで実行したインスタンス

ここでは、リモートスケジュール、ローカルで実行したインスタンス、およびインスタンス共有について説明します。これらの機能を使用すると、データが存在する場所でレポートを実行し、完了したインスタンスを適切な場所に送信できます。

28.12.1 リモートスケジュール

フェデレーションを使用して、レプリケート先サイトでレポートをスケジュールし、それをレプリケート元サイトで処理することができます。完了したインスタンスは、レプリケート先サイトに戻されます。

リモートスケジュールを有効にするには、レポートを通常どおりスケジュールし、“元のサイトで実行”オプションを有効にします。このオプションを有効にするには、[▶ スケジュール ▶ サーバグループのスケジュール ▶ 元のサイトで実行 ▶](#) をクリックします。スケジュールされたインスタンスが作成されて、保留状態になります。

リモートスケジュール中、レプリケート先サイトで送信された情報は無視されて、レポートインスタンスは保留状態のままになります。

該当のレポートを管理する次のレプリケーションジョブでリモートスケジュールが有効になっている場合、レプリケーションジョブはインスタンスを、処理を行うレプリケート元サイトにコピーします。スケジューラによって処理されるまでインスタンスは保留状態のままです。その間に、インスタンスを送信したレプリケーションジョブは、前に完了したインスタンスおよびオブジェクトの変更と共に戻ります。

インスタンスがレプリケート元サイトで処理されると、インスタンスは完了状態になります。該当のレポートを管理する次のレプリケーションジョブでリモートスケジュールが有効になっていると、完了したインスタンスを

使用してレプリケート先サイトのコピーが更新されます。更新後、レプリケート先サイトのインスタンスは完了します。

① 注記

完了した1つのインスタンスを戻すためには、レプリケーションジョブを2回実行する必要があります。

例

1. Tom は、Report A をリモートスケジュールにスケジュールします。
2. Report A がレプリケート先サイトで作成されて、保留状態になります。
3. レプリケーションジョブ A が実行されます。1回目: レプリケート元サイトからレプリケート先サイトに変更 (前に完了したインスタンスを含む) を複製します。2回目: 保留状態のインスタンスがレプリケート元サイトにコピーされ、さらにレプリケート先サイトからレプリケート元サイトに変更が複製されます。
4. レプリケート元サイトでは、スケジューラが保留状態のインスタンスを選択し、そのインスタンスを、処理を行う適切な Job Server に送信します。インスタンスはレプリケート元サイトで処理され、完了状態になります。
5. レプリケーションジョブ A がもう一度実行されます。レプリケーションジョブ A がレプリケート元サイトからレプリケート先サイトにコンテンツを複製すると、完了したインスタンス Report A が選択されて、変更がレプリケート先のバージョンに適用されます。
6. このタスクが完了すると、レプリケート先のバージョンが完了します。

リモートスケジュールは双方向レプリケーションジョブでのみ使用でき、“リモートスケジュールを複製”を有効にする必要があります。このオプションは、“レプリケーションフィルタ”エリアの[[レプリケーションジョブのプロパティ](#)]ページにあります。リモートでスケジュールされているジョブを、レプリケーション一覧の他のオブジェクトよりも頻繁に複製する場合があります。この場合は、2つのレプリケーションジョブを作成します。1つは、リモートスケジュールのみに対象を絞ったレプリケーションジョブに対して“リモートスケジュールを複製”を使用して有効にします。もう1つは、“ドキュメントテンプレートを複製”または“すべてのオブジェクトを複製 (フィルタなし)”で有効にします。

① 注記

リモートスケジュールを有効にすると、完了したインスタンスと失敗したインスタンスがレプリケート元サイトとレプリケート先サイトの両方に表示されます。

レプリケート先サイトのユーザがレポートをリモートスケジュール用にスケジュールし、レプリケート元サイトにそのユーザが存在しない場合、インスタンスはレプリケート元サイトで失敗します。失敗したインスタンスの所有者は、レプリケート元に接続する際に使用したリモート接続オブジェクトのユーザアカウントになります。

リモートスケジュールに対して設定できるのは1つのレプリケーションジョブですが、レプリケーションジョブは、レポートインスタンスの祖先オブジェクトを常に複製します。つまり、レプリケーション間で変更があった場合、実際のレポート、レポートフォルダなどが複製されます。レプリケート先サイトのこれらの変更をレプリケート元サイトに複製しない場合は、セキュリティ権限を使用して、どの変更が複製されるかを制御できます。

関連情報

[セキュリティアクセス権の管理 \[367 ページ\]](#)

28.12.2 ローカルで実行したインスタンス

ローカルで実行したインスタンスは、レプリケート先サイトのレポートから処理されたレポートのインスタンスです。フェデレーションを使用して、完了したインスタンスをレプリケート先サイトからレプリケート元サイトに複製できます。

レプリケーションジョブで、レプリケート先サイトからレプリケート元サイトに完了インスタンスと失敗したインスタンスを複製できるようにするには、[▶ レプリケーションジョブのプロパティ ▶ レプリケーションフィルタ ▶ ローカルで実行して完了したインスタンスを複製 ▶](#)を有効にします。

レプリケーションジョブがローカルで実行したインスタンスだけを複製する場合があります。この場合は、“ローカルで実行して完了したインスタンスを複製”を有効にします。

① 注記

ローカルで実行したインスタンスがレプリケーションジョブで有効になると、完了したインスタンスと失敗したインスタンスの両方がレプリケート元サイトに複製されます。つまり、レプリケート元サイトとレプリケート先サイトの両方にコピーが存在することになります。

保留中のインスタンスは複製されません。

ローカルで実行したインスタンスの所有者がレプリケート元サイトに存在しない場合、所有者は、リモート接続オブジェクトで接続に使用したユーザアカウントになります。

28.12.3 インスタンス共有

リモートスケジュールおよびローカルで実行したインスタンスをレプリケーションジョブで有効にすると、1つのレプリケート元サイトと、同じレポートを複製している複数のレプリケート先サイトが存在する場合、インスタンス共有が発生する可能性があります。

例

Report A はレプリケート元サイトで作成され、レプリケート先サイト A と B の両方がそれを複製しています。この場合、両方のレプリケート先サイトでインスタンス共有が発生します。

- “リモートスケジュールを複製”または“ローカルで実行して完了したインスタンスを複製”(あるいはその両方)が有効になっているレプリケーションジョブ。上記と同じレプリケーションジョブを使用してレポート A を複製する場合。
- Report A を“レプリケート元サイトで実行”されるようにスケジュールするか、またはローカルで実行されるようにスケジュールする場合。

レプリケート先サイト A および B の両方が Report A を複製し、それらに対応するレプリケーションジョブがリモートスケジュールまたはローカルで実行したインスタンスを複製している場合、レプリケート先サイト A またはレプリケート先サイト A の代わりにレプリケート元サイト(あるいはその両方)で処理されたインスタンスは、レプリケート先サイト B で共有されます。

同様に、レプリケート先サイト B で処理された、またはレプリケート元サイトで処理された(あるいはその両方)インスタンスもレプリケート先サイト A で共有されます。最終的に、レプリケート元サイトとレプリケート先サイト A および B はインスタンスの同じセットを持ちます。

インスタンス共有は多くの場合に適しています。たとえば、他のサイトのユーザが兄弟デプロイメントの情報にアクセスする必要がある場合があります。その場合、インスタンスをローカルサイトにいるユーザが表示しないようにするには、適切なセキュリティアクセス権が設定されているか確認します。たとえば、レポートオブジェクトで、ユーザが自分の所有するインスタンスのみ表示できるようにアクセス権を適用します。

① 注記

すべてのオブジェクトは、BI プラットフォームセキュリティルールに従います。ユーザとグループが適用可能なインスタンスのみ表示できるようにするためには、ユーザが所有しているインスタンスだけを表示できるようにアクセス権を設定することをお勧めします。たとえば、レポートオブジェクトで、ユーザが自分の所有するインスタンスのみ表示できるようにアクセス権を適用します。

関連情報

[セキュリティアクセス権の管理 \[367 ページ\]](#)

28.13 複製したコンテンツのインポートと昇格

場合によっては、BI プラットフォームシステムから別のシステムへ複製したコンテンツをインポートまたは昇格することがあります。このセクションでは、フェデレーションのこれらの機能について説明します。

① 注記

オブジェクトの移行に最も適しているのは、Administrators グループに属するメンバー、特に Administrator ユーザアカウント内のメンバーです。オブジェクトを移行するためには、多数の関連オブジェクトも移行する必要がある場合があります。すべてのオブジェクトについて必要となるセキュリティ権限を取得することは、場合によっては委任管理者アカウントでは不可能です。

28.13.1 複製したコンテンツのインポート

LifeCycle Manager を使用してコンテンツを BI プラットフォームデプロイメントから別のデプロイメントにインポートする場合、LifeCycle Manager は、インポート中の複製したオブジェクトに関連付けられているレプリケーション固有の情報をインポートしません。つまり、インポート後、オブジェクトは複製されていないものとして

動作します。これは、レプリケート先サイトで複製したオブジェクトに固有の動作です。これについて、次のシナリオで説明します。

例

BI プラットフォーム A は、フェデレーションプロセスのレプリケート先サイトです。Report A は、システム A にある複製レポートで、LifeCycle Manager を使用してシステム A から BI プラットフォーム B にインポートされます。

結果: Report A が BI プラットフォーム B にコピーされると、Report A に複製された情報は含まれません。Report A にはレプリケーションアイコンが付きません。BI プラットフォーム A でオブジェクトが競合していた場合でも、そのオブジェクトはシステム B では競合しません。基本的に、オブジェクトはシステム B で生成されたオブジェクトと見なされます。

① 注記

LifeCycle Manager で選択したインポートの選択肢に応じて、CUID は同じ場合と異なる場合があります。

28.13.2 複製したコンテンツのインポートとレプリケーションの継続

複製したコンテンツをインポートしたら、インポートしたオブジェクトをフェデレーションプロセスに含めることができます。この場合、インポートしたオブジェクトが存在するシステムをレプリケート元サイトとして扱う、またはレプリケート先サイトとして扱うという 2 つのシナリオがあります。このシステムをレプリケート元サイトとして扱うには、フェデレーションの処理を通常どおり進めます。

システムをレプリケート先サイトとして扱い、レプリケート元サイトからインポートしたオブジェクトを複製するには、次の条件に従う必要があります。

- LifeCycle Manager を使用する場合は、オブジェクトの CUID を保持するようにします。
- 最初のレプリケーションジョブの競合解決が“出力元サイトが優先されます”または“出力先サイトが優先されます”に設定されるようにします。

→ ヒント

あるレプリケート先サイトから別のレプリケート先サイトへ LifeCycle Manager を使用してオブジェクトをインポートするのではなく、フェデレーションのみを使用してオブジェクトを複製する方が効率がよいので、この方法をお勧めします。

例

Report A は BI プラットフォームシステム A で作成されました。システム X ではフェデレーションを使用してシステム A からシステム X へ Report A を複製しました。その後、LifeCycle Manager で Report A をシステム X からシステム Y にインポートしました。

計画: システム Y はフェデレーションをシステム A に設定し、Report A をレプリケーションの一部として維持する必要があります。システム Y はレプリケート先で、システム A はレプリケート元です。

アクション: Report A をシステム X からシステム Y にインポートしている場合、Report A の CUID を保持する必要があります。また、最初のレプリケーションジョブを実行するときに、レプリケーションジョブは Report A を複製しようとします。オブジェクトはすでにシステム Y に存在するため、レプリケーションによって競合が発生します。使用するバージョンを指定するには、競合の解決モードを“出力元サイトが優先されます”または“出力先サイトが優先されます”に設定する必要があります。

① 注記

この例では、あるレプリケート先サイトから別のレプリケート先サイトへ LifeCycle Manager を使用してオブジェクトをインポートするのではなく、フェデレーションのみを使用してオブジェクトを複製することをお勧めします。Report A はシステム A からシステム Y に複製されて、LifeCycle Manager を使用してシステム X からシステム Y にインポートする必要はありません。

28.13.3 テスト環境からのコンテンツの昇格

組織では、本稼働用環境に何かを配置する前にテストを行うことがよくあります。通常は、本稼働用マシンでフェデレーションを設定する前に、開発環境またはテスト環境の BI プラットフォームシステム間でフェデレーションをテストします。テスト環境でレプリケート元サイトとレプリケート先サイトおよびコンテンツを作成したら、次の手順を使用して、この設定を本稼働用マシンに昇格できます。

1. LifeCycle Manager を使用してテスト環境のレプリケート元サイトのコンテンツを、レプリケート元サイトとして動作する本稼働のマシンに昇格します。

① 注記

LifeCycle Manager を使用している場合、レプリケーション一覧プロジェクトは選択できません。

2. 本稼働のレプリケート元サイトでレプリケーション一覧を作成し、目的のコンテンツを含めます。
3. 次の 2 つのオプションから選択します。
 - A) リモート接続オブジェクトおよび適切なレプリケーションジョブを、レプリケート先サイトとして動作する本稼働の本稼働用のマシンで作成します。
 - B) LifeCycle Manager を使用してリモート接続およびレプリケーションジョブを Dev/QA のレプリケート先サイトから、レプリケート先サイトとして動作する本稼働用マシンにインポートします。次に、インポートしたリモート接続を編集し、レプリケート元サイトとして動作する本稼働のマシンを指定します。

28.13.4 レプリケート先サイトの再指定

現在のところ、レプリケート元サイトから複製されたオブジェクトは、必ずそのレプリケート元サイトから複製される必要があり、他の BI プラットフォームから複製することはできません。リモート接続オブジェクトを編集して、新しいシステムを指定するようにした場合でも、異なる BI プラットフォームシステムから複製されたオブジェクトを複製しようとすると、リモート接続オブジェクトは複製できません。別のレプリケート元サイトからオブジェクトを複製するには、最初にレプリケート先サイトからオブジェクトを削除します。

① 注記

複製したオブジェクトをコピーすると、コピーの CUID は変更され、コピーには複製された情報は含まれません。

28.14 ベストプラクティス

フェデレーションを使用して、レプリケーションジョブのパフォーマンスを最適化できます。

1つのレプリケーションジョブに多数のオブジェクトがある場合は、追加の手順を実行すると正しく実行できます。通常は、各レプリケーションジョブで 32,000 個までのオブジェクトを複製できます。ただし、一部のデプロイメントでは、レプリケーションのサイズを増減して設定する必要があります。

1) 専用 Web サービスプロバイダの取得

フェデレーションでは、複製されたコンテンツは Web サービスを使用して送信されます。BI プラットフォームのデフォルトのインストールでは、Web サービスはすべて同じ Web サービスプロバイダを使用します。容量の大きいレプリケーションジョブが Web サービスプロバイダを長時間使用していると、ほかの Web サービスリクエストおよびそれに対応するアプリケーションへの応答が遅くなる可能性があります。

一度に多数のオブジェクトを複製する予定がある場合や、複数のレプリケーションジョブを連続して実行する予定がある場合は、独自の Web サービスプロバイダを使用してフェデレーション Web サービスを、独自の Java アプリケーションサーバにデプロイすることができます。

これを行うには、BI プラットフォームインストーラを使用して Web サービスをインストールします。Java アプリケーションサーバがインストール済みであることが必要です。Java アプリケーションサーバがインストールされていない場合は、Web Tier コンポーネントオプション全体をインストールします。これで、Web サービスと Tomcat がインストールされます。

① 注記

既存の CMS の情報 (ホスト名、ポート、管理者パスワードなど) を入力する必要があります。

① 注記

この新しい Web サービスプロバイダの URI は、リモート接続の URI フィールドで使用する必要があります。

2) Java アプリケーションサーバの使用可能なメモリ量の増加

1つのレプリケーションジョブで多くのオブジェクトを複製する場合、または Java アプリケーションサーバを他のアプリケーションと共有している場合は、Java アプリケーションサーバで使用できるメモリの量を増やします。

BI プラットフォームと Tomcat をデプロイしている場合、デフォルトの使用可能メモリ量は 1 GB です。Tomcat の使用可能なメモリを増やすには、次の手順を実行します。

Windows の場合

1. **スタート > プログラム > Tomcat > Tomcat 設定** の順にクリックします。
2. **[Java]** を選択します。
3. **[Java オプション]** ボックスで、**[-Xmx1024M]** を見つけます。
4. **[-Xmx1024M]** の値を目的のサイズまで増やします。

例

メモリの量を 2 GB まで増やすには、「-Xmx2048m」と入力します。

UNIX の場合

1. <BOE_Install_Dir>/setup/ で、任意のテキストエディタを使用して env.sh を開きます。-Xmx1024m パラメータを目的のサイズまで増やします。
2. 次の行を探します。

```
# if [ -d "$BOBJEDIR"/tomcat ]; then
# set the JAVA_OPTS for Tomcat
JAVA_OPTS="-Dboj.enterprise.home=${BOBJEDIR}enterprise120
-Djava.awt.headless=true"
if [ "$SOFTWARE" = "AIX" -o "$SOFTWARE" =
"SunOS" -o "$SOFTWARE" = "Linux" ];
then
  JAVA_OPTS="$JAVA_OPTS -Xmx1024m -XX:MaxMetaspaceSize=256m"
fi
export JAVA_OPTS
# fi
```

① 注記

BI 4.2 サポートパッケージ 5 では、MaxPermSize パラメータではなく、MaxMetaspaceSize パラメータを使用してメタスペースメモリサイズを定義できます。

- BI 4.2 サポートパッケージ 5 より前のバージョンから BI 4.2 サポートパッケージ 5 にアップグレードしている場合は、既存のすべてのサーバについて、パラメータを手動で編集する必要があります。
- BI 4.2 サポートパッケージ 5 のフレッシュインストールを実行している場合、パラメータはデフォルトで置き換えられます。

3. -Xmx1024m パラメータを目的のサイズまで増やします。

例

メモリの量を 2 GB まで増やすには、「-Xmx2048m」と入力します。

→ ヒント

他の Java アプリケーションサーバに関しては、Java アプリケーションサーバのマニュアルを参照して使用可能なメモリの量を増やしてください。

3)作成する BIAR ファイルサイズの縮小

フェデレーションは、Web サービスを使用してレプリケート元サイトとレプリケート先サイト間でコンテンツを複製します。効率的な転送を行うために、オブジェクトはグループ化されて BIAR ファイルに圧縮されます。

多数のオブジェクトを複製している場合は、Java アプリケーションサーバを設定してサイズの小さい BIAR ファイルを作成してください。この方法を使用すると、フェデレーションで、複数の小さい BIAR ファイルにオブジェクトがパッケージ化および圧縮されるので、複製するオブジェクトの数は制限されません。

作成する BIAR ファイルのサイズを小さくするには、次の Java パラメータを Java アプリケーションサーバに追加します。

```
Dbobj.biar.suggestSplit  
and  
Dbobj.biar.forceSplit
```

bobj.biar.suggestSplit を指定すると、BIAR ファイルの適切なサイズが提案され、そのサイズへの変更が行われます。提案される新しい値は 90MB です。

bobj.biar.forceSplit を指定すると、BIAR ファイルは指定されたサイズで強制的に停止します。提案される新しい値は 100 MB です。

① 注記

アプリケーションサーバでメモリ不足が発生しているか、最大ヒープサイズをこれ以上増やすことができない場合を除き、デフォルトの BIAR ファイルのサイズ設定を変更する必要はありません。

Tomcat Windows の場合

1. [Tomcat 設定] ツールを開くには、▶ **スタート** ▶ **プログラム** ▶ **Tomcat** ▶ **Tomcat 設定** ▶ の順にクリックします。
2. [Java] を選択します。
3. [Java オプション] ボックスの最後に次の行を追加します。

```
-Dbobj.biar.suggestSplit=90  
-Dbobj.biar.forceSplit=100
```

Tomcat Unix/Linux の場合

1. 任意のテキストエディタで、env.sh を開きます。このファイルは <BOE_Install_Dir>/setup/ にあります。
2. 次の行を探します。

```
# if [ -d "$BOBJEDIR"/tomcat ]; then  
# set the JAVA_OPTS for tomcat  
JAVA_OPTS="-Dbobj.enterprise.home=${BOBJEDIR}enterprise120  
-Djava.awt.headless=true"  
if [ "$SOFTWARE" = "AIX" -o "$SOFTWARE" = "SunOS" -o "$SOFTWARE" = "Linux" ];  
then  
  JAVA_OPTS="$JAVA_OPTS -Xmx1024m -XX:MaxPermSize=256m"  
fi  
export JAVA_OPTS  
# fi
```

目的の BIAR ファイルサイズパラメータを追加します。

例: JAVA_OPTS="\$JAVA_OPTS -Xmx1024m -XX:MaxPermSize=256m -Dbobj.biar.suggestSplit=90
-Dbobj.biar.forceSplit=100"

他の Java アプリケーションサーバに関しては、Java アプリケーションサーバのマニュアルを参照して、Java システムプロパティを追加してください。

4) ソケットタイムアウトの延長

Adaptive Job Server で、レプリケーションジョブが実行されます。レプリケーションジョブの実行中、Adaptive Job Server はレプリケート元サイトとの接続を確立します。レプリケート元サイトから大量の情報を受け取る場合、Adaptive Job Server が情報の受信に使用するソケットがタイムアウトしないようにすることが重要です。

デフォルト値は 90 分です。必要な場合は、ソケットタイムアウトの値を増やします。

Adaptive Job Server でソケットのタイムアウト値を延長するには、次の手順を実行します。

1. セントラル管理コンソール(CMC)を開きます。
2. [\[サーバ\]](#) セクションで、[\[Adaptive Job Server\]](#) を選択します。
3. [\[プロパティ\]](#) をクリックします。
4. 次の行の終わりに、“コマンドラインパラメータ”を追加します。
 - **Windows:** `-javaArgs Xmx1000m,Xincgc,server,Dbobj.federation.WSTimeout=<timeout in minutes>`
 - **Unix:** `-javaArgs Xmx512m,Dbobj.federation.WSTimeout=<timeout in minutes>`

関連情報

[エラーメッセージのトラブルシューティング \[401 ページ\]](#)

[フェデレーションでの Web サービスの使用 \[389 ページ\]](#)

[現在のリリースの制限 \[400 ページ\]](#)

28.14.1 現在のリリースの制限

フェデレーションは、柔軟性のあるツールですが、実稼動中のパフォーマンスに影響する可能性のある特定の制限があります。ここでは、フェデレーションの運用を最適化するために変更可能な領域について詳しく説明します。

- **オブジェクトの最大数**
各レプリケーションジョブは、BI プラットフォームデプロイメント間でオブジェクトを複製します。1つのレプリケーションジョブで複製する最大オブジェクト数は 100,000 にすることをお勧めします。オブジェクトが 100,000 個を超えてもレプリケーションジョブは機能しますが、フェデレーションでサポートされるのは、100,000 個までのオブジェクトの複製だけです。
- **アクセス権**
フェデレーションでは、アクセス権はレプリケート元サイトからレプリケート先サイトにのみ複製されます。両方のデプロイメントに共通するユーザアクセス権をレプリケート元サイトで設定し、双方向レプリケーションを使用してそれらのアクセス権をレプリケート先サイトに複製することをお勧めします。特定のサイトのユーザアクセス権は、ユーザが存在するサイトの BI プラットフォームデプロイメントで通常どおりに管理されます。
- **ビジネスビューと関連オブジェクト**
BI プラットフォームには、ビジネスビュー、ビジネスエレメント、データファンデーション、データコネクション、および値の一覧 (LOV) を保存できます。これらのオブジェクトは、Crystal Reports の機能を拡張するために使用します。
オブジェクトがレプリケート先サイトで最初に作成されてから、双方向レプリケーションを使用してレプリケート元サイトに複製されると、これらのオブジェクトは正しく動作せず、それらのデータは Crystal Reports に表示されない場合があります。
レプリケート元サイトでビジネスビュー、ビジネスエレメント、データファンデーション、データコネクションおよび LOV を作成してから、それらをレプリケート先サイトに複製することをお勧めします。レプリケート先サイトまたはレプリケート元サイトでオブジェクトを更新すると(アクセス権を許可する)、変更は正しく複製されます。

- ユニバースオーバーロード
BI プラットフォームにはユニバースオーバーロードを保存できます。ユニバースオーバーロードがレプリケート先サイトで作成されてから、双方向レプリケーションを使用してレプリケート元サイトに複製されると、それらは正しく機能しない場合があります。
この問題を解決するには、最初にレプリケート元サイトでユニバースオーバーロードを作成してから、レプリケート先サイトに複製します。次に、レプリケート元サイトでユニバースオーバーロードにセキュリティを設定し、レプリケート先サイトに複製します。
- オブジェクトのクリーンアップ
オブジェクトのクリーンアップによって、一方のサイトで削除されているオブジェクトが削除されます。現在、オブジェクトのクリーンアップは、レプリケート元サイトからレプリケート先サイトにのみ実行されます。
- フェデレーションログファイル
フェデレーションログファイルは、XML 1.1 標準を使用する XML ファイルに書き込まれます。ブラウザでログファイルを表示するには、ブラウザが XML 1.1 をサポートしている必要があります。

関連情報

[オブジェクトのクリーンアップの管理 \[383 ページ\]](#)

28.14.2 エラーメッセージのトラブルシューティング

ここでは、フェデレーションを使用する際に発生する可能性のあるエラーメッセージについて説明します。これらのメッセージはレプリケーションジョブのログまたはレポートの機能領域に表示されます。

1) 無効な GUID

エラーの例: ERROR 2008-01-10T00:31:08.234Z GUID ASXOOFyvy0FJnRcD0dZNTZg (オブジェクト番号 1285 のプロパティ SI_PARENT_CUID) は有効な GUID ではありません。

このエラーは、親と一緒に複製されていないオブジェクトやレプリケート先に存在しないオブジェクトを複製していることを意味します。たとえば、オブジェクトが複製されていても、そのオブジェクトを含むフォルダが複製されていない場合があります。オブジェクトを複製しているアカウントが親オブジェクトに対する十分なアクセス権を持っていないために、親オブジェクトは複製されない可能性があります。

2) レプリケート元サイトでデータが表示されない Crystal Reports

このエラーは、最初にレプリケート先サイトで作成されてから、レプリケート元サイトに複製されたビジネスビュー、ビジネスエレメント、データファンデーション、データコネクションまたは値の一覧 (LOV) を Crystal Reports が使用している場合に発生する可能性があります。

3)ユニバースオーバーロードが正しく適用されない

このエラーは、レプリケート先サイトで作成されてから、レプリケート元サイトに複製されたユニバースオーバーロードを含むユニバースをレポートが使用している場合に発生します。

4)Java のメモリ不足

エラー例: `java.lang.OutOfMemoryError`

このエラーは、レプリケーションジョブの処理中に Java アプリケーションサーバのメモリが不足すると発生する可能性があります。レプリケーションジョブのサイズが大きすぎるか、Java アプリケーションサーバに十分なメモリがありません。

フェデレーション Web サービスを専用のマシンに移動して Java アプリケーションサーバの使用可能なメモリ量を増やすか、1つのレプリケーションジョブで複製されるオブジェクトの量を減らします。

5)ソケットタイムアウト

エラーの例: 元のサイトの通信中にエラーが発生しました。タイムアウトになりました。

レプリケート元サイトからレプリケート先サイトの Adaptive Job Server へ送信される情報が、割り当てられたタイムアウトを超える長さになっています。Adaptive Job Server でソケットのタイムアウト値を延長するか、レプリケーションジョブで複製しているオブジェクトの数を減らしてください。

6)クエリ制限

エラーの例: レプリケート先サイトで SDK エラーが発生しました。有効なクエリではありません。(FWB 00025)クエリ文字列がクエリの長さ制限を超えています。

このエラーは、一度に多数のオブジェクトを複製している場合や、フェデレーションが、CMS で処理しきれない大きさのクエリを送信した場合に発生する可能性があります。レプリケート元サイトからのオブジェクトはレプリケート先サイトにコミットされます。ただし、レプリケート元サイトにコミットする必要がある変更はコミットされません。競合は指定されたとおりに解決されますが、オブジェクトには手動による競合解決のフラグは設定されません。レプリケート先サイトでコミットされたオブジェクトは継続して正しく動作します。

この問題を解決するには、1つのレプリケーションジョブで複製しているオブジェクトの数を減らします。

7)レプリケーションジョブのタイムアウト

エラーの例: 指定の時間間隔内にオブジェクトをスケジュールできませんでした。

このメッセージは、別のレプリケーションジョブの完了を待機している間にレプリケーションジョブがタイムアウトすると表示されます。複数のレプリケーションジョブが1つのレプリケート元サイトに同時に接続している

場合、このエラーが発生する可能性があります。失敗したレプリケーションジョブは、次のスケジュール時に再実行を試みます。

この問題を解決するには、失敗したレプリケーションジョブを、同じレプリケート元サイトに接続している他のレプリケーションジョブと競合しない時間にスケジュールします。

8)レプリケーションの制限

エラーの例: レプリケート先サイトで SDK エラーが発生しました。データベースアクセスのエラーです。...内部クエリプロセッサのエラーです。クエリの最適化中にクエリプロセッサのスタック領域が足りなくなりました。ExecWithDeadlockHandling でクエリを実行中にエラーが発生しました。

このメッセージは、一度に複製可能な、サポートされるオブジェクトの数を超えると表示される場合があります。この問題を解決するには、レプリケーションジョブで複製しているオブジェクトの数を減らし、再実行してみてください。

9)オブジェクトの削除

エラーの例: 「セキュリティ権限をチェック中にエラーが発生しました。」または「オブジェクトのバック中にエラーが発生しました。」

このメッセージは、オブジェクトがレプリケーションパッケージから削除されると表示される場合があります。これは、権限をチェックしたり、オブジェクトをバックする前に、レプリケーションの必要があるオブジェクトに対してフェデレーションがクエリを実行すると発生する場合があります。

10)Adaptive Processing Server

エラーの例: Job Processing Server でエラーが発生しました。

このエラーは、フェデレーションによってロードされるクラスの数が多すぎて、レプリケーションジョブを処理するメモリが足りない場合に発生する可能性があります。

この問題を解決するには、次の両方の手順を実行する必要があります。

1. Adaptive Processing Server のコマンドライン引数に、`-javaArgs "XX:MaxMetaspaceSize=256m"` という行を追加します。

① 注記

BI 4.2 サポートパッケージ 5 では、MaxPermSize パラメータではなく、MaxMetaspaceSize パラメータを使用してメタスペースメモリサイズを定義できます。

- BI 4.2 サポートパッケージ 5 より前のバージョンから BI 4.2 サポートパッケージ 5 にアップグレードしている場合は、既存のすべてのサーバについて、パラメータを手動で編集する必要があります。
- BI 4.2 サポートパッケージ 5 のフレッシュインストールを実行している場合、パラメータはデフォルトで置き換えられます。

2. 接続先の Java アプリケーションサーバに次のパラメータを追加して、使用している BIAR ファイルのサイズを縮小します。

- `-Dbobj.biar.suggestSplit=100m`
- `-Dbobj.biar.forceSplit=100m`

11) Adaptive Processing Server の調整

新しい Java 引数 `-XX:MetaspaceSize` が APS コマンドラインに追加され、既存の `-XX:MaxMetaspaceSize` との組み合わせによって初期化のエクスペリエンスを改善し、Adaptive Processing Server に関連する Java プロセス内での不要なフルガーベジコレクションを防ぎます。

最小 RAM リソース、デフォルト APS、およびすべてのサービスを含む VM のテストで、MetaSpace および MaxMetaSpace に対してこれらの値を指定すると、APS の起動と初期化が既定の設定よりも若干速くなるようです。'フル GC' はレポートされていません。

Adaptive Processing Server の JAVA オプションの調整による MetaSpace でのフルガーベジコレクション (フル GC) の回避の詳細については、SAP ノート [3001317](#) を参照してください。

12) オブジェクトマネージャの領域

エラーの例: プッシュパッケージを構築できませんでした。入力/出力例外が発生しました: "デバイスに領域が残っていません。"

これは、フェデレーションが使用する一時ディレクトリに十分なディスク領域がない場合に発生します。この問題を解決するには、一時ディレクトリに追加の領域を作成するか、一時ディレクトリに別の場所を使用します。

レプリケート元サイトで一時ディレクトリに別の場所を指定するには、Java アプリケーションサーバの設定ファイルに `-Dbobj.tmp.dir=<TempDir>` という行を追加します。

レプリケート元サイトで一時ディレクトリに別の場所を指定するには、Adaptive Processing Server のコマンドライン引数に `-javaArgs "-Dbobj.tmp.dir=<TempDir>"` という行を追加します。

この例で、`<TempDir>` は、使用する一時ディレクトリの場所です。

13) ユニバースエラー

エラーの例: `processDPCommands API` の呼び出し中に内部エラーが発生しました。

このエラーは、複製されたユニバースに、無効なまたは見つからないユニバース間接続のリレーションシップが含まれている場合に発生します。この問題を解決するには、[\[レプリケート元から最新表示\]](#) オプションを選択して、レプリケーションジョブを実行し、ユニバース接続が複製されていることを確認します。

または、Universe Designer でユニバースを開き、ユニバースのユニバース接続を編集して、ユニバースを再コミットします。

関連情報

[ベストプラクティス \[397 ページ\]](#)

[現在のリリースの制限 \[400 ページ\]](#)

29 レプリケーション一覧の管理

29.1 レプリケーション一覧の管理

レプリケーション一覧には、BI プラットフォームデプロイメント内にある、一緒に複製することができるユーザ、グループ、レポートなどのコンテンツが含まれます。レプリケーション一覧には、CMC からアクセスします。

複製できるコンテンツタイプを以下の表で説明します。

カテゴリ	サポートされるオブジェクト
リポジトリオブジェクト	ビジネスビュー、DataConnection、LOV、データファンデーションなどを含むオブジェクト。 <div>① 注記 すべてのオブジェクトはサポートされますが、個々のレベルではサポートされません。</div>
レポート	Crystal レポート、Web Intelligence ドキュメント、および Dashboards オブジェクト。 <div>① 注記 フルクライアントアドインおよびテンプレートはサポートされます。</div>
サードパーティオブジェクト	Excel、PDF、PowerPoint、Word、テキストファイル、リッチテキストファイル、Shockwave ファイル。
ユーザ	ユーザ、グループ、受信ボックス、お気に入り、個人用カテゴリ
BI プラットフォーム	フォルダ、イベント、カテゴリ、カレンダー、カスタムロール、ハイパーリンク、ショートカット、プログラム、プロファイル、オブジェクトパッケージ、その他。
ユニバース	ユニバース、接続、ユニバースオーバーロード

① 注記

次のオブジェクトをレプリケート元サイトで作成し、レプリケート先サイトに複製する必要があります。レプリケート先サイトでこれらのオブジェクトを作成してから、それらをレプリケート元サイトに複製すると、それらのオブジェクトはレプリケート元サイトで機能しません。

- ビジネスビュー
- ビジネスエレメント
- データファンデーション
- データコネクション
- 値の一覧

29.1.1 レプリケーション一覧の作成

レプリケーション一覧は、CMC の[レプリケーション一覧]エリアにあります。フォルダやサブフォルダを作成してレプリケーション一覧を整理することができます。

29.1.1.1 [レプリケーション一覧] フォルダを作成する

- CMC の[レプリケーション一覧]エリアを表示します。
- [レプリケーション一覧]をクリックします。
- [管理](#) ▸ [新規](#) ▸ [フォルダ](#) ▾の順にクリックします。
[フォルダの作成]ダイアログボックスが表示されます。
- フォルダ名を入力し、[OK]をクリックします。
これで、このフォルダ内にレプリケーション一覧を作成できるようになりました。

29.1.1.2 レプリケーション一覧を作成する

- CMC の[レプリケーション一覧]エリアを表示します。
- 新しいレプリケーション一覧を保存するフォルダを選択します。
- [管理](#) ▸ [新規](#) ▸ [新しいレプリケーション一覧](#) ▾をクリックします。
[新しいレプリケーション一覧]ダイアログボックスが表示されます。
- レプリケーション一覧のタイトルと説明を入力します。
- 詳細オプションを指定する場合は、[レプリケーション一覧のプロパティ]リンクをクリックします。
これにより、レプリケート元サイトからレプリケート先サイトに自動的に複製する依存関係を指定することができます。
- 以下の表で説明する必要なオプションを選択します。

依存関係オブジェクトオプション	定義
選択したユーザの個人用フォルダを含む	選択したユーザの個人用フォルダとそのコンテンツを複製します。
選択したユーザの個人用カテゴリを含む	選択したユーザの個人用カテゴリを複製します。
選択したレポートのユニバースを含む	選択したレポートオブジェクトが依存するユニバースを複製します。
選択したユーザグループのメンバーを含む	選択したグループ内のユーザを複製します。
選択したユニバースに必要なユニバースを含む	ほかのユニバースに依存するユニバースを複製します。

依存関係オブジェクトオプション	定義
選択したユーザの受信ボックスを含む	選択したユーザの受信ボックスとそのコンテンツを複製します。
選択したユニバースのユーザグループを含む	ユニバースのオーバーロードに関連付けられたユーザグループを複製します。
選択したオブジェクトに設定されるアクセスレベルを含む	選択したオブジェクトに設定されているアクセスレベルを複製します。
選択したカテゴリのドキュメントを含む	選択したカテゴリに含まれている Word、Excel、PDF などのすべてのドキュメントを複製します。
選択したユーザとユーザグループのプロファイルを含む	選択したユーザまたはグループに関連付けられているプロフィールを複製します。
選択したユニバースによって使用される接続を含む	選択したオブジェクトによって使用されるユニバース接続オブジェクトを複製します。

① 注記

BI プラットフォームの一部のオブジェクトは他のオブジェクトに依存しています。たとえば、Web Intelligence ドキュメントは、構造およびコンテンツを基になるユニバースに依存しています。Web Intelligence ドキュメントを複製しても、そのレポートが使用するユニバースを選択しない場合、ユニバースがすでに複製されていない限り、レプリケーションはレプリケート先サイトで機能しません。ただし、**選択したレポートのユニバースを含む**が有効な場合、フェデレーションによってレポートが依存するユニバースが自動的に複製されます。

7. [\[次へ\]](#) をクリックします。
8. 1つまたは複数のオブジェクトを選択してレプリケーション一覧に追加します。
 - 矢印ボタンを使用して [\[利用可能なオブジェクト\]](#) フォルダのオブジェクトを追加または削除します。
 - または、[\[すべてレプリケート\]](#) の [\[リポジトリオブジェクト\]](#) をクリックし、すべてのビジネスビュー、ビジネスエレメント、データファンデーション、データ接続、値の一覧、およびリポジトリオブジェクト（レポートイメージや関数を含む）を複製します。

① 注記

[\[使用できるオブジェクト\]](#) フォルダにある最上位フォルダを複製することはできません。

9. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックします。

29.1.2 レプリケーション一覧の変更

レプリケーション一覧を作成したら、そのプロパティまたはオブジェクトを変更できます。

29.1.2.1 レプリケーション一覧のプロパティを変更する

1. CMC の [\[レプリケーション一覧\]](#) エリアを表示します。

2. 変更するレプリケーション一覧を選択します。
3. **管理** > **プロパティ** をクリックします。
[一般プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
4. タイトルと説明を変更します。[一般プロパティ] ダイアログボックスが開いている間は、選択したレプリケーション一覧の他の領域も変更できます。
5. 依存関係オプションを変更するには、ナビゲーション一覧の[レプリケーション一覧のプロパティ]をクリックします。
6. [保存して閉じる]をクリックします。

関連情報

[レプリケーション一覧の作成 \[407 ページ\]](#)

29.1.2.2 レプリケーション一覧でオブジェクトを変更する

1. CMC の[レプリケーション一覧]エリアを表示します。
2. レプリケーション一覧を選択します。
3. **アクション** > **レプリケーション一覧の管理** の順にクリックします。
[レプリケーション一覧の管理] ダイアログボックスが表示され、レプリケーション一覧に含まれるオブジェクトの一覧が表示されます。
4. 必要に応じてオブジェクトを追加または削除します。
5. [保存して閉じる]をクリックします。

関連情報

[レプリケーション一覧の作成 \[407 ページ\]](#)

30 パブリケーション

30.1 デザインタスク

30.1.1 CMC でのパブリケーションの作成

1. セントラル管理コンソール (CMC) の **[フォルダ]** で、パブリケーションを作成するフォルダに移動します。
2. 選択したフォルダを右クリックし、**▶ 新規 ▶ パブリケーション** を選択します。
[新規パブリケーション] ダイアログボックスが開き、一般プロパティのオプションが表示されます。

① 注記

[概要] タブには、パブリケーションの作成中またはパブリケーションのプロパティを表示している間、パブリケーションの概要情報が表示されます。

3. (必須) **[タイトル]** フィールドに、パブリケーションのタイトルを入力します。
4. (オプション) **[説明]** フィールドに、パブリケーションの説明を入力します。
5. (オプション) **[キーワード]** フィールドに、パブリケーションの内容に関連するキーワードを入力します。
6. **[ソースドキュメント]** で、**[追加]** ボタンをクリックします。
7. **[ソースドキュメントの選択]** ダイアログボックスで、パブリケーションに追加するソースドキュメントを1つまたは複数選択します。
8. **[OK]** をクリックします。

② 注記

各ソースドキュメントでは、**[実行時に最新表示]** チェックボックスがデフォルトで選択されています。これにより、パブリケーションの実行時に、ドキュメントがデータソースに合わせて最新表示されます。

パブリケーションの実行時にソースドキュメントを最新表示しない場合は、ドキュメントの **[実行時に最新表示]** チェックボックスをオフにします。

9. **保存して閉じる** をクリックします。

30.1.2 編集用のパブリケーションを開く

1. BI ラウンチパッドで、パブリケーションを見つけます。
 - a. **[マイホーム]** グループで、**[フォルダ]** タイルをクリックし、パブリケーションを作成した場所のフォルダに移動します。
 - b. パブリケーションの横の ******* アイコンをクリックし、**[プロパティ]** を選択します。

パブリケーションの **[プロパティ]** ページが表示されます。ここでは、パブリケーションのさまざまなプロパティを変更し、変更を保存することができます。

2. BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) でパブリケーションを見つけます。

- パブリケーションをダブルクリックします。
- パブリケーションを右クリックし、[プロパティ] を選択します。

パブリケーションの [プロパティ] ページが表示されます。ここでは、パブリケーションのさまざまなプロパティを変更し、変更を保存することができます。

パブリケーションが新しいウィンドウで開きます。

30.1.3 パブリケーションでの一般プロパティの定義

[プロパティ] ページで、パブリケーションのプロパティを定義します。

CMC または BI ラウンチパッド:

1. 一般プロパティを定義するパブリケーションを開きます。
[プロパティ] ページが表示され、パブリケーションの一般プロパティとタイトルが表示されます。
2. (オプション) [説明] ボックスに、パブリケーションの説明を入力します。
3. (オプション) キーワードボックスに、パブリケーションの内容に関連するキーワードを入力します。
4. [保存して閉じる] をクリックします。

30.1.4 ソースドキュメントの追加

パブリケーションの作成中に、[新規パブリケーション] ページでドキュメントをパブリケーションに追加、変更、および削除できます。

ソースドキュメントの選択時に、動的コンテンツドキュメントタイプに基づき、利用可能なオプションが決定されます。

1. [新規パブリケーション] ページで、[全般] を展開し、[ソースドキュメント] を選択します。
2. + (追加) アイコンをクリックします。
3. [ソースドキュメントの選択] ダイアログボックスで、パブリケーションに含める同じタイプのドキュメントの動的コンテンツドキュメントを見つけて選択します。
4. [OK] をクリックします。

選択したソースドキュメントは、[新規パブリケーション] ページの [項目] リストに表示されます。すべてのソースドキュメントに対しては、[実行時に最新表示] 列内のチェックボックスがデフォルトで選択されています。チェックボックスが選択されている場合、パブリケーションの実行時にデータソースに対してドキュメントは最新表示されます。ドキュメントを最新表示しない場合は、[実行時に最新表示] 列でそのドキュメントのチェックボックスをオフにします。

④ 注記

システムのパフォーマンスを向上させるために、ドキュメントごとに、[実行時に最新表示] 列内のチェックボックスの選択を解除してください。

5. ソースドキュメントを添付ファイルまたはマージされた PDF ファイルとして送信するときに、ドキュメントの表示順序を設定できます。[新規パブリケーション] ページの [ソースドキュメント] 領域で、[項目] リストからドキュメントを選択し、[上へ移動] または [下へ移動] をクリックしてドキュメントを並べ替えます。

6. [保存して終了] をクリックします。

30.1.4.1 サードパーティソースドキュメントの置換

サードパーティ ("その他" ともいいます) のソースドキュメントは、BI ラUNCHパッド由来のものではありません。Microsoft Word、Adobe PDF、Microsoft Excel などのファイルがこれにあたります。

サードパーティのソースドキュメントを置換できるようにするには、ドキュメントに対して [編集] アクセス権限を持っている必要があります。

サードパーティドキュメントのコンテンツは更新できませんが、サードパーティドキュメントを最新バージョンのドキュメントに置換することはできます。これにより、LAUNCHパッド以外で作成されたドキュメントで、最新のソース情報を見ることができます。

1. サードパーティドキュメントを右クリックして、**整理** > **ファイルの置換** の順に選択します。
[ファイルの置換] メニューオプションがサードパーティドキュメントで使用できない場合、そのドキュメントに対して [編集] 権限を持っていないことになります。
2. [ファイルの置換] ダイアログボックスで、[参照] をクリックし、コンピュータ上にある最新バージョンのソースドキュメントファイルを選択します。
「ファイルがソースドキュメントのファイル形式と一致しない」というメッセージが表示された場合、元のソースドキュメントとは異なる形式のファイルを選択しています。[OK] をクリックしてメッセージを閉じ、[参照] をクリックして正しいソースドキュメントを選択します。
3. [置換] をクリックします。
4. 確認メッセージで、[OK] をクリックしてサードパーティドキュメントを更新します。

30.1.5 Enterprise 受信者の選択

スケジュール ダイアログボックスで、パブリケーションの Enterprise 受信者を選択します。

1. **スケジュール** ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**出力先** をクリックし、**Enterprise 受信者** をクリックします。
2. パブリケーションの受信者を選択します。
 - a. [利用可能] の下にある [ユーザー一覧] をクリックして BI プラットフォームのすべてのユーザの一覧を表示するか、[グループリスト] をクリックして BI プラットフォームのすべてのユーザグループ一覧を表示します。
 - b. ユーザまたはユーザグループを選択し、ユーザまたはグループを [選択] リストに移動します。

利用可能な受信者 リストでユーザをすばやく見つけるには、**タイトルの検索** ボックスに受信者のユーザ名、フルネーム、または電子メールアドレスを入力します。複数のユーザまたはユーザグループを同時に選択するには、**[SHIFT]** または **[CTRL]** キーを押しながら各ユーザまたはグループをクリックします。受信者を除外するには、[選択] リストのユーザまたはユーザグループを選択し、ユーザまたはユーザグループを **[除外する]** リストに移動します。
3. **OK** をクリックします。

30.1.6 動的受信者の選択

動的受信者は、BI プラットフォームユーザ以外の受信者です。新規パブリケーションダイアログボックスで、パブリケーションの動的受信者を選択します。

動的受信者を指定する前に、動的受信者ソースが設計されており、使用可能な状態であることが必要です。動的受信者ソースには受信者のデータを格納し、Crystal レポート、Web Intelligence ドキュメント、またはカスタムコーディングされたデータプロバイダを使用できます。カスタムコーディングされた動的受信者ソースの作成については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイドを参照してください。

動的受信者データはクエリから取得され、ドキュメントを表示すると表示されるデータと一致していない場合があります。クエリの作成方法によっては、Web Intelligence コンポーネントで作成された動的受信者ソースには、パブリケーションのソースドキュメント内のデータに対応しない値が含まれる場合があります。たとえば、レポート内のフィルタで関連の値を除外したり、クエリが重複行を取得するように設定されているために重複するレコードが表示される場合があります。パブリケーションの設計プロセスの間に動的受信者の完全なリストを確認してください。

より効率的にパブリケーションを処理するには、[受信者の識別子] リストを使用し、受信者 ID を基準に受信者データを並べ替えます。

1. パブリケーションを開いて動的受信者を選択します。
2. **プロパティ** ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**動的受信者** をクリックします。
Crystal レポート動的受信者のソースを、.rptx 形式にすることはできません。
3. [動的受信者のソースの選択] の下で、[Web Intelligence レポート動的受信者プロバイダ] または [Crystal Reports 動的受信者データプロバイダ] のいずれかを選択します。
4. 動的受信者ソースとして使用するオブジェクトを検索して選択し、[OK] をクリックします。
5. 動的受信者ソースとして Web Intelligence ドキュメントを選択する場合は、[ドキュメントのデータソース名の選択] リストからドキュメントに表示されるクエリを選択します。
6. [受信者の識別子 (必須)] リストから、受信者の ID 値が含まれるフィールドを選択します。
7. (オプション)[フルネーム] リストから受信者のフルネームが含まれるフィールドを選択します。
8. パブリケーションを電子メールアドレスに配信する場合は、[電子メール] リストから受信者の電子メールアドレスが含まれるフィールドを選択します。
9. パブリケーションを配信する動的受信者ソース内の受信者を、以下のように決定します。
 - パブリケーションをすべての動的受信者に送信するには、[完全リストの使用] チェックボックスを選択します。
 - パブリケーションを特定の動的受信者に送信するには、[完全リストの使用] チェックボックスの選択を解除し、[利用可能] の下で、受信者のチェックボックスを選択して受信者を [選択] リストに移動します。

利用可能な受信者 リストでユーザをすばやく見つけるには、**タイトルの検索** ボックスに受信者のユーザ名、フルネーム、または電子メールアドレスを入力します。受信者を除外するには、受信者のチェックボックスを選択し、[除外する] リストに移動します。

10. OK をクリックします。

パブリケーションの動的受信者を指定した後、動的受信者に対するパブリケーションをパーソナライズできます。これを行うには、ソースドキュメント内のフィールドを動的受信者ソース内の列にマップします。

30.1.7 パブリケーションの出力先の選択

パブリケーションを作成またはスケジュールしながら、パブリケーションの出力先を選択します。

1. **[新規パブリケーション]** または **[パブリケーションスケジュール]** ページで、**[全般]** を展開し、**[出力先]** を選択します。
2. (オプション) 使用しているシステムにパブリケーションインスタンスを保存しないようにするには、**[選択された配信の出力先]** リストの下にある **[デフォルトの Enterprise の場所]** を削除します。
3. パブリケーションオブジェクトのインスタンスの制限を低く設定します。
手順については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームユーザガイドを参照してください。
4. **[選択された配信の出力先]** の下にある **[追加]** をクリックして、パブリケーションを送信する各出力先の横にあるチェックボックスを選択します。
パブリケーションのショートカットを作成する場合、出力先として **[BI 受信ボックス]** および **[デフォルトの Enterprise の場所]** を選択します。
パブリケーションが電子メール受信者に送信され、電子メール本文に Enterprise の場所へのリンクを埋め込む場合、出力先として **[電子メール]** および **[デフォルトの Enterprise の場所]** を選択します。
選択した出力先が **[送信先の選択]** ダイアログの左ナビゲーションペインに表示されます。
5. 必要に応じて、左ナビゲーションペインから設定する出力先を選択します。
その出力先に対するオプションが表示されます。
6. (オプション) パブリケーションの名前を選択するには、**[指定の名前を使用する]** を選択し、名前を入力するか **[プレースホルダの追加]** リストにあるプレースホルダを選択します。
名前を選択しないと、システムで生成された名前がパブリケーションに割り当てられます。パブリケーションの実行時、各プレースホルダに値が挿入されます。
7. (オプション) **[指定の名前を使用する]** を選択し、パブリケーションに個別の名前を割り当てる複数のドキュメントが含まれている場合、**[ドキュメントごとの指定の名前]** チェックボックスを選択し、各ドキュメントの名前を入力するか、**[プレースホルダの追加]** リストにあるプレースホルダを選択します。
名前を選択しないと、システムで生成された同じ名前が各ドキュメントに割り当てられます。
8. (**[電子メール]** のみ) 電子メール本文に Enterprise の場所へのリンクを埋め込むには、**[メッセージ]** ボックスにカーソルを置き、ボックスの下にある **[プレースホルダの追加]** リストにある **[ビューア]** を選択します。
プレースホルダ **%SL_VIEWER_URL%** が電子メール本文に挿入されます。これは、パブリケーションの実行時にリンクに置換されます。リンクを埋め込むことができない場合、出力先として **[電子メール]** および **[デフォルトの Enterprise の場所]** の両方が選択されていることを確認してください。
9. (**[BI 受信ボックス]** のみ) **[送信形式]** の下で、**[ショートカット]** をクリックしてパブリケーションへのショートカットを作成するか、**[コピー]** をクリックしてパブリケーションのコピーを作成します。
ショートカットを作成できない場合、出力先として **[BI 受信ボックス]** および **[デフォルトの Enterprise の場所]** の両方が選択されていることを確認してください。
10. 複数の出力先を選択している場合、出力先の選択および設定のために、手順 5 ～ 10 を出力先ごとに繰り返します。
11. **[確認]** をクリックします。

30.1.7.1 出力先オプションのスケジュール

オプション	説明
デフォルトの Enterprise の場所	オブジェクトをデフォルトの Enterprise の場所へ送信します。
BI 受信ボックス	オブジェクトをユーザの BI ラウンチパッド受信ボックスへ送信します。
電子メール	オブジェクトをユーザの電子メールへ送信します。
FTP サーバ	オブジェクトを FTP サーバの場所へ送信します。
SFTP サーバ	オブジェクトを SFTP サーバの場所へ送信します。

デフォルトでは、すべての出力先に対して [\[各ユーザにオブジェクトを配信\]](#) チェックボックスがオンになっています。ただし、場合によっては、各ユーザにオブジェクトを配信しないようにする場合もあります。たとえば、3 人の受信者が同一のパーソナライゼーション値を持っていると、パブリケーションインスタンスの同じデータが受信されます。[\[各ユーザにオブジェクトを配信\]](#) チェックボックスをオフにした場合は、1 つのパブリケーションインスタンスが生成され、それが 3 人の受信者すべてに配信されます。[\[各ユーザにオブジェクトを配信\]](#) チェックボックスをオンにした場合は、同じパブリケーションインスタンスが 3 回 (受信者ごとに 1 回ずつ) 配信されます。

パブリケーションを [\[FTP サーバ\]](#)、[\[SFTP サーバ\]](#)、または [\[ファイルシステム\]](#) 出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、[\[各ユーザにオブジェクトを配信\]](#) チェックボックスをオフにすると、処理時間全体を短縮できます。[\[各ユーザにオブジェクトを配信\]](#) をオフにする場合は、出力先の設定時に使用するブレースホルダには、受信者ではなく公開者の情報が入力されます。

30.1.8 定期的なパターンの選択

定期的なスケジュールパターンでは、パブリケーションの実行頻度を決定します。[スケジュール](#) ダイアログボックスで、パブリケーションの定期的なパターンを選択します。

1. 定期的なパターンを設定するパブリケーションを右クリックして、[スケジュール](#) を選択します。
2. [\[スケジュール\]](#) ダイアログボックスで [\[定期\]](#) をクリックします。
3. [\[オブジェクトの実行\]](#) リストで、定期的なスケジュールパターンを選択します。
4. [可能な再試行回数](#) ボックスに、失敗したジョブをサーバが再実行する回数を入力します。
5. [再試行間隔 \(秒単位\)](#) ボックスに、サーバがジョブを再実行する前に待機する秒数を設定します。
6. [スケジュール](#) をクリックします。

パブリケーションは、スケジュールされた時刻に実行されます。

30.1.8.1 定期パターンオプション

オプション	説明
今すぐ	オブジェクトを1回実行します。すぐに開始されます。
1回	<p>指定された開始時間に、オブジェクトを1回だけ実行します。イベントを使用してオブジェクトをスケジュールする場合、開始時間と終了時間の間にイベントが発生すると、オブジェクトは1度だけ実行されます。</p> <p>[開始日時] リストおよび [終了日時] リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
時間単位	<p>指定された時間に、毎時間インスタンスを作成します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎時間指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>[時間 (N)] リストおよび [分 (X)] リストでオブジェクトの実行頻度を選択し、[開始日時] リストおよび [終了日時] リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
日単位	<p>指定された開始時間に、オブジェクトを1日に1回だけ実行します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎日指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>[日数 (N)] ボックスでオブジェクトの実行間隔を入力し、[開始日時] リストおよび [終了日時] リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
週単位	<p>毎週指定された曜日の指定された開始時間に、オブジェクトを実行します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎週指定された曜日の指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>オブジェクトを実行する各曜日のチェックボックスを選択し、[開始日時] リストおよび [終了日時] リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>

オプション	説明
月単位	<p>指定された月間隔で、指定された日の指定された開始時間に、オブジェクトを実行します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、指定された月間隔の指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>[月 (N)] ボックスでオブジェクトの実行間隔を選択し、[開始日時] リストおよび [終了日時] リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
N 日	<p>毎月指定された日の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎月指定された日の指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>オブジェクトの実行開始日時および終了日時、オブジェクトを実行する月の日を入力します。</p>
第 1 月曜日	<p>毎月第 1 月曜日の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。</p> <p>オブジェクトの実行開始時間および実行停止時間を入力します。</p>
月末日	<p>毎月月末の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。</p> <p>オブジェクトの実行開始時間および実行停止時間を入力します。</p>
第 N 週の X 日	<p>毎月指定された週の日の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。</p> <p>オブジェクトの実行開始日時および終了日時、オブジェクトを実行する月の週と週の日を入力します。</p>
カレンダー	<p>指定されたカレンダーの日付の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。</p> <p>オブジェクトの実行開始時間および終了時間を入力し、オブジェクトを実行するカレンダーの日付を選択します。</p>

30.1.9 パブリケーションソースドキュメントのパーソナライズされたプレースホルダの選択

スケジュールダイアログボックスで、パブリケーションのパーソナライズされたプレースホルダを選択します。

パーソナライズされたプレースホルダをパブリケーションインスタンス名に使用する前に、パブリケーションのソースドキュメントで、データをフィルタリングするためのパーソナライゼーションを使用している必要があります。

パブリケーションインスタンスのスケジュール時に、ソースドキュメントの**指定の名前を使用する**フィールドでプレースホルダを使用し、パブリケーション名でテキストとプレースホルダを組み合わせることができます。また、複数のプレースホルダを使用することもできます。

1. プレースホルダを選択するパブリケーションを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**出力先**をクリックします。
3. **[選択した出力先のオプションを表示]**の下で**[指定の名前を使用する]**を選択し、**[プレースホルダの追加]**リストからパブリケーション名に対するプレースホルダを選択します。
選択したプレースホルダは、ドキュメントタイトルの**[指定の名前]**ボックスに表示されます。
4. 個々のドキュメントを追加するには、以下の手順に従います。
 - a. **[ターゲット名]**の下で、**[ドキュメントごとの指定の名前]**を選択します。
 - b. ドキュメントタイトルごとに、**[プレースホルダの追加]**リストからプレースホルダを選択します。
選択したプレースホルダは、各ドキュメントタイトルの**[指定の名前]**ボックスに表示されます。
5. **OK**をクリックします。

パブリケーションに対するパーソナライズの設定が終了したら、パーソナライズされたプレースホルダは**[出力先]**ダイアログボックスの**[プレースホルダの追加]**リストに表示されます。

30.1.10 電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダの選択

スケジュールダイアログボックスで、パブリケーションのパーソナライズされたプレースホルダを選択します。

すべての電子メールフィールドで、テキストとプレースホルダを組み合わせ使用できるほか、複数のプレースホルダを使用できます。電子メール出力先へのパブリケーションをスケジュールする場合、**[差出人]**、**[宛先]**、**[CC]**、**[BCC]**、**[件名]**、**[メッセージ]**、および**[指定の名前を使用する]**フィールドにプレースホルダを使用できます。

1. プレースホルダを選択するパブリケーションを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**出力先**をクリックします。
3. **[出力先]**リストで、**[電子メール]**を選択します。
4. 必要に応じて、プレースホルダを含めて出力先オプションを設定します。
5. **OK**をクリックします。

30.1.11 電子メールへの動的ソースドキュメントのコンテンツの埋め込み

スケジュールダイアログボックスで、パブリケーションのソースドキュメントのコンテンツを埋め込みます。

動的コンテンツドキュメントから、電子メールの本文にコンテンツを埋め込むことができます。Crystal レポートの場合は、レポートのコンテンツを埋め込むことができます。Web Intelligence ドキュメントの場合は、ドキュメント全体または1つのレポートタブを埋め込むことができます。

1. コンテンツを取得するパブリケーションを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**形式**をクリックします。
3. (Crystal レポートのみ) **選択したドキュメントの形式オプション**で **mHTML** チェックボックスを選択します。
4. (Web Intelligence ドキュメントのみ) ドキュメント全体を公開するか、レポートタブの1つを公開するかを選択します。
 - a. **[出力形式]** で、**[mHTML]** チェックボックスを選択します。
 - b. **[出力形式の詳細]** で、**[すべてのレポート]** を選択してドキュメント全体を公開するか、**[1つのレポートを選択]** を選択してリスト内のレポートタブを選択します。
5. ナビゲーション一覧で **[出力先]** をクリックします。
6. **[出力先]** ダイアログボックスの **[送信先の選択]** で、**[電子メール]** チェックボックスを選択します。
電子メールの設定オプションが表示されます。
7. **差出人** ボックスで、名前または電子メールアドレスを入力するか、**ブレースホルダの追加** リストで **電子メール** を選択します。
たとえば、**Robert**、**公開者**、**publisher@sap.com** などを入力できます。名前を入力すると、**Publisher@<EmailServer>** のように、その名前が電子メールサーバに追加されます。
8. **件名** ボックスで、件名を入力するか、ブレースホルダを選択します。
レポートをパーソナライズした場合、パーソナライズされたブレースホルダは **[ブレースホルダの追加]** リストで使用できるようになります。
9. **メッセージ** ボックスに、電子メールの本文に表示するメッセージを入力します。
10. **メッセージ** ボックスに動的コンテンツを埋め込むには、コンテンツを埋め込む **メッセージ** ボックスにカーソルを置いて、**ブレースホルダの追加** リストから **レポート HTML コンテンツ** を選択します。
メッセージ ボックスに、**%SI_DOCUMENT_HTML_CONTENT%** と表示されます。パブリケーションの実行時、動的コンテンツドキュメントのパーソナライズされたコンテンツにブレースホルダが置き換えられます。
11. パブリケーションにその他のソースドキュメントが含まれている場合、**[添付ファイルの追加]** チェックボックスを選択します。
パブリケーションの実行時、パブリケーション内のその他のソースドキュメントは、添付ファイルとして電子メールに追加されます。
12. **OK** をクリックします。

30.1.12 CMC におけるパブリケーション拡張の追加

パブリケーション拡張とは、ビジネスロジックをパブリケーションに適用するコードのライブラリです。パブリケーションで拡張を使用する前に、パブリケーション拡張を追加する必要があります。

パブリケーション拡張を使用する前に、Adaptive Processing Server を実行するすべてのコンピュータで拡張をデプロイしてから、Adaptive Processing Server および公開サービスをホストするその他のサーバ再起動します。サーバの場所は、オペレーティングシステムによって変わります。

- Windows の場合、サーバの場所は `<InstallDir>\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\java\lib` です。
- Unix の場合、サーバの場所は `<InstallDir>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/` です。

パブリケーション拡張は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで追加できます。(BI ラウンチパッドにおけるパブリケーションの設計時には追加できません)

パブリケーション拡張の実行順序を指定するには、[[パブリケーション配信前](#)] リストまたは [[パブリケーション配信後](#)] リストの下にある [[上へ移動](#)] または [[下へ移動](#)] をクリックします。パブリケーション拡張の詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイドを参照してください。

1. CMC で [フォルダ](#) 管理エリアに移動し、パブリケーション拡張を追加するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションを右クリックし、[プロパティ](#) を選択します。
3. [プロパティ](#) ダイアログボックスのナビゲーションリストで [追加オプション](#) を展開し、[パブリケーション拡張](#) をクリックします。
4. [パブリケーション拡張名](#) ボックスにパブリケーション拡張の名前を入力します。
5. [クラス名](#) ボックスに、拡張の完全修飾クラス名を入力します。
6. (オプション) [パラメータ](#) ボックスに、パラメータ名を入力します。
7. 処理後かつ配信前に拡張を使用するには、[[パブリケーション配信前](#)] リストの上部にある [[追加](#)] ボタンをクリックします。
拡張が [[パブリケーション配信前](#)] リストに追加されます。
8. 配信後に拡張を使用するには、[[パブリケーション配信後](#)] リストの上部にある [[追加](#)] ボタンをクリックします。
拡張が [[パブリケーション配信後](#)] リストに追加されます。
9. [保存](#) をクリックします。

30.1.13 CMC におけるパブリケーションジョブに対する電子メール通知の有効化

パブリケーションジョブの実行後に電子メールのメッセージを受信する必要がある場合は、電子メール通知を有効化します。

電子メール通知を有効化する前に、Adaptive Job Server が適切に設定されていることを確認します。

電子メール通知は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで有効化できます。(BI ラウンチパッドにおけるパブリケーションの設計時には有効化できません)

1. CMC で [フォルダ](#) 管理エリアに移動し、電子メール通知を有効化するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、[スケジュール](#) を選択します。

3. [スケジュール] ダイアログボックスのナビゲーションリストで[通知]をクリックし、[電子メール通知: 無効]を展開します。
4. 成功したパブリケーションジョブの場合、デフォルトの受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、**ジョブの実行に成功しました**チェックボックスを選択し、*Job Server* のデフォルト値を使用するを選択して、Adaptive Job Server でデフォルトアドレスを使用します。
5. 成功したパブリケーションジョブの場合、指定した受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、**ジョブの実行に成功しました**チェックボックスを選択し、**ここで使用する値を設定する**を選択して、以下の操作を実行します。
 - a. **差出人**ボックスに、通知の送信元の電子メールアドレスまたは名前を入力します。
 - b. **宛先**ボックスに、通知を受信する必要がある各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - c. **CC** ボックスに、通知でコピーされる必要がある追加の各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - d. **件名**ボックスに、通知の件名を入力します。
 - e. **メッセージ**ボックスに、通知に添付するメッセージを入力します。
6. 失敗したパブリケーションジョブの場合、デフォルトの受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、**ジョブを実行できませんでした**チェックボックスを選択し、*Job Server* のデフォルト値を使用するを選択して、Adaptive Job Server でデフォルトアドレスを使用します。
7. 失敗したパブリケーションジョブの場合、指定した受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、**ジョブを実行できませんでした**チェックボックスを選択し、**ここで使用する値を設定する**を選択して、以下の操作を実行します。
 - a. **差出人**ボックスに、通知の送信元の電子メールアドレスまたは名前を入力します。
 - b. **宛先**ボックスに、通知を受信する必要がある各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - c. **CC** ボックスに、通知でコピーされる必要がある追加の各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - d. **件名**ボックスに、通知の件名を入力します。
 - e. **メッセージ**ボックスに、通知に添付するメッセージを入力します。
8. **スケジュール**をクリックします。

30.1.14 CMC におけるパブリケーションジョブに対する監査通知の有効化

成功または失敗したパブリケーションジョブを監査する場合に、監査通知を有効化します。


監査通知は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで有効化できます。(BI ラウンチパッドにおけるパブリケーションの設計時には有効化できません) 監査の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

1. CMC で**フォルダ**管理エリアに移動し、監査通知を有効化するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
3. [スケジュール] ダイアログボックスで、[追加オプション]を展開し、[通知]をクリックし、[監査通知: 無効]を展開します。
4. 成功したパブリケーションジョブを監査する場合は、**ジョブの実行に成功しました**を選択します。
5. 失敗したパブリケーションジョブを監査する場合は、**ジョブを実行できませんでした**を選択します。
6. **スケジュール**をクリックします。

30.1.15 パブリケーションを起動するイベントの選択

イベントベースのスケジュールでは、パブリケーションを実行するタイミングに対して追加の制御を行うことができます。イベントを使用してパブリケーションをトリガするか、パブリケーションジョブを使用してイベントをトリガします。

イベントの詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームユーザガイドを参照してください。

1. イベントを選択するパブリケーションの横にある  アイコンをクリックして、[スケジュール] を選択します。
2. [スケジュール] ページで、[全般] を展開し、ナビゲーションリストで [イベント] を選択します。
3. パブリケーションに対してファイルベースおよびカスタムイベントを指定するには、[待機するイベント] フィールドをクリックします。
4. [イベントの選択] ダイアログで、イベントの横にあるチェックボックスを選択し、[選択した項目] リストに移動して [追加] をクリックします。
イベントにより、パブリケーションジョブが起動されます。


④ 注記

いずれかのイベントが発生した後にパブリケーションのスケジュールをトリガする場合は、**任意のイベント** チェックボックスを選択します。

5. パブリケーションのスケジュールイベントを指定するには、[完了時に発生させるイベント] フィールドをクリックします。
6. [イベントの選択] ダイアログで、イベントの横にあるチェックボックスを選択し、[選択したアイテム] リストに移動して [追加] をクリックします。
パブリケーションジョブが実行されるとイベントが発生します。
7. **スケジュール** をクリックします。

30.1.16 パブリケーションでのサーバグループの選択

フェデレーションのサイトをまたいでパブリケーションをスケジュールすることはできません。サーバグループの詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

1. サーバグループを選択するパブリケーションの横にある  アイコンをクリックして、[スケジュール] を選択します。
2. [スケジュール] ページで、[全般] を展開し、ナビゲーションリストで [サーバグループのスケジュール] を選択します。
3. 元のサイトでパブリケーションジョブを実行する場合、[元のサイトで実行] トグルボタンを有効にします。
4. サーバグループオプションを選択し、[スケジュール] をクリックします。

30.1.17 CMC におけるプロファイルの解決方法の選択

1. CMC で **フォルダ** 管理エリアに移動し、プロファイルの解決方法を選択するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、**[プロパティ]** を選択します。
3. **[プロパティ]** ダイアログボックスで、ナビゲーションリストの **[プロパティ]** オプションを展開し、**[詳細]** をクリックします。
4. **プロファイルの解決方法** で、次のいずれかのアクションを実行します。
 - 複数のユーザグループのプロファイルを別々のドキュメントに適用する場合、**[マージしない]** を選択します。
 - 複数のユーザグループのプロファイルを同じドキュメントに適用する場合、**[マージ]** を選択します。
5. **[保存して閉じる]** をクリックします。

30.1.18 CMC におけるレポートバースト方法の選択

1. CMC で、**[フォルダ]** 管理エリアに移動し、プロファイルの解決方法を選択するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、**[プロパティ]** を選択します。
3. **[プロパティ]** ダイアログボックスで、ナビゲーションリストの **[プロパティ]** オプションを展開し、**[詳細]** をクリックします。
4. **[レポートバースト方法]** の下で、レポートバースト方法を選択します。
5. **[保存して閉じる]** をクリックします。

30.2 Crystal レポートのデザインタスク

30.2.1 パラメータ値を使用した Crystal レポートのパーソナライズ

スケジュール ダイアログボックスで、Crystal レポートをパーソナライズできます。

- Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。
 - このタスクを実行するには、Crystal レポートにパラメータが含まれている必要があります。
1. パーソナライズする Crystal レポートを右クリックして、**スケジュール** を選択します。
 2. **スケジュール** ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**パーソナライゼーション** をクリックします。
 3. **[パラメータ]** でパラメータ値を検討し、変更が必要な値がないか確認します。
 4. デフォルト値を変更する場合は、デフォルトパラメータ値の横にある **値の編集** ボタンをクリックし、パラメータ値を選択または入力して **OK** をクリックします。
 5. 次の操作のいずれかを実行します。

- デフォルトパラメータのパーソナライゼーション値を Enterprise 受信者のプロファイル値で上書きする場合は、[Enterprise 受信者のマッピング] 列で、一覧からプロファイルを選択します。
このプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。
- デフォルトパラメータ値のみを使用してレポートをパーソナライズする場合は、[Enterprise 受信者のマッピング] 列で [すべての受信者のデフォルト値] を選択します。

[Enterprise 受信者のマッピング] 列は、Enterprise 受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。

6. デフォルトパラメータのパーソナライゼーション値を動的受信者のパーソナライゼーション値で上書きする場合は、[動的受信者のマッピング] 列で、一覧から動的受信者ソースを選択します。

[動的受信者のマッピング] 列は、動的受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。

デフォルトパラメータ値を使用してレポートをパーソナライズする場合は、[動的受信者のマッピング] 列で [指定なし] を選択します。

7. OK をクリックします。

30.2.2 フィールドのフィルタリングによる Crystal レポートのパーソナライズ

スケジュールダイアログボックスで、Crystal レポートをパーソナライズします。

Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。

フィルタを使用すると、ViewTime 選択式がレポートに追加され、データがフィルタリングされます。この式は、パブリケーションが実行され、レポートに保存されていない場合に適用されます。Crystal レポートでは、複数のフィールドをフィルタリングできます。静的値のプロファイルでは、Crystal レポートの文字列フィールドのみをフィルタリングできます。他の種類のフィールドをフィルタ処理する場合は、式のプロファイル値を使用します。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。

この機能は、.rptxr 形式の Crystal レポートでは使用できません。

1. パーソナライズする Crystal レポートを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[パーソナライゼーション](#)をクリックします。
3. [ローカルプロファイル] の [レポートフィールド] 列で、一覧から Crystal レポートフィールドを選択します。
使用可能なフィールドの一覧には、メインレポートおよび非オンデマンド型サブレポートのすべてのデータベースフィールドおよび繰り返し式が含まれています。
4. [Enterprise 受信者のマッピング] 列で、一覧からプロファイルを選択します。
このプロファイルは、Enterprise 受信者に対して定義されたレポートをプロファイル値にマップします。このプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。プロファイルの追加が必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

[Enterprise 受信者のマッピング] 列は、Enterprise 受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。

5. [動的受信者のマッピング] 列で、一覧から動的受信者のソースを選択します。

レポートフィールドは、対応する値を含む動的受信者ソースの列にマッピングされます。

[動的受信者のマッピング] 列は、動的受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。

6. フィルタリング対象の各レポートフィールドに対し、手順 2 ～ 5 を繰り返します。
7. **OK** をクリックします。

30.2.3 Crystal レポートのパブリケーション形式の選択

Crystal レポートのパブリケーション形式は、[パブリケーションプロパティ] > [レポート機能] > [形式] で選択します。

1 つの Crystal レポートに対して複数のパブリケーション形式を選択して設定することができます。形式を選択すると、使用可能な形式オプションが表示されます。[Crystal Reports] および [Crystal Reports (RPT)] などの一部のオプションでは、形式オプションが表示されず、デフォルトのソースドキュメント形式が適用されます。

1. パブリケーション形式を選択する Crystal レポートを右クリックして、[スケジュール] を選択します。
2. [スケジュール] ダイアログボックスで [形式] を選択します。
3. [選択したドキュメントの形式オプション] で、Crystal レポートを公開する形式を選択します。
選択した形式のオプションが表示されます。
4. 必要に応じて書式オプションを設定します。
5. [レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスが使用可能な場合は、以下のいずれかを行います。
 - ソースドキュメントで定義されているデフォルトのエクスポートオプションを使用する場合は、チェックボックスをオンにします。
 - 選択した形式でのエクスポートオプションを設定する場合は、チェックボックスをオフにして、表示されるオプションを設定します。
6. Crystal レポートを公開する各形式に対し、手順 3 ～ 5 を繰り返します。
7. **OK** をクリックします。

パブリケーションの Crystal レポートごとに、このタスクを繰り返します。

30.2.3.1 Crystal レポートの書式設定オプション

書式設定オプションとして [\[タブ区切りテキスト \(TTX\)\]](#) を選択する場合は、追加のオプションは表示されません。[\[PDF\]](#) オプションは、PDF ファイルとして公開されるソースドキュメントに適用されます。

Microsoft Excel(97-2003)

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を Excel ファイルとして公開する場合は、[すべて] を選択します。特定のレポートページを公開するには、[ページ] を選択し、[開始] ボックスに最初のページ番号を入力してから、[終了] ボックスに最後のページ番号を入力します。
[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none">レポートのオブジェクトを基準にして列幅を定義するには、[列幅を次のオブジェクトに合わせる] を選択して、[レポート全体]、[レポートヘッダ]、[ページヘッダ]、[グループヘッダ #]、[詳細]、[グループフッタ #]、[ページフッタ]、または [レポートフッタ] の一覧からオプションを選択します。すべてのレポート列に対して一定の幅を定義する場合は、[列幅を一定にする (ポイント単位)] を選択して、ボックスに数値を入力します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	Excel ファイルでヘッダとフッタを表示する頻度を選択する場合は、このチェックボックスを選択して、 [なし] 、 [レポートごとに1回] 、または [各ページ] の一覧からオプションを選択します。
ページごとにページ区切りを作成する	このチェックボックスを選択すると、レポートのページ区切りを反映するページ区切りを作成できます。
日付の値を文字列に変換する	このチェックボックスを選択すると、データ値をテキスト文字列に変換できます。
グリッドラインを表示する	このチェックボックスを選択すると、Excel ファイルにグリッドラインを表示できます。

Microsoft Excel (97-2003) (データのみ)

[\[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用\]](#) チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none"> レポートのオブジェクトを基準にして列幅を定義するには、[列幅を次のオブジェクトに合わせる]を選択して、[レポート全体]、[レポートヘッダ]、[ページヘッダ]、[グループヘッダ #]、[詳細]、[グループフッタ #]、[ページフッタ]、または[レポートフッタ]の一覧からオプションを選択します。 すべてのレポート列に対して一定の幅を定義する場合は、[列幅を一定にする (ポイント単位)]を選択して、ボックスに数値を入力します。
オブジェクトの書式設定をエクスポートする	レポートのオブジェクトの書式設定を維持するには、このチェックボックスを選択します。
画像をエクスポートする	Excel ファイルでレポート画像を公開するには、このチェックボックスを選択します。
集計にワークシートの関数を使用する	レポートの集計を使用して Excel ファイルのワークシート関数を作成するには、このチェックボックスを選択します。
オブジェクトの相対位置を維持する	レポートオブジェクトの相対位置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
列の配置を維持する	レポートの列の配置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	Excel ファイルでヘッダとフッタを表示する頻度を選択する場合は、このチェックボックスを選択して、[なし]、[レポートごとに1回]、または[各ページ]の一覧からオプションを選択します。
ページヘッダを簡略化する	レポートのページヘッダを簡略化する場合は、このチェックボックスを選択します。
グループのアウトラインを表示する	レポートのグループアウトラインを表示するには、このチェックボックスを選択します。

Microsoft Excel ワークブックデータのみ

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none"> レポートのオブジェクトを基準にして列幅を定義するには、[列幅を次のオブジェクトに合わせる]を選択して、[レポート全体]、[レポートヘッダ]、[ページヘッダ]、[グループヘッダ #]、[詳細]、[グループフッタ #]、[ページフッタ]、または[レポートフッタ]の一覧からオプションを選択します。 すべてのレポート列に対して一定の幅を定義する場合は、[列幅を一定にする (ポイント単位)]を選択して、ボックスに数値を入力します。
オブジェクトの書式設定をエクスポートする	レポートのオブジェクトの書式設定を維持するには、このチェックボックスを選択します。
画像をエクスポートする	Excel ファイルでレポート画像を公開するには、このチェックボックスを選択します。
集計にワークシートの関数を使用する	レポートの集計を使用して Excel ファイルのワークシート関数を作成するには、このチェックボックスを選択します。
オブジェクトの相対位置を維持する	レポートオブジェクトの相対位置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
列の配置を維持する	レポートの列の配置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	Excel ファイルでヘッダとフッタを表示する頻度を選択する場合は、このチェックボックスを選択して、[なし]、[レポートごとに1回]、または[各ページ]の一覧からオプションを選択します。
ページヘッダを簡略化する	レポートのページヘッダを簡略化する場合は、このチェックボックスを選択します。
グループのアウトラインを表示する	レポートのグループアウトラインを表示するには、このチェックボックスを選択します。

Microsoft Word(97-2003)

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を Word ファイルとして公開する場合は、[すべて]を選択します。特定のレポートページを公開するには、[ページ]を選択し、[開始] ボックスに最初のページ番号を入力してから、[終了] ボックスに最後のページ番号を入力します。

PDF

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を PDF ファイルとして公開する場合は、[すべて]を選択します。特定のレポートページを公開するには、[ページ]を選択し、[開始] ボックスに最初のページ番号を入力してから、[終了] ボックスに最後のページ番号を入力します。
[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
グループツリーからブックマークを作成	グループツリー構造に基づいて、生成された PDF ファイルにブックマークを作成する場合は、このチェックボックスを選択します。

リッチテキスト形式 (RTF)

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を RTF ファイルとして公開する場合は、[すべて]を選択します。特定のレポートページを公開するには、[ページ]を選択し、[開始] ボックスに最初のページ番号を入力してから、[終了] ボックスに最後のページ番号を入力します。

Microsoft Word - 編集可能 (RTF)

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を Word ファイルとして公開する場合は、[すべて]を選択します。特定のレポートページを公開するには、[ページ]を選択し、[開始] ボックスに最初のページ番号を入力してから、[終了] ボックスに最後のページ番号を入力します。
[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
レポートのページごとに改ページする	このチェックボックスを選択すると、レポートのページ区切りを反映するページ区切りを作成できます。

テキスト

[\[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用\]](#) チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
インチあたりの文字数	テキストファイルで1インチあたりに表示する文字数を入力します。推奨される範囲は8～16です。

ページ区切り付きテキスト

[\[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用\]](#) チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
1 ページあたりの行数	ページ区切り付きテキストファイルで1ページあたりに表示する行数を入力します。
インチあたりの文字数	ページ区切り付きテキストファイルで1インチあたりに表示する文字数を入力します。推奨される範囲は8～16です。

カンマ区切り値 (CSV)

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
区切り文字	区切り文字として使用する文字を入力します。
区切り	値の区切り文字として使用する文字を入力するか、 <input type="checkbox"/> [タブ] チェックボックスを選択してタブで値を区切ります。
モード	[標準モード] (デフォルト) または [レガシーモード] を選択します。標準モードでは、CSV 出力にレポートのページ、グループヘッダ、およびグループフッタを表示する方法を制御できます。
レポートセクションとページセクション	<ul style="list-style-type: none">レポートセクションとページセクションをエクスポートする場合は、[エクスポート] を選択します。レポートセクションとページセクションをエクスポートしない場合は、[エクスポートしない] を選択します。レポートセクションとページセクションを切り離す場合は、[レポート/ページセクションを切り離す] チェックボックスを選択します。
グループセクション	<ul style="list-style-type: none">グループセクションをエクスポートする場合は、[エクスポート] を選択します。グループセクションをエクスポートしない場合は、[エクスポートしない] を選択します。グループセクションを切り離す場合は、[レポート/ページセクションを切り離す] チェックボックスを選択します。

XML

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
XML エクスポート形式	XML 形式を指定するには、一覧からオプションを選択します。

30.2.4 (オプション) パブリケーションの Crystal レポートでの印刷オプションの選択

[パブリケーションプロパティ] > [レポート機能] > [出力設定] で、Crystal レポートの印刷オプションを選択できます。

デフォルトプリンタの印刷オプションを設定する前に、以下の条件が満たされている必要があります。


- プリンタを適切に設置および設定されている。
- Crystal Reports Job Server が、指定したプリンタにアクセスする権限を持つアカウントによって実行されている。
詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

Crystal Reports Job Server のデフォルトプリンタまたはその他のプリンタを使用して、パブリケーションを実行するたびに Crystal レポート形式のインスタンスを印刷できます。BI プラットフォームは、パブリケーションがパーソナライズされた後、それが配信される前にインスタンスを印刷します。

1. 印刷オプションを設定する Crystal レポートを右クリックして、[スケジュール] を選択します。
2. [スケジュール] ダイアログボックスで、[出力設定] をクリックします。
3. [ドキュメント] で、パブリケーションの実行時に印刷する Crystal レポートを選択します。
4. [スケジュール時に Crystal レポートを印刷する] チェックボックスを選択します。
Crystal レポートの印刷オプションが表示されます。
5. [通常使用するプリンタ] を選択して Job Server のデフォルトプリンタを使用するか、[プリンタの指定] を選択して、プリンタのパスおよび名前を選択します。
 - Job Server が Windows で実行されている場合には、**プリンタを指定する**ボックスに `¥<PrintServer>¥<PrinterName>` と入力します。
`<PrintServer>` には使用しているプリンタサーバの名前を入力し、`<PrinterName>` には使用しているプリンタの名前を入力してください。
 - Job Server が Unix で実行されている場合は、Unix が表示されている (非表示でない) ことを確認し、通常使用する印刷コマンドを **プリンタを指定**ボックスに入力します。
たとえば、`lp -d <PrinterName>` と入力します。
6. **部数**ボックスに、印刷する部数を入力します。
7. [ページ範囲] で、[すべて] を選択してパブリケーションのすべてのページを印刷するか、[ページ] を選択して、印刷するページ範囲を入力します。
8. (オプション) [部単位で印刷するオプションを設定] リストで、[部単位で印刷]、[ページ単位で印刷]、または [プリンタのデフォルト値を使用] を選択します。
9. (オプション) [ページの拡大縮小] リストで、[拡大して合わせる]、[縮小のみで合わせる]、または [縮小拡大しない] を選択します。
10. (オプション) レポートコンテンツをページ上で中央揃えにするには、[ページの中央揃え] チェックボックスをオンにします。
11. (オプション) 幅の広い Crystal レポートを 1 ページに印刷するには、[横方向のページを 1 ページに合わせる] チェックボックスをオンにします。
12. **スケジュール**をクリックします。


30.2.5 (オプション) パブリケーションでの Crystal Reports レポートの受信者配信ルールを選択

受信者配信ルールでは、処理およびパーソナライゼーションの後、各受信者にパブリケーションを配信するかどうかを決定します。パブリケーションの作成後、パブリケーションを開いてその配信ルールを変更できます。

1. 配信ルールを選択するパブリケーションの横にある  アイコンをクリックして、[プロパティ] を選択します。
2. [パブリケーションプロパティ] ウィンドウで、[レポート機能] を展開し、ナビゲーションリストで [配信ルール] をクリックします。
3. [受信者配信ルール] で、[条件に一致するときに個々のドキュメントを配信する] または [すべての条件が一致する場合のみすべてのドキュメントを配信する] を選択します。
4. 各ドキュメントの横にある [条件] 列で、パブリケーションを配信するために満たされる条件を選択します。
5. [保存して終了] をクリックします。

30.2.6 (オプション) パブリケーションのグローバル配信ルールを選択

グローバル配信ルールでは、パブリケーションを処理してすべての受信者に配信できるかどうかを決定します。グローバル配信ルールは、Crystal Reports レポートに基づいて BI プラットフォームの任意のパブリケーションで設定できます。

1. 配信ルールを選択するパブリケーションの横にある  アイコンをクリックして、[プロパティ] を選択します。
2. [パブリケーションプロパティ] ページで、[レポート機能] を展開し、ナビゲーションリストで [配信ルール] をクリックします。
3. [グローバル配信ルール] で、[参照] をクリックします。
[ドキュメントの選択] ダイアログボックスが表示され、グローバル配信ルールのソースとして Crystal Reports レポートを選択できます。

① 注記

Crystal Reports レポートにはアラートが含まれている必要があります。

4. Crystal Reports レポートを見つけて選択し、[OK] をクリックします。
5. [条件] リストで、処理して配信するパブリケーションに適用可能な条件を選択します。
6. [保存して終了] をクリックします。

30.2.7 (オプション) Crystal レポートからの結合 PDF ファイルの書式設定

結合 PDF ファイルを書式設定する前に

- Crystal レポートを結合 PDF ファイルに含めるには、レポートにタイトルが必要です。レポートのタイトルを設定するには、レポートを SAP Crystal Reports で開き、**ファイル** > **プロパティ** を選択し、**概要** タブの **タイトル** ボックスにレポートのタイトルを入力します。レポートを保存し、リポジトリに再エクスポートします。
- BI ラウンチパッドでは、**プロパティ** ページの **ソースドキュメント** に、結合する Crystal レポートおよび PDF ファイルが正しい順序で表示されている必要があります。
- BI ラウンチパッドでパブリケーションの **プロパティ** ページで、**レポート機能** を展開します。
- **形式** で、マージされた PDF ファイルに含める各 Crystal レポートの形式として **PDF** チェックボックスが選択されている必要があります。
- BI ラウンチパッドでは、**スケジュール** ページの **出力先** で、結合 PDF ファイルを送信する各出力先に対し、**エクスポートされた PDF をマージ** チェックボックスが選択されている必要があります。

マージされた PDF にナビゲーションが容易になる詳細なブックマークが含まれるようにします。一覧表示された Crystal レポートごとに以下を行います。

- **形式** 領域の **ドキュメント** リストからレポートを選択します。
- **レポートで指定されたエクスポートオプションを使用** チェックボックスをクリアします。
- **グループツリーからブックマークを作成** チェックボックスを選択します。

マージされた PDF ファイルを書式設定するには、以下の手順を実行します。

1. マージされた PDF ファイルを書式設定するパブリケーションの横にある ******* アイコンをクリックして、**プロパティ** を選択します。
2. **プロパティ** ページで、**レポート機能** を展開し、ナビゲーションリストで **結合 PDF オプション** をクリックします。
3. 結合 PDF ファイルの目次を作成します。
 - a. **目次の作成** トグルボタンを有効にします。
目次の書式設定オプションが表示されます。
 - b. **タイトル** ボックスに、目次のタイトルを入力します。
 - c. **タイトルのフォント** 一覧で、目次のタイトルのフォント、フォントサイズ (ポイント単位)、およびフォントの色を選択します。
 - d. **アイテムのフォント** 一覧で、目次のアイテムのフォント、フォントサイズ (ポイント単位)、およびフォントの色を選択します。
4. 結合 PDF ファイルのページ番号の書式設定を行います。
 - a. **実行中のページ番号を適用** トグルボタンを有効にします。
ページ番号の書式設定オプションが表示されます。
 - b. **数値の書式設定** ボックスにページ番号の書式を入力します。
デフォルトでは、この形式は Page &p of &P に設定されています。この書式は変更できます。ただし、現在のページ番号のプレースホルダには &p、ページ総数のプレースホルダには &P を使用する必要があります。
 - c. **数値の場所** 一覧で、結合 PDF ファイルのページ番号の向きを選択します。
 - d. **数値のフォント** 一覧で、ページ番号のフォント、フォントサイズ (ポイント単位)、フォントの色を選択します。
 - e. 目次にページ番号を含める場合は、**目次ページにページ番号を適用** チェックボックスをオンにします。
5. 受信者のログオン認証情報と受信者アクションに関する許可を設定します。
 - a. **制限の設定** トグルボタンを有効にします。

- b. **ユーザパスワード**ボックスに、結合 PDF ファイルを受信者が表示する場合に必要なパスワードを入力します。
 - c. **所有者パスワード**ボックスに、結合 PDF ファイルを受信者が編集する場合に必要なパスワードを入力します。
 - d. 受信者が PDF ファイルを印刷できるようにするには、**[印刷を許可]** チェックボックスをオンにします。
 - e. 受信者が PDF ファイルを変更できるようにするには、**[コンテンツの変更を許可]** チェックボックスをオンにします。
 - f. 受信者が PDF コンテンツをコピーして貼り付けることができるようにするには、**[コピーと貼り付けを許可]** チェックボックスをオンにします。
 - g. 受信者が PDF ファイルの注釈を変更できるようにするには、**[注釈の変更を許可]** チェックボックスをオンにします。
6. **[保存]** をクリックします。

30.2.8 Crystal Reports レポートのデータベースログオン情報の設定

受信者がデータベースにログオンしたり、Crystal Reports レポートのデータを最新表示したりする場合に使用するデータベースログオン情報を設定できます。

Crystal Reports レポートのデータベース設定が正しいことを確認するか、レポートのデフォルトのデータベース設定を変更します。CMC の **フォルダ** で Crystal レポートを選択し、**管理** ▶ **デフォルト設定** ▶ **データベース設定** ▶ を選択し、データベース情報を確認するか、新しい情報を入力します。

① 注記

既存のスケジュールまたはパブリケーションの分割を防ぐため、CMC データベース設定の変更は、次回の Crystal Reports レポートをスケジュールまたは公開したときにのみ表示されます。

1. データベースログオン情報を設定する対象のパブリケーションの横にある *** アイコンをクリックして、**[スケジュール]** または **[プロパティ]** を選択します。
2. **[スケジュール]** または **[プロパティ]** ページで、**[レポート機能]** を展開し、ナビゲーションリストで **[データベースログオン]** をクリックします。
3. **[データソース]** リストで、データソースを選択します。
データソースのデータベース情報が **[詳細]** セクションに表示されます。
4. **[データベースサーバ]** フィールドと **[データベース]** フィールドの情報が正しいことを確認します。
5. **[ユーザ]** フィールドに、受信者がログオンに使用するユーザ名を入力します。
6. **[パスワード]** フィールドに、受信者がログオンに使用するパスワードを入力します。
7. **[スケジュール]** をクリックします (または **[プロパティ]** ページで **[保存]** をクリックします)。

また、Crystal Reports レポートが内部的に参照するデータソース情報を変更することもできます。SAP Crystal Reports で Crystal Reports レポートを開き、**データベース** ▶ **データソースの保存場所の設定** ▶ を選択します。接続を選択するか、**[データソースの保存場所の設定]** ダイアログボックスで新しい接続を作成します。

30.3 Web Intelligence ドキュメントのデザインタスク

30.3.1 Web Intelligence ドキュメントのパブリケーション形式の選択

パブリケーションの各動的コンテンツソース Web Intelligence ドキュメントのパブリケーション形式を選択する必要があります。

1. パブリケーション形式を指定する Web Intelligence ドキュメントを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[形式](#)をクリックします。
3. [出力形式](#)で、Web Intelligence ドキュメントを公開する形式の横にあるチェックボックスを選択します。
 - [Web Intelligence](#)
 - [Microsoft Excel](#)
 - [Adobe Acrobat](#)
 - [mHTML](#)
4. [\[カンマ区切り値 \(CSV\)\]](#) を選択した場合、[\[形式オプションと設定\]](#) で以下のアクションを実行します。
 - a. [\[テキスト修飾子\]](#) リストで、テキスト修飾子を選択します。
 - b. [\[列区切り文字\]](#) リストで、列区切り文字を選択します。
 - c. [\[文字セット\]](#) リストで、文字セットを選択します。
 - d. 新しい文字セットを入力する場合、[新しい文字セットの入力](#)チェックボックスを選択し、ボックスに文字セットを入力します。
 - e. 指定した設定をデフォルトとして使用する場合、[\[デフォルト値として設定\]](#) チェックボックスを選択します。
 - f. 各データソースに対してカンマ区切り値を生成する場合、[\[データプロバイダごとに個別の CSV を生成する\]](#) チェックボックスを選択します。
5. ドキュメントを公開する各形式に対し、手順 3～4 を繰り返します。
6. [OK](#) をクリックします。

30.3.2 グローバルプロファイルターゲットを使用する Web Intelligence ドキュメントのパーソナライゼーション

グローバルプロファイルターゲットを使用してフィルタ処理することにより、Enterprise 受信者向けの Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズできます。

- Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。プロファイルがプラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。
- Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズする前に、プロファイルにグローバルプロファイルターゲットが含まれることを確認します。

グローバルプロファイルの下でパーソナライゼーションを定義する場合は、[フィルタ](#)の下でのパーソナライゼーションオプションを設定する必要はありません。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

1. パーソナライズする Web Intelligence ドキュメントを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[パーソナライゼーション](#)をクリックします。
3. [[グローバルプロファイル](#)] の下にある [[Enterprise 受信者のマッピング](#)] 列で、リスト内のプロファイルを選択します。

このプロファイルにより、ドキュメントが、Enterprise 受信者でフィルタリングされたユニバースフィールド (グローバルプロファイルターゲット) にマップされます。

4. [OK](#) をクリックします。

30.3.3 フィールドのフィルタリングによる Web Intelligence ドキュメントのパーソナライズ

データのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。このプロファイルがプラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。

静的な値のプロファイルは、ソースドキュメントの文字列フィールドのみをフィルタできます。他の種類のフィールドをフィルタ処理する場合は、式のプロファイル値を使用します。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

Web Intelligence ドキュメントを .wid 形式にスケジュールおよび公開すると、.wid ファイルが生成されます。.wid ファイルのフィルタは、適切なセキュリティ権限を持つ受信者であれば削除することができます。.wid ファイルが受信者または出力先に送信される場合は、フィルタは慎重に使用してください。たとえば、Web Intelligence ドキュメントをフィルタして受信者が参照できる情報を制限し、公開された .wid ファイルを受信者に送信した場合、ドキュメントを編集するセキュリティ権限を持つ受信者はフィルタを削除または更新して、表示されていないデータにアクセスすることができます。

1. パーソナライズする Web Intelligence ドキュメントを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[パーソナライゼーション](#)をクリックします。
3. [[ローカルプロファイル](#)] の下で、[[タイトル](#)] 列のプロファイルごとに、[[レポートフィールド](#)] 列を選択します。

このプロファイルは、Enterprise 受信者向けにレポートフィールドをプロファイル値にマップします。

4. [[ローカルプロファイル](#)] の下にある [[Enterprise 受信者のマッピング](#)] 列で、リスト内のプロファイルを選択します。

このプロファイルにより、ドキュメントが、Enterprise 受信者でフィルタリングされたユニバースフィールド (グローバルプロファイルターゲット) にマップされます。

5. [[動的受信者のマッピング](#)] 列で、リスト内のプロファイルを選択します。
ソースドキュメント内のフィールドは、動的受信者ソース内の対応する値を含む列にマップされます。
6. フィルタする各フィールドに対し、手順 3～5 を繰り返します。
7. [OK](#) をクリックします。

30.3.4 オブジェクトに対するパラメータ (プロンプト) 値の編集

コンテンツオブジェクトでデフォルトパラメータ (プロンプト) 値を使用しない場合は、値を編集することができます。

パラメータ (プロンプト) では、情報の入力が必要されます。レポートオブジェクトでは、入力した情報によってレポートに表示されるデータが決まります。たとえば、営業で使用するレポートでは、地域の選択を求めるパラメータが表示されます。地域が選択されると、選択された地域についてのみ結果が表示されます。

1. [ドキュメント] タブでパラメータ (プロンプト) 値を編集するオブジェクトを右クリックして、[スケジュール] を選択します。
2. [スケジュール] ページで、[レポート機能] を展開し、ナビゲーションリストで [プロンプト] をクリックします。

パラメータ (プロンプト) オプションは、システム管理者がパラメータまたはプロンプトを設定した方法に応じて、オブジェクトごとに異なります。たとえば、プログラムオブジェクトは [引数] ボックスに表示されることがあります。

[プロンプト] オプションを使用できない場合、コンテンツオブジェクトにパラメータまたはプロンプトが含まれません。

3. (Crystal Reports レポートのみ) [プロンプト] 領域で、[値の編集...] をクリックし、パラメータ値を編集します。
4. (SAP BEx クエリに基づく Web Intelligence ドキュメントのみ) [プロンプト] 領域で、[変更] をクリックしてプロンプト値を編集するか、[クリア] をクリックして値を削除します。

Web Intelligence ドキュメントでは、パラメータはプロンプトと呼ばれます。スケジュールされたドキュメントが SAP Business Explorer (SAP BEx) クエリに基づいて実行されると、プロンプトの値を SAP Business Warehouse (SAP BW) データソース変数によって固定するか取得することができます。プロンプトには、SAP BW データソースの必須変数を含めることができます。

SAP BW データソースは、プロンプトに対して入力された値を処理する必要があります。データソースが値を処理できない場合、ドキュメント実行は失敗します。たとえば、SAP BW Exit またはカスタム Exit 変数がプロンプトで動的変数として頻繁に使用されます。

クリアボタンを使用できない場合、管理者が `<InstallDir>\<WebAppServer>\webapps\boe\web-inf\config\custom\AnalyticalReporting.properties` ファイルで `bex.dynamic_variable.schedule=true` を設定することで、このボタンを有効にできます。手順については、Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

5. [スケジュール] をクリックします。



30.4 デザイン後タスク

30.4.1 パブリケーションのテスト

BI ランチパッドのテストモードを使用し、受信者にパブリケーションを送信する前に自分自身に送信することができます。

パブリケーションをテストし、受信者として自分自身を追加した場合、パブリケーションで設定された受信者に配信予定と同じ情報がユーザに送信されます。必要に応じて、テストモードでは、元の受信者グループから選択

した受信者を除外できます。これにより、パブリケーションの内容が受信者に表示される方法をチェックすることができます。

1. パブリケーションを作成した場所のフォルダに移動し、 (その他オプションはここをクリック) → [テストモード] を選択します。
2. (オプション)[テストモード] で、必要に応じて受信者を変更します。
 - a. [Enterprise 受信者] で、 をクリックします。
 - b. [利用可能な受信者] で、ユーザーまたはユーザーグループを包含または除外します。
 - c. [OK] を選択します。
3. (オプション)[動的受信者] では、ドキュメントから取得される受信者リストを変更したり、ドキュメントを削除したりできます。
4. [テスト] を選択します。


テストモードでパブリケーションが実行され、完了すると、対象のテスト受信者に送信されます。

30.4.2 パブリケーションの実行のスケジュール

パブリケーションをスケジュールする場合は、デフォルトの定期的なスケジュールパターンを使用するか、新しい値を入力できます。また、パブリケーションをスケジュールするたびに、受信者を変更することができます。

Business Intelligence ラウンチパッドでパブリケーションを作成するには、BI ラウンチパッドユーザガイドの BI ラウンチパッドでのパブリケーションの作成セクションを参照してください。

これにより、実行をスケジュールする前に、パブリケーションを設計して保存することができます。

1. スケジュールするパブリケーションの横にある  アイコンをクリックし、[スケジュール] を選択します。
2. [スケジュール] ページで、[全般] を展開し、ナビゲーションリストで [繰り返し] を選択し、[レポートの実行] リストで選択されたオプションが正しいことを確認します。
3. **スケジュール** をクリックします。

30.4.2.1 パブリケーション結果 - 表示方法

パブリケーション結果は、公開者、受信者、またはパブリケーションジョブ用のログファイルによる表示が可能です。

公開者による結果の表示

パブリケーションの結果はさまざまな方法で表示できます。パブリケーション実行後、パブリケーション履歴が表示され、パブリケーションインスタンス、パブリケーションの実行日時、およびパブリケーションが成功したか失敗したかが一覧表示されます。[インスタンスの日時] 列で、パブリケーションインスタンスへのリンクをクリックし、パブリケーション実行時にすべての受信者に対して生成されたインスタンスを表示できます。

パブリケーションジョブ用のログファイルの表示

ログファイルは、パブリケーションの問題解決や、パブリケーションインスタンスを受信しなかった受信者を識別するのに役立ちます。BI プラットフォームでは、パーソナライズされたパブリケーションインスタンスの各バッチが処理されると、パブリケーションジョブの情報をログに記録し、詳細を 1 つまたは複数のログファイルにまとめます。ログファイルの最大サイズは 10 MB で、この値は変更できません。多数の詳細を含む大容量のパブリケーションを実行している場合、パブリケーションインスタンスのログファイルが複数になる場合があります。

パブリケーションインスタンスのログファイルは、[履歴](#) ダイアログボックスで以下の手順に従って表示できます。

- 一連の中で最後のログファイルを表示するには、[ステータス](#) 列で、ステータス ([成功]、[失敗]、[実行中]) をクリックし、[インスタンスの詳細](#) ダイアログボックスの下にある [ログファイルの表示](#) をクリックします。パブリケーション実行中に、最後のログファイルを表示できます。
- すべてのログファイルを表示するには、[インスタンスの日時](#) 列で、パブリケーションインスタンスに対するリンクをクリックします。パーソナライズされたインスタンスの後にログファイルがリストされます。

ログファイルは、2 分おきに新しい情報で更新されます。パブリケーションジョブが 2 分未満しか実行されなかった場合、ログファイルのステータスは [待機] になります。

受信者による結果の表示

以下の表は、パブリケーションの表示方法をまとめたものです。


出力先	パブリケーション結果の表示方法
デフォルトの Enterprise の場所	動的受信者が BI プラットフォームにログオンしてパブリケーション結果を表示することはできません。 受信者は、自身のパーソナライズ済みパブリケーションインスタンスのみをプラットフォームで表示できます。他の受信者向けにパーソナライズされたパブリケーションインスタンスは表示できません。
BI 受信ボックス	動的受信者が BI ラウンチパッドにログオンしてパブリケーション結果を表示することはできません。
電子メール	電子メールにログオンし、埋め込まれたパブリケーションコンテンツを表示するか、添付ファイルをダウンロードします。
FTP サーバ	FTP ホストにログオンします。
SFTP サーバ	SFTP ホストにログオンします。
ローカルディスク	パブリケーションのデザイン時に指定された場所に移動します。

30.4.3 パブリケーションからの購読または購読解除

パブリケーションがスケジュールされてからこれを購読するには、パブリケーションの繰り返し発生するインスタンスを購読するか、パブリケーションを再スケジュールします。

パブリケーションを購読するには、パブリケーションに対する適切なアクセス権限が必要です。

Enterprise 受信者のみが、パブリケーションを購読および購読解除することができます。動的受信者はパブリケーションの購読および購読解除はできません。

1. [ホーム] ページで [フォルダ] タイルをクリックします。
2. 購読または購読解除するパブリケーションのあるフォルダに移動します。
3. パブリケーションの横にある  アイコンをクリックし、[購読] または [購読解除] を選択します。



これで、選択に基づいて、パブリケーションの購読または購読解除が行われました。

30.4.4 パブリケーションインスタンスからの購読または購読解除

繰り返し発生するパブリケーションがスケジュールされた後にも、Enterprise 受信者はその最初の繰り返し発生するパブリケーションを購読できます。たとえば、パブリケーションが週 2 回実行されるようスケジュールされている場合、最初のパブリケーションインスタンスを購読し、2 回目のインスタンスは購読しないよう指定できます。

パブリケーションインスタンスを購読するには、パブリケーションに対する適切なアクセス権限が必要です。

Enterprise 受信者だけがパブリケーションインスタンスを購読および購読解除することができます。動的受信者は、パブリケーションインスタンスの購読または購読解除ができません。



1. [マイホーム] グループで [フォルダ] タイルをクリックします。
2. 購読または購読解除するパブリケーションおよびそのインスタンスのあるフォルダに移動します。
3. パブリケーションの横の  アイコンをクリックし、[履歴] を選択します。
4. [履歴] ページで、インスタンスの横にある  アイコンをクリックして [購読] または [購読解除] を選択します。

これで、選択に基づいて、パブリケーションインスタンスの購読または購読解除が行われました。

30.4.5 パブリケーションインスタンスの再配布

受信者にインスタンスを再送信したいがパブリケーション全体を再実行したくない場合、成功したパブリケーションインスタンスを最初の受信者全員または受信者の一部に再配布できます。

最初のパブリケーション実行時に指定された受信者のみが、再配布されたインスタンスを受信できます。

1. 次の操作のいずれかを実行します。
 - BI ラウンチパッドで、パブリケーションを右クリックし、[履歴] を選択します。
 - セントラル管理コンソール (CMC) でパブリケーションを右クリックして、 **アクション**  **履歴** を選択します。

2. [履歴](#)ダイアログボックスで、成功したパブリケーションインスタンスを選択します。
3. 次の操作のいずれかを実行します。
 - ラUNCHパッドで、[他のアクション](#) > [再スケジュール](#) を選択します。
 - CMC で、[アクション](#) > [再スケジュール](#) を選択します。
4. 再配布されるインスタンスを受信する受信者を選択します。
 - インスタンスを Enterprise の受信者に再配布するには、[Enterprise 受信者](#) をクリックし、[\[>\]](#) ボタンをクリックして受信者を [\[利用可能\]](#) リストから [\[選択\]](#) リストに移動します。
 - インスタンスを動的受信者に再配布する
 - a. [\[動的受信者\]](#) をクリックし、受信者 ID、フルネーム、および電子メールアドレスにマップされている列が正しいことを確認します。
 - b. パブリケーションをすべての動的受信者に再配布するには、[\[完全リストの使用\]](#) を選択します。
 - c. パブリケーションを選択された動的受信者に再配布するには、[\[>\]](#) ボタンをクリックして受信者を [\[利用可能\]](#) リストから [\[選択\]](#) リストに移動します。
5. [\[再配布\]](#) をクリックします。

パブリケーション履歴が表示され、再配布されたインスタンスのステータスが [\[実行中\]](#) となっています。[\[インスタンスの日時\]](#) 列の日付は、再配布の日時に合わせて更新されます。

30.4.6 失敗したパブリケーションの再試行

失敗したパブリケーションを再試行するには、パブリケーションインスタンスのログファイルを表示し、エラーを修正し、パブリケーションを再スケジュールします。

失敗したパブリケーションインスタンスを再試行するオプションを使用すると、次のことが可能です。

- 失敗したインスタンスを上書きします ([\[今すぐ実行\]](#) と [\[再スケジュール\]](#) では新しいインスタンスが作成されますが、[\[再試行\]](#) では失敗したインスタンス自体が使用されます)。
- 一部失敗の場合は、失敗した受信者のみを処理します。
- 全体的な失敗の場合は、新しいインスタンスを作成せずにジョブ全体を実行します。

① 注記

また、パブリケーションの [\[繰り返し\]](#) プロパティの [\[可能な再試行回数\]](#) および [\[再試行間隔 \(秒単位\)\]](#) を指定することによって、自動再試行を実行することもできます。失敗の場合、パブリケーションの再実行が試行されます。

1. 失敗したパブリケーションインスタンスを選択します。
2. 以下のアクションのいずれかを実行します。
 - BI ラUNCHパッドで、[他のアクション](#) > [履歴](#) を選択します。
 - セントラル管理コンソール (CMC) で、[アクション](#) > [履歴](#) を選択します。
3. 失敗したインスタンスを右クリックし、[\[再試行\]](#) をクリックします。

インスタンスのステータスが [\[実行中\]](#) になります。ステータスが [\[成功\]](#) になるまで待機します。

パブリケーションが再び失敗した場合は、新しいログファイルを確認し、発生したエラーを修正してください。

31 アクセス権に関する付録

31.1 付録 - 権限について

このアクセス権に関する付録では、BI プラットフォームシステムのさまざまなオブジェクトに対して設定できる権限の多くをその説明とともに示しています。オブジェクトに対してタスクを実行するために複数の権限が必要な場合は、他に必要になる権限とその対象になるオブジェクトについての情報も示しています。アクセス権の設定の詳細については、SAP BI プラットフォーム管理者ガイドのアクセス権の設定の章を参照してください。

31.2 全般の権限

このセクションの権限は、複数の種類のオブジェクトに適用されます。これらの権限の多くには、それと等価な所有者権限があります。所有者権限は、アクセス権がチェックされるオブジェクトの所有者にのみ適用されるアクセス権です。

次の権限は、スケジュール可能なオブジェクトのみに適用されます。

- ドキュメントの実行をスケジュールする権限
- 他のユーザの代理としてスケジュール権限
- 別の出力先へスケジュールする権限
- ドキュメントのインスタンスを表示する権限
- インスタンスを削除する権限
- ドキュメントのインスタンスを一時停止して再開する権限
- インスタンスの再スケジュール権限

権限	説明
オブジェクトを表示する	オブジェクトとそのプロパティを表示できるようにします。オブジェクトに対してこの権限がない場合、そのオブジェクトは BI プラットフォームシステムでは非表示になります。この権限は、すべてのタスクに必要な基本的な権限です。
オブジェクトをフォルダに追加する	フォルダにオブジェクトを追加できるようにします。この権限は、フォルダのように動作するオブジェクト (受信ボックス、[お気に入り] フォルダ、オブジェクトパッケージなど) にも適用できます。
オブジェクトを編集する	オブジェクトコンテンツ、およびオブジェクトやフォルダのプロパティを編集できるようにします。

権限	説明
オブジェクトに対するユーザの権限を変更する	オブジェクトのセキュリティ設定を変更できるようにします。
ユーザがオブジェクトに対して持っているアクセス権を安全に変更する	オブジェクトに対してすでに持っている権限またはアクセスレベルを他のユーザに許可できるようにします。これには、相手のユーザとそのオブジェクトに対して、この権限を持っている必要があります。この権限の詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの“アクセス権の設定”の章を参照してください。
ジョブを処理するサーバグループを定義する	<p>オブジェクトを処理するときに使用するサーバグループを指定できるようにします。この権限は、その処理を実行するサーバを指定できるオブジェクトのみに適用されます。</p> <p>サーバグループを指定するには、そのオブジェクトに対する[オブジェクトを編集する]権限も必要になります。</p>
オブジェクトを削除する	オブジェクトとそのインスタンスを削除できるようにします。
オブジェクトを別のフォルダにコピーする	<p>CMS の他のフォルダにオブジェクトのコピーを作成できるようにします。そのためには、そのドキュメントフォルダに対する[オブジェクトをフォルダに追加する]権限も必要になります。</p> <div> <p>④ 注記</p> <p>オブジェクトがコピーされても、オブジェクトの明示的なセキュリティはコピーされません。新しいオブジェクトはコピー先のフォルダからセキュリティ設定を継承しますが、明示的なセキュリティをリセットする必要があります。</p> </div>
内容の複製	フェデレートしたデプロイメント内の別のシステムにオブジェクトを複製できるようにします。
ドキュメントの実行をスケジュールする	オブジェクトをスケジュールできるようにします。
他のユーザの代理としてスケジュール	<p>他のユーザまたはグループのためにオブジェクトをスケジュールできるようにします。代理としてオブジェクトをスケジュールするユーザまたはグループは、そのオブジェクトインスタンスの所有者になります。</p> <p>他のユーザまたはグループのためにオブジェクトをスケジュールするには、次の権限も必要になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> この権限は、ユーザまたはグループに対するものです。 オブジェクトに対する[ドキュメントの実行をスケジュールする]権限

別の出力先へスケジュールする

[別の出力先へスケジュールする] は、[FTP へのスケジュール]、[SMTP へのスケジュール]、[BI 受信ボックスへのスケジュール]、[SFTP へのスケジュール]、および [ファイルシステムへのスケジュール] の親権限です。オブジェクトを特定の出力先にスケジュールするには、[別の出力先へスケジュールする] 権限を特定の子権限と組み合わせて選択してください。たとえば、オブジェクトを FTP 出力先にスケジュールするには、[別の出力先へスケジュールする] 権限と [FTP へのスケジュール] 権限を選択してください。BI ランドスケープを BI 4.2 SP04 以前から BI 4.2 SP05 以降に更新中の場合、トラブルシューティングの詳細については [2675734](#)、[2642221](#)、[2626550](#) を参照してください。

オブジェクトを出力先にスケジュールするには、次の権限も必要になります。

- スケジュールするオブジェクトに対する [ドキュメントの実行をスケジュールする] 権限
- 受信者の受信ボックスに対する [オブジェクトをフォルダに追加する] 権限 (受信ボックスを出力先としてスケジュールする場合)
- スケジュールするオブジェクトに対する [オブジェクトを別のフォルダにコピーする] 権限 (受信ボックスを出力先としてショートカットではなくコピーを送信する場合)

① 注記

BI 4.2 SP04 以前で [別の出力先へスケジュールする] 権限が [フルコントロール] や [スケジュール] ロールなどの [アクセスレベル] を介して割り当てられている場合、BI 4.2 SP05 パッチ 03 以降に更新した後は、[FTP へのスケジュール]、[SMTP へのスケジュール]、[SFTP へのスケジュール]、[BI 受信ボックスへのスケジュール]、および [ファイルシステムへのスケジュール] などの子出力先権限も許可されます。BI 4.2 SP04 以前での [オンデマンド表示] や [カスタム] ロールなどの [アクセスレベル] の場合は、BI 4.2 SP05 パッチ 03 以降に更新した後、子出力先権限はデフォルトでは許可されません。権限をマニュアルで許可する必要があります。したがって、BI 4.2 SP04 以前で作成した定期的なスケジュールジョブによって、BI 4.2 SP05 パッチ 03 以降でオブジェクトが正常にスケジュールされます。

FTP へのスケジュール

FTP 出力先へのオブジェクトをスケジュールすることができます。

SFTP へのスケジュール

SFTP 出力先へのオブジェクトをスケジュールすることができます。

SMTP へのスケジュール

SMTP 出力先へのオブジェクトをスケジュールすることができます。

権限	説明
ファイルシステムへのスケジュール	ファイルシステム出力先へのオブジェクトをスケジュールすることができます。
受信ボックスへのスケジュール	BI 受信ボックス出力先へのオブジェクトをスケジュールすることができます。
ドキュメントのインスタンスを表示する	オブジェクトインスタンスを表示できるようにします。この権限は、オブジェクトインスタンスに対して実行するすべてのタスクに必要な基本的な権限です。
インスタンスを削除する	オブジェクトのインスタンスのみを削除できるようにします。 [オブジェクトを削除する] 権限がある場合は、インスタンスを削除する権限は必要ありません。
ドキュメントのインスタンスを一時停止して再開する	実行中のオブジェクトインスタンスを一時停止または再開できるようにします。
インスタンスの再スケジュール	オブジェクトインスタンスを再スケジュールできるようにします。
コメントの追加 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントにコメントを追加できるようにします。
コメントの削除 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントからコメントを削除できるようにします。
ユーザが作成したコメントの削除 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントから作成したコメントを削除できるようにします。
コメントの変更 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントのコメントを変更できるようにします。
ユーザが作成したコメントの変更 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントの作成したコメントを変更できるようにします。
コメントの表示 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントのコメントを表示できるようにします。
ユーザが作成したコメントの表示 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントの作成したコメントを表示できるようにします。
コメントの非表示 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが BI Commentary を使用してドキュメントのコメントを非表示にできるようにします。

権限	説明
ユーザが作成したコメントの非表示 - <i>BI Commentary</i>	ユーザが <i>BI Commentary</i> を使用してドキュメントの作成したコメントを非表示にできるようにします。
コメントの一括追加 - <i>BI Commentary</i>	ユーザがドキュメントと一緒にコメントを移行できます。

31.2.1 出力先権限

各出力先は、特定の出力先権限に関連付けられます。BOE 管理者は、ユーザに目的の出力先権限を割り当てる必要があります。

以前は、[\[別の出力先へスケジュールする\]](#) 権限を持っている場合、ユーザは使用可能なすべての出力先に対してスケジュールできました。SP05 リリース以降、[\[別の出力先へスケジュールする\]](#) が [\[デフォルトの Enterprise の場所\]](#) のみに対応しているユーザに個別の出力先権限が付与されました。

各出力先の全般の権限に新しい権限が導入されました。

- ファイルシステムへのスケジュール
- FTP へのスケジュール
- 受信ボックスへのスケジュール
- SFTP へのスケジュール
- SMTP へのスケジュール
- Google ドライブへのスケジュール

全般の権限の詳細については、[全般の権限 \[443 ページ\]](#) を参照してください。

スケジュール中にこれらの出力先オプションを提供するには、管理者は個々の出力先権限を付与する必要があります。[2621878](#) を参照してください。ユーザが [\[別の出力先へスケジュールする\]](#) に対する権限のみを持っている場合、ユーザは FTP、受信ボックス、SFTP、SMTP、およびファイルシステムの出力先にスケジュールすることはできません。

以前のバージョンで [\[別の出力先へスケジュールする\]](#) 権限が [\[フルコントロール\]](#) や [\[スケジュール\]](#) ロールなどのアクセスレベルを介して割り当てられている場合、4.2 SP05 へのアップグレード後、追加の (新しく導入された) 権限も付与されます。したがって、どの宛先へのスケジュールも正常に実行されます。

この権限が [\[オンデマンド表示\]](#) アクセスレベルまたはいずれかのカスタムロールを介して割り当てられているか、直接割り当てられている (ロールによるものではなく、個別の権限) 場合、[\[デフォルトの Enterprise の場所\]](#) へのスケジュールのみが成功し、他の出力先へのスケジュールは失敗します。

詳細については、[出力先オプション](#) および [電子メールの出力先のプロパティ \[162 ページ\]](#) を参照してください。

31.3 特定のオブジェクトの種類のアクセス権

31.3.1 フォルダのアクセス権

権限の管理を簡単にするために、フォルダに権限を設定してそれに含まれるものが権限設定を継承するようにすることをお勧めします。フォルダには、次のような権限があります。

- フォルダオブジェクトに適用される一般的な権限
- フォルダのコンテンツに対する種類固有アクセス権(Crystal レポートに対する[レポートのデータを出力する]権限など)

31.3.2 カテゴリ

このセクションの権限は、パブリックカテゴリおよび個人用カテゴリのコンテキストで固有の意味を持つ、一般的な権限です。

① 注記

カテゴリのオブジェクトは、そのカテゴリに設定されている権限を継承しません。

権限	説明
オブジェクトをフォルダに追加する	カテゴリ内に新しいカテゴリを作成できるようにします。この権限は、カテゴリにオブジェクトを追加するときには必要ありません。
オブジェクトを編集する	次の操作を実行できるようにします。 <ul style="list-style-type: none">• カテゴリのプロパティを修正する。• カテゴリを他のカテゴリの中に移動してサブカテゴリにする。• オブジェクトをカテゴリに追加する。• カテゴリからオブジェクトを削除する。 カテゴリを他のカテゴリの中に移動してサブカテゴリにする場合は、次の権限も必要です。 <ul style="list-style-type: none">• 元のカテゴリに対するオブジェクトを削除する権限• 移動先のカテゴリに対するオブジェクトをフォルダに追加する権限
オブジェクトを削除する	カテゴリを削除できるようにします。

31.3.3 Crystal レポート

このセクションの権限は、Crystal レポートのみに適用されます。

① 注記

これらの権限は、Crystal レポートが BI プラットフォーム環境に含まれている場合にのみ適用されます。Crystal レポートをローカルディスクにダウンロードした場合は、これらの権限は無効になります。このような事態を避けるには、Crystal レポートに対して**オブジェクトに関連するファイルをダウンロード**権限を拒否します。

権限	説明
レポートのデータを出力する	レポートを印刷できるようにします。
レポートのデータを最新表示する	レポートのデータを最新表示できるようにします。
レポートのデータをエクスポートする	Crystal Reports ビューアでレポートをオンライン表示するときに、任意の形式でエクスポートできるようにします。 レポートデータを RPT 形式でエクスポートするには、 オブジェクトに関連するファイルをダウンロード 権限も持つ必要があります。
オブジェクトに関連するファイルをダウンロード	この権限によって、次の操作が実行できるようになります。 <ul style="list-style-type: none">• RPT 形式でレポートをエクスポートする。• Crystal Reports Designer でレポートを開く。• 外部の出力先に向けて RPT 形式のレポート出力をスケジュールする。

31.3.4 Web Intelligence ドキュメント

このセクションの権限は、Web Intelligence ドキュメントのみに適用されます。

権限	説明
値の一覧の使用	値の一覧を使用できるようにします。
レポートのデータをエクスポートする	レポートのデータをテキスト、CSV、Excel、PDF、または HTML 形式にエクスポートできます。また、このコマンドでは、印刷可能な PDF ファイルを生成する印刷コマンドを使用することもできます。
クエリスクリプト - 表示の有効化 (SQL、MDX...)	クエリスクリプトを表示できるようにします (SQL および MDX)。
クエリスクリプト - 編集の有効化 (SQL、MDX...)	クエリスクリプト (SQL および MDX) を編集できます。SQL 文の直接入力 (FHSQ) データソースを編集することもできます。
レポートのデータを最新表示する	ドキュメントのデータを最新表示できるようにします。
クエリの編集	ドキュメントのクエリを編集できるようにします。

権限	説明
値の一覧の最新表示	プロンプトを作成したとき、またはドキュメントを表示したときに、プロンプトの値の一覧を最新表示できるようにします。そのためには、そのドキュメントに対する [値の一覧の使用] 権限も必要になります。
送信先	ドキュメントをスケジューラまたはBI プラットフォーム受信トレイに送信するか、電子メールでハイパーリンクとして送信できるようになります。また、この権限により、Web Intelligence リッチクライアントユーザがドキュメントを電子メールの添付文書として送信することもできるようになります。

31.3.5 ユーザとグループ

BI プラットフォーム環境内の他のオブジェクトに対してと同様、ユーザとグループに対しても権限を設定できます。このセクションの権限は、ユーザとグループオブジェクトのみに適用されるタイプ固有権限、またはユーザとグループのコンテキストで固有の意味を持つ一般的な権限です。

① 注記

ユーザとサブグループは、グループメンバーシップの権限を継承できます。

① 注記

ユーザアカウントの作成者は、そのアカウントの所有者と見なされます。ただし、ユーザアカウントが作成された後は、そのアカウントが作成されたユーザも所有者と見なされます。

権限	説明
オブジェクトを編集する	<p>次の操作を実行できるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザまたはグループのプロパティを編集する。 グループメンバーシップを管理する。 <p>ユーザまたはグループを別のグループに追加するには、そのユーザまたはグループと追加先のグループに対して、この権限を持つ必要があります。</p>
ユーザパスワードの変更	<p>次の操作を実行できるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザアカウントのパスワードを変更します。そのためには、ユーザアカウントに対する [オブジェクトを編集する] 権限も必要になります。 別のユーザアカウントのパスワードを変更します。この場合、そのユーザアカウントに対する [オブジェクトを編集する] 権限と [オブジェクトに対するユーザの権限を変更する] 権限が必要です。

権限	説明
	<p>① 注記</p> <p>この権限は、次のユーザパスワード設定には影響しません。</p> <p>パスワードを無期限にする ユーザは次回ログイン時にパスワード変更が必要 ユーザはパスワードを変更できない</p> <p>② 注記</p> <p>この権限は、SAP BusinessObjects ユニバースのデータソース認証情報には適用されません。</p>
パブリケーションの購読	パブリケーションに受信者としてユーザを追加できるようにします。
他のユーザの代理としてスケジュール	ユーザに代わってオブジェクトをスケジュールし、そのユーザがそのオブジェクトインスタンスの所有者になるようにします。そのためには、そのオブジェクトに対する [他のユーザの代理としてスケジュール] 権限も必要になります。
ユーザ属性の追加または編集	<p>ユーザの電子メールアドレスまたはカスタムユーザ属性の値を変更できるようにします。</p> <p>この権限は、ユーザに適用できます。</p>
ユーザ属性の追加または編集 (所有者の権限)	<p>ユーザの電子メールアドレスまたはカスタムユーザ属性の値を、ユーザオブジェクトの所有者が変更できるようにします。</p> <p>この権限は、ユーザに適用できます。</p>
ユーザが所有するオブジェクトの基本設定の変更	<p>アプリケーションオブジェクトの [基本設定] メニューを表示します。</p> <p>このアクセス権がないと、ユーザはどのアプリケーションでも個人用の基本設定を設定できず、[基本設定] メニューがアプリケーションに表示されません。たとえば、この権限がないと、ユーザは Web Intelligence または BI ラUNCHパッドアプリケーションのレポートで使用する測定単位 (インチまたはミリメートル) を選択できません。</p>

31.3.6 アクセスレベル

このセクションの権限は、アクセスレベルのみに適用されます。

権限	説明
セキュリティ割り当てにアクセスレベルを使用する	オブジェクトのアクセス制御リストに主体を追加するときに、アクセスレベルを割り当てられるようにします。この場合、プリンシパルおよびオブジェクトに対して オブジェクトに対するユーザの権限を変更する または ユーザがオブジェクトに対して持っているアクセス権を安全に変更する 権限も必要になります。 オブジェクトに対して持っているアクセス権を安全に変更する 権限が許可されている場合、オブジェクトで自分に対して同じアクセスレベルを許可する必要があります。

31.3.7 ユニバース (.unv) のアクセス権

このセクションの権限は、ユニバースデザインツールまたは.unv ユニバースを使用して作成したユニバースに適用されます。ここに挙げられている権限は、ユニバースのみに適用される種類固有の権限、またはユニバースのコンテキストで固有の意味を持つ一般的な権限です。

① 注記

ユニバースのアクセス権は、ユニバースデザインツールアプリケーションの CMS からユニバースをインポートしたときにのみ適用されます。これらの権限は、ユニバースがローカルディスクに保存されているときには適用されません。

権限	説明
オブジェクトをフォルダに追加する	ユニバースに制限セットまたはオブジェクトを追加できるようにします。そのためには、 アクセス制限の編集 権限も必要になります。
オブジェクトを表示する	ユニバースのアクセスおよび表示ができるようにします。
オブジェクトを編集する	この権限によって、次の操作が実行できるようになります。 <ul style="list-style-type: none"> CMC またはユニバースデザインツールでユニバースを編集します。 ユニバースをロックまたはロック解除する。 ユニバースのロックを解除するには、 ユニバースのロック解除 権限も必要になります。
オブジェクトを削除する	ユニバースを削除できるようにします。
オブジェクトの翻訳	トランスレーションマネジメントツールを使用して、翻訳されたユニバースオブジェクト名を保存できるようにします。

権限	説明
	<p>① 注記</p> <p>オブジェクトの編集権限が明示的に付与され、オブジェクトの翻訳権限が明示的に拒否されていない場合、翻訳を保存できます。</p>
値の一覧の新規作成	<p>この権限によって、次の操作が実行できるようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しい値の一覧をオブジェクトと関連付ける。 既存の値の一覧を編集する。 <p>① 注記</p> <p>この権限では、カスケード値の一覧の作成は制限されません。</p>
ユニバースの印刷	ユニバースを印刷できるようにします。
テーブル、オブジェクト値の表示	ユニバースのテーブルまたはオブジェクトと関連付けられた値を表示できるようにします。
アクセス制限の編集	ユニバースに対するアクセス制限(オーバーロード)を編集できるようにします。
ユニバースのロック解除	<p>次の操作を実行できるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユニバースが他のユーザによってロックされている場合にそれを解除する。 CMS からユニバースをエクスポートする。 <p>ユニバースのロックを解除するには、オブジェクトを編集する権限も必要になります。</p>
データアクセス	ユニバースからデータを取得して、ユニバースに基づいてドキュメントを最新表示できるようにします。 そのためには、ユニバースデザインツールアプリケーション、ドキュメント、ユニバース接続に対するこの権限も必要になります。
ユニバースに基づいたクエリの作成と編集	ユニバースに基づいて、ドキュメントを作成し、クエリを編集できるようにします。

31.3.8 ユニバース (.unx) のアクセス権

このセクションの権限は、インフォメーションデザインツールまたは.unv ユニバースを使用して作成したユニバースに適用されます。ここに挙げられている権限は、ユニバースのみに適用される種類固有の権限、またはユニバースのコンテキストで固有の意味を持つ一般的な権限です。

① 注記

ユニバースのアクセス権は、リポジトリに対し公開されたユニバースにのみ適用されます。これらの権限は、ユニバースがローカルフォルダに保存されているときには適用されません。

権限	説明
オブジェクトを表示する	ユニバースのアクセスおよび表示ができるようにします。
オブジェクトを編集する	ユニバースを再公開できるようにします。
オブジェクトを削除する	ユニバースを削除できるようにします。
ユニバースの取得	<p>インフォメーションデザインツールで公開されたユニバースを取得したり、基になるリソース (ビジネスレイヤおよびデータファンデーション) を編集できるようにします。</p> <div><h3>① 注記</h3><p>インフォメーションデザインツールアプリケーションの ユニバースの取得 権限も付与されている必要があります。</p></div>
セキュリティプロファイルの編集	<p>インフォメーションデザインツールセキュリティエディタで、ユニバースのセキュリティプロファイルを挿入、編集、削除できるようにします。</p> <div><h3>① 注記</h3><p>この権限は、セキュリティプロファイルの表示やセキュリティプロファイルの集計オプションの変更には必要ありません。</p></div>
セキュリティプロファイルの割当	インフォメーションデザインツールセキュリティエディタで、ユーザおよびグループにセキュリティプロファイルを割り当てたり、割当を解除できるようにします。
データアクセス	<p>ユニバースからデータを取得して、ユニバースに基づいてドキュメントを最新表示できるようにします。</p> <p>インフォメーションデザインツールでは、この権限で、クエリパネルの結果セットをプレビューできるようになります。</p>
ユニバースに基づくクエリの作成と編集	<p>ユニバースに基づいて、クエリを作成、編集できるようにします。</p> <p>インフォメーションデザインツールでは、この権限でクエリパネルを開き、ユニバースにクエリを実行できるようになります。</p>
すべてのユーザ用に保存	すべてのユーザ用にユニバースを保存できるようにします。

① 注記

インフォメーションデザインツールアプリケーションのすべてのユーザ用に保存権限も付与されている必要があります。

31.3.9 ユニバースオブジェクトのアクセスレベル

デザイナーがユニバースデザインツールを使用してユニバースを作成する場合、または、インフォメーションデザインツールを使用してビジネスレイヤを作成する場合、デザイナーは、ユニバースのすべてのオブジェクトにオブジェクトのアクセスレベルを割り当てます。オブジェクトのアクセスレベルは次のとおりです。

パブリック (デフォルト)

コントロール

リストリクト

コンフィデンシャル

プライベート

ユニバースをリポジトリで公開したら、アプリケーションで割り当てられたオブジェクトのアクセスレベルに基づいてユニバースオブジェクトへのアクセス権を付与できます。たとえば、Everyone グループにパブリックアクセス権を付与できます。これにより、Everyone グループにいるユーザは、パブリックと指定されたユニバース内のオブジェクトを表示できます。

各オブジェクトのアクセスレベルは、オブジェクトに対して以前よりも多くのアクセスを許可します。パブリックは最低レベルです。パブリックアクセスが付与された主体は、パブリックと指定されたオブジェクトしか表示できません。コントロールアクセスを付与された主体は、パブリックおよびコントロールに指定されたオブジェクトを表示できます。プライベートは、最高レベルの設定で、すべてのオブジェクトアクセスレベル、つまりユニバースのすべてのオブジェクトへのアクセス権を主体に付与します。

① 注記

オブジェクトのアクセスレベルのセキュリティ設定は、ユニバースが継承したすべてのセキュリティ設定より優先されます。

① 注記

.unx ユニバースでは、オブジェクトアクセスレベルセキュリティ設定が、セキュリティプロファイルによって定義されたオブジェクトセキュリティの考慮に入れられます。セキュリティプロファイルの詳細については、インフォメーションデザインツールユーザガイドを参照してください。

関連情報

[ユニバースオブジェクトのアクセスレベルの割当 \[456 ページ\]](#)

31.3.9.1 ユニバースオブジェクトのアクセスレベルの割当

ユニバースオブジェクトのアクセスレベルのセキュリティを設定するには、そのユニバースに対する [\[オブジェクトに対するユーザの権限を変更する\]](#) 権限が必要になります。

1. CMS の [\[ユニバース\]](#) 領域で、ユニバースを選択します。
2. [▶ アクション ▶ ユニバースセキュリティ ▶](#) をクリックします。
3. [\[ユニバースセキュリティ\]](#) ダイアログボックスの [\[オブジェクトレベルセキュリティ\]](#) リストでユーザまたはグループに対するオブジェクトアクセスレベルを選択します。

31.3.10 接続のアクセス権

このセクションの権限は、ユニバース接続に適用される種類固有の権限、またはユニバース接続のコンテキストで固有の意味を持つ一般的な権限です。これらの権限は、リポジトリで公開されている接続に適用されます。

リレーショナル接続のアクセス権

権限	説明
オブジェクトを表示する	接続を表示できるようにします。
オブジェクトを編集する	接続パラメータを編集できるようにします。
接続をローカルにダウンロード	<p>Web Intelligence リッチクライアント内の接続で作成されたユニバースを、オフラインモードで使用できるようにします。</p> <p>インフォメーションデザインツールで、ローカルのミドルウェアドライバを使用できるようにします。これを行うには、インフォメーションデザインツールの基本設定でローカルミドルウェアオプションを選択します。選択しない場合は、データベースに対するクエリでサーバのミドルウェアが使用されます。</p> <p>この権限は、インフォメーションデザインツールでセキュリティ保護された接続を編集する場合にも必要です。</p>
オブジェクトを削除する	接続を削除できるようにします。
オブジェクトを別のフォルダにコピーする	あるフォルダから他のフォルダに接続をコピーできるようにします。
データアクセス	<p>接続に対して指定されたデータベースからコンテンツを取得できるようにします。</p> <p>インフォメーションデザインツールでは、この権限で、接続およびデータファンデーションエディタからテーブルデータ</p>

権限	説明
	を参照できるようになります。また、クエリパネルの結果セットをプレビューすることもできます。
ストアドプロシージャの接続を使用	ユニバース接続に対して指定されたデータベースでストアドプロシージャを使用できるようになります。
	<div> ① 注記 この権限は、.unv ユニバースのみに適用されます。 </div>
SQL 文の直接入力接続を使用	接続で SQL スクリプトを実行できるようにします。

OLAP 接続のアクセス権

権限	説明
オブジェクトを表示する	接続を表示できるようにします。
オブジェクトを編集する	インフォメーションデザインツール接続エディタで接続パラメータを編集できるようにします。
オブジェクトを削除する	接続を削除できるようにします。
オブジェクトを別のフォルダにコピーする	あるフォルダから他のフォルダに接続をコピーできるようにします。
接続をローカルにダウンロード	Web Intelligence リッチクライアント内の接続で作成されたユニバースを、オフラインモードで使用できるようにします。

31.3.11 アプリケーション

31.3.11.1 CMC

権限	説明
CMC にログオンしてこのオブジェクトを CMC で参照する	CMC にログオンできるようにします
インスタスマネージャへのアクセスを許可する	インスタスマネージャにアクセスできるようにします
関係クエリへのアクセスを許可する	CMC で関係クエリを実行できるようにします
セキュリティクエリへのアクセスを許可する	CMC でセキュリティクエリを実行できるようにします

31.3.11.2 Fiori 対応 BI ラUNCHパッド

権限	説明
新しい Fiori 対応 BI ラUNCHパッドへのログイン	Fiori 対応 BI ラUNCHパッドにログインできるようにします。
整理	オブジェクトの移動とコピー、Favorites フォルダへのオブジェクトの追加、およびオブジェクトのショートカット作成を実行できるようにします。
BusinessObjects 受信ボックスに送信	受信者の BI 受信ボックスにオブジェクトを送信できるようにします。
電子メールの出力先に送信	電子メールで受信者にオブジェクトを送信できるようにします。
ファイルの場所に送信	ファイルの場所にオブジェクトを送信できるようにします。
FTP の場所に送信	FTP の場所にオブジェクトを送信できるようにします。
SFTP の場所に送信	SFTP の場所にオブジェクトを送信できるようにします。 SFTP 出力先のプロパティは、FTP 出力先ページに似ていますが、ユーザによる入力が必要な追加フィンガープリントオプションがあります。各 SFTP サーバのプロパティにはフィンガープリントオプションがあります。フィンガープリントの一致/検証は、CMS によってバックエンドで実行されます。

31.3.11.2.1 コラボレーションアプリケーションのアクセス権

これらのアクセス権は、アプリケーションが BI プラットフォームで設定されるときに、SAP Jam に適用されます。

権限	説明
ユーザが所有するドキュメントのコメント	自分の所有するドキュメントおよびインスタンスにコメントできるようにします
ユーザが所有するドキュメントのコメントを表示	自分の所有するドキュメントおよびインスタンスのコメントを表示できるようにします
ユーザが所有するオブジェクトの基本設定の変更	アプリケーションオブジェクトの [基本設定] メニューを表示します。 このアクセス権がないと、ユーザはどのアプリケーションでも個人用の基本設定を設定できず、 基本設定 メニューがアプリケーションに表示されません。たとえば、この権限がない

権限	説明
	と、ユーザはアプリケーションのレポートで使用する測定単位 (インチまたはミリメートル) を選択できません。

31.3.11.3 BI ワークスペース

権限	説明
BI ワークスペースの作成および編集	新しい BI ワークスペースを作成でき、既存の BI ワークスペースを編集できるようにします
モジュールの作成と編集	新しいモジュールを作成でき、既存のモジュールを編集できるようにします
BI ワークスペースの編集	既存の BI ワークスペースを編集できるようにします (ただしワークスペースを新規作成できるようにはしません)
ユーザが所有するオブジェクトの基本設定の変更	<p>アプリケーションオブジェクトの基本設定メニューを表示します</p> <p>このアクセス権がないと、ユーザはどのアプリケーションでも個人用の基本設定を設定できず、基本設定メニューがアプリケーションに表示されません。たとえば、この権限がないと、ユーザは Web Intelligence または BI ラウンチパッドアプリケーションのレポートで使用する測定単位 (インチまたはミリメートル) を選択できません。</p>

31.3.11.4 Web Intelligence

このセクションのアクセス権は、リッチクライアントを含む Web Intelligence アプリケーションに適用され、このアプリケーションのビューアとクエリパネルに影響することがあります。

権限	説明
データ: データ追跡の有効化	変更されたデータを追跡できるようにします。
データ: 変更済みデータの書式設定有効化	変更されたデータの書式設定を選択できるようにします。
全般: デスクトップクライアントアクセスの有効化	Web Intelligence デスクトップ (リッチクライアント) を使用できるようにします。
デスクトップ: ドキュメントのエクスポート	Web Intelligence リッチクライアントで、ユーザは BI プラットフォームリポジトリにドキュメントをエクスポートできます。

権限	説明
デスクトップ: すべてのユーザ用にドキュメントを保存	Web Intelligence リッチクライアントにおいて、ユーザはセキュリティなしでドキュメントをローカルに保存することができます。
ドキュメント: 起動時の自動最新表示を無効にする	ドキュメントを開いたときに自動更新されないようにします。
ドキュメント: 自動保存の有効化	管理者が CMC で自動保存を有効にしている場合、ドキュメントが自動的に保存されるようにします。
ドキュメント: 作成の有効化	新しいドキュメントを作成できるようにします。
一般: Web Intelligence 基本設定の編集	BI ランチパッドで Web Intelligence の基本設定を変更できるようにします。
一般: Web クライアントアクセスの有効化	Web Intelligence Web クライアントを使用できるようにします。
クエリ: ユニバースから生成されたスクリプトの編集	クエリパネルで、ユニバースから生成された SQL または MDX クエリスクリプトを編集できるようにします。
クエリ: SQL スクリプトの直接入力編集	直接入力の SQL クエリスクリプトを編集できるようにします。
クエリ: クエリ: ユニバースから生成されたスクリプトの表示	クエリパネルで、ユニバースから生成された SQL または MDX クエリスクリプトを表示できます。
クエリ: SQL の直接入力表示	直接入力の SQL クエリスクリプトを表示できます。
レポートニング: ブレークの作成と編集	ブレークを作成および編集できるようにします。
レポートニング: 条件付き書式設定ルールの作成と編集	条件付き書式設定ルールを作成および編集できるようにします。
レポートニング: 定義済みの計算の作成と編集	定義済みの計算を作成および編集できるようにします。
レポートニング: 入力コントロールおよびグループの作成と編集	入力コントロールを作成および編集できるようにします。
レポートニング: フィルタの作成と編集および入力コントロールの使用	レポートフィルタを作成および編集できるようにします。また、入力コントロールを使用できるようにします。
レポートニング: 並べ替えおよびランキングの作成と編集	並べ替えとランキングを作成および編集できるようにします。
レポートニング: 式、変数、グループ、および参照の作成	式、変数、グループ、および参照を作成できるようにします。
レポートニング: ドキュメント変更を有効にする	レポートの書式設定を編集できるようにします。このアクセス権がないと、デザインモードは使用できません。
レポートニング: オブジェクトのマージ	レポートおよびデータマネージャで、結合ディメンションを使用してデータを同期化できるようにします。
レポートニング: レポート、テーブル、チャート、セルの作成と編集	<ul style="list-style-type: none"> レポート、テーブル、チャート、セルを挿入および削除できるようにします。 ワークフローを複製(コピー/貼り付け)できるようにします。

31.3.11.5 ユニバースデザインツール

権限	説明
ユニバースの整合性をチェック	ユニバースの整合性をチェックできるようにします
構造ウィンドウの最新表示	構造ウィンドウを最新表示できるようにします
テーブル参照の使用	テーブル参照を使用してデータベースのデータを表示できるようにします
ユニバース制約の適用	インポートしたユニバースのユーザに事前定義されたユニバース制約を適用できるようにします
ユニバースのリンク	2つのユニバースをリンクしてコンポーネントを共有できるようにします
接続の作成、変更、または削除	BI プラットフォームリポジトリに格納されているか、個人用接続または共有接続として格納されているユニバース接続を作成、変更、削除できるようにします。
ユーザが所有するオブジェクトの基本設定の変更	<p>アプリケーションオブジェクトの基本設定メニューを表示します</p> <p>このアクセス権がないと、ユーザはどのアプリケーションでも個人用の基本設定を設定できず、基本設定メニューがアプリケーションに表示されません。たとえば、この権限がないと、ユーザは Web Intelligence または BI ラUNCHパッドアプリケーションのレポートで使用する測定単位 (インチまたはミリメートル) を選択できません。</p>

31.3.11.6 インフォメーションデザインツール

権限	説明
セキュリティプロファイルの管理	<p>セキュリティエディタを開けるようにします</p> <p>セキュリティプロファイルを操作するには、ユニバースに対する権限も必要です。</p>
プロジェクトの共有	ローカルプロジェクトを共有して、共有プロジェクトとローカルプロジェクトを同期化できるようにします
接続の作成、変更、または削除	<ul style="list-style-type: none">公開済みリソースビューからセキュリティ接続を作成および削除できるようにします接続エディタで接続を編集できるようにします接続をリポジトリに公開できるようにします

権限	説明
ユニバースの公開	ユニバースをリポジトリに公開できるようにします
ユニバースの取得	公開済みのユニバースを、編集予定のローカルプロジェクトに取得できるようにします
すべてのユーザ用に保存	ユニバースの取得時に、すべてのユーザ用に保存できるようにします
統計の計算	統計を計算して公開するテーブルと列を選択できるようにします
ユーザが所有するオブジェクトの基本設定の変更	<p>アプリケーションオブジェクトの基本設定メニューを表示します</p> <p>このアクセス権がないと、ユーザはどのアプリケーションでも個人用の基本設定を設定できず、基本設定メニューがアプリケーションに表示されません。たとえば、この権限がないと、ユーザは Web Intelligence または BI ラウンチパッドアプリケーションのレポートで使用する測定単位 (インチまたはミリメートル) を選択できません。</p>

31.3.11.7 アラート

権限	説明
アラートのトリガ	<p>アラートイベントをトリガできるようにします。ドキュメントに対してアラートをトリガするには、次の追加権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する "表示" および "スケジュール" 権限 関連イベントに対する "表示" および "トリガ" 権限
オブジェクトの購読	<p>アラートイベントを購読できるようにします。イベントを購読するには、次の追加権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> 関連イベントに対する "表示" 権限 ユーザ自身のアカウントに対する "購読" 権限 <p>ドキュメントのアラートを購読するには、次の追加権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する "表示" 権限 ドキュメントに対する "インスタンスの表示" 権限 関連イベントに対する "表示" 権限 ユーザ自身のアカウントに対する "購読" 権限

権限	説明
ユーザが所有するオブジェクトの基本設定の変更	<p>アプリケーションオブジェクトの基本設定メニューを表示します</p> <p>このアクセス権がないと、ユーザはどのアプリケーションでも個人用の基本設定を設定できず、基本設定メニューがアプリケーションに表示されません。たとえば、この権限がないと、ユーザは Web Intelligence または BI ラウンチパッドアプリケーションのレポートで使用する測定単位 (インチまたはミリメートル) を選択できません。</p>

31.3.11.8 SAP BusinessObjects Mobile

権限	説明
SAP BusinessObjects Mobile アプリケーションへのログオン	モバイルアプリケーションから BI プラットフォームにログオンして、ドキュメントを表示できるようにします
ドキュメントアラートの購読	<p>ドキュメントおよび繰り返されるインスタンスのアラートを購読できるようにします</p> <p>過去にこの権限を許可されたことがあるユーザは、現在は許可されていなくても、購読されたアラートを引き続き受信できます。アラートの受信を希望しない場合は、明示的にアラートを購読解除する必要があります。</p> <p>スケジュールに対するドキュメントアラートおよび繰り返しのインスタンスを購読するには、CMC のイベントの下で System Events フォルダへの "フルコントロール" アクセス権が必要です。</p>
デバイスのローカルストアへのドキュメントの保存	<p>モバイルデバイスにドキュメントを保存できるようにします</p> <p>過去に "デバイスでのドキュメントのローカル保存" 権限を許可されていて (現在は許可されていなくても)、モバイルデバイスにドキュメントを保存したことがあり、そのドキュメントがまだデバイス上に存在していても、そのドキュメントは同期プロセスで同期化されません。</p>
デバイスからドキュメントを電子メールとして送信	電子メールメッセージでレポートを送信できるようにします
ユーザが所有するオブジェクトの基本設定の変更	<p>アプリケーションオブジェクトの基本設定メニューを表示します</p> <p>このアクセス権がないと、ユーザはどのアプリケーションでも個人用の基本設定を設定できず、基本設定メニューがアプリケーションに表示されません。たとえば、この権限がない</p>

権限	説明
	と、ユーザは Web Intelligence または BI ラウンチパッドアプリケーションのレポートで使用する測定単位 (インチまたはミリメートル) を選択できません。

詳細については、*SAP BusinessObjects Mobile* のインストールとデプロイメントガイドを参照してください。

31.3.11.9 BI 管理コックピット

権限	説明
BI 管理コックピットへのアクセスを許可する	CMC の BI 管理コックピットにアクセスできます。
モニタリングへのアクセスを許可する	BI 管理コックピットでモニタリングにアクセスできます。
Visual Difference へのアクセスを許可する	BI 管理コックピットで Visual Difference にアクセスできます。
Visual Difference - 比較の作成	Visual Difference で情報オブジェクト間の新しい比較を作成できます。
Visual Difference - 比較の削除	Visual Difference で前の比較を削除できます。
Visual Difference - 比較の再実行	Visual Difference で以前に作成した比較を再度実行できます。
Visual Difference - 比較の表示	Visual Difference で比較を表示できます。

32 サーバのプロパティに関する付録

32.1 サーバのプロパティに関する付録について

このサーバのプロパティに関する付録では、各 BI プラットフォームサーバに設定可能なプロパティをその説明とともに示しています。

32.1.1 共通サーバのプロパティ

この節で説明するサーバプロパティは、すべての種類のサーバに適用されます。

リクエストポートのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
サーバ名	サーバの名前です。	デフォルト値は、サーバが存在しているノードの名前にサーバの名前を追加したものです。
ID、CUID	サーバの短い ID とクラスタの一意の ID です。読み取り専用。	これらの値は自動生成されます。
ノード	サーバが配置されているノードの名前。	この値は、インストール時に指定します。
説明	サーバの説明。	デフォルト値はサーバの名前です。
コマンドラインパラメータ	サーバ用のコマンドラインパラメータです。	デフォルト値はサーバの種類によって異なります。

リクエストポート

サーバがリクエストを受信するポートを指定します。ファイアウォールを使用する環境では、サーバがファイアウォールで開かれているポートでのみリクエストを受信待機するように設定します。サーバにポートを指定する場合は、ポートがすでに他のプロセスによって使用されていないことを確認してください。

デフォルトでは、[自動割り当て]は{TRUE}に設定され、[リクエストポート]は空になります。

① 注記

[自動割り当て]が選択されている場合、サーバは動的に割り当てられたポートにバインドされます。これは、サーバが再起動するたびにランダムなポート番号がサーバに割り当てられることを意味しています。

プロパティ	説明	デフォルト値
自動割り当て	サーバが再起動するたびに、動的に割り当てられたポートにサーバをバインドするかどうかを指定します。サーバを特定のポートにバインドする場合は、[自動割り当て]を「 FALSE 」に設定し、有効な[リクエストポート]を指定します。	デフォルト値は「 TRUE 」です。
自動起動プロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
<i>Server Intelligence Agent</i> の起動時にこのサーバを自動的に起動します	<p>Server Intelligence Agent(SIA)が起動または再起動したときに、サーバも自動的に起動するようにするかどうかを指定します。</p> <p>この値を「FALSE」に設定して SIA を起動または再起動すると、サーバは停止した状態のままになります。</p>	デフォルト値は「 TRUE 」です。
ホスト識別子のプロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
自動割り当て	自動的に割り当てられたネットワークインタフェースにサーバをバインドするかどうかを指定します。「 FALSE 」に設定すると、サーバは特定のネットワークインタフェースにバインドされます。「 TRUE 」に設定すると、サーバは使用可能な最初の IP アドレスのリクエストを受け入れます。マルチホームマシンでは、この値を「 FALSE 」に設定し、有効なホスト名または IP アドレスを指定することで、バインドする特定のネットワークインタフェースを指定できます。	デフォルト値は「 TRUE 」です。
ホスト名	サーバのバインド先のネットワークインタフェースのホスト名。ホスト名が指定されると、サーバは、ホスト名に関連付けられたすべての IP アドレスでリクエストを受け入れます。	デフォルトでは、[自動割り当て]は「 TRUE 」に設定され、[ホスト名]は空になります。
IP アドレス	サーバのバインド先のネットワークインタフェースの IP アドレス。IPv4 および IPv6 の両方のプロトコルがサポートされます。IP アドレスが指定されている場合、サーバは、その IP アドレスのみでリクエストを受け入れます。	デフォルトでは、[自動割り当て]は「 TRUE 」に設定され、[IP アドレス]は空になります。
設定テンプレートのプロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
設定テンプレートの使用	設定テンプレートを使用するかどうかを指定します。	デフォルト値は、「 FALSE 」です。
システムデフォルトの復元	このサーバに対して元のデフォルト設定を復元するかどうかを指定します。	デフォルト値は「 FALSE 」です。
設定テンプレートの設定	同じ種類のすべてのサービスに対する設定テンプレートとして現在のサーバの設定を使用するかどうかを指定します。「 TRUE 」に設定すると、[設定テンプレートの使用]で指定した同じ種類のすべてのサービスが、現在のサービスの設定を使用するようにすぐに再設定されます。	デフォルト値は「 FALSE 」です。

トレースログサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
ログレベル	<p>記録されるメッセージの重大度の下限を指定し、サーバのログファイルに記録する情報量を決定します。</p> <p>使用できるログしきい値レベルは、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定なし なし 低 中 高 	デフォルト値は「 指定なし 」です。

32.1.2 コアサービスのプロパティ

コアサービスカテゴリには、次のサーバが含まれます。

- Adaptive Job Server
- Adaptive Processing Server
- Central Management Server
- Event Server
- Input File Repository Server
- Output File Repository Server
- Web アプリケーションコンテナサーバ

Adaptive Job Server のプロパティ

一般プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
一時ディレクトリ	<p>必要な場合に一時ファイルが作成されるディレクトリを指定します。このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。パフォーマンスを改善するには、このディレクトリがローカルディスクにあることを確認してください。</p>	%DefaultDataDir%
<div> <div>① 注記</div> <p>変更を有効にするには、サーバを再起動する必要があります。</p> </div>		

Adaptive Job Server は、多くの異なるサービスをホストできます。各サービスには次のプロパティがあります。

サービスプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
同時に実行可能なジョブの最大数	<p>サーバが許可する同時に実行可能な独立したプロセス(子プロセス)の数を指定します。レポーティング環境に応じて、ジョブの最大数を調節できます。</p> <p>デフォルト設定は、ほとんどのレポーティングシナリオで使用できます。各ユーザのレポーティング環境に最適な設定は、ハードウェア構成、データベースソフトウェア、およびレポート要件によって異なります。</p>	5
子の要求の最大数	子が再起動前に処理するジョブ数を示します。	100

Adaptive Processing Server のプロパティ

一般プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
サービスの起動のタイムアウト(秒単位)	<p>サーバがサービスの開始を待機する時間を秒単位で指定します。</p> <p>指定された時間内にサービスが開始できない場合、2つの理由が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> サービスが失敗した場合。データベースなどの必要なリソースが見つからなかったり、サービスでポートの競合が発生するなどの原因が考えられます。 サービスが指定された時間内に開始されなかった場合。システムの速度が遅すぎるなどの原因が考えられます。 <p>理由を特定するためには、サーバのログファイルを確認してください。サービスが指定された時間内に開始されなかった場合は、この値を増やすことを検討してください。</p>	1200

クライアント監査プロキシサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

セキュリティトークンサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

Insight to Action サービスのプロパティ

メトリクス	説明	
各ユーザセッションのアクティブな接続の最大数	指定された時間にユーザが使用可能な SAP サーバとの接続の最大数。ユーザが RRI 可能なレポートまたはダッシュボードを開くと、使用可能な RRI ターゲットを決定するために SAP サーバとの接続が確立されます。	20
各ユーザセッションのアイドル接続の最大数	後続の RRI 要求用に開放して再使用するアイドル接続の数。この設定を増やすと、システムリソースが追加で割り当てられます。	20
最大接続待ち時間 (秒単位)	Insight to Action フレームワークの合計時間は、タイムアウト (秒単位) する前に SAP Server からの応答を待つ必要があります。	30

公開サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
スレッドプールサイズ	同時に実行できるスコープバッチの処理スレッド数を指定します。プロパティの値が "0" に設定されている場合、スレッドプールサイズは、現在のマシン内の CPU コア数に基づく式を使用して決定されます。	0

翻訳サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

モニタリングサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

プラットフォーム検索サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

パブリッシングポスト処理サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

Central Management Server のプロパティ

① 注記

これらのサーバのプロパティのいずれかを変更する場合、変更を有効にするにはサーバを再起動する必要があります。

Central Management Service のプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
ネームサーバポート	CMS が最初のネームサービスリクエストを受信待機するポートを指定します。	6400
要求されたシステムデータベース接続	<p>CMS が確立を試みる CMS システムデータベースへの接続数を指定します。リクエストされたすべてのデータベース接続をサーバが確立できない場合、CMS は機能し続けますが、同時に処理できるリクエスト数が減るため、パフォーマンスは低下します。CMS は、リクエストされた接続数に達するまで、追加の接続を確立しようとします。</p> <p>CMS の [確立されたシステムデータベース接続] メトリクスは、現在の確立された接続数を示します。</p>	14
システムデータベースへの自動再接続	サービスが中断された場合に、CMS が CMS データベースとの接続を自動的に再確立するかどうかを指定します。この値を FALSE に設定すると、処理を再開する前に CMS データベースの整合性を確認できます。データベース接続を再確立するには、CMS を再起動する必要があります。	TRUE

シングルサインオンサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
シングルサインオンの有効期限 (秒単位)	有効期限までのデータソースへの SSO 接続の有効時間 (秒単位) を指定します。これは、データソースへの Windows AD SSO に対して設定されたレポートを実行する、Windows AD ユーザに適用されます。	86400

Event Server のプロパティ

イベントサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
イベントポーリング間隔 (秒単位)	イベントを生成するファイルに対してサーバでポーリングを行う頻度を秒単位で指定します。	10 許可される値の範囲は 1 ～ 1200 秒です。
クリーンアップ間隔 (分単位)	クリーンアップユーティリティの実行頻度を分単位で指定します。	20

Input File Repository Server のプロパティ

Input Filestore サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
ファイル格納ディレクトリ	リポジトリオブジェクトが保存されるディレクトリを指定します。	%DefaultInputFRSDir/%
<div>① 注記</div> <div>このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。</div>		
一時ディレクトリ	必要な場合に一時ファイルが作成されるディレクトリを指定します。	%DefaultInputFRSDir/temp%
<div>① 注記</div> <div>このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。よりよいパフォーマンスのために、[一時ディレクトリ]の場所は[ファイル格納ディレクトリ]と同じファイルシステムにすることをお勧めします。</div>		
最大アイドル時間(分)	サーバが非アクティブな接続を閉じるまでに待機する時間の長さを指定します。設定値が短すぎると、ユーザのリクエストが途中で終了する場合があります。設定値が長すぎると、処理時間やディスク領域などのシステムリソースが過剰に消費される場合があります。	10
ファイルアクセスの最大試行回数	サーバがファイルへのアクセスを試行する回数を指定します。	1
ウィルススキャンアダプタファイルの場所	ウィルススキャンアダプタファイルの場所の絶対パスを指定します。	

Output File Repository Server のプロパティ

Output Filestore サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
ファイル格納ディレクトリ	リポジトリオブジェクトが保存されるディレクトリを指定します。	%DefaultOutputFRSDir/%
<div>① 注記</div> <div>このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。</div>		

プロパティ	説明	デフォルト値
一時ディレクトリ	必要な場合に一時ファイルが作成されるディレクトリを指定します。	%DefaultOutputFRSDir/ temp%
<div>① 注記</div> <p>このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。</p>		
最大アイドル時間 (分)	サーバが非アクティブな接続を閉じるまでに待機する時間の長さを指定します。設定値が短すぎると、ユーザのリクエストが途中で終了する場合があります。設定値が長すぎると、処理時間やディスク領域などのシステムリソースが過剰に消費される場合があります。	10
ファイルアクセスの最大試行回数	サーバがファイルへのアクセスを試行する回数を指定します。	1

Web アプリケーションコンテナサーバのプロパティ

一般プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
サービスの起動のタイムアウト(秒単位)	<p>WACS がホストしているサービスの起動をタイムアウトまで待機する時間の長さを指定します。タイムアウトが経過すると、WACS は開始されていないサービスを提供しません。低速のマシンでは、大きな値を指定することをお勧めします。</p> <p>指定した時間が短すぎて、WACS がタイムアウトまでに起動しない場合は、セントラル設定マネージャ(CCM)を通じて WACS のデフォルト設定を復元します。</p>	1200

トレースログサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
ログレベル	<p>ロギングを有効にし、重大度および詳細のレベルを [なし] (重大なイベントのみを記録)、[低] (スタートアップ、シャットダウン、開始と終了の要求メッセージ)、[中] (エラー、警告、およびほとんどのステータスメッセージ)、または [高] (除外なし。デバッグのみ使用します。CPU 使用量が増加し、パフォーマンスに影響が及ぶ場合があります) に設定します。</p> <p>選択可能なメニューは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定なし なし 低 中 高 	指定なし

ビジネスプロセス BI サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

クエリビルダサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

RESTful Web サービス - システムプロパティ設定プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
エラースタックの表示	このプロパティを有効にすると、エラーログにデバッグ用の RESTful Web サービスエラーメッセージが含まれます。デバッグ以外の目的では使用しないようにしてください。また、BI プラットフォームの詳細が表示されるなどのセキュリティの問題がある場合にも使用しないようにしてください。	未選択
1 ページあたりのデフォルトオブジェクト数	1 ページにリストされるエントリ数です。開発者は、RESTful Web サービス SDK の &pageSize=<m> パラメータを使用してこの設定を上書きできます。	50
Enterprise セッショントークンのタイムアウト (分単位)	ログオントークンが有効状態を維持する時間です。この時間を過ぎると、新しいログイントークンを生成する必要があります。	60
セッションプールサイズ	サーバパフォーマンスの向上のために使用される、キャッシュされたセッションを一度に格納できる数です。セッションプールはアクティブな RESTful Web サービスセッションをキャッシュします。これにより、ユーザは、HTTP 要求ヘッダで同じログオントークンを使用する別の要求を送信する場合にこれらのセッションを再利用できます。	1000
セッションプールタイムアウト (分)	キャッシュされたセッションの有効時間を分単位で表します。	2
HTTP Basic 認証を有効にする	この設定を有効にしない場合、RESTful Web サービス要求ではログオントークンを使用する必要があります。この設定を有効にする場合、ユーザは最初に RESTful Web サービス要求を実行するときにユーザ名およびパスワードを入力する必要があります。有効にすると、 [デフォルトの HTTP Basic 用認証スキーマ] ドロップダウンメニューが表示されます。	未選択

プロパティ	説明	デフォルト値
デフォルトの HTTP Basic 用認証スキーマ	<p>[HTTP Basic 認証を有効にする] を選択すると、4 つの認証タイプのいずれかを選択できます。HTTPS オプションを使用している場合を除き、名前およびパスワードはプレーンテキストで送信されます。</p> <p>指定できる値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • secEnterprise • secDAP • SAPR3 • secWinAD 	空白。ただし、[HTTP Basic 認証を有効にする] が選択されている場合は、デフォルトで [secEnterprise] になります。

RESTful Web サービス - クロスオリジンリソース共有設定プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
オリジンを許可する	この設定を有効にすると、CORS 対応ブラウザを使用しているユーザーは、複数のドメイン名にアクセスする必要のある Java スクリプトページにアクセスできるようになります。各ドメイン名をカンマで区切って追加します。たとえば、http://origin1.server.com:8080, http://origin2.server.com:8080 のようにします。デフォルトで、ブラウザはすべてのドメインへのアクセスが許可されています (*)。	*(アスタリスク)
最大期間 (分)	ブラウザが HTTP 要求をキャッシュできる最大時間です。	1440

RESTful Web サービス - 信頼できる認証設定プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
取得方法	<p>これは、RESTful Web サービス API /logon/trusted を使用する場合に、信頼できる認証ログオントークンを取得するために使用するクエリメソッドを設定するメニューです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [HTTP_HEADER] は、要求ヘッダ accept=application/xml (または application/json) を使用する GET クエリで使用されます。 • [QUERY_STRING] は、RESTful Web サービス API を使用する URL クエリの末尾にログオン名を追加するのに使用します (例: /logon/trusted/?user=johndoe)。 • [COOKIE] は、Web ブラウザの Cookie からログイン名を取得する場合に使用します。ドメイン、名前、値、およびパスは Cookie に保存されている必要があります。 	HTTP_HEADER
ユーザー名パラメータ	これは、ログオントークンを取得する目的で信頼できるユーザーを識別するために使用するラベルです。	X-SAP-TRUSTED-USER

BOE Web アプリケーションサービスのプロパティ

プロパティの種類	説明	デフォルト値
認証の種類	<p>BI ラUNCHパッドにログオンするユーザの認証に使用される認証の種類。</p> <p>指定できる値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AD Kerberos • AD Kerberos SSO • Enterprise • LDAP 	Enterprise
デフォルトの AD ドメイン	デフォルトの AD ドメインが使用されていると、ユーザはログインするときにドメインを指定する必要がありません。たとえば、デフォルトのドメインが“mydomain”に設定されている場合に、ユーザがユーザ名“user”でログオンすると、Active Directory ログオン認証機関によって“user@mydomain.com”の認証が試行されます。	空白
サービスプリンシパル名	サービスプリンシパル名 (SPN) は、クライアントがサービスのインスタンスを一意に識別するために使用されます。Kerberos 認証サービスでは、SPN を使用してサービスを認証します。	空白
Keytab ファイル	Keytab ファイルへの完全パス。keytab ファイルを使用すると、Web アプリケーションマシンのユーザアカウントのパスワードが露出しないように Kerberos フィルタを設定できます。	空白

Web サービス SDK および QaaWS のプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
Kerberos Active Directory のシングルサインオンの有効化	Web Services SDK および QaaWS で、Kerberos AD シングルサインオンを有効にするかどうかを指定します。	FALSE
デフォルトの AD ドメイン	デフォルトの Active Directory ドメインを使用すると、ユーザはドメインを指定しなくてもログインできます。	空白
サービスプリンシパル名	サービスプリンシパル名 (SPN) は、クライアントがサービスのインスタンスを一意に識別するために使用されます。Kerberos 認証サービスでは、SPN を使用してサービスを認証します。	空白
Keytab ファイル	Keytab ファイルへの完全パス。keytab ファイルを使用すると、Web アプリケーションマシンのユーザアカウントのパスワードが露出しないように Kerberos フィルタを設定できます。	空白

HTTP 設定プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
すべての IP アドレスに連結	すべてのネットワークインタフェースに連結するかどうかを指定します。サーバに複数の NIC がある場合に特定のネットワークインタフェースにバインドするには、このプロパティをオフにします。	TRUE
ホスト名または IP アドレスに連結	HTTP サービスが提供されるネットワークインタフェース(IP アドレスまたはホスト名)を指定します。[すべての IP アドレスに連結]をオフにした場合にのみ値を指定できます。	localhost

プロパティ	説明	デフォルト値
HTTP ポート	HTTP サービスが提供されるポートを指定します。	6405 許可される値の範囲は1～65535です。
最大 HTTP ヘッダサイズ	要求および応答 HTTP ヘッダの最大許容サイズ (バイト単位)。	32768

プロキシプロパティ経由の HTTP の設定

プロパティ	説明	デフォルト値
プロキシ経由の HTTP の有効化	プロキシ経由の HTTP コネクタを WACS で有効にするかどうかを示します。通常、リバースプロキシを使用するデプロイメントでは有効化されます。	FALSE
すべての IP アドレスに連結	プロキシ経由の HTTP ポートをすべてのネットワークインタフェースにバインドするかどうかを示します。	TRUE
ホスト名または IP アドレスに連結	プロキシ経由の HTTP サービスが提供されるネットワークインタフェース(IP アドレスまたはホスト名)を指定します。[すべての IP アドレスに連結] をオフにした場合にのみ値を指定できます。	localhost
HTTP ポート	リバースプロキシデプロイメントで HTTP サービスが提供されるポートを指定します。[プロキシ経由の HTTP を有効にする] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	6406 許可される値の範囲は1～65535です。
プロキシホスト名	IPv4 アドレス、IPv6 アドレス、ホスト名、またはプロキシサーバの完全修飾ドメイン名を指定します。[プロキシ経由の HTTP の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	空白
プロキシポート	フォワードまたはリバースプロキシサーバのポート。[プロキシ経由の HTTP の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	0 許可される値の範囲は1～65535です。
最大 HTTP ヘッダサイズ	要求および応答 HTTP ヘッダの最大許容サイズ (バイト単位)。	32768

HTTPS 設定プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
HTTPS の有効化	HTTPS/SSL 通信を有効にするかどうかを示します。	FALSE
ホスト名または IP アドレスに連結	HTTPS サービスが提供されるネットワークインタフェース(IP アドレスまたはホスト名)を指定します。[HTTPS の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	localhost
HTTPS ポート	HTTPS サービスが提供されるポートを指定します。[HTTPS の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	443 許可される値の範囲は1～65535です。
プロキシホスト名	IPv4 アドレス、IPv6 アドレス、ホスト名、またはプロキシサーバの完全修飾ドメイン名を指定します。[HTTPS の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	空白
プロキシポート	フォワードまたはリバースプロキシサーバのポート。[HTTPS の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	0 許可される値の範囲は1～65535です。

プロパティ	説明	デフォルト値
プロトコル	使用する暗号化プロトコルを指定します。 [HTTPSの有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	TLS 許可される値は TLS または SSL です。
証明書ストアのタイプ	証明書と秘密鍵が格納される証明書ストアのタイプです。多くの場合は、 [PKCS12] になります。 [HTTPSの有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	PKCS12 許可される値は PKCS12 または JKS です。
証明書ストアのファイルの場所	証明書ファイルの完全パス。 [HTTPSの有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	空白
秘密鍵のアクセス用パスワード	PKCS12 証明書ストアと JKS キースタの秘密鍵は、不正アクセスまたは盗用を防ぐためにパスワードで保護されています。WACS が証明書ストアの秘密鍵にアクセスできるように、証明書ストアを生成したときに指定したパスワードをここに入力します。 [HTTPSの有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	空白
証明書のエイリアス	証明書ストア内の証明書のエイリアスです。この値を指定しなければ、複数の証明書が格納された証明書ストアを使用する場合に、ストア内の最初の証明書が使用されます。多くの場合、値を指定する必要はありません。 [HTTPSの有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	空白
クライアント認証の有効化	クライアント認証を有効にすると、証明書信頼リストファイルに鍵が格納されているクライアントだけが WACS サービスを利用できます。その他のクライアントは拒否されます。クライアント認証は、 [HTTPSの有効化] をオンにした場合にのみ有効にすることができます。	FALSE
証明書信頼一覧ファイルの場所	証明書信頼リストファイルのフルパス。 [HTTPSの有効化] と [クライアント認証の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	空白
証明書信頼一覧の秘密鍵のアクセス用パスワード	証明書信頼リストファイルの秘密鍵へのアクセスを保護するパスワードです。 [HTTPSの有効化] と [クライアント認証の有効化] をオンにした場合にのみ値を指定できます。	空白
最大 HTTP ヘッダサイズ	要求および応答 HTTP ヘッダの最大許容サイズ (バイト単位)。	32768
同時接続のプロパティ (コネクタ別)		
プロパティ	説明	デフォルト値
最大同時接続要求	各コネクタ(HTTP、プロキシ経由の HTTP、HTTPS)が同時に処理できる同時接続 HTTP または HTTPS 要求の数を指定します。	150 許可される値の範囲は 1 ~ 1000 です。
Active Directory の設定プロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
<i>Krb5.ini</i> ファイルの場所	Kerberos 設定プロパティを保存する <i>krb5.ini</i> ファイルの完全パスです。	空白
<i>bscLogin.conf</i> ファイルの場所	<i>bscLogin.conf</i> ファイルの完全パスです。	空白

32.1.3 接続サービスのプロパティ

接続サービスカテゴリには、次のサービスが含まれます。

- ネイティブ接続サービス(スタンドアロンサーバでのホスト)
- ネイティブ接続サービス(スタンドアロンサーバでの 32 ビットホスト)
- Adaptive Connectivity サービス (APS でのホスト)

すべてのサービスが同じ設定を共有します。

Excel データアクセスサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
Excel データアクセスクリーンアップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションのクリーンアップを実行する前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。	デフォルト値は 1200 秒です。
Excel データアクセススワップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションをハードディスクにスワップする前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。[Excel データアクセスクリーンアップタイムアウト (秒)] プロパティの値より低い値を指定することをお勧めします。	デフォルト値は 600 秒です。

サービス処理プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
-------	----	--------

→ 注意

以下のサービス処理プロパティの変更後に、サーバを再起動する必要はありません。

接続プール

接続プールを有効または無効にします。

有効 - タイムアウトあり

次のいずれかの値です。

- 有効 - タイムアウトあり
- 有効 - タイムアウトなし
- 無効

① 注記

接続プールは、サーバパフォーマンスを改善するため、接続を再利用可能な状態で保持するキャッシュ機能です。

プロパティ	説明	デフォルト値			
接続プールのタイムアウト	プールにおける接続の最大アイドル時間を分単位で指定します。	60			
<div>① 注記</div> <p>このプロパティは、<code>cs.cfg</code> ファイルの <code>cs.cfg</code> パラメータと同じ意味を持ちます。プールを無効にすることは、<code>Max Pool Time</code> を 0 に設定するのと同じ意味を持ちます。タイムアウトなしでプールを有効にすることは、<code>Max Pool Time</code> を -1 に設定するのと同じ意味を持ちます。詳細については、データアクセスガイドを参照してください。</p>					
一時オブジェクトアイドル時間のタイムアウト	使用されない一時オブジェクトをサーバに保持する時間を分単位で指定します。この時間が経過した後、オブジェクトは削除され、そのリソースが回収されます。	60			
一時オブジェクトタイマーの間隔	使用状況チェックの間隔を分単位で指定します。決められた間隔で、サーバが削除候補のオブジェクトを検索します。	5			
HTTP チャンキングを有効にする	HTTP チャンキングを有効または無効にします。	有効			
<div>① 注記</div> <p>HTTP チャンキングは、3-tier デプロイメントのみに関連します。これは、ドキュメントを開くかまたは最新表示する際のパフォーマンスに影響します。応答時間が長引くと、サイズの大きなドキュメントのフェッチ時のラウンドトリップが減ることになるためです。HTTP チャンキングを無効にすることは、<code>[HTTP チャンクサイズ]</code> を 0 に設定するのと同じ意味を持ちます。</p>					
HTTP チャンクサイズ	サーバから送信される HTTP 応答のサイズをキロバイト単位で指定します。	64			
<div>下位レベルトレースプロパティ</div> <table> <tr> <th>プロパティ</th><th>説明</th><th>デフォルト値</th></tr> </table>			プロパティ	説明	デフォルト値
プロパティ	説明	デフォルト値			
<div>→ 注意</div> <p>以下の下位レベルトレースプロパティの変更後に、サーバを再起動する必要はありません。</p>					
ジョブのトレースを有効にする	Connection Server ジョブのトレースを有効にします。	無効			
<div>① 注記</div> <p>そのためには、<code>[ログレベル]</code> プロパティを <code>[高]</code> に設定する必要があります。</p>					

プロパティ	説明	デフォルト値
ミドルウェアのトレースを有効にする	<p>すべてのミドルウェアのトレースを有効にします。特定のミドルウェアをトレースするには、<code>cs.cfg</code> ファイルを設定し、サーバを再起動する必要があります。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>そのためには、ログレベルプロパティを高に設定する必要があります。</p> </div>	無効
有効データソースプロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
<div> <p>⚠ 警告</p> <p>以下の有効データソースプロパティの変更後には、サーバを再起動する必要があります。</p> </div>		
データソースを有効にする	<p>接続が必要なデータソースを選択することができます。このプロパティは、ドライバのフィルタとして機能します。使用するドライバをロードするための有効なデータソースを指定します。</p> <div> <p>⚠ 警告</p> <p>デフォルトのサーバ動作では、利用可能なすべてのドライバがロードされます。この設定を使用して、サーバの役割を特化します。これは、ネットワーク上に複数の CORBA サーバをデプロイする場合に特に役立ちます。</p> </div> <div> <p>→ 注意</p> <p>選択したデータソースのドライバのみがロードされます。その他すべてのドライバは無視されます。データソースを選択しなかった場合、サーバは利用可能なすべてのドライバをロードします。</p> </div> <div> <p>① 注記</p> <p>サーバメトリクスで、選択したデータソースが有効にされていることを確認します。ネットワークレイヤおよびデータベースは、接続サービスメトリクスに表示されます。</p> </div>	チェックなし
ネットワークレイヤ	<p>接続で使用するネットワークレイヤを指定します。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>ローカライズされていない名前のみが考慮されます。使用可能なネットワークレイヤの一覧は、<code>driver.cfg</code> ファイルで確認できます。このファイルは <code><connectionserver-install-dir>\connectionServer</code> ディレクトリにあります。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ネイティブ CORBA サーバは ODBC Adaptive CORBA サーバは JDBC

プロパティ	説明	デフォルト値
データベース	<p>接続で使用するデータベースを指定します。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>ローカライズされていない名前のみが考慮されます。データベース名が ASCII 文字列のみで構成される場合、正規表現を使用することができます。パターンでは GNU regexp 構文が使用されます。.* パターンを使用して、任意の文字に一致させます。たとえば、MS SQL Server.*\$ という表現は、すべての MS SQL Server データベースが使用されることを意味します。正規表現については、PERL Web サイト (http://www.perl.com/doc/manual/html/pod/perlre.html#Regular_Expressions) を参照してください。</p> </div>	このフィールドは、データベース名を入力するまでは空白のままです。

カスタムデータアクセスサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
カスタムデータアクセスクリーンアップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションのクリーンアップを実行する前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。	デフォルト値は 1200 秒です。
カスタムデータアクセススワップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションをハードディスクにスワップする前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。[カスタムデータアクセスクリーンアップタイムアウト (秒)] プロパティの値より低い値を指定することをお勧めします。	デフォルト値は 600 秒です。

シングルサインオンサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
シングルサインオンの有効期限(秒)	SSO 接続が有効となる有効期限までの時間(秒単位)を指定します。	デフォルト値は 86400 秒です。

プロモーションマネジメントサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

プロモーションマネジメント ClearCase サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

Visual Difference サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

関連情報

[共通サーバのプロパティ \[465 ページ\]](#)

32.1.4 Crystal Reports サービスのプロパティ

Crystal Reports サービスカテゴリには、次のサーバが含まれます。

- Crystal Reports Cache Server
- Crystal Reports Processing Server
- Crystal Reports 2020 Report Application Server のプロパティ
- Crystal Reports 2020 Processing Server

Crystal Reports Cache Server のプロパティ

Crystal Reports Cache Server と Crystal Reports Processing Server の両方に適用されるすべてのプロパティに同じ値を設定する必要があります。たとえば、Cache Server で[ビューアを最新表示すると、常に最新データが表示される](#)の設定を **TRUE** に設定した場合、Processing Server でも同じプロパティの値を **TRUE** に設定する必要があります。

① 注記

これらのサーバのプロパティのいずれかを変更する場合、変更を有効にするにはサーバを再起動する必要があります。

Crystal Reports キャッシュサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
ビューアを最新表示すると、常に最新データが表示される	ユーザがレポートを明示的に最新表示するときに、キャッシュされたすべてのページを無視して新しいデータをデータベースから直接取得するかどうかを指定します。	デフォルト値は「 FALSE 」です。

① 注記

このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。レポートオブジェクトに値を指定するには、CMC でレポートを選択し、[デフォルト設定](#) > [サーバグループの表示](#) をクリックします。

プロパティ	説明	デフォルト値
クライアント間でレポートデータを共有する	複数のクライアント間でレポートデータを共有するかどうかを指定します。	デフォルト値は TRUE です。
<div>① 注記</div> <p>このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。</p>		
アイドル状態の接続のタイムアウト (分)	Crystal Reports Cache Server がアイドル状態にある接続からのリクエストを待機する時間を分単位で指定します。通常はデフォルト値を変更する必要はありません。	デフォルト値は 20 分です。
セキュリティキャッシュのタイムアウト (分単位)	CMS をクエリする前に、リクエストを処理するためにサーバがキャッシュ済みログオン認証情報、レポートパラメータ、およびデータベース接続情報を使用する時間を分単位で指定します。	デフォルト値は 20 分です。
クライアントに提供する最も古いオンデマンドデータ (秒単位)	<p>サーバがキャッシュされたデータを使用してオンデマンドレポートからのリクエストに応答する時間を秒単位で指定します。</p> <p>サーバが受け取ったリクエストに対して、以前のリクエストのために生成されたデータを使用して応答することができ、かつ、そのデータが生成されてからの経過時間がこの設定値未満である場合、サーバは受け取ったリクエストへの応答としてこのデータを再利用します。複数のユーザが同じ情報を必要としている場合、このようにデータを再利用することによってシステムパフォーマンスが大幅に向上します。</p> <p>この値を設定するときは、ユーザに最新のデータを提供することがどの程度重要かを検討してください。頻繁に変更される重要なデータの場合など、すべてのユーザに最新のデータを提供することがとても重要な場合は、この値を 0 に設定してこのようなデータ再利用が行われないようにします。</p>	デフォルト値は 0 秒です。
<div>① 注記</div> <p>このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。</p>		
最大キャッシュサイズ (KB)	レポートのキャッシュに使用されるハードディスク領域 (KB) の量を指定します。サーバが多数のレポートを処理する場合や特に複雑なレポートを処理する場合は、キャッシュサイズを大きくする必要があります。	デフォルト値は 256000 KB です。
キャッシュファイルディレクトリ	キャッシュファイルディレクトリの場所を指定します。	%DefaultDataDir%/CrystalReportsCachingServer/temp
Java 仮想マシンの引数	JVM に提供できるコマンドライン引数を指定します。	デフォルト値は空です。

プロパティ	説明	デフォルト値
DLL 名	現在ロードされているドキュメントタイプのプラグインの名前を指定します。 このプロパティは読み取り専用です。	rasprocReport

Crystal Reports Processing Server のプロパティ

Crystal Reports Cache Server と Crystal Reports Processing Server の両方に適用されるすべてのプロパティに同じ値を設定する必要があります。たとえば、Cache Server で[ビューアを最新表示すると、常に最新データが表示される](#)の設定を **TRUE** に設定した場合、Processing Server でも同じプロパティの値を **TRUE** に設定する必要があります。

① 注記

これらのサーバのプロパティのいずれかを変更する場合、変更を有効にするにはサーバを再起動する必要があります。

Crystal Reports 処理サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
アイドルジョブのタイムアウト (分単位)	Crystal Reports Processing Server が特定のジョブのリクエストを待機する間隔の長さを分単位で指定します。	デフォルト値は 20 分です。
最大終生ジョブ数 (子単位)	各子プロセスで終生ごとに管理できるジョブの最大数を指定します。	デフォルト値は 1000 です。
ビューアを最新表示すると、常に最新データが表示される	ユーザがレポートを明示的に最新表示するときに、キャッシュされたすべてのページを無視して新しいデータをデータベースから直接取得するかどうかを指定します。複数のクライアント間でレポートデータを共有するかどうかを指定します。	デフォルト値は「 FALSE 」です。

① 注記

このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。レポートオブジェクトに値を指定するには、CMC でレポートを選択し、[▶ デフォルト設定 ▶ サーバグループの表示 ▶](#)をクリックします。

プロパティ	説明	デフォルト値
クライアント間でレポートデータを共有する	複数のクライアント間でレポートデータを共有するかどうかを指定します。複数のクライアント間でレポートデータを共有するかどうかを指定します。	デフォルト値は TRUE です。
<div>① 注記</div> <p>このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。</p>		
アイドル状態の接続のタイムアウト(分)	Crystal Reports Processing Server がアイドル状態にある接続からのリクエストを待機する時間を分単位で指定します。通常はデフォルト値を変更する必要はありません。	デフォルト値は 20 分です。
同時実行ジョブの最大数(0 は自動)	Crystal Reports Processing Server で同時に実行できる独立したジョブの最大数を指定します。このプロパティの値を "0" に設定すると、サーバが実行されているマシンの CPU とメモリに基づいて適切な値が適用されます。	デフォルト値は 0 です。
クライアントに提供する最も古いオンデマンドデータ(秒単位)	<p>サーバがキャッシュされたデータを使用してオンデマンドレポートからのリクエストに応答する時間を秒単位で指定します。</p> <p>サーバが受け取ったリクエストに対して、以前のリクエストのために生成されたデータを使用して応答することができ、かつ、そのデータが生成されてからの経過時間がこの設定値未満である場合、サーバは受け取ったリクエストへの応答としてこのデータを再利用します。複数のユーザが同じ情報を必要としている場合、このようにデータを再利用することによってシステムパフォーマンスが大幅に向上します。</p> <p>この値を設定するときは、ユーザに最新のデータを提供することがどの程度重要かを検討してください。頻繁に変更される重要なデータの場合など、すべてのユーザに最新のデータを提供することがとても重要な場合は、この値を 0 に設定してこのようなデータ再利用が行われないようにします。</p>	デフォルト値は 0 です。
<div>① 注記</div> <p>このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。</p>		
事前開始された最大子プロセス数	サーバで許可される事前開始された子プロセスの最大数を指定します。値が小さすぎると、リクエストが作成されるとすぐにサーバによって子プロセスが作成され、ユーザが遅延する可能性があります。値が大きすぎると、アイドル状態にある子プロセスによってシステムリソースが浪費される可能性があります。	デフォルト値は 1 です。

プロパティ	説明	デフォルト値
一時ディレクトリ	必要な場合に一時ファイルが作成されるディレクトリを指定します。	%DefaultDataDir%/CrystalReportsProcessingServer/temp
<div>① 注記</div> <p>このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。</p>		
Java のクラスパス	サーバで必要な Java のクラス名とパス。	%CommonJavaLibDir%/procCR.jar
Java 子仮想マシンの引数	サーバによって作成された子プロセスに提供されるコマンドライン引数を指定します。	Dbusinessobjects.connectivity.directory=%CONNECTIONSERVER_DIR%,Dcommon.businessobjects.mds.cs.ImplementationID=csEX
シングルサインオンサービスのプロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
シングルサインオンの有効期限 (秒単位)	SSO 接続が有効となる、有効期限までの時間 (秒単位) を指定します。	デフォルト値は 86400 秒です。

Crystal Reports 2020 Report Application Server のプロパティ

① 注記

これらのプロパティのいずれかを変更する場合、変更を有効にするにはサーバを再起動する必要があります。

Crystal Reports 2020 表示および変更サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
レポートジョブが閉じるまで、レポートジョブをデータベースに接続したままにするかどうか？	プロセスが実行されるまで、レポートジョブをデータベースに接続したままにするかどうかを指定します。	デフォルト値は、 FALSE です。
参照データのサイズ (レコード数)	特定のフィールドの値を使って参照するときに、データベースから返される固有レコードの数を指定します。データは、まずクライアントのキャッシュが使用可能であればそこから取得され、次にサーバのキャッシュから取得されます。いずれのキャッシュにもデータがない場合、データベースから取得されます。	デフォルト値は 100 レコードです。

プロパティ	説明	デフォルト値
アイドル状態の接続のタイムアウト(分)	<p>Report Application Server (RAS) が、タイムアウトまでアイドル状態のクライアントからのリクエストを待機する時間を分単位で指定します。</p> <p>値が小さすぎるとユーザのリクエストが途中で終了する可能性があります、また、大きすぎるとサーバのスケラビリティに悪影響を及ぼす可能性があります (たとえば、ReportClientDocument オブジェクトが明示的に閉じられない場合、サーバはアイドル状態にあるジョブが閉じられるのを不必要に待機します)。</p>	デフォルト値は 30 分です。
バッチサイズ(レコード数)	<p>各データ転送中にデータベースから返される結果セットの行数を指定します。</p> <p>たとえば、500 個のレコードがリクエストされ、バッチサイズのプロパティが 100 レコードに設定されている場合、データは 100 行の 5 つのバッチで返されます。RAS のパフォーマンスを向上させるには、ネットワーク環境、データベース、および適切なバッチサイズを設定するためのリクエストの種類を理解する必要があります。</p>	デフォルト値は 100 レコードです。
レポートをプレビューまたは最新表示するときに読み込まれるデータベースレコードの数(無制限の場合は -1)	<p>レポートのプレビューまたは最新表示時に読み取るデータベースレコード数を指定します。この設定では、ユーザがクエリまたはレポートを実行したときにサーバによりデータベースから取得されるレコード数が制限されます。この設定は、極端に大量のレコードセットを返すオンデマンドレポートを、ユーザが実行できないようにするときに便利です。</p> <p>そのようなレポートは、スケジュール設定して実行すれば、より短時間でレポートをユーザに提供でき、また、それらのクエリによるデータベースの負荷を軽減できます。</p>	デフォルト値は 20000 レコードです。
レポートジョブの最大同時実行数(無制限の場合は 0)	RAS で同時に実行できる独立したジョブの最大数を指定します。	デフォルト値は 75 個のジョブです。
クライアントに提供する最も古いオンデマンドデータ(分単位)	オンデマンドレポートがキャッシュされたレポートデータを処理する時間を分単位で指定します。	デフォルト値は 20 分です。
一時ディレクトリ	<p>必要な場合に一時ファイルが作成されるディレクトリを指定します。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。</p> </div>	%DefaultDataDir%/CrystalReportsRasServer/temp
シングルサインオンサービスのプロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
シングルサインオンの有効期限(秒単位)	SSO 接続が有効となる、有効期限までの時間(秒単位)を指定します。	デフォルト値は 86400 秒です。

Crystal Reports 2020 Processing Server のプロパティ

① 注記

これらのプロパティのいずれかを変更する場合、変更を有効にするにはサーバを再起動する必要があります。

Crystal Reports 2020 処理サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
アイドルジョブのタイムアウト (分単位)	Crystal Reports Processing Server が特定のジョブのリクエストを待機する間隔の長さを分単位で指定します。	デフォルト値は 20 分です。
最大終生ジョブ数 (子単位)	各子プロセスで終生ごとに管理できるジョブの最大数を指定します。	デフォルト値は 1000 です。
ビューアを最新表示すると、常に最新データが表示される	ユーザがレポートを明示的に最新表示するときに、キャッシュされたすべてのページを無視して新しいデータをデータベースから直接取得するかどうかを指定します。複数のクライアント間でレポートデータを共有するかどうかを指定します。	デフォルト値は「 FALSE 」です。
<div>① 注記</div> <p>このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。レポートオブジェクトに値を指定するには、CMC でレポートを選択し、デフォルト設定 > サーバグループの表示 をクリックします。</p>		
クライアント間でレポートデータを共有する	複数のクライアント間でレポートデータを共有するかどうかを指定します。複数のクライアント間でレポートデータを共有するかどうかを指定します。	デフォルト値は TRUE です。
<div>① 注記</div> <p>このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。</p>		
アイドル状態の接続のタイムアウト (分)	Crystal Reports Processing Server がアイドル状態にある接続からのリクエストを待機する時間を分単位で指定します。通常はデフォルト値を変更する必要はありません。	デフォルト値は 20 分です。
同時実行ジョブの最大数 (0 は自動)	Crystal Reports Processing Server で同時に実行できる独立したジョブの最大数を指定します。このプロパティの値を "0" に設定すると、サーバが実行されているマシンの CPU とメモリに基づいて適切な値が適用されます。	デフォルト値は 0 です。

プロパティ	説明	デフォルト値
クライアントに提供する最も古いオンデマンドデータ (秒単位)	<p>サーバがキャッシュされたデータを使用してオンデマンドレポートからのリクエストに応答する時間を秒単位で指定します。</p> <p>サーバが受け取ったリクエストに対して、以前のリクエストのために生成されたデータを使用して応答することができ、かつ、そのデータが生成されてからの経過時間がこの設定値未満である場合、サーバは受け取ったリクエストへの応答としてこのデータを再利用します。複数のユーザが同じ情報を必要としている場合、このようにデータを再利用することによってシステムパフォーマンスが大幅に向上します。</p> <p>この値を設定するときは、ユーザに最新のデータを提供することがどの程度重要かを検討してください。頻繁に変更される重要なデータの場合など、すべてのユーザに最新のデータを提供することがとても重要な場合は、この値を 0 に設定してこのようなデータ再利用が行われないようにします。</p>	デフォルト値は 0 です。
<div>① 注記</div> <p>このプロパティはレポートオブジェクトそのものに設定でき、レポートごとに異なる場合があります。レポートオブジェクトに指定された値によって、サーバ設定は上書きされます。</p>		
事前開始された最大子プロセス数	サーバで許可される事前開始された子プロセスの最大数を指定します。値が小さすぎると、リクエストが作成されるとすぐにサーバによって子プロセスが作成され、ユーザが遅延する可能性があります。値が大きすぎると、アイドル状態にある子プロセスによってシステムリソースが浪費される可能性があります。	デフォルト値は 1 です。
一時ディレクトリ	必要な場合に一時ファイルが作成されるディレクトリを指定します。	%DefaultDataDir%/CrystalReports2020ProcessingServer/temp
<div>① 注記</div> <p>このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。</p>		
レポートジョブが閉じるまで、レポートジョブをデータベースに接続したままにしておきますか?	レポートジョブが閉じるまでそのジョブをデータベースに接続したままにするかどうかを指定します。	デフォルト値は FALSE です。
レビューまたは最新表示時に読み取るデータベースレコード数 (無制限の場合は 0)	<p>レポートのレビューまたは最新表示時に読み取るデータベースレコード数を指定します。この設定では、ユーザがクエリまたはレポートを実行したときにサーバによりデータベースから取得されるレコード数が制限されます。この設定は、極端に大量のレコードセットを返すオンデマンドレポートを、ユーザが実行できないようにするときに便利です。</p> <p>そのようなレポートは、スケジュール設定して実行すれば、より短時間でレポートをユーザに提供でき、また、それらのクエリによるデータベースの負荷を軽減できます。</p>	デフォルト値は 20000 です。

シングルサインオンサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
シングルサインオンの有効期限 (秒単位)	SSO 接続が有効となる、有効期限までの時間 (秒単位) を指定します。	デフォルト値は 86400 秒です。

32.1.5 Analysis サービスのプロパティ

Analysis サービスカテゴリには、Adaptive Processing Server が含まれます。

Multi-Dimensional Analysis Service のプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
最大クライアントセッション数	サーバで同時に開くことができる MDAS セッションの最大数を指定します。 開いているセッション数がこの値に達した場合、さらに別の MDAS セッションを開始しようとすると、“サーバの使用不可”エラーメッセージが表示されます。この値を変更すると、自身のニーズと使用可能なハードウェアに応じて MDAS のパフォーマンスを最適化できます。ただし、この値を増やすと、MDAS とデータベースの両方でパフォーマンスに問題が生じる場合があります。デフォルト値の 15 セッションは、控えめな値です。ユーザクエリ数が少ないインストールでは、この値を大幅に増やし、ユーザのクエリ数が多いインストールでは、この値を小さくする必要があります。	デフォルト値は 15 に設定されます。有効な範囲は 1 ～ 100 です。
クエリから返される最大セル数	1 つのクエリでユーザに返されるセルの数を指定します。ユーザは、大量のセルを返したりメモリを大量に消費するクエリを実行できなくなります。ユーザのクエリがこのセル限界を超えると、ユーザがエラーメッセージを受信します。	デフォルト値は 100000 セルです。
フィルタ処理時に返される最大メンバー数	メンバー別のフィルタ処理時に取得されるメンバー数を指定します。取得メンバー数が非常に多い場合は、メモリを大量に消費します。	デフォルト値は 100000 メンバーです。

BEx Web アプリケーションサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
最大クライアントセッション数	サービスで許可される最大クライアントセッション数。	デフォルト値は 15 セッションです。
SAP BW マスタシステム	BI プラットフォームで作成した BW システムへの OLAP 接続名。	デフォルト値は SAP_BW です。
JCo サーバ RFC 宛先	BW システムで入力した JCo サーバ RFC 宛先の名前。	デフォルトでは、この値は空になっています。
JCo サーバゲートウェイホスト	BW システムで定義した JCo サーバゲートウェイホストの名前。	デフォルトでは、この値は空になっています。
JCo サーバゲートウェイサービス	BW システムで定義した JCo サーバゲートウェイサービスの名前。	デフォルトでは、この値は空になっています。

プロパティ	説明	デフォルト値
JCo サーバ接続カウント	自動的に作成されるプログラム数を指定します。このプログラムは、サービス用に ABAP から Java への呼び出しを処理する際に使用できます。	デフォルト値は 3 接続です。

32.1.6 データフェデレーションサービスのプロパティ

データフェデレーションサービスカテゴリには、Adaptive Processing Server が含まれます。

データフェデレーションサービスプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
最大接続数	サーバで許可される最大接続数を指定します。	デフォルト値は 32767 です。
実行のスレッドプールのサイズ	特定の時点で並行して実行できる最大クエリ数を指定します。	デフォルト値は 10 です。
接続アイドル時間のタイムアウト	非アクティブな接続が閉じられるまでの時間を秒単位で指定します。	デフォルト値は 10800 秒です。
ステートメントアイドル時間のタイムアウト	非アクティブなクエリ文が閉じられるまでの時間を秒単位で指定します。	デフォルト値は 600 秒です。

32.1.7 Web Intelligence サービスのプロパティ

Web Intelligence サービスカテゴリには、次のサーバが含まれます。

- Adaptive Processing Server
- Web Intelligence Processing Server

Adaptive Processing Server の設定

コマンドラインパラメータ

プロパティ	説明	デフォルト値
レベルへの展開	<p>BEx クエリから取得するデータのレベルを指定します。</p> <p>デフォルトで、階層が所定のレベルに展開されることはありません。デフォルトレベルは常にレベル 00 です。次のパラメータをコマンドラインに追加することで、この動作を変更することができますが、設定する値が大きすぎると、Web Intelligence ですべての階層データを取得することになり、システムのパフォーマンスおよび安定性に影響を及ぼす可能性があります。</p>	<p>-Dsap.sl.bics.expandToLevel=n</p> <p>n は 0 ～ 99 の間の整数です。n=0 の場合、またはこのパラメータを指定しない場合は、階層でレベルへの展開パラメータは使用されません。</p>

プロパティ	説明	デフォルト値
選択オプションの変数選択	<p>変数選択の選択オプションを指定します。</p> <p>このプロパティを interval に設定した場合、テキストボックスは使用できません。プロンプトダイアログボックスに開始値と終了値のみを入力できます。</p> <p>このプロパティを multivalue に設定した場合は、"値の入力" テキストボックスを使用して、BW 選択オプション変数に値を入力できます。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>このプロパティによって、Web Intelligence リッチクライアントのローカルインストールが更新されることはありません。このようなインストールのローカルレジストリ更新の詳細については、"Web Intelligence リッチクライアントインストールガイド" を参照してください。</p> </div>	<p>-Dsap.sl.bics.variableComplexSelectionMapping=n</p> <p>n は interval または multivalue です。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>BI 4.1 SP05 より前では、このオプションのデフォルト値は interval でした。このプロパティを Adaptive Processing Server 設定に追加し、multivalue に設定する場合は、既存のドキュメントで次のアクションを行う必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントを消去する必要があります。 複数値選択と互換性を持つように、クエリプロンプトのデフォルト値を変更する必要があります。 </div>

Web Intelligence モニタリングサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
モニタリングを有効にする	サービスのモニタリングを有効にするかどうかを指定します。	TRUE
モニタリングスレッドループの遅延 (秒)	サービスからクライアントに ping 送信を試行する間隔を秒単位で指定します。	300
監視中のリソースのデフォルトクリーンアップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションのクリーンアップを実行する前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。	1200
監視中のリソースのデフォルトスワップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションをハードディスクにスワップする前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。監視中のリソースのデフォルトクリーンアップタイムアウトプロパティの値より小さい値を指定することをお勧めします。	600
サービスプロファイリングの有効化		TRUE
サービスアクティビティ監視の有効化		TRUE

ビジュアライゼーションサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
ビジュアライゼーションエンジンクリーンアップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションのクリーンアップを実行する前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。	1200

プロパティ	説明	デフォルト値
ビジュアライゼーションエンジンスワップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションをハードディスクにスワップする前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。ビジュアライゼーションエンジンクリーンアップタイムアウト (秒) プロパティの値より小さい値を指定することをお勧めします。	600

Rebean サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

ドキュメントリカバリサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
設定プロパティはありません。		

DSL ブリッジサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
DSL ブリッジエンジンクリーンアップタイムアウト (秒)	クライアントのセッションのクリーンアップを実行する前に、非アクティブなクライアントをサービスが待機する時間を秒単位で指定します。	1200

Web Intelligence Processing Server のプロパティ

Web Intelligence Processing Server のプロパティは、次のサービスに分類されます。

- 情報エンジン
- Web Intelligence コア
- Web Intelligence 処理
- Web Intelligence 共通

しきい値の設定について、各表で説明します。

情報エンジンサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
値の一覧キャッシュ有効化	Web Intelligence Processing Server で値の一覧のキャッシュを有効にするかどうかを指定します。	TRUE
値の一覧のバッチサイズ (項目数)	値の一覧のバッチごとのエントリ (値) の最大数を指定します。	1000
最大並べ替え (カスタム) サイズ (項目数)	カスタムの並べ替えの最大エントリ数を指定します。	100
ユニバースキャッシュの最大サイズ (ユニバース数)	Web Intelligence Processing Server にキャッシュされるユニバースの数を指定します。	20
値の一覧の最大サイズ (項目数)	各値の一覧のエントリ (値) の最大数を指定します。	50000

Web Intelligence コアサービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
リサイクルまでのタイムアウト (秒数)	処理済みドキュメントの合計数がリサイクルまでの最大ドキュメント数プロパティで指定された値を上回った場合に、Server Intelligence Agent (SIA) がサーバを停止して再起動するまでサーバがアイドル状態になる時間を秒単位で指定します。	1200
アイドル状態のドキュメントのタイムアウト (秒)	Web Intelligence Processing Server セッションがスワップされるまでの時間を秒単位で指定します。この期間にクライアントがリクエストを生成しない場合、セッションはハードディスクにスワップされて、アクティブなセッションのリソースが解放されます。	300 有効な範囲は 100 ～ 10000 秒です。
サーバポーリング間隔 (秒)	サーバが新しいスレッドリクエストをポーリングする間隔を秒単位で指定します。サーバは、ポーリングフェーズ中、未使用ドキュメントのスワップなどのクリーンアップアクションを実行して、サーバのメモリがメモリの上限のしきい値を超えないようにします。	120
ユーザあたりの最大ドキュメント数	いつでもユーザに関連付けることができるアクティブセッション (Web Intelligence ドキュメント) の最大数を指定します。したがって、5 の場合、ユーザは、一度に最大 5 つのアクティブセッションを使用できます。	5 有効な範囲は 1 ～ 20 です。
リサイクルまでの最大ドキュメント数	サーバがリサイクル対象と見なすまで処理可能な Web Intelligence ドキュメントの数を指定します。処理済みのドキュメントの数に到達し、サーバがアイドル状態の場合、サーバは閉じて、Server Intelligence Agent (SIA) がサーバの新しいインスタンスを起動します。ただし、サーバの新しいインスタンスが起動されるまでに遅延が発生します。遅延時間はリサイクルまでのタイムアウトプロパティで定義されます。	50
ドキュメントマップ最大サイズエラーの許可	<最大接続数>プロパティが制限されるかどうかを指定します。このプロパティが有効な場合は、<最大接続数>プロパティに設定された値がサーバで認識されます。無効な場合、最大接続数プロパティは無視されます。	TRUE
アイドル状態の接続のタイムアウト (分)	サーバがアイドル状態にある接続からのリクエストを待機する時間を分単位で指定します。設定値が短すぎると、リクエストが途中で終了する場合があります。設定値が長すぎると、アイドル状態のリクエストが終了するまでサーバが待機している間に、リクエストがキューに入れられる可能性があります。	20
最大接続数	一度に開くことができる最大同時セッション数を指定します。これは概算数です。この設定では、スワップされる非アクティブセッション、またはセッション数の分析のために作成されるセッションはカウントされません。この制限に達し、リクエストを処理できる他のサーバがない場合、ユーザはエラーメッセージを受け取ります。	200 有効な範囲は 5 ～ 65535 です。

① 注記

このプロパティがサーバで認識されるためには、<ドキュメントマップ最大サイズエラーの許可>プロパティを有効にする必要があります。

プロパティ	説明	デフォルト値
メモリ分析有効化	<p>メモリの分析を有効にするかどうかを指定します。このプロパティが有効な場合、次のプロパティがアクティブになり、サーバによって認識されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <メモリの最大しきい値> <メモリの上位しきい値> <メモリの下位しきい値> <p>サーバのプロセスメモリが<メモリの上位しきい値>を上回ると、ドキュメントの保存アクションのみが許可されます。プロセスメモリが<メモリの最大しきい値>を上回ると、すべてのアクションは停止し、失敗します。</p>	TRUE
メモリの下位しきい値 (MB)	メモリ使用量の下位しきい値を指定します。	3500
メモリの上位しきい値 (MB)	メモリ使用量の上位しきい値を指定します。	4500
メモリの最大しきい値 (MB)	メモリ使用量の最大しきい値を指定します。	6000
APS サービスモニタリングを有効にする	Adaptive Processing Server でホストされる APS サービスによる、サーバのモニタリングを有効にします。	TRUE
APS サービスの Ping 失敗の再試行数	APS サービスに到達できないと決定するまでに、サーバが到達を試行する回数を指定します。	3
APS サービスモニタリングスレッドの期間	APS サービスへの到達を試行する間隔の遅延期間を示します。	300
現利用状況ログを有効にする	<p>サーバのログファイルに完全なトレースを生成するかどうかを指定します。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>このプロパティは、トラブルシューティング時のデバッグを目的とする場合のみ有効にします。通常操作時は、FALSE に設定します。</p> </div>	FALSE

Web Intelligence 処理サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
HTTP URL 使用有効化	リモートに保存されているファイルにサーバがアクセスできるかどうかを指定します。	TRUE
プロキシ値	ネットワークのプロキシサーバのアドレスを指定します。ネットワークにプロキシサーバがあり、リモートに保存されているファイルにアクセスしようとしている場合にのみ値を指定する必要があります。	空白

Web Intelligence 共通サービスのプロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
キャッシュのタイムアウト (分)	ドキュメントのキャッシュの内容がクリアされるまでの時間を分単位で指定します。タイムアウトは、各ドキュメントの最新アクセス日付によって異なります。	4370
ドキュメントキャッシュクリーンアップ間隔 (分)	ドキュメントキャッシュがスキャンされて、<最大ドキュメントキャッシュサイズ>、<ドキュメントキャッシュの最大縮小領域>、および<キャッシュの最大ドキュメント数>設定に対してチェックされる間隔を分単位で指定します。	120
キャッシュ共有禁止	キャッシュ共有を禁止するかどうかを指定します。デフォルトでは、キャッシュ共有は有効になっています。つまり、すべての Web Intelligence Processing Server インスタンスで同じキャッシュを共有します。ただし、Web Intelligence Processing Server のインスタンスごとに1つのキャッシュを使用する場合は、このプロパティを有効にする必要があります。	FALSE
ドキュメントキャッシュ有効化	ドキュメントキャッシュを有効にするかどうかを指定します。このプロパティが有効な場合、キャッシュは、スケジュールされた Web Intelligence ドキュメントと共に事前ロードできます。	TRUE
リアルタイムキャッシュ有効化	リアルタイムキャッシュを有効にするかどうかを指定します。このプロパティが有効な場合、キャッシュを動的にロードできます。したがって、Web Intelligence Processing Server は、Web Intelligence ドキュメントを表示時にキャッシュします。また、ドキュメントでプリキャッシュが有効な場合、サーバはドキュメントがスケジュールされたジョブとして実行された場合にもそのドキュメントをキャッシュします。	TRUE
最大ドキュメントキャッシュサイズ (KB)	ドキュメントキャッシュの最大サイズを指定します。この制限に達すると、ドキュメントキャッシュは<ドキュメントキャッシュの最大縮小領域>プロパティに基づいてクリアされます。	1000000
ドキュメントキャッシュの最大縮小領域 (%%)	新しいアクションの実行を可能にし、キャッシュ内に結果を保存するために空にするキャッシュの割合を指定します。“最終アクセス時刻”が最も古いドキュメントから消去されます。	70
最大文字ストリームサイズ (MB)	Web Intelligence クライアントに送信される最大文字ストリームサイズを指定します。	5
<div>  注記 </div> <div> 最大文字ストリームサイズプロパティを超えると、Web Intelligence ドキュメントは作成されず、クライアントはエラーメッセージを受け取ります。 </div>		有効な範囲は 1 ～ 4095 MB です。
バイナリストリーム最大サイズ (MB)	Web Intelligence クライアントに送信されるバイナリストリームの最大サイズを MB 単位で指定します。	50
<div>  注記 </div> <div> バイナリストリーム最大サイズプロパティを超えると、Web Intelligence ドキュメントは作成されず、クライアントはエラーメッセージを受け取ります。 </div>		有効な範囲は 1 ～ 4095 MB です。
イメージディレクトリ	イメージディレクトリの場所を指定します。	空白

プロパティ	説明	デフォルト値
アウトプットキャッシュディレクトリ	キャッシュの場所を指定します。	空白

一般プロパティ		
プロパティ	説明	デフォルト値
シングルサインオンの有効期限 (秒単位)	SSO 接続が有効となる、有効期限までの時間 (秒単位) を指定します。	86400

関連情報

[Web Intelligence サーバのメモリしきい値の設定 \[497 ページ\]](#)

32.1.7.1 Web Intelligence サーバのメモリしきい値の設定

以下の節では、[メモリの最大しきい値]、[メモリの上位しきい値]、または[メモリの下位しきい値]の値を超えた場合の、Web Intelligence サーバの動作について説明します。

メモリの下位しきい値

<Memory Lower Threshold> の制限に達すると、サーバは非アクティブなドキュメントをハードディスクに交換し、アクティブなドキュメントを保存するための追加メモリを割り当てます。各ユーザには、<Maximum Documents per User> ではなく、1つのアクティブなドキュメントのみが許可されます。

メモリの上位しきい値

この <Memory Upper Threshold> に達すると、リソースを解放してサーバを保護するために、次のようなサーバアクションが実行されます。

- サーバは新しい接続と新しいクライアント呼び出しを拒否します。Web Intelligence ドキュメントの [保存] オプションのみ許可されます。アクションをリクエストしたユーザには、「サーバ使用中」メッセージが表示され、保留中の変更を保存する必要があることが知らされます。
- サーバは十分なリソースを解放するためにシステムのクリーンアップを有効にして、割り当てられたメモリの量が <Memory Upper Threshold> プロパティで設定された制限を下回るようにします。
- サーバは、読み取り専用ドキュメントを閉じようとしています。
- システムのクリーンアップ中に十分な量のメモリが解放されなかった場合、サーバは [編集] モードのドキュメントを閉じる処理を開始します。サーバは、LIFO プロトコルに基づいてドキュメントを閉じる処理を開始します。この場合、最初に最新のアクティブなドキュメントがメモリから消去されます。サーバは安全なレベルに到達するまで、ドキュメントを閉じる処理を継続します。このレベルは、<Memory Upper

Threshold> - (20%*(**<Memory Upper Threshold>**)) という計算に基づいています。たとえば、[メモリの上位しきい値] プロパティが 4500 MB に設定されている場合、安全なレベルは次のようになります。

```
4500MB - .20*4500MB = 3600MB
```

クライアント呼び出しが実行されているときに、サーバはドキュメントを閉じることができません。サーバがこのしきい値に達すると、最新表示されたドキュメント、別の形式にエクスポートされたドキュメント、時間のかかるその他の操作は、終了されません。サーバが、十分なメモリを回復できず、**<Memory Upper Threshold>** をまだ超えている場合には、サーバは再起動します。

メモリの最大しきい値

<Memory Maximum Threshold> の制限に達すると、現在の操作が中断します。すべてのクライアント呼び出しは終了されます。呼び出し終了後に、対応するドキュメントが閉じられます。

33 サーバのメトリクスに関する付録

33.1 サーバのメトリクスに関する付録について

この付録では、特別な記載がないかぎり、サーバという用語は SAP BusinessObjects サーバを意味し、BI プラットフォームがインストールされていたり、稼働したりしているマシンは指しません。

サーバのメトリクスは、稼働していないサーバでは使用できません。

付録に記載されているメトリクスに加えて、モニタリングアプリケーションでは、以下のサーバのステータスを監視できます。

サーバの状態	説明
ヘルスステータス	<p>ヘルスステータスは、サーバの健全性全般を表示します。以下は、可能な値です。</p> <ul style="list-style-type: none">0 = 赤色 (危険)1 = 黄色 (注意)2 = 緑色 (正常)
サーバの有効ステータス	<p>このステータスでは、サーバが有効かどうかを表示します。可能な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">0 = 無効1 = 有効
サーバ実行中ステータス	<p>このステータスでは、サーバの実行状態を表示します。可能な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">0 = 停止1 = 開始2 = 初期化中3 = 実行中4 = 停止中5 = 失敗6 = エラー有りで実行中7 = 警告有りで実行中

33.1.1 一般的なサーバのメトリクス

以下のメトリクスは、指定されたサーバが稼働しているマシンを示すものです。

マシン固有メトリクス

メトリクス	説明
マシン名	サーバが稼働しているマシンのホスト名。
オペレーティングシステム	サーバが稼働しているマシンのオペレーティングシステム。
CPU の種類	サーバが稼働しているマシンの中央処理装置の種類。このメトリクスは、Adaptive Processing Server または Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) では使用できません。
CPU	サーバで利用できる CPU の数。マルチコアハードウェアの場合、このメトリクスは物理プロセッサの数ではなく論理 CPU の数を示す可能性があります。このメトリクスは、Adaptive Processing Server または Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) では使用できません。
コアの数	BI プラットフォームサーバがホストされているマシン内のコアの数を表示します。
RAM (MB)	サーバが稼働しているマシンで利用できるメガバイト単位のメモリ量。このメトリクスは、Adaptive Processing Server または Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) では使用できません。
ローカル時刻	ローカル時刻。
ディスクサイズ (GB)	BI プラットフォームがインストールされているディスクのサイズ (ギガバイト)。このメトリクスは、Adaptive Processing Server または Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) では使用できません。
使用ディスク領域 (GB)	BI プラットフォームがインストールされているディスクの使用領域 (ギガバイト)。これには、BI プラットフォームだけでなく、マシンの別のプログラムによって使用されている領域が含まれます。このメトリクスは、Adaptive Processing Server または Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) では使用できません。

以下のメトリクスは、指定された SAP BusinessObjects サーバについて説明しています。

サーバ固有メトリクス

メトリクス	説明
ネームサーバ	このサーバがアドレスを公開する CMS サーバの名前とポート番号。
登録名	サーバの内部名。これは、CMC の[サーバ]画面に表示される名前ではありません。
バージョン	サーバのバージョン。
開始時刻	サーバが最後に起動された時刻。
PID	サーバの固有プロセス ID 番号。サーバが稼働しているマシンのオペレーティングシステムにより、PID が生成されます。PID を使用して、特定のサーバを識別することができます。
ホスト名	サーバで現在使用中のホスト名のカンマ区切りリスト。
ホスト IP アドレス	サーバがリクエストを受信待機する IP アドレスのカンマ区切りリスト。
リクエストポート	サーバが他のサーバからのリクエストを受信待機するポート。サーバが複数の IP アドレスでリクエストを受信待機している場合、サーバのリクエストポートは常に同じになります。他のプロセスでリクエストポートが使用される場合、サーバは起動されません。このポートが他のプロセスで使用されていないことを確認します。

メトリクス	説明
使用中のサーバスレッド	現在、リクエストを処理中のサーバスレッドの数。この数がサーバのスレッドプールの最大サイズと同じ場合、追加のリクエストを並行して処理できず、新規リクエストは使用中のスレッドが利用可能になるまで待機する必要がある可能性があることを示しています。

監査メトリクス

メトリクス	説明
キュー内の監査イベントの現在の数	監査対象で記録されたものの、CMS Auditor によって取得されていない監査イベントの数。この数が際限なく増加する場合、監査の設定が正しくないか、システムに対する負荷が非常に大きくなり、Auditor が取得できる以上の速さで監査イベントが生成されていることを示している可能性があります。

① 注記

サーバを停止する場合、まずサーバを無効にし、このメトリクスが“0”になるまで待機します。待機しない場合、サーバが再起動して CMS がポーリングするまでキュー内に残り、監査データベースに到達しない監査イベントが発生する場合があります。

サービスメトリクスのロギング

メトリクス	説明
ロギングディレクトリ	この場所に、サーバのログファイルがあります。

33.1.2 Central Management Server のメトリクス

次の表は、Central Management Server(CMS)の[[メトリクス](#)]画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示します。

Central Management Server のメトリクス

メトリクス	説明
監査データベースへの接続確立	CMS から監査データベースへの正常な接続が確立されているかどうかを示します。値が“1”の場合は、接続が確立されていることを示します。値が“0”の場合は、監査データベースへの接続が確立されていないことを示します。CMS が Auditor であれば、この値は“1”です。値が“0”の場合は、監査データベースへの接続が確立できない理由を調査してください。
CMS Auditor	CMS が Auditor として機能しているかどうかを示します。値が“1”の場合は、CMS が Auditor として機能していることを示します。値が“0”の場合は、CMS が Auditor として機能していないことを示します。
監査データベースの接続名	監査データベース接続の名前。必ずしも監査データベース自体の名前ではありません。このメトリクスが空の場合は、監査データベースへの接続が確立できないことを示します。
監査データベースのユーザ名	監査データベースへの接続に使用されるユーザアカウントの名前。

メトリクス	説明
監査データベースの最終更新日	CMS が監査対象からイベントを取得し始めた直近の日付と時刻。CMS が Auditor の場合、このメトリクスには ["メトリクス"] 画面がロードされた時刻に近い時刻が表示されるはず。この値が、画面がロードされた時刻の 2 時間前より前であれば、監査が適切に動作していないことを示している可能性があります。
監査スレッドの最終ポーリングサイクル期間 (秒)	<p>最終ポーリングサイクルの秒単位の時間。これは、以前のポーリングサイクルにおけるイベントデータの監査データベースへの最長到達遅延を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 値が 20 分未満の場合は、システムが正常であることを示します。 値が 20 分から 2 時間までの場合は、システムがビジー状態にあることを示します。 値が 2 時間を越える場合は、システムが非常にビジー状態にあることを示します。この状態が長く続き、遅延が長すぎると判断した場合、すべての監査データベースに対するデプロイメントを更新してデータをより高い頻度で受信するか、システムで追跡される監査イベントの数を減らすことをお勧めします。
監査スレッド使用率	<p>Auditor CMS が監査対象からのデータ収集に費やすポーリングサイクルの割合。残りの時間は、ポーリング間の間隔です。</p> <p>この値が 100% に達している場合は、次のポーリングの開始予定時に、Auditor が監査対象からデータをまだ収集していることを意味します。これにより、イベントの監査データベースへの到達が遅れる可能性があります。スレッド使用率が頻繁に 100% に達し、数日間 100% のままである場合は、デプロイメントを更新して監査データベースにより高い頻度でデータが送られるようにするか、システムで追跡される監査イベントの数を減らすことをお勧めします。</p>
クラスタ化 CMS サーバ	クラスタ内で実行中の Central Management Server のホスト名とポート番号のセミコロン区切りリスト。
同時接続ユーザによって確立されたセッション数	同時接続ライセンスを持つユーザの合計セッション数。
登録ユーザによって確立されたセッション数	指定ライセンスを持つユーザの合計セッション数。
起動後のユーザセッションのピーク数	CMS の起動後に処理された同時接続ユーザセッションのピーク数。
サーバによって確立されたセッション数	BI プラットフォームサーバで CMS を使用して確立された同時接続セッション数。この数が 250 を超える場合、追加の CMS を作成します。
全ユーザによって確立されたセッション数	[メトリクス] 画面のロード時に CMS によって処理される同時接続ユーザセッション数。この数が大きいほど、システムを使用しているユーザの数が多いことになります。この数が 250 を超える場合、追加の CMS を作成します。
失敗したジョブ	システム内の失敗したジョブ数。
一時停止中のジョブ	スケジュールされているが、スケジュール時間またはイベントが来ていないため、実行の準備ができていないジョブの数。
実行中のジョブ	現在実行されているジョブ数。
完了したジョブ	システム内の完了したジョブ数。
待機中のジョブ	リソースが空くの待機しているスケジュール済みのシステム内のジョブ数。
同時接続ユーザライセンス	キーコードによって示される同時接続ユーザライセンスの数。
登録ユーザライセンス	キーコードによって示される登録ユーザライセンスの数。

メトリクス	説明
ビルド日付	CMS のビルド日付。
システムデータベース接続名	CMS システムデータベース接続の名前。必ずしも CMS データベース自体の名前ではありません。
システムデータベースサーバ名	CMS システムデータベースが稼働しているサーバの名前。必ずしも CMS データベース自体の名前ではありません。
システムデータベースユーザ名	CMS データベースへの接続に使用されるユーザアカウントの名前。
データソース名	CMS システムデータベース接続の名前。
ビルド番号	CMS のビルド番号。この番号を使用して、インストールした SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームのバージョンを特定することができます。
製品バージョン	CMS の製品バージョン。
リソースバージョン	CMS のリソースバージョン。
起動後の平均コミット応答時間 (ミリ秒)	サーバ起動後の CMS でのコミット操作の実行に要したミリ秒単位の平均時間。応答時間が 1000 ミリ秒を超える場合、CMS または CMS システムデータベースの調整が必要である可能性を示しています。
起動後の平均クエリ応答時間 (ミリ秒)	サーバ起動後の CMS でのクエリ操作の実行に要したミリ秒単位の平均時間。応答時間が 1000 ミリ秒を超える場合、CMS または CMS システムデータベースの調整が必要である可能性を示しています。
起動後の最長コミット応答時間 (ミリ秒)	サーバ起動後の CMS でのコミット操作の実行に要したミリ秒単位の最長時間。応答時間が 10000 ミリ秒を超える場合、CMS または CMS システムデータベースの調整が必要である可能性を示しています。
起動後の最長クエリ応答時間 (ミリ秒)	サーバ起動後の CMS でのクエリ操作の実行に要したミリ秒単位の最長時間。応答時間が 10000 ミリ秒を超える場合、CMS または CMS システムデータベースの調整が必要である可能性を示しています。
起動後のコミット数	サーバ起動後の CMS システムデータベースに対するコミット数。
起動後のクエリ数	サーバ起動後のデータベースクエリの合計数。この数が多い場合、システムにおける処理量または負荷が大きいことを示している可能性があります。
起動後のユーザログオン数	サーバ起動後のユーザログオン数。この数が多い場合、システムにおける処理量または負荷が大きいことを示している可能性があります。
確立されたシステムデータベース接続	CMS が確立された CMS システムデータベースへの接続数。CMS データベース接続が失われると、CMS は再接続を試みます。確立されたデータベース接続の数が [要求されたシステムデータベース接続] プロパティ ([プロパティ] 画面の [Central Management Service] エリア) で指定されたシステムデータベース接続の数を常に下回っている場合、CMS が追加接続を取得できず、システムが最適に機能していないことを示している可能性があります。考えられる解決策は、CMS でより多くのデータベース接続を使用できるようデータベースサーバを設定することです。
現在使用しているシステムデータベース接続	CMS で現在使用されている CMS システムデータベースへの接続数。現在使用されている接続数は、確立されたシステムデータベース接続数より少ないか、同じである場合があります。確立された接続数と使用されている接続数が一定時間同じである場合、ボトルネックの発生を示している可能性があります。 [プロパティ] 画面の [要求されたシステムデータベース接続] プロパティの値を増やすと、CMS のパフォーマンスが改善される可能性があります。また、CMS システムデータベースの調整によってもパフォーマンスが改善される可能性があります。

メトリクス	説明
保留中のシステムデータベース要求	利用可能な接続を待機中の CMS システムデータベースに対する要求数。この数が多い場合、[要求されたシステムデータベース接続] プロパティの値を増やすことを検討します。また、CMS システムデータベースの調整によってもパフォーマンスが改善される可能性があります。
CMS システムキャッシュ内のオブジェクト数	CMS システムキャッシュ内で現在使用されているオブジェクトの合計数。
CMS システム DB 内のオブジェクト数	CMS システムデータベース内にある、現在のオブジェクトの合計数。
既存の同時接続ユーザアカウント	クラスタ内で同時接続ライセンスを持つ既存ユーザの合計数。
既存の登録ユーザアカウント	クラスタ内で指定ライセンスを持つ既存ユーザの合計数。

33.1.3 Connection Server のメトリクス

以下のメトリクスは、Connection Server 固有のメトリクスです。

接続サービスメトリクス

メトリクス	説明
データソース	<p>[プロパティ] ページで有効にされたデータソースをテーブルに一覧にします。各ネットワークレイヤとデータベースのペアについて以下の情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> [ステータス] ([ロード済] または [失敗]): ドライバの現在のステータス 使用できる接続: 使用できるプール接続数 ジョブ (CORBA): 処理されているジョブ数 (2 層デプロイメント) ジョブ (HTTP): 処理されているジョブ数 (Web Tier デプロイメント) <div> <p>① 注記</p> <p>接続プールの詳細については、データアクセスガイドを参照してください。</p> </div>

33.1.4 Event Server のメトリクス

次の表は、Event Server の[メトリクス]画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示します。

イベントサービスのメトリクス

メトリクス	説明
モニタリング中のファイルの一覧	Event Server によってモニタリングされているファイルを一覧表示する表。“ファイル名”の列には、ファイルの名前とパスが表示されます。“最終通知時刻”の列には、サーバが最後にポーリングし、ファイルの存在を確認した最新の使用日時が表示されます。
モニタリング中のファイル	Event Server によってモニタリングされているファイルの合計数。

33.1.5 File Repository Server のメトリクス

次の表は、Input/Output File Repository Server の[メトリクス]画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示します。

ファイルストアサービスのメトリクス

メトリクス	説明
作業中のファイル	現在アクセス中の File Repository Server のファイル数。
書き込み済みデータ (MB)	サーバのファイルに書き込まれた合計メガバイト数。
送信済みデータ (MB)	サーバ上のファイルから読み込まれた合計メガバイト数。
作業中のファイルの一覧	現在アクセス中の File Repository Server のファイルを表示する表。
アクティブな接続	クライアントから他のサーバへのアクティブな接続の合計数。
ルートディレクトリの利用可能なディスク領域 (GB)	サーバの実行可能ファイルを含むディスクの利用可能領域の合計 (ギガバイト)。
ルートディレクトリの空きディスク領域 (GB)	サーバの実行可能ファイルを含むディスクの空き領域の合計 (ギガバイト)。
ルートディレクトリの合計ディスク領域 (GB)	サーバの実行可能ファイルを含むディスクの合計ディスク領域 (ギガバイト)。
ルートディレクトリの利用可能なディスク領域 (%)	サーバの実行可能ファイルを含むディスクの利用可能なディスク領域の合計 (パーセント)。

33.1.6 Adaptive Processing Server のメトリクス

次の表は、Adaptive Processing Server の [メトリクス] 画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示します。

Adaptive Processing Server のメトリクス

メトリクス	説明
トランスポート層のスレッド	トランスポート層のすべてのスレッドプールにおけるスレッドの合計数。
トランスポート層のスレッドプールサイズ	共有トランスポート層スレッドの合計数。これらのスレッドは、Adaptive Processing Server のホストされたサービスのすべてで使うことができます。
利用可能なプロセッサ	サーバが実行されている Java Virtual Machine (JVM) 上で使用できるプロセッサの数。
最大メモリ (MB)	Java 仮想マシンが使用するメガバイト単位の最大メモリ量。
空きメモリ (MB)	新規オブジェクトの割り当てのため、JVM で利用できるメガバイト単位のメモリ量。
合計メモリ (MB)	Java 仮想マシンのメガバイト単位の総メモリ量。この値は、ホスト環境に応じて時間の経過とともに変化する可能性があります。

メトリクス	説明
CPU 使用率 (最後 5 分間)	直近 5 分間におけるサーバで費やされた合計 CPU 時間の割合。たとえば、単一スレッドが 4 CPU システムにおいて 1 つの CPU を完全に使用する場合、使用率は 25% になります。JVM に割り当てられたすべてのプロセッサが考慮されます。値が 80 % を超える場合は、CPU のボトルネックが考えられます。
CPU 使用率 (最後 15 分間)	直近 15 分間におけるサーバで費やされた合計 CPU 時間の割合。たとえば、単一スレッドが 4 CPU システムにおいて 1 つの CPU を完全に使用する場合、使用率は 25% になります。JVM に割り当てられたすべてのプロセッサが考慮されます。値が 70 % を超える場合は、CPU のボトルネックが考えられます。
GC 中の停止システムの割合 (最後 5 分間)	<p>ガーベジコレクション(GC)の実行中、最後の 5 分間に停止したシステムの割合。この状態では、すべての APS サービスが実行停止し、仮想マシンによって排他的アクセスが必要とされるクリティカルな段階のガーベジコレクションが実行されます。</p> <p>一般的には、負荷が発生している場合でも 1 桁の小さな数が標準的な値となるべきです。値が長期間 2 桁になっている場合、低スループットの問題が発生しており、調査が必要であることを示している可能性があります。</p>
GC 中の停止システムの割合 (最後 15 分間)	<p>ガーベジコレクション(GC)の実行中、最後の 15 分間に停止したシステムの割合。この状態では、すべての APS サービスが実行停止し、仮想マシンによって排他的アクセスが必要とされるクリティカルな段階のガーベジコレクションが実行されます。</p> <p>一般的には、負荷が発生している場合でも 1 桁の小さな数が標準的な値となるべきです。値が長期間 2 桁になっている場合、低スループットの問題が発生しており、調査が必要であることを示している可能性があります。</p>
GC 中のページフォルト数 (最後 5 分間)	ガーベジコレクション (GC) の実行中、最後の 5 分間に発生したページフォルトの数。この値が 0 よりも大きい場合、システムに対する負荷が大きくなっており、空きメモリの量が少ない状況を示しています。
GC 中のページフォルト数 (最後 15 分間)	ガーベジコレクション (GC) の実行中、最後の 15 分間に発生したページフォルトの数。この値が 0 よりも大きい場合、システムに対する負荷が大きくなっており、空きメモリの量が少ない状況を示しています。
フル GC の数	サーバ起動後のフルガーベジコレクションの数。この値が急激に増加している場合、システムの空きメモリの量が少ない状況を示しています。
JVM ロック競合数	アクセス待機中のスレッドを含む同期されたオブジェクトの数。この値が 0 よりも大きい場合、再実行されないスレッドが存在することを示している可能性があります。問題の原因に関する詳細を取得するには、スレッドダンプを開始します。
JVM デバッグ情報	ステータス、ポート、および存在する場合は接続されたクライアントを含む、SAP Java 仮想マシンに関するデバッグ情報。
JVM バージョン情報	SAP Java 仮想マシンに関するバージョン情報。
JVM デッドロックスレッドカウンタ	デッドロック状態のスレッドの数。この値が 0 よりも大きい場合、再実行されないスレッドが存在することを示します。問題の原因に関する詳細を取得するには、スレッドダンプを開始します。
JVM トレースフラグ	現在 JVM に対して有効化されているトレースフラグ。これは、JVM のトレースレベルを示します。
サービス	サーバがホストするサービスのカンマ区切りリスト。

DSLブリッジサービスのメトリクス

メトリクス	説明
DSLServiceMetrics.queryCount	クライアントとサービスの間で開いているデータリクエストの数。
DSLServiceMetrics.activeConnectionCount	クライアントとサービスの間で現在開いている接続数。
DSLServiceMetrics.activeSessionCount	クライアントとサービスの間で現在開いているセッション数。
DSLServiceMetrics.activeOLAPConnectionCount	OLAP クライアントとサービスの間で現在開いている接続数。

クライアント監査プロキシサービスのメトリクス

メトリクス	説明
サーバ起動後に受け取った監査イベント数	サービス起動後にサービスが受信したクライアント監査イベントの数。このメトリクスを使用して、クライアント監査が正しく設定されていることを確認することができます。値が“0”を超える場合は、クライアントからの監査イベントが、このクライアント監査サービスを通して問題なく転送されたことを示します。

プラットフォーム検索サービスのメトリクス

メトリクス	説明
サービス開始後の成功した抽出試行数	プラットフォーム検索サービスの開始後、ドキュメントの抽出に成功した数。
最終インデックス更新タイムスタンプ	インデックスが最後に更新された日付と時刻。
最終コンテンツストア生成タイムスタンプ	最終コンテンツストアが生成された日付と時刻。
サービス開始後の失敗した抽出試行数	プラットフォーム検索サービスの開始後、ドキュメントの抽出に失敗した数。
サービスは利用可能	サービスが利用可能な場合は [TRUE]。そうでない場合は、[FALSE] になります。
インデックスは実行中	インデックス化を実行中の場合は [TRUE]。そうでない場合は、[FALSE] になります。
インデックス処理済みドキュメント数	サービス開始後、インデックス化されたドキュメントの数を表示します。

Multi-Dimensional Analysis Service のメトリクス

メトリクス	説明
セッション数	MDAS クライアントからサーバへの現在の接続数。
キューブ数	タイムアウトしていない接続にデータを提供するために使用されているデータソースの数。
クエリ数	MDAS クライアントとサーバの間で開いているデータリクエストの数。

データフェデレーションサービスのメトリクス

メトリクス	説明
実行中のクエリ数	実行中のクエリの総数 (メモリを消費しているかどうかにかかわらず)。
接続数	データフェデレーションクエリエンジンへのユーザ接続の総数。
データソースから転送された総バイト数	データソースから読み込まれたデータ数 (バイト)。
データソースから転送されたレコードの総数	データソースから読み込まれた行の総数。
クエリの実行により作成された総バイト数	クエリの出力として作成されたデータ数 (バイト)。

メトリクス	説明
クエリの実行により作成されたレコードの総数	クエリの出力として作成された総行数。
メモリを消費しているクエリの数	メモリを消費しているクエリの総数。
クエリの実行に使用されたメモリの総バイト数	クエリの実行に現在使用されているメモリ数 (バイト)。
クエリの実行に使用されたディスクの総バイト数	クエリの実行に現在使用されているディスク数 (バイト)。
ディスクを使用しているクエリの数	ディスクを使用している実行中のクエリの総数。
リソース待機中のクエリの数	現在実行待機中の実行中のクエリの総数。
アクティブなスレッドの数	リクエストの実行に使用されるアクティブなスレッドの総数。
メタデータキャッシュに使用されたメモリの総バイト数	メタデータ、統計、およびコネクタ設定のキャッシュに使用されたメモリの総数 (バイト)。
失敗したクエリの数	失敗したクエリの総数 (例外の発生)。
クエリ分析ステップのクエリの数	分析ステップで現在実行中のクエリの総数。
クエリ最適化ステップのクエリの数	最適化ステップで現在実行中のクエリの総数。
クエリ実行ステップのクエリの数	実行ステップで現在実行中のクエリの総数。
ロードしたコネクタの数	サービスでロードしたコネクタの総数。
ロードしたコネクタへのアクティブな接続数	サービスでロードしたコネクタへのアクティブな接続の総数。
データフェデレーションサービスは利用可能です	サービスが利用可能な場合は <code>[TRUE]</code> 。そうでない場合は、 <code>[FALSE]</code> になります。

接続サービスメトリクス

メトリクス	説明
データソース	<p>[プロパティ] ページで有効にされたデータソースをテーブルに一覧にします。各ネットワークレイヤとデータベースのペアについて以下の情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ステータス (["ロード済み"] または ["失敗"]): ドライバの現在のステータス 使用できる接続: 使用できるプール接続数 ジョブ (CORBA): 処理されているジョブ数 (2 層デプロイメント) ジョブ (HTTP): 処理されているジョブ数 (Web Tier デプロイメント) <p>接続プールの詳細については、データアクセスガイドを参照してください。</p>

モニタリングサービスメトリクス

メトリクス	説明
最終 15 サイクルの平均監視ステータス計算時間 (ミリ秒)	このモニタリングサービスインスタンスで、最終 15 サイクルの監視ステータスを計算するのに必要な平均時間。
ユーザが作成したメトリクスの数	すべてのユーザに対して、クラスタ内でユーザが作成したメトリクスの合計数。
監視回数	無効化された監視および有効化された監視の両方を含む、クラスタ内の監視回数。

メトリクス	説明
<code>serviceBean.monitoringAppPropEnabled</code>	モニタリングアプリケーションが有効化されている場合は[TRUE]になります。そうでない場合は、[FALSE]になります。このメトリクスは、CMCの[モニタリングアプリケーションのプロパティ]ページの設定と一致します。
監視メトリクスの更新間隔(秒)	このモニタリングサービスインスタンスで現在使用されている更新間隔。サービスの開始時に、このメトリクスは、その時点のCMCの[モニタリングアプリケーションのプロパティ]ページの設定に初期化されるため、それ以外のときには、メトリクスがCMCページの現在の設定と異なる場合があります。
サービスは利用可能	このモニタリングサービスが有効化されている場合は[TRUE]になります。そうでない場合は、[FALSE]になります。クラスタ内でアクティブなモニタリングサービスは1つのみです。
トレンド化されたメトリクスの数	モニタリングデータベースに現在記録されているメトリクスの合計数。

BEx Web アプリケーションサービスのメトリクス

メトリクス	説明
セッション数	BEx Web アプリケーションサービス内のアクティブなセッションの合計数。

33.1.7 Web アプリケーションコンテナサーバのメトリクス

次の表は、Web アプリケーションコンテナサーバの[メトリクス]画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示します。

① 注記

Web アプリケーションコンテナサーバには、Adaptive Processing Server のメトリクスセクションで示したすべてのメトリクスもあります。

Web アプリケーションコンテナサーバのメトリクス

メトリクス	説明
実行中の WACS コネクタの一覧	サーバで実行中のすべてのコネクタの一覧。すべてのコネクタ(HTTP、HTTPS、プロキシ経由の HTTP)が表示されない場合、コネクタが有効化されていないか、スタートアップ時に失敗したことを示しています。
WACS コネクタがスタートアップ時に失敗しました	失敗したコネクタがあるかどうかを示します。true の場合、1つ以上のコネクタが起動に失敗しています。false の場合、すべてのコネクタが実行中です。接続に失敗したコネクタが1つ以上ある場合は、サーバを実行しないでください。サーバのトラブルシューティングをして、すべてのコネクタが正しく起動されるようにする必要があります。

関連情報

[Adaptive Processing Server のメトリクス \[505 ページ\]](#)

33.1.8 Adaptive Job Server のメトリクス

Job Server のメトリクス

メトリクス	説明
受信したジョブリクエスト	サーバで実行される必要があったジョブの数。
同時に実行可能なジョブ	サーバで現在実行中のジョブの数。この数が多い場合、サーバは混み合っています。
ピークジョブ	サーバで同時に実行された同時実行ジョブの最大数。この数は、サーバが再起動されるまで減少することはありません。
作成に失敗したジョブ	サーバで失敗したジョブの数。
一時ディレクトリ	一時ファイルが作成されるディレクトリ。これは、サーバの[プロパティ]画面で指定することができます。 このディレクトリに十分なディスク領域がない場合、問題が発生する場合があります。
ファイルシステム出力先のデフォルト設定が有効	サーバの [出力先] 画面で指定されたファイルシステム出力先にサーバがドキュメントを送信できる場合、[TRUE] になります。そうでない場合は、[FALSE] になります。
FTP 出力先のデフォルト設定が有効	サーバの [出力先] 画面で指定された FTP サーバ出力先にサーバがドキュメントを送信できる場合、[TRUE] になります。そうでない場合は、[FALSE] になります。
SFTP 出力先のデフォルト設定が有効	サーバの [出力先] 画面で指定された SFTP サーバ出力先にサーバがドキュメントを送信できる場合、[TRUE] になります。そうでない場合は、[FALSE] になります。 フィンガープリントが SFTP サーバと正確に一致しない場合、問題が発生することがあります。
受信トレイ送信先のデフォルト設定が有効	サーバの [出力先] 画面で指定された受信ボックス送信先にサーバがドキュメントを送信できる場合、[TRUE] になります。そうでない場合は、[FALSE] になります。
電子メール送信先のデフォルト設定が有効	サーバの [出力先] 画面で指定された電子メール送信先にサーバがドキュメントを送信できる場合、[TRUE] になります。そうでない場合は、[FALSE] になります。
スケジュールサービス	サーバで実行中のサービスを表示する表。
子	サーバで実行中の子プロセスを表示する表。

次の表は、サーバで実行中の各スケジュールサービスのメトリクスの説明を示します。

スケジューリングサービスのメトリクス

メトリクス	説明
スケジュールサービス	サービス名。
受信したジョブリクエスト	サービスで実行される必要があったジョブの数。
同時に実行可能なジョブ	サービスで現在実行中の同時に実行可能なジョブの数。この数が多い場合、サービスは混み合っています。

メトリクス	説明
ピークジョブ	サービスで同時に実行された同時実行ジョブの最大数。
同時実行ジョブの最大数	サーバが許可する同時に実行可能な独立したプロセス(子プロセス)の数。 これは、サーバの [プロパティ] 画面で指定することができます。
作成に失敗したジョブ	サービスで失敗したジョブの数。

次の表は、サーバで実行中の各子プロセスのメトリクスの説明を示します。

子メトリクス

メトリクス	説明
スケジュールサービス	子プロセスの名前。
PID	子プロセスの ID。
受信したジョブリクエスト	子プロセスで実行される必要があったジョブの数。
同時に実行可能なジョブ	子プロセスで現在実行中の同時に実行可能なジョブの数。通常、この数は "1" である必要があります。
ピークジョブ	子プロセスで同時に実行された同時実行ジョブの最大数。
最大ジョブ数	子プロセスが許可する同時実行ジョブの数。
Comm. 失敗	親 Adaptive Job Server との間で発生した通信エラーの数。この数が多い場合、子プロセスは再起動されます。
初期化中	子プロセスが初期化中である場合は、[TRUE] になります。そうでない場合は、[FALSE] になります。
シャットダウン中	子プロセスがシャットダウン中である場合、[TRUE] になります。そうでない場合は、[FALSE] になります。

33.1.9 Crystal Reports Server のメトリクス

次の表は、Crystal Reports Processing および Crystal Reports 2020 Processing Server の [メトリクス] 画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示しています。

Crystal Reports Processing Server のメトリクス

メトリクス	説明
開いているジョブ	現在サーバ上で実行中のジョブを表示する表。表には、ドキュメントの ID と名前、ジョブを実行しているユーザの名前、ドキュメントが最後にアクセスされた日付、ジョブの実行経過時間が含まれています。
処理されたリクエスト数	サーバ起動後にサーバが処理したリクエストの合計数。
開いているジョブ数	サーバとその子プロセスが現在処理しているジョブの数。
オブジェクトの種類	サーバが主に処理する InfoObject の種類。このメトリクスの値は変わりません。

メトリクス	説明
平均処理時間 (ミリ秒)	サーバが受け取った直近の 500 リクエストの処理に費やした平均時間 (ミリ秒)。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
最大処理時間 (ミリ秒単位)	サーバが直近 500 リクエストの 1 つの処理に費やした最大時間 (ミリ秒)。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
最小処理時間 (ミリ秒)	サーバが直近 500 リクエストの 1 つの処理に費やした最小時間 (ミリ秒)。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
キュー内のリクエスト数	処理待機中、または処理中のリクエストの数。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
オブジェクト DLL 名	サーバのプラグインの処理名。このメトリクスの値は変わりません。
開いている接続数	サーバとクライアント間で現在開いている接続数。
リクエスト失敗率	サーバが受信した直近 500 リクエストに対して、サーバが処理に失敗したリクエスト数。
データ転送 (KB)	サーバ起動後にクライアントに転送されるデータの合計数 (キロバイト)。
失敗したリクエスト数	サーバ起動後にサーバが完了できなかったリクエストの数。
子プロセスの最大数	サーバで許可される同時実行子プロセスの最大数を示します。

次の表は、Crystal Reports Cache Server の [\[メトリクス\]](#) 画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示します。

Crystal Reports Cache Server のメトリクス

メトリクス	説明
キャッシュヒット率 (%)	キャッシュされたデータを使って処理された、直近の 500 リクエストに対するリクエストの割合。
接続済み処理サーバ	デプロイメント内の Crystal Reports Processing Server を表示する表。この表は、サーバ名と、サーバで現在開いている接続数を示します。
処理されたリクエスト数	サーバ起動後にサーバが処理したリクエストの合計数。
オブジェクトの種類	サーバが主に処理する InfoObject の種類。このメトリクスの値は変わりません。
平均処理時間 (ミリ秒)	サーバが受け取った直近の 500 リクエストの処理に費やした平均時間 (ミリ秒)。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
最大処理時間 (ミリ秒)	サーバが直近 500 リクエストの 1 つの処理に費やした最大時間 (ミリ秒)。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
最小処理時間 (ミリ秒)	サーバが直近 500 リクエストの 1 つの処理に費やした最小時間 (ミリ秒)。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
キュー内のリクエスト数	処理待機中、または処理中のリクエストの数。この数字が、常に高く、増加する場合は、他のマシンに追加サーバを構築することを検討してください。
オブジェクト DLL 名	サーバのプラグインの処理名。このメトリクスの値は変わりません。

メトリクス	説明
キャッシュサイズ	サーバで現在ディスクにキャッシュされているデータの合計数 (キロバイト)。
開いている接続数	サーバとクライアント間で現在開いている接続数。
データ転送 (KB)	サーバ起動後にクライアントに転送されるデータの合計数 (キロバイト)。

次の表は、Crystal Reports 2020 Report Application Server の [メトリクス] 画面に表示されるサーバのメトリクスの説明を示しています。

Crystal Reports 2020 Report Application Server のメトリクス

メトリクス	説明
<i>metric_currentdoccount</i>	サーバで現在処理中のドキュメントの数。
① 注記 このメトリクスは、CMC の [モニタリング] ページに “document_s_” として表示されます。	
<i>metric_totaldoccount</i>	サーバ起動後にサーバで処理されたドキュメントの数。
① 注記 このメトリクスは、CMC の [モニタリング] ページに “document_s_” として表示されます。	
<i>metric_currentagentthreadcount</i>	サーバで現在処理中のスレッドの数。
① 注記 このメトリクスは、CMC の [モニタリング] ページに “agent thread_s_” として表示されます。	
<i>metric_totalagentthreadcount</i>	サーバ起動後にサーバで処理されたスレッドの数。
① 注記 このメトリクスは、CMC の [モニタリング] ページに “agent thread_s_” として表示されます。	

33.1.10 Web Intelligence サーバのメトリクス

Web Intelligence 処理サービスのメトリクス

メトリクス	説明
キャッシュサイズ (Kb)	キャッシュに保存されている現在のデータ数 (KB)。

メトリクス	説明
キャッシュ内の古いドキュメントの数	サーバ起動後に古すぎたためにキャッシュから削除されたドキュメントの数。
キャッシュが最大サイズに達した回数	サーバ起動後にキャッシュが許容最大サイズに達した回数。
CPU 使用率 (%)	サーバ起動後にサーバによって費やされた合計 CPU 時間の割合。
合計 CPU 時間 (秒)	サーバ起動後にサーバによって費やされた合計 CPU 時間 (秒)。
メモリ高しきい値数	サーバ起動後にサーバで高メモリしきい値に達した回数。
メモリの最大しきい値数	サーバ起動後にサーバで最大メモリしきい値に達した回数。
仮想メモリサイズ (Mb)	サーバに割り当てられた総メモリ量 (MB)。
現在のクライアント呼び出し数	サーバが現在処理している CORBA 呼び出し数。
リモート拡張エラー数	サーバが、Adaptive Processing Server がホストするリモート拡張サービスに接続できなかった回数。
現在のタスク数	サーバで現在実行されているタスク数。
合計クライアント呼び出し数	サーバ起動後にサーバが受信した CORBA 呼び出しの総数。
合計タスク数	サーバ起動後にサーバで実行されたタスクの総数。
アイドル時間 (秒)	サーバがクライアントから最後のリクエストを受信してからの経過時間 (秒)。
現在のアクティブセッション数	現在クライアントからのリクエストを受け付けられるセッションの数。
キャッシュから開いたドキュメントの数	最後のリクエスト結果がキャッシュから直接読み込まれたドキュメントの数。
ドキュメント数	サーバで現在開いているドキュメントの数。
現在のセッション数	サーバで現在作成されているセッション数。
ドキュメント交換の数	クリーンアップスレッドにスケジュールされたスワップリクエストがあるドキュメントの数。
交換されたドキュメントの数	スワップリクエストによってスワップされたドキュメントの数。
セッションタイムアウト数	サーバ起動後にタイムアウトしたセッション数。
合計セッション数	サーバ起動後にサーバ上に作成されたセッション数。
ユーザ数	サーバに接続したユーザの総数。
アクティブなスレッドの数	サーバが受け取ったリクエストを処理するスレッドの数 (非同期性スレッドプール)。
合計スレッド数	サーバ起動後に作成されたスレッド総数 (非同期性スレッドプール)。

34 サーバプレースホルダ

34.1 サーバとノードプレースホルダ

[%SERVER_FRIENDLY_NAME%](#) および [%SERVER_NAME%](#) を除き、次のプレースホルダは、同じノード上のすべてのサーバに適用されます。

① 注記

以下のプレースホルダはノードレベルで編集できます。説明とデフォルト値は、上記の表に記載されています。この一覧にないプレースホルダは、読み取り専用です。

- [%DefaultAuditingDir%](#)
- [%DefaultDataDir%](#)
- [%DefaultLoggingDir%](#)
- [%IntroscopeAgentEnableInstrumentation%](#)
- [%IntroscopeAgentEnterpriseManagerHost%](#)
- [%IntroscopeAgentEnterpriseManagerPort%](#)
- [%IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransport%](#)
- [%NCSIInstrumentLevelThreshold%](#)
- [%SMDAgentHost%](#)
- [%SMDAgentPort%](#)

⚠ 警告

編集用以外のプレースホルダは、いかなる手段でも変更しないでください。システム管理者は、(ノード管理を目的とする) 管理者グループの適切な担当者のみがノードに対する編集権限を持っていることを確認する必要があります。管理者グループの他のメンバーを含むすべてのユーザは、適切なセキュリティ権限を適用することで、ノードオブジェクトの表示/管理を制限する必要があります。プレースホルダ値のいずれかが誤って破損し、CMS が起動しない場合は、SAP ノート [3269127](#) を参照してください。

① 注記

BI ランドスケープへの悪意のある干渉を回避するためにプレースホルダの変更を制限する方法については、以下の SAP Knowledge Base Article [3278916](#) を参照してください。

プレースホルダ

プレースホルダ	説明	デフォルト値
%AuditingDatabaseConnection%	CMS によって使用される監査データベース接続。	この値は、インストール時に指定されます。
%AuditingDatabaseDriver%	監査データベースへの接続に使用されるデータベースドライバの種類。	Windows では、デフォルト値は sqlserverauditdbss です。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<code>%BINDIR%</code>	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの 64 ビットバイナリが格納されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/<platform>/</code> です。
<code>%BINDIR32%</code>	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの 32 ビットバイナリが格納されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win32_x86</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/<platform>/</code> です。
<code>%CACHESERVER_EXE%</code>	Crystal Reports Cache Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>crcache.exe</code> です。UNIX では、 <code>boe_crcached.bin</code> です。
<code>%CMS_EXE%</code>	Central Management Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>cms.exe</code> です。UNIX では、 <code>boe_cmdsd</code> です。
<code>%CONNECTIONSERVER32_EXE%</code>	32 ビット Connection Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>ConnectionServer32.exe</code> です。UNIX では、 <code>ConnectionServer32</code> です。
<code>%CONNECTIONSERVER_DIR%</code>	Connection Server のルートフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%dataAccess%connectionServer</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/dataAccess/connectionServer</code> です。
<code>%CONNECTIONSERVER_EXE%</code>	64 ビット Connection Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>ConnectionServer.exe</code> です。UNIX では、 <code>ConnectionServer</code> です。
<code>%CRCPP_BINDIR%</code>	Crystal Reports C++ サーババイナリが保存されるディレクトリ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjectsEnterprise XI 4.0%win32_x86</code> です。UNIX では、ディレクトリは次のようになります。 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/dataAccess/connectionServer/solaris_sparcv9</code> 。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<code>%CRCPP_DefaultWorkingDir%</code>	Crystal Reports C++ サーバのデフォルトの作業ディレクトリ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjectsEnterprise XI 4.0%win32_x86</code> です。UNIX では、ディレクトリは次のようになります。 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/dataAccess/connectionServer/solaris_sparcv9</code> 。
<code>%CRYSTALRAS_EXE%</code>	Report Application Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>crystalras.exe</code> です。UNIX では、 <code>boe_crystalrasd</code> です。
<code>%CR_ODBCINI%</code>	<code>.odbc.ini</code> ファイルの名前とパスが保存されます。	UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/bobje/odbc.ini</code> です。Windows では、これは空の文字列です。
<code>%CommonJavaBundlesDir%</code>	共有 OSGI バンドルが保存されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%lib%bundles</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/bundles</code> です。
<code>%CommonJavaLibDir%</code>	共通 Java ライブラリが保存されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%lib</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib</code> です。
<code>%DLLEXT%</code>	<code>.dll</code> または <code>.so</code> ファイルのデフォルトの拡張子。	Windows では、 <code>.dll</code> です。UNIX では、 <code>.so</code> です。
<code>%DLLPATH%</code>	インタプリタが実行可能ファイルを検索するディレクトリを指定する、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされたコンピュータの環境変数の名前。	Windows では、“Path” です。UNIX では、“LD_LIBRARY_PATH” です。
<code>%DLLPATH32%</code>	Solaris 32 ビットシステムで、インタプリタが実行可能ファイルを検索するディレクトリを指定する、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされたコンピュータの環境変数の名前。	Solaris マシンでは、“LD_LIBRARY_PATH_32” です。他のオペレーティングシステムでは、このプレースホルダは空の文字列です。
<code>%DLLPATH64%</code>	Solaris 64 ビットシステムで、インタプリタが実行可能ファイルを検索するディレクトリを指定する、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされたコンピュータの環境変数の名前。	Solaris マシンでは、“LD_LIBRARY_PATH_64” です。他のオペレーティングシステムでは、このプレースホルダは空の文字列です。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
%DLLPREFIX%	.dll または .so ファイルのデフォルトのプレフィックスです。	UNIX では、“lib” です。このプレースホルダは、Windows マシンでは空の文字列です。
%DLLPRELOAD%	プラットフォーム向けの LD_PRELOAD 環境変数名。	UNIX では、 LD_PRELOAD です。このプレースホルダは、Windows マシンでは空の文字列です。
%DLLPRELOAD32%	32 ビット AIX システム向けの LD_PRELOAD 環境変数名。	AIX では、 LDR_PRELOAD です。このプレースホルダは、他のマシンでは空の文字列です。
%DLLPRELOAD64%	64 ビット AIX システム向けの LD_PRELOAD 環境変数名。	AIX では、 LDR_PRELOAD64 です。このプレースホルダは、他のマシンでは空の文字列です。
%DP%	バスの区切り記号。	Windows では、“;” です。UNIX では、“:” です。
%DefaultAuditingDir%	監査一時ファイルが書き込まれるディレクトリ。最適なパフォーマンスのため、この場所はサーバのローカルドライブにある必要があります。	Windows では、 <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%Auditing です。UNIX では、 <INSTALLDIR>/sap_bobj/data/Auditing/ です。
%DefaultDataDir%	Job Server で使用される一時ディレクトリ。	Windows では、 <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%Data です。UNIX では、 <INSTALLDIR>/sap_bobj/data/ です。
%DefaultInputFRSDir%	Input File Repository Server のルートフォルダ。	Windows では、 <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%FileStore%Input です。UNIX では、 <INSTALLDIR>/sap_bobj/data/frsinput です。
%DefaultLoggingDir%	ログファイルの保存場所。	Windows では、 <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%logging です。UNIX では、 <INSTALLDIR>/sap_bobj/logging です。
%DefaultOutputFRSDir%	Output File Repository Server のルートフォルダ。	Windows では、 <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%FileStore%Output です。UNIX では、 <INSTALLDIR>/sap_bobj/data/frsoutput です。
%DefaultWorkingDir%	64 ビットサーバの作業ディレクトリ。	Windows では、 <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64 です。UNIX では、 <INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/<platform> です。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<code>%DefaultWorkingDir32%</code>	32 ビットサーバの作業ディレクトリ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%\win32_x86</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/<platform></code> です。
<code>%EPM_LD_PRELOAD_ONCE%</code>	プラットフォーム向けの LD_PRELOAD_ONCE 環境変数名。	<code>\$LD_PRELOAD_ONCE\$</code>
<code>%EVENTSERVER_EXE%</code>	Event Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>EventServer.exe</code> です。UNIX では、 <code>boe_eventsd</code> です。
<code>%EXEEXT%</code>	実行可能ファイルのデフォルトの拡張子。	Windows では、 <code>.exe</code> です。このプレースホルダは、UNIX では使用できません。
<code>%EXEPATH%</code>	インタプリタが実行可能ファイルを検索するディレクトリを指定する、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされたコンピュータの環境変数の名前。	Windows では、“Path” です。UNIX では、“PATH” です。
<code>%EnterpriseDir%</code>	64 ビットの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされる場所。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40</code> です。
<code>%EnterpriseDir32%</code>	32 ビットの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされる場所。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40</code> です。
<code>%ExternalJavaLibDir%</code>	外部のサードパーティ Java ライブラリが保存されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%\java\lib\external</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/external</code> です。
<code>%FILESERVER_EXE%</code>	File Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>fileserv.exe</code> です。UNIX では、 <code>boe_filesd</code> です。
<code>%HOARD_PATH%</code>	メモリマネージャの場所。	デフォルトでは、この値は空になっています。
<code>%HOARD_PRELOAD%</code>	メモリマネージャを事前にロードするかどうかを指定します。	デフォルトでは、この値は空になっています。
<code>%INSTALLROOTDIR%</code>	64 ビットの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされるフォルダ。	この値は、インストール時に指定されます。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<code>%INSTALLROOTDIR32%</code>	32 ビットの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされるフォルダ。	この値は、インストール時に指定されます。
<code>%IntroscopeAgentEnableInstrumentation%</code>	Introscope Agent Enterprise Manager を使用した Java サーバの計測が有効化されているかどうかを示します。	可能な値は、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームがインストールされたときに Introscope Agent Enterprise Manager が有効化されたかどうかによって、TRUE または FALSE に設定されます。
<code>%IntroscopeAgentEnterpriseManagerHost%</code>	計測データが送信される Introscope Agent Enterprise Manager ホスト名。	この値は、インストール時に指定されます。
<code>%IntroscopeAgentEnterpriseManagerPort%</code>	計測データが送信される Introscope Agent Enterprise Manager ポート。	この値は、インストール時に指定されます。
<code>%IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransport%</code>	Introscope Agent Enterprise Manager への計測データの送信時に使用されるトランスポート。可能な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • TCP • HTTP • HTTPS • SSL 	TCP
<code>%IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransportHTTP%</code>	Introscope Agent Enterprise Manager に HTTP 経由で計測データの送信時に使用されるクラス。	com.wily.isengard.postofficehub.link.net.HttpTunnelingSocketFactory
<code>%IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransportHTTPS%</code>	Introscope Agent Enterprise Manager に HTTPS 経由で計測データの送信時に使用されるクラス。	com.wily.isengard.postofficehub.link.net.HttpTunnelingSocketFactory
<code>%IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransportSSL%</code>	Introscope Agent Enterprise Manager に SSL 経由で計測データの送信時に使用されるクラス。	com.wily.isengard.postofficehub.link.net.SSLSocketFactory
<code>%IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransportTCP%</code>	Introscope Agent Enterprise Manager に TCP 経由で計測データの送信時に使用されるクラス。	com.wily.isengard.postofficehub.link.net.DefaultSocketFactory
<code>%IntroscopeDir%</code>	Introscope Agent Enterprise Manager がインストールされたフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%wily</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/wily</code> です。
<code>%JAVAW_EXE%</code>	コンソールウィンドウのない Java 仮想マシン (JVM) の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>javaw.exe</code> です。UNIX では、 <code>java</code> です。
<code>%JAVA_EXE%</code>	Java 仮想マシン (JVM) の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>java.exe</code> です。UNIX では、 <code>java</code> です。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
%JOBSEVERCHILD_EXE%	Adaptive Job Server の子の実行可能ファイル名。	Windows では、JobServerChild.exe です。UNIX では、boe_jobcd です。
%JOBSEVER_EXE%	Adaptive Job Server の実行可能ファイル名。	Windows では、JobServer.exe です。UNIX では、boe_jobcd です。
%JdkBinDir%	JDK バイナリが保存されるフォルダ。	Windows では、<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%sapjvm%bin です。UNIX では、<INSTALLDIR>/sap_bobj/<PLATFORM>/sapjvm/bin です。
%JreBinDir%	JRE バイナリが保存されるフォルダ。	Windows では、<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64%sapjvm%jre%bin です。UNIX では、<INSTALLDIR>/sap_bobj/<PLATFORM>/sapjvm/jre/bin です。
%JVM_ARCH_ENVIRONMENT%	マシンが 32 ビットと 64 ビットのどちらの JVM で実行されているかを示します。	32 ビット UNIX マシンの場合、デフォルト値は "-d32" です。64 ビットマシンの場合、デフォルト値は "-d64" です。Windows マシンでは、これは空の文字列です。
%JVM_HEADLESS_MODE%	JVM がヘッドレスモードで機能するかどうかを指定するコマンドライン引数。	Windows では、-Djava.awt.headless=false です。UNIX では、-Djava.awt.headless=true です。
%JVM_HEAP_DUMP_ON_OUT_OF_MEMORY_ERROR%	メモリ不足エラーが発生した場合の JVM の動作を指定するコマンドラインパラメータ。	"-XX:+HeapDumpOnOutOfMemoryError" "-XX:HeapDumpPath=%DefaultLoggingDir%" "-XX:+ExitVMOnOutOfMemoryError"
%JVM_SHARED_MEMORY_SEGMENT%	JVM 拡張を有効にし、JVM のインスタンス数を設定するコマンドラインパラメータ。	デフォルトでは、このプレースホルダは空白になっています。
%LANGUAGEPACKSDIR%	デプロイメントの言語パックがインストールされるフォルダ。	Windows では、<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%Languages です。UNIX では、<INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/Languages/ です。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<code>%LANGUAGEPACKSDIR32%</code>	32 ビットシステムで、デプロイメントの言語パックがインストールされるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%Languages</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/Languages/</code> です。
<code>%LSTDir%</code>	LST 設定ファイルが保存されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%conf%lst</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/conf/lst</code> です。
<code>%MDAS_JVM_OS_STACK_SIZE%</code>	多次元分析サービスの JVM スタックサイズを指定します。	デフォルトでは、このプレースホルダは空になっています。
<code>%NCSInstrumentLevelThreshold%</code>	NCS ライブラリのトレースログギングのしきい値レベル。	デフォルトでは、この値は 0 になっています。
<code>%PAGESERVER_EXE%</code>	Crystal Reports 2020 Processing Server の実行可能ファイル名。	Windows では、 <code>crproc.exe</code> です。UNIX では、 <code>boe_crprocd.bin</code> です。
<code>%PJSContainerDir%</code>	APS コンテナ JAR が保存されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%container</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/container</code> です。
<code>%PJSServicesDir%</code>	APS サービス JAR が保存されるフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%services</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services</code> です。
<code>%Platform%</code>	SAP BI プラットフォームが稼働しているマシンのオペレーティングシステム。	SAP BI プラットフォームが稼働しているマシンのオペレーティングシステム。
<code>%Platform32%</code>	32 ビットの SAP BI プラットフォームが稼働しているマシンのオペレーティングシステム。	SAP BI プラットフォームが稼働しているマシンのオペレーティングシステム。
<code>%RasBinDir%</code>	Report Application Server のルートフォルダ。	Windows では、 <code><INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win32_x86</code> です。UNIX では、 <code><INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/<PLATFORM>/ras</code> です。
<code>%SERVER_FRIENDLY_NAME%</code>	サーバのフルネーム。	サーバのフルネーム。
<code>%SERVER_NAME%</code>	サーバのフルネーム。	サーバのフルネーム。

プレースホルダ	説明	デフォルト値
%SMDAgentHost%	計測データが送信される SMD Agent ホスト名。	この値は、インストール時に指定されます。
%SMDAgentPort%	計測データが送信される SMD Agent ポート。	この値は、インストール時に指定されます。
%TRACE_CONFIGFILE_INI%	BO_Trace.ini ファイルの名前とパス。	Windows では、<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%conf%BO_trace.ini です。UNIX では、<INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/conf/BO-trace.ini です。
%WarFilesDir%	Web アプリケーションファイルの場所。	Windows では、<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%warfiles%webapps です。UNIX では、<INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/warfiles/webapps です。
%WEBI_LD_PRELOAD%	プラットフォーム向けの LD_PRELOAD 環境変数名。	\$LD_PRELOAD\$
%WEBISERVER_EXE%	Web Intelligence Processing Server の実行可能ファイル名。	Windows では、wireportserver.exe です。UNIX では、WIReportServer です。
%WEBI_LD_PRELOAD_ONCE%	プラットフォーム向けの LD_PRELOAD_ONCE 環境変数名。	\$LD_PRELOAD_ONCE\$

関連情報

[ノードのプレースホルダを表示および編集する \[160 ページ\]](#)

35 暗号キーの管理

35.1 CMC での暗号化キーの管理

暗号管理者は、[\[暗号化キー\]](#) 管理エリアを使用して、CMS リポジトリに格納された機密データを保護するキーの見直し、生成、無効化、使用の中止、および削除を行います。

現在システムで定義されている暗号化キーはすべて、[\[暗号化キー\]](#) 管理エリアに一覧表示されます。各キーの基本情報は、以下の表に示されたヘッダに表示されます。

ヘッダ	説明
タイトル	暗号化キーの名称 ID
ステータス	キーの現在のステータス
最終ステータス変更	暗号化キーに関連した最終変更に対する日付およびタイムスタンプ
オブジェクト	キーに関連するオブジェクトの数

関連情報

[暗号化キーのステータス \[524 ページ\]](#)

[新しい暗号化キーを作成する \[526 ページ\]](#)

[システムから暗号化キーを削除する \[526 ページ\]](#)

[暗号化キーを無効化する \[527 ページ\]](#)

[暗号化キーに関連付けられているオブジェクトを表示する \[525 ページ\]](#)

[暗号化キーを改ざんありにする \[527 ページ\]](#)

35.1.1 暗号化キーのステータス

次の表には、BI プラットフォームシステムの暗号化キーに対して設定可能なすべてのステータスオプションが一覧表示されています。

ステータス	説明
アクティブ	[アクティブ] は、システム内の 1 つの暗号化キーのみに指定できます。このキーは、CMS データベースに保存される予定の、現在の重要データの暗号化に使用します。さらに、オブジェクトリスト内に表示されるすべてのオブジェクトの解読にも使用します。新しい暗号化キーが作成されると、現在の

ステータス	説明
	[アクティブ] ステータスは[無効にする] ステータスに戻ります。アクティブなキーはシステムから削除できません。
無効にする	[無効にする] キーは、データの暗号化に使用できません。ただし、オブジェクトリストに表示されているすべてのオブジェクトの解読に使用することはできます。一度無効にしたキーを再度アクティブにすることはできません。[無効にする] とマークされたキーは、システムから削除できません。削除するには、キーのステータスを[無効] にしておく必要があります。
改ざんあり	安全でないと考えられる暗号化キーは、改ざんありとマークすることができます。キーにこのようなフラグを付けることによって、そのキーに関連付けられているデータオブジェクトの再暗号化を後で進めることができます。改ざんありと一度マークされたキーをシステムから削除するには、そのキーを無効にしておく必要があります。
無効	暗号化キーが無効になると、そのキーに現在割り当てられているすべてのオブジェクトが現在の[アクティブ] な暗号化キーによって再暗号化される処理が開始されます。キーを無効にすると、システムから安全に削除することができます。この無効化メカニズムにより、CMC データベース内のデータは常に解読可能となります。一度無効にしたキーを再度アクティブにすることはできません。
無効にする - 再暗号化を実行中	暗号化キーが現在無効化されていることを示します。この処理が終了すると、キーは[無効] とマークされます。
無効にする - 再暗号化が一時停止	暗号化キーを無効にするための処理が一時停止していることを示します。このステータスは、通常、この無効化処理が故意に一時停止された場合、またはこのキーに関連付けられているデータオブジェクトが使用できない場合に発生します。
無効 - 改ざんあり	キーが改ざんありとマークされており、以前そのキーに関連付けられていたすべてのデータが別のキーで暗号化された場合に、[無効 - 改ざんあり] のフラグが付きます。[無効にする] キーが改ざんありとマークされた場合、何の処理も行わないか、またはそのキーを無効にするかのどちらかを選択できます。改ざんありのキーを無効にすると、そのキーを削除できるようになります。

35.1.2 暗号化キーに関連付けられているオブジェクトを表示する

- CMC の [[暗号化キー](#)] 管理エリアでキーを選択します。
- ▶ [管理](#) ▶ [プロパティ](#) をクリックします。
暗号化キーの [[プロパティ](#)] ダイアログボックスが表示されます。
- [[プロパティ](#)] ダイアログボックスの左側にある ナビゲーションペインの [[オブジェクト一覧](#)] をクリックします。
暗号化キーに関連付けられたすべてのオブジェクトの一覧が、ナビゲーションペインの右側に表示されます。

→ ヒント

特定のオブジェクトを検索するには検索機能を使用します。

35.2 新しい暗号化キーを作成する

⚠ 警告

新しい暗号化キーを作成すると、現在の[アクティブ]キーは自動的に無効化されます。キーが無効化されると、[アクティブ]キーとして復元することはできません。

1. CMC の[暗号化キー]管理エリアで、**管理** > **新規** > **暗号化キー** の順にクリックします。
[新しい暗号化キーの作成]ダイアログボックスが表示されます。
2. [続行]をクリックして、新しい暗号化キーを作成します。
3. 新しい暗号化キーの名称と説明を入力し、[OK]をクリックして情報を保存します。
[暗号化キー]管理エリアに、アクティブキーとしてのみ新しいキーが一覧表示されます。以前の[アクティブ]キーは、[無効にする]とマークされています。

CMS データベースに新たに生成され、格納された機密データはすべて、新しい暗号化キーで暗号化されます。以前のキーを無効化し、そのデータオブジェクトを新しいアクティブキーですべて再暗号化するオプションがあります。

35.3 システムから暗号化キーを削除する

BI プラットフォームから暗号化キーを削除する前に、そのキーを必要とするデータオブジェクトがシステムに存在しないことを確認する必要があります。この制約により、CMS リポジトリに格納されているすべての機密データを、いつでも暗号解除することができます。

暗号化キーの無効化が完了した後で、以下の手順に従ってシステムからキーを削除します。

1. CMC の[暗号化キー]管理エリアにジャンプします。
2. 削除する暗号化キーを選択します。
3. **管理** > **削除** をクリックします。
[削除]ダイアログボックスが表示されます。
4. [削除]をクリックして、システムから暗号化キーを削除します。
削除されたキーは、CMC の[暗号化キー]管理エリアには表示されなくなります。

① 注記

暗号化キーがシステムから削除されてしまうと、復元することはできません。

関連情報

[暗号化キーを無効化する \[527 ページ\]](#)

[暗号化キーのステータス \[524 ページ\]](#)

35.4 暗号化キーを無効化する

[無効にする] 暗号化キーは、関連するデータオブジェクトではまだ使用されている可能性があります。暗号化されたオブジェクトと無効化キーとの関連を切り離すには、キーを無効化する必要があります。

1. [暗号化キー] 管理エリアに一覧表示されているキーから、無効化するキーを選択します。
2. ► **アクション** ► **無効化** ► をクリックします。
[無効化] ダイアログボックスが表示されます。
3. [OK] をクリックします。
現在のアクティブキーでキーのオブジェクトすべてを暗号化するプロセスが起動されます。キーが多数のデータオブジェクトに関連している場合、再暗号化プロセスが完了するまで、[無効にする: 再暗号化を実行中] とマークされます。

暗号化キーが無効化されると、機密データオブジェクトが暗号解除のためのキーを必要としなくなるため、システムからキーを安全に削除することができます。

35.5 暗号化キーを改ざんありにする

何らかの理由で暗号化キーが安全でなくなったと考えられる場合、暗号化キーを改ざんありとマークすることができます。これは、追跡目的には便利で、どのデータオブジェクトがこのキーに関連しているかを特定することができます。暗号化キーは、改ざんありにする前に無効化される必要があります。

① 注記

キーの使用を取り消した後で、改ざんありにすることもできます。

1. CMC の [暗号化キー] 管理エリアにジャンプします。
2. 改ざんありにする暗号化キーを選択します。
3. ► **アクション** ► **改ざんありにする** ► の順にクリックします。
[改ざんありにする] ダイアログボックスが表示されます。
4. [続行] をクリックします。
5. [改ざんありにする] ダイアログボックスから、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - はい: 改ざんありにするキーと関連するすべてのデータオブジェクトを再暗号化するプロセスを起動します。
 - いいえ: [改ざんありにする] ダイアログボックスが閉じられ、[暗号化キー] 管理エリアで暗号化キーが [改ざんあり] とマークされます。

① 注記

[いいえ] を選択すると、機密データは改ざんありにするキーとの関連がそのまま維持されます。改ざんありとしたキーは、システムによって関連オブジェクトの暗号を解除するために使用されます。

関連情報

[暗号化キーを無効化する \[527 ページ\]](#)

[暗号化キーのステータス \[524 ページ\]](#)

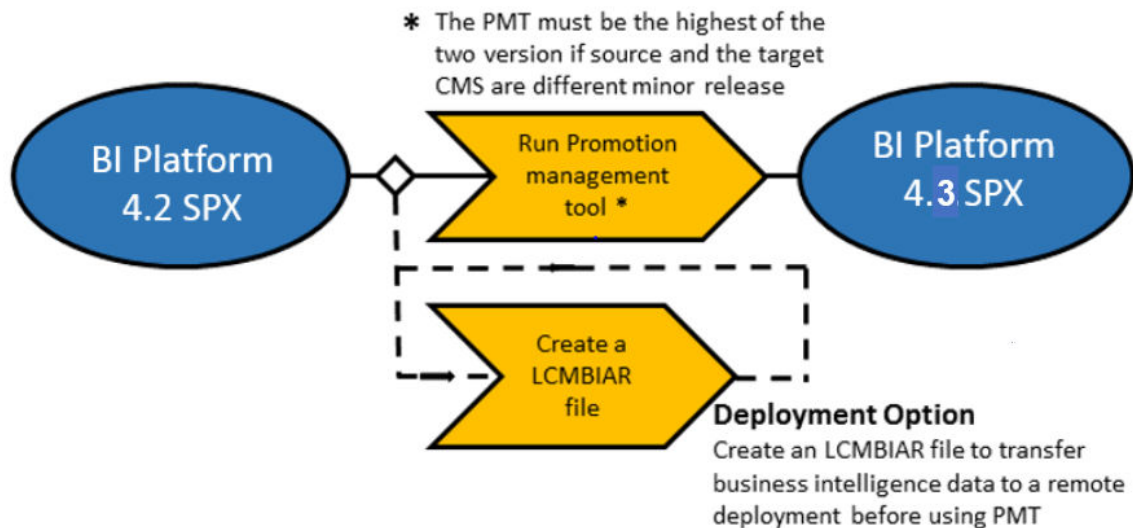
[暗号化キーに関連付けられているオブジェクトを表示する \[525 ページ\]](#)

36 プロモーション管理

36.1 プロモーション管理

36.1.1 プロモーションマネジメントへようこそ

36.1.1.1 概要



プロモーション管理ツールを使用して、以下のことを実行できます。

- リポジトリ間でのビジネスインテリジェンス (BI) リソースの移動または移送。
- リソースの依存関係の管理。
- 必要に応じた、出力先システムでの昇格済みリソースのロールバック。

プロモーション管理ツールでは、同じ BI リソースのさまざまなバージョンの管理もサポートします。

プロモーションマネジメントツールは、セントラル管理コンソールと統合されます。ビジネスインテリジェンスリソースを別のシステムに昇格できるのは、移動元システムと移動先システムの両方に同じバージョンの BI プラットフォームがインストールされている場合だけです。

36.1.1.2 機能

プロモーションマネジメントツールにより、出力先デプロイメントの InfoObject で次の操作を実行することができます。

- 新しいジョブの作成
- 既存のジョブのコピー
- ジョブの編集
- ジョブの昇格のスケジュール
- ジョブ履歴の表示
- LCMBIAR としてエクスポート
- BIAR/LCMBIAR のインポート

昇格ワークフローには次のタスクも含まれています。

- **依存関係の管理**: この機能では、昇格させるジョブの InfoObject の依存関係を選択、フィルタ、および管理できます。
- **スケジュール**: この機能では、ジョブの作成直後にジョブを昇格するのではなく、ジョブの昇格の時間を指定できます。1 回または定期的なスケジュールで実行するジョブの昇格を指定できます。
- **セキュリティ**: この機能では、InfoObject と関連セキュリティ権限を昇格できます。必要であれば、InfoObject をアプリケーション権限とともに昇格できます。
- **昇格テスト**: この機能では、InfoObject を実際に昇格する前に、すべての防止対策が取られているかを確認し昇格をテストできます。
- **ロールバック**: この機能では、ジョブの昇格後に出力先システムを以前の状態に復元することができます。ジョブのすべてまたは一部をロールバックできます。
- **監査**: プロモーションマネジメントツールで生成されたイベントは、監査データベースに保存されます。監査機能では、監査データベースに記録されたイベントをモニタリングできます。
- **プロモーションマネジメント上書き設定**: この機能では、ジョブの昇格を介して上書きをスキャンおよび昇格できます。

36.1.1.3 アプリケーションアクセス権

このセクションでは、プロモーションマネジメントツールのアプリケーションアクセス権限について説明します。

- CMC 内でプロモーションマネジメントツールに対するアクセス権限を設定できます。
- プロモーションマネジメントツール内でさまざまな機能に対する詳細なアプリケーション権限を設定できます。

プロモーションマネジメントツールの特定の権限を設定するには、以下の手順に従います。

1. CMC にログオンし、[アプリケーション] を選択します。
2. [プロモーションマネジメント] をダブルクリックします。
3. [ユーザセキュリティ] をクリックし、ユーザを選択します。ユーザのセキュリティ権限の表示または割り当てを行うことができます。
4. 以下のプロモーションマネジメント固有権限があります。
 - 上書きを編集するためにアクセスを許可
 - セキュリティを含むアクセスを許可
 - 管理へのアクセスを許可
 - [依存関係の管理] ページへのアクセスを許可
 - ジョブの作成
 - ジョブの削除

- ジョブの編集
 - LCMBIAR の編集
 - LCMBIAR としてエクスポート
 - LCMBIAR のインポート
 - ジョブの昇格
 - ジョブのロールバック
 - BOMM (BusinessObjects Metadata) オブジェクトの表示および選択
 - ビジネスビューの表示および選択
 - カレンダの表示および選択
 - 接続の表示および選択
 - プロファイルの表示および選択
 - QaaWS の表示および選択
 - レポートオブジェクトの表示および選択
 - セキュリティ設定の表示および選択
 - ユニバースの表示および選択
5. 選択したユーザに権限を割り当てるには、適切な権限を選択し、[[セキュリティの割り当て](#)]をクリックします。

プロモーションマネジメントツールのアクセス権限が CMC 内に設定されます。

36.1.1.4 プロモーションマネジメントでの WinAD のサポート

プロモーションマネジメントツールを正常に動作させるには、以下をすべての Adaptive Job Server のすべての `javaargs` 引数に追加する必要があります。

```
Djava.security.auth.login.config=<path>%bsclogin.conf,Djava.security.krb5.conf=<path>%krb5.ini
```

→ 注意

ユーザのデプロイメントで、`bsclogin.conf` および `krb5.ini` への正しいパスを指定します。

36.1.2 プロモーションマネジメントツールを使用する前に

36.1.2.1 プロモーションマネジメントツールへのアクセス

プロモーションマネジメントツールにアクセスするには、CMC ホームページから[昇格管理](#)を選択します。

[昇格ジョブ](#)フォルダの表示権限があれば、どのユーザでもプロモーションマネジメントツールを起動することができます。ただし、ジョブを作成、スケジュール、または昇格するには、管理者から追加権限を得る必要があります。





36.1.2.2 ユーザインタフェースコンポーネント

この章では、プロモーションマネジメントツールの GUI コンポーネントについて説明します。

- プロモーションマネジメントワークスペースツールバー
- ワークスペースパネル
- ツリーパネル
- 詳細パネル
- ショッピングカートおよびジョブビューアページ


プロモーションマネジメントワークスペースツールバー

次の表は、プロモーションマネジメントワークスペースツールバーのオプションと、それらのオプションを使用して実行できるタスクについての説明の一覧です。

オプション	説明
	新しいフォルダを作成できます。新しいフォルダは [昇格ジョブ] フォルダのサブフォルダとして作成されます。
	選択したジョブまたはフォルダを現在の場所からコピーまたは削除できます。
	ジョブまたはフォルダを現在の場所からコピーできます。
	コピーしたジョブまたはフォルダを新しい場所に貼り付けることができます。
	既存のジョブまたはフォルダを削除できます。
	ジョブまたはフォルダの更新された一覧を取得するために、ホームページを最新表示できます。
プロパティ	選択したジョブのプロパティを変更できます。選択したジョブのタイトル、説明、およびキーワードを変更できます。
履歴	選択したジョブの履歴を表示できます。
新しいジョブ	新しいジョブを作成できます。
インポート	BIAR、LCMBIAR または上書きファイルをインポートできます。
編集	選択したジョブを編集できます。
昇格	選択したジョブを昇格できます。
ロールバック	出力先システムの昇格されたジョブを元に戻すことができます。

① 注記

ジョブが出力先にオブジェクトを昇格する場合、これらのオブジェクトはロールバックにより削除されます。ジョブが出力先のオブジェクトを更新する場合、前のバージョンのオブジェクトはロールバックにより復元されます。

オプション	説明
	ジョブ一覧ページ間を移動できます。このオプションでは、1 ページずつ移動するか、あるいは該当するページ番号を入力して特定のページに移動できます。
検索	特定のジョブを検索できます。名前、キーワード、説明、または 3 つのパラメータのすべてからジョブを検索できます。
昇格ジョブ	昇格されたジョブとフォルダを表示できます。
昇格のステータス	昇格されたジョブをステータス(成功、失敗、または一部成功)別に表示します。

ワークスペースパネル

プロモーションマネジメントのホームページのワークスペースパネルには、ジョブの一覧が表示されます。このパネルを使用して、ジョブ、ソースシステムと出力先システム、およびジョブ作成者の名前、ステータス、作成時刻、前回の実行時刻を表示できます。

ツリーパネル

プロモーションマネジメントのホームページのツリーパネルには、[\[昇格ジョブ\]](#) フォルダと [\[昇格のステータス\]](#) フォルダがツリー構造で表示されます。ジョブは、[昇格ジョブ](#) フォルダの下に階層構造で表示されます。[\[昇格のステータス\]](#) フォルダには、昇格されたジョブがステータス別に表示されます。

ジョブビューアページ

新しいジョブを作成するか既存のジョブを編集すると、“ジョブビューア”ページが表示されます。このページには、動的に生成された昇格対象の InfoObject の一覧および詳細パネルが表示されます。この一覧では、InfoObject はユーザグループ、ユニバースおよび接続に分類されます。詳細パネルでは、この一覧から選択されたノードの内容が表示されます。

36.1.2.3 設定オプションの使用

ある BI プラットフォームデプロイメントから別の BI プラットフォームデプロイメントおよび SAP デプロイメントへ InfoObject を昇格する前に、設定オプションで設定を行うことができます。このセクションでは、設定オプションの使用方法について説明します。

[\[昇格ジョブ\]](#) 画面の [\[設定\]](#) ドロップダウンをクリックします。このドロップダウンには、次のオプションが表示されます。

- **システムの管理:** このオプションでは、プロモーションマネジメントアクティビティに必要なすべてのシステムを追加できます。

- **ロールバック設定:** このオプションでは、ロールバックを有効化するシステムを選択できます。
- **ジョブ設定:** このオプションでは、依存項目ページに完了したインスタンスを表示できるほか、ジョブインスタンスのクリーンアップアクティビティを管理することもできます。また、ジョブの作成日を指定してフィルタリングすることもできます。
- **CTS 設定:** このオプションでは、拡張移送/修正システムの統合に使用する Web サービスや SAP BW のシステム情報を追加できます。

36.1.2.3.1 [システムの管理] オプションを使用する

このセクションでは、[システムノ管理]オプションの使用方法について説明します。このオプションを使用してホストシステムを追加または削除できます。

ホストシステムを追加するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントワークスペースツールバーで、**設定**をクリックしてから、**システムの管理**をクリックします。
システムの管理ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、ホスト名、ポート番号、表示名、および説明の一覧が表示されます。

	Host Name	Port Number	Display Name	Description
<input type="checkbox"/>	bi421717.pgdev.sap.corp	6400	BI421717.pgdev.sap.corp:6400	Not Defined
<input type="checkbox"/>				
<input type="checkbox"/>				
<input type="checkbox"/>				

2. **追加**をクリックします。
システムの追加ダイアログボックスが表示されます。
3. ホスト名、ポート番号、表示名、および説明を該当するフィールドに追加します。

① 注記

ソースにするオプションを選択して、システムをソースシステムとして識別します。ソースシステムは、接続情報の提供元となるシステムです。このオプションは、上書きを使用する場合に便利です。

4. **[OK]**をクリックして、システムに追加します。
一覧にホストシステムが追加されます。

① 注記

ホストシステムを削除または編集するには、ホストシステムを選択して、**削除**または**編集**をクリックします。

関連情報

[\[ロールバック設定\] オプションを使用する \[535 ページ\]](#)

[\[ジョブ設定\] オプションを使用する \[535 ページ\]](#)

36.1.2.3.2 [ロールバック設定] オプションを使用する

デフォルトでは、システムレベルでロールバック処理が有効化されています。[\[ロールバック設定\]](#) オプションでは、システムレベルでロールバック処理を無効化できます。

システムレベルでロールバック処理を無効化するには、次の手順に従います。

1. [\[ロールバック\]](#) ウィンドウのホストシステムの一覧から、ロールバックプロセスを無効にするホストシステムを選択します。
2. [\[保存して閉じる\]](#) をクリックして変更を保存します。

関連情報

[\[ジョブ設定\] オプションを使用する \[535 ページ\]](#)

36.1.2.3.3 [ジョブ設定] オプションを使用する

ジョブ設定オプションでは、“依存関係の管理”ページに完了したインスタンスを表示するかどうかや、システムに存在できるジョブインスタンスの数を指定できます。次のオプションのいずれかを指定できます。

- **依存関係の管理ページに完了したインスタンスを表示する**: このオプションにより、ジョブに追加することができる“依存関係の管理”ページに、完了したインスタンスを表示することができます。
- **ジョブのインスタンスが N 個より多い場合はインスタンスを削除する**: このオプションにより、システムのジョブ 1 件あたりの最大ジョブインスタンス数を指定することができます。
- **ジョブの N 日後にインスタンスを削除する**: このオプションにより、作成されてから指定日数を経過したジョブインスタンスを削除するように指定することができます。
- 指定した期間中に作成されたジョブを表示するために、**次の期間に作成されたジョブを表示** リストから時間間隔を選択することができます。

[\[ジョブ設定\]](#) オプションを設定するには、次の手順に従います。

1. オプションを選択し、優先値を入力します。

2. **[保存]**をクリックして、更新した変更を保存します。

[デフォルト設定]をクリックしてデフォルト値を設定できます。**[閉じる]**をクリックしてウィンドウを閉じることができます。

① 注記

古いジョブインスタンスは、次のジョブ実行時に削除されます。

関連情報

[バージョン管理システムとして Apache Subversion を使用する \[617 ページ\]](#)

36.1.2.3.4 上書き設定オプションの使用

上書き設定オプションにより、ジョブ昇格または LCMBIAR ファイルを使用して上書きを昇格することができます。このオプションにより Crystal Reports 接続およびユニバース接続のデータベース接続情報をスキャン、昇格、編集することができます。また、このオプションを使用して QAAWS URL を編集することもできます。

① 注記

上書き設定オプションを使用するには、Adobe Flash Viewer をインストールする必要があります。

システムという用語は、以下の手順で使用します。システムには、次の 3 種類があります。

- ソース: 接続情報のソースシステムです。
- セントラルプロモーションマネジメント: プロモーションマネジメントツールを実行するシステムです。
- 出力先: BI リソースの昇格先のエンドシステムです。

36.1.2.3.4.1 上書きを昇格する

上書きを昇格する前にホストシステムを追加してください。ホストシステムの追加についての詳細は、[\[システムの管理\] オプションを使用する \[534 ページ\]](#) を参照してください。

上書きを昇格するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントワークスペースツールバーで、**[上書き設定]** オプションをクリックします。
[上書き設定] ウィンドウが表示されます。
2. **[ソース]** ペインで、ドロップダウンメニューから必要なソースシステムを選択します。

① 注記

また、**[新しいシステム]** にログインすることもできます。新しいシステムをソースシステムとして選択するには、以下の手順を実行します。

1. ドロップダウンメニューから **[新しいシステム]** を選択します。

[ソースログイン] ダイアログボックスが表示されます。

2. [システム]、[ユーザ名]、[パスワード]、および [認証] フィールドに有効な認証情報を入力します。
3. [ログイン] を選択します。

3. [ログイン] を選択します。

4. [今すぐスキャンする] を選択します。

スキャン処理が開始されます。[一意接続の一覧] が表示されます。

① 注記

定期的なスキャンをスケジュールするには、[定期的スケジュールの設定] を選択します。

5. 上書き一覧で、各上書きに対応するチェックボックスをオンにして、昇格する上書きを選択します。

① 注記

上書きの一覧で上書きを検索するには、上書き名、最終更新日などのキーワードを使用します。

また、次のパラメータによって、上書きをフィルタすることができます。[すべて]、[接続]、[Qwaas]、[Crystal レポート]。

さらに、上書きをアルファベット順に並べ替えることができます。

6. [出力先] ペインで、ドロップダウンメニューから必要な出力先システムを選択します。複数の出力先システムを指定することができます。

① 注記

また、[新しいシステム] にログインすることもできます。新しいシステムを出力先システムとして選択するには、以下の手順を実行します。

1. ドロップダウンメニューから [新しいシステム] を選択します。
[出力先ログイン] ダイアログボックスが表示されます。
2. [システム]、[ユーザ名]、[パスワード]、および [認証] フィールドに有効な認証情報を入力します。
3. [ログイン] を選択します。

上書きを LCMBIAR ファイルとしてエクスポートするには、次の手順に従います。

1. ドロップダウンメニューから [LCMBIAR ファイルにエクスポート] を選択します。
2. [エクスポート] を選択します。
[エクスポート設定] ダイアログボックスが開きます。
3. 対応するフィールドに、有効な認証情報を入力します。
4. [完了] を選択します。
7. [昇格] を選択します。

[複数の出力先上書き] ダイアログボックスが表示されます。

① 注記

デフォルトでは、現在ログインしているすべての出力先システムが選択されます。上書きを特定の出力先システムに選択的に昇格するには、必要な出力先システムに対応するチェックボックスをオンにします。

8. [完了] を選択します。

上書きの昇格が完了します。

9. 有効な認証情報を使用して、いずれかの出力先システムにログインします。

昇格したすべてのオブジェクトの一覧が一括接続の一覧に表示されます。これらのオブジェクトのステータスは非アクティブです。

10. 編集するオブジェクトの[更新]を選択します。

[共通接続プロパティの編集] ダイアログボックスが表示されます。

11. 必要な値を更新して、[完了]を選択します。

編集したオブジェクトのステータスがアクティブになります。

① 注記

また、出力先システムで接続を編集せずに、[非アクティブ]を選択して接続をアクティブにすることもできます。

12. [保存]を選択します。

36.1.2.3.4.2 BIAR ファイルを使用して上書きを昇格する

上書きを昇格する前にホストシステムを追加してください。ホストシステムの追加についての詳細は、[システムの管理] オプションを使用する [534 ページ] を参照してください。

BIAR ファイルを使用して上書きを昇格するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントワークスペースツールバーで、**上書き設定** オプションをクリックします。
上書き設定 ウィンドウが表示されます。
2. セントラルプロモーションマネジメントシステムにログオンしている場合、システムからログアウトします。
3. [ログイン] をクリックし、元のシステムに接続します。
システムにログイン ウィンドウが表示されます。
4. [上書き設定] 画面で、[ソース] が付いているソースシステムを選択してオブジェクトをスキャンし、有効な認証情報を使用してシステムにログインします。
5. [スキャン] の横にある [開始] ドロップダウンリストで、[開始] オプションを選択します。
スキャン処理が開始されます。[上書き一覧] が表示されます。

① 注記

定期的なスキャンをスケジュールするには、ドロップダウンリストから**定期的スケジュールの設定** オプションを選択します。

6. 上書き一覧で、必要なオブジェクトのステータスをアクティブにし、[保存] をクリックします。
7. [上書きの昇格] をクリックします。
出力先システムの一覧が表示される場所に、**上書きの昇格** 画面が表示されます。
8. パスワードを使用して BIAR ファイルを暗号化するには、[パスワード暗号化] チェックボックスをクリックします。
[パスワード] と [パスワードの確認] フィールドが有効になります。
9. [パスワード] フィールドにパスワードを入力します。[パスワードの確認] フィールドに同じパスワードを再入力します。
10. [エクスポート] をクリックし、BIAR ファイルをファイルシステムに上書きします。

11. CMC を使用して出力先システムにログインし、プロモーションマネジメントツールで **インポート** **ファイルの上書き** をクリックします。
LCMBIAR ファイルのインポートウィンドウが表示されます。
12. **[参照]** をクリックして BIAR ファイルを参照します。
13. **[パスワード]** フィールドに BIAR ファイルのパスワードを入力します。

① 注記

パスワードフィールドは、選択した BIAR ファイルがパスワードを使用して暗号化されている場合のみ表示されます。

14. **OK** をクリックします。上書きの昇格が完了します。
15. 元のシステムからログオフします。
16. **[上書き設定]** 画面から **[ログイン]** をクリックします。
システムにログインウィンドウが表示されます。
17. 有効な認証情報を使用して、出力先システムにログインします。
インポートされたオブジェクトの一覧が上書き一覧に表示されます。これらのオブジェクトのステータスは非アクティブです。
18. 編集するオブジェクトの **[選択]** チェックボックスをオンにして、**[編集]** をクリックします。編集したオブジェクトにはアイコンが付きます。

① 注記

アイコンをクリックして、上書きオブジェクトを削除できます。

19. 必要な値を更新して、**完了** をクリックします。
編集したオブジェクトのステータスがアクティブになります。
20. **保存** をクリックします。

36.1.2.3.4.3 CTS+ を使用して上書きを昇格する

上書きを昇格する前にホストシステムを追加してください。ホストシステムの追加についての詳細は、**[システムの管理] オプションを使用する [534 ページ]** を参照してください。

CTS+ を使用して上書きを昇格するには、次の手順を完了します。

① 注記

このオプションを有効にするために、SAP 認証を使用してプロモーションマネジメントツールを起動します。

1. プロモーションマネジメントワークスペースツールバーで、**上書き設定** オプションをクリックします。
上書き設定ウィンドウが表示されます。
2. セントラルプロモーションマネジメントシステムにログオンしている場合、システムからログアウトします。
3. **[ログイン]** をクリックし、元のシステムに接続します。
システムにログインウィンドウが表示されます。
4. オブジェクトをスキャンするには、**[ソース]** が付いているソースシステムを選択し、有効な認証情報を使用して、システムにログインします。

5. [スキャン] の横にある [開始] ドロップダウンリストで、[開始] オプションを選択します。
スキャン処理が開始されます。上書き一覧が表示されます。

① 注記

定期的なスキャンをスケジュールするには、ドロップダウンリストから **定期的スケジュールの設定** オプションを選択します。

6. 上書き一覧で、昇格するオブジェクトのステータスをアクティブに変更し、[保存] をクリックします。
7. [上書きの昇格] をクリックします。
出力先システムの一覧が表示される場所に、上書きの昇格画面が表示されます。
8. [昇格オプション] ドロップダウンリストから、[CTS+ と昇格] を選択します。
9. [昇格] をクリックします。
10. 次の手順を完了して、出力先システムに上書きをリリースします。
 - a. CTS+ のドメインコントローラにログインして、[移送オーガナイザ] Web UI を開きます。移送オーガナイザ Web UI の使用方法の詳細については、[Transport Organizer Web UI](#) を参照してください。
 - b. 要求のステータスが [変更可能] の場合、[リリース] をクリックして上書きの移送要求をリリースします。非 ABAP オブジェクトを含む移送要求のリリースの詳細については、[Releasing Transport Requests with Non-ABAP Objects](#) を参照してください。
 - c. [移送オーガナイザ] Web UI を閉じます。
11. 次の手順を完了して、出力先システムに上書きをインポートします。
 - a. CTS+ のドメインコントローラにログインします。
 - b. 移送管理システムに入るには、STMS トランザクションを呼び出します。
 - c. [インポートの概要] アイコンをクリックします。

インポートの概要画面が表示され、すべてのシステムから、インポートキューの項目を見ることができます。
 - d. 出力先プロモーションマネジメントシステムのシステム ID をクリックします。
システムにインポートできる移送要求の一覧を確認できます。
 - e. [最新表示] をクリックします。
 - f. 関連する移送要求をインポートします。詳細については、[Importing Requests](#) ドキュメントを参照してください。
12. 上書きの昇格が完了します。
13. 有効な認証情報を使用して、いずれかの出力先システムにログインします。
昇格したすべてのオブジェクトの一覧が [上書き一覧] に表示されます。これらのオブジェクトのステータスは非アクティブです。
14. 編集するオブジェクトの [選択] チェックボックスをオンにして、[編集] をクリックします。
15. 必要な値を更新して、[完了] をクリックします。
編集したオブジェクトのステータスがアクティブになります。
16. 保存をクリックします。

36.1.2.3.5 CTS 設定オプションの使用

このオプションを使用して、ランドスケープ内で Web サービスを追加したり BW システムを管理したりすることができます。CTS 設定オプションの使用、およびプロモーションマネジメントツールとともに使用するための

CTS の設定に関する詳細については、[プロモーションマネジメントツールで CTS+ を設定する \[594 ページ\]](#)セクションを参照してください。

36.1.3 プロモーションマネジメントツールの使用

プロモーションマネジメントツールを起動すると、デフォルトで[昇格ジョブ](#)ページに移動します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。

[[昇格ジョブ](#)] ホームページ画面には、次のタスクを実行できるさまざまなタブが表示されます。

- [新しいジョブ](#)をクリックし、新しいジョブを作成します。ホームページ画面を右クリックして、一覧から[新しいジョブ](#)を選択することもできます。
- ジョブの新規作成手順をすべて実行するのではなく、[インポート > ファイルのインポート](#) をクリックして、BIAR ファイルまたは LCMBIAR をファイルシステムから直接インポートします。
- 上書きをインポートするには、[インポート > ファイルの上書き](#) をクリックします。
- 一覧で既存のジョブを選択し、[編集](#)をクリックして選択した既存のジョブを編集します。
- 一覧で既存のジョブを選択し[昇格](#)をクリックして、選択したジョブをソースシステムから出力先システムに昇格するか、または選択したジョブを LCMBIAR ファイルにエクスポートします。
- 一覧から既存の実行済みジョブを選択し[ロールバック](#)をクリックして、出力先システムから昇格されたオブジェクトを戻します。
- 一覧から既存の実行済みジョブを選択し[履歴](#)をクリックして、選択したジョブの以前の昇格インスタンスを表示します。
- 一覧で既存のジョブを選択し[プロパティ](#) をクリックして、選択されたジョブのプロパティ (タイトル、ID、ファイル名、説明など) を表示します。

[昇格ジョブ](#)アプリケーション領域には、システムに存在するジョブおよびフォルダの一覧と、次の各ジョブまたはフォルダの情報が表示されます。

- [名前](#): 作成されたジョブまたはフォルダの名前が表示されます。
- [ステータス](#): 作成、成功、一部成功、実行中、失敗などのジョブステータスが表示されます。
- [作成日時](#): ジョブまたはフォルダが作成された日時が表示されます。
- [最終実行日時](#): ジョブが最後に昇格された日時が表示されます。
- [ソースシステム](#): ジョブの昇格元システムの名前が表示されます。
- [出力先システム](#): ジョブの昇格先システムの名前が表示されます。
- [作成者](#): 特定のジョブまたはフォルダを作成したユーザの名前が表示されます。

① 注記

プロモーションマネジメントツールではすべての操作に対して BI プラットフォーム SDK を使用します。

36.1.3.1 フォルダを作成、削除する

このセクションでは、[昇格ジョブ]ホームページでフォルダを作成および削除する方法について説明します。


① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。

36.1.3.1.1 フォルダを作成する

このセクションでは、フォルダの作成方法について説明します。

フォルダを作成するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールバーの  をクリックします。
2. [フォルダの作成]ダイアログボックスで、フォルダ名を入力します。
3. [OK]をクリックします。

新しいフォルダが作成されます。

関連情報

[ジョブを作成する \[543 ページ\]](#)

[フォルダを削除する \[542 ページ\]](#)


36.1.3.1.2 フォルダを削除する

このセクションでは、フォルダの削除方法について説明します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。

フォルダを削除するには、次の手順に従います。

1. [昇格ジョブ](#)ホームページでフォルダを選択します。
2.  をクリックします。
確認ダイアログボックスが表示されます。
3. [OK](#) をクリックします。

選択したフォルダが削除されます。

関連情報

[ジョブを作成する \[543 ページ\]](#)

36.1.3.2 ジョブを作成する

このセクションでは、プロモーションマネジメントツールを使用してジョブを新規作成する方法について説明します。

次の表では、ジョブの新規作成に使用できる GUI 要素とフィールドについて説明します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。

フィールド	説明
名前	作成するジョブの名前。
説明	作成するジョブの説明。
キーワード	作成するジョブのコンテンツのキーワード。
ジョブの保存場所	選択したデフォルトのフォルダが表示されます。
ソースシステム	ジョブの昇格元となる BI プラットフォームシステムの名前。
出力先システム	ジョブの昇格先となる BI プラットフォームシステムの名前。
ユーザ名	ソースシステムまたは出力先システムへのログインに使用する必要があるログイン ID。
パスワード	ソースシステムまたは出力先システムへのログインに使用する必要があるパスワード。
認証	<p>ソースシステムまたは出力先システムへのログインに使用される認証の種類。</p> <p>プロモーションマネジメントツールは、次の認証の種類に対応しています。</p> <ul style="list-style-type: none">• Enterprise• Windows AD• LDAP• SAP

① 注記

ジョブを作成する前に、BI プラットフォームコンテンツが自動的に更新されるように上書き (存在する場合) が出力先システムで編集および更新されていることを確認してください。詳細については、「上書き設定オプションの使用」を参照してください。

プロモーションマネジメントツールを使用してジョブを新規作成するには、以下の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
2. [\[昇格ジョブ\]](#) ホームページで[\[新しいジョブ\]](#)をクリックします。
3. 適切なフィールドにジョブの名前、説明、およびキーワードを入力します。

① 注記

[説明]、[キーワード]、[出力先システム] の各フィールドには情報を任意入力できます。

4. [\[ジョブの保存場所\]](#) フィールドでジョブの保存先となるフォルダを参照および選択します。

① 注記

[\[ジョブの保存場所\]](#) フィールドには、[\[新しいジョブ\]](#) をクリックする前に [\[フォルダ\]](#) ペインで強調表示されていたフォルダの名前がデフォルトで入力されます。

5. 各ドロップダウンリストからソースシステムと出力先システムを選択します。
ドロップダウンリストにシステム名が含まれていない場合には、[\[新しい CMS へのログイン\]](#) オプションをクリックします。新たなウィンドウが起動します。システム名、ユーザ名、およびパスワードを入力します。
6. [\[作成\]](#) をクリックします。
“オブジェクトの追加”ウィンドウが表示されます。
7. ジョブに追加するソースシステムからオブジェクトを選択し、[追加して閉じる](#) をクリックします。
8. [保存](#) をクリックします。

新たに作成されたジョブがソースシステムの CMS リポジトリに保存されます。

① 注記

一次オブジェクトとしてジョブをフォルダとともに作成し、ジョブが定期ジョブである場合、ジョブには次回実行時にフォルダに追加されるすべてのコンテンツが含まれます。

関連情報

[上書き設定オプションの使用 \[536 ページ\]](#)

36.1.3.2.1 新しい CMS にログインする

このセクションでは、新しい CMS へのログイン方法について説明します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)  を参照してください。

新しい CMS にログインするには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントアプリケーションを起動します。
2. 新しいジョブを作成します。
新しいジョブの作成の詳細については、[ジョブを作成する \[543 ページ\]](#) を参照してください。

3. [\[ソースシステム\]](#)ドロップダウンリストから[\[新しい CMS へのログイン\]](#)を選択します。
システムにログインダイアログボックスが表示されます。
4. ドロップダウンリストからシステムを選択するか、新しいシステム名を入力します。
5. ユーザ認証情報を入力し、適切な認証の種類を選択してから、[\[ログイン\]](#)をクリックします。
6. [\[出力先システム\]](#)ドロップダウンリストから[\[新しい CMS へのログイン\]](#)を選択します。
7. ドロップダウンリストからシステムを選択するか、新しいシステム名を入力します。
8. ユーザ認証情報を入力し、適切な認証の種類を選択してから、[ログイン](#)をクリックします。

関連情報

[ジョブを編集する \[546 ページ\]](#)

[ジョブに InfoObject を追加する \[547 ページ\]](#)

[リポジトリに接続しているときのジョブを昇格する \[550 ページ\]](#)

[ジョブの昇格をスケジュールする \[556 ページ\]](#)

36.1.3.3 既存ジョブをコピーして新規ジョブを作成する

このセクションでは、既存ジョブをコピーして新しいジョブを作成する方法について説明します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)🔗を参照してください。

既存ジョブをコピーして新しいジョブを作成するには、次の手順を実行します。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
2. [\[昇格ジョブ\]](#)ホームページで[\[新しいジョブ\]](#)をクリックします。
3. [\[既存のジョブのコピー\]](#)オプションをクリックします。
[既存のジョブのコピー](#)ウィンドウが開き、[昇格ジョブ](#)フォルダのジョブ一覧が表示されます。
4. 一覧からジョブを選択し、[\[作成\]](#)をクリックします。
ジョブの名前、キーワード、説明のほか、[ジョブの保存場所](#)フィールドおよび[出力先](#)フィールドが表示されます。必要に応じてこれらのフィールドを変更できます。
5. [\[ジョブの保存場所\]](#)フィールドでジョブの保存先となるフォルダを参照および選択し、[\[作成\]](#)をクリックします。

新しいジョブが作成され、[オブジェクトの追加](#)ウィンドウが表示されます。

関連情報

[ジョブに InfoObject を追加する \[547 ページ\]](#)

[ジョブを編集する \[546 ページ\]](#)

36.1.3.4 ジョブを検索する

プロモーションマネジメントツールの検索機能では、リポジトリにあるジョブを検索することができます。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。

ジョブを検索するには、次の手順に従います。

1. ホームページの **[検索]** フィールドに検索するテキストを入力します。
2. **検索** フィールドの横に表示された一覧をクリックして、検索パラメータを指定します。次の検索パラメータを指定できます。
 - **タイトルの検索**: このオプションでは、ジョブ名からジョブを検索できます。
 - **キーワードの検索**: このオプションでは、キーワード名からキーワードを検索できます。
 - **説明の検索**: このオプションでは、説明からジョブを検索できます。
 - **すべてのフィールドの検索**: このオプションでは、ジョブのタイトル、キーワード、および説明からジョブを検索できます。
3. **[検索]** アイコンをクリックします。

関連情報

[ジョブに InfoObject を追加する \[547 ページ\]](#)

[ジョブを編集する \[546 ページ\]](#)

36.1.3.5 ジョブを編集する

このセクションでは、ジョブの編集方法について説明します。

① 注記

- プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。
- ジョブの編集はジョブの新規作成とは異なります。

ジョブを編集するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
2. **[昇格ジョブ]** ホームページで、編集するジョブを選択します。
3. **[編集]** をクリックします。

選択したジョブの詳細が表示されます。必要に応じて InfoObject の追加や削除、依存関係の管理、ジョブの昇格を実行できます。

ジョブを編集する時に、ソースシステム名を変更することはできません。

関連情報

[ジョブに InfoObject を追加する \[547 ページ\]](#)

[リポトリに接続しているときのジョブを昇格する \[550 ページ\]](#)

[ジョブの昇格をスケジュールする \[556 ページ\]](#)

36.1.3.6 ジョブに InfoObject を追加する

各ジョブには、InfoObject のセットが含まれている必要があります。したがって、ジョブを出力先システムに昇格する前に、ジョブに InfoObject を追加する必要があります。

① 注記

- ビジネスビュー InfoObject (データコネクション、データファンデーション、ビジネスエレメント、およびビジネスビュー) に基づく Crystal レポートを昇格する場合、出力先システムでレポート内のデータを表示するために、セキュリティ情報 (データコネクションでのデータアクセス権限および、データファンデーションおよびビジネスエレメントでのデータフィールド表示権限) を含める必要があります。
- プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#) を参照してください。

ジョブに InfoObject を追加するには、次の手順に従います。

- プロモーションマネジメントツールを起動します。
- 新しいジョブを作成するか、既存のジョブを編集します。
ジョブの新規作成については、[ジョブを作成する \[543 ページ\]](#) および [ジョブを編集する \[546 ページ\]](#) を参照してください。
- ジョブを編集する場合は **オブジェクトの追加** をクリックします。

① 注記

ジョブを新規作成する場合は、**オブジェクトの追加** ダイアログボックスが表示されます。

- InfoObject を選択するフォルダに移動します。
選択したフォルダ内の InfoObject の一覧が表示されます。
- ジョブに追加する InfoObject を選択し、**追加** をクリックします。
InfoObject を追加して、["システムからオブジェクトを追加"] を終了する場合は、"<NAME>" ダイアログボックスで、**追加して閉じる** をクリックします。InfoObject がジョブに追加され、ダイアログボックスが閉じます。

ジョブに InfoObject を追加したら、[ジョブビュー](#) ページを右クリックし、昇格処理を選択して昇格タスクを続行できます。選択した InfoObject の依存関係を管理するには、[ジョブビュー](#) ページで **依存関係の管理** オプションを使用します。

① 注記

- **ジョブビューア**ページの左パネルに表示されるショッピングカートには、ジョブとその依存オブジェクトがフラットツリー構造で表示されます。
- InfoObject を追加したら、[保存]オプションをクリックして変更を保存します。[保存]オプションをクリックしないでこのタブを閉じようとする、ジョブを保存するオプションを示すプロンプトが表示されず。

ベストプラクティス: SAP Business Objects では、プロモーションマネジメントツールの最適なパフォーマンスを引き出すために、一度に選択する InfoObject の数が 100 件以下となるように設定することを推奨しています。

関連情報

[ジョブの依存関係を管理する \[548 ページ\]](#)

[リポトリに接続しているときのジョブを昇格する \[550 ページ\]](#)

[ジョブの昇格をスケジュールする \[556 ページ\]](#)

36.1.3.7 ジョブの依存関係を管理する


このセクションでは、InfoObject の依存オブジェクトを管理する方法について説明します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)🔗を参照してください。

InfoObject の依存オブジェクトを管理するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
2. 新しいジョブを作成するか、既存のジョブを編集します。
ジョブの新規作成については、[ジョブを作成する \[543 ページ\]](#)および[ジョブを編集する \[546 ページ\]](#)を参照してください。
3. 必要な InfoObject をジョブに追加し、**オブジェクトの追加**ダイアログを閉じて、**ジョブビューア**ウィンドウに戻ります。
4. **[依存関係の管理]**をクリックします。
依存関係の管理ウィンドウが表示されます。このウィンドウには InfoObject とその依存オブジェクトの一覧が表示されます。選択されていない依存オブジェクトのみを表示するには、**[選択されていない依存のみを表示します]**チェックボックスをオンにします。
5. グループ化した依存オブジェクトをジョブに追加するオプションを**依存オブジェクトの選択**ドロップダウンリストから選択します。依存オブジェクトがデフォルトで選択されることはない、昇格する依存オブジェクトを明示的に選択する必要があります。
たとえば、**[依存オブジェクトの選択]**ドロップダウンリストから**[すべてのユニバース]**を選択すると、依存オブジェクトの一覧にあるすべてのユニバースが含まれることになります。依存オブジェクトを個別に選択することもできます。

タイプ  をクリックすると、InfoObject のサポートされているフィルタオプションを表示できます。ドロップダウンリストが表示されます。この一覧には、サポートされているフィルタオプションが表示されます。フィルタオプションを選択し、**[OK]** をクリックします。フィルタされた InfoObject が表示されます。

依存オブジェクト列から依存オブジェクトを選択して、**変更を適用** をクリックすると、それらの依存オブジェクトが **ジョブ内のオブジェクト** 列へ自動的に移動します。

[依存オブジェクトの検索] フィールドに依存オブジェクト名を入力して、依存オブジェクトを検索することもできます。

依存オブジェクトの検索の詳細については、[依存関係を検索する \[549 ページ\]](#) を参照してください。

6. **[変更を適用]** をクリックして依存オブジェクトの一覧を更新し、**[変更を適用して閉じる]** をクリックして変更を保存します。

依存オブジェクトは、ツールで自動的に計算されます。これらの依存オブジェクトは、InfoObject の関係または InfoObject のプロパティのいずれかに基づいて計算されます。このツールのバージョンでは、それらの基準のどちらにも当てはまらない依存オブジェクトは計算されません。

① 注記

昇格に使用するフォルダを選択すると、選択したフォルダのコンテンツはプライマリリソースであると見なされます。

関連情報

[リポジトリに接続しているときのジョブを昇格する \[550 ページ\]](#)

36.1.3.8 依存関係を検索する

プロモーションマネジメントツールの高度な検索機能では、リポジトリにある InfoObject の依存オブジェクトを検索することができます。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)  を参照してください。

InfoObject の依存オブジェクトを検索するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントを起動します。
2. 新しいジョブを作成するか、または既存のジョブを編集します。
新しいジョブを作成した場合には、そのジョブに InfoObject を追加します。既存のジョブを編集している場合には、必要に応じてオブジェクトを追加します。
3. **[依存関係の管理]** をクリックします。
4. **[依存オブジェクトの検索]** フィールドに検索する依存オブジェクトの名前を入力します。
5. **[検索]** アイコンをクリックします。

関連情報

[ジョブの依存関係を管理する \[548 ページ\]](#)

36.1.3.9 リポジトリに接続しているときのジョブを昇格する

このセクションでは、ソースシステムと出力先システムが稼働している場合に、ソースシステムから出力先システムにジョブを昇格する方法について説明します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。

以下の表は、プロモーション管理ツールを使用して昇格できる InfoObject タイプの一覧です。

カテゴリ	昇格できるオブジェクトタイプ
レポート	Crystal レポート、Web Intelligence、QaaWS、Lumira
サードパーティオブジェクト	リッチテキスト、テキストドキュメント、Microsoft Excel、Microsoft Power Point、Microsoft Word、Flash、Adobe Acrobat
ユーザ	ユーザとユーザグループ
サーバ	サーバグループ
BI プラットフォーム	フォルダ、プログラム、イベント、プロファイル、オブジェクトパッケージ、ハイパーリンク、カテゴリ、受信ボックスドキュメント、個人用フォルダ、お気に入りフォルダ
ユニバース、ワークスペース、セット	ユニバース UNV、接続、セット
EPM ダッシュボード	ユニバース、接続、レポート、およびアナリティクス
BusinessView	DataFoundation
フェデレーション <ul style="list-style-type: none">レプリケーション一覧レプリケーションジョブ	レプリケーション一覧では、Flash、.txt、ディスカッション、.pdf、ハイパーリンク、.xls、オブジェクトパッケージ、Crystal Reports、Web Intelligence ドキュメント、ユニバース、プログラム、接続、DataFoundation、ビジネスビュー、.rtf、プロファイル、イベント、ユーザ、およびユーザグループの各オブジェクトを昇格します。レプリケーション接続は、レプリケーションジョブ、リモート接続、パブリケーション、ディスカッション、Pioneer 接続を昇格します。
BI サービス	Web Intelligence ドキュメント、ユニバース、および接続
新しい InfoObject	Crystal レポート (rpt/rptr)、Pioneer、DSL Universe (UNX)、ビジネスレイヤ (BLX)、接続 (CNX)、データファンデーション (DFX)、WebI、Data Federator、Data Steward、BI ワークスペースなど

カテゴリ	昇格できるオブジェクトタイプ
テナント	プロモーション管理は、テナントおよび対応するテナントオブジェクトを選択してジョブに追加するオプションを提供することで、ソースシステムから出力先システムへのテナントおよびその依存関係の昇格をサポートしています。また、テナントおよび対応するテナントオブジェクト間の関係を依存関係として確立します。この機能は、プロモーション管理の GUI および CLI 両方のモードで動作します。

プロモーション管理では BI Commentary がサポートされます。コメント付きドキュメントを昇格させると、ドキュメントのコメントもソースシステムから出力先システムに移行されます (CMS から CMS、CMS から BIAR、BIAR から CMS)。コメント付きドキュメントを昇格させるには、[\[昇格\]](#) > [\[コメントリ設定\]](#) を選択してから、[\[コメントを含める\]](#) チェックボックスを選択します。

① 注記

デフォルトでは [\[コメントを含める\]](#) チェックボックスは選択されていません。

複製されたオブジェクトを昇格する場合、オブジェクトに関連付けられたレプリケーション固有の情報もソースシステムから出力先システムに昇格されます (CMS から CMS、CMS から BIAR、BIAR から CMS)。レプリケーション固有の情報がないドキュメントを昇格するには、[\[昇格\]](#) > [\[フェデレーションジョブ設定\]](#) を選択し、[\[フェデレーションジョブ関係を含める\]](#) チェックボックスの選択を解除します。

① 注記

デフォルトでは [\[フェデレーションジョブ関係を含める\]](#) チェックボックスは選択されています。

ジョブを昇格するには、次の手順に従います。

1. プロモーション管理を起動します。
2. [\[昇格ジョブ\]](#) ホームページで、昇格するジョブを選択します。
ホームページ画面を右クリックしてから、[\[昇格\]](#) をクリックすることもできます。
3. [出力先システムのリスト](#) から、必要に応じて別の出力先システムを選択します。

① 注記

昇格処理を始める前に、ソースシステムと出力先システムの両方にログインしておきます。

4. [\[管理 ID の変更\]](#) フィールドに適切な値を入力し、[\[保存\]](#) をクリックします。

① 注記

管理 ID の変更は、ロギング、監査、ジョブ履歴などに関する情報を取得するために使用されます。プロモーション管理ツールでは、管理 ID の変更に対して、ジョブ作成の各インスタンスをマップすることができます。管理 ID の変更は、新しいジョブを作成する時にジョブの定義でユーザが設定する属性です。ツールでは、各ジョブの ID が自動的に生成されます。

5. 必要に応じて、[セキュリティ設定](#) を選択します。次のオプションが表示されます。
 - [セキュリティを昇格しない](#): これはデフォルトオプションです。
 - [セキュリティを昇格](#): ジョブと関連セキュリティ権限を昇格するには、このオプションを使用します。
 - [オブジェクトセキュリティの昇格](#): オブジェクトやフォルダのセキュリティを昇格するには、このオプションを使用します。
 - [ユーザセキュリティの昇格](#): ジョブに含まれているユーザの権限を昇格できます。

- **アプリケーションの権限を含める**: このオプションは**ユーザセキュリティの昇格**も選択している場合にのみ選択できます。ジョブに含まれているオブジェクトがアプリケーションの権限を継承する場合には、ジョブとともにそれらの権限が昇格されます。
- **最上位セキュリティの昇格**: 最上位のセキュリティ権限を昇格するには、このオプションを使用します。

⚠ 警告

[**最上位の昇格**] セキュリティオプションは、ターゲットシステムに定義されている最上位のセキュリティ権限を上書きします。

[**セキュリティを表示**] をクリックして、ジョブに含まれている InfoObject のセキュリティ依存関係を表示することもできます。

① 注記

[**セキュリティを表示**] ボタンは、新規ジョブを保存するまでは無効です。

6. [**保存**] をクリックします。

[**セキュリティを表示**] ボタンが有効になります。セキュリティ依存性を確認できます。

7. [**昇格をテスト**] をクリックして、ソースシステムと出力先システムの間で InfoObject の CUID が競合していないことを確認します。昇格の詳細情報は、**成功**、**失敗**、および**警告**のタブに表示されます。最初の列には昇格対象オブジェクトが表示されます。2 番目の列には各 InfoObject の昇格ステータスが表示されます。プロモーション管理ツールでは、選択したオブジェクトがユーザ、グループ、ユニバースなどに分類されます。

① 注記

このオプションで対象の InfoObject が実際に昇格されることはありません。

昇格テストの結果は次のいずれかになります。

- 上書き: 出力先システムの InfoObject がソースシステムの InfoObject によって上書きされます。
- コピー済み: ソースシステムの InfoObject が出力先システムにコピーされます。
- 中断: InfoObject はソースシステムから出力先システムに昇格されません。
- 警告: 出力先システムの InfoObject の方が新しいバージョンであり、ジョブから InfoObject を削除できます。ただし、InfoObject を昇格することもできます。
- マップ済み: InfoObject は出力先システムの InfoObject にマップされています。

8. 特定の時間または定期的なスケジュールで昇格を実行する場合は、**スケジュール** をクリックします。

9. [**昇格**] をクリックします。

スケジュールされたジョブが昇格されます。

ジョブを昇格しない場合には、[**保存**] オプションを使用して、セキュリティ、変更管理 ID、スケジュール設定などの変更を保存できます。

36.1.3.10 LCMBIAR ファイルを使用したジョブの昇格

昇格とは、リポジトリ間で BI リソースを移動させるアクティビティです。ソースシステムと出力先システムが同じネットワークにある場合、プロモーションマネジメントツールでは WAN または LAN を使用して InfoObject を昇格します。ただし、プロモーションマネジメントツールでは、ソースシステムと出力先システムが同じネットワークにない場合でも、InfoObject を昇格することもできます。

ソースシステムと出力先システムが同じネットワークにないシナリオでは、プロモーションマネジメントツールでソースシステムから LCMBIAR ファイルにジョブをエクスポートしてから、そのジョブを BIAR ファイルから出力先システムにインポートすることにより、ジョブを出力先システムに昇格することができます。

このセクションでは、LCMBIAR ファイルにジョブをエクスポートしてから、そのジョブを BIAR ファイルから出力先システムにインポートする方法について説明します。

① 注記

- プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#) を参照してください。
- プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#) を参照してください。

関連情報

[LCMBIAR ファイルへのジョブのエクスポート \[553 ページ\]](#)

[LCMBIAR ファイルからのジョブのインポート \[554 ページ\]](#)

36.1.3.10.1 LCMBIAR ファイルへのジョブのエクスポート

この節では、LCMBIAR ファイルにジョブをエクスポートする方法について説明します。

LCMBIAR ファイルにジョブをエクスポートするには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動し、ジョブを新規作成します。
ジョブの新規作成の詳細については、次のリンクを参照してください。 [ジョブを作成する \[543 ページ\]](#)
2. [出力先](#)ドロップダウンリストから [LCMBIAR ファイル](#)に出力オプションを選択し、[作成](#)をクリックします。
3. [\[オブジェクトの追加\]](#) をクリックして InfoObject をジョブに追加します。
選択したジョブの依存を管理するには、[\[依存関係の管理\]](#)オプションを使用します。
4. パスワードを使用して LCMBIAR ファイルを暗号化するには、[\[パスワード暗号化\]](#) チェックボックスをクリックします。
5. [\[パスワード\]](#) フィールドにパスワードを入力します。
6. [\[パスワードの確認\]](#) フィールドにパスワードを再入力します。
7. [\[昇格\]](#) をクリックします。
[昇格](#)ウィンドウが表示されます。
8. 必要に応じてセキュリティオプションを変更し、[エクスポート](#)をクリックします。
LCMBIAR ファイルが作成されます。LCMBIAR ファイルはファイルシステムに保存できます。
9. (オプション) LCMBIAR ファイルを FTP サーバまたは SFTP サーバにエクスポートするには、[\[LCMBIAR ファイルの出力先\]](#) をクリックして [\[FTP\]](#) または [\[SFTP\]](#) を選択します。ホスト名、ポート、ユーザ名、パスワード、ディレクトリ、およびファイル名を入力し、[エクスポート](#)をクリックします。

① 注記

[LCMBIAR ファイルの出力先] として [SFTP] を選択した場合、SFTP フィンガープリントを追加で入力する必要があります。

10. [出力先] ドロップダウンリストから [LCMBIAR ファイルに出力] を選択し、[LCMBIAR ファイルの出力先] をクリックします。

LCMBIAR ファイルへのジョブのエクスポートをスケジュールできます。この詳細については、[ジョブの昇格をスケジュールする \[556 ページ\]](#)の節を参照してください。

関連情報

[ジョブに InfoObject を追加する \[547 ページ\]](#)

[ジョブの依存関係を管理する \[548 ページ\]](#)

36.1.3.10.2 LCMBIAR ファイルからのジョブのインポート

LCMBIAR ファイルからジョブをインポートできます。LCMBIAR ファイルは保存デバイスから出力先システムにコピーされます。

LCMBIAR ファイルをインポートするには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
2. [昇格ジョブ](#) ホームページで、**インポート** > **ファイルのインポート** をクリックします。
ファイルからインポート ウィンドウが表示されます。
3. ファイルシステムまたは FTP サーバあるいは SFTP サーバから BIAR ファイルをインポートできます。
 - ファイルシステムから BIAR ファイルをインポートするには、次の手順に従います。
 1. [ファイルシステム](#) を選択します。
 2. [参照](#) をクリックし、ファイルシステムから LCMBIAR ファイルを選択します。
 3. [パスワード](#) フィールドに LCMBIAR ファイルのパスワードを入力します。

① 注記

パスワードフィールドは、LCMBIAR ファイルがパスワードで暗号化されている場合にのみ表示されます。

4. [作成](#) をクリックします。ジョブが作成されます。

① 注記

同じ名前のジョブが存在する場合、保存の確認ポップアップが表示されます。'はい' をクリックすると既存のジョブが上書きされ、'いいえ' をクリックすると新しい名前 (jobname_copy<CURRENT_DATE_AND_TIME>) でジョブが作成されます。

- FTP サーバから LCMBIAR ファイルをインポートするには、次の手順に従います。
 1. [FTP](#) を選択します。

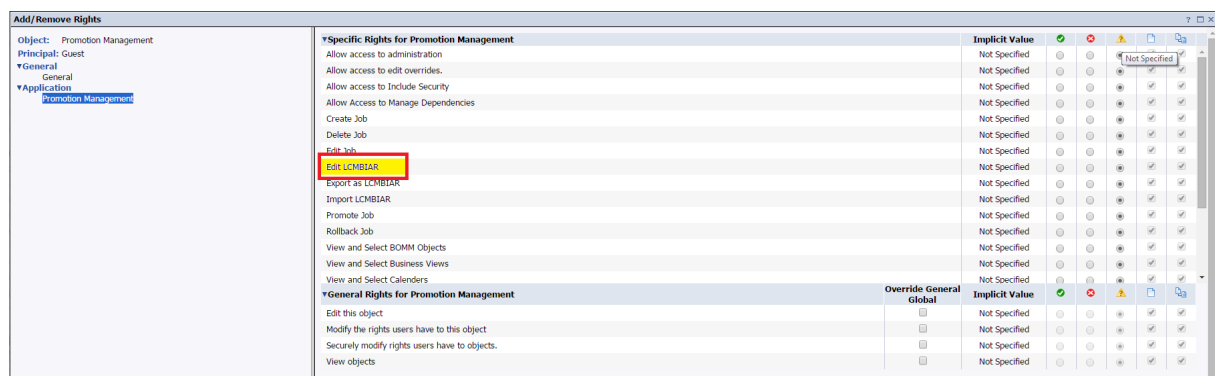
2. [ホスト]、[ポート]、[ユーザ名]、[パスワード]、[ディレクトリ]、および[ファイル名]の各フィールドに適切な詳細情報を入力し、[OK]をクリックします。
- SFTP サーバから LCMBIAR ファイルをインポートするには、次の手順に従います。
 1. [SFTP] を選択します。
 2. [ホスト]、[ポート]、[ユーザ名]、[パスワード]、[ディレクトリ]、[フィンガープリント] および[ファイル名]の各フィールドに適切な詳細情報を入力し、[OK]をクリックします。
4. [昇格]をクリックします。
昇格 - ジョブ名ウィンドウが表示されます。
5. [出力先] ドロップダウンリストから、出力先システムを選択します。[新しい CMS へのログイン]を選択すると、認証情報が要求されます。出力先システムのログイン認証情報を確認します。
6. [昇格]をクリックし、出力先システムにコンテンツを昇格します。
[昇格をテスト]オプションをクリックして、昇格するオブジェクトと昇格のステータスを表示できます。
7. オプション: カスタマイズを使用する Web Intelligence ドキュメントをインポートする場合は、[ユーザグループ BI 基本設定] タブで、[ユーザグループ BI 基本設定の上書き]をオンにしてカスタマイズをインポートします。

関連情報

[ジョブの依存関係を管理する \[548 ページ\]](#)

36.1.3.10.2.1 LCMBIAR ファイルからのオブジェクトの選択的取得

ユーザが LCMBIAR ファイルからオブジェクトを選択的に取得するには、[LCMBIAR の編集] 権限が必要です。



LCMBIAR ファイルからオブジェクトを選択的に取得するには、次の手順に従います。

1. 該当するオブジェクトを選択します。
2. [昇格]をクリックします。

① 注記

- 選択したオブジェクトが含まれる新しいジョブが作成されます。
- コマンドラインツールを使用して、同じ操作を実行することができます。詳細については、[コマンドラインツールパラメータ \[568 ページ\]](#)を参照してください。
- 選択的昇格は、Live から Live のシナリオではサポートされていません。

36.1.3.11 ジョブの昇格をスケジュールする

この節では、ジョブの昇格をスケジュールする方法について説明します。繰り返しオプションとパラメータを指定する方法についても説明します。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)を参照してください。

ジョブインスタンスの昇格をスケジュールするには、次の手順に従います。

1. [\[昇格\]](#) ダイアログボックスで [\[スケジュール\]](#) オプションをクリックします。
2. 必要なスケジュールオプションを設定し、[\[スケジュール\]](#) をクリックします。

昇格のジョブがスケジュールされた後で、InfoObject をそのジョブを含むフォルダに追加した場合、これらもスケジュールされた時間に出力先に昇格されます。ただし、LCMBIAR ファイルを使用してジョブをスケジュールしようとする場合、LCMBIAR は 'real' 出力先と見なされないため、これは当てはまりません。

→ ヒント

ジョブの昇格が完了したら、そのジョブのインスタンスをすべて表示できます。これを行うには、[昇格ジョブ](#) ページでジョブを選択して、ツールバーで[履歴](#)をクリックします。

ジョブの昇格も、イベントトリガに基づいて行われます。

ジョブの昇格のステータス (成功/一部成功/失敗など) に基づいて電子メール通知を選択できます。各種スケジュールオプションおよび通知の設定の詳細については、「[スケジュール](#)」の節を参照してください。

関連情報

[LCMBIAR ファイルへのジョブのエクスポート \[553 ページ\]](#)




36.1.3.11.1 定期および一時停止中のジョブ昇格インスタンスを更新する

プロモーションマネジメントツールでは、[定期および待機中のインスタンス](#)オプションを使用して、昇格ジョブインスタンスのステータスを追跡して再スケジュールすることができます。

昇格ジョブインスタンスのステータスを追跡して再スケジュールするには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
2. [\[昇格ジョブ\]](#)ホームページでジョブを選択します。
3. [\[履歴\]](#) をクリックします。
[ジョブ履歴](#)ウィンドウが表示されます。
4. [\[定期および一時停止中のインスタンス\]](#) をクリックします。
[定期および一時停止中のインスタンスのジョブ履歴](#)ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、定期および待機中の昇格ジョブインスタンスが表示されます。

必要に応じて、次のオプションを使用できます。

- 昇格されたジョブインスタンスを表示するには、[昇格されたインスタンス](#) をクリックします。
- 選択した待機中または定期のインスタンスを一時停止するには、[一時停止](#) をクリックします。
- 一時停止中のスケジュールされた昇格ジョブインスタンスの一時停止を解除するには、[再開](#) オプションをクリックします。
- 選択した昇格ジョブインスタンスを再スケジュールするには、[再スケジュール](#) オプションをクリックします。
- スケジュールされた昇格ジョブインスタンスを削除するには、 をクリックします。
- スケジュールされた昇格ジョブインスタンスのステータスを最新表示するには、 をクリックします。
-  オプションを使用して1ページずつ移動するか、あるいは該当するページ番号を入力して特定のページに移動できます。

① 注記

[定期および一時停止中のインスタンスのジョブ履歴](#)ウィンドウのステータス列には、定期や待機中といった昇格ジョブインスタンスのステータスが表示されます。

関連情報

[ジョブをロールバックする \[558 ページ\]](#)

36.1.3.12 ジョブ履歴を表示する

このセクションでは、ジョブ履歴の表示方法について説明します。

① 注記

ジョブ履歴を表示するには、ジョブが次のいずれかのステータスであることを確認する必要があります。

- 成功
- 失敗
- 一部成功

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)🔗を参照してください。

ジョブ履歴を表示するには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
[昇格ジョブ](#)ホームページが表示されます。
2. 履歴を表示するジョブを選択し、[\[履歴\]](#) タブをクリックします。

ジョブインスタンスの日時、ジョブ名、ソースシステム名、出力先システム名、ジョブを昇格させたユーザのID、およびジョブのステータス (成功、失敗、または一部成功) が表示されます。

[ステータス](#)列に表示されているリンクを使用して、ジョブの詳細ステータスを表示できます。

36.1.3.13 ジョブをロールバックする

ロールバックオプションでは、ジョブの昇格後に出力先システムを以前の状態に戻すことができます。

① 注記

プロモーションマネジメントツールにセキュリティ拡張機能が実装されているため、アクションの実行時に特定の動作が変更されます。詳細については、[3350454](#)🔗を参照してください。

ジョブをロールバックするには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
[昇格ジョブ](#)ホームページが表示されます。
2. 次の操作を実行できます。
 - ロールバックするジョブを右クリックし、[ロールバック](#)を選択します。
 - ロールバックするジョブを選択し、[ロールバック](#)タブをクリックします。[ロールバック](#)ウィンドウが表示されます。
3. ロールバックするインスタンスを選択し、[完全ロールバック](#)をクリックします。
インスタンスがロールバックされます。

昇格ジョブの最新インスタンスのみをロールバックできます。同時に複数のジョブインスタンスをロールバックすることはできません。

36.1.3.13.1 【一部ロールバック】オプションを使用する

プロモーションマネジメントツールでは、ジョブに含まれている InfoObject を出力先システムから完全にまたは一部ロールバックすることができます。

InfoObject を一部ロールバックするには、次の手順に従います。

1. プロモーションマネジメントツールを起動します。
[昇格ジョブ](#)ホームページが表示されます。
2. 次の操作を実行できます。
 - ロールバックするジョブを右クリックし、[\[ロールバック\]](#)を選択します。
 - ロールバックするジョブを選択し、[\[ロールバック\]](#) タブをクリックします。[ロールバック](#)ウィンドウが表示されます。
3. 一覧からインスタンスを選択し、[一部ロールバック](#)をクリックします。
[\[ジョブビューア\]](#)ページには、選択したジョブの InfoObject 一覧が表示されます。
4. ロールバックする InfoObject を選択し、[\[ロールバック\]](#)をクリックします。

① 注記

次のインスタンスをロールバックする前に、インスタンスに含まれている InfoObject をすべてロールバックしておく必要があります。

⚠ 警告

セキュリティとともに昇格されたジョブの場合、InfoObject を一部ロールバックすると、選択した依存 InfoObject のセキュリティが以前の状態にロールバックされないことがあります。

関連情報

[異なるバージョンの BI リソースを管理する \[615 ページ\]](#)

36.1.3.13.2 パスワード期限切れ後にジョブをロールバックする

このセクションでは、ジョブの昇格に使用されたパスワードの期限切れ後に、ジョブをロールバックする方法について説明します。

パスワードの期限切れ後にジョブをロールバックするには、次の手順に従います。

1. ロールバックするジョブを選択し、[\[ロールバック\]](#)をクリックします。
2. [\[ロールバック\]](#)ウィンドウで[\[完全ロールバック\]](#)を選択します。
エラーメッセージが表示されます。このメッセージは、ジョブをロールバックできないことを知らせるものです。ソースシステムまたは出力先システムへのログインも求められます。
3. 新しいログイン認証情報を入力し、[\[ログイン\]](#)をクリックします。

ロールバック処理が完了したことを知らせるダイアログボックスが表示されます。

① 注記

ソースシステムまたは出力先システムの認証情報を使用して昇格されたジョブが自動的に更新されます。

関連情報

[パスワード期限切れ後に InfoObject を部分的にロールバックする \[560 ページ\]](#)

[\[一部ロールバック\] オプションを使用する \[559 ページ\]](#)

36.1.3.13.2.1 パスワード期限切れ後に InfoObject を部分的にロールバックする

このセクションでは、ソースシステムまたは出力先システムのパスワードの期限切れ後に InfoObject を部分的にロールバックする方法について説明します。

パスワード期限切れ後に InfoObject を部分的にロールバックするには、次の手順に従います。

1. ロールバックするジョブを選択し、[\[ロールバック\]](#)をクリックします。
[ロールバック](#)ウィンドウが表示されます。
2. [\[一部ロールバック\]](#)オプションを選択します。
エラーメッセージが表示されます。このメッセージは、InfoObject をロールバックできないことを知らせるものです。ソースシステムまたは出力先システムへのログインも求められます。
3. 新しいログイン認証情報を入力し、[\[ログイン\]](#)をクリックします。
[ジョブビューア](#)ページが表示されます。このページには InfoObject の一覧が表示されます。
4. 必要な InfoObject を選択し、[\[ロールバック\]](#)をクリックします。

① 注記

ソースシステムまたは出力先システムの認証情報を使用して昇格されたジョブが自動的に更新されます。

関連情報

[ジョブをロールバックする \[558 ページ\]](#)

[\[一部ロールバック\] オプションを使用する \[559 ページ\]](#)

[パスワード期限切れ後にジョブをロールバックする \[559 ページ\]](#)

36.1.4 プロモーションマネジメントツールを使用するリポジトリのフルコンテンツの昇格

リポジトリのコンテンツを昇格するには、計画、準備を行い、十分な時間をかける必要があります。この節では、デプロイメント間のコンテンツ昇格に成功するために必要なアクションについて説明します。

36.1.4.1 ソースシステムおよびターゲットシステムを準備する

ソースシステムおよびターゲットシステムは、コンテンツを昇格する前に最適に設定しておく必要があります。

1. ソースシステムの場合:
 - a. リポジトリ診断ツール (RDT) を使用して、ソースシステムをスキャンおよび修正し、リポジトリや FRS の不一致があれば修正します。RDT の詳細については、*Business Intelligence* プラットフォームリポジトリ診断ツールユーザガイドを参照してください。
 - b. ソースシステムのシステム使用量を最小限に抑えて、昇格時の変更を最小にします。システムがアクティブな場合、オブジェクトの障害が生じる可能性があります。

① 注記

障害が発生した場合は、ジョブのステータスを確認して、すべての問題を修正します。

2. ターゲットシステムの場合:
 - a. ライセンスキーコードを使用して、適切で十分なライセンスをターゲットシステムに確実に設定します。

① 注記

不十分なライセンスが原因のコンテンツ昇格失敗を回避するには、両方のシステムで同一のライセンスを使用します。

- b. サードパーティ認証を使用する場合は、コンテンツを昇格する前に、ターゲットシステムに設定して有効化する必要があります。

① 注記

ユーザまたはユーザグループはマップしないでください。マップすると、ターゲットシステムで、異なる CUID を持つユーザまたはユーザグループが作成されます。昇格処理では、CUID を使用して、ソースシステムとターゲットシステム間でオブジェクトを識別しマップします。ユーザおよびユーザグループをマップすると、コンテンツの不一致が生じ、昇格が失敗します。

- c. ソースシステムに必要なすべてのアドオンが、ターゲットシステムにもインストールされているようにします。

① 注記

移行を成功するためには、Analysis や Design Studio などのアドオンをソースシステムにインストールする必要があります。

- d. QaaWS 接続を使用するコンテンツがある場合は、上書きを有効化して、QaaWS 接続が適切な Web サービスをポイントするようにする必要があります。上書きの設定の詳細については、“上書き”の節を参照してください。

- e. スケジュールされ完了したすべてのインスタンスを移行する必要がある場合は、プロモーションマネジメントのジョブ設定で依存関係の管理ページに完了したインスタンスを表示するをクリックする必要があります。

3. セントラルシステムの場合:

- a. ソースシステム、ターゲットシステム、または別のシステムをセントラルシステムとして指定でき、指定したシステムでプロモーションマネジメントジョブが実行されます。リポジトリ全体を昇格する場合は、セントラルシステムで、追加のシステムリソースを必要とする大量のコンテンツを扱います。セントラルシステムをオブジェクト 10,000 個に対応できるように設定するには、次のサイズ設定を参考にします。

	一時スペースの割り当て	メモリの割り当て	追加設定
LCM_CLI	2 GB	2 GB	LCM_CLI.bat を更新して、-Xmx パラメータを変更します。
プロモーションマネジメント Job Server	3 GB	3 GB	CMC で、-javaargs Xmx3g パラメータを追加することで、プロモーションマネジメント Job Server のスタートアッププロパティを更新します。詳細については、 SAP ノート 2286419 を参照してください。

たとえば、ジョブに 50,000 個のオブジェクトが含まれると予測される場合は次のとおりとなります。

- メモリ 10 GB を LCM_CLI に割り当てます ($50,000 \div 10,000 \times 2$)。
- メモリ 15 GB を Job Server に割り当てます ($50,000 \div 10,000 \times 3$)。

① 注記

このサイズ設定ガイドラインはほとんどの環境に適用されます。ただし、リソース要件はドキュメントのサイズに影響を受けることがあります。

36.1.4.2 移行ストラテジー

- すべてのジョブ昇格で、Web CMC ツールではなくコマンドラインインタフェース (CLI) を使用します。
 - CLI は、1,000 を超えるオブジェクトを含む昇格ジョブで問題となる、20 分という Web セッションの制限を回避します。

① 注記

オブジェクトの制限は、十分なシステムリソースに依存します。

- CLI では、クエリ言語を使用して、移行するコンテンツを選択することで、コンテンツの昇格を詳細にコントロールできます。同じタイプのコンテンツや、同じディレクトリに存在するコンテンツを選択できます。
- CLI はまとめて実行することができ、他のスクリプトツールで昇格ジョブを初期化できます。

- まず、主体 (ユーザおよびユーザグループ) の昇格によって、セキュリティを確立します。
 - ユーザおよびユーザグループの昇格をはじめに行うと、ターゲットシステムでセキュリティモデルが保持され、その後に行われるユーザの個人用コンテンツ (受信ボックス、お気に入り、個人用カテゴリなど) の移行を成功させることができます。

① 注記

最初にこのタスクを実行し、ターゲットシステムのユーザおよびユーザグループの CUID をソースシステムのものと一致させることが重要です。

- 依存関係の計算をオフにします。
 - 依存関係の計算は、ジョブ作成処理で最も負荷が高いタスクの1つです。リポジトリの完全移行中は、すべてのオブジェクトが移行されるため、この計算は必要ありません。

① 注記


この機能は、必要な依存オブジェクトがわからない場合にのみ、役立ちます。

- 可能な限り、セキュリティの計算を含めないようにします。
 - セキュリティの計算は、ジョブ作成処理で2番目に負荷が高いタスクです。異なる複数のディレクトリに多くのドキュメントがある場合は、昇格を2つのジョブに分割し、セキュリティはディレクトリのみに設定します。1つ目のジョブにはセキュリティが有効なオブジェクトのみを含め、2つ目のジョブにはセキュリティが無効なドキュメントのみを含めます。こうすることで、ディレクトリのみでセキュリティの計算を実行することができ、すべてのドキュメントでセキュリティを計算せずに済みます。

① 注記

オブジェクトのセキュリティは、フォルダのセキュリティから継承されるため、保持されます。

36.1.5 システム全体の昇格ステップ

システム全体を昇格するには、3つの別の昇格ジョブを順に実行する必要があり、それぞれで特定のコンテンツタイプを昇格します。複数のオブジェクトを昇格する方法の詳細については、[Knowledge Base Article 1969259](#)  を参照してください。

次の表に、各昇格ジョブのコンテンツタイプおよびパラメータ設定の概要を示します。

昇格ジョブ	コンテンツタイプ	exportDependencies	includeSecurity
1	すべてのユーザとユーザグループ	false	true
2	すべての依存オブジェクト	false	true
3	すべての1次オブジェクト	false	true

コマンドラインインタフェース (CLI) を使用して、各ジョブを作成および実行します。CLIの詳細については、[コマンドラインオプションの使用 \[567 ページ\]](#)の節を参照してください。

共通パラメータ

3つの昇格ジョブすべてで次のパラメータを使用します。

→ 注意

各パラメータは新しい行に記述してください。

```
action=promote
Source_CMS=<SourceSystem>
Source_userName=Administrator
Source_password=<AdministratorPassword>
LCM_CMS=<NameOfCentralSystem>
LCM_userName=Administrator
LCM_password=<AdministratorPassword>
Destination_CMS=<TargetSystem>
Destination_userName=Administrator
Destination_password=<AdministratorPassword>
exportDependencies=false
includeSecurity=true
stacktrace=true
consolelog=true
```

36.1.5.1 ユーザおよびユーザグループを昇格する (ジョブ 1)

ソースシステムとターゲットシステムの間に同一のセキュリティモデルを確立し、ユーザおよびユーザグループオブジェクトの CUID を確実に同一のものとするには、はじめにユーザおよびユーザグループを昇格します。

1. 共通パラメータを使用して `usersandgroups.properties` ファイルを作成し、すべてのユーザおよびユーザグループを選択するために、このファイルに次のパラメータを追加します。

```
exportQuery1=SELECT TOP 10000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
(SI_KIND='User' OR SI_KIND='UserGroup') AND NOT (SI_ID in (11,12, 501, 1, 2,
3))
```

2. ジョブを実行するには、`<INSTALLDIR>%win64x64%scripts` ディレクトリに移動して、次のコマンドを実行します。

```
Lcm_cli.bat -lcmproperties=usersandgroups.properties
```

36.1.5.2 依存オブジェクトを昇格する (ジョブ 2)

依存オブジェクトは、パブリックフォルダおよびユーザのお気に入りフォルダの1次オブジェクトに依存されます。他のすべてのジョブで `includeDependencies` を `true` に設定しなくてすむよう、2番目に依存オブジェクトを昇格します。依存オブジェクトは次のとおりです。

- アクセスレベル
- アプリケーション
- ビジネスビュー

- カレンダ
- カテゴリ
- 接続
- イベント
- OLAP 接続
- プロファイル
- プロジェクト
- QaaWS
- リモート接続
- レプリケーション一覧
- サーバグループ
- ユニバース

1. 共通パラメータを使用して dependencies.properties ファイルを作成し、すべての依存オブジェクトを選択するために、このファイルに次のパラメータを追加します。

```
#total number of queries (if > 1)
exportQueriesTotal=12
#Projects, Universes, Connections, OLAP Connects: SI_ID=95
exportQuery1=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (95)")
#QaaWS: SI_CUID='AcTDjF_lm8dElXVCUgHI2Ps'
#-need to ensure Overrides are scanned at the source, promoted to the target
and set to active
exportQuery2=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_CUID='AcTDjF_lm8dElXVCUgHI2Ps'")
#Events: SI_ID=21
exportQuery3=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (21)") and
si_specific_kind != 'MON.MonitoringEvent'
#Calendars: SI_ID=22
exportQuery4=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (22)")
#Categories: SI_ID=45
exportQuery5=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (45)")
#Access Levels: SI_ID=57
exportQuery6=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (57)")
#Server Groups: SI_ID=17
exportQuery7=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (17)")
#Profiles: SI_ID=50
exportQuery8=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (50)")
#Applications: SI_ID=99
exportQuery9=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (99)")
#Remote Connections: SI_CUID = 'AVwSekNrtFxGqJ6Jp2rLwrI'
exportQuery10=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
```

```
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_CUID =
'AVwSekNrtFxGqJ6Jp2rLwrl'")
#Replication Lists: SI_CUID = 'ASOr8wap3MJ0gdWV5HLcZ1M'
exportQuery11=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_CUID='ASOr8wap3MJ0gdWV5HLcZ1M'")
#BusinessViews: SI_ID=98
exportQuery12=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID IN (98)")
```

2. ジョブを実行するには、<INSTALLDIR>%win64x64%scripts ディレクトリに移動して、次のコマンドを実行します。

```
Lcm_cli.bat -lcmproperties=dependencies.properties
```

36.1.5.3 1 次オブジェクトを昇格する (ジョブ 3)

1 次オブジェクトは、パブリックフォルダおよびユーザのお気に入りフォルダにある中心的な BI ドキュメントです。2 番目の昇格ジョブがすでに実行済みである場合、すべての依存オブジェクトは移行されており、最後に 1 次オブジェクトを昇格すると、1 次オブジェクトと依存オブジェクトの間のリレーションシップが再確立されます。

1. 共通パラメータを使用して primaryobjects.properties ファイルを作成し、すべてのユーザおよびユーザグループを選択するために、このファイルに次のパラメータを追加します。

```
#total number of queries (if > 1)
exportQueriesTotal=4
#All Public Folders
exportQuery1=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID in (23)")
#All user collaterals (Inbox, FavoriteFolder, PersonalCategory)
exportQuery2=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "(SI_KIND='Inbox')")
exportQuery3=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "(SI_KIND='FavoritesFolder')")
exportQuery4=SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "(SI_KIND='PersonalCategory')")
```

同じジョブを再実行する場合は、以下のクエリを使用して LCM ジョブを除外します。

```
SELECT TOP 100000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID, SI_OWNER,
SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID in (23)") and SI_KIND not in
('LCMJob')
```

2. ジョブを実行するには、<INSTALLDIR>%win64x64%scripts ディレクトリに移動して、次のコマンドを実行します。

```
Lcm_cli.bat -lcmproperties=primaryobjects.properties
```

④ 注記

パブリックフォルダまたはユーザのお気に入りフォルダに 50,000 個を超えるオブジェクトがある場合は、この最後のジョブを複数の小さなジョブに分割する必要があります。

① 注記

コマンドラインインタフェースのコマンドを実行するマシンとプロモーションマネジメント Job Server の両方が、サイズ設定要件を満たしていることを確認します。詳細については、“サイズ変更”の節を参照してください。

36.1.5.4 昇格後の作業

プロモーションマネジメントでは、サーバグループのみが昇格され、そのサーバは昇格されません。サーバが指定されているレポートが引き続き機能するように、サーバを再作成して、適切なサーバグループに割り当てる必要があります。

36.1.6 コマンドラインオプションの使用

プロモーションマネジメントツールのコマンドラインオプションでは、ある BI プラットフォームデプロイメントから別の BI プラットフォームデプロイメントにオブジェクトを昇格することができます。複数ジョブのバッチスクリプトを作成することができます。

→ ヒント

多数のオブジェクトを含むジョブのコマンドラインオプションを使用します。

プロモーションマネジメントツールでは、コマンドラインによる次のジョブの昇格がサポートされています。

- パスワード暗号化を使用した既存の昇格ジョブテンプレートの LCMBIAR へのエクスポート
- パスワード暗号化を使用しない既存の昇格ジョブテンプレートの LCMBIAR へのエクスポート
- 単独/複数のプラットフォームのクエリのエクスポート
- 複数のプラットフォームクエリの昇格
- 既存のジョブテンプレートを使用した昇格
- 既存の LCMBIAR ファイルのインポートおよび昇格
- CMS から CMS への昇格を実行する

36.1.6.1 Windows でコマンドラインツールを実行する

コマンドラインツールを実行するには、次の手順に従います。

1. コマンドラインウィンドウまたはシェルを起動します。
2. 適切なディレクトリに移動します。

たとえば、Windows のディレクトリパスは、`C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\java\lib` です。

3. 次のいずれかを実行します。

- LCMCLI を実行し、プログラムの実行前に Java のパスが設定されていることを確認します。
コマンド: `java -cp "lcm.jar" com.businessobjects.lcm.cli.LCMCLI <プロパティファイル>`
- C:\Program Files (x86)\SAP Business Objects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win64_x64\scripts\lcm_cli.bat から BAT ファイルを実行します。
コマンド: `lcm_cli.bat -lcmproperty <プロパティファイル>`

① 注記

プロンプトが表示されたら、有効なパスワードを入力します。

プロモーションマネジメントコマンドラインツールでは、`<properties>` ファイルをパラメータとして取得します。`<properties>` ファイルには、実行するアクションに関するプロモーションマネジメントツールと通信するために必要なパラメータ、接続先の BI プラットフォームデプロイメント、接続メソッド、昇格するオブジェクトが含まれています。

ファイルは、`<FILENAME>.properties` の形式で書かれている必要があります。

例: `<Myproperties.properties>`

36.1.6.2 Unix でコマンドラインツールを実行する

コマンドラインツールを実行するには、次の手順に従います。

1. シェルを起動します。
2. 適切なディレクトリに移動します。

例: `/usr/u/qaunix/Aurora604/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib`

3. 次のいずれかを実行します。

- LCMCLI を実行し、プログラムの実行前に Java のパスが設定されていることを確認します。
コマンド: `java -cp "lcm.jar" com.businessobjects.lcm.cli.LCMCLI <プロパティファイル>`
- `<インストールディレクトリパス>\sap_bobj\lcm_cli.sh` から BAT ファイルを実行します。
コマンド: `lcm_cli.sh -lcmproperty <プロパティファイル>`

① 注記

プロンプトが表示されたら、有効なパスワードを入力します。

36.1.6.3 コマンドラインツールパラメータ

プロモーションマネジメントツールのコマンドラインオプションのコマンドラインパラメータは、以下の 3 つの主要なプロモーションタイプに従って編成されています。

- LCMBIAR ファイルからライブ CMS へのオブジェクトの昇格
- ソースライブ CMS からターゲットライブ CMS へのオブジェクトの昇格
- ライブ CMS から LCMBIAR ファイルへのオブジェクトのエクスポート

これら 3 つのプロモーションタイプが関係するパラメータに加えて、すべての昇格シナリオで使用できる一般コマンド用のパラメータもあります。

→ 注意

引用符で囲んだコマンドラインのパラメータを入れないでください。

① 注記

- コマンドラインオプションでは、エクスポート前にジョブが作成されると同様に、その場で一時ジョブが作成されます。作成されるジョブ名は、Query_<USER>_<Timestamp> の組み合わせで設定されます。これは <exportQuery> にのみ適用されます。
- ジョブは、プロモーションマネジメントツールからのみロールバックできます。ジョブをロールバックするためのコマンドラインはサポートされていません。
- 多数のオブジェクトを使用する際は、LCMCLI スクリプトの -Xmx=8g パラメータを設定して最大 Java ヒープサイズを拡大することをお奨めします。

関連情報

[LCMBIAR ファイルをライブ CMS へ \[572 ページ\]](#)

[ソースライブ CMS からターゲットライブ CMS \[578 ページ\]](#)

[ライブ CMS から LCMBIAR ファイル \[575 ページ\]](#)

[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)

36.1.6.3.1 昇格シナリオごとのコマンドラインパラメータ

コマンドラインパラメータは、各昇格シナリオの推奨順序で示されます。この表は、各昇格シナリオの使用可能なすべてのパラメータとそれらのステータス (必須またはオプション) を示しています。各必須パラメータについては、対応する昇格シナリオに対して説明します。オプションのパラメータについては、すべてのコマンドラインパラメータのセクションの一覧で説明します。シナリオごとのすべてのパラメータ情報および使用可能な追加パラメータについては、関連リンクを参照してください。

パラメータグループ	パラメータ	LCMBIAR からライブ	ライブから LCMBIAR	ライブからライブ	ロールバック
プロパティファイル	lcmproperty	オプション	推奨	推奨	推奨
アクションタイプ	action	必須	必須	必須	必須
		action=promote	action=export	action=promote	action=rollback
LCM ノード	LCM_CMS		必須		

パラメータグループ	パラメータ	LCMBIAR からライブ	ライブから LCMBIAR	ライブからライブ	ロールバック
	LCM_userName		必須		
	LCM_Password		必須 空の場合、コンソールで必要になります。		
	LCM_authentication		オプション: デフォルト = secEnterprise		
	LCM_SystemID		SAP 認証の場合にのみ必須		
	LCM_ClientID		SAP 認証の場合にのみ必須		
ソース(ライブまたは LCMBIAR)	importLocation	必須	適用外	適用外	適用外
	lcmbiarpassword	必須 (空にすることができます)	適用外	適用外	適用外
	Source_CMS	適用外	必須	必須	適用外
	Source_UserName	適用外	必須	必須	適用外
	Source_password	適用外	必須 空の場合、コンソールで必要になります。	必須 空の場合、コンソールで必要になります。	適用外
	Source_authentication	適用外	オプション デフォルト = secEnterprise	オプション デフォルト = secEnterprise	適用外
	Source_systemID	適用外	SAP 認証の場合にのみ必須	SAP 認証の場合にのみ必須	適用外
	Source_clientID	適用外	SAP 認証の場合にのみ必須	SAP 認証の場合にのみ必須	適用外
出力先(ライブまたは LCMBIAR)	Destination_CMS	必須	適用外	必須	適用外
	Destination_username	必須	適用外	必須	適用外
	Destination_password	必須	適用外	必須	適用外

パラメータグループ	パラメータ	LCMBIAR からライブ	ライブから LCMBIAR	ライブからライブ	ロールバック
	Destination_authentication	オプション デフォルト = secEnterprise	適用外	オプション デフォルト = secEnterprise	適用外
	Destination_systemID	SAP 認証の場合にのみ必須	適用外	SAP 認証の場合にのみ必須	適用外
	Destination_clientID	SAP 認証の場合にのみ必須	適用外	SAP 認証の場合にのみ必須	適用外
	ExportLocation	適用外	必須	適用外	適用外
	lcmbiarpassword	適用外	必須 (空にすることができます)	適用外	適用外
ジョブ関連	JOB_CUID	適用外	オプション	オプション	必須
	Override	オプション	適用外	適用外	適用外
	forceOverride SP4 で利用可能	オプション	適用外	適用外	適用外
	Timeout SP4 で利用可能	オプション	適用外	オプション	適用外
エクスポート関連	ExportDependencies	適用外	オプション デフォルト = False	オプション デフォルト = False	適用外
	ExportQuery	適用外	必須	必須	適用外
	ExportQueriesTotal	適用外	オプション: 複数のエクスポートクエリがある場合に使用	オプション: 複数のエクスポートクエリがある場合に使用	適用外
	BatchJobQuery	適用外	オプション: Exportquery とともに使用	オプション: Exportquery とともに使用	適用外
	LimitQueryBatchSize	適用外	オプション	オプション	適用外
ログ関連	Consolelog	オプション デフォルト = False	オプション デフォルト = False	オプション デフォルト = False	適用外
	ResultFileName	オプション	オプション	オプション	適用外

パラメータグループ	パラメータ	LCMBIAR からライブ	ライブから LCMBIAR	ライブからライブ	ロールバック
	LogFileName	オプション	オプション	オプション	適用外
	SP4 で利用可能				
オブジェクト選択	Selected_CUIDS	オプション	適用外	適用外	適用外
	selectUser	適用外	オプション	オプション	適用外
	SP4 で利用可能		デフォルト = All	デフォルト = All	
	selectGroup	適用外	オプション	オプション	適用外
	SP4 で利用可能		デフォルト = All	デフォルト = All	
セキュリティ	IncludeApplicationSecurity	オプション	オプション	オプション	適用外
		デフォルト = False	デフォルト = False	デフォルト = False	
	IncludeSecurity	オプション	オプション	オプション	適用外
		デフォルト = False	デフォルト = False	デフォルト = False	
	IncludeTopLevelSecurity	オプション	オプション	オプション	適用外
		デフォルト = False	デフォルト = False	デフォルト = False	
コメント	IncludeComments	オプション	オプション	オプション	適用外
		デフォルト = False	デフォルト = False	デフォルト = False	
フェデレーションジョブ	IncludeFederationJobsRelationship	オプション	適用外	オプション	適用外
		デフォルト = True		デフォルト = True	

関連情報

[LCMBIAR ファイルをライブ CMS へ \[572 ページ\]](#)
[ライブ CMS から LCMBIAR ファイル \[575 ページ\]](#)
[ソースライブ CMS からターゲットライブ CMS \[578 ページ\]](#)
[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)

36.1.6.3.2 LCMBIAR ファイルをライブ CMS へ

LCMBIAR ファイルのオブジェクトをライブ CMS に昇格させる場合、コマンドラインから、次のように昇格順序を指定するプロパティファイルを参照します。

- インポートロケーションおよび昇格アクションタイプ

- プロモーションマネジメントツール (以前のライフサイクル管理ツール LCM) をホストする CMS へのログイン認証情報。
- 出力先 CMS のログイン認証情報。
- CMS 昇格に必要なその他のパラメータ。LCMBIAR パスワードや必要に応じて既存のオブジェクトを上書きする設定などが例として挙げられます。

特定の昇格ニーズを指定できるその他のオプションのパラメータを含めることができます。これらのオプションのパラメータについては、[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)を参照してください。

コマンドラインでプロパティファイルを使用せずに LCMBIAR ファイルをライブ CMS に昇格させる場合の例を次に示します。

```
Go to
C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0\win64_x64\scripts>
Type
lcm_cli.bat -action promote -LCM_CMS myCMS.mydomain.sap:6400 -LCM_userName
adminLCM -LCM_password my_adminpassword1 -
Destination_CMS myCMS.mydomain.sap:6400 -Destination_userName adminLCM
-Destination_password my_adminpassword1 -
importLocation "C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects
Enterprise XI 4.0\Samples\webi\WebISamples.lcmbiar" -
lcmbiarpasword
```

コマンドラインでプロパティファイルを使用して LCMBIAR ファイルをライブ CMS に昇格させる場合の例を次に示します。

```
Go to
C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0\win64_x64\scripts>
Type
lcm_cli.bat -lcmproperty C:\LCMTEST\MyPropertyFile.properties
#
LCM command line property file
#
action=promote
#
LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
LCM_userName=adminLCM
LCM_password=my_adminpassword1
#
importLocation=C:\Backup\CR.lcmbiar
lcmbiarpasword=validlcmbiarpasword
#
Destination_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
Destination_userName=adminLCM
Destination_password=my_adminpassword1
#
```

次の表は、LCMBIAR ファイルをライブ CMS に昇格させるための適切なプロパティファイルに必要な、必須パラメータを示しています。

パラメータグループ	パラメータ	説明
アクションタイプ	action	CLI で実行する必要がある操作。
		値: export
		例: action=export

パラメータグループ	パラメータ	説明
LCM ノード	LCM_CMS	<p>プロモーションマネジメントツールの CMS。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400</p>
	LCM_userName	<p>ツールがプロモーションマネジメントツール CMS への接続時に使用する必要のあるアカウントのユーザ名。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: LCM_userName=adminLCM</p>
	LCM_password	<p>ユーザアカウントのパスワード。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: LCM_password=my_adminpassword1</p>
ソース: LCMBIAR ファイル	importLocation	<p>昇格されるオブジェクトを含む LCMBIAR ファイルの場所。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。拡張子 <code><.lcmbiar></code> を付ける必要があります。</p> <p>例: importLocation=C:\¥Backup¥New.lcmbiar</p>
	lcmbiarpassword	<p>パスワードを使用して、BIAR ファイルの暗号化と解読が行えます。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: lcmbiar=validlcmbiarpassword</p>
出力先: ライブ CMS	Destination_CMS	<p>ツールが接続する必要がある CMS。</p> <p>値: 有効な CMS 名</p> <p>例: Destination_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400</p>

パラメータグループ	パラメータ	説明
	Destination_username	<p>ツールが BI プラットフォーム CMS に接続する際に使用する必要のあるユーザアカウント。</p> <p>値: 有効なユーザ名</p> <p>例: Destination_username=admin LCM</p>
	Destination_password	<p>ユーザアカウントの関連パスワード。</p> <p>値: 有効なパスワード</p> <p>例: Destination_password=my_adminpassword1</p>

関連情報

[ライブ CMS から LCMBIAR ファイル \[575 ページ\]](#)

[ソースライブ CMS からターゲットライブ CMS \[578 ページ\]](#)

[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)

36.1.6.3.3 ライブ CMS から LCMBIAR ファイル

ライブ CMS から LCMBIAR ファイルにオブジェクトを昇格する場合、コマンドラインから、以下のように昇格順序を指定するプロパティファイルを参照します。

- 昇格アクションタイプ: export
- プロモーションマネジメントツール (以前のライフサイクル管理ツール LCM) をホストする CMS へのログイン認証情報。
- ソース CMS のログイン認証情報。
- LCMBIAR ファイルの出力先ディレクトリ。
- CMS を正常に昇格させるために必要なその他のパラメータ。たとえば、LCMBIAR パスワードやセキュリティ設定。

特定の昇格ニーズを指定できるその他のオプションのパラメータを含めることができます。これらのオプションのパラメータについては、[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)を参照してください。

以下の例は、ライブ CMS から LCMBIAR ファイルへの昇格の標準的なプロパティファイルを示しています。

```
Go to
C:¥Program Files (x86)¥SAP BusinessObjects¥SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0¥win64_x64¥scripts>
```

```

Type
lcm_cli.bat -lcmproperty C:¥LCMTEST¥MyPropertyFile.properties
#
#action=export
#
LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
LCM_userName=adminLCM
LCM_password=my_adminpassword1
#
Source_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
Source_userName=adminLCM
Source_password=my_adminpassword1
#
exportLocation=E:¥LCMTEST¥
lcmbiarpassword=
#
#Queries
#
exportQuery1=SELECT TOP 10000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID,
SI_OWNER, SI_PATH FROM
CI_INFOOBJECTS, CI_APPOBJECTS, CI_SYSTEMOBJECTS WHERE
DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID in (23)")
#
#When applicable...
#
exportDependencies=true
includeSecurity=true
#
#Options
#
consolelog=true

```

次の表は、LCMBIAR ファイルをライブ CMS に昇格させるための適切なプロパティファイルに必要な、必須パラメータを示しています。

パラメータグループ	パラメータ	説明
アクションタイプ	action	CLI で実行する必要がある操作。
		値: export
		例: action=export
LCM ノード	LCM_CMS	プロモーションマネジメントツールの CMS。
		値: 自由形式のテキスト。
		例: LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap : 6400
	LCM_userName	ツールがプロモーションマネジメントツール CMS への接続時に使用する必要のあるアカウントのユーザ名。
		値: 自由形式のテキスト。
		例: LCM_userName=adminLCM

パラメータグループ	パラメータ	説明
ソース: ライブ CMS	LCM_password	<p>ユーザアカウントのパスワード。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: LCM_password=my_adminpassword1</p>
	Source_CMS	<p>プロモーションマネジメントツールが接続する必要がある CMS。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Source_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400</p>
	Source_username	<p>プロモーションマネジメントツールが BI プラットフォーム CMS に接続する際に使用する必要があるユーザアカウント。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Source_username=adminLCM</p>
出力先: LCMBIAR ファイル	Source_password	<p>ユーザアカウントのパスワード。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Source_password=my_adminpassword1</p>
	exportLocation	<p>オブジェクトがエクスポートされてパッケージ化された後に LCMBIAR ファイルを配置する場所を指定します。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。拡張子 <code><.lcmbiar></code> を付ける必要があります。</p> <p>例: exportLocation=C:\¥Backup¥New.lcmbiar</p>
	lcmbiarpassword	<p>パスワードを使用して、BIAR ファイルの暗号化と解読が行えます。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: lcmbiarpassword=validlcmbiarpassword</p>

パラメータグループ	パラメータ	説明
エクスポート関連	exportQuery	<p>ソース CMS をクエリして、LCMBIAR ファイルへのエクスポートに必要なオブジェクトを取得します。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。CMS クエリ言語形式を使用します。</p> <p>例: <code>SELECT TOP 3000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID, SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS, CI_APPOBJECTS, CI_SYSTEMOBJECTS WHERE SI_NAME='Xtreme Employees' AND SI_KIND='Webi'</code></p> <div> <p>① 注記</p> <p>1つのプロパティファイルに任意の数のクエリを設定できますが、クエリには、exportQuery1、exportQuery2 と名前を付ける必要があります。</p> </div>

関連情報

[LCMBIAR ファイルをライブ CMS へ \[572 ページ\]](#)

[ソースライブ CMS からターゲットライブ CMS \[578 ページ\]](#)

[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)

36.1.6.3.4 ソースライブ CMS からターゲットライブ CMS

ソースライブ CMS からターゲットライブ CMS にオブジェクトを昇格する場合、コマンドラインから、以下のよう
に昇格順序を指定するプロパティファイルを参照します。

- 昇格アクションタイプ: 昇格
- プロモーションマネジメントツール (以前のライフサイクル管理ツール LCM) をホストする CMS へのログイン認証情報。
- ソース CMS のログイン認証情報。
- 出力先 CMS のログイン認証情報。
- CMS を正常に昇格させるために必要なその他のパラメータ。たとえば、セキュリティまたは依存関係のパラメータ。

特定の昇格ニーズを指定できるその他のオプションのパラメータを含めることができます。これらのオプションのパラメータについては、[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)を参照してください。

以下の例は、ソース CMS からターゲット CMS への昇格の標準的なプロパティファイルを示しています。

```
#
action=promote
#
LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
LCM_userName=adminLCM
LCM_password=my_adminpassword1
LCM_authentication=secEnterprise
#
Source_CMS=myCMS1:myCMS2
Source_userName=adminLCM
Source_password=my_adminpassword1
Source_authentication=secEnterprise
#
Destination_CMS=myCMS1:myCMS2
Destination_userName=adminLCM
Destination_password=my_adminpassword1
Destination_authentication=secEnterprise
#
exportQuery1select*from CI_INFOOBJECTS where SI_NAME='Charting Samples' and
SI_KIND='Webi'
#
includeSecurity=false
#
exportDependencies=false
#
```

以下の表は、ソース CMS からターゲット CMS への昇格の正常なプロパティファイルに必要な、必須パラメータを示しています。

パラメータグループ	パラメータ	説明
アクションタイプ	action	コマンドラインで実行する必要がある操作。
		値: promote
		例: action=promote
LCM ノード	LCM_CMS	プロモーションマネジメントツールの CMS。 値: 自由形式のテキスト。 例: LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap :6400
	LCM_userName	ツールがプロモーションマネジメントツール CMS への接続時に使用する必要のあるアカウントのユーザ名。 値: 自由形式のテキスト。 例: LCM_userName=adminLCM

パラメータグループ	パラメータ	説明
ソース: <i>Live CMS</i>	LCM_password	<p>ユーザアカウントのパスワード。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: LCM_password=my_adminpassword1</p>
	source_CMS	<p>プロモーションマネジメントツールが接続する必要がある CMS。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Source_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400</p>
	Source_username	<p>プロモーションマネジメントツールが BI プラットフォーム CMS に接続する際に使用する必要があるユーザアカウント。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Source_username=adminLCM</p>
出力先: <i>Live CMS</i>	Source_password	<p>ユーザアカウントのパスワード。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Source_password=my_adminpassword1</p>
	Destination_CMS	<p>ツールが接続する必要がある CMS。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Destination_CMS=myCMS1:myCMS2</p>
	Destination_username	<p>ツールが BI プラットフォーム CMS に接続する際に使用する必要があるユーザアカウント。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Destination_username=adminLCM</p>

パラメータグループ	パラメータ	説明
	Destination_password	<p>ユーザアカウントの関連パスワード。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: Destination_password=my_adminpassword1</p>
エクスポート関連	exportQuery	<p>ターゲット CMS へのエクスポートに必要なオブジェクトを取得するために LCM ツールが実行するクエリ。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。CMS クエリ言語形式を使用します。</p> <p>例: SELECT TOP 3000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID, SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS, CI_APPOBJECTS, CI_SYSTEMOBJECTS WHERE SI_NAME='Xtreme Employees' AND SI_KIND='Webi '</p> <div> <p>① 注記</p> <p>1つのプロパティファイルに任意の数のクエリを設定できますが、クエリには、exportQuery1、exportQuery2 と名前を付ける必要があります。</p> </div>

関連情報

[LCMBIAR ファイルをライブ CMS へ \[572 ページ\]](#)

[ライブ CMS から LCMBIAR ファイル \[575 ページ\]](#)

[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)

36.1.6.3.5 すべてのコマンドラインパラメータの一覧

以下の表は、すべてのコマンドラインパラメータを示しています。

① 注記

コマンドラインで実行する場合、パラメータの構文は `-<parameterName><space><parameterValue>` です。プロパティファイルでは、パラメータの構文は `<parameterName>=<parameterValue>` です。

パラメータグループ	パラメータ	説明
プロパティファイル	lcmproperty	ファイルに保存されているコマンドの実行に必要な値を参照します。 値: プロパティファイルが保存されている場所の完全パス。 例: <code>-lcmproperty</code> <code>C:¥MyPropertyFile.properties</code>
	action	CLI で実行する必要がある操作。 値: <code>promote</code> または <code>export</code> 例: <code>action=promote</code>
LCM ノード	LCM_CMS	プロモーションマネジメントツールの CMS。 値: 自由形式のテキスト。 例: <code>LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400</code>
	LCM_userName	ツールがプロモーションマネジメントツール CMS への接続時に使用する必要のあるアカウントのユーザ名。 値: 自由形式のテキスト。 例: <code>LCM_userName=adminLCM</code>
	LCM_Password	ユーザアカウントのパスワード。 空の場合、コンソールで必要になります。 値: 自由形式のテキスト。 例: <code>LCM_password=my_adminpassword1</code>
	LCM_authentication	使用される認証の種類を示します。 値: <code>secEnterprise</code> 、 <code>secWinAD</code> 、 <code>secLDAP</code> 、 <code>secSAPR3</code> 。指定していない場合は、 <code>secEnterprise</code> が使用されます。 例: <code>LCM_authentication=secEnterprise</code>
	LCM_systemID	SAP 認証の場合にのみ必要です。 値: システム ID 例: <code>LCM_systemID=systemID</code>

① 注記

SAP 認証の場合は必須。

パラメータグループ	パラメータ	説明
	LCM_clientID	SAP 認証の場合にのみ必要です。
	<div> <div>① 注記</div> <div>SAP 認証の場合は必須。</div> </div>	値: クライアント ID 例: LCM_clientID=clientID
ソース: LCMBIAR ファイル	importLocation	昇格されるオブジェクトを含む LCMBIAR ファイルの場所。 値: 自由形式のテキスト。拡張子 <code><.lcmbiar></code> を付ける必要があります。 例: importLocation=C:\¥Backup¥New.lcmbiar
	lcmbiarpassword	パスワードを使用して、BIAR ファイルの暗号化と解読が行えます。 値: 自由形式のテキスト。 例: lcmbiar=validlcmbiarpassword
ソース: ライブ CMS	Source_CMS	プロモーションマネジメントツールが接続する必要がある CMS。 値: 自由形式のテキスト。 例: Source_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
	Source_UserName	プロモーションマネジメントツールが BI プラットフォーム CMS に接続する際に使用する必要があるユーザアカウント。 値: 自由形式のテキスト。 例: Source_username=adminLCM
	Source_password	ユーザアカウントのパスワード。 値: 自由形式のテキスト。 例: Source_password=my_adminpassword1
	Source_authentication	使用される認証の種類を示します。 値: secEnterprise、secWinAD、secLDAP、secSAPR3。指定していない場合は、secEnterprise が使用されます。 例: Source_authentication=secEnterprise
	Source_systemID	SAP 認証の場合にのみ必要です。 値: システム ID 例: Source_systemID=systemID
	<div> <div>① 注記</div> <div>SAP 認証の場合は必須。</div> </div>	

パラメータグループ	パラメータ	説明
出力先: LCMBIAR ファイル	Source_clientID	SAP 認証の場合にのみ必要です。 値: システム ID 例: Source_clientID=clientID
	① 注記	
	SAP 認証の場合は必須。	
	exportLocation	オブジェクトがエクスポートされてパッケージ化された後に LCMBIAR ファイルを配置する場所を指定します。 値: 自由形式のテキスト。拡張子 <.lcmbiar> を付ける必要があります。 例: exportLocation=C:\¥Backup¥New.lcmbiar
出力先: ライブ CMS	lcmbiarpassword	パスワードを使用して、BIAR ファイルの暗号化と解読が行えます。 値: 自由形式のテキスト。 例: lcmbiarpassword=validlcmbiarpassword
	Destination_CMS	ツールが接続する必要がある CMS。 値: 有効な CMS 名 例: Destination_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
	Destination_username	ツールが BI プラットフォーム CMS に接続する際に使用する必要があるユーザアカウント。 値: 有効なユーザ名 例: Destination_username=adminLCM
	Destination_password	ユーザアカウントの関連パスワード。 値: 有効なパスワード 例: Destination_password=my_adminpassword1
	Destination_authentication	使用される認証の種類を示します。 値: secEnterprise、secWinAD、secLDAP、secSAPR3。指定していない場合は、secEnterprise が使用されます。 例: Destination_authentication=secEnterprise

パラメータグループ	パラメータ	説明
	Destination_systemID	SAP 認証の場合にのみ必要です。
	① 注記 SAP 認証の場合は必須。	値: システム ID 例: Destination_systemID=systemID
	Destination_clientID	SAP 認証の場合にのみ必要です。
	① 注記 SAP 認証の場合は必須。	値: クライアント ID 例: Destination_clientID=clientID
ジョブ関連	JOB_CUID	ジョブ内のすべてのオブジェクトを LCMBIAR ファイルにエクスポートするようにツールに指示します。 値: 保存されたマネジメントジョブの CUID。
	Override	LCMBIAR ファイルからオブジェクトを選択的に昇格するために使用されます。 true の場合: ユーザは既存のジョブを上書きすることができます。 false の場合: ユーザは <JOB_NAME>_<TIME_STAMP> という名前の新しいジョブを作成することができます。 値: true または false 例: Override=true
	forceOverride SP4 で利用可能	同じ名前だが CUID が異なるジョブを上書きするために使用されます。 値: true または false 例: forceOverride=true
	Timeout SP4 で利用可能	昇格アクションのタイムアウトを設定します。 値: 時間 (秒) 例: timeout=30
エクスポート関連	ExportDependencies	ツールがエクスポート対象として収集するオブジェクト依存関係を指定します。Source_CMS フラグと一緒に使用する場合にのみ適用可能です。 値: true または false。指定しない場合、デフォルトの false が使用されます。 例: ExportDependencies=false

パラメータグループ	パラメータ	説明
	ExportQuery	<p>ターゲット CMS へのエクスポートに必要なオブジェクトを取得するために LCM ツールが実行するクエリ。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。CMS クエリ言語形式を使用します。</p> <p>例: <code>SELECT TOP 3000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID, SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS, CI_APPOBJECTS, CI_SYSTEMOBJECTS WHERE SI_NAME='Xtreme Employees' AND SI_KIND='Webi'</code></p> <div> <p>① 注記</p> <p>1つのプロパティファイルに任意の数のクエリを設定できますが、クエリには、exportQuery1、exportQuery2と名前を付ける必要があります。</p> </div>
	ExportQueriesTotal	<p>実行するエクスポートクエリの数を指定するために使用されます。x 個のエクスポートクエリがあり、それらをすべて実行する場合は、このパラメータ値に x を指定する必要があります。</p> <p>値: 正の整数。指定しない場合、デフォルトの 1 が使用されます。</p> <p>例: <code>ExportQuery1=<your sql statement></code> <code>ExportQuery2=<your sql statement></code> <code>ExportQueriesTotal=2</code></p>

パラメータグループ	パラメータ	説明
	BatchJobQuery	<p>ExportQuery とともに使用します。ジョブクエリで返される行ごとにジョブを作成および開始します。ジョブエクスポートクエリでは、ジョブクエリで発生したプロパティを参照する "プレースホルダ" を使用することができます。プレースホルダの書式は \$b:PPTY\$ であり、プロパティ名は大文字と小文字が区別されません。有効な <PPTY>: - "cuid" - "name" - "id"</p> <p>プレースホルダが認識されないかジョブクエリで発生しない場合は、エラーが発生します。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: batchJobQuery=SELECT si_cuid,si_name FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMO BJECTS WHERE DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy'", "SI_ID in (23)") AND SI_KIND='Folder' AND SI_NAME LIKE '%sample%' and SI_PARENTID=0</p> <p>exportQuery1= SELECT TOP 10000 static, relationships, SI_PARENT_FOLDER_CUID, SI_OWNER, SI_PATH FROM CI_INFOOBJECTS,CI_APPOBJECTS,CI_SYSTEMO BJECTS WHERE DESCENDENTS("SI_NAME='Folder Hierarchy' " , "SI_CUID= '\$b:CUID\$' ")</p>
	LimitQueryBatchSize	<p>デフォルトでは、返されるオブジェクト数は1,000 に制限されます。このパラメータが false に設定されている場合、すべてのクエリ実行済みオブジェクトが返されます。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>また、select TOP <number> を使用して、クエリによって返されるオブジェクト数の新しい制限を明示的に設定することもできます。</p> </div> <p>値: true または false。指定しない場合、デフォルトの true が使用されます。</p> <p>例: LimitQueryBatchSize=true</p>

パラメータグループ	パラメータ	説明
ログ関連	consolelog	<p>コマンドログ内のユーザが実行したコマンドの完全なログを表示するために使用されます。</p> <p>値: true または false。指定しない場合、デフォルトの false が使用されます。</p> <p>例: consolelog=true</p>
	ResultFileName	<p>パラメータ consolelog が使用された場合、ローカルファイルシステム上のファイルの名前。</p> <p>値: ジョブ結果のファイルパス</p> <p>例: ResultFileName=C:\¥Logs¥ResultFile.txt</p>
	LogFileName SP4 で利用可能	<p>ユーザは、ログファイル用に使用する固定パスを指定することができます。</p> <p>値: ログのファイルパス</p> <p>例: LogFileName=C:\¥Logs¥LogFile.log</p>
オブジェクト選択	Selected_CUIDS	<p>ユーザは、ファイル全体を昇格せずに、LCMBIAR ファイルのオブジェクト (レポート、ユーザ、ユニバースなど) をその依存関係とともに選択的に昇格することができます。</p> <p>値: 選択的に昇格される lcmbiar ファイル内のオブジェクトの CUID</p>
	selectUser SP4 で利用可能	<p>サードパーティ認証 (LDAP、SAPR3、WindowsAD...) に基づいてユーザをフィルタリングします。</p> <p>値: all、none、excludeTP、または onlyTP。指定しない場合、デフォルトの all が使用されます。</p> <p>例: selectUser=excludeTP</p>
	selectGroup SP4 で利用可能	<p>サードパーティ認証 (LDAP、SAPR3、WindowsAD...) に基づいてユーザグループをフィルタリングします。</p> <p>値: all、none、excludeTP、または onlyTP。指定しない場合、デフォルトの all が使用されます。</p> <p>例: selectGroup=onlyTP</p>
セキュリティ	IncludeApplicationSecurity	<p>選択したアプリケーションに関連付けられたセキュリティをエクスポートまたはインポートするようにツールに指示します。</p> <p>値: true または false。指定しない場合、デフォルトの false が使用されます。</p> <p>例: IncludeApplicationSecurity=true</p>

パラメータグループ	パラメータ	説明
	IncludeSecurity	<p>選択したオブジェクトおよびユーザに関連付けられたセキュリティをエクスポートまたはインポートするようにツールに指示します。アクセスレベルが使用されている場合は、アクセスレベルもエクスポートまたはインポートされます。</p> <p>値: true または false。指定しない場合、デフォルトの false が使用されます。</p> <p>例: IncludeSecurity=true</p>
コメント	IncludeComments	<p>選択したオブジェクトに関連付けられたコメントをエクスポートまたはインポートするようにツールに指示します。</p> <p>値: true または false。指定しない場合、デフォルトの false が使用されます。</p> <p>例: IncludeComments=true</p>
フェデレーションジョブ	IncludeFederationJobsRelationship	<p>フェデレーションジョブの関係 (レプリケーション一覧およびリモート接続) を維持するようにツールに指示します。false に設定した場合、複製されたオブジェクトが通常のオブジェクトになり、フェデレーションフラグが削除されます。これは、複製されたオブジェクトが使用可能な唯一のオブジェクトであり、ソースオブジェクトがもう使用できなくなっている場合に役立つ可能性があります。</p> <p>値: true または false。指定しない場合、デフォルトの true が使用されます。</p> <p>例:</p> <p>IncludeFederationJobsRelationship=false</p>

36.1.6.3.6 ロールバック

昇格されたジョブは、[プロモーション管理](#) ツールを使用して、出力先システムで元に戻すことができます。

[プロモーション管理](#) ツールを使用してジョブを昇格し (BI 4.2 SP07 を BI 4.3 に更新するなど)、後からこの変更を元に戻す場合は、[昇格シナリオごとのコマンドラインパラメータ \[569 ページ\]](#) で定義されたコマンドラインパラメータを使用して、ロールバック操作を実行できます。

ロールバック操作を実行する場合、以下のように昇格順序を指定するプロパティファイルを指定する必要があります。


- 昇格アクションタイプ: ロールバック
- プロモーション管理ツール (以前のライフサイクル管理ツール LCM) をホストする CMS へのログイン認証情報。
- ソース CMS のログイン認証情報。
- 出力先 CMS のログイン認証情報。

- CMS を正常に昇格させるために必要なその他のパラメータ。たとえば、セキュリティまたは依存関係のパラメータ。

特定の昇格ニーズを指定できるその他のオプションのパラメータを含めることができます。これらのオプションのパラメータについては、[すべてのコマンドラインパラメータの一覧 \[581 ページ\]](#)を参照してください。

以下のサンプルプロパティファイルを参照して、ロールバック操作を実行することができます。

```
#
action=rollback
job_cuid=AWWxyVk5fkFKjtQnRAygAYg
#
LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap:6400
LCM_userName=adminLCM
LCM_password=my_adminpassword1
LCM_authentication=secEnterprise
```


注記

昇格されたジョブの job_cuid は、[CMC ホーム](#) > [プロモーション管理](#) > [プロパティ](#) にあります。

以下の表は、LCMBIAR ファイルからライブ CMS への昇格の正常なプロパティファイルに必要な、必須パラメータを示しています。

パラメータグループ	パラメータ	説明
アクションタイプ	action	CLI で実行する必要がある操作。 値: rollback 例: action=rollback
ジョブ関連	job_cuid	ジョブ内のすべてのオブジェクトを LCMBIAR ファイルにエクスポートする ようにツールに指示します。 値: 保存されたマネジメントジョブの CUID。 例: job_cuid=AWWxyVk5fkFKjtQnR AygAYg
LCM ノード	LCM_CMS	プロモーションマネジメントツールの CMS。 値: 自由形式のテキスト。 例: LCM_CMS=myCMS.mydomain.sap :6400

パラメータグループ	パラメータ	説明
	LCM_userName	<p>ツールがプロモーション管理ツール CMS への接続時に使用する必要のあるアカウントのユーザ名。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: LCM_userName=adminLCM</p>
	LCM_password	<p>ユーザアカウントのパスワード。</p> <p>値: 自由形式のテキスト。</p> <p>例: LCM_password=my_adminpassword1</p>
	LCM_authentication	<p>ユーザアカウントの認証の種類。</p> <p>値: 認証の種類。</p> <p>例: secEnterprise</p>

36.1.6.4 サンプルプロパティファイル

以下に、properties ファイルのサンプルを示します。

例

```
importLocation=C:/Backup/CR.lcmbiar
action=promote
LCM_CMS=<CMS 名:ポート番号>
LCM_userName=<ユーザ名>
LCM_password=<パスワード>
LCM_authentication=<認証>
LCM_systemID=<ID>
LCM_clientID=<クライアント ID>
Destination_CMS=<CMS 名:ポート番号>
Destination_userName=<ユーザ名>
Destination_password=<パスワード>
Destination_authentication=<認証>
```

Destination_systemID=<ID>

Destination_clientID=<クライアント ID>

lcmbiarpassword=<パスワード>

① 注記

properties ファイルに個人情報が含まれていない場合、LCM CLI にはコンソールの個人情報を求めるメッセージが表示されます。

36.1.7 拡張移送/修正システムの使用

移送/修正システム (CTS) は、ABAP ワークベンチで開発プロジェクトを整理、カスタマイズし、システムランドスケープで SAP システム間の変更を移送します。拡張移送/修正システム (CTS+) は、非 ABAP コンテンツを CTS+ 対応の非 ABAP リポジトリ全体にわたって昇格させる CTS のアドオンです。





BI プラットフォーム InfoObject では、データソースとして SAP Business Warehouse コンテンツを使用できます。CTS+ とプロモーションマネジメントツールを統合することで、SAP Business Warehouse (BW) リポジトリと同様に、SAP BI プラットフォームリポジトリを操作できます。これには、CTS 移送要求を使用してジョブを昇格します。CTS+ では、非 SAP オブジェクトをシステムランドスケープ内で移送することもできます。たとえば、開発システムで作成したオブジェクトを移送要求に添付して、ランドスケープ内の他のシステムに移送できます。

移送/修正システムの詳細については、[Change and Transport System - Overview \(BC-CTS\)](#)を参照してください。

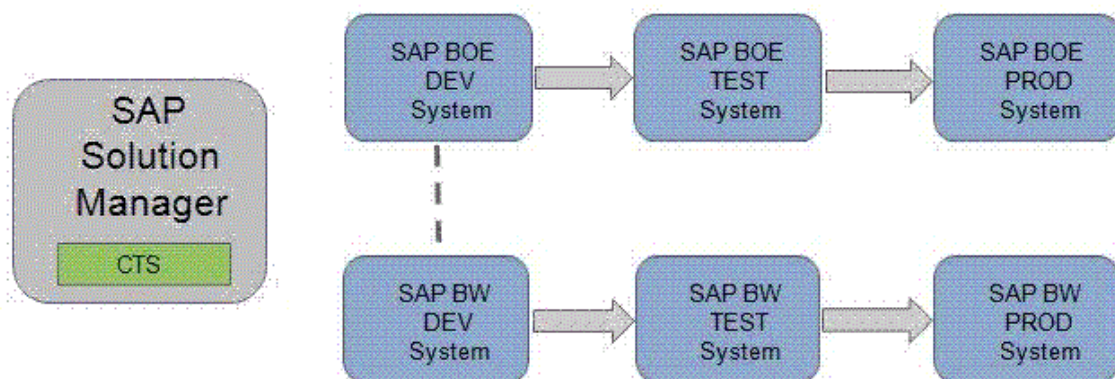
CTS+ および非 ABAP 移送の詳細については、[Transporting Non-ABAP Objects in Change and Transport System](#)を参照してください。

36.1.7.1 前提条件

システム間で CTS+ 経由でビジネスインテリジェンスコンテンツを転送するための前提条件は次のとおりです。

1. BI プラットフォーム 4.0 (以降) がインストールされていること。
2. SAP Solution Manager 7.1 または SAP Solution Manager 7.0 EHP1 (最低でも SP25) がインストールされており、CTS+ のドメインコントローラとして使用されていること (少なくとも SAP BusinessObjects システムの設定に使用されていること)。
転送ドメインの設定の詳細については、[転送ドメインの設定](#)を参照してください。
3. CTS プラグインが SAP Solution Manager にインストールされていること (CTS プラグインは SL Toolset 1.0 SP02 から取得)。最新の利用可能な CTS プラグインを使用することをお勧めします。
必要な CTS プラグインをインストールする方法については、[1533059](#)  を参照してください。
4. SAP Business Warehouse 7.0 (SPS 24 以上) システムがインストールされていること。詳細については、[1369301](#)  を参照してください。
5. SAP Business Warehouse (SAP BW) 転送ランドスケープが、移送/修正システム (CTS) で設定されていること。
6. [1692417](#)  および [1860594](#)  が、CTS デプロイ Web サービスをホストするマシンに適用されていること。

36.1.7.2 BI プラットフォームと CTS+ との統合を設定する



移送/修正システムの一部である移送管理システム (TMS) は、ランドスケープ内の SAP システム間の変更を転送するのに使用されます。接続されている各種システム、それらのルート、およびそれらのシステムへのインポートを管理します。移送管理システムの詳細については、[Transport Management System \(BC-CTS-TMS\)](#)を参照してください。

CTS+ は、外部からのファイルコレクションと、転送ランドスケープ内でのそれらの配布を有効にします。CTS+ の一部である移送オーガナイザ Web UI は、移送要求とそれに含まれるオブジェクトを管理します。詳細については、[Transport Management System \(BC-CTS-TMS\)](#)を参照してください。

CTS 移送要求を使用して、BI プラットフォームプロモーションマネジメントを CTS+ および SAP BW に統合できます。

① 注記

BI プラットフォームと SAP Solution Manager との統合を有効にするには、SAP Solution Manager ランドスケープでアプリケーションの種類を「BOLM」に定義する必要があります。

次の手順を実行し、BI プラットフォームおよび CTS+ を統合します。

1. CTS エクスポート Web サービスを有効にします。
2. プロモーションマネジメントツールで CTS を設定します。
3. SAP Solution Manager で BI プラットフォームインポートシステムを設定します。

関連情報

[CTS エクスポート Web サービスを有効にする \[594 ページ\]](#)

[プロモーションマネジメントツールで CTS+ を設定する \[594 ページ\]](#)

[BI プラットフォームと CTS+ との統合を設定する \[593 ページ\]](#)

36.1.7.2.1 CTS エクスポート Web サービスを有効にする

BI プラットフォームを設定するには、SOA 管理用の Web ツールで CTS エクスポート Web サービスを有効にする必要があります。

1. アプリケーションを起動するには、SAP Solution Manager でトランザクションコード SOAMANAGER を入力します。
必要な認証が完了すると、Web ブラウザに SOA 管理コンソールが表示されます。

SAP Solution Manager 7.0 を使用する SOA の管理およびサービスのエンドポイントの設定に関する詳細については、[Configuring a Service Provider](#) を参照してください。SAP Solution Manager 7.1 についても、[Configuring a Service Provider](#) を参照してください。

2. *Application and Scenario Communication* タブで、*Single Service Configuration* をクリックしてください。
CTS エクスポート Web サービスに、EXPORT_CTS_WS と名前を付けます。
3. *[Configuration]* タブで、サービスのエンドポイントを作成または編集します。
4. *[Security]* タブで、転送プロトコルおよび認証方法を設定します。
5. *[Transport Settings]* タブで、サービスのエンドポイントに簡単にアクセスできるようにするための代替のアクセス URL を定義します。

36.1.7.2.2 プロモーションマネジメントツールで CTS+ を設定する

この節では、プロモーションマネジメントツールとともに使用する CTS+ を設定するため、CMC アプリケーションで実行する設定手順について説明します。

1. *[昇格ジョブ]* ページで *[CTS 設定]* をクリックし、次に *[BW システム]* をクリックします。
2. *[BW システム]* ページで *[追加]* をクリックし、BW システムをランドスケープに追加します。
3. *[システムの追加]* ページで、次の情報を入力します。
 - **ホスト BW SID:** ホスト SAP BW/ABAP マシンのシステム ID (SID) を指定します。
 - **ホスト名:** ホストマシンの IP アドレスを指定します。
 - **システム番号:** ホストシステムのシステム番号を入力します。
 - **クライアント:** クライアントマシンのシステム詳細を参照します。
 - **ユーザおよびパスワード:** これらのフィールドでは、クライアントマシンのユーザ名とパスワードを指定します。
 - **言語:** このフィールドでは、選択する言語を指定します。
4. *OK* をクリックして、システムをランドスケープに追加します。

① 注記

BW システムをランドスケープに追加したら、*[BW システム]* ページの *[編集]* または *[削除]* を使用して、ランドスケープのシステムを変更できます。

5. *[昇格ジョブ]* ページで *[CTS 設定]* をクリックし、次に *[Web サービス設定]* をクリックします。
6. *[Web サービス設定]* ページで、Web サービス URL およびユーザ詳細を入力します。

① 注記

これらの詳細を把握していない場合は、Solution Manager 管理者に問い合わせます。

7. [保存] および [閉じる] をクリックして、Web サービス設定の追加を完了します。
8. BI プラットフォームプロモーションマネジメント CMS システムのマッピングファイルを作成します。
BI プラットフォーム開発システムで以下の手順に従い、マッピングを有効化するための接続詳細を含むテキストファイルを作成します。
 - a. BI プラットフォームプロモーションマネジメント CMS でルートディレクトリに移動し、パス `<INSTALLDIR>/SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0/` に **LCM** という名前のフォルダを作成します。
 - b. `LCM_SOURCE_CMS_SID_MAPPING.properties` という名前でテキストファイルを作成し、このファイルに次のうちいずれかを入力します。
 - `<ドメイン付き SAP BI プラットフォームソースシステムの完全名>@<CMS ポート番号>=<CTS 設定に使用するソースシステムの論理名 >`
 - `<SAP BI プラットフォームソースシステムの IP 番号>@<CMS ポート番号>=<CTS 設定に使用するソースシステムの論理名 >`

例:

```
DEWDFTH04171S@6400=WJ3
10.208.112.177@6400=WJ3
DEWDFTH04171S.pgdev.sap.corp@6400=WJ3
```

① 注記

クラスタ環境の場合、`LCM_SOURCE_CMS_SID_MAPPING.properties` ファイルを、Adaptive Processing Server が実行中のシステムにコピーしてください。

非 ABAP システムでの設定手順の実行の詳細については、[Making Transport Settings in the Application](#) を参照してください。

36.1.7.2.3 SAP Solution Manager で BI プラットフォームインポートシステムを設定する

1. SAP Solution Manager システムにログインします。
2. トランザクション `[stms]` と入力して、`[Enter]` キーを押します。
3. アプリケーションの種類として BOLM を設定します。
 - a. **概要** > **システム** に移動します。
 - b. **追加** > **アプリケーションの種類** > **設定** に移動します。
 - c. **[新規エントリ]** を選択します。
 - d. **[アプリケーションの種類]** フィールドに、**BOLM** と入力します。
 - e. 説明を入力します。
 - f. **サポートの詳細** フィールドに、**http://service.sap.com (ACH: BOJ-BIP-DEP)** と入力します。
 - g. **テーブルビュー** > **保存** を選択します。
 - h. **[はい]** を選択して、プロンプトを確認します。
4. 別の言語を扱う場合、次の手順で翻訳されたテキストを管理できます。
 - a. **ジャンプ** > **翻訳** を選択します。
 - b. テキストを翻訳する言語を選択します。

- c. [説明] および [サポートの詳細] フィールドに翻訳された値を入力します。
- d. ダイアログボックスを確認します。
- e. [続行] を選択します。
- f. ► テーブルビュー ► 保存 ◀ を選択します。
- g. プロンプトを確認します。

これで、TMS ドメインが、CTS で Business Intelligence コンテンツの使用をサポートする準備ができました。

5. CTS+ で、BI プラットフォームソースシステムをエクスポートシステムとして定義します。

① 注記

ソースシステムとしての非 ABAP システムの作成の詳細については、[Defining and Configuring Non-ABAP Systems](#) を参照してください。

6. 次の手順を完了して、CTS+ で BI プラットフォームインポートシステムを設定します。

① 注記

BI プラットフォームインポートシステムへの参照として、SID を定義できます。

- a. インポートシステムとして非 ABAP システムを作成します。
詳細については、[Defining and Configuring Non-ABAP Systems](#) を参照してください。
- b. デプロイメント方法に**その他**を指定し、他のすべてのオプションを選択解除します。
- c. [保存] をクリックします。
- d. [ディストリビューション] ダイアログボックスを確認します。
インポートシステム設定を設定するテーブルビューが表示されます。
- e. ► 編集 ► 新規エントリ ◀ を選択します。
- f. "表示 CTS の変更: アプリケーションの種類の処理のためのシステム詳細" 画面で、次の手順に従います。
 1. [デプロイ方法] フィールドで、[アプリケーション固有のデプロイヤ (EJB)] を選択します。
 2. デプロイ URI フィールドに次の情報を入力します。


```
http://<BOE web server name>:<Webserver port>/BOE/LCM/CTSServlet?&cmsName=<BOE destination name>:<CMSport>&authType=<BOE authentication type>
```

 パラメータ
 - "BOE web server name" は、BI プラットフォーム Web サーバが実行中のマシン名またはその IP アドレスです。
 - "Web server port" は、BI プラットフォーム Web サーバのポート番号です。
 - "BOE destination name" は、BI プラットフォーム Central Management Server (CMS) が実行中のマシン名です。
 - "CMS port" は、ターゲット CMS のポート番号です。
 - 「BOE authentication type」は、ビジネスインテリジェンスコンテンツをインポートするためのユーザ認証の種類です。サポートされる認証の種類は、secEnterprise、secLDAP、secWinAD、および secSAPR3 です。
 3. ユーザフィールドに、BI プラットフォームのユーザ名を入力します。
 4. パスワードフィールドに、BI プラットフォームのパスワードを入力します。
 5. [保存] を選択して設定を保存します。

複数のインポートシステムが必要な場合は、上記の手順を繰り返し、必要なすべての出力先システムを作成します。出力先システムの作成後に、ソースシステムとターゲットシステム間の転送ルートを設定するには、[移送ルートの設定](#)を参照してください。

36.1.7.2.4 SSL を用いて BI プラットフォームから CTS+ へエクスポートする

36.1.7.2.4.1 CTS+ に対して SSL を設定する

CTS+ に対して SSL を設定するには、アプリケーションサーバ ABAP 上で SSL を設定する必要があります。詳細については、[Configuring the SAP Web AS for Supporting SSL](#) を参照してください。

36.1.7.2.4.2 クライアント側の SSL 証明書を設定する

クライアント側の SSL 証明書を設定するには、サーバ証明書または信頼できる CA 証明書のいずれかを JVM キーストアにインポートします。

1. cacerts ファイルを `<INSTALLDIR>%win64_x64%sapjvm%jre%lib%security` ディレクトリからバックアップします。
2. 次のパラメータを使用して、BOE.war ファイルをホストする Tomcat JVM に証明書をインポートします。

```
<INSTALLDIR>%win64_x64%sapjvm%jre%bin%keytool.exe -import -file server.cer  
-keystore cacerts
```

3. Tomcat を再起動します。

36.1.7.2.4.3 CTS+ エクスポート Web サービスを設定する

HTTPS が有効な CTS+ エクスポート Web サービス (EXPORT_CTS_WS) を設定するには、新しい HTTPS エンドポイントを作成します。

① 注記

または、既存の HTTP エンドポイントを HTTPS を使用するように切り替えることもできます。

1. トランザクションコード `soamanager` を使用して、*Provider Security* タブの *Communication Security* で、*SSL over HTTP (Transport Channel Security)*、*Transport Channel Authentication*、*User ID/Password* の順に選択します。
2. *Transport settings* タブの *Transport Binding* で、*Calculated Protocol* の *HTTPS* を選択します。

36.1.7.2.4.4 SSL 用のプロモーションマネジメントを設定する

→ 注意

サーバ証明書または信頼できる CA 証明書を JVM キーストアにインポートします。

1. CMC で、**プロモーションマネジメント** タブの **設定** > **CTS 設定** > **Web サービス設定** をクリックします。
2. **Web サービス URL** パラメータに `https://` と上の手順で設定したポート番号が含まれていることを確認します。

① 注記

指定した URL にアクセスできない場合は、**上書きダイアログボックスのジョブの出力先リストに CTS 経由の昇格**は表示されません。プロモーションマネジメントと CTS+ 間の SSL ハンドシェイクが失敗した場合は、CMC ログファイルにエラーが記録されます。

36.1.7.2.5 SSL を用いて CTS+ から BI プラットフォームへエクスポートする

36.1.7.2.5.1 BI プラットフォーム Tomcat を設定して HTTPS を使用する

BI プラットフォーム Tomcat を設定して HTTPS を使用するには、BI プラットフォームがインストールされているマシンで次の手順を実行する必要があります。

1. サーバキーペア、証明書、およびキーストアを作成します。
 - a. 次のパラメータを使用して、`<INSTALLDIR>%win64_x64%sapjvm%jre%bin%keytool.exe` を実行します。

```
keytool -genkey -alias server -keyalg RSA -keysize 2048 -keystore serverkeystore.jks -storetype JKS
keytool -certreq -keyalg RSA -alias server -file server.csr -keystore serverkeystore.jks
```

- b. プロンプトが表示されたら、次の情報を入力します。

- ユーザの名と姓
- 部門
- 組織の名称
- 市町村または区域名
- 都道府県または地域名
- この部門の 2 桁の国コード

書式設定された文字列が表示されます (CN=John Smith, OU=Accounting, O=SAP, L=Vancouver, ST=BC, C=CA など)。 **Yes** と入力して **Enter** キーを押して、確認します。

2. サーバ証明書の要求を認証機関 (CA) に送信します。
3. 次のパラメータを使用して、署名済みサーバ証明書をサーバのキーストアにインポートします。

```
keytool -import -alias server -keystore serverkeystore.jks -trustcacerts -file server.crt
```

4. HTTPS を有効にして作成したサーバのキーストアを使用するには、Tomcat 設定ファイル `server.xml` を設定します。
5. Tomcat を再起動し、ブラウザで次の URL にアクセスして接続をテストします。 `https://<SERVERNAME>:<SSLPORTNUMBER>`

関連情報

[CTS+ に対して SSL を設定する \[597 ページ\]](#)

36.1.7.2.5.2 SSL に対して CTS+ を設定する

SSL に対して CTS+ を設定するには、SSL クライアント PSE を作成して、証明書をインポートする必要があります。

関連情報

[CTS+ に対して SSL を設定する \[597 ページ\]](#)

36.1.7.2.5.3 CTS+ のテストシステムおよび本稼働システムを更新して HTTPS を使用する

テストシステムおよび本稼働システムで HTTPS を有効にするには、次の手順に従います。

1. STMS トランザクションコードを使用します。
2. システムの概要をクリックします。
3. テストシステムまたは本稼働システムを選択して、**▶ ジャンプ ▶ アプリケーションの種類 ▶ デプロイメント方法 ▶**をクリックします。
4. **デプロイ URI** パラメータに `https://` と設定した HTTPS ポート番号が含まれていることを確認します。

36.1.7.3 CTS を使用してジョブを昇格する

この節では、プロモーションマネジメントツールでサポートされている、BI プラットフォーム Central Management Server (CMS) オブジェクトを、移送/修正システムを使用してソースシステムから出力先システムに昇格するワークフローについて説明します。CTS を使用してジョブを昇格するには、次の手順を完了します。

1. SAP 認証を使用してプロモーションマネジメントツールを起動し、ジョブを作成します。
新しいジョブの作成の詳細については、以下の関連リンクの「ジョブの作成」を参照してください。

① 注記

ソースシステムのログイン画面で、認証の種類として「SAP」を選択してください。

2. **出力先** ドロップダウンリストから、**CTS 経由の昇格** オプションを選択します。



3. [作成] をクリックします。
[システムからオブジェクトを追加] 画面が表示されます。 ツリー構造でフォルダとサブフォルダが表示されます。
4. InfoObject を選択するフォルダに移動します。
5. ジョブに追加する InfoObject を選択し、[追加](#) をクリックします。 InfoObject を追加する場合は、[オブジェクトの追加](#) 画面を終了して、[追加して閉じる](#) をクリックします。
ジョブに InfoObject が追加され、[昇格ジョブ](#) 画面が表示されます。

① 注記

[昇格ジョブ] 画面で、次のことを実行できます。

- [オブジェクトの追加](#) オプションを使用して、ジョブに InfoObject を追加する。 詳細については、「ジョブへの InfoObject の追加」を参照してください。
- [依存関係の管理](#) オプションを使用して、選択した InfoObject の依存関係を管理する。 オブジェクトの SAP BW の依存関係が UI に表示され、ユーザが選択できます。
詳細については、ジョブの依存関係の管理に関するトピックを参照してください。

6. [昇格](#) をクリックします。
[昇格] 画面に、ID、所有者、およびデフォルト移送要求の現在の設定に関する簡単な説明が表示されます。
7. [移送要求](#) ハイパーリンクを使用して、次のことを実行できます。
 - 移送要求の詳細を表示する。
 - デフォルトの移送要求の設定を変更する。
 - 別の移送要求を選択する。
 - 移送要求を作成する。
1. [移送要求](#) ハイパーリンクをクリックして、[移送オーガナイザ](#) Web ユーザインタフェースを開きます。
2. ログオン認証情報を要求された場合は、有効な CTS ドメインコントローラシステムのユーザ認証情報を使用してログオンします。
3. [昇格](#) 画面を最新表示して、更新内容を表示します。

[移送オーガナイザ](#) Web UI の使用の詳細については、[Transport Organizer Web UI](#) を参照してください。

8. SAP BW オブジェクトの依存関係の詳細を表示するには、[\[第2レベルの依存オブジェクト\]](#) ハイパーリンクをクリックします。

① 注記

[\[第2レベルの依存オブジェクト\]](#) ハイパーリンクをクリックすると、要求内にロックされているオブジェクトだけが表示されます。 要求がリリース済みの場合は、いずれの依存関係も表示されません。 また、アクティブな第2レベルの依存関係がない場合、このハイパーリンクは灰色で表示されます。

9. [昇格](#)をクリックします。
10. ジョブを閉じます。
プロモーションマネジメントのメイン画面が表示されます。作成したジョブのステータスは、[\[CTS+ にエクスポートしました\]](#)となります。
11. 次の手順を完了して、出力先システムに BI プラットフォームオブジェクトをリリースします。
 - a. 昇格するジョブの [\[ステータス\]](#) 列に表示されているリンクをクリックします。
[\[昇格のステータス\]](#) ウィンドウが表示されます。
 - b. [\[リクエストのステータス\]](#) をクリックします。
[\[移送オーガナイザ\]](#) Web UI が表示されます。
 - c. リクエストのステータスが [\[変更可能\]](#) の場合、[\[リリース\]](#) をクリックして BI プラットフォームオブジェクトの移送要求をリリースします。非 ABAP オブジェクトを含む移送要求のリリースの詳細については、[Releasing Transport Requests with Non-ABAP Objects](#) を参照してください。
 - d. [\[移送オーガナイザ\]](#) Web UI を閉じます。
12. SAP BW オブジェクトの依存関係を表示するには、[\[BW 依存オブジェクトの一覧\]](#) ハイパーリンクをクリックします。

① 注記

SAP BW 依存関係の更新やこれらのリリースは SAP BW チームによって操作されるため、これらのオブジェクトにアクセスするときには、このチームに確認することをお勧めします。

13. [\[昇格のステータス\]](#) ウィンドウを閉じます。
14. 次の手順を完了して、出力先システムに BI プラットフォームオブジェクトをインポートします。
 - a. CTS+ ドメインコントローラにログオンします。
 - b. 移送管理システムに入るには、[STMS](#) トランザクションを呼び出します。
 - c. [\[インポートの概要\]](#) アイコンをクリックします。
[\[インポートの概要\]](#) 画面が表示され、すべてのシステムから、インポートキューのアイテムを見ることができます。
 - d. 出力先プロモーションマネジメントシステムのシステム ID を選択します。
システムにインポートできる移送要求の一覧を確認できます。
 - e. [\[最新表示\]](#) をクリックします。
 - f. 関連する移送要求をインポートします。詳細については、[依頼のインポート](#) を参照してください。
BOLM コンテンツを含む移送要求のインポートに関する概要については、[Importing Transport Requests with Non-ABAP Objects](#) を参照してください。
15. 選択したオブジェクトに SAP BW 依存関係が含まれる場合、次の手順を実行します。
 - a. 次の手順を完了して、出力先システムに SAP BW 依存関係をリリースします。
 1. SAP BW ソースシステムにログオンします。
 2. SE09 トランザクションを呼び出します。[\[移送オーガナイザ\]](#) 画面が表示されます。
 3. [\[表示\]](#) をクリックします。SAP BW 要求が表示されます。
 4. SAP BW 要求をクリックして展開し、依存関係に作成されたタスクを表示します。
 5. 一次 SAP BW オブジェクトに関連付けられた要求を右クリックして、[\[直接リリースする\]](#) を選択します。この手順を繰り返して、各依存オブジェクトに関連付けられているすべてのタスクを個別にリリースします。
 6. 一次 BW オブジェクトに関連付けられた要求を右クリックして、[\[直接リリースする\]](#) を選択します。
 7. すべての要求がリリースされるまで、画面を最新表示します。

① 注記

要求のログをダブルクリックすると表示できます。

b. 次の手順を完了して、出力先システムに SAP BW 依存関係をインポートします。

1. SAP BW 出力先システムにログオンします。
2. 移送管理システムに入るには、STMS トランザクションを呼び出します。
3. [\[インポートの概要\]](#) アイコンをクリックします。 [\[インポートの概要\]](#) 画面が表示されます。
4. SAP BW 出力先のシステム ID をダブルクリックします。システムにインポートできる移送要求の一覧を確認できます。
5. 関連する移送要求をインポートします。詳細については、[依頼のインポート](#)を参照してください。インポートキューを含む転送の詳細については、[インポートキューによる移送](#)を参照してください。

16. 出力先システムにログオンして、昇格したジョブのステータスを表示します。

Generic CTS の詳細については、[Configuring Target Systems for Further Applications](#) を参照してください。

関連情報

[ジョブを作成する \[543 ページ\]](#)

[ジョブの依存関係を管理する \[548 ページ\]](#)


36.1.8 プロモーション管理ウィザードの使用

プロモーション管理ウィザードを使用すると、ビジネスインテリジェンス (BI) リソースを数回のクリックで1つのリポジトリから別のリポジトリに簡単にコピーすることができます。

プロモーション管理ウィザードでは、以下の昇格シナリオがサポートされます。

- ソースシステムから LCMBIAR ファイルに BI リソースをエクスポートします。
- ソースシステムから出力先システムに BI リソースを複製します。
- 出力先システムに LCMBIAR ファイルをインポートします。

プロモーション管理ウィザードにより、コマンドラインを使用せずにリポジトリのコンテンツ全体またはリポジトリの選択的コンテンツを昇格できるようになりました。プロモーション管理ウィザードの使いやすいグラフィカルインタフェースによって、管理者の作業が容易になります。

プロモーション管理ウィザードのベストプラクティスに関する詳細については、SAP ノート [2531264](#)  を参照してください。

⚠ 警告

プロモーション管理ウィザードではロールバックはサポートされていません。つまり、BI リソースの昇格後に出力先システムを前の状態に戻すことはできません。

① 注記

オブジェクトの昇格を開始する前に、メモリの値を必ず確認してください。Xms の値は Xmx の値以下である必要があります。

① 注記

QaaWs オブジェクトがある場合は、出力先システムを適切に設定する必要があります。

→ ヒント

パフォーマンスを向上させるには、出力先システムの CMC で監査および監視を無効にします。詳細については、『Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』の「監査」を参照してください。

36.1.8.1 昇格からオブジェクトを除外する

以下の一覧からオブジェクトを選択して昇格ジョブから除外し、ディスク領域を確保して、移行時間を短縮することができます。

昇格ジョブにより、すべての BI 資産が、ソースシステムから出力先システムに移行されます。その結果、ソースシステムに固有であり、出力先システムで有用でない資産も移行されます。BI 資産を昇格から除外するには、以下の手順に従います。

1. <INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64_x64 に移動します。
2. テキストエディタで *PromotionManagementWizard.ini* を開きます。
3. 文字列 **# 全体エクスポートまたは選択的エクスポートから自動的に除外する種類の一覧**を検索して見つけます。
この文字列の下に、コード `-Dcom.sap.businessobjects.pmw.exclude.kind={}` があります。
4. 以下のオブジェクトの一覧を参照して、除外するオブジェクトを `{}` の間に追加します。
5. ファイルを保存します。

昇格ジョブを実行すると、コードに記載したオブジェクトが除外されます。

昇格ジョブから除外できるオブジェクトの一覧については、以下の表を参照してください。

CustomMapped 属性	DFS.Parameter	ディスカッション	GDPR オブジェクト
LCM ジョブ	LCM 上書き	LCM スキャン履歴	LCM 設定
LANDSCAPE	LANDSCAPE 接続	Live Office	MoN.MBEAN 設定
MON.ManagedEntity ステータス	MON.MonAppDataStore	Mon.Probe	Mon.Subscription
NotificationScheduleObject	上書きエントリ	PlatformSearchApplication ステータス	PlatformSearchContentExtractor
PlatformSearchContentStore	PlatformSearchIndexEngine	PlatformSearchQueue	PlatformSearchScheduling
PlatformSearchSearchAgent	PlatformSearchServiceSession	TaskTemplate	VisualDifferenceComprator
XL.XcelsiusApplcation	busobjectreporter	Explorer	Lumira 拡張

36.1.8.2 プロモーション管理ウィザードを使用する場合

プロモーション管理を使用する際には、複数のオプションが使用可能です。この表は、プロモーション管理ウィザードがニーズに最適なソリューションであるかどうかを判断する際に役立ちます。

プロモーション管理のさまざまなオプション

	プロモーション管理ウィザード	コマンドラインオプションを使用したプロモーション管理	セントラル管理コンソールでのプロモーション管理
目的	1 回限りの昇格	自動化	プロジェクト
昇格の対象範囲	多数の BI リソース	多数の BI リソース	少数の BI リソース
ジョブ	ジョブサーバによって返される可能性のあるジョブは作成不可	ジョブサーバによって実行されるジョブの作成が可能	ジョブサーバによって実行されるジョブの作成が可能

① 注記

LCMBIAR ファイルは、選択したプロモーション管理オプションに関係なく、各プロモーション管理オプションと互換性があります。

36.1.8.2.1 プロモーション管理設定の定義

- 必要なプロモーション管理設定を指定します。指定に役立つ情報を以下に示します。

設定	説明
一時フォルダ	<div><div>① 注記</div><div>[一時フォルダ] に必ず十分な空き領域を割り当ててください。空き領域の容量は、必要な領域の容量の 2 倍以上である必要があります。</div></div>
ログの場所	ログの場所はデフォルトで定義されています。後でログの場所を変更することができます。プロモーション管理設定の変更はすぐに反映されます。
ログレベル	<div>[ログレベル] は以下のレベルに設定することができます。</div> <ul style="list-style-type: none">デフォルト低中高 <div>変更しない限り、[ログレベル] は [デフォルト] に設定されます。</div>
言語	プロモーション管理ウィザードの言語を希望の言語に設定することができます。

- [\[次へ\]](#) をクリックします。

36.1.8.3 シナリオ

プロモーション管理ウィザードでは、3種類の昇格シナリオがサポートされます。

- ライブシステムから LCMBIAR: ライブ CMS から LCMBIAR ファイルにオブジェクトをコピーします。
- ライブ CMS からライブへの昇格: ライブ CMS ソースシステムからライブ CMS 出力先システムにオブジェクトをコピーします。
- LCMBIAR からライブシステム: LCMBIAR ファイルからライブ CMS 出力先システムにオブジェクトをインポートします。

36.1.8.3.1 ライブ CMS ソースシステムから LCMBIAR ファイルへのオブジェクトの昇格

ライブ CMS から LCMBIAR ファイルにオブジェクトを昇格するには、以下の手順に従います。

1. [\[エクスポート\]](#) を選択します。
2. ソース CMS を定義するには、以下のいずれかを実行します。
 - セントラル CMS をソース CMS として使用するには、[\[セントラル CMS をソース CMS にする\]](#) チェックボックスをオンにします。
 - [\[ソース\]](#) セクションで、以下の情報を入力します。
 - CMS 名
 - ユーザ
 - パスワード
 - 認証
3. [\[出力先\]](#) フィールドで [\[選択\]](#) をクリックし、LCMBIAR ファイルの場所を選択します。
4. (オプション) LCMBIAR ファイルを暗号化するためのパスワードを入力します。

① 注記

LCMBIAR ファイルを暗号化した場合、昇格処理にかかる時間が長くなります。

5. [\[次へ\]](#) をクリックし、エクスポートするオブジェクトを選択します。

36.1.8.3.2 ライブ CMS ソースシステムからライブ CMS 出力先システムへのオブジェクトの昇格

ライブ CMS ソースシステムからライブ CMS 出力先システムにオブジェクトを昇格するには、以下の手順に従います。

1. [\[昇格\]](#) を選択します。
2. ソース CMS を定義するには、以下のいずれかを実行します。

- セントラル CMS をソース CMS として使用するには、[[セントラル CMS をソース CMS にする](#)] チェックボックスをオンにします。
 - [ソース] セクションで、以下の情報を入力します。
 - CMS 名
 - ユーザ
 - パスワード
 - 認証
3. 出力先 CMS を定義するには、以下のいずれかを実行します。
- セントラル CMS を出力先 CMS として使用するには、[[セントラル CMS を出力先 CMS にする](#)] チェックボックスをオンにします。
 - [[出力先](#)] セクションで、以下の情報を入力します。
 - CMS 名
 - ユーザ
 - パスワード
 - 認証
4. [[次へ](#)] をクリックし、ソースシステムから出力先システムにコピーするオブジェクトを選択します。

36.1.8.3.3 LCMBIAR ファイルからライブ CMS 出力先システムへのオブジェクトの昇格

LCMBIAR ファイルからライブ CMS にオブジェクトを昇格するには、以下の手順に従います。

1. [[インポート](#)] を選択します。
2. 出力先 CMS を定義するには、以下のいずれかを実行します。
 - [[出力先](#)] セクションで、[[セントラル CMS を出力先 CMS にする](#)] チェックボックスをオンにします。
 - [[出力先](#)] セクションで、以下の情報を入力します。
 - CMS 名
 - ユーザ
 - パスワード
 - 認証
3. [[ソース](#)] セクションで、[[選択](#)] をクリックし、インポートする LCMBIAR ファイルを選択します。
4. (オプション) LCMBIAR ファイルを暗号化するためのパスワードを入力します。

① 注記

LCMBIAR ファイルを暗号化した場合、昇格処理にかかる時間が長くなります。

5. [[次へ](#)] をクリックし、インポートするオブジェクトを選択します。

36.1.8.4 オブジェクト

プロモーション管理ウィザードでは、2種類のコンテンツの昇格がサポートされます。

- コンテンツ全体の昇格
- 選択的コンテンツ昇格

それぞれの説明を以下の表に示します。

コンテンツの昇格の種類	昇格されるコンテンツ	コンテンツの依存関係
コンテンツ全体の昇格	ソースシステムから出力先システムに、以下のすべてのコンテンツを昇格します。 <ul style="list-style-type: none">• オブジェクト (ユーザ、ドキュメント、ユニバース、接続など)• インスタンス• オブジェクト間の関係• オブジェクトセキュリティ	すべての関係が保持されるため、依存関係の評価は不要です。現在のオブジェクトステップから概要ステップに直接移動します。
選択的コンテンツ昇格	ソースシステムから出力先システムに、選択したコンテンツを昇格します。選択できるコンテンツは以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• オブジェクト (ユーザ、ドキュメント、ユニバース、接続など)• インスタンス• オブジェクト間の関係• オブジェクトセキュリティ	ソースシステムから出力先システムにすべてのコンテンツを昇格するわけではないため、依存関係の評価が必要です。

36.1.8.4.1 コンテンツ全体の昇格

ソースシステムから出力先システムにコンテンツ全体を昇格するには、以下の手順に従います。

1. [\[フルコンテンツ昇格\]](#) を選択します。
すべてのオブジェクトが昇格用に選択されます。
2. [\[次へ\]](#) をクリックし、選択したコンテンツを確認します。

36.1.8.4.2 選択的コンテンツの昇格について

ソースシステムから出力先システムに選択的コンテンツを昇格する前に、エクスポートオプションを定義する必要があります。エクスポートオプションを定義すると、ソースシステムに指定されている設定のうち、出力先システムに昇格する設定を取得できるようになります。

36.1.8.4.2.1 エクスポートオプションについて

ソースシステムに指定されている設定を取得して、それを出力先システムに昇格する場合は、エクスポートオプションで以下のパラメータを定義する必要があります。

- オブジェクトインスタンス
- オブジェクトの依存関係
- セキュリティ
- Commentary
- フェデレーションジョブ
- 競合する名前の解決

オブジェクトインスタンス

オブジェクトインスタンス	説明
オブジェクトが選択された場合、そのオブジェクトのすべてのインスタンスをエクスポートする	選択したオブジェクトと、そのすべてのインスタンスをエクスポートします。
オブジェクトが選択された場合、そのオブジェクトの定期的なインスタンスのみをエクスポートする	選択したオブジェクトと、その定期的なインスタンスのみをエクスポートします。 たとえば、ドキュメントの週次および月次の最新表示をスケジュールしている場合、このドキュメントとその2つの定期的なインスタンスがエクスポート時にエクスポートされます。
オブジェクトインスタンスをエクスポートしない	選択したオブジェクトのみをエクスポートします。そのインスタンスはエクスポートされません。

オブジェクトの依存関係

オブジェクトの依存関係	説明
オブジェクトの選択時に依存関係を含む	選択したオブジェクトと、そのすべての依存関係をエクスポートします。 <div>① 注記 このオプションはデフォルトでチェックされています。</div>
オブジェクトの選択時に依存関係を除外する	選択したオブジェクトのみをエクスポートし、その依存関係はエクスポートしません。

セキュリティ

セキュリティ	説明
オブジェクトセキュリティを含める	選択したオブジェクトと、そのオブジェクトセキュリティ設定をエクスポートします。
ユーザセキュリティを含める	選択したオブジェクトと、そのユーザセキュリティ設定をエクスポートします。
アプリケーションセキュリティを含める	選択したオブジェクトと、そのアプリケーションセキュリティ設定をエクスポートします。
最上位セキュリティを含める	ルートフォルダに定義されているセキュリティ設定をエクスポートします。

⚠ 警告

このオプションは、出力先システムに定義されているセキュリティ設定を上書きします。このオプションは慎重に使用する必要があります。

Commentary

Commentary	説明
コメントを含める	選択したオブジェクトと、そのすべてのコメントをエクスポートします。
ユーザグループの BI ラUNCHパッドの基本設定	このチェックボックスを選択すると、ソースシステムの BI ラUNCHパッドのユーザグループの基本設定が、出力先システムで設定されます。

ユーザグループ BI 基本設定

ユーザグループ BI 基本設定	説明
ユーザグループ BI 基本設定の上書き	このチェックボックスを選択すると、ソースシステムの BI ラUNCHパッドのユーザグループの基本設定が、出力先システムで設定されます。

① 注記

BIAR ファイルを使用してカスタマイズを使用する Web Intelligence ドキュメントを昇格する場合は、このオプションを有効にしてカスタマイズをインポートしてください。

フェデレーションジョブ

フェデレーションジョブ	説明
フェデレーションジョブ関係を含める	選択したオブジェクトと、そのフェデレーションジョブの保持されている関係をインポートします。

競合する名前の解決

競合する名前の解決	説明
競合する名前の解決	<p>選択したオブジェクトが出力先システムのオブジェクトと同じ名前で CUID が異なる場合、選択したオブジェクトのコピーが出力先システムに作成されます。</p> <p>このオプションを有効化しなかった場合、出力先システムのオブジェクトと同じ名前で CUID が異なる選択済みオブジェクトは、出力先システムにコピーされません。</p>

36.1.8.4.2.2 選択的コンテンツの昇格

ソースシステムから出力先システムに選択的コンテンツを昇格するには、以下の手順に従います。

1. [\[選択的コンテンツ昇格\]](#) を選択します。
2. [\[エクスポートオプション\]](#) を定義するには、[\[オプション\]](#) をクリックします。
3. (オプション) 日時範囲に応じてオブジェクトをフィルタする場合は、[\[時間フィルタの適用\]](#) をオンにします。
4. エクスポートするオブジェクトを選択します。
5. オブジェクトの依存関係を評価するには、依存関係のアイコンの下にある関連するチェックボックスをオンにします。

① 注記

デフォルトでは、依存関係のボックスはすべてオンになっています。オブジェクトの依存関係を評価しない場合は、このボックスをオフにします。

6. [\[次へ\]](#) をクリックし、依存関係を評価します。

36.1.8.5 依存関係

選択的コンテンツをソースシステムから出力先システムに昇格する場合、選択的コンテンツの依存関係を評価することができます。[\[依存項目\]](#) ステップでは、依存関係として識別された選択オブジェクトの概要が提供されます。

選択オブジェクトの依存関係に関する以下の情報を表示することができます。

- タイトル
- CUID

- 日付

依存関係として識別されたオブジェクトを選択することができます。

1. 表示する詳細のレベルに応じて、以下のいずれかを実行します。
 - 各依存関係の詳細を表示するには、[すべて展開] をクリックします。
 - 依存オブジェクトのみを表示するには、[すべて折りたたむ] をクリックします。
2. 昇格する依存関係を選択します。

① 注記

デフォルトでは、依存関係のボックスはすべてオンになっています。オブジェクトの依存関係を昇格しない場合は、このボックスをオフにします。

3. [次へ] をクリックし、昇格のために選択したオブジェクトを確認します。

36.1.8.6 概要

昇格を実行する前に、昇格用に選択したオブジェクトを確認する必要があります。

各オブジェクトについて以下の情報を表示することができます。

- タイトル
- CUID
- 日付

⚠ 警告

コピーするすべてのオブジェクトが含まれていることを確認します。これは、昇格が開始した後で昇格処理をキャンセルすることができないためです。プロモーション管理ウィザードではロールバックはサポートされていません。

以下のようにオブジェクトを確認することができます。

1. 確認する詳細のレベルに応じて、以下のいずれかを実行します。
 - 各オブジェクトの詳細を表示するには、[展開] をクリックします。
 - 各オブジェクトの親を表示するには、[折りたたむ] をクリックします。

① 注記

[展開] を選択したか [折りたたむ] を選択したかに応じて、昇格結果の CSV ファイルに含まれる詳細のレベルが異なります。

2. 昇格に十分な領域がハードドライブにあることを確認するには、[必要な最小一時領域] を確認します。
3. [開始] をクリックし、オブジェクトを昇格します。

昇格を開始した後でこの処理をキャンセルすることはできません。

36.1.8.7 (オプション) プロパティファイル

プロモーション管理ウィザードのプロパティファイルに、以下のパラメータを設定することができます。

- SSL 設定
- パラメータ

プロモーション管理ウィザードのプロパティファイルは、`C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win64_x64\PromotionManagementWizard` にあります。

36.1.8.7.1 SSL 設定の指定

SSL を使用する場合、プロモーション管理ウィザードの SSL 設定を以下の場所で定義する必要があります。

`C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win64_x64\PromotionManagementWizard`

1. テキストエディタで `PromotionManagementWizard.ini` を開きます。
2. SSL モードを有効化するには、"-D" で始まる行のコメントを解除します。
3. 各設定の値を入力します。

設定	値
<code>-Dbusinessobjects.orb.oci.protocol</code>	値: ssl
<div>① 注記 この値を入力すると、SSL 通信が有効になります。</div>	
<code>-DcertDir</code>	鍵と証明書の場所
<code>-DtrustedCert</code>	信用できる証明書ファイルの名前
<div>① 注記 複数のファイルを指定する場合は、各ファイルをセミコロンで区切ります (例: fileA; fileB)。</div>	
<code>-DsslCert</code>	SDK 証明書
<code>-DsslKey</code>	SDK 証明書の秘密鍵
<code>-Dpassphrase</code>	秘密鍵のパスフレーズを含むファイルの場所
<code>-Dpsecert</code>	PSE 証明書ファイル

⚠ 警告

これ以外の設定や値は、追加または編集しないでください。

4. PromotionManagementWizard.ini を保存します。

例: PromotionManagementWizard.ini の SSL 設定

```
-Dbusinessobjects.orb.oci.protocol=ssl
-DcertDir=C:/SSL
-DtrustedCert=cacert.der
-DsslCert=servercert.der
-DsslKey=server.key
-Dpassphrase=passphrase.txt
-Dpsecert=temp.pse
```

36.1.8.7.2 パラメータの設定

ニーズに応じて、以下の場所にあるプロモーション管理ウィザードのプロパティファイルでオプションを設定することができます。

C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0\win64_x64\PromotionManagementWizard

1. テキストエディタで PromotionManagementWizard.ini を開きます。
2. オプションを有効化するには、"-D" で始まる行のコメントを解除します。
3. 各パラメータの値を入力します。

パラメータ	値
-Dbusinessobjects.connectivity.directory	接続サーバディレクトリの場所。
-Dcom.businessobjects.mds.cs.ImplementationID	csEX
-Xms8g	デフォルトでは、メモリの値は 8 GB に設定されます。 Xms の値は Xmx の値以下である必要があります。
-Xmx10g	デフォルトでは、メモリの値は 10 GB に設定されます。

① 注記

この値は変更しないでください。

パラメータ	値
	10 GB のメモリは、65 000 オブジェクトのリポジトリに十分な値です。
-Dbobj.biar.suggestSplit=512	<p>デフォルト値 (推奨)</p> <p>パラメータ -Dbobj.biar.suggestSplit を使用することをお奨めします。</p> <p>ライブ CMS から LCMBIAR ファイルに昇格する場合、この設定より LCMBIAR ファイルを複数の LCMBIAR ファイルに分割することができます。</p>
-Dbobj.biar.forceSplit=768	<p>デフォルト値 (推奨)</p> <p>パラメータ -Dbobj.biar.suggestSplit を適用できない場合、パラメータ -Dbobj.biar.forceSplit がフォールバックソリューションとして適用されます。</p>
-Dcom.businessobjects.lcm.commit	<ul style="list-style-type: none"> KEEP_TS: デフォルト値。この値により、ソースの変更日を維持することができます。 LEGACY: 変更日は出力先システムの実行日に対応します。これは 4.2 SP5 より前の既存の動作です。
-Dcom.sap.businessobjects.pmw.exclude.list	<p>このパラメータを使用すると、ソースシステムから出力先システムにオブジェクトを昇格するとき、またはソースシステムから LCMBIAR ファイルにエクスポートするときに、オブジェクトを完全に除外することができます。</p> <p>値 (CUID) にはオブジェクトを指定することができます (ドキュメント、フォルダなど)。フォルダを指定した場合、そのフォルダのすべての子が除外されます。</p>

4. PromotionManagementWizard.ini を保存します。

例: PromotionManagementWizard.ini に含まれるプロモーション管理ウィザードのオプション

```
-Dbusinessobjects.connectivity.directory=C:\Program Files (x86)\SAP
BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\dataAccess\connectionServer
-Dcom.businessobjects.mds.cs.ImplementationID=csEX
-Xms2g
-Xmx10g
-Dbobj.biar.suggestSplit=512
-Dcom.businessobjects.lcm.commit=KEEP_TS
-Dcom.sap.businessobjects.pmw.exclude.list="c:/
PromotionManagementWizardExcludedItems.txt"
# Exclusion List AY2ygg4hFJhJmZMQNlQh80I # Report Samples
AeN4lEu0h_tAtnPEjFYxwi8 # WebIntelligence Samples
```

36.1.8.8 Linux のプロモーション管理ウィザード

Linux でプロモーション管理ウィザードを実行することができます。

Linux でプロモーション管理ウィザードを起動する前に、PATH システム変数に Java ランタイムが設定されていることを確認します。

Linux でプロモーション管理ウィザードを起動するには、以下の手順を実行します。

1. シェルを開き、以下のようなインストールディレクトリに移動します。

```
/usr/sap_bobj/enterprise_xi40
```

2. 以下のコマンドを実行します。

```
./PromotionManagementWizard
```

プロモーション管理ウィザードが起動します。

SSH および X11 リダイレクトの使用方法的詳細については、使用している OS のマニュアルを参照してください。

36.2 バージョン管理

36.2.1 異なるバージョンの BI リソースを管理する

バージョン管理アプリケーションでは、BI プラットフォームリポジトリに存在する、異なるバージョンの BI リソースを管理できます。この機能を使用するため、ツールには SubVersion バージョン管理システムが含まれています。

異なるバージョンのジョブまたはその他の InfoObject を管理するには、次の手順に従います。

1. CMC アプリケーションにログインし、[バージョン管理] を選択します。
2. バージョン管理ウィンドウの左パネルからフォルダを選択し、バージョンを管理するジョブまたはその他の InfoObject を表示します。
3. InfoObject を選択し、[VM に追加] をクリックします。

① 注記

[VM に追加] をクリックすると、バージョン管理システム(VMS)リポジトリにオブジェクトのベースバージョンが作成されます。ベースバージョンは次のチェックインに必要になります。

4. 次のドキュメントの変更で、追加的に変更されたドキュメントをバージョンニングするには、[チェックイン] をクリックします。これにより、VMS リポジトリに存在するドキュメントが更新されます。

チェックインコメントダイアログボックスが表示されます。

5. コメントを入力し、[OK] をクリックします。
VMS バージョン列と CMS (Central Management Server) バージョン列には、選択した InfoObject のバージョン番号の変更が表示されます。
6. VMS からドキュメントの最新バージョンを取得するには、必要な InfoObject を選択し、[最新バージョンを取得] をクリックします。
VMS リポジトリから CMS に最新バージョンがインポートされます。

7. 最新バージョンのコピーを作成するには、[コピーの作成] をクリックします。
選択したバージョンのコピーが VMS リポジトリおよび CMS リポジトリに作成されます。
8. [履歴] を選択し、選択した InfoObject に使用可能なすべてのバージョンを表示します。
履歴ウィンドウが表示されます。次のオプションが表示されます。
 - **バージョンを取得**: 複数のバージョンが存在し、BI リソースの特定のバージョンを必要としている場合には、必要な InfoObject を選択し、[バージョンを取得] をクリックします。
 - **バージョンのコピーを取得**: このオプションでは、選択したバージョンのコピーを取得できます。
 - **バージョンのコピーをエクスポート**: このオプションでは、選択したバージョンのコピーを取得し、ローカルシステムに保存できます。
 - **比較**: このオプションでは、2 つのバージョンのメタデータ情報を比較できます。詳細については、「同じジョブの異なるバージョンの比較」を参照してください。
9. InfoObject をロックするには、InfoObject を選択して [ロック] をクリックします。InfoObject のロックを解除するには、[ロック解除] をクリックします。すべてのバージョンのコンテンツを VMS リポジトリから削除するには、[削除] をクリックします。CMS のコンテンツには影響はありません。


④ 注記

InfoObject をロックすると、InfoObject に対してアクションを実行することはできません。

10. CMS のバージョンが VMS のバージョンよりも新しい場合、更新された InfoObject の隣にインジケータが表示されます。インジケータにカーソルを合わせると、CMS 内の方が新しいバージョンですというツールヒントが表示されます。
11. CMS ではなく VMS に存在するチェックイン済みのすべてのリソースの一覧を表示するには、[削除したリソースを表示] をクリックします。
削除したリソースをクリックし、そのリソースの履歴を表示します。削除したリソースを選択し、[バージョンを取得] をクリックすると、リソースの特定バージョンを表示できます。
[削除] をクリックすると、VMS リポジトリからもオブジェクトが完全に削除されます。

④ 注記

バージョンを取得を使用すると、リソースは VMS の見つからないファイル一覧から CMS に移動されます。

12. InfoObject を選択してから  をクリックし、InfoObject のプロパティを表示します。
または、InfoObject を右クリックして、手順 3～12 を実行することができます。
13. [バージョン管理] アプリケーションで BI アセットを検索することができます。[すべてのフィールドの検索]、[タイトルの検索]、[キーワードの検索]、[説明の検索] などのオプションを使用して、より速く結果を得るために特定の検索を実行することができます。

④ 注記

バージョン管理アプリケーションの検索機能はコンテキスト依存です。つまり、[監査] などのフォルダを選択して、ドキュメントを検索する文字列を入力すると、BI プラットフォームは [監査] フォルダでのみドキュメントを検索します。同様に、[すべてのフォルダ] を選択して検索を実行すると、BI プラットフォームはすべてのフォルダ内の InfoObject を検索します。

36.2.2 バージョン管理システムとして Apache Subversion を使用する

Apache Subversion をバージョン管理システムとして設定し、セントラル管理コンソールで設定を行うことができます。

1. CMC で[アプリケーション](#)をクリックします。
2. [\[VMS\]](#)をダブルクリックします。
バージョン管理設定画面が表示されます。
3. [\[VMS 設定\]](#)を選択します。
4. [バージョン管理システム](#)リストから [SubVersion](#) を選択します。
プロモーションマネジメントツールのインストール処理中に入力したサーバポート番号、パスワード、リポジトリ名、サーバ名、ユーザ名、ワークスペースディレクトリ名、およびインストールパス名が該当するフィールドに表示されます。
5. 必要に応じてこれらのフィールドを変更します。

① 注記

.exe ファイルを含むインストールパスを入力します。

Windows の場合: `<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%Subversion`

Unix の場合: `<INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_40/subversion/bin`

6. [SVN](#)、[HTTP](#)、または [HTTPS](#) を選択します。

① 注記

HTTPS を使用する Subversion への接続の詳細については、*Apache Subversion* のマニュアルを参照してください。

7. (オプション) [VMS のテスト](#)をクリックして、VMS 設定を確認します。
8. [保存](#)をクリックします。

① 注記

- Subversion をデフォルトの VMS にするには、[デフォルトの VMS として使用](#)を選択します。
- フィールドを変更した場合は、Adaptive Processing Server を再起動します。

36.2.3 同じジョブの異なるバージョンを比較する

同じジョブの 2 つのバージョンの差分を表示するには、次の手順に従います。

1. CMC アプリケーションにログインします。
2. CMC のホームページから [\[バージョン管理\]](#) を選択します。
3. バージョン管理画面で、バージョンを比較する必要があるジョブを選択します。
4. [\[履歴\]](#) をクリックします。
[\[履歴\]](#) ページが表示され、選択した InfoObject のすべてのバージョンが表示されます。

5. 比較する2つのバージョンを選択します。
6. [\[比較\]](#) をクリックします。
比較処理が開始されます。差分はオレンジ色で強調表示され、見つからないオブジェクトは赤色で強調表示されます。
7. 差分レポートを保存するには、[\[保存\]](#) をクリックします。

36.2.4 Subversion コンテンツをアップグレードする


以前のバージョンの BI プラットフォームを使用して作成された古い SubVersion コンテンツがある場合、コンテンツを最新バージョンにアップグレードするには、次の手順に従います。

1. SAP BusinessObjects Enterprise 4.2 マシンの VMS にログインします。
2. オブジェクトをチェックインします。たとえば、管理者のオブジェクトとゲストのオブジェクトを2回チェックインします。
3. CMC で [\[ユーザ\]](#) をクリックし、VMS と CMS のバージョン番号に 2 が表示されていることを確認します。
4. VMS からログオフします。
5. コマンドプロンプトに移動して `C:\Program Files\Subversion\bin` に移動します。次のエクスポートコマンドを実行します。`svnadmin dump c:/LCM_repository/svn_repository > dumrepo`
6. `dumrepo` ファイルが BI プラットフォームマシンにコピーされます。
7. BI プラットフォームマシンのコマンドプロンプトに移動して `C:\Program Files (x86)\SAP` に移動します。次に、以下のコマンドを実行します。

```
svnadmin.exe load "C:/Program Files (x86)/SAP BusinessObjects/SAPBusinessObjects Enterprise XI 4.0/LCM_repository/svn_repository" < c:/dumrepo
```

```
svnadmin.exe upgrade "C:/Program Files (x86)/SAP BusinessObjects/SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0/LCM_repository/svn_repository"
```



8. コマンドが正常に実行されたら、SIA を再起動します。
9. CMC にログインして [\[バージョン管理\]](#) をクリックします。
10. [\[ユーザ\]](#) をクリックし、VMS のバージョンが 2 であることを確認します。
11. [\[管理者\]](#) オブジェクトを選択し、[\[最新バージョンを取得\]](#) をクリックします。
12. これで、VMS と CMS のバージョン番号が同じになります。

Apache Subversion のアップグレードの詳細については、[Apache Subversion 1.10 Release Notes](#)  を参照してください。

重要免責事項および法的情報

ハイパーリンク

リンクの一部は、アイコンやマウスオーバーテキストで分類されています。これらのリンクから、追加の情報を得ることができます。アイコンについて。

-  このアイコンが付いたリンク: SAP がホストしているものではない Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り) 以下のことに同意することになります。
 - リンク先のサイトのコンテンツが SAP のドキュメンテーションではないこと。お客様は、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできません。
 - SAP が、リンク先のサイトのコンテンツについて同意することも反対することもなく、また SAP がその利用可能性や正確性について保証しないこと。SAP は、かかるコンテンツの使用により発生した損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、その損害に対して一切責任を負いません。
-  このアイコンが付いたリンク: 当該の特定の SAP 製品又はサービスのドキュメンテーションから離れ、SAP がホストしている Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り)、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできないことに同意します。

外部プラットフォームでホストされているビデオ

一部のビデオは、サードパーティのビデオホスティングプラットフォームに置かれている場合があります。SAP では、これらのプラットフォームに保存されているビデオが将来にわたって利用できると保証することはできません。また、これらのプラットフォームにホストされている、いかなる広告またはその他のコンテンツ (関連ビデオまたは同じサイトでホストされている別のビデオに移動する場合など) については、SAP の管理外であり責任を負いません。

ベータおよびその他の試験的機能

試験的機能は、SAP が将来のリリースを保証する正式に提供される機能の範囲外です。これは、試験的機能は、SAP により通知なく理由の如何を問わず随時変更される場合があることを意味します。試験的機能は、本稼働使用のためのものではありません。お客様は、試験的機能を実際の運用環境で、又は十分なバックアップがとられていないデータとともに、デモンストレーション、テスト、試験、評価その他の方法で使用してはなりません。

試験的機能の目的は、早期にフィードバックを得ることで、それに応じて顧客の皆様やパートナーが将来の製品に影響を与えることを可能にすることです。SAP コミュニティなどにおいてフィードバックを提供することで、お客様は、投稿物や二次的著作物の知的財産権が SAP の独占的所有物であり続けることを承認することになります。

コード例

ソフトウェアのコーディングやコードスニペットはすべて、例です。それらは、本稼働使用のためのものではありません。コード例は、構文や表現規則を分かりやすく説明し視覚化することのみを目的としています。SAP は、コード例の正確性や完全性について保証しません。SAP は、コード例の使用により発生した過誤や損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、損害に対して一切責任を負いません。

偏見のない表現

SAP は、ダイバーシティ & インクルージョンの文化を支持しています。SAP の文書では、可能な限り、文化、民族性、ジェンダー、および障がいの有無を問わず、すべての人々に対する偏見を伴わない表現を採用します。

© 2024 SAP SE or an SAP affiliate company. All rights reserved.

本書のいかなる部分も、SAP SE 又は SAP の関連会社の明示的な許可なくして、いかなる形式でも、いかなる目的にも複製又は伝送することはできません。本書に記載された情報は、予告なしに変更されることがあります。

SAP SE 及びその頒布業者によって販売される一部のソフトウェア製品には、他のソフトウェアベンダーの専有ソフトウェアコンポーネントが含まれています。製品仕様は、国ごとに変わる場合があります。

これらの文書は、いかなる種類の表明又は保証もなしで、情報提供のみを目的として、SAP SE 又はその関連会社によって提供され、SAP 又はその関連会社は、これら文書に関する誤記脱漏等の過失に対する責任を負うものではありません。SAP 又はその関連会社の製品及びサービスに対する唯一の保証は、当該製品及びサービスに伴う明示的保証がある場合に、これに規定されたものに限られます。本書のいかなる記述も、追加の保証となるものではありません。

本書に記載される SAP 及びその他の SAP の製品やサービス、並びにそれらの個々のロゴは、ドイツ及びその他の国における SAP SE（又は SAP の関連会社）の商標若しくは登録商標です。本書に記載されたその他のすべての製品およびサービス名は、それぞれの企業の商標です。

商標に関する詳細の情報や通知については、<https://www.sap.com/japan/about/legal/trademark.html> をご覧ください。